

**DB2 照会報告書作成プログラム (QMF)**  
バージョン 12 リリース 1

**DB2 QMF for Workstation お  
よび DB2 QMF for  
WebSphere 入門**

**IBM**



**DB2 照会報告書作成プログラム (QMF)**  
バージョン 12 リリース 1

**DB2 QMF for Workstation お  
よび DB2 QMF for  
WebSphere 入門**

**IBM**

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、巻末にある『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM DB2 12 for z/OS (5650-DB2) および IBM DB2 11 for z/OS (5615-DB2) のフィーチャーである IBM DB2 Query Management Facility (QMF) Enterprise Edition バージョン 12 リリース 1 に適用されます。また、本書は、スタンドアロン IBM DB2 for z/OS ツールである IBM DB2 QMF for z/OS (5697-QM2) バージョン 12 リリース 1 にも適用されます。この情報は、新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： SC27-8884-00  
DB2 Query Management Facility  
Version 12 Release 1  
Getting Started with DB2 QMF for  
Workstation and DB2 QMF for  
WebSphere

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Rocket Software Inc. 1995, 2016

# 目次

表	xii
この情報について	xiii
この情報の対象読者	xiii
サービス更新およびサポート情報	xiii
<b>第 1 章 QMF の概要</b>	<b>1</b>
QMF フィーチャー	1
コンポーネント	3
「管理者」 パースペクティブの概要	3
「ユーザー」 パースペクティブの概要	3
データ・アーキテクチャーの用語および概念	3
<b>第 2 章 QMF インターフェースの使用</b>	<b>7</b>
ビューおよびパースペクティブの使用	11
パースペクティブを開く	11
パースペクティブを閉じる	12
ビューを開く	12
ビューの位置決め	13
パースペクティブの構成	13
パースペクティブのリセット	13
QMF 標準パースペクティブ	14
設定値の設定	18
一般設定	18
加速の設定	19
外観設定	21
ダッシュボード・ランタイムの設定	22
グローバル変数を使用した作業	22
ヘルプ設定	24
JDBC 設定	26
LOB 設定	27
ログ設定	29
SMTP サーバー設定	30
エクスポート・アクションによって生成されたオブジェクトのディレクトリーの場所の設定	31
dynamart ソース・ファイルのルート・ディレクトリーの場所の設定	32
サード・パーティー・ライブラリーの設定	33
ビジュアル・デザイナー設定の指定	34
「ワークスペース」ビューの検討	35
ワークスペースの内容のディスカバー	35
「ワークスペース」メニュー・コマンド	36
ワークスペース・フォルダーの管理	38
データ・ソース・オブジェクトのフィルター処理	38
ワークスペース・オブジェクトへのリンクの作成	39
リポジトリー・オブジェクトへのリンクの作成	39
ワークスペース・オブジェクトのプロパティの表示	40
ワークスペースの内容の最新表示	41
ワークスペース・オブジェクトの移動	41
コンテンツをワークスペースに追加	42
追加ワークスペースの作成	43
「パーソナル」ビューでの作業	43

「パーソナル」ビュー・メニュー・コマンド	44
<b>第 3 章 データへのアクセス</b>	<b>45</b>
リポジトリおよびデータ・ソース	45
パーソナル・リポジトリの作成	46
リポジトリへの接続	46
ユーザー情報の指定	47
ユーザー・インターフェースの構成情報の変更	48
JDBC ドライバー情報の設定	48
リポジトリ接続情報の設定	51
DB2 パスワードの変更	61
リポジトリ・キャッシングの構成	62
QMF for Windows からの設定のインポート	66
QMF for Windows 設定	66
ID の正しい形式	67
突き合わせパターン	67
新規オブジェクトまたはリポジトリ項目の作成	67
データ・オブジェクトへの Web リンクの作成	69
オブジェクトの保存	71
オブジェクトをファイルに保存	72
オブジェクトをリポジトリまたはリポジトリ・ワークスペースに保存	72
QMF カタログにおけるオブジェクトの保存	73
保存オブジェクトを開く	74
QMF カタログ・オブジェクトを開く	74
リポジトリ・オブジェクトを開く	75
ファイルに保存されたオブジェクトを開く	75
<b>第 4 章 照会の作成</b>	<b>77</b>
照会タイプ	77
照会インターフェース	78
SQL エディターを使用したビジュアル照会の作成	79
SQL を使用したビジュアル照会の作成	79
ビジュアル照会にコンテンツ・アシストを使用	80
ビジュアル照会にパラメーター・ヒントを使用	80
指示照会エディターを使用したビジュアル照会の作成	81
表の追加	83
表の結合	84
列の結合	85
照会結果の列の指定	85
照会結果のソート条件の指定	87
照会結果の行条件の指定	88
照会ビルダー・エディターでのビジュアル照会の作成	89
照会ビルダー・エディターでの表の追加および結合	90
表に対する結合条件の編集	91
ビジュアル照会のフィールドおよび条件を指定	91
グローバル行条件の指定	94
SQL テキストの編集	96
「照会のドロー」ウィザードを使用したビジュアル照会の作成	96
データ・ソース表のリスト	97
照会でのプロンプトの操作	98
SQL プロンプトの操作	98
単純プロンプトの操作	99
プロンプト階層の操作	102
共有プロンプトの操作	107
OLAP 照会の作成	109
キューブ・データの検索	109

既存の OLAP 照会を開く . . . . .	110
キューブ・データの各種ビューを取得するための OLAP 照会の変更 . . . . .	111
分析照会および関連する変換 . . . . .	114
分析照会構造の作成 . . . . .	115
分析照会変換へのデータの追加 . . . . .	116
分析照会変換の構成 . . . . .	117
照会のプロファイル作成 . . . . .	128
QMF Vision へのオブジェクトの公開 . . . . .	129
データベース表に対する作業 . . . . .	130
表のソート条件の指定 . . . . .	133
表の行条件の指定 . . . . .	134
DB2 特殊レジスターを使用してデータベース表を編集 . . . . .	135
表のコピー . . . . .	135
<b>第 5 章 新規データ・ソースの選択 . . . . .</b>	<b>137</b>
<b>第 6 章 SQL ステートメントのフォントの設定 . . . . .</b>	<b>139</b>
<b>第 7 章 置換変数の指定 . . . . .</b>	<b>141</b>
<b>第 8 章 プロシージャでの作業 . . . . .</b>	<b>143</b>
新規プロシージャの作成 . . . . .	143
JavaScript プロシージャの作成 . . . . .	144
フローチャートとしてプロシージャを作成 . . . . .	145
フローチャート・プロシージャの編集 . . . . .	146
プロシージャに JavaScript 条件を追加 . . . . .	147
プロシージャ・コマンド . . . . .	147
インターフェースの違い . . . . .	147
プロシージャ構文 . . . . .	148
構文図の読み方 . . . . .	149
QMF カタログ・オブジェクトとリポジトリ・フォルダー・オブジェクト . . . . .	150
BOTTOM コマンド . . . . .	152
CHECK コマンド . . . . .	152
CONNECT コマンド . . . . .	152
CONVERT コマンド . . . . .	153
DISPLAY コマンド . . . . .	154
DRAW コマンド . . . . .	156
EDIT コマンド . . . . .	156
END コマンド . . . . .	157
ERASE コマンド . . . . .	158
EXECUTE コマンド . . . . .	158
EXIT コマンド . . . . .	159
EXPORT コマンド . . . . .	159
FORWARD コマンド . . . . .	164
HELP コマンド . . . . .	164
IMPORT コマンド . . . . .	164
LIMIT LOCAL コマンド . . . . .	166
LIST コマンド . . . . .	167
MAIL TO コマンド . . . . .	169
PRINT コマンド . . . . .	172
RESET コマンド . . . . .	175
RESET GLOBAL . . . . .	176
RUN コマンド . . . . .	176
RUNTSO コマンド . . . . .	180
SAVE コマンド . . . . .	183
SET GLOBAL コマンド . . . . .	185

SET INVISIBLE コマンド	186
SET LOCAL コマンド	186
SET LOCAL WITH VALUES コマンド	187
SET OPTIONS コマンド	187
SHOW コマンド	188
USE REPOSITORY コマンド	189
プロシージャ内の JavaScript 関数	190
proc.exec () 関数	191
proc.exists () 関数	191
proc.getVariable () 関数	191
proc.getCellValue () 関数	192
proc.getColumnname () 関数	192
proc.getColumnType () 関数	193
proc.getNumColumns () 関数	193
proc.getNumRows () 関数	193
proc.include () 関数	194
proc.messageBox () 関数	194
proc.prompt () 関数	196
proc.setCellValue () 関数	196
<b>第 9 章 照会結果の管理</b>	<b>197</b>
照会結果のフォーマット設定	197
「プロパティ」ビューの使用	197
「レイアウト・プロパティ」ダイアログ・ボックスの使用	197
照会結果のフィルター処理	206
計算列の操作	208
照会結果への計算列の追加	208
カスタム関数の追加	210
照会結果にカテゴリー化を適用	212
カテゴリー化用の規格適合規則を追加	213
カテゴリー化用の式を追加	213
照会結果列へのグループ化および集約の適用	214
グループ化および集約のフィールド	214
照会結果のエクスポート	216
照会結果を E メールで送信	216
照会結果をデータベースにエクスポート	218
照会結果をファイルにエクスポート	220
CSV およびテキスト・ファイルからの照会結果のインポート	224
CSV および TXT ファイルの区切り記号オプションの指定	225
CSV およびテキスト・ファイルの結果セット構造の指定	226
IXF ファイルに含まれているデータをインポート	227
後続処理のために IXF ファイルの内容を開く	227
データベース表に IXF ファイルを直接インポート	228
Excel ファイルからの照会結果のインポート	229
保存済みファイルの表の内容をデータベース表にインポート	231
dynamart としてのデータ・オブジェクトの保存	232
dynamart でのソース・データ・ファイルの管理	233
照会結果の LOB データでの作業	234
LOB のリソース限界オプションのオーバーライド	236
照会結果のセルの内容の表示および編集	236
複数の結果セットの表示	237
「結果」メニュー	238
照会結果のソート	240
照会結果セットおよび即時報告書の印刷オプションの指定	241
ページ見出しおよびページ脚注に特定のデータを挿入するためのコード	242
通常保存方式および高速保存方式を使用したデータの保存	242



「結果」タブを「結果」編集ビューに変換 . . . . .	245
<b>第 10 章 図表での作業 . . . . .</b>	<b>247</b>
図表の作成 . . . . .	247
図表タイプ・オプションの指定 . . . . .	248
データ系列オプションの指定 . . . . .	249
フォーマット・オプションの指定 . . . . .	249
照会結果グリッドからの図表の作成 . . . . .	257
表示編集機能での図表の操作 . . . . .	258
表示編集機能での図表の作成 . . . . .	259
表示モードの管理 . . . . .	259
照会結果セット列の編集 . . . . .	260
表示モードのレイアウト構造の編集 . . . . .	261
図表の編集 . . . . .	262
図表のエクスポート . . . . .	262
図表の印刷オプションを指定 . . . . .	263
<b>第 11 章 ドリルダウン・パスの使用 . . . . .</b>	<b>265</b>
ドリルダウン・パスについて . . . . .	265
ドリルダウン・パスの作成 . . . . .	265
ドリルダウン・パス記録の表示モードの管理 . . . . .	267
ドリルダウン・パスの印刷オプションを指定 . . . . .	269
<b>第 12 章 スケジュール・タスクの操作 . . . . .</b>	<b>271</b>
オブジェクトの実行アクションの追加 . . . . .	272
「照会のエクスポート」操作のオプションの指定 . . . . .	273
「照会をメールにエクスポート」操作のオプションの指定 . . . . .	274
「照会の印刷」操作のオプションの指定 . . . . .	277
「即時報告書をメールにエクスポート」操作のオプションの指定 . . . . .	278
「即時報告書のエクスポート」操作のオプションの指定 . . . . .	279
「ビジュアル報告書をメールにエクスポート」操作のオプションの指定 . . . . .	280
「ビジュアル報告書のエクスポート」操作のオプションの指定 . . . . .	282
リソース操作タスクの追加 . . . . .	283
リソース・コピーのパラメーターの指定 . . . . .	283
メール設定の指定 . . . . .	285
アクション・グループの追加 . . . . .	286
アクション・グループへのアクションの追加 . . . . .	287
アクション・グループからのアクションの削除 . . . . .	288
イテレーター・パラメーターの設定 . . . . .	288
アクション・グループでのプロンプトの管理 . . . . .	290
アクションおよびアクション・グループの変数の指定 . . . . .	291
スケジュール済みタスクについてのユーザー資格情報の編集 . . . . .	292
スケジュール・タスクのコピー . . . . .	293
ローカル・タスクのスケジュール . . . . .	294
リモート・タスクをスケジュール . . . . .	295
失敗したタスクに関する E メール通知を指定 . . . . .	295
旧ジョブ定義ファイルの変換 . . . . .	297
<b>第 13 章 予測の操作 . . . . .</b>	<b>299</b>
予測の作成 . . . . .	299
予測のデータ・ソース・オプションの指定 . . . . .	301
予測の日付パラメーターの指定 . . . . .	302
予測のグループ化階層オプションの指定 . . . . .	303
予測戦略のオプションの指定 . . . . .	303
予測モデルのオプションの指定 . . . . .	304
単純移動平均のパラメーターの設定 . . . . .	305

加重移動平均のパラメーターの設定 . . . . .	305
単一指数平滑法のパラメーターの設定 . . . . .	306
二重指数平滑法のパラメーターの設定 . . . . .	306
Holt-Winters 法のパラメーターの設定 . . . . .	307
乗法分解のパラメーターの設定 . . . . .	307
カーブ・フィッティングのパラメーターの設定 . . . . .	308
多項式回帰のパラメーターの設定 . . . . .	308
ニューラル・ネットワークのパラメーターの設定 . . . . .	309
予測モデルのパフォーマンスのモニター . . . . .	310
傾向の観測 . . . . .	311
季節性の観測 . . . . .	311
循環性の観測 . . . . .	312
図表のプロパティの編集 . . . . .	313
グリッドのプロパティの編集 . . . . .	313
予測のエクスポート . . . . .	314
予測の印刷オプションを指定 . . . . .	314
「結果」タブを「結果」編集ビューに変換 . . . . .	315
<b>第 14 章 標準報告書および即時報告書の生成 . . . . .</b>	<b>317</b>
新規報告書の作成 . . . . .	317
標準の報告書のデータ・ソース・オブジェクトの選択 . . . . .	318
データ・ソース・オブジェクトのリスト . . . . .	319
報告書をファイルにエクスポート . . . . .	320
標準の報告書書式の作成 . . . . .	321
標準の報告書の書式のデザイン . . . . .	322
書式変数の使用 . . . . .	336
取扱コードの使用 . . . . .	337
標準の報告書の保存 . . . . .	340
関連データ・ソース・オブジェクト付きでの書式の保存 . . . . .	341
関連データ・ソース・オブジェクトを付けない書式の保存 . . . . .	341
即時報告書の操作 . . . . .	342
即時報告書の作成 . . . . .	342
即時報告書の編集 . . . . .	361
即時報告書デザインの変更 . . . . .	363
書式メニュー . . . . .	364
<b>第 15 章 ビジュアル・プロジェクトでの作業 . . . . .</b>	<b>367</b>
ビジュアル・プロジェクトのテンプレート . . . . .	368
ビジュアル・プロジェクトのテンプレート・カテゴリの作成 . . . . .	369
ビジュアル報告書の作成 . . . . .	370
ビジュアル報告書ウィザードを使用した報告書の作成 . . . . .	372
旧ビジュアル報告書を開く . . . . .	374
ビジュアル・プロジェクトのデータ・ソース接続の指定 . . . . .	376
ビジュアル・プロジェクトの照会の指定 . . . . .	377
ビジュアル報告書のメインページのデザイン . . . . .	378
ビジュアル報告書の固定ページのデザイン . . . . .	379
報告書データの検索の管理 . . . . .	381
報告書をファイルにエクスポート . . . . .	384
随時報告書での作業 . . . . .	385
ビジュアル・ダッシュボードでの作業 . . . . .	386
ビジュアル・ダッシュボードの計画 . . . . .	389
「ビジュアル・ダッシュボード」ウィザードを使用したビジュアル・ダッシュボードの作成 . . . . .	390
旧 Visionary ワールドのインポート . . . . .	393
ビジュアル・ダッシュボードのデータ・ソース接続の指定 . . . . .	394
シーンでの作業 . . . . .	395
バージョン管理システム内でのビジュアル・ダッシュボードの操作 . . . . .	450

照会から取得されたアドレス情報に従ってマップ上にデータを表示	451
ビジュアル・プロジェクト・データの保護	452
データ・ソース接続およびビジュアル・プロジェクト	453
照会およびビジュアル・プロジェクト	454
ビジュアル・プロジェクトの照会の指定	454
カスタム JavaScript 関数をビジュアル・プロジェクトに追加	456
JavaScript モジュールの作成	457
ビジュアル・デザイナーでの作業	458
プロジェクト・エクスプローラーでの作業	459
エディターでの作業	461
ビジュアル・デザイナーにおける編集機能コントロール	462
「プロパティ」ビューでの作業	463
「イベント」ビューでの作業	470
「パレット」ビューでの作業	471
「レイヤー」ビューでの作業	555
グローバル・リソースでの作業	556
ビジュアル・ダッシュボードのプロファイルを作成	575
シーンの複雑さを分析	575
ビジュアル・ダッシュボードのプロファイル作成	576
ビジュアル・ダッシュボードのデバッグ	577
ビジュアル・プロジェクト内の特定オブジェクトの照会を編集	578
<b>第 16 章 JavaScript テーブルの操作</b>	<b>581</b>
JavaScript テーブルの作成	581
JavaScript テーブルにデータを設定するスクリプトを作成	582
JavaScript テーブル例	583
JavaScript テーブルの編集	586
<b>第 17 章 仮想表を作成中</b>	<b>587</b>
仮想表の構造の指定	587
仮想表のキャッシュ有効期限の指定	588
<b>第 18 章 分析オブジェクトの操作</b>	<b>591</b>
分析オブジェクトを QMF カタログから開く	591
ソースを使用して分析オブジェクトを開く	591
ソースを使用せずに分析オブジェクトを開く	592
分析オブジェクトでのプロシージャ・コマンドの使用	593
分析オブジェクトのエクスポート	593
<b>第 19 章 アプリケーション環境のカスタマイズ</b>	<b>595</b>
コマンド行の使用	595
コマンド行パラメーターのリスト	596
コマンド・バーの使用	598
デフォルト印刷オプションの指定	599
リソース限界の表示	599
リソース限界について	600
タイムアウト・リソース限界の指定	601
限界リソース限界の指定	602
SQL 動詞リソース限界の指定	602
オプション・リソース限界の指定	603
データの保存リソース限界の指定	605
バインド・リソース限界の指定	606
オブジェクト・トラッキング・リソース限界の指定	607
LOB オプション・リソース限界の指定	609
レポート・センター・リソース限界の指定	610
キャッシュ・リソース限界の指定	612

オブジェクト・リスト・リソース限界の指定 . . . . .	612
I 加速リソース限界の指定 . . . . .	613
<b>付録 A. アクセシビリティ</b> . . . . .	<b>615</b>
QMF for Workstation での標準キーボード・ナビゲーション . . . . .	615
標準キーボード・ナビゲーション . . . . .	615
オペレーティング・システムのアクセシビリティ . . . . .	616
支援技術製品 . . . . .	616
QMF for Workstation でのナビゲーション . . . . .	616
QMF for WebSphere でのナビゲーション . . . . .	619
<b>付録 B. トラブルシューティング</b> . . . . .	<b>621</b>
Internet Explorer 8 を使用していると QMF for WebSphere の画像の表示で問題が発生する . . . . .	621
ロング・ネームをサポートする DB2 UDB for z/OS V8 へのアップグレード後のオブジェクトのリスト表示における問題 . . . . .	621
応答ファイルの作成 . . . . .	622
QMF for Workstation Win32 API が以前のバージョンの QMF for Windows に戻る . . . . .	623
<b>付録 C. メッセージ</b> . . . . .	<b>625</b>
<b>特記事項</b> . . . . .	<b>701</b>
商標 . . . . .	703
製品資料に関するご使用条件 . . . . .	703
プライバシー・ポリシーに関する考慮事項 . . . . .	704
<b>用語集</b> . . . . .	<b>705</b>
<b>索引</b> . . . . .	<b>711</b>

## 表

1. 「ユーザー」パースペクティブ: ビュー . . . . .	8	25. 照会結果をデータベースに保存するためのパラメーター . . . . .	178
2. 「管理者」パースペクティブ: ビュー . . . . .	9	26. 言語と言語 ID . . . . .	182
3. 「QMF 標準」パースペクティブ: ビュー . . . . .	9	27. テキスト・オプション . . . . .	222
4. ビジュアル・デザイナー・パースペクティブ: ビュー . . . . .	10	28. 照会結果セットおよび即時報告書の印刷オプション . . . . .	241
5. テキスト分析: ビュー . . . . .	10	29. 特定のデータを挿入するためのコード . . . . .	242
6. QMF メインメニューのファンクション・キーの説明 . . . . .	15	30. 標準報告書の「メイン」セクション・エレメント . . . . .	323
7. QMF 照会エディターのファンクション・キーの説明 . . . . .	16	31. 標準報告書の「切れ目」セクション・エレメント . . . . .	325
8. QMF プロシージャ・エディターのファンクション・キーの説明 . . . . .	17	32. HTML 変数 . . . . .	327
9. QMF 報告書のファンクション・キーの説明 . . . . .	17	33. 標準報告書の「計算」オプション・エレメント . . . . .	328
10. 書式の QMF ファンクション・キーの説明 . . . . .	18	34. 標準報告書の「列」オプション・エレメント . . . . .	329
11. QMF for Windows からインポートできる設定 . . . . .	66	35. 標準報告書の「条件」オプション要素 . . . . .	330
12. 列および使用可能なアクション . . . . .	92	36. 標準の報告書の「明細」セクションのエレメント . . . . .	331
13. プロンプト・タイプ . . . . .	98	37. 標準の報告書の「オプション」セクションのエレメント . . . . .	332
14. 元の結果セット・データ . . . . .	120	38. 標準報告書の「最終」セクション・エレメント . . . . .	334
15. クロス集計による結果セット・データ . . . . .	120	39. 標準の報告書の「ページ」セクションのエレメント . . . . .	335
16. 元の結果セット・データ . . . . .	121	40. 削除操作の条件パラメーター . . . . .	424
17. 正規化照会結果 . . . . .	122	41. ボタンとその索引 . . . . .	426
18. もう 1 つの正規化照会結果 . . . . .	122	42. ツールバーのオプション . . . . .	511
19. 家具の売上に対するクロス集計照会結果 . . . . .	123	43. コマンド行パラメーター . . . . .	597
20. 家具の売上に対する正規化照会結果 . . . . .	123		
21. 元のデータ . . . . .	124		
22. 条件付きグループ化を行ったデータ . . . . .	125		
23. END コマンドの結果と、関連するユーザー・アクション . . . . .	157		
24. オブジェクトを実行するためのパラメーター . . . . .	177		



---

## この情報について

この情報では、QMF™ for Workstation アプリケーションおよび QMF for WebSphere® アプリケーションの使用方法について説明します。<sup>1</sup>

本書の最新版については、以下の DB2® and IMS™ Tools Library ページを常に確認してください。

[www.ibm.com/software/data/db2imstools/db2tools-library.html](http://www.ibm.com/software/data/db2imstools/db2tools-library.html)

---

## この情報の対象読者

この情報は、QMF for Workstation および QMF for WebSphere のすべてのユーザーを対象としています。

---

## サービス更新およびサポート情報

ソフトウェア・フィックスパック、PTF、よく尋ねられる質問 (FAQ)、技術情報、トラブルシューティング情報、ダウンロードなど、サービス更新およびサポート情報を検索するには、次の Web ページを参照してください。

IBM ソフトウェア・サポート Web サイト

---

1. この情報全体を通して、IBM® QMF client for WebSphere Application Server を QMF for WebSphere、IBM QMF client for Workstation 環境を QMF for Workstation と呼びます。





---

## 第 1 章 QMF の概要

QMF は、マルチプラットフォームの汎用ビジネス・インテリジェンス・ツールです。

QMF は Eclipse をベースとした<sup>2</sup>ビジネス・インテリジェンス・ツールであり、ビジネス・データをビジュアル・データ・オンデマンドでビジュアル情報プラットフォームに変換します。ユーザーは QMF のフィーチャー・セットを使用することで、企業全体に簡単に配布できる直感的なダッシュボード、照会、報告書、およびプロシージャーを作成することができます。

- 企業規模の重要なビジネス情報を複数のユーザーおよびデータベース・プラットフォームに配信します。
- SQL ストアード・プロシージャーに対し DB2 V9 for z/OS<sup>®</sup> をサポートします。
- DB2 V10 for z/OS 機能をサポートします (DB2 V10 データ・タイプを含む)。
- 動的および静的 SQL、大量の結果セット、およびストアード・プロシージャーの結果をサポートします。
- DB2、Informix<sup>®</sup>、Oracle、SQL Server、その他の大抵の JDBC 準拠データ・ソース、および XMLA 接続をサポートするマルチディメンション・データ・ソースからの同時ドロー・データをサポートします。
- 報告書、ダッシュボード、および照会をカスタムまたはサード・パーティーの Web アプリケーション、ポータル、あるいはワークステーション・アプリケーション内にオプションで組み込むことができます。
- マルチディメンション照会、ダッシュボード、報告書、レイアウト、および既存の BI インフラストラクチャーを持つ拡張された相互運用性をサポートします。
- QMF for Workstation は、Microsoft<sup>®</sup> Windows<sup>®</sup>、Linux<sup>®</sup>、および Macintosh<sup>®</sup> で実行可能な Eclipse ベースのクロスプラットフォーム・リッチ・ワークステーション・アプリケーションです。
- QMF for WebSphere は、一般的な Web ブラウザーを使って企業ユーザーにさまざまな機能を配信します。

---

### QMF フィーチャー

QMF ソリューションは、ビジネス・インテリジェンス機能の堅固なセットを提供します。

---

2. Eclipse は、ソフトウェアを作成するための拡張性の高い開発プラットフォームおよびアプリケーション・フレームワークを提供することをプロジェクトの主眼としたオープン・ソース・コミュニティです。Eclipse は、ソフトウェア開発のライフ・サイクル全体における拡張性のあるツールおよびフレームワークを備えています。これには、モデリング、Java<sup>™</sup>、C/C++、PHP などの言語開発環境、テストとパフォーマンス、ビジネス・インテリジェンス、リッチ・クライアント・アプリケーション、および組み込み開発のサポートが含まれます。主要なテクノロジー・ベンダー、革新的な新興企業、大学、研究機関、および個人から成る活力のある大きなエコシステムが、Eclipse プラットフォームを拡張、補完、および支援しています。Eclipse Foundation は、Eclipse プロジェクトをホストする、非営利の、メンバーの支援によるコーポレーションです。Eclipse および Eclipse Foundation について詳しくは、[www.eclipse.org](http://www.eclipse.org) を参照してください。

## リレーショナル照会およびマルチディメンション照会

さまざまなスキルや知識レベルに合わせて調整された各種照会インターフェースによって、リレーショナル照会および OLAP 照会の両方の作成が容易になります。マルチディメンション分析機能を使用すると、詳細のレベルを無制限にドリルダウンでき、クリックするたびに内在する情報が示されます。

## 報告書、図表、グラフ、およびマップ

QMF は、非常に柔軟な報告書の設計環境を提供します。これにより、データのグループ化、集約、集計、計算式の追加、および照会結果に応じた報告書の条件付き書式設定を行うことが可能になります。数多くのビジュアル・エレメントを、報告書キャンバスへドラッグするだけで報告書に組み込むことができます。これにより、図表、グラフ、マップなどの豊富なグラフィカル・コンテンツを含む報告書を作成することが可能です。また、報告書書式をテンプレートとして保存し、さまざまな照会結果のセットに適用することにより、最大限に再利用することができます。

## ダッシュボード

ダッシュボードは、重要な企業データをレビューするための動的手段を提供します。固定量の情報を含む傾向のある報告書とは異なり、ダッシュボードには、リアルタイムの情報をダッシュボード・ユーザーの必要に応じてオンデマンドで提供する機能があります。QMF は、照会結果の表示、ユーザー入力の取り込み、ダッシュボードとの情報の受け渡し、ナビゲーションの実装と効率化、ビジュアル・エレメント間の関係の定義、および基礎データ・ソースの位置指定のための手段を標準装備しています。

## 分析関数

QMF は 140 を超える分析機能を備えています。さまざまなニーズを持つユーザーが傾向を分析し、要約レベルの情報を入手できるようにするために必要となる、機能のレパートリーを提供します。

## データ編集機能

QMF は多様なアプリケーション・インターフェースを備えています。これにより、QMF 機能を新規または既存のアプリケーションにシームレスに統合することが可能になります。また、さまざまな作業を行うための高度なプロシージャーを作成、編集、および実行することができます。

## アプリケーション開発インターフェース

QMF は多様なアプリケーション・インターフェースを備えています。これにより、QMF 機能を新規または既存のアプリケーションにシームレスに統合することが可能になります。また、さまざまな作業を行うための高度なプロシージャーを作成、編集、および実行することができます。

## パフォーマンス、リソース制御、および監査機能

QMF は、ユーザーまたはグループごとにリソース消費制限を設定できる管理機能を備えています。これにより、役割ベースの制限と個別の制限を作成することができます。アクティビティ・ログには、すぐに使える報告書などの使用監査機能が標準装備されているため、各ユーザーのシステム・アクティビティのスナップショットがいつでも得られます。

---

## コンポーネント

QMF には、ユーザー・コンポーネントと管理者コンポーネントが含まれます。

管理者コンポーネントは、製品を使用するように構成するために、管理者によって使用されます。

ユーザー・コンポーネントは、すべての照会機能と報告書作成機能を実行したり、ビジュアル・プロジェクトを開発したりするために、開発者とユーザーによって使用されます。

各コンポーネントには、ユーザーと管理者がタスクを実行する、固有のパースペクティブ、ビュー、およびエディターがあります。

### 「管理者」パースペクティブの概要

アプリケーション・インターフェースの「管理者」パースペクティブは、リポジトリの作成、管理、および保守を可能にする、ビュー、メニュー、およびウィザードを提供します。

QMF 管理者は、アプリケーション・インターフェース構成の設定を担当します。このため、ご使用のアプリケーション・インターフェースは 1 つ以上のリポジトリ・ワークスペースにアクセスできるように事前構成されてインストールされています。ワークスペースからアクセスできるデータ・ソースおよびオブジェクトは、「ワークスペース」ビューに表示されます。

### 「ユーザー」パースペクティブの概要

アプリケーション・インターフェースの「ユーザー」パースペクティブは、広範囲に及ぶ照会機能および報告書作成機能の実行を可能にするビュー、メニュー、およびウィザードを提供します。

#### このタスクについて

QMF を使い始めるには、「ユーザー」パースペクティブ、設定可能なユーザー設定、および「ワークスペース」ビューで使用可能なデータ・ソースやオブジェクトを操作する方法に通じる必要があります。いつでも、データ・ソースの照会、オブジェクトの作成、照会結果の形式設定、報告書とダッシュボードの作成を始めることができます。

注: アプリケーション・インターフェース構成情報は、共有リポジトリとデータ・ソースへの接続に使用する JDBC ドライバーとリポジトリ接続設定からなります。上級ユーザーは、「ユーザー」パースペクティブから構成情報を変更することが可能です。ほとんどのユーザーは、構成情報の変更を行いません。

---

## データ・アーキテクチャーの用語および概念

QMF は、既存のデータ・ストア (データベース) を、ビジュアル・プロジェクトからアクセスおよび実行できる、コンテンツ照会と報告書作成機能に使用します。

QMF では、ユーザーと開発者によってアクセスされるデータは、管理者によってセットアップされる必要があります。データおよびデータへのアクセスは、共有リポ

ジトリリー・ストレージ、共有リポジトリ、および 1 つ以上のリレーショナル・データ・ソース の階層構成を使用してセットアップします。

データが構造化およびハウジングされている階層方式を理解することで、過度に複雑な構造を作成する可能性を減らし、管理のオーバーヘッドを最小化できます。

このトピックの目的は、QMF データ・アーキテクチャーの説明に使用される用語を理解できるようにすることです。

## 共有リポジトリ・ストレージ

共有リポジトリ・ストレージは、表集合です。

QMF では、管理者が以下のものを保管するために共有リポジトリ・ストレージを作成します。

- データベース接続情報およびリソース限界。
- 次のような QMF オブジェクト。
  - ビジュアル照会
  - 分析照会
  - プロシージャ
  - 予測
  - ビジュアル報告書
  - ビジュアル・ダッシュボード

管理者は、論理的にグループ化されたデータの 1 つ以上のリポジトリと、1 つ以上のリレーショナル・データ・ソースを作成する一連の管理タスクにより、共有リポジトリ・ストレージにデータを追加します。

たいていのシナリオでは、単一の共有リポジトリ・ストレージがあれば十分です。

## リポジトリ

リポジトリは、すべて特定のデータ・ソースのセットに対して開発された、照会、プロシージャ、ダッシュボード、および報告書の論理グループです。

たいていのシナリオでは、1 つの共有リポジトリがあれば十分です。

管理者がビジネス・アプリケーションとユーザーにとって意味をなすグループ化方法を実装するのは、リポジトリ・レベルです。

## 共有リポジトリ

共有リポジトリはデータベース上に存在し、多数のユーザーがそれを共有できます。

## ネットワーク・リポジトリ

ネットワーク・リポジトリは、直接ネットワーク・アクセスを使用する、共有リポジトリへの接続です。ネットワーク接続の場合、ユーザーは、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリにアクセスできま

す。ネットワーク接続を使用してリポジトリに接続すると、中央サーバーでのデータ・アクセスの統合が可能になり、QMF を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。

## Web サービス・リポジトリ

Web サービス・リポジトリは、ユーザーが QMF Web サービス API により、HTTP または HTTPS 接続を使用して接続できる共有リポジトリです。Web ベース接続の場合、ユーザーは、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリにアクセスできます。Web サービス接続を使用してリポジトリに接続すると、中央サーバーでのデータ・アクセスの統合が可能になり、QMF を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。

## 静的 SQL パッケージ

リポジトリ・ストレージ内のいくつかの表は、QMF によって処理情報を格納するために使用されます。これらの表の中には、許可表などのように、機密性の高い情報が保管されているものもあります。デフォルトでは、すべてのユーザーがこれらのリポジトリ・ストレージ表にアクセスし、表に変更を加えられるようになっています。リポジトリ・ストレージ表には、表を保護するオプションがあります。保護モードでは、ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージ (そのリポジトリ・ストレージのホスト・データベースが何をサポートしているかによって異なる) の集合を使用してリポジトリ・ストレージ表にアクセスします。このため、リポジトリ・ストレージのユーザーにストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行するための許可を付与する必要があります。

## リレーショナル・データ・ソース

リレーショナル・データ・ソースは、情報が多数のデータベース表に保管されるデータベースです。

データベース表のそれぞれは、いくつかの列と、1 つ以上の行から構成されます。データベース内のさまざまな表は関連させることができます。別個であるものの関連している複数の表にデータを入れることは、情報を保管および検索するための効率的な方法です。

## ワークスペース

リソースの統合グループとして意味をなす方法でユーザーに表示するために、共有リポジトリから成果物を論理サブグループ化したものです。

## ビジュアル・ダッシュボード

ビジュアル・ダッシュボードは、企業全体にわたる複数の異種データ・ソースの照会から入手した対話式または永続データを表示します。

ビジュアル・ダッシュボードは、図表やグラフを含む、多様なグラフィックスを使用するシーン・フォーマットでデータを表示します。データ主導型のグラフィック・オブジェクトは簡単にリンクできるので、ユーザーの選択内容に応じて、固有のデータ表示が行われます。



---

## 第 2 章 QMF インターフェースの使用

ユーザーおよび管理者の環境をセットアップしたり、その環境で作業を行ったりするには、パースペクティブ、ビュー、およびエディターを使用します。

### パースペクティブ

QMF は、パースペクティブ、ビュー、および編集機能 という Eclipse ベースの概念を採用し、使用しています。

以下のセクションでは、QMF で使用されるパースペクティブ、ビュー、およびエディター について説明します。パースペクティブ、ビュー、およびエディターに関する Eclipse の概念については、「Eclipse documentation」を参照してください。

パースペクティブとは、QMF で使用されるファイルおよび成果物を編成したり表示したりするための手段です。

QMF に付属のパースペクティブは、デフォルト・ビュー のセットで構成されていて、アプリケーション・インターフェースの特定領域に配置されます。

管理者およびユーザーは、自分のロールに適合するパースペクティブ、ビュー、およびエディターを選択できます。例えば、1 次ロールがビジュアル・ダッシュボードの設計および開発である場合は、ビジュアル・デザイナー・パースペクティブで多くの作業を行うことになります。

さらに、管理者およびユーザーはインターフェースをカスタマイズして、QMF の起動時に必ず、そのインターフェースが特定のパースペクティブおよびビューのセットに対して開くようにできます。

QMF で使用できるパースペクティブを確認するには、メニュー・バーから「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを開く」 > 「その他」を実行します。

QMF for Workstation および QMF for WebSphere には以下のパースペクティブがあります。

- 管理者は、管理特権を持つユーザーがリポジトリを作成して保守できるように、ビュー、メニュー、およびウィザードを提供します。QMF のすべてのインスタンスが、選択された機能として「管理者」パースペクティブを持つようにインストールされるわけではありません。
- 「ユーザー」では、データ・ソースを照会し、照会結果を操作するために使用するビュー、メニュー、およびウィザードを提供します。
- QMF は、QMF カタログを使用する作業に最も適したビュー、メニュー、およびウィザードを提供します。
- 「QMF 標準」は、容易に QMF for Workstation に切り替える機能を QMF TSO ユーザーに提供します。これは、「QMF 標準」のインターフェースが QMF TSO と似ているためです。
- 「ビジュアル・デザイナー」は、ビジュアル報告書およびダッシュボードを作成するために使用するビュー、メニュー、およびウィザードを提供します。

## ビュー

通常、ビューは、情報の階層をナビゲートしたり、エディターを開いたり、アクティブ・エディターのプロパティを表示したりするために使用されます。

QMF ビューはエディターをサポートしており、代替表示を提供し、またウィンドウにある情報のナビゲート方法を提供します。Eclipse では、ページ内のビューのレイアウトは、アクティブ・パースペクティブによって制御されます。つまり、各パースペクティブ (ユーザー、ビジュアル・デザイナー、QMF (デフォルト)、QMF 標準、および管理者) には、指定されたり事前決定されたりしたビュー のセットがあります。それぞれのビューは、メイン・ワークステーション・ウィンドウ内のペインとして表示されます。QMF のそれぞれのパースペクティブは、特定の機能を実行するために最も共通して使用されるビューを最初に表示します。

表 1. 「ユーザー」パースペクティブ: ビュー

ビュー名	目的
アナライザー	「アナライザー」ビューには、シーンに含まれる各オブジェクトの重みカウントが表示されます。
ブックマーク	「ブックマーク」ビューは、ドリルダウン・パスのブックマークを管理するものです。
チート・シート	「虎の巻」ビューには、いくつかの基本ユーザー/管理者機能を実装するために必要となる手順が概説されている一連のチュートリアルが表示されます。
データ・ソース接続	「データ・ソース接続」ビューには、現在活動状態にある接続や、データ・ソースに対して作成された接続がすべてリストで表示されます。
ヘルプ	「ヘルプ」ビューでは、アプリケーションのヘルプが起動します。
枠取り	「枠取り」ビューには、エディター領域で現在開いているオブジェクトの構造的なエレメントが表示されます。
出力	「出力」ビューには、アプリケーション・インターフェースの実行中に生成される通知メッセージとエラー・メッセージが表示されます。
パーソナル	「パーソナル」ビューでは、「最近使用したオブジェクト」、「お気に入り」、および「スタートアップ」フォルダー内のオブジェクトの保守と表示を行います。
プロファイラー	「プロファイラー」ビューには、実行中の照会に関するデータ、作成されたオブジェクト数、およびビジュアル・プロジェクトでそのオブジェクトを作成したり式を計算したりするために費やされた時間が表示されます。
進行中	「進行状況」ビューには、すべての進行状況、処理の完了パーセンテージ、および取り消しメッセージが表示されます。
プロパティ	「プロパティ」ビューには、エディター領域または別のビューで選択されていたり活動状態になっていたりするオブジェクトのプロパティが表示されます。
照会プロファイラー	「照会プロファイラー」ビューには、照会を実行して結果をフェッチする処理に費やされた時間が表示されます。
リポジトリ接続	「リポジトリ接続」ビューには、選択可能なリポジトリ接続のリストが表示されます。



表 1. 「ユーザー」パースペクティブ: ビュー (続き)

ビュー名	目的
リポジトリ・エクスプローラー	「リポジトリ・エクスプローラー」ビューは、接続したリポジトリの内容を表示します。また、このビューには、あるオブジェクトが他のオブジェクトに対して行う参照に関する情報も表示されます。
結果ナビゲーター	「結果ナビゲーター」ビューでは、照会結果とドリルダウン・パス結果を切り替えることができます。
REXX コンソール	「REXX コンソール」ビューは、REXX プロシーチャーの操作をサポートします。 <b>制約事項:</b> この機能は 64 ビット・アプリケーションでは使用できません。
検索	「検索」ビューには検索の結果が表示されます。
ワークスペース	「ワークスペース」ビューは、ユーザー ID で使用可能なワークスペースをリストします。アクセスできるデータ・ソースはすべて、提示されるワークスペースに入っています。「ワークスペース」ビューからは、多くの照会機能と報告書作成機能を実行できます。

表 2. 「管理者」パースペクティブ: ビュー

表示	目的
リポジトリ	「リポジトリ」ビューには、作成したリポジトリが表示されます。このビューは、管理者コンポーネントがある場合にのみ使用できます。
ユーザーおよびグループ	「ユーザーおよびグループ」ビューには、内部セキュリティ・プロバイダー用に作成されたユーザーおよびグループが表示されます。

表 3. 「QMF 標準」パースペクティブ: ビュー

表示	目的
QMF コマンド	<p>「QMF コマンド」ビューには、サポートされる各種コマンド操作用のファンクション・キーのリストが表示されます。リストされるファンクション・キーは、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ヘルプ: オンライン・ヘルプが起動します。</li> <li>• リスト: データ・ソースがリストされている「オブジェクト・リスト」ダイアログが起動します。</li> <li>• 終了: ワークベンチが終了します。</li> <li>• 照会: 照会エディターを表示します。</li> <li>• 取得: 検索コマンド・プロンプトが起動します。</li> <li>• 表の編集 (<b>Edit Table</b>): 表エディターが起動します。</li> <li>• 書式: 書式エディターが起動します。</li> <li>• <b>PROC</b>: プロシーチャー・エディターが起動します。</li> <li>• 報告書: 報告書エディターが起動します。</li> </ul>

表 4. ビジュアル・デザイナー・パースペクティブ: ビュー

表示	目的
イベント	「イベント」ビューには、ビジュアル・プロジェクト内のレイアウト・オブジェクトに適用できるナビゲーション・エレメントが表示されます。
式	「式」ビューは、ビジュアル・ダッシュボードのデバッグに使用されます。
レイヤー	「レイヤー」ビューには、レイヤーのグループが表示されます。
パレット	「パレット」ビューには、ビジュアル・プロジェクトに挿入できるオブジェクトが表示されます。
プロジェクト・エクスプローラー	「プロジェクト・エクスプローラー」ビューには、ビジュアル報告書およびダッシュボード内の各エレメントが表示されます。
プロパティ	「プロパティ」ビューは、エディターまたは別のビューで選択されたか、またはアクティブになっているオブジェクトのプロパティを表示します。
QMF 計算機	QMF 計算機は、ビジュアル・プロジェクトでの式の計算に使用されます。

表 5. テキスト分析: ビュー

ビュー名	目的
エンティティ・エクスプローラー	「エンティティ・エクスプローラー」ビューには、知識ベースで指定されているエンティティのツリー構造が表示されます。
ソース・エクスプローラー	「ソース・エクスプローラー」ビューには、プロジェクトに属するファイルのツリー構造が表示されます。
テキスト分析エクスプローラー	「テキスト分析エクスプローラー」ビューには、分析可能なプロジェクトのリストが表示されます。
ワード・マップ	「ワード・マップ」ビューには、テキスト分析結果がワード・クラウド形式で表示されます。

## エディター

編集されているファイルのタイプに応じて、適切なエディターがエディター領域に表示されます。

ビューとエディターには、主に次のような機能上の違いがあります。

- 通常、ワークベンチ・ページごとに 1 つのビューのインスタンスは 1 つのみ存在しますが、同じタイプのエディターのインスタンスは複数存在する場合があります。
- エディターはページの 1 つの領域にのみ表示できます。一方、ビューはページの任意の部分に移動したり、高速ビューとして最小化したりできます。
- エディターはダーティ状態になることがあります。つまり、内容が保存されていない状態でエディターが閉じられると、その内容は失われます。
- ビューにはローカル・ツールバーがあります。一方、エディターにはグローバル・ツールバーのボタンがあります。
- エディターは、ファイル名または拡張子に関連付けることができます。ユーザーは、この関連付けを変更できます。

QMF パースペクティブのそれぞれには 1 つのエディター域が含まれます。デフォルトでは、エディター域はワークステーション・ウィンドウの中央に開きます。

開くオブジェクトや実行する機能のタイプに基づいてエディター域で開かれるエディターが QMF に数多くあります。照会の作成、照会結果のフォーマット、報告書の作成、またはビジュアル・ダッシュボードの作成を行う場合は、これらのエディターの多くを使用することになります。

---

## ビューおよびパースペクティブの使用

QMF 照会環境には、必要に合わせてカスタマイズできるビューおよびパースペクティブが組み込まれています。

次のセクションでは、以下の方法について説明します。

- パースペクティブおよびビューを開く/閉じる
- アプリケーション・インターフェースにビューを配置/連結する
- 役割および責任に適したパースペクティブおよびビューを開くようにアプリケーション・インターフェースをカスタマイズする

### パースペクティブを開く

ワークステーション・ウィンドウに現在開かれていないパースペクティブを開くことができます。

#### このタスクについて

パースペクティブは、閉じるまでは開いたままになります。QMF が開始されるたびに、前回の終了時に開いていたすべてのパースペクティブが開きます。

初期状態では、「ユーザー」パースペクティブは、QMF アプリケーションが開始されると開かれます。「ユーザー」パースペクティブが閉じられると、そのパースペクティブか、または閉じられたいずれかのパースペクティブを次の方法で開くことができます。

#### 手順

1. 「パースペクティブを開く」ツールバー・ボタンをクリックします。また、「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを開く」を選択することもできます。現行 QMF セッションで開かれたパースペクティブをリストするメニューが表示されます。開くパースペクティブを選択します。
2. 使用可能なパースペクティブの完全なリストを表示するには、メニューから「その他」を選択します。「パースペクティブを開く」ウィンドウが開きます。開きたいパースペクティブを選択します。「OK」をクリックします。
3. 選択したパースペクティブが開きます。ウィンドウのタイトル・バーにタブが追加されます。タブには、パースペクティブの名前と関連ボタンが表示されます。パースペクティブのボタンをクリックすると、同じウィンドウ内の別のパースペクティブからそのパースペクティブへ素早く切り替えることができます。

4. デフォルトでは、パースペクティブは同一のウィンドウで開きます。パースペクティブは、「ウィンドウ」 > 「新規ウィンドウを開く」を選択して、新しいウィンドウで開くことができます。アクティブ・パースペクティブが新しいウィンドウで開きます。

## パースペクティブを閉じる

ワークステーション・ウィンドウでアクティブな各パースペクティブを閉じることができます。

### このタスクについて

パースペクティブを閉じると、そのパースペクティブを再び開くまで閉じたままとなります。QMF アプリケーション・インターフェースが開始されるたびに、前回の終了時に開いていたすべてのパースペクティブが開きます。閉じていたパースペクティブはすべて閉じたままです。

パースペクティブを閉じるには:

### 手順

1. 「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを閉じる」を選択します。アクティブなパースペクティブが閉じます。
2. すべてのパースペクティブを閉じるには、「ウィンドウ」 > 「すべてのパースペクティブを閉じる」を選択します。ワークステーション・ウィンドウで開いているすべてのパースペクティブが閉じます。ワークステーション・ウィンドウは空になります。

## ビューを開く

ワークステーション・ウィンドウに表示されるビューを開いたり閉じたりすることで、パースペクティブのレイアウトを変更できます。

### このタスクについて

ビューを開くには、以下のようにします。

### 手順

1. 「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」を選択します。
2. ビューのリストから、開くビューを選択します。他のビューを見るには、「その他」を選択します。「ビューの表示」ウィンドウが開きます。開きたいビューを選択します。
3. 「OK」をクリックします。選択したビューが、ワークステーション・ウィンドウ内のアクティブなパースペクティブで開きます。このビューは後続の QMF セッションのパースペクティブで自動的に開きます。

### 次のタスク

注: ビューにはまた、独自のメニューがあります。ビューのメニューを開くには、ビューのタイトル・バーの左端にあるアイコンをクリックしてください。また一部のビューには、独自のツールバーもあります。ビュー・ツールバーのボタンが表すアクションは、そのビュー内の項目にのみ作用します。

## ビューの位置決め

QMF for Workstation を使用している場合、ビューを開いたり閉じたりすることで、またワークステーション・ウィンドウ内の他の場所でそれらを連結することで、パースペクティブのレイアウトを変更することができます。

### このタスクについて

ビューを開くと、ビューは単独で表示される場合と、タブ付きノートブックで他のビューに積み重なって表示される場合があります。以下のいずれかの方法でビューの位置を変更することができます。

- ビューをそのタイトル・バーを使って新しい位置にドラッグし、左マウス・ボタンを放します。
- 移動したいビューのタイトル・バーを右クリックします。ポップアップ・メニューから「移動」 > 「ビュー」または「移動」 > 「タブ・グループ」を選択します。

## パースペクティブの構成

アプリケーション・インターフェース内のパースペクティブのレイアウトを構成することに加えて、「ウィンドウ」メニューから使用可能なオプション、およびツールバーとメニュー・バーから使用可能なボタンおよびメニュー・オプションをカスタマイズすることができます。

### このタスクについて

制御できるパースペクティブの機能:

- ツールバーで使用可能なボタン。
- メニュー・バーのメニューで使用可能なオプション。
- パースペクティブのコマンド・グループ。
- パースペクティブで使用可能なショートカット。

パースペクティブを構成するには:

### 手順

1. 構成するパースペクティブに切り替えます。
2. 「ウィンドウ」 > 「パースペクティブのカスタマイズ」を選択します。「パースペクティブのカスタマイズ」ウィンドウが開きます。
3. カスタマイズするオプションが含まれているタブを選択します。
4. カスタマイズする項目を展開します。
5. チェック・ボックスを使用して、選択したパースペクティブのドロップダウン・メニューに表示するエレメントを選択します。選択しなかった項目にも、「その他」メニュー・オプションをクリックすればアクセスできます。
6. 「OK」をクリックします。

## パースペクティブのリセット

QMF for Workstation では、パースペクティブを元のレイアウトに復元できます。

## このタスクについて

パースペクティブを元のレイアウトに復元するには:

### 手順

1. 「ウィンドウ」 > 「パースペクティブのリセット」を選択します。現行パースペクティブをデフォルト値にリセットするかどうかの確認を求める情報ウィンドウが開きます。
2. 「OK」をクリックします。現行パースペクティブがそのデフォルト値にリセットされます。

---

## QMF 標準パースペクティブ

QMF 標準パースペクティブは、QMF for TSO/CICS のインターフェースとよく似たインターフェースを提供しています。インターフェースがよく似ているため、QMF for TSO/CICS ユーザーはほとんど問題なく QMF for Workstation 環境にスキルを適用できます。

QMF 標準パースペクティブは、QMF for TSO and CICS インターフェースの単純さと、QMF for Workstation の能力とを兼ね備えています。

注: いくつかの QMF コマンドは、QMF for Workstation の拡張機能を使用するために変更されており、他のいくつかの (GUI 環境での作業に適していた) コマンドは除去されています。

QMF 標準パースペクティブを開くには、「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを開く」 > 「その他」 > 「**QMF 標準パースペクティブ (QMF Classic Perspective)**」を選択します。

QMF 標準パースペクティブには、エディター領域と、QMF コマンド・ビューがあります。

QMF コマンド・ビューでは、QMF for TSO ウィンドウの下部にある一連のコントロールが複製されています。このパースペクティブには、以下の機能領域とビューが組み込まれています。

- **ファンクション・キー (ボタン)**。これは QMF for TSO 画面のファンクション・キーを表しています。

表示されるファンクション・キーは、「エディター」ウィンドウにあるオブジェクト・タイプに応じて変化します。

コマンドは、「データ・ソースの選択 (**Select DataSource**)」ボタンをクリックして設定された特定のデータ・ソースからのオブジェクトに対して実行されます。

- 「出力ビュー」。これには実行されたコマンドの履歴と、QMF によって生成されたさまざまなメッセージが示されます。

オブジェクトに対してコマンドを実行するごとに、その成功または失敗に関する情報が「出力ビュー」に書き込まれます。

- コマンド・バー。コマンドを入力し、オブジェクトに対してそれを実行します。すべてのコマンドのリストは、ユーザー・ヘルプにある「プロシージャー・コマンド」を参照してください。

コマンド・バーでは、最新の 30 のコマンド入力の履歴が保持されます。この履歴にアクセスするには、下矢印ボタンをクリックし、リストからコマンドを選択します。

コマンドにオブジェクト (照会、書式、プロシージャー、または表) をパラメーターとして指定して実行するには、以下のステップを実行します。

1. オブジェクトの名前 (それが QMF カタログ内にある場合)、またはそのパス (それがリポジトリ内にある場合) のいずれかを特定します。
2. オブジェクトの名前またはパスをコマンド・バーに入力します。
3. いずれかのファンクション・キーを押して、オブジェクトに対してコマンドを実行します。

例えば、コマンド・バーに表の名前またはパスを入力し (**Q.STAFF** または `rsbi:/Data Sources/Sample Data Source/Database/Tables/Q/STAFF`)、**F8** を押して表を編集します。

注: ファンクション・キー・コマンドとともにパラメーターを使用する場合は、パラメーターをコマンド・バーに入力し、それからファンクション・キーを押します。例えば、照会パネルが表示されているときに、(FORM=FORM2 と入力し、それから「実行」ファンクション・キーを押します次のコマンドが実行されます。

`RUN QUERY (FORM=FORM2`

## メインメニューのファンクション・キーでの作業

メインメニューのファンクション・キーは、アクティブなエディターがない場合、または QMF 標準パースペクティブ (例えば、ビジュアル・ダッシュボード) によってオブジェクト・エディターがサポートされていない場合に使用できます。

表 6. QMF メインメニューのファンクション・キーの説明

ファンクション・キー	コマンド	コマンドの説明
<b>F1</b>	ヘルプ	オンライン・ヘルプを立ち上げます。
<b>F2</b>	リスト	「オブジェクト・リスト」ダイアログを表示します。これによりオブジェクトを選択し、その名前をコマンド・バーに入れることができます。  このダイアログでは以下のボタンが使用できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「実行」 - 選択したオブジェクトを実行します。</li> <li>• 「表示」 - 選択したオブジェクトを表示します。</li> <li>• 「コピー」 - 選択したオブジェクト名をコマンド行にコピーします。</li> </ul>
<b>F3</b>	終了	QMF アプリケーションをクローズします。

表 6. QMF メインメニューのファンクション・キーの説明 (続き)

ファンクション・キー	コマンド	コマンドの説明
F4	表示	「コマンドの表示 (Show Command)」ダイアログを立ち上げます。このダイアログから、表示するオブジェクトまたは項目を選択します (例えば、グローバル変数ダイアログ、現行書式、現行プロシージャ、書式のページ、またはユーザー・プロファイル)。
F6	照会	照会を作成し、現行照会のエディターをアクティブにするか、あるいはコマンド・バーでその名前が入力されている場合は、それを QMF カタログまたはリポジトリから開きます。
F7	検索	直前のコマンドを履歴から取得します。
F8	表の編集	「表の編集」ダイアログを表示して編集する表を選択するか、またはその名前がコマンド・バーで入力されている場合は表を開きます。
F9	書式	現行の書式を開くか、現行照会に基づいて書式を作成するか、あるいはコマンド・バーでその名前が入力されている場合は QMF カタログまたはリポジトリから書式を作成します。
F10	プロシージャ	プロシージャを作成します。またはコマンド・バーでその名前が入力されている場合は QMF カタログまたはリポジトリから現行の 1 プロシージャを開きます。
F12	報告書	現行の書式または照会に基づいて報告書を生成します。あるいはコマンド・バーでその名前が入力されている場合は QMF カタログまたはリポジトリから適切な書式を開きます。

## 照会エディターのファンクション・キーでの作業

照会エディターのファンクション・キーは、ビジュアル照会エディターがアクティブな場合に使用できます。

表 7. QMF 照会エディターのファンクション・キーの説明

ファンクション・キー	コマンド	コマンドの説明
F1	ヘルプ	オンライン・ヘルプを開きます。
F2	実行	照会を実行し、その結果を表示します。
F3	終了	現行のビジュアル照会エディターを閉じます。
F4	印刷	照会結果を印刷します。
F6	ドロウ	照会する表またはビューの名前を指定する、照会のドロウ・ウィザードを表示します。
F7	検索	直前のコマンドを履歴から取得します。
F9	書式	現行の照会に基づいて書式を作成します。
F12	報告書	<ul style="list-style-type: none"> <li>現行の書式または照会に基づいて報告書を生成します。</li> <li>適切な書式を、コマンド・バーでその名前またはパスが入力されている場合は、QMF カタログまたはリポジトリから開きます。</li> </ul>



## プロシージャー・エディターのファンクション・キーでの作業

プロシージャー・エディターのファンクション・キーは、プロシージャー・エディターがアクティブな場合に使用できます。

表 8. QMF プロシージャー・エディターのファンクション・キーの説明

ファンクション・キー	コマンド	コマンドの説明
F1	ヘルプ	オンライン・ヘルプを開きます。
F2	実行	照会を実行し、その結果を表示します。
F3	終了	現行のプロシージャー・エディターを閉じます。
F4	印刷	プロシージャー結果を印刷します。
F6	照会	<ul style="list-style-type: none"><li>開いている照会がない場合は、それを作成します。</li><li>現行の照会のエディターをアクティブにします。</li><li>照会を、コマンド・バーでその名前またはそれへのパスが入力されている場合は、QMF カタログまたはリポジトリから開きます。</li></ul>
F9	書式	<ul style="list-style-type: none"><li>現行の書式エディターを開きます。</li><li>現行の照会に基づいて書式を作成します。</li><li>書式を、コマンド・バーでその名前またはそれへのパスが入力されている場合は、QMF カタログまたはリポジトリから開きます。</li></ul>
F12	報告書	<ul style="list-style-type: none"><li>現行の書式または照会に基づいて報告書を生成します。</li><li>適切な書式を、コマンド・バーでその名前またはパスが入力されている場合は、QMF カタログまたはリポジトリから開きます。</li></ul>

## 報告書のファンクション・キーでの作業

標準報告書のファンクション・キーは、報告書エディターがアクティブである場合に使用できます。

表 9. QMF 報告書のファンクション・キーの説明

ファンクション・キー	コマンド	コマンドの説明
F1	ヘルプ	オンライン・ヘルプを開きます。
F3	終了	現行の報告書エディターを閉じます。
F4	印刷	現行の報告書を印刷します。
F6	照会	<ul style="list-style-type: none"><li>開いている照会がない場合は、それを作成します。</li><li>現行の照会のエディターをアクティブにします。</li><li>照会を、コマンド・バーでその名前またはそれへのパスが入力されている場合は、QMF カタログまたはリポジトリから開きます。</li></ul>
F9	書式	現行の書式の「デザイン」タブを開きます。

## 書式の「デザイン」タブのファンクション・キーでの作業

書式の以下のノードには、ファンクション・キーがあります。

- メイン
- 列
- 計算
- 条件
- ページ

これらのファンクション・キーは、ビジュアル照会エディターがアクティブである場合に使用できます。

表 10. 書式の QMF ファンクション・キーの説明

ファンクション・キー	コマンド	コマンドの説明
F1	ヘルプ	オンライン・ヘルプを開きます。
F2	確認	書式のフィールドを妥当性検査します。
F4	表示	「コマンドの表示 (Show Command)」ダイアログを表示します。これにより、表示内容を選択できます (例えば、グローバル変数ダイアログ、現行書式、現行プロシージャ、書式のページ、またはユーザー・プロファイル)。
F6	照会	<ul style="list-style-type: none"><li>• 開いている照会がない場合は、それを作成します。</li><li>• 現行の照会のエディターをアクティブにします。</li><li>• 照会を、コマンド・バーでその名前またはそれへのパスが入力されている場合は、QMF カタログまたはリポジトリから開きます。</li></ul>
F9	指定	「列の編集」ダイアログを開き、「書式.列 (Form.Columns)」ページで列のプロパティを指定します。 注: 列に対してのみ使用可能です。
F12	報告書	<ul style="list-style-type: none"><li>• 現行の書式または照会に基づいて報告書を生成します。</li><li>• 適切な書式を、コマンド・バーでその名前またはパスが入力されている場合は、QMF カタログまたはリポジトリから開きます。</li></ul>

## 設定値の設定

「設定」ダイアログは、QMF の特定のオブジェクトおよび機能に適用されるユーザー設定を行うために使用します。

「設定」ウィンドウは 2 つのペインで構成されています。左ペインには設定グループのリストが表示され、右ペインには選択したグループのページが表示されます。以下の設定グループが、「設定」ウィンドウに表示されます。

### 一般設定

「設定」ウィンドウの「一般」ページを使用して、言語、方向、地域設定、およびオブジェクトのデフォルト・アクションを指定します。

## このタスクについて

QMF アプリケーション・インターフェース現行セッションの一般ユーザー設定を指定するには:

### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「一般」を選択します。
2. 条件: 「設定」ウィンドウでオプションとして選択できる場合は、サポートされる言語の「言語」ドロップダウン・リストからアプリケーション・インターフェースの現行セッションに使用する言語を選択します。値「自動」を選択すると、現行マシンのローカル言語が使用されます。
3. 「方向」ドロップダウン・リストから、QMF アプリケーション・インターフェース現行セッションで情報を表示するために使用される方向を選択します。「左から右」または「右から左」を選択できます。「自動」を選択して、現行マシンのデフォルトの方向を使用することもできます。
4. 「数値、通貨、時刻、日付の地域設定」リストから、QMF アプリケーション・インターフェース現行セッションで数値、通貨、時刻、および日付を表示するために使用される言語を選択します。値「自動」を選択すると、現行マシンのローカル言語が使用されます。
5. 「オブジェクトのデフォルト・アクション」ラジオ・ボタンの 1 つをクリックして、エクスプローラー・ツリーに含まれるオブジェクトをダブルクリックしたときに QMF が実行するアクションを指定します。「オブジェクトの実行」を選択すると、選択されたオブジェクトを実行します。「オブジェクトの表示」を選択すると、オブジェクトの SQL コンテンツを表示します。
6. 省略時設定で照会編集機能が開かれるタブを、「照会編集機能の省略時設定タブ」領域で指定できます。
7. 「行幅」の省略符号 (...) をクリックするか、または最大行幅の値を入力します。

行幅に使用できる値は 10 から 1000 までです。デフォルト値は 79 です。

この値は、SQL テキストの「照会」メニュー項目の「テキストの再フォーマット」で使用されます。

8. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
9. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
10. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

## 加速の設定

照会加速設定を指定するには、「設定」ウィンドウの「加速」ページを使用します。

### このタスクについて

加速設定を行うには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. メインメニューから「表示」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。
2. ウィンドウの左側にある「加速」をクリックします。
3. ご使用のリソース限界グループに対して管理者が指定した加速オプションをオーバーライドできるように、画面の右側にある「可能であれば加速オプションをオーバーライド」チェック・ボックスを選択します。

注: このページで行った設定は、以下の条件が満たされる場合にのみ適用されません。

- 現行データ・ソースのリソース限界で「加速オプションをオーバーライドできる」チェック・ボックスが選択されている。
- 実行するオブジェクトに、指定のリソース限界がない。または、オブジェクト・リソース限界で「加速オプションをオーバーライドできる」チェック・ボックスが選択されている。

4. 「加速を有効にする」チェック・ボックスをクリックして、加速タイプを指定します。

オプション	説明
NONE	これは、アクセラレーター・サーバーに照会が送信されないように指定します。
ENABLE	これは、照会を加速することが好都合であるとデータベースで判断された場合に限り照会が加速されるように指定します。照会の実行中にアクセラレーターが失敗する場合、またはアクセラレーターからエラーが返される場合は、データベースからアプリケーションに負の SQLCODE が返されます。
ENABLE WITH FAILBACK	これは、照会を加速することが好都合であるとデータベースで判断された場合に限り照会が加速されるように指定します。照会の PREPARE コマンドまたは初回 OPEN コマンドでアクセラレーターからエラーが返される場合、データベースではアクセラレーターなしで照会が実行されます。FETCH コマンドまたは後続の OPEN コマンドでアクセラレーターからエラーが返される場合は、データベースからユーザーにエラーが返され、照会の実行されません。
ELIGIBLE	これは、照会が加速に適格である場合に照会が加速されるように指定します。加速に不適格な照会はデータベースで実行されます。照会を実行中にアクセラレーターで障害が発生した場合、またはアクセラレーターがエラーを返した場合、データベースはアプリケーションに負の SQLCODE を返します。

オプション	説明
ALL	これは、照会が加速に適格である場合に照会 が加速されるように指定します。加速に不適 格な照会はデータベースで実行されず、SQL エラーが返されます。照会を実行中にアクセ ラレーターで障害が発生した場合、またはア クセラレーターがエラーを返した場合、デー タベースはアプリケーションに負の SQLCODE を返します。

## 外観設定

「設定」ウィンドウの「外観」ページを使用して、デフォルトのフォント、カラー・スキーム、特殊値の表示および入力のためのストリングを指定します。そのページで、カスタム・ウィンドウ・サイズを保管することも選択できます。

### このタスクについて

外観の設定を行うには以下のようにします。

### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「外観」を選択します。
2. 「デフォルト・フォント」領域で、照会結果の見出しや列、標準の報告書のフォント・タイプを定義します。
3. データベース・データ・ソースから取り出された NULL 値を QMF が表示するために使用するストリングを、「NULL 値の表示」フィールドに指定します。
4. 「NULL 値の入力」フィールドに、NULL 値を照会結果に入力するとき、または表エディターを使用してデータベース表に入力するとき使用するストリングを指定します。
5. 「デフォルト値の入力」フィールドに、デフォルト値を照会結果に入力するとき、または表エディターを使用してデータベース表に入力するとき使用するストリングを指定します。
6. 「テキスト・エディターのカラー・スキーム」ドロップダウン・リストから、テキスト・エディターでサポートされるカラー・スキームのタイプを選択します。ほとんどの場合、テキスト・エディターで 사용되는デフォルトのカラー・スキームを許容することを指定するために、「QMF」を選択することになります。ハイコントラスト・モードで作業する場合は、「システム・デフォルト」を選択する必要があります。
7. 高解像度ディスプレイを使用する場合は、「アイコン・サイズ」領域の「大きいアイコンの表示」チェック・ボックスを選択して、すべてのアイコンのサイズを 2 倍にします。
8. アプリケーション内でウィンドウのサイズと位置をカスタマイズして、その変更を保存する場合は、「ウィンドウ・サイズ」領域で「カスタム・ウィンドウのサイズと位置の保存」チェック・ボックスを選択します。変更を元に戻すには、チェック・ボックスをクリアします。

9. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
10. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
11. 「OK」をクリックして、「設定」ダイアログ・ボックスを閉じます。

## ダッシュボード・ランタイムの設定

「設定」ダイアログの「ダッシュボード・ランタイム」のページを使用して Google Map API キーを指定します。

### このタスクについて

現行の QMF アプリケーション・インターフェース・セッションのダッシュボード・ランタイム・ユーザー設定を指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「ダッシュボード・ランタイム」を選択します。
2. 「ダッシュボード・ランタイム」の値を設定します。 Google Code Web サイトから Google Maps API を入手できます。
  - 「Google マップ JavaScript API キー」フィールドに Google マップ JavaScript API キーを指定して、Google マップ・レイアウト・オブジェクトをビジュアル・ダッシュボード内で HTML5 レンダリング・モードで使用できるようにします。

Google マップ JavaScript API は Google Developers Web サイトから入手できます。

  - 「NULL 値の表示」を設定して、ダッシュボードでの NULL 値の表示方法を指定します。
3. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
4. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
5. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

## グローバル変数を使用した作業

グローバル変数は、QMF の現行セッションがアクティブである期間中、アクティブであり続ける変数です。これは、オブジェクト (照会、書式、プロシージャー) の実行中にのみアクティブである置換変数とは対照的です。

置換変数を使用するオブジェクトの場合、値はオブジェクトの実行時にウィンドウで入力します。オブジェクトの実行後、変数および使用した値は残りません。グローバル変数を使用するオブジェクトの場合、グローバル変数に現在定義されている値が使用されます。

グローバル変数には、2 つのタイプがあります。

- システム・グローバル変数は、QMF アプリケーションにプリロードされています。つまり、その値は QMF アプリケーションをオープンするたびに再初期化されます。システム・グローバル変数は、DSQQW、DSQAO、DSQEC、DSQDC、および DSQCP という文字列で始まり

ます。システム・グローバル変数は、追加または削除することはできません。ただし、システム・グローバル変数のデフォルト値を編集することは可能です。

- ユーザー・グローバル変数はユーザーが定義します。ユーザー・グローバル変数には、文字 DSQQW、DSQAO、DSQEC、DSQDC、および DSQCP で始まる名前を除いて、任意の固有の名前を指定できます。ユーザー・グローバル変数値は、QMF セッションの終了時に保存されません。

「設定」ウィンドウの「グローバル変数」ページを使用して、ユーザー・グローバル変数を表示、追加、削除、および編集することができます。システム・グローバル変数の値も編集可能です。

### ユーザー・グローバル変数の指定

「設定」ウィンドウの「グローバル変数」ページを使用して、ユーザー・グローバル変数を表示、追加、削除、および編集します。

### このタスクについて

ユーザー定義グローバル変数を表示、追加、編集、および削除するには:

#### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「グローバル変数」を選択します。「グローバル変数」ページが開きます。
2. セッションに定義されたシステム・グローバル変数とユーザー・グローバル変数が、「変数」リスト・ボックスにリストされます。「名前」フィールドに、グローバル変数の名前がリストされます。「値」フィールドに、グローバル変数の現行値がリストされます。
3. 新しいユーザー定義グローバル変数を追加するには、「追加」ボタンをクリックします。「新規変数」ウィンドウが開きます。新しいユーザー・グローバル変数の名前を「変数名」フィールドに入力します。まだ使用されていない固有の文字の組み合わせを入力できます。ユーザー・グローバル変数の名前を、システム・グローバル変数の接頭部である **DSQQW**、**DSQAO**、**DSQEC**、**DSQDC**、および **DSQCP** で始めることはできません。「OK」をクリックします。ユーザー・グローバル変数がリストに追加され、これは現行の QMF セッション中に使用が可能です。変数の初期値を指定するには、次のステップで説明されているように「値」セルを編集してください。
4. ユーザー・グローバル変数の値を編集するには、変更するグローバル変数の「値」フィールドをクリックします。「値」フィールドにグローバル変数の新しい値を入力します。
5. ユーザー・グローバル変数を削除するには、「変数」リストから既存のユーザー・グローバル変数を選択し、「除去」ボタンをクリックします。ユーザー・グローバル変数が削除されます。
6. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
7. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
8. 「OK」をクリックして、「設定」ダイアログを閉じます。

## システム・グローバル変数値の編集

「設定」ダイアログの「グローバル変数」ページを使用して、任意のシステム・グローバル変数値を編集できます。

### このタスクについて

システム・グローバル変数値を編集するには:

#### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「グローバル変数」を選択します。「グローバル変数」ページが開きます。
2. システム・グローバル変数は「変数」リストに名前順にリストされています。システム・グローバル変数は、**DSQQW**、**DSQAO**、**DSQEC**、**DSQDC**、または**DSQCP** という接頭部で始まります。
3. 現行システム・グローバル変数値が「値」フィールドにリストされます。グローバル変数の値を編集するには、変更するシステム・グローバル変数の「値」フィールドをクリックします。「値」フィールドにシステム・グローバル変数の新しい値を入力します。
4. すべてのシステム・グローバル変数のデフォルト値を復元するには、「デフォルトの復元」をクリックします。
5. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
6. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

## ヘルプ設定

QMF for Workstation では、「設定」ウィンドウの「ヘルプ」ページを使用して、ヘルプ情報の表示方法に関するデフォルト値の指定、およびヘルプ・システムが使用する内部サーバーのインターフェースとポートの指定変更を行います。

### このタスクについて

Web ブラウザー・アダプター設定を変更するには:

#### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「ヘルプ」を選択します。
2. ヘルプ・システムは、「ヘルプ」ビューまたはブラウザーのどちらにでも情報を表示できます。ヘルプがブラウザーに表示される場合、ブラウザーは、組み込みブラウザーまたは外部のフル・ブラウザーのどちらでも使用できます。組み込みブラウザーがシステムでサポートされている場合、ヘルプはデフォルトでそれを使用してヘルプを表示します。常に外部のフル・ブラウザーを使用する場合は、ドロップダウン・リストから「外部ブラウザーを使用する」を選択します。
3. デフォルトで、ワークステーション・ウィンドウ用のコンテキスト・ヘルプは「ヘルプ」ビューに表示されます。ワークステーション・ウィンドウのコンテキスト・ヘルプを吹き出しヘルプで表示する場合は、ドロップダウン・リストから「ウィンドウのコンテキスト・ヘルプを吹き出しヘルプで開く」を選択します。
4. デフォルトで、ダイアログ用のコンテキスト・ヘルプは「ヘルプ」ビューに似たダイアログのトレイに表示されます。ダイアログのコンテキスト・ヘルプを吹き



出しヘルプで表示する場合は、ドロップダウン・リストから「ダイアログのコンテキスト・ヘルプを吹き出しヘルプで開く」を選択します。

5. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
6. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
7. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

### リモート・サーバー上のヘルプ・コンテンツの組み込み

ヘルプ・システムには、ブラウザーにヘルプの内容を提供する内部サーバーが組み込まれています。この設定ページを使用して、内部サーバーが使用するインターフェースおよびポートを変更します。

#### このタスクについて

これらの設定は、問題が発生し、デフォルト設定ではヘルプを表示できない場合にのみ変更してください。

ヘルプ・サーバーが使用するインターフェースおよびポートを変更するには:

#### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ダイアログが開きます。正符号をクリックすると、「ヘルプ」分岐が展開します。ツリーから「コンテンツ」を選択します。
2. 「リモート・インフォメーション・センターのヘルプ・コンテンツを組み込む」チェック・ボックスを選択します。「リモート・インフォメーション・センター」ウィンドウが使用可能になります。
3. 「追加」をクリックします。「新規インフォメーション・センターの追加」ウィンドウが開きます。
4. 「名前」フィールドに、サーバーが使用するローカル IP インターフェースの名前を指定します。
5. 「ホスト」フィールドに、サーバーが使用するローカル IP インターフェースのホストを指定します。
6. 「パス」フィールドに、サーバーが使用するローカル IP インターフェースの URL を指定します。
7. 「ポートの使用」を選択し、サーバーが listen する具体的なポートの番号を指定します。
8. 「OK」をクリックします。「新規インフォメーション・センターの追加」ウィンドウが閉じて、制御が「設定」ウィンドウに戻ります。「リモート・インフォメーション・センター」ウィンドウに新しいインフォメーション・センターが表示されます。
9. インフォメーション・センターを編集するには、「編集」をクリックします。「[インフォメーション・センター名] インフォメーション・センターの編集」ウィンドウが開きます。
10. インフォメーション・センターを削除するには、「削除」をクリックします。選択したインフォメーション・センターがリストから削除されます。

11. 特定のインフォメーション・センターのプロパティーを表示するには、「プロパティーの表示」をクリックします。「[インフォメーション・センター名]のプロパティー」ウィンドウが開き、名前、ホスト、パス、ポート、URL が表示されます。
12. ローカル IP インターフェースへのインフォメーション・センターの接続をテストするには、「接続のテスト」をクリックします。「接続のテスト」ダイアログが開き、テスト結果が表示されます。
13. インフォメーション・センターを削除せずに無効にするには、「使用不可」ボタンをクリックします。インフォメーション・センターが無効になり、「有効」列に表示される状況が無効に変わります。
14. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
15. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
16. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

## JDBC 設定

「設定」ウィンドウを使用して JDBC ドライバー情報を設定できます。

### このタスクについて

QMF アドミニストレーターは、ユーザーがすべてのデータ・ソースにアクセスするのに必要な JDBC ドライバー情報を配布します。ほとんどの場合、使用するアプリケーション・インターフェースがインストールされるときに、管理者は事前構成された JDBC ライブラリー設定ファイルをデプロイして、この情報を提供します。

上級者は、「設定」ウィンドウの「JDBC ライブラリー」ページを使用して JDBC ドライバーのロケーション情報を定義または変更することにより、アクセスされるデータベースのタイプ (DB2、Informix、Oracle など) ごとに JDBC ドライバー情報を指定できます。JDBC ドライバー・ロケーションが QMF からアクセス可能になっていることが必要です。QMF は JDBC ドライバー情報を保持します。新しいドライバーを追加、または既存ドライバーのプロパティーを変更するには、この指定プロセスを繰り返すだけで行うことができます。

JDBC ドライバー情報を定義するには:

### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択して「設定」ウィンドウを開きます。「JDBC ライブラリー」を選択します。「JDBC ライブラリー」ページが開きます。すべての JDBC ドライバーと、すでに設定済みの関連 JAR ファイルがリストされます。これらはライブラリーごとに編成されます。
2. リストされないデータベース・タイプを対象とした新規 JDBC ドライバー情報を追加するには、「ドライバーの追加」を選択します。「新規ドライバー・ライブラリーの追加」ウィンドウが開きます。
3. データベースのタイプごとの JDBC ドライバー情報は、ライブラリー単位で編成されます。ライブラリーの名前を「新規ライブラリー名の入力」フィールドに入力します。ライブラリーに含める JDBC 情報を表す名前を指定することをお勧めします。例えば、DB2 データベースにアクセスするための JDBC ドライバ

- ー情報を追加する場合は、ライブラリーに DB2 という名前を付けます。ただし、これは記述フィールドであり、あらゆるテキストを使用できます。
4. 使用するドライバー・クラスの実際の名前を「ドライバー・クラス名」フィールドに指定します。これは JDBC ドライバーの資料に記されています。例えば、com.ibm.db2.jcc.DB2Driver などです。
  5. オプション: データベースへの接続に利用可能な正しい形式の URL の汎用例を、「URL テンプレート」フィールドに指定します。例えば、DB2 データベースにアクセスするための JDBC ドライバー情報を追加する場合は、JDBC URL テンプレート jdbc:db2://host:50000/database を指定します。テンプレートに指定された汎用情報は、データ・ソースをリポジトリに追加するとき、およびリポジトリ接続を作成するときに表示されます。汎用情報を特定のデータベース情報に置き換えます。
  6. QMF for Workstation を使用している場合、JDBC ドライバー・ファイルのロケーション情報をライブラリーに追加します。「JAR の追加」をクリックします。「JARS を [libraryname] に追加」ウィンドウが開きます。追加したい JDBC ドライバー・ファイルを探して選択します。「開く」をクリックします。JDBC ドライバー・ファイルのロケーションが、選択した JDBC ライブラリーに保存されます。
  7. 「適用」をクリックします。指定した JDBC ライブラリー情報が保存されます。
  8. JDBC ドライバー情報には、以下のような変更を行うことができます。
    - JDBC ドライバー・ライブラリー情報を編集するには、リストから既存の JDBC ドライバー・ライブラリーを選択し、「編集」をクリックします。「ドライバー・ライブラリーの編集」ウィンドウが開き、ここで「ライブラリー名」、「ドライバー・クラス名」、および「JDBC URL テンプレート」フィールドを変更することができます。
    - QMF for Workstation を使用している場合、JDBC ドライバーを含むファイルの名前とロケーションを編集するには、JDBC ライブラリーに追加されたファイルのリストからファイルを選択し、「編集」をクリックします。「JAR URL の編集」ウィンドウが開きます。「JAR ロケーションの編集」フィールドに名前とロケーションを指定します。
    - JDBC ドライバー・ライブラリーを除去するには、既存の JDBC ドライバー・ライブラリーをリストから選択して、「除去」をクリックします。ライブラリーと、その中にある JAR ファイルがすべて除去されます。
    - QMF for Workstation を使用している場合、JDBC ドライバー・ライブラリーから JAR ファイルを除去するには、既存のファイルをリストから選択して、「除去」をクリックします。ファイルが除去されます。
  9. 「OK」をクリックします。JDBC ライブラリー情報が保存されます。「設定」ウィンドウが閉じます。Informix または SQL Server などのさまざまなデータベース・データ・ソースにアクセスするために使用される JDBC ドライバーのそれぞれのタイプについて、このプロセスを繰り返す必要があります。

## LOB 設定

「設定」ダイアログの「LOB」ページを使用して、LOB データの取り出しと保存を制御するオプションを指定します。

## このタスクについて

LOB データ (ラージ・オブジェクト・データ) は、データベース内の大規模なテキスト・オブジェクトまたはバイナリー・オブジェクトです。LOB は、テキストやイメージなどからなる大規模ストリングの場合があります。照会結果セットに大容量の LOB データが含まれている場合、処理リソースが大幅に逼迫する可能性があります。「LOB」設定ページには、リポジトリ・リソースの管理に使用できる LOB データ検索制限がいくつか含まれています。LOB データ設定を指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「LOB」を選択します。
2. 「可能な場合に LOB オプションをオーバーライドする」にチェック・マークを付けて、自分のリソース限界グループ用に QMF アドミニストレーターが指定した LOB オプションを、自分でオーバーライドできるようにします。管理者から、リソース限界グループに LOB オプションをオーバーライドする許可を与えられている必要があります。LOB オプションをオーバーライドする許可を持たない場合、このチェック・ボックスは使用できません。
3. 「LOB 検索オプション」ラジオ・ボタンを指定して、ラージ・オブジェクト・データ (LOB) を取り出す方法を指定します。以下の 4 つの選択項目があります。
  - 「LOB 列を使用不可にする」を選択して、LOB データの検索を無効にします。このオプションを選択すると、LOB データを含む表は照会できなくなります。
  - 「LOB データの検索を不可にする」を選択して、LOB データの検索を使用不可にすると共に、LOB データを含む表の他の列に対するアクセスは許可します。このオプションを選択すると、LOB データを含む表の照会が可能になり、LOB が入っている列を除くすべての列について結果データが戻されるようになります。
  - 「要求時に LOB データを検索する」を選択して、すべての LOB データを表から検索すること、しかし LOB データの選択された列だけを照会結果に表示することを指定します。

このオプションを選択すると、LOB データを含む表を照会することが可能になり、LOB オブジェクトを含むすべての列に対して結果データが戻されます。ただし、リソースを節約するために、検索された LOB データはファイルに保管されます。照会結果には、LOB データ・オブジェクトを指すポインター (<LOB LOCATOR>) が表示されます。ポインターをクリックすると、LOB データが表示されます。

ポインターをダブルクリックすることにより、データベースからデータをプルすることもできます。

- 「LOB データを自動的に検索する」を選択して、すべての LOB データを表から検索すること、および検索された LOB データを照会結果内に即時に表示することを指定します。

このオプションが選択された場合は、すべての LOB 列のすべての LOB データがデータベースからローカル・コンピューターにプルされます。実際の LOB データは、グリッドおよびレポートに表示されません。代わりに、LOB データへのポインターが表示されます。

このオプションが選択されると、ローカル・コンピューター上の大量のリソースが消費される可能性があります。

4. 「**LOB 保存オプション**」ラジオ・ボタンを使用して、ラージ・オブジェクト・データ (LOB) を保存できるかどうかを指定します。以下の 2 つの選択項目があります。
  - 「**LOB データを使用不可にする**」を選択して、LOB データのデータベース・データ・ソースへの保存を使用不可にします。
  - 「**LOB データを使用可能にする**」を選択して、LOB データのデータベース・データ・ソースへの保存を許可します。
5. LOB 列の最大サイズを「**LOB 列の最大サイズ**」フィールドに指定します。サイズはキロバイト単位で、2G (最大 LOB サイズ) まで指定できます。デフォルトは 0 で、最大サイズが存在しないことを指定します。最大サイズを超える LOB データがある表を照会すると、LOB データは戻されません (表示されません)。
6. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
7. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
8. 「**OK**」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

## ログ設定

「設定」ウィンドウの「ログ」ページを使用して、QMF 処理情報を追跡するためのログ・ファイルをアクティブにします。

### このタスクについて

ログ・ファイル情報はデバッグに役立ちます。報告書として提供されるようにすることも、ワークステーションの「出力」ビューに送信されるようにすることも可能です。

QMF セッションのログ・ファイル設定を指定するには:

### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「ログ」を選択します。
2. デバッグの目的でログ・ファイルをアクティブにして情報がワークステーションの「出力」ビューに送信されるようにするには、「ログを使用可能にする」にチェック・マークを付けます。このチェック・ボックスを選択すると、ログ・ファイル・オプション・フィールドが使用可能になります。どの情報を収集するかを指示するには、1 つ以上のログ・ファイル・オプションにチェック・マークを付けます。すべてのオプションに、チェック・マークを付けたままにしておくことをお勧めします。選択可能なログ・ファイル・オプションは、以下のとおりです。
  - ログ例外のスタック・トレースを印刷

- 報告書をログ・ファイルに印刷
  - ログ・クラスおよびメソッドの印刷
3. 追加情報を収集することを指定するには、「ログ・カテゴリの編集」をクリックします。「ロガー・カテゴリの編集」ウィンドウが開きます。収集する追加情報を選択します。「OK」をクリックします。
  4. 処理情報が報告書形式で提供されるようにするには、「報告書を使用可能にする」にチェック・マークを付けます。このチェック・ボックスを選択すると、報告書ファイル・オプション・フィールドが使用可能になります。どの情報を収集するかを指示するには、1 つ以上の報告書ファイル・オプションにチェック・マークを付けます。報告書ファイル・オプションのチェック・ボックスは以下のとおりです。
    - 報告書例外のスタック・トレースを印刷
    - 報告書時刻の印刷
    - 報告書クラスおよびメソッドの印刷
    - 「出力」ビューを自動的にアクティブにする
  5. 追加情報を収集することを指定するには、「報告書カテゴリの編集」ボタンをクリックします。「報告書カテゴリの編集」ウィンドウが開きます。収集する追加情報を選択します。「OK」をクリックします。
  6. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
  7. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
  8. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

## SMTP サーバー設定

「設定」ウィンドウの「SMTP」領域を使用して、使用可能な SMTP サーバーのリストを指定します。

### このタスクについて

通常使用される SMTP サーバーのパラメーターを「SMTP」領域で定義すると、これらのサーバーを使用して E メール・メッセージを送信する必要があるたびにユーザーがこれらのパラメーターを指定する必要はなくなります。例えば、SMTP サーバーのパスワードの有効期限が切れた場合、「SMTP」領域でパスワードを 1 回変更するだけで済み、この SMTP サーバーを使用するすべてのオブジェクトの許可情報を更新せずに済みます。

「SMTP」領域にリストされたサーバーは、以下の手順で使用できます。

- 「メールの送信」アクションのビジュアル・プロジェクトへの追加
- 「ファイル」 > 「送信先」コマンドを使用した、E メール・メッセージの送信
- MAIL TO プロシージャ・コマンドを使用した、E メール・メッセージの送信

SMTP サーバー設定を指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択して「設定」ウィンドウを開きます。ツリーから「E メール」を選択して、「SMTP」領域にナビゲートします。
2. 「サーバーの追加」をクリックして、新規サーバーをリストに追加します。

3. 「SMTP」ウィンドウで、SMTP サーバーの名前、アドレス、ポート番号などの SMTP サーバーのパラメーターを指定します。
4. オプション: SMTP サーバーで認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、「ユーザー」および「パスワード」フィールドにユーザー名とパスワードを指定します。
5. オプション: アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされる必要なキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。
6. 「OK」をクリックして「SMTP」ウィンドウを閉じてから、「適用」をクリックして設定の選択内容を保存します。

ヒント: SMTP 設定を一括して制御するには、「有効」チェック・ボックスを選択するかクリアします。

7. オプション: デフォルト設定を復元する必要がある場合は、「デフォルトの復元」をクリックします。
8. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

## エクスポート・アクションによって生成されたオブジェクトのディレクトリーの場所の設定

さまざまな QMF アクションから生成されたオブジェクトがローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システム上の特定の場所にエクスポートされるように、QMF で設定を行うことができます。

### 始める前に

QMF for Workstation を使用している場合は、ローカル・ファイル・システムにフォルダーを作成します。

QMF for WebSphere を使用している場合は、アプリケーション・サーバー・ファイル・システムにフォルダーを作成します。

「サーバー・サイド・ファイル・システム」の設定を行うときに、これらのいずれかのフォルダーを指定します。

### このタスクについて

このタスクでは、生成されたオブジェクトがエクスポートされる場所を (設定を使用して) 指定する方法について説明します。

エクスポート・ディレクトリーの設定を行うには、以下のようになります。

### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択し、ツリーから「サーバー・サイド・ファイル・システム」を選択します。
2. 「サーバー・ファイル・システムにアクセスできるようにする」チェック・ボックスを選択します。

3. 生成されたオブジェクトがエクスポートされる場所を示すパスを「ルート出力ディレクトリー」フィールドに入力します。

**EXPORT** プロシージャ、スケジュール・タスク (オブジェクトのコピーまたは実行)、またはイベント・アクション (「PDF にエクスポート」および「Excel にエクスポート」など) によってデータおよびオブジェクトが生成されると、それらは上記で指定したパスにエクスポートされます。

指定するディレクトリーは、ローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システムに存在していなければなりません。

4. パスを「ルート入力ディレクトリー」フィールドに入力し、**dynamart** ソース・ファイルのルート・ディレクトリーのパスを指定します。

注: 「ルート入力ディレクトリー」パスは指定する必要があります。指定しない場合は設定が不正確になるため、サーバー・サイド・ファイル・システムを使用する **EXPORT** はエラーになります。

5. 「適用」をクリックして、設定を保存します。
6. 設定をデフォルト値に復元するには、「デフォルトの復元」をクリックします。
7. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

## dynamart ソース・ファイルのルート・ディレクトリーの場所の設定

dynamart ソース・データ・ファイルが格納されるルート・ディレクトリーの場所を指定できます。

### このタスクについて

データ・ファイルを **dynamart** として保存すると、そのファイルへのリンクが **dynamart** 内に保存されます。この **dynamart** を開くと、QMF によって、リンクされたソース・ファイルからデータが再ロードされ、ソース・ファイルが変更または置換されていた場合は、結果セットが更新されます。

**dynamart** にリンクされているデータ・ファイルがローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システム上の特定の場所に格納されるように、「サーバー・サイド・ファイル・システム」設定を指定することができます。

注: 「**dynamart** 設定」ウィンドウでソース・データ・ファイルを変更したり、データ更新を使用不可に設定することができます。

### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択し、設定のツリーから「サーバー・サイド・ファイル・システム」を選択します。
2. 「サーバー・ファイル・システムにアクセスできるようにする」チェック・ボックスを選択します。
3. **dynamart** ソース・ファイルのルート・ディレクトリーのパスを「ルート入力ディレクトリー」フィールドに入力します。



注: 指定するディレクトリーは、ローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システムに存在していなければなりません。

4. 「適用」をクリックして、設定を保存します。
5. 設定をデフォルト値に復元するには、「デフォルトの復元」をクリックします。
6. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

## サード・パーティー・ライブラリーの設定

「設定」ウィンドウの「サード・パーティー・ライブラリー」ページを使用して、QMF が必要とするサード・パーティー・ソフトウェアのロケーションを指定します。

### このタスクについて

サード・パーティー・ライブラリー設定を指定するには:

#### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「サード・パーティー・ライブラリー」を選択します。
2. QMF に対してロケーションが定義されたサード・パーティー・ソフトウェアの名前、パッケージ名、ロケーションがリストされます。ほとんどの場合、サード・パーティー・ライブラリーのロケーション情報は、QMF のインストール時に指定されます。
3. サード・パーティー・ソフトウェアのロケーション情報をさらに追加するには、「追加」をクリックします。「新規サード・パーティー・ライブラリー」ウィンドウが開きます。「パス」フィールドに、ソフトウェアのパスを指定します。該当する場合は、「パッケージ (オプション)」フィールドにパッケージ名を指定します。「OK」をクリックします。ソフトウェアのパスが「サード・パーティー・ライブラリー」リストに追加されます。制御が「設定」ウィンドウに戻ります。
4. 定義済みサード・パーティー・ソフトウェアのロケーション情報を編集するには、「編集」を選択します。「ライブラリーの編集」ダイアログが開きます。「パス」フィールドで、選択されたソフトウェアのパスを変更できます。「パッケージ (オプション)」フィールドで、パッケージ名を変更できます。「OK」をクリックします。行った変更が適用されます。制御が「設定」ウィンドウに戻ります。
5. サード・パーティー・ライブラリー情報を削除するには、「サード・パーティー・ライブラリー」リスト内のサード・パーティー・ライブラリーをクリックしてから、「除去」をクリックします。そのサード・パーティー・ライブラリー情報がリストから除去されます。
6. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
7. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
8. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

## ビジュアル・デザイナー設定の指定

QMF for Workstation では、ビジュアル・プロジェクトの作成に反映される設定を指定するには、「設定」ウィンドウの「ビジュアル・デザイナー」ページを使用します。

### このタスクについて

ビジュアル・プロジェクトの作成に影響を与える設定を指定するには:

### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「ビジュアル・デザイナー」を選択します。
2. 「ビジュアル・デザイナー・ルーラー単位」ラジオ・ボタンの 1 つをクリックして、「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブ内のエディター・ウィンドウ上に張られるルーラーに使用されるデフォルト単位を指定します。「ピクセル」、「インチ」、「センチメートル」から選択できます。
3. 「&DATE 値のフォーマット」ドロップダウン・リストから、標準報告書の日付値のフォーマット・スキーマを選択します。
4. 「&TIME 値のフォーマット」ドロップダウン・リストから、標準報告書の時刻値の形式スキーマを選択します。
5. ビジュアル・プロジェクトが実行されるたびにグローバル変数値をリセットしてデフォルト値に戻すには、「ランタイム・モードに入るときにグローバル変数をリセット」チェック・ボックスを選択します。
6. ツリーで「ビジュアル・デザイナー」を展開し、「フォント」を選択します。
7. 別のフォント・セットをビジュアル・ダッシュボードに使用できるようにするには、「検索ディレクトリー」フィールドでカスタム・フォント・セットへのパスを指定し、「関連の最新表示」をクリックします。
8. ツリーから「プロジェクト・エクスプローラー」を選択します。
9. デザイン・エディターでアクションを取り消すことができる特定の回数を「取り消し限界」フィールドに指定します。値「0」は、アクションを取り消すことができる回数に制限がないことを示します。
10. 「設定の名前変更」ラジオ・グループで、デザイン・エディターでオブジェクトの名前変更を試行する際に、確認のためのプロンプトを出すかどうかを指定します。選択可能なオプションは以下のとおりです。
  - 常時プロンプトを出す - オブジェクトの名前を変更しようとするとき必ず確認が求められます。
  - 参照時にプロンプトを出す - オブジェクトが他のオブジェクトを参照しているときのみ確認が求められます。
  - プロンプトを出さない - オブジェクトの名前を変更しようとしても確認は求められません。
11. 「設定の削除」ラジオ・グループで、デザイン・エディターでオブジェクトを削除しようとするときに、確認を求めるかどうかを指定します。選択可能なオプションは以下のとおりです。
  - 常時プロンプトを出す - オブジェクトを削除するときに必ず確認が求められます。

- 参照時にプロンプトを出す - オブジェクトが他のオブジェクトを参照しているときにのみ確認が求められます。
  - プロンプトを出さない - オブジェクトを削除するときに確認は求められません。
12. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
  13. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
  14. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

---

## 「ワークスペース」ビューの検討

アクセスできるすべてのデータ・ソースおよびオブジェクトは、QMF アドミニストレーターによって定義済みの 1 つ以上のワークスペースに入れられます。

### このタスクについて

アクセスできる各ワークスペースは、「ワークスペース」ビューにリストされます。「ワークスペース」ビューからは、多くの照会機能と報告書作成機能を実行できます。

## ワークスペースの内容のディスカバー

「ワークスペース」ビューは、ワークスペースの内容を表示します。

### このタスクについて

ワークスペースの内容をディスカバーするには:

#### 手順

1. ワークスペースを開くには、「ワークスペース」ビューでワークスペース名をクリックします。ワークスペースの内容がツリー構造で表示されます。
2. ノード名の左側にある正符号 (+) をクリックして、ツリーのノードを展開できます。ワークスペースの内容が見つかるまでフォルダーやディレクトリーを展開し続けます。ワークスペース内に多数のオブジェクト・タイプがリストされます。オブジェクトのタイプは、固有のアイコンで識別されます。
3. 「ワークスペース」ビュー内のどこか、またはノード内にリストされているオブジェクトを右クリックすると、ポップアップ・メニューが開き、使用可能な機能のいずれかを選択できます。
4. ワークスペース内で構成されている各データ・ソースがリストされ、データ・ソース・アイコンで識別されます。データ・ソースを展開するには、データ・ソース名の左側にある正符号 (+) をクリックします。「ログイン」ウィンドウが開きます。このウィンドウで、データ・ソースへのログインに使用するユーザー ID とパスワードを指定してください。
5. リストされたデータ・ソースごとに、そのデータ・ソースの構成方法に応じて以下の 1 つ以上のフォルダーがあります。
  - データベース・フォルダーには、データ・ソース上のネイティブ・オブジェクト (プロシージャ、スキーマ、および表) が含まれます。

- **QMF** カタログ・フォルダーは、QMF カタログに含まれるオブジェクト (書式、照会、プロシージャー、およびスキーマ) をリストします。このフォルダーは、QMF カタログにアクセスするようにデータ・ソースが構成されている場合にのみ組み込まれます。
  - **OLAP** フォルダーは、使用可能な OLAP キューブ・モデルをリストします。このフォルダーは、OLAP 照会を使用可能にするようにデータ・ソースが構成されている場合のみ組み込まれます。
6. 「ワークスペース」ビューにリストされているオブジェクトを開くには、そのオブジェクトをダブルクリックします。ワークスペース内にリストされているオブジェクトをダブルクリックすると、デフォルト・アクションの設定内容に応じて、オブジェクトが実行されるか開きます。オブジェクトのデフォルト・アクションを設定するには、「設定」ウィンドウの「一般」ページにある「オブジェクトのデフォルト・アクション」を使用します。「オブジェクトのデフォルト・アクション」は、ビジュアル報告書およびダッシュボード以外のすべてのオブジェクトに対するアクションを制御します。
  7. ご使用のユーザー ID に権限があれば、ワークスペースにフォルダーを追加したり、フォルダーにオブジェクトを移動して、要件に応じて情報を編成することができます。QMF アドミニストレーターは、フォルダーの追加やオブジェクトの移動などのワークスペースの内容を編集する権限をどのユーザーに与えるかを指定します。

## 「ワークスペース」メニュー・コマンド

「ワークスペース」ビューから、ノード、フォルダー、またはオブジェクトを右クリックして、ポップアップ・メニューを開くことができます。メニュー選択は、選択した内容によって異なります。

**新規** ポップアップ・メニューを開きます。ここで、オブジェクトや他のリポジトリ項目の作成に役立つ数多くのウィザードの中から 1 つを起動することができます。

**開く** 「ワークスペース」ビューで選択したオブジェクトを開きます。表が実行され、結果がエディター・ウィンドウに返されます。

**ファイルの場所**

以下に保存されているオブジェクトを開くことを選択できるメニューを表示します。

- リポジトリ
- ファイル

**開く** デフォルト・エディター、表エディター、表ビューアー、またはビジュアル照会エディターを使用して、ワークスペースにおいてアクセスできる任意のデータベース表が開かれます。

**実行** 「ワークスペース」ビューで選択したオブジェクトを実行します。オブジェクトの実行結果がエディター・ウィンドウに戻されます。

**形式を指定して実行**

「ワークスペース」または「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで選択したビジュアル・プロジェクトを、指定したレンダリング・モードで実行します。

#### 名前フィルターの設定

「名前別フィルター」ウィンドウを開きます。このウィンドウで、「ワークスペース」ビューで選択したデータ・ソースに関する、リストしたいオブジェクトの名前を指定できます。パーセント記号 (%) を使用すると、すべてのオブジェクトが組み込まれます。

#### ユーザー情報の設定

「名前別フィルター」ウィンドウを開きます。このウィンドウで、「ワークスペース」ビューで選択したデータ・ソースに関する、リストしたいオブジェクトの名前を指定できます。パーセント記号 (%) を使用すると、すべてのオブジェクトが組み込まれます。

#### 名前変更

「ワークスペース」ビューで選択したオブジェクトまたはフォルダーの名前を変更します。

#### 削除

「ワークスペース」ビューで選択したオブジェクトまたはフォルダーを削除します。

#### コピー

「ワークスペース」ビューで選択したオブジェクトまたはフォルダーをコピーして、クリップボードに書き込みます。

#### 貼り付け

オブジェクトまたはフォルダーをクリップボードから、「ワークスペース」ビューで選択した親フォルダーまたはノードに貼り付けます。

#### リンクの貼り付け

現在クリップボードにあるオブジェクトまたはフォルダーのパスを、「ワークスペース」ビューで選択した親フォルダーまたはノードに貼り付けます。

#### お気に入りに追加

選択したオブジェクトを「パーソナル」ビューの「お気に入り」ノードに追加します。

#### スタートアップに追加

選択したオブジェクトを「パーソナル」ビューの「スタートアップ」ノードに追加します。

#### エクスプローラー

エクスプローラー・フォーマットでフォーマット設定されている「エディター」ビューでウィンドウを開きます。オブジェクト、フォルダー、およびノードは、このウィンドウでフィルターに掛けることができます。

#### 最新表示

現在表示されている「ワークスペース」ビューの内容を最新表示します。選択されているノードとは無関係に、「ワークスペース」ビューが完全に最新表示されます。

#### プロパティー

現在選択されているオブジェクト、フォルダー、データ・ソース、またはノードの「プロパティー」ウィンドウを開きます。「プロパティー」ウィンドウには、選択した項目に関する具体的な情報が示されます。

リポジトリに表示

「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで選択されたオブジェクトを参照するすべてのオブジェクトが示されたダイアログが表示されます。

## ワークスペース・フォルダーの管理

ご使用のユーザー ID に権限があれば、ワークスペースにフォルダーを追加したり、フォルダーにオブジェクトを移動して、要件に応じて情報を編成することができます。

### このタスクについて

QMF アドミニストレーターは、フォルダーの追加やオブジェクトの移動などのワークスペースの内容を編集する権限をどのユーザーに与えるかを指定します。

リポジトリ・フォルダーを管理するには:

### 手順

1. 「ワークスペース」ビューから、新しいフォルダーの親にするノードまたは既存のフォルダーを右クリックします。ポップアップ・メニューから、「新規」 > 「フォルダー」を選択します。「新規フォルダーの作成」ウィンドウが開きます。
2. 新しいフォルダーの名前を「名前」フィールドに入力します。
3. 「親フォルダー」フィールドで新規フォルダーの親フォルダーを指定します。
4. オプションで、「コメント」フィールドにフォルダーについて説明するコメントを入力することができます。フォルダーの「プロパティ」を表示すると、追加されたコメントを見ることができます。
5. 「終了」をクリックして、フォルダーを追加します。
6. フォルダーを削除するには、「ワークスペース」ビュー内のフォルダーを右クリックします。ポップアップ・メニューから、「削除」を選択します。フォルダーとそのすべてのコンテンツが削除されます。
7. フォルダーの名前を変更するには、「ワークスペース」ビュー内のフォルダーを右クリックします。ポップアップ・メニューから「名前変更」を選択します。フォルダーが名前変更されます。

## データ・ソース・オブジェクトのフィルター処理

QMF for Workstation を使用している場合、「ワークスペース」ビューのデータ・ソースとして表示されるオブジェクトに対して、名前でフィルターを掛けることができます。

### このタスクについて

データ・ソース・オブジェクトをフィルターに掛けるには:

### 手順

1. 「ワークスペース」ビューから、フィルターに掛けるデータ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューから「名前フィルターの設定」を選択します。「名前フィルターの設定」ウィンドウが開きます。

2. 「オブジェクト所有者」フィールドに、データ・ソースを開いたときに「ワークスペース」ビューに含めるオブジェクトを所有する ID を指定します。ID の正しい形式で所有者を指定する必要があります。このフィールドでは、ワイルドカードを指定したパターンを使用して、複数の所有者を一致させることができます。
3. 「オブジェクト名」フィールドに、データ・ソースを開いたときに「ワークスペース」ビューに含めるオブジェクトに名前を付ける ID を指定します。識別子の正しい形式で名前を指定する必要があります。複数の名前に一致する突き合わせパターンを指定することができます。
4. 「OK」をクリックして、「名前フィルターの設定」ウィンドウを閉じます。制御が「ワークスペース」ビューに戻ります。「オブジェクト所有者」および「オブジェクト名」フィールドで指定した基準に合うオブジェクトのみが組み込まれます。

## ワークスペース・オブジェクトへのリンクの作成

「ワークスペース」ビューにリストされている任意のオブジェクトへのリンクを設定できます。

### このタスクについて

リンクは、複数のオブジェクトを実際にコピーせずに 1 つのフォルダーに移動する場合に便利です。

ワークスペース・オブジェクトへのリンクを作成するには:

### 手順

1. 「ワークスペース」ビューでオブジェクトを右クリックします。ポップアップ・メニューから「コピー」を選択します。オブジェクトと選択されたオブジェクトのパスがクリップボードに保存されます。
2. オブジェクトへのリンク情報の親フォルダーにするフォルダーを右クリックします。ポップアップ・メニューから「リンクの貼り付け」を選択します。オブジェクトへのリンクが「ワークスペース」ビューにリストされます。
3. オブジェクト・リンクを削除するには、「ワークスペース」ビュー内のリンクを右クリックします。ポップアップ・メニューから、「削除」を選択します。リンクが削除されます。
4. リンクの名前を変更するには、「ワークスペース」ビュー内のリンクを右クリックします。ポップアップ・メニューから「名前変更」を選択します。オブジェクト・リンクが名前変更されます。

## リポジトリ・オブジェクトへのリンクの作成

アクセスできるリポジトリ内にあるオブジェクトへのリンクを設定できます。

### このタスクについて

リンクは、オブジェクトをワークスペースにコピーせずにオブジェクトにアクセスする場合に便利です。

リポジトリ・オブジェクトへのリンクを作成するには:

## 手順

1. 「ワークスペース」ビュー内のどこかを右クリックし、ポップアップ・メニューを開きます。「新規」 > 「その他」 > 「リポジトリ」 > 「リンク」を選択します。「リポジトリ・オブジェクトへの新規リンクの作成」ウィザードが開きます。
2. 「名前」フィールドに、リンク情報の名前を入力します。これは、「ワークスペース」ビューにリストされる名前です。
3. 「親フォルダー」フィールドに、親フォルダーの、フォルダー名を含むパスを指定します。「参照」ボタンを使用してフォルダーを検索できます。
4. 「リンクされたオブジェクト」フィールドに、リンクを作成するオブジェクトを指定します。「参照」ボタンを使用してオブジェクトを検索できます。
5. 「コメント」フィールドに、コメント情報として使用される任意のテキストを入力します。リンクの「プロパティ」ビューにコメント情報が表示されます。
6. 「終了」をクリックします。「リポジトリ・オブジェクトへの新規リンクの作成」ウィザードの処理が完了します。

## ワークスペース・オブジェクトのプロパティの表示

「プロパティ」ダイアログには、「ワークスペース」ビューから選択されたオブジェクトのプロパティ値が表示されます。

### このタスクについて

提供される情報は、選択されたオブジェクトによって異なります。オブジェクト、フォルダー、データ・ソース、およびワークスペースはすべて、表示可能なプロパティ値を持っています。また、一部のプロパティ値は「プロパティ」ダイアログから変更することもできます。

プロパティ値を表示または変更するには:

### 手順

1. リポジトリ内の項目を右クリックし、ポップアップ・メニューから「プロパティ」を選択します。「プロパティ」ウィンドウが開きます。
2. 「プロパティ」ウィンドウの内容は、選択された項目のタイプによって異なります。ワークスペース内のすべての項目について、情報ページを使用できます。このページには、ワークスペース・オブジェクトに関する詳細情報が示されます。このページでコメント情報を追加したり編集したりできます。
3. ワークスペースに含まれるデータ・ソースについては、追加のプロパティ・ページを使用できます。以下のいずれか 1 つをツリーから選択します。
  - 「接続パラメーター」：データ・ソースに接続するために使用される接続情報を表示または編集するために使用します。
  - 「プラグイン」：データ・ソースに対してアクティブ化されているプラグインを表示または変更するために使用します。
  - 「リソース限界」：データ・ソースに対して定義されているリソース限界を表示、定義、または編集するために使用します。



- 「ログイン・マッピング」：データ・ソースに対して定義されているログイン・マッピング ID を表示、定義、または編集するために使用します。(QMF for Workstation のみ)
  - 「セキュリティ」：データ・ソースが「内部」または「LDAP」セキュリティ・オプションの制御下にある場合、それにアクセスできるユーザーとグループを表示、定義、または変更するために使用します。さらに、各ユーザーまたはグループに付与されている許可レベルを表示または変更することもできます。(QMF for Workstation のみ)
4. プロパティ値についてすべてのデフォルト値を復元するには、「デフォルトの復元」をクリックします。
  5. プロパティ値に行った変更をインプリメントするには、「適用」をクリックします。
  6. 「OK」をクリックして、「プロパティ」・ボックスを閉じます。

## ワークスペースの内容の最新表示

ワークスペースの内容を最新表示することができます。最新表示により、すべてのリポジトリ・オブジェクトは最新のものに更新されます。

### このタスクについて

オブジェクトを開くたびに、ワークスペースが自動的に最新表示されます。別のユーザーがアプリケーションの別のセッションから同じワークスペースにオブジェクトを保存した場合は、ワークスペースを最新表示する必要があります。「ワークスペース」ビューの内容を以下のいずれかの方法で最新表示できます。

- 「ワークスペース」ビューのどこかを右クリックします。メニューから「最新表示」を選択します。
- 「ワークスペース」ビューのツールバーから、「ワークスペースを最新表示」ボタンを選択します。

## ワークスペース・オブジェクトの移動

QMF for Workstation を使用している場合、マウスを使用して、「ワークスペース」ビューにリストされているオブジェクトとフォルダーをドラッグできます。

### このタスクについて

ワークスペース・オブジェクトを移動するには:

#### 手順

1. 「ワークスペース」ビューのオブジェクトをクリックします。
2. マウス・ボタンを押したまま、項目をターゲットの場所にドラッグします。マウス・ボタンを離します。ポップアップ・メニューが開きます。
3. 以下のいずれかを選択します。
  - 「ここへコピー」：オブジェクトをターゲットの場所へコピーします。コピーが行われます。オリジナルはそのまま残ります。
  - 「ここへ移動」：オブジェクトをターゲットの場所へ移動します。オリジナル・コピーが新たな場所へ移動します。

- 「ここにリンクを作成」：オブジェクトへのリンクを作成します。

## コンテンツをワークスペースに追加

ワークスペースの作成後に、コンテンツをワークスペースに追加します。

### このタスクについて

ワークスペースからデータ・ソースにアクセスする場合は、データ・ソースにアクセスするのに必要な情報を追加しなければなりません。ワークスペースからオブジェクトを使用可能にする場合は、オブジェクトにアクセスするのに必要な情報を追加しなければなりません。データ・ソースとオブジェクトの両方とも、この情報をリンクまたはオフライン項目として作成できます。

ワークスペースにコンテンツを追加するには、以下のようにします。

### 手順

1. ワークスペースに追加できるデータ・ソースおよびオブジェクトを以下のいずれかの方法でディスカバーできます。
  - 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューを開きます。「リポジトリ・エクスプローラー」に、リポジトリの完全な内容が表示されます。
  - ユーザー ID に基づいてアクセス権のある他のワークスペースを開きます。
2. 新しいワークスペースに追加するデータ・ソースまたはオブジェクトを選択します。データ・ソースまたはオブジェクトを新しいワークスペースに追加するには、ご使用のユーザー ID にそのデータ・ソースまたはオブジェクトへのアクセス権がなければなりません。
3. 以下のいずれかの方法でデータ・ソースまたはオブジェクトをワークスペースに追加できます。
  - マウス・ボタンを押したまま、データ・ソースまたはオブジェクトを新規ワークスペースにドラッグします。マウス・ボタンを放すと、ポップアップ・メニューが開きます。データ・ソースまたはオブジェクトへのリンクを作成するには、「ここにリンクを作成」を選択します。データ・ソースまたはオブジェクトをワークスペースに実際にコピーするには、「オフライン項目の作成」を選択します。
  - データ・ソースまたはオブジェクトを右クリックします。ポップアップ・メニューから「コピー」を選択します。データ・ソースまたはオブジェクトの場所がクリップボードにコピーされます。データ・ソースまたはオブジェクトの追加先にするワークスペースを右クリックします。データ・ソースまたはオブジェクトへのリンクを作成するには、ポップアップ・メニューから「リンクの貼り付け」を選択します。データ・ソースまたはオブジェクトをワークスペースに実際にコピーするには、「オフラインとして貼り付け」を選択します。
4. 選択内容に応じて、以下のようにワークスペースからデータ・ソースまたはオブジェクトにアクセスするのに必要な情報が追加されます。
  - 「ここにリンクを作成」または「リンクの貼り付け」を選択した場合は、ワークスペース内にデータ・ソースまたはオブジェクトへのリンクが作成されます。

- 「オフライン項目の作成」または「オフラインとして貼り付け」を選択した場合は、データ・ソースまたはオブジェクトがワークスペース内にコピーされます。データ・ソースまたはオブジェクトのコピーには長時間かかることがあります。しかし、オフライン項目を使用すると、実際にデータ・ソースにアクセスすることなく、データ・ソースのオブジェクトを操作することができます。これにより、時間とリソース使用量を節約できます。

## 追加ワークスペースの作成

ご使用のユーザー ID がワークスペースがあるリポジトリに対する完全なセキュリティ権限を付与されている場合は、「ワークスペース」ビュー内に追加のワークスペースを作成できます。

QMF 管理者は、リポジトリの作成時にワークスペースの追加のためのユーザー許可を割り当てます。新しいワークスペースの作成後に、データ・ソース情報とオブジェクトをワークスペースに追加できます。

### ユーザーとしてのワークスペースの追加

ご使用のユーザー ID に完全なセキュリティ権限がある場合、別のワークスペースをリポジトリに追加できます。

#### このタスクについて

ユーザーとしてワークスペースを追加するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。「新規」ウィンドウが開きます。「リポジトリ」フォルダーを展開します。「ワークスペース」を選択します。「新規ユーザー・ワークスペースの作成」ウィザードが開きます。
2. 「名前」フィールドに新規ワークスペースの名前を入力します。
3. 「コメント」フィールドに、ワークスペースについて説明するコメントを入力します。
4. 「終了」をクリックします。ワークスペースの作成後、ワークスペースで使用可能なデータ・ソース情報とデータ・ソース・オブジェクトを指定します。

---

## 「パーソナル」ビューでの作業

「パーソナル」ビューを使用すれば、頻繁に使用されるオブジェクトや最近使用されたオブジェクトに素早くアクセスできます。さらに、アプリケーションの開始時に自動的に開かれるオブジェクトのリストも表示されます。

#### このタスクについて

「パーソナル」ビューには、以下のフォルダーが含まれます。

- 「最近使用したオブジェクト」：このフォルダーには、ユーザーが最近開いたすべてのオブジェクトのリストが含まれます。このリストには、アプリケーションがデータを設定します。
- 「お気に入り」：このフォルダーには、ユーザーのお気に入りオブジェクトのリストが含まれます。オブジェクトを「お気に入り」フォルダーに追加するには、

「ワークスペース」ビューまたは「リポジトリ・エクスプローラー」ビューでオブジェクトを右クリックし、「お気に入りに追加」を選択します。

- 「スタートアップ」：このフォルダーには、「ユーザー」パースペクティブの開始時に自動的に開くオブジェクトのリストが含まれます。オブジェクトを「スタートアップ」フォルダーに追加するには、「ワークスペース」ビューまたは「リポジトリ・エクスプローラー」ビューでオブジェクトを右クリックし、「スタートアップに追加」を選択します。

## 「パーソナル」ビュー・メニュー・コマンド

「パーソナル」ビューから、ノード、フォルダー、またはオブジェクトを右クリックすると、ポップアップ・メニューを開くことができます。メニュー選択は、選択した内容によって異なります。

お気に入りから除去

「お気に入り」ノードから選択したオブジェクトまたはフォルダーを除去します。

お気に入りの名前を変更

「お気に入り」ノード内で選択したオブジェクトまたはフォルダーの名前を変更します。これにより、オブジェクトまたはフォルダーの元の名前は変更されず、「パーソナル」ビューでの表示のみが変更されます。

スタートアップから除去

選択したオブジェクト、フォルダー、またはノードを「スタートアップ」ノードから除去します。

スタートアップの名前を変更

「スタートアップ」ノード内で選択したオブジェクト、フォルダー、またはノードの名前を変更します。これにより、オブジェクト、フォルダーまたはノードの元の名前は変更されず、「パーソナル」ビューでの表示のみが変更されます。

---

## 第 3 章 データへのアクセス

BI コンテンツの作成に使用するデータは、データベース内のエンタープライズ情報システムにあります。したがって、BI コンテンツ (報告書、ビジュアル・ダッシュボード、照会など) の作成を開始する前に、作成しようとしているコンテンツの「未加工素材」となるデータにアクセスする必要があります。

---

### リポジトリおよびデータ・ソース

QMF では、リポジトリを、データ・ソースおよびアプリケーション・オブジェクトの中央ストレージとして使用します。

#### リポジトリ

QMF は、パーソナル・リポジトリおよび共有リポジトリをサポートします。パーソナル・リポジトリは個々のユーザーにローカルなものです。共有リポジトリはデータベース上に存在し、複数のユーザーからアクセス可能です。

QMF のユーザーがアプリケーションで作業を行うには、リポジトリに接続する必要があります。ユーザーは複数の QMF リポジトリを持つことができ、各リポジトリには異なるデータを入れることができます。

ユーザーは、Web サービスまたはネットワーク接続を使用して、共有リポジトリに間接的にアクセスできます。

#### データ・ソース

データ・ソースは、データベースにアクセスするための接続情報を格納するエンティティです。リポジトリでは、データ・ソースは、それらが表すデータベースのタイプで分類されます。

##### リレーショナル

データは関連する表に格納されます。各表は、複数の列および行から構成されます。

##### マルチディメンション

データはキューブ構造に格納されます。キューブの各ディメンションは、特定タイプのデータを表しています。このタイプのデータベースは、リレーショナル・データベースより複雑であり、より精緻な照会を実行する機会が提供されます。

**Hive** データは Apache Hive™ データウェアハウスに保管されます。この種のストレージは、SQL に非常に類似した言語である HiveQL を利用して、大量のデータを集計、照会、および分析するために設計された Apache Hadoop™ ソフトウェア・フレームワークで使用されます。

**仮想** データは仮想表に格納されます。この表は、さまざまなソースから情報を収集し、それを単一のデータベースとして提示します。仮想データベースはオ

リジナル・データベースからデータをキャッシュするため、ユーザーはオリジナルのデータ・ソースを個別に参照することなく、このデータベースで作業を行うことができます。

#### **QMF データ・サービス**

データは QMF データ・サービス・サーバー上の表に保管されます。

#### **フォルダー**

データはローカル・ファイル・システムに保管されます。

使用するデータ・ソースのタイプにかかわらず、アプリケーションは、どのデータ・ソースから取得したデータもフラット・テーブルとして処理します。

---

## パーソナル・リポジトリの作成

QMF ユーザーは、独自のパーソナル・リポジトリを作成できます。パーソナル・リポジトリは個々のユーザーに対してローカルで、通常はそのユーザーだけが使用します。ユーザーの代わりに管理者がパーソナル・リポジトリを作成することもできます。

### このタスクについて

パーソナル・リポジトリは単一ユーザーのためであり、QMF アプリケーション・インターフェースを実行しているワークステーション (サーバー) の個人設定ディレクトリーに格納されます。

パーソナル・リポジトリは、セキュリティーなどのリポジトリの拡張機能をいづれもサポートしません。

パーソナル・リポジトリを作成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。「リポジトリ」フォルダーを展開し、「パーソナル・リポジトリ」を選択して、「次へ」をクリックします。「新規パーソナル・リポジトリの作成」ウィンドウが開きます。
2. 「名前」フィールドにリポジトリの名前を入力します。
3. オプションで、リポジトリを説明するコメントを「コメント」フィールドに指定することができます。
4. 「即時に接続」チェック・ボックスを選択すると、リポジトリにただちに接続されます。
5. 「終了」をクリックします。パーソナル・リポジトリは、ワークステーションの個人設定ディレクトリーに作成されて保存されます。自分のパーソナル・リポジトリにデータを設定する責任は、各ユーザーにあります。ユーザーは、自分のパーソナル・リポジトリにオブジェクトを保存できます。

---

## リポジトリへの接続

QMF を使用してリポジトリにアクセスしてリポジトリ・オブジェクトを実行するためには、リポジトリに接続する必要があります。

## このタスクについて

リポジトリは、QMF 管理者によって作成された中央ストレージ域です。この領域は、照会、書式、報告書などのオブジェクトを保存できる場所です。また、アクセスする必要のあるデータ・ソースへの接続に必要な情報を、QMF が探す場所でもあります。「リポジトリ接続」ビューには、現在選択可能なリポジトリ接続すべてがリストされます。

QMF を開くたびに、最後に使用したリポジトリへの接続が試行されます。「リポジトリ接続」ビューからリポジトリ接続情報を選択すると、いつでも別のリポジトリに接続できます。また、別のユーザー ID およびパスワードを使用しても、別のリポジトリへの接続を選択できます。

リポジトリに接続するには:

### 手順

1. 「リポジトリ接続」ビューを開きます (ワークステーション・ウィンドウに表示されていない場合)。「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「リポジトリ接続」を選択します。「リポジトリ接続」ビューが開きます。
2. 接続先リポジトリのリポジトリ接続名を右クリックします。
3. 「接続」を選択します。これで、リポジトリに接続されます。

### 次のタスク

アドミニストレーターは、QMF のユーザーごとにリポジトリ接続を作成します。必要であれば、QMF for Workstation ユーザーそれぞれがリポジトリ接続を作成することも可能です。リポジトリ接続の作成は、拡張機能です。ほとんどのユーザーは、リポジトリ接続を作成することはないでしょう。ただし、上級者であれば以下のような状況でリポジトリ接続を作成することもできます。

- 目的のリポジトリが「リポジトリ接続」ビューにリストされない場合は、「新しいリポジトリ接続の作成」ウィザードを使用して新規リポジトリ接続を作成できます。
- 使用しているバージョン用の接続情報が管理者によって設定されていない場合は、そのバージョンの QMF がリポジトリに接続するために使用する情報を設定する必要があります。「リポジトリ接続」ビューに接続情報が何もリストされない場合が、これに該当します。QMF 管理者は、リポジトリ接続情報を直接提供するか、またはユーザーがインポートできるリポジトリ接続設定ファイルの形でリポジトリ接続情報を提供します。

---

## ユーザー情報の指定

「ユーザー情報の設定」ダイアログを使用して、照会がデータ・ソースに接続する際に使用するユーザー ID とパスワードを変更できます。

### このタスクについて

「ユーザー情報の設定」コマンドは、「照会」、「プロシージャー」、「書式」、または「OLAP 照会」メニューから使用できます。

新しいユーザー ID とパスワードを指定するには:

## 手順

1. 「照会」 > 「ユーザー情報の設定」を選択します。「データ・ソースにログオン」ウィンドウが開きます。
2. 「ユーザー名」フィールドに、リポジトリまたはデータ・ソースに接続する際に QMF で使用するユーザー ID を入力します。
3. 「パスワード」フィールドに、「ユーザー名」フィールドに入力したユーザー ID に関連付けられたパスワードを指定します。
4. 「ユーザー名」フィールドに入力したユーザー ID のパスワードを QMF が記憶するように指定するには、「パスワードを保存」チェック・ボックスを選択します。
5. 指定したユーザー名とパスワードを QMF が今後のデータ・ソース接続に使用するようにするには、「この情報を後続のデータ・ソース接続に使用」チェック・ボックスを選択します。
6. 「OK」をクリックして、指定したユーザー情報を設定します。QMF は、次回リポジトリまたはデータ・ソースに接続するとき、このユーザー情報を使用します。

---

## ユーザー・インターフェースの構成情報の変更

QMF for Workstation ユーザー・アプリケーション・インターフェース構成情報は、JDBC ドライバー情報と、共有リポジトリとデータ・ソースへの接続に使用するリポジトリ接続設定からなります。

### このタスクについて

上級 QMF for Workstation ユーザーはユーザー・インターフェースからの構成情報を変更することができます。ほとんどのユーザーは、構成情報の変更を行いません。以下のトピックでは、上級 QMF for Workstation ユーザーがユーザー・インターフェースの構成情報を変更する方法について説明します。

## JDBC ドライバー情報の設定

QMF は JDBC を使用してすべてのデータベース・リポジトリおよびデータ・ソースに接続します。QMF は JDBC ドライバーを含みません。QMF がリポジトリおよびデータ・ソースに接続するために使用する JDBC ドライバーの場所が定義されていなければなりません。

### このタスクについて

QMF 管理者は、アプリケーション・インターフェースの各インスタンスが JDBC ドライバーを検出する場所を特定する必要があります。ほとんどのユーザーは、JDBC ドライバーのロケーション情報を変更することはまずないでしょう。上級者は、JDBC ドライバーのロケーション情報を変更したり追加したりする可能性があります。以下のトピックでは、上級者がどのようにして JDBC ドライバーの場所の構成情報を変更したり追加したりできるのかについて説明します。

### JDBC ライブラリー設定ファイルのインポート

JDBC ライブラリー設定ファイルを使用して JDBC ドライバー情報を設定できます。



## このタスクについて

QMF アドミニストレーターは、ユーザーがすべてのデータ・ソースにアクセスするのに必要な JDBC ドライバー情報を配布します。ほとんどの場合、使用するアプリケーション・インターフェースがインストールされるときに、管理者は事前構成された JDBC ライブラリー設定ファイルをデプロイして、この情報を提供します。

管理者がこの情報を配布するために使用できるもう 1 つの方式は、JDBC ライブラリー設定ファイルを作成してすべてのユーザーが使用できるようにすることです。ユーザーは使用しているバージョンのアプリケーション・インターフェースを使用して、そのファイルをインポートします。

JDBC ライブラリー設定ファイルをインポートするには:

### 手順

1. 「ファイル」 > 「インポート」 > 「接続および JDBC ライブラリー設定」を選択します。接続および JDBC ライブラリー設定のインポート」ウィンドウが開きます。
2. 「設定ファイル」フィールドで、JDBC ライブラリー設定ファイルを検出する場所を指定します。「参照」を使用すれば、ファイルを見つけることができます。
3. 「JDBC ライブラリー設定」チェック・ボックスを選択します。
4. 「矛盾の解決」を使用して、既存の JDBC ライブラリー設定との矛盾を解決する方法を指定します。すべての矛盾する情報を新しい情報に置き換えるには、「既存の設定をオーバーライド」を選択します。既存の情報を新しい情報で更新しない場合は、「既存の設定を保持」を選択します。「手動で矛盾を解決」を選択して「矛盾」ウィンドウを開きます。このウィンドウで、既存の JDBC ライブラリー設定と新しい JDBC ライブラリー設定の間の競合を手動で解決します。
5. 「終了」をクリックします。「接続および JDBC ライブラリー設定のインポート」ウィンドウが閉じます。JDBC ライブラリー情報が保存されます。「ビュー」メニューから「設定」を選択して、「JDBC ライブラリー」を選択すると、JDBC ライブラリー情報を表示できます。

## JDBC 設定

「設定」ウィンドウを使用して JDBC ドライバー情報を設定できます。

## このタスクについて

QMF アドミニストレーターは、ユーザーがすべてのデータ・ソースにアクセスするのに必要な JDBC ドライバー情報を配布します。ほとんどの場合、使用するアプリケーション・インターフェースがインストールされるときに、管理者は事前構成された JDBC ライブラリー設定ファイルをデプロイして、この情報を提供します。

上級者は、「設定」ウィンドウの「JDBC ライブラリー」ページを使用して JDBC ドライバーのロケーション情報を定義または変更することにより、アクセスされるデータベースのタイプ (DB2、Informix、Oracle など) ごとに JDBC ドライバー情報を指定できます。JDBC ドライバー・ロケーションが QMF からアクセス可能になっていることが必要です。QMF は JDBC ドライバー情報を保持します。新しい

ドライバーを追加、または既存ドライバーのプロパティーを変更するには、この指定プロセスを繰り返すだけで行うことができます。

JDBC ドライバー情報を定義するには:

#### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択して「設定」ウィンドウを開きます。「JDBC ライブラリー」を選択します。「JDBC ライブラリー」ページが開きます。すべての JDBC ドライバーと、すでに設定済みの関連 JAR ファイルがリストされます。これらはライブラリーごとに編成されます。
2. リストされないデータベース・タイプを対象とした新規 JDBC ドライバー情報を追加するには、「ドライバーの追加」を選択します。「新規ドライバー・ライブラリーの追加」ウィンドウが開きます。
3. データベースのタイプごとの JDBC ドライバー情報は、ライブラリー単位で編成されます。ライブラリーの名前を「新規ライブラリー名の入力」フィールドに入力します。ライブラリーに含める JDBC 情報を表す名前を指定することをお勧めします。例えば、DB2 データベースにアクセスするための JDBC ドライバー情報を追加する場合は、ライブラリーに DB2 という名前を付けます。ただし、これは記述フィールドであり、あらゆるテキストを使用できます。
4. 使用するドライバー・クラスの実際の名前を「ドライバー・クラス名」フィールドに指定します。これは JDBC ドライバーの資料に記されています。例えば、`com.ibm.db2.jcc.DB2Driver` などです。
5. オプション: データベースへの接続に利用可能な正しい形式の URL の汎用例を、「URL テンプレート」フィールドに指定します。例えば、DB2 データベースにアクセスするための JDBC ドライバー情報を追加する場合は、JDBC URL テンプレート `jdbc:db2://host:50000/database` を指定します。テンプレートに指定された汎用情報は、データ・ソースをリポジトリに追加するとき、およびリポジトリ接続を作成するときに表示されます。汎用情報を特定のデータベース情報に置き換えます。
6. QMF for Workstation を使用している場合、JDBC ドライバー・ファイルのロケーション情報をライブラリーに追加します。「JAR の追加」をクリックします。「JARS を [libraryname] に追加」ウィンドウが開きます。追加したい JDBC ドライバー・ファイルを探して選択します。「開く」をクリックします。JDBC ドライバー・ファイルのロケーションが、選択した JDBC ライブラリーに保存されます。
7. 「適用」をクリックします。指定した JDBC ライブラリー情報が保存されます。
8. JDBC ドライバー情報には、以下のような変更を行うことができます。
  - JDBC ドライバー・ライブラリー情報を編集するには、リストから既存の JDBC ドライバー・ライブラリーを選択し、「編集」をクリックします。「ドライバー・ライブラリーの編集」ウィンドウが開き、ここで「ライブラリー名」、「ドライバー・クラス名」、および「JDBC URL テンプレート」フィールドを変更することができます。
  - QMF for Workstation を使用している場合、JDBC ドライバーを含むファイルの名前とロケーションを編集するには、JDBC ライブラリーに追加されたファイルのリストからファイルを選択し、「編集」をクリックします。

「JAR URL の編集」ウィンドウが開きます。「JAR ロケーションの編集」フィールドに名前とロケーションを指定します。

- JDBC ドライバー・ライブラリーを除去するには、既存の JDBC ドライバー・ライブラリーをリストから選択して、「除去」をクリックします。ライブラリーと、その中にある JAR ファイルがすべて除去されます。
  - QMF for Workstation を使用している場合、JDBC ドライバー・ライブラリーから JAR ファイルを除去するには、既存のファイルをリストから選択して、「除去」をクリックします。ファイルが除去されます。
9. 「OK」をクリックします。JDBC ライブラリー情報が保存されます。「設定」ウィンドウが閉じます。Informix または SQL Server などのさまざまなデータベース・データ・ソースにアクセスするために使用される JDBC ドライバーのそれぞれのタイプについて、このプロセスを繰り返す必要があります。

## リポジトリ接続情報の設定

上級者は、リポジトリ接続情報に変更を加えることができます。

ほとんどのユーザーは、リポジトリ接続情報を変更することはまずないでしょう。以下のトピックでは、上級者がリポジトリ接続構成情報を変更する方法について説明します。

### リポジトリ接続ファイルのインポートによる接続の作成

上級ユーザーは、QMF アドミニストレーターにより配布されるリポジトリ接続ファイルをインポートして、リポジトリ接続を作成できます。

#### このタスクについて

QMF アドミニストレーターは、リポジトリへ接続してデータ・ソースにアクセスするために必要とする接続情報の配布を担当します。ほとんどの場合、使用するアプリケーション・インターフェースがインストールされるときに、管理者は事前構成された JDBC ライブラリー設定ファイルをデプロイして、この情報を提供します。

アドミニストレーターがこの情報を提供するもう一つの方法は、リポジトリ接続設定ファイルを作成し、すべてのユーザーにそのファイルを公開することです。各ユーザーは各自のバージョンのQMF を使用してそのファイルをインポートします。

リポジトリ接続設定ファイルをインポートするには

#### 手順

1. 「ファイル」 > 「インポート」 > 「接続および JDBC ライブラリー設定」を選択します。接続および JDBC ライブラリー設定のインポート」ウィンドウが開きます。
2. 「設定ファイル」フィールドで、リポジトリ接続ファイルを探す場所を指定します。「参照」を使用して、ファイルの場所を指定することができます。
3. 「リポジトリ接続」チェック・ボックスを選択します。
4. 「矛盾の解決」を使用して、以前のリポジトリ接続設定との矛盾を解決する方法を指定します。すべての矛盾する情報を新しい情報に置き換えるには、「既存の設定をオーバーライド」を選択します。既存の情報を新しい情報で更新しな

い場合は、「既存の設定を保持」を選択します。「手動で矛盾を解決」を選択して「矛盾」ウィンドウを開きます。このウィンドウで、既存の JDBC ライブラリー設定と新しい JDBC ライブラリー設定の間の競合を手動で解決します。

5. 「終了」をクリックします。「接続および JDBC ライブラリー設定のインポート」ウィンドウが閉じます。リポジトリ接続情報が保存されます。「リポジトリ接続」ビューに、使用可能なリポジトリ接続を表示できます。リポジトリに接続するには、「リポジトリ接続」ビューにナビゲートし、接続先にするリポジトリに関する接続情報を右クリックして、「接続」を選択します。

## QMF 用のリポジトリ接続の作成

QMF では、アプリケーション・データ (リポジトリ名別にグループ化されています) へのアクセス方法を認識し、ユーザーがそのデータにアクセスできるようにする必要があります。この接続データを QMF に提供する方法として、QMF 接続ウィザードを使用して接続データを作成します。

### このタスクについて

QMF 管理者は、ユーザーがリポジトリに接続してデータ・ソースにアクセスするために必要な接続情報の配布を担当します。ほとんどの場合、アプリケーション・インターフェースがインストールされるときに、管理者は事前構成されたリポジトリ接続設定ファイルをデプロイして、この情報を提供します。

上級者は、「新しいリポジトリ接続の作成」ウィザードを使用して、リポジトリ接続情報を変更または作成できます。リポジトリ接続情報は、`settings.xml` という名前のファイルに保存されます。このファイルは、アプリケーション・インターフェースを実行しているマシンの個人設定ディレクトリに保存されます。

リポジトリ接続情報を作成するには、次のようにします。

### 手順

1. 「リポジトリ接続」ビューの任意の場所を右クリックし、「新規」 > 「リポジトリ接続」を選択して「新しいリポジトリ接続の作成」ウィザードを開きます。
2. 作成する接続のタイプを、次のラジオ・ボタンの中から 1 つ選択します。
  - 共有リポジトリ: クライアント/サーバー JDBC 接続を使用して、共有リポジトリへのリポジトリ接続を作成します。クライアント/サーバー・アクセスでは、ユーザーのワークステーションが、ローカルにインストールされた JDBC ドライバーを使用してリポジトリ・データベースへの直接接続を確立します。このタイプの接続では、QMF for Workstation を実行する各ワークステーション、および QMF for WebSphere を実行するサーバー (ワークステーション) に、JDBC ドライバーがインストールされている必要があります。
  - ファイル・ベース・リポジトリ: 指定の場所に保管されたファイル・ベース・リポジトリへのリポジトリ接続を作成します。(QMF for Workstation のみ)
  - ネットワーク・リポジトリ: 直接ネットワーク・アクセスを使用して共有リポジトリへのリポジトリ接続を作成します。ネットワーク接続の場合、ユーザーは、ワークステーションからデータベースに直接接続すること

なく共有リポジトリにアクセスできます。ネットワーク接続を使用してリポジトリに接続すると、中央サーバーでのデータ・アクセスの統合が可能になり、QMF for Workstation を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。

- **Web** サービス・リポジトリ: HTTP または HTTPS 接続を使用して、QMF for WebSphere Web サービス API を介した共有リポジトリへのリポジトリ接続を作成します。Web サービス接続の場合、ユーザーは、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリにアクセスできます。Web サービス接続を使用してリポジトリに接続すると、中央サーバーでのデータ・アクセスの統合が可能になり、QMF for Workstation を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。

3. 「次へ」をクリックします。「新しいリポジトリ接続の作成」ウィザードの 2 ページ目が開きます。ウィザードの 2 ページ目は、定義しているリポジトリ接続のタイプに応じて異なります。

共有リポジトリ接続の作成:

共有リポジトリ接続を作成することにより、ユーザーがクライアント/サーバー JDBC 接続を使用して、データベースにある共有リポジトリに接続できるようにするための情報を設定します。

このタスクについて

このタスクの手順では、共有リポジトリ接続の作成方法について説明します。

注: 共有リポジトリ接続の接続モード は、「リポジトリ・ストレージの編集」ウィンドウの「保護」タブの設定によって決まります。

共有リポジトリ接続の作成プロセスを完了するには、次のようにします。

手順

1. 「新しいリポジトリ接続の作成」ウィザードの 2 ページ目を開きます。
2. 「接続名」フィールドに、リポジトリ接続の名前を指定します。この名前は、「リポジトリ接続」ビューに表示されたときに、接続を識別するために使用されます。任意の名前を入力できますが、この接続情報が適用されるリポジトリを識別できる名前を使用することをお勧めします。
3. 「即時に接続」チェック・ボックスを選択すると、共有リポジトリにただちに接続されます。このチェック・ボックスが選択されていないと、接続情報が作成されて保存され、「リポジトリ接続」ビューに表示されますが、リポジトリへの即時接続は行われません。
4. 「接続タイプ」ラジオ・グループから、「JDBC」または「JNDI」を選択します。

JNDI を選択した場合:

- 「データ・ソース」名前フィールドに、JNDI データ・ソース名とロケーションを指定します。

- 「拡張」をクリックして、リポジトリ・ストレージ表をホストするデータベースのために使用されるドライバー特定の接続ストリング・キーワードおよびその値を指定します。

選択したデータベース・ドライバーで必要なキーワードについて詳しくは、当該ドライバーの資料を参照してください。

*JDBC* を選択した場合:

- 「**JDBC ドライバー**」フィールドに、リポジトリ・ストレージをホストするデータベースへのアクセスに使用する *JDBC* ドライバーのライブラリーを指定します。

*JDBC* ドライバー情報の設定時に定義したライブラリーのドロップダウン・リストから選択できます。省略符号 (...) をクリックして、「**JDBC ライブラリー**」ウィンドウを開き、このウィンドウで追加の *JDBC* ドライバー・ライブラリーを作成できます。

注: DB2 for z/OS データベースを使用している場合は、直接 DRDA<sup>®</sup> 接続を使用できます。*JDBC* ライブラリーとは異なり、直接 DRDA 接続は製品に付属しており、追加のドライバー・インストールは必要ありません。

注: 直接 DRDA 接続は、DB2 for z/OS のバージョン 8、バージョン 9、およびバージョン 10 に対してのみサポートされます。直接 DRDA 接続は、DB2 LUW や DB2 for iSeries に対しては使用しないでください。

- 「**JDBC URL**」リストで、接続先リポジトリのあるリポジトリ・ストレージをホストするデータベースを指す URL を指定します。

この URL の形式はリストに表示できます。

注: また、「URL テンプレートによる URL の作成」ウィンドウを使用すれば、正しいストリングを形成できます。これを行うには、「**URL の作成**」をクリックして、「URL テンプレートによる URL の作成」ウィンドウを開きます。*JDBC URL* ドロップダウン・リストから、テンプレートを選択します。表でサーバー、ポート、およびデータベース情報を指定して、「**OK**」をクリックします。結果の URL ストリングが *JDBC URL* リストに追加されます。

- 「拡張」をクリックして、この共有リポジトリへの接続時に使用されるドライバー固有の接続ストリング・キーワードとその値を指定します。

選択したドライバーで必要なキーワードについて詳しくは、当該ドライバーの資料を参照してください。

- 「直接 DRDA 接続」を使用する場合、「パッケージのバインド」をクリックして、パッケージをバインドします。

5. 「**JDBC ドライバー**」フィールドには、リポジトリをホストするデータベースへのアクセスに使用する *JDBC* ドライバーのライブラリーを指定します。*JDBC* ドライバー情報の設定時に定義したライブラリーのドロップダウン・リストから選択します。省略符号 (...) をクリックして、追加の *JDBC* ドライバー・ライブラリーを作成できる「**JDBC ライブラリー**」ウィンドウを開きます。

6. 「**JDBC URL**」フィールドで、接続先リポジトリのあるリポジトリ・ストレージをホストするデータベースを指す **URL** を指定します。JDBC ライブラリーのセットアップ時に例を指定した場合は、**URL** の形式をフィールドに表示できます。
7. 「**ユーザー情報の設定**」をクリックして、リポジトリへの接続に使用されるユーザー情報を指定します。「**ユーザー情報の設定**」ウィンドウが開きます。
  - a. 「**ユーザー ID とパスワードが必要**」チェック・ボックスを選択して、この共有リポジトリへの接続が行われるたびにユーザー情報が要求されるよう指定します。場合によっては、このチェック・ボックスのチェックを外すことで、ユーザーは自分のユーザー情報を明確に指定することなくリポジトリにアクセスできるようになります。
  - b. 「**ユーザー名**」および「**パスワード**」フィールドに、指定されたりポジトリ・データベースへのアクセスに使用するユーザー **ID** とパスワードを入力します。
  - c. パスワードを保存するには、「**パスワードを保存**」チェック・ボックスを選択します。
  - d. 使い捨てパスワード・モード を有効にするには、「**拡張**」をクリックして、「**有効**」を選択します。

「リポジトリ・ストレージ接続タイムアウト」フィールドに、使い捨てパスワード・モード機能が、(未使用時に) アプリケーションによって閉じられることなく有効な状態になっている時間を分単位で入力します。

注: 値ゼロ 0 を指定すると、接続タイムアウトに対して無制限のアイドル状態が設定されます。すなわち、接続はセッションの終了時にのみ閉じられます。

使い捨てパスワード・モード 機能を有効にすることにより、ユーザーはそのユーザー **ID** およびパスワードを再入力することなくセッション全体のリポジトリにログインできるようになります。

この機能の使用では、ユーザーが「**ユーザー ID とパスワードが必要**」を選択し、さらに「**パスワードを保存**」チェック・ボックスを選択したことを想定しています。

「**パスワードを保存**」チェック・ボックスを選択していない場合、「**リポジトリ接続の編集**」ウィザードを開くと常に、ユーザー **ID** とパスワードの入力を求めるプロンプトがシステムから出されます。

8. 「**OK**」をクリックして、「**ユーザー情報**」ウィンドウを閉じます。
9. 「**Web サービス・クライアントから非表示**」を選択して、**QMF for WebSphere** の「**リポジトリ接続名**」フィールドで使用可能な接続のリストからこの接続を除外します。

このチェック・ボックスは、**QMF for WebSphere** ユーザー・インターフェースでのみ表示されます。**QMF for Workstation** ユーザー・インターフェースで操作している場合は、「**Web サービス・クライアントから非表示**」はオプションとして表示されません。

このチェック・ボックスを選択すると、ユーザーはこのリポジトリ接続に対して Web サービス接続を確立できません。

10. 「リポジトリ名」フィールドで、接続先のリポジトリを選択します。リポジトリがリストされていない場合は、「最新表示」をクリックします。
11. 「終了」をクリックします。「リポジトリ接続」ビューにリポジトリ接続がリストされます。「即時に接続」を選択した場合、選択したリポジトリに接続されます。

ファイル・ベース・リポジトリ接続の作成:

QMF for Workstation を使用している場合、ファイル・リポジトリ接続を作成することにより、ローカルまたはネットワーク・ドライブ上に格納されたファイル・ベース・リポジトリに接続できるようにするための情報を設定できます。

このタスクについて

ファイル接続は、旧ファイル・ベース・リポジトリに対してのみ作成できます。より新しいバージョンの QMF for Workstation および QMF for WebSphere では、ファイル・ベース・リポジトリがパーソナル・リポジトリに置き換わっています。

ファイル・ベース・リポジトリ接続の作成を完成させるには:

手順

1. 「新しいリポジトリ接続の作成」ウィザードの 2 ページ目を開きます。
2. 「接続名」フィールドに、リポジトリ接続の名前を指定します。この名前は、「リポジトリ接続」ビューに表示されたときに、接続を識別するために使用されます。任意の名前を入力できますが、この接続情報が適用されるリポジトリを識別できる名前を使用することをお勧めします。
3. 「即時に接続」チェック・ボックスを選択すると、ファイル・ベース・リポジトリにただちに接続されます。このボックスが選択されていないと、接続情報が作成されて保存され、「リポジトリ接続」ビューに表示されますが、リポジトリへの即時接続は行われません。
4. 「終了」をクリックします。「リポジトリ接続」ビューにリポジトリ接続がリストされます。「即時に接続」を選択した場合、選択したリポジトリに接続されます。このリポジトリ接続情報は、接続設定ファイルに入力されます。

ネットワーク・リポジトリ接続の作成:

ネットワーク・リポジトリ接続を作成することにより、ユーザーが直接のネットワーク・アクセスを使用して、共有リポジトリに接続できるようにするための情報を設定します。

このタスクについて

ネットワーク接続の場合、ユーザーは、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリにアクセスできます。ネットワーク接続を使用してリポジトリに接続すると、中央サーバーでのデータ・アクセスの統合が可能になり、QMF for Workstation を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。



QMF for Workstation ユーザーは、QMF ネットワーク・リポジトリ・サービスを実行する中央制御マシンを経由してリポジトリに接続できます。ネットワーク接続は、Web ベースのアプローチに似た機能を提供しますが、作動させるために Web アプリケーション・サーバーを必要としません。ネットワーク接続を使用するには、ネットワーク・リポジトリ・サービスを設定および開始する必要があります。

注: QMF for Workstation (クライアント) でネットワーク・リポジトリ接続を作成する場合は、ネットワーク・リポジトリ・サービス (サーバー) のバージョンは同じリリース・レベルでなければなりません。(クライアントとサーバー間の) リリース・レベルが一致しないと、ネットワーク・リポジトリ接続は機能しません。

ネットワーク・リポジトリ接続の作成を完成させるには:

手順

1. QMF アドミニストレーターで、ネットワーク・リポジトリ・サービスが設定されていて、始動していることを確認してください。
2. 「新しいリポジトリ接続の作成」ウィザードの 2 ページ目を開きます。
3. 「接続名」フィールドに、リポジトリ接続の名前を指定します。この名前は、「リポジトリ接続」ビューに表示されたときに、接続を識別するために使用されます。任意の名前を入力できますが、この接続情報が適用されるリポジトリを識別できる名前を使用することをお勧めします。
4. 「即時に接続」チェック・ボックスを選択すると、リポジトリにただちに接続されます。このチェック・ボックスが選択されていないと、接続情報が作成されて保存され、「リポジトリ接続」ビューに表示されますが、リポジトリへの即時接続は行われません。
5. ネットワーク・サービスを実行しているサーバー (またはワークステーション) の名前または IP アドレスを、「サーバー・ホスト」フィールドに指定します。
6. ネットワーク・サーバーの接続ポートを「ポート」フィールドに指定します。
7. 「最新表示」をクリックします。

指定したネットワーク・リポジトリ・サービス用の選択可能なリポジトリ接続が取り込まれます。使用するリポジトリ接続を使用可能なリポジトリ接続のリストから選択します。

8. 「終了」をクリックします。

「リポジトリ接続」ビューにリポジトリ接続がリストされます。

「即時に接続」を選択した場合、選択したリポジトリに接続されます。このリポジトリ接続情報は、接続設定ファイルに入力されます。

**Web** サービス・リポジトリ接続の作成:

Web サービス・リポジトリ接続を作成することにより、ユーザーが HTTP または HTTPS 接続を使用して QMF for WebSphere Web サービス API を介して共有リポジトリに接続できるようにするための情報を設定します。

このタスクについて

Web ベースの接続を使用して、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリにアクセスできます。この方法を使用してリポジトリに接続することにより、中央サーバーにデータ・アクセスを統合できるため、QMF for Workstation を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。

Web ベース接続は、QMF for WebSphere の組み込みリポジトリ Web サービスにより提供されます。この機能を使用可能にするには、QMF for WebSphere が WebSphere Application Server (WAS) インスタンスにデプロイされている必要があります。さらに、リポジトリ接続情報をこのバージョンの QMF for WebSphere で使用可能にされている必要があります。QMF for Workstation ユーザーは、QMF for WebSphere サーバーに対する URL およびポートを使用してリポジトリに接続します。

注: QMF for Workstation (クライアント) でネットワーク・リポジトリ接続を作成する場合は、ネットワーク・リポジトリ・サービス (サーバー) のバージョンは同じリリース・レベルでなければなりません。(クライアントとサーバー間の) リリース・レベルが一致しないと、ネットワーク・リポジトリ接続は機能しません。

Web サービス・リポジトリ接続の作成を完成させるには:

手順

1. QMF for WebSphere が、管理者によって WebSphere Application Server (WAS) インスタンスにデプロイされていることを確認します。
2. 「新しいリポジトリ接続の作成」ウィザードの 2 ページ目を開きます。
3. 「接続名」フィールドに、リポジトリ接続の名前を指定します。この名前は、「リポジトリ接続」ビューに表示されたときに、接続を識別するために使用されます。任意の名前を入力できますが、この接続情報が適用されるリポジトリを識別できる名前を使用することをお勧めします。
4. 「即時に接続」チェック・ボックスを選択すると、Web サービス・リポジトリにただちに接続されます。このボックスが選択されていないと、接続情報が作成されて保存され、「リポジトリ接続」ビューに表示されますが、リポジトリへの即時接続は行われません。
5. 「Web サーバー URL」フィールドに、Web サービス API をこの接続に使用する QMF for WebSphere のインスタンスを起動する URL を指定します。これは、QMF for WebSphere のインスタンスがデプロイされたときに作成された URL アドレスです。
6. 「最新表示」をクリックします。「Web サーバー URL」フィールドで指定した QMF for WebSphere のインスタンスに対して定義されている、使用可能なリポジトリ接続が取得されます。使用可能な接続のリストから、使用するリポジトリ接続を選択します。
7. 「終了」をクリックします。

「リポジトリ接続」ビューにリポジトリ接続がリストされます。

「即時に接続」を選択した場合、選択したリポジトリに接続されます。このリポジトリ接続情報は、接続設定ファイルに入力されます。

タスクの結果

現在は、QMF for WebSphere クライアントが開かれると、最後にアクセスされたリポジトリに接続します。QMF for WebSphere クライアントが開かれたときに使用されるリポジトリ接続を制御するための追加の接続 URL パラメーターが追加されています。

例えば、次のようになります。

**http://host:port/QMF/user?repository=MyConnection**

接続パラメーターが、無効な接続を指すと、システムは「リポジトリの切り替え」ウィンドウを開きます。ユーザー・パラメーターおよびパスワード・パラメーターを使用して、保護されたリポジトリ接続用のログオン情報を渡すことができます。

例えば、次のようになります。

**http://host:port/QMF/  
user?repository=MyConnection&user=userLogin&password=userPassword**

.

## リポジトリ接続の管理

リポジトリ接続の管理は、「リポジトリ接続」ビューから行います。このビューから、リポジトリ接続の編集と削除、リポジトリへの接続、およびリポジトリからの切断を実行できます。

### このタスクについて

各 QMF ユーザーは (アドミニストレーター特権を所有しているかどうかに関わらず)、自分のリポジトリ接続を管理します。リポジトリ接続情報はオペレーティング・システムのユーザー ID ごとにユーザーのホーム・ディレクトリーに保管されます。ユーザーはそれぞれ、自分のホーム・ディレクトリーのリポジトリ接続を追加、編集、および削除することができます。

リポジトリ接続を追加、接続、編集、または削除するには:

### 手順

1. 「リポジトリ接続」ビューを開きます。 使用可能な各リポジトリ接続が「リポジトリ接続」ビューにリストされます。このリストには、自分が作成したすべてのリポジトリ接続と、管理者によって提供された可能性のある接続が含まれます。
2. リポジトリ接続のプロパティ情報を編集するには、以下のステップを実行します。
  - a. 編集するリポジトリ接続を右クリックし、ポップアップ・メニューから「編集」を選択します。

選択した接続のタイプに基づいて「リポジトリ接続の編集」ウィザードに編集ダイアログが表示されます。
  - b. これらのダイアログから、リポジトリ接続情報を変更します。

完了すると、変更された接続情報が保存されます。

3. リポジトリ接続を削除するには、以下のステップを実行します。
  - a. 削除するリポジトリ接続を右クリックし、ポップアップ・メニューから「接続の除去」を選択します。

削除の確認を求めるメッセージが出されます。

- b. 「OK」をクリックしてリポジトリ接続を除去します。
4. リポジトリに接続するには、リストにあるリポジトリ接続を右クリックして、ポップアップ・メニューから「接続」を選択します。

選択したリポジトリに即時に接続されます。

5. リポジトリから切断するには、切断するリポジトリ接続を右クリックして、ポップアップ・メニューから「切断」を選択します。

選択したリポジトリから即時に切断されます。

6. 別のユーザー ID を使用して現行リポジトリに再接続するには、現行リポジトリ接続を右クリックして、ポップアップ・メニューから「再接続」を選択します。

「ログオン」ウィンドウが開きます。ここで、現行リポジトリへの接続に使用する別のユーザー ID とパスワードを指定することができます。

7. 「OK」をクリックすると、同じリポジトリに別のユーザー ID で再接続されます。

## DRDA ドライバー用の SSL 接続の使用可能化

リポジトリ接続で SSL 証明書を使用可能にすることで、接続をセキュアにできます。

### このタスクについて

リポジトリ接続で SSL 証明書を使用可能にするには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. 「リポジトリ接続」ビューで、SSL 証明書の使用を有効にする接続を右クリックして、メニューから「編集」を選択します。
2. 「リポジトリ接続の編集」ウィンドウで、「拡張」をクリックします。
3. 「拡張 JDBC 設定」ウィンドウで、**sslConnection** パラメーターを選択して、パラメーター値を **true** に設定します。
4. **sslTrustStoreLocation** パラメーターを選択して、「値」列にトラストストア・ファイルの場所を指定します。

注: JDK keytool ユーティリティーを使用して、トラストストア・ファイルを構成します。

5. **sslTrustStorePassword** パラメーターを選択して、選択したトラストストア・ファイルのパスワードを「値」列に指定します。
6. 「OK」をクリックして、「拡張 JDBC 設定」ウィンドウを閉じます。
7. 「終了」をクリックして、「リポジトリ接続の編集」ウィンドウを閉じます。

## DB2 パスワードの変更

ご自分の DB2 データベース・パスワードは、「パスワードの変更」ウィンドウを使用して変更できます。

### このタスクについて

ユーザーは組織内で設定されているセキュリティ指標を守るために、使用している DB2 パスワードを定期的に変更する必要がある場合があります。「パスワードの変更」ウィンドウを使用すると、データベース管理者の助けを必要としないでも、ご自分の DB2 パスワードを変更できます。

注: この機能が有効なのは、DB2 データ・ソースのうち、DB2 JCC ドライバーや Direct DRDA 接続を使用する 4 つのタイプの接続を用いているものに限られます。

ご自分の DB2 パスワードを変更するには:

### 手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで、変更するパスワードのある DB2 データ・ソースにナビゲートし、そのデータ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューが開きます。
2. ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。
3. 「接続パラメーター」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウの「接続パラメーター」ページが開きます。
4. 「ユーザー ID とパスワードが必要」チェック・ボックスを選択します。以下のチェック・ボックス・オプションを変更できます。
  - アプリケーション・セッション中、さらに発生する接続にログオンを適用する (これはデフォルトの選択です)
  - ユーザーがパスワードを保存できるようにする
  - ユーザーにパスワードの変更を許可する
5. 「ユーザー情報の設定」ボタンをクリックします。「[データ・ソース] のユーザー情報の設定」ウィンドウが開きます。
6. 「ユーザー:」フィールドにユーザー名を入力します。
7. 「パスワード:」フィールドにパスワードを入力します。
8. 「変更」ボタンをクリックします。「パスワードの変更」ウィンドウが開きます。
9. 「古いパスワード」フィールドに古いパスワードを入力します。

注: セキュリティ上の理由で、「パスワードの変更」ダイアログが開く場合には「古いパスワード」フィールドは必ず空白で表示されます。「パスワードを保存」チェック・ボックスを選択している場合でも、そのようになります。

10. 「新規パスワード」フィールドに新しいパスワードを入力します。
11. 「新規パスワードの確認」フィールドに新しいパスワードをもう一度入力します。

12. 「パスワードを保存」チェック・ボックスおよび「接続するすべてのデータ・ソースにこの情報を使用」チェック・ボックス、またはそのいずれかを選択します。
13. 「OK」をクリックします。「パスワードの変更」ウィンドウが閉じて、新しいパスワードが承認されます。

## リポジトリ・キャッシングの構成

ご使用のリポジトリにキャッシング機能を構成できます。QMF for WebSphere を使用している場合、リポジトリでキャッシングを有効にすると、リポジトリの内容 (ダッシュボード、照会、ビジュアル報告書、およびその他のオブジェクト) はシステムによってワークステーション・クライアント上または Web サーバー上のメモリーに保管されます。

### このタスクについて

このタスクでは、リポジトリ・キャッシングの構成方法について説明します。

#### 考慮事項:

- キャッシングは、QMF for Workstation を使用している場合はご使用のマシン上のローカル・メモリーで、QMF for WebSphere を使用している場合は Web サーバー上のメモリーで行われます。

これ以降、次にリポジトリ・オブジェクトにアクセスするときは、情報は (リポジトリに要求を送信せずに) メモリーから取り出されます。これにより、情報の取得時間が短縮されます。

以下の内容がキャッシュされます。

- オブジェクトの内容
- オブジェクトへのパス
- 表のメタデータ
- キャッシュされたリポジトリ・オブジェクトを変更すると、キャッシュがリフレッシュされて変更内容が反映されます。
- QMF for Workstation では、マシンをシャットダウンするかアプリケーションを閉じると、必ずリポジトリ・キャッシュがクリアされます。
- QMF for Workstation では、ユーザーはマシンで実行中のアプリケーションのバージョンに対応してリポジトリ・キャッシング・パラメーターを設定できます。
- QMF for WebSphere では、リポジトリ・キャッシングは同じリポジトリ接続ログインを使用して行われたすべての接続間で共有されます。
- QMF for WebSphere では、ユーザーはリポジトリ接続設定を変更するために、管理者権限を持っている必要があります。

リポジトリ・キャッシングを構成するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「新しいリポジトリ接続を作成」ウィザードまたは「リポジトリ接続の編集」ウィザードの 2 ページ目を開きます。

2. 「リポジトリ・キャッシュ」領域で、「使用可能」チェック・ボックスを選択して、キャッシュ構成オプションをアクティブにします。

事前定義されたキャッシュ検証用のラジオ・ボタンが「事前定義されたモード」セクションで使用可能になります。

事前定義キャッシュ検証モードを実装するには、関連付けられたラジオ・ボタンを選択します。各事前定義モードのキャッシュ検証処理は次のとおりです。

- 低い関連性 - 高パフォーマンス

これが選択されている場合、キャッシュ検証は実行されません。

- 関連性とパフォーマンスの平衡状態

これが選択されている場合、キャッシュ検証は 5 分ごとに実行されます。これがキャッシュ検証のデフォルト設定です。

- 高い関連性 - 低パフォーマンス

これが選択されている場合、キャッシュ検証は 60 秒 (1 分) ごとに実行されます。

3. カスタム・キャッシュ検証を実装するには、「カスタム・キャッシュ設定の使用」チェック・ボックスを選択します。

「カスタム・キャッシュ設定の使用」チェック・ボックスを選択すると、事前定義キャッシュ検証モード用のオプションは使用不可になります。

「カスタム...」をクリックして、「リポジトリ・キャッシュ設定」ウィザードを起動します。

このウィザードを使用して、キャッシュ・サイズ情報を指定し、検証間隔を設定します。

このウィザードは、以下の 2 つのペインで構成されています。

- 左側の「リポジトリ・キャッシュ」ペイン

このペインには、キャッシュに入れる特定タイプのリポジトリ関連データがリストされます。

- 右側の「リポジトリ・キャッシュ設定」ペイン

このペインではキャッシング・パラメーターを設定します。

一般的なキャッシング用のパラメーター値を設定できます。これらのパラメーター値は、各タイプのリポジトリ関連データに適用されます。

また、異なるタイプのリポジトリ関連データのパラメーター値を設定することもできます。これらのタイプには以下のものが含まれます。

- コンテンツ・キャッシュ
- サーバー・メタデータ・キャッシュ
- 構造キャッシュ
- 表メタデータ・キャッシュ

- a. 一般キャッシュ設定を行うには、リスト・ペインで「リポジトリ・キャッシュ」をクリックし、「キャッシュ検証時間 (分)」フィールドに値を設定します。

入力した値は、当該キャッシュ検証が行われる頻度 (分数) を表します。

入力した値によって、キャッシュ内のオブジェクトが変更されていないことをキャッシュが検証する頻度が決定されます。システムでは、リポジトリに保管されている各キャッシュ・オブジェクトの最終更新日を検査します。

デフォルト値は 5 分です。

変更されたオブジェクトはすべてキャッシュから削除されます。

指定された時間内にアクセスされなかったオブジェクトは、いずれもキャッシュから削除されません。

キャッシュをリフレッシュしない場合は、0 (ゼロ) を入力します。これは、静的コンテンツを持つリポジトリの場合に便利です。

- b. 異なるタイプのリポジトリ関連データのパラメーター値を設定するには、「リポジトリ・キャッシュ」を展開し、構成するデータのタイプを選択します。リポジトリ関連データのタイプとその構成パラメーターは以下のとおりです。

- コンテンツ・キャッシュ

次のパラメーターが含まれています。

- コンテンツ・サイズ (メガバイト): キャッシュ・コンテンツに許可される最大サイズ (メガバイト単位) を指定します。

入力した値は、すべてのオブジェクトの総合計サイズを表します。これらは、キャッシュに保管され、QMF for Workstation を使用している場合はご使用のマシン上の、QMF for WebSphere を使用している場合は Web サーバー上のメモリーに保存されたオブジェクトです。

サイズが最大許容サイズに達したキャッシュに新規オブジェクトが追加されると、システムでは、新規オブジェクトを収容するために十分なスペースが確保されるまでオブジェクトが削除されます。

最も長期間にわたってアクセスされていないオブジェクトが最初に削除されます。

- サーバー・メタデータ・キャッシュ

以下のパラメーターが含まれています。

- 存続時間限度 (分)

レコードがキャッシュに保持される最大時間 (分数) を設定するパラメーターです。存続時間は、各レコードについて、その作成時点から計算されます。指定された存続時間が過ぎると、レコードはキャッシュから強制的に除去されます。



- 非アクティブ期間 (分)

レコードが参照されずにキャッシュに保持される最大時間 (分数) を設定するパラメーターです。非アクティブ期間は、各レコードについて、それが最後に使用された時点から計算されます。指定された非アクティブ期間が過ぎると、レコードはキャッシュから強制的に除去されます。

• 構造キャッシュ

以下のパラメーターが含まれています。

- 存続時間限度 (分)

レコードがキャッシュに保持される最大時間 (分数) を設定するパラメーターです。存続時間は、各レコードについて、その作成時点から計算されます。指定された存続時間が過ぎると、レコードはキャッシュから強制的に除去されます。

- 非アクティブ期間 (分)

レコードが参照されずにキャッシュに保持される最大時間 (分数) を設定するパラメーターです。非アクティブ期間は、各レコードについて、それが最後に使用された時点から計算されます。指定された非アクティブ期間が過ぎると、レコードはキャッシュから強制的に除去されます。

• 表メタデータ・キャッシュ

以下のパラメーターが含まれています。

- 存続時間限度 (分)

レコードがキャッシュに保持される最大時間 (分数) を設定するパラメーターです。存続時間は、各レコードについて、その作成時点から計算されます。指定された存続時間が過ぎると、レコードはキャッシュから強制的に除去されます。

- 非アクティブ期間 (分)

レコードが参照されずにキャッシュに保持される最大時間 (分数) を設定するパラメーターです。非アクティブ期間は、各レコードについて、それが最後に使用された時点から計算されます。指定された非アクティブ期間が過ぎると、レコードはキャッシュから強制的に除去されます。

4. 「完了」をクリックして、ウィザードを終了します。

## タスクの結果

リポジトリ・キャッシングを有効にして、キャッシュの動作を制御するパラメーターを設定しました。各設定は製品構成に保存されます。

システムでは、キャッシュ設定ファイルの読み取りおよび書き込み (保存) をユーザーに許可し、そのファイルを使用して、現在の設定を直接キャッシュに設定しま

す。すべての設定は、構成レコードのセット内でサービスごとにグループ化されます。

## QMF for Windows からの設定のインポート

QMF for Windows の設定をインポートすることができます。

### このタスクについて

設定をインポートすると、QMF for Workstation の構成時にそれらの設定を手動で再作成する手間が省けます。

QMF for Workstation を初めて起動すると、「QMF for Windows 構成設定のインポート」ウィザードが自動的に開きます。このウィザードは、「ファイル」 > 「インポート」 > 「**QMF for Windows 構成設定**」を選択して開くこともできます。

このウィザードで、インポートする設定とユーザー設定を選択できます。

## QMF for Windows 設定

QMF for Windows 設定を QMF for Workstation にインポートすることができます。

次の表は、「QMF for Windows 構成設定のインポート」ウィザードを使用してインポートできる QMF for Windows 設定のリストを示しています。

表 11. QMF for Windows からインポートできる設定

設定	説明	QMF for Windows での表示方法	QMF for Workstation での表示方法
お気に入り	「お気に入り」フォルダーの内容	「データベース・エクスプローラー」ツリーを開きます	「パーソナル」ビューを開きます
最近使用したオブジェクト	最近使用したオブジェクトのリスト	「データベース・エクスプローラー」ツリーを開きます	「パーソナル」ビューおよび「リポジトリ・エクスプローラー」ビューを開きます
グローバル変数	グローバル変数のリスト	「ビュー」 > 「大域変数」を選択します	「ビュー」 > 「設定」 > 「グローバル変数」を選択します
保存された結合定義	指示照会編集機能または照会ビルダー編集機能で結合した表に関する情報を基に、自動的に追加された結合のリスト		
エクスポート設定	ファイルまたはデータベースへの照会結果のエクスポートおよび報告書のエクスポート・タイプの設定	「結果」 > 「ファイルに保存」または「結果」 > 「データベースに保存」を選択します	「ファイル」 > 「エクスポート」を選択します
LOB オプション	LOB オブジェクト設定	「ビュー」 > 「オプション」 > 「LOB」を選択します	「ビュー」 > 「設定」 > 「LOB」を選択します
グリッド・オプション	デフォルトのフォント・プロパティ、フォーマット・オプション、セルの色、およびその他のグリッド設定	「結果」 > 「フォントおよび結果」 > 「フォーマット」を選択します	「結果」 > 「フォントおよび結果」 > 「フォーマット」を選択します
ページ設定	印刷に使用されるページ設定	「ファイル」 > 「ページ設定」を選択します	「ファイル」 > 「ページ設定」を選択します

表 11. QMF for Windows からインポートできる設定 (続き)

設定	説明	QMF for Windows での表示方法	QMF for Workstation での表示方法
ユーザー・インターフェース設定	言語、デフォルト・フォント、NULL 値の表示オプションなどのユーザー・インターフェースの設定	「ビュー」 > 「オプション」 > 「一般およびビュー」 > 「オプション」 > 「外観」を選択します	「ビュー」 > 「設定」 > 「一般およびビュー」 > 「設定」 > 「外観」を選択します
コマンド・バー履歴	コマンド・バーに入力されたコマンドの履歴		

## ID の正しい形式

表の所有者、表名、オブジェクト所有者、オブジェクト名、および列名 ID の最大長は、DB2 のバージョンおよびプラットフォームによって異なります。

ID を指定するときは、任意の標準文字を使用することができます。標準文字には大文字、数字、または `_`、`@`、`#`、および `$` があります。特殊文字は引用符で囲む必要があります。識別子に引用文字が含まれる場合、その引用符が出現するたびに 2 つ続けて指定し、識別子全体を引用文字で囲ってください。例えば、`pro"ject` という ID の場合、`"pro"ject` と入力します。英小文字を使用して、その識別子を引用文字で囲まない場合、英小文字は英大文字に変更されます。

## 突き合わせパターン

検索する照会、書式、および表の名前を入力する場合は、パーセント文字 (%) と下線文字 (`_`) を使用してパターンを突き合わせることができます。

パーセント文字 (%) は、任意の文字を含む任意の長さのストリングを一致させる場合に使用します。例えば、文字 `A` で始まるすべての項目をリストするには、`A%` と入力します。すべての項目をリストするには、`%` 文字のみを入力します。

下線文字 (`_`) は、単一文字を一致させる場合に使用します。例えば、2 つ目の文字が `A` である項目をすべてリストするには、`_A%` と入力します。

入力するパターンに特殊文字が含まれる場合は、パターン全体を引用符で囲む必要があります。例えば、パターンの一部にスペースを入れるには、`"A B%"` と入力します。特殊文字には、以下の文字以外のすべての文字が含まれます。

- A から Z (英大文字のみ)
- 0 から 9
- #、\$、@、\_

## 新規オブジェクトまたはリポジトリ項目の作成

QMF には、新しいオブジェクトの作成に役立つウィザードが数多く用意されています。

## このタスクについて

「新規」ウィンドウで、作成するオブジェクトのタイプを選択し、そのオブジェクトを作成するためのウィザードを起動することができます。

新規オブジェクト・ウィザードを起動するには:

### 手順

1. 「新規」ウィンドウを開くには、「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。

「新規」ウィンドウが開きます。

選択可能なウィザードが「ウィザード」リスト・ボックスにリストされます。

2. 「環境」フォルダーで、以下のいずれかのウィザードを選択できます。
  - データ・ソース・マッピング: データ・ソースを環境に追加します。
  - 環境: 環境を作成します。
3. 「**QMF** オブジェクト」フォルダーで、以下のいずれかのウィザードを選択できます。
  - 随時報告書: 随時報告書を作成します。
  - 分析照会: 分析照会を作成します。
  - ドリルダウン・パス: ドリルダウン・パスを作成します。
  - **ER** ダイアグラム: エンティティ・リレーションシップ (ER) ダイアグラムを作成します。
  - **ER** ダイアグラム・フォルダー: ER ダイアグラム・フォルダーをデータ・ソースに追加します。
  - 予測: 予測を作成します。
  - 書式: 標準報告書の生成に使用できる書式を作成します。
  - **JavaScript** モジュール: JavaScript モジュールを作成し、JavaScript コード編集機能を開きます。
  - **JavaScript** テーブル: JavaScript テーブルを作成します。
  - **OLAP** 照会: OLAP 照会を作成します。
  - プロシージャ: プロシージャを作成します。
  - プロンプト階層: プロンプト階層を作成します。
  - 「照会のドロー」ウィザードを使用する照会: 「照会のドロー」ウィザードを使用して照会を作成します。
  - 即時報告書: 即時報告書を作成します。
  - 仮想データ・ソース・スケジュール: 仮想データ・ソースのキャッシュ有効期限設定を指定します。
  - ビジュアル・ダッシュボード: ビジュアル・ダッシュボード・プロジェクトを作成します。(QMF for Workstation のみ)
  - ビジュアル・ダッシュボード・テンプレート・カテゴリ: ビジュアル・ダッシュボード・テンプレート・カテゴリを作成します。(QMF for Workstation のみ)
  - ビジュアル照会: ビジュアル (SQL) 照会を作成します。

- ビジュアル報告書: ビジュアル報告書プロジェクトを作成します。(QMF for Workstation のみ)
  - ビジュアル報告書テンプレート・カテゴリ: ビジュアル報告書テンプレート・カテゴリを作成します。(QMF for Workstation のみ)
4. 「リポジトリ」フォルダーで、以下のいずれかのウィザードを選択できます。
    - フォルダー: リポジトリまたはワークスペースにフォルダーを追加します。
    - **Hive** データ・ソース: Hive データ・ソースをリポジトリに追加します。
    - リンク: オブジェクトへのショートカットを作成します。
    - パーソナル・リポジトリ: 新しいパーソナル・リポジトリを作成します。
    - リポジトリ接続: 新しいリポジトリ接続を作成します。
    - ワークスペース: 新しいリポジトリ・ワークスペースを作成します。
  5. 管理者コンポーネントがインストール済みの場合に限り、「リポジトリ」フォルダーから以下のウィザードを選択できます。
    - リレーショナル・データ・ソース: リレーショナル・データ・ソースをリポジトリに追加します。
    - マルチディメンション・データ・ソース: マルチディメンション・データ・ソースをリポジトリに追加します。
    - **QMF Data Service** データ・ソース: QMF Data Service データ・ソースをリポジトリに追加します。
    - 仮想データ・ソース: 仮想データ・ソースをリポジトリに追加します。
    - 共有リポジトリ: 共有リポジトリを作成します。
    - 共有リポジトリ・ストレージ: 共有リポジトリ・ストレージを作成します。
  6. 「その他」フォルダーで、以下のいずれかのウィザードを選択できます。
    - スケジュール・タスク: スケジュール・タスクを作成します。
    - **Web** リンク: QMF オブジェクトへの短縮 URL を作成します。短縮 URL を使用すれば、Web ブラウザーでオブジェクトを直接開くことができます。「**Web** リンク」ウィザードは、アクティブな Web リポジトリ接続がある場合にのみ使用できます。
  7. 「次へ」をクリックします。

選択したウィザードの最初のページが表示されます。

最初のページは、作成するオブジェクトまたはリポジトリ項目に応じて異なります。

---

## データ・オブジェクトへの **Web** リンクの作成

「Web リンク」ウィザードを使用して、QMF オブジェクトへの Web リンクを作成します。これらのリンクを使用して、Web ブラウザーでオブジェクトを直接開くことができます。

## 始める前に

QMF for Workstation を使用している場合、「Web リンク」ウィザードは、使用可能な Web サービス・リポジトリ接続がある場合のみ使用できます。

## このタスクについて

データ・オブジェクトへの Web リンクを作成するには、以下のようになります。

## 手順

1. メインメニューから、「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」 > 「Web リンク」を選択して、「Web リンク」ウィザードを開きます。

注: リポジトリ・ツリーのポップアップ・メニュー・オプション「Web リンクの作成」から、このウィザードにアクセスすることもできます。この方法を使用してウィザードにアクセスする場合は、「リポジトリ・オブジェクト」フィールドおよび「ユーザー定義パラメーター」は自動的に事前入力されます。

2. 「リポジトリ・オブジェクト」フィールドから、Web リンクの作成先のオブジェクトを選択します。
3. 以下の「事前定義されたパラメーター」の設定を指定します。

- 「ツールバー」チェック・ボックスは、ツールバーを表示するか非表示にするかを示します。
- 「実行」チェック・ボックスは、オブジェクトが開かれたときにそのオブジェクトを実行するかどうかを示します。
- 「環境」チェック・ボックスは、オブジェクトを実行する際にデフォルトの環境を使用するかどうかを示します。

デフォルト環境以外の環境を使用する場合は、このチェック・ボックスを選択し、環境のリストから該当する環境を選択します。

- ビジュアル報告書の場合は、「レンダラー・モード」チェック・ボックスが選択可能です。このチェック・ボックスは、ビジュアル報告書がレンダリングされるモードを決定します。
4. 選択したリポジトリ・オブジェクトのパラメーターを表すには、「ユーザー定義パラメーター」を指定します。

「URL に組み込む」チェック・ボックスを選択することにより、生成された URL にパラメーターを追加できます。

「ツールバー」チェック・ボックスを選択する場合、URL の形式は次のようになります。

```
http://{host}:{port}/{app_context}/g?object_name&param1=value1
```

「ツールバー」チェック・ボックスをクリアする場合、ビジュアル・ダッシュボード向けの URL の形式は次のようになります。

```
http://{host}:{port}/{app_context}/go?object_name&param1=value1
```

5. 「次へ」をクリックして、「Web リンク」ウィザードの 2 ページ目を表示します。

そのページで、データ・ソースを追加できます。「データ・ソースの追加」ボタンおよび「データ・ソースの削除」ボタンを使用して、データ・ソースのリストを編集します。「ログイン」フィールドおよび「パスワード」フィールドに、追加するデータ・ソースのログインおよびパスワードを入力できます。

「**Web** リンク名」フィールドに、URL で使用したりブラウザのタブ・タイトルで使用したりする現行オブジェクトの名前を入力します。

例えば、「**Web** リンク名」フィールドで **NEW\_OBJECT\_NAME** を指定し、「ツールバー」チェック・ボックスにチェック・マークを付けると、次の URL が生成されます。

```
http://{host}:{port}/{app_context}/g?NEW_OBJECT_NAME
```

「ツールバー」チェック・ボックスがクリアされているときの URL は次のようになります。

```
http://{host}:{port}/{app_context}/go?NEW_OBJECT_NAME
```

リンク名は、「**Web** リンク名」フィールドを使用して変更できます。

「**Web** リンク名」フィールドを空のままにしておくと、新しい名前が自動的に作成されます。

6. 「作成」をクリックして、**Web** リンクを生成します。

指定されたリンク名が存在する場合は、名前変更するか、「**Web** リンク名」フィールドを空のままにしておいて名前を自動作成する必要があります。

7. 「**Web** リンクを開く」をクリックして、作成した **Web** リンクをブラウザで開きます。
8. 「終了」をクリックして、「**Web** リンク」ウィザードを閉じます。

注:

---

## オブジェクトの保存

作成したオブジェクトを、リポジトリ、QMF カタログ、またはファイルに保存できます。オブジェクトの保存を容易にするために、QMF には保存コマンドと保存ウィザードがいくつか用意されています。

保存コマンドには「保存」、「保存先」、および「すべて保存」があります。現在アクティブなオブジェクトの状況によって、使用可能な保存コマンドが決まります。アクティブ・オブジェクト状況は以下のいずれかになります。

- オブジェクトは新しいオブジェクトであり、これまでに保存されたことがない。
- オブジェクトは以前に保存されたことのあるオブジェクトで、開いているオブジェクトには変更が行われていない。
- オブジェクトは以前に保存されたことのあるオブジェクトであり、開いているオブジェクトには変更が行われた。

保存コマンドは以下のように実行されます。

- オブジェクトが以前に保存されたことのあるオブジェクトであり、開いているオブジェクトに変更が行われていない場合、使用可能な保存コマンドはありません。
- オブジェクトが以前に保存されたことのあるオブジェクトであり、開いているオブジェクトに変更が行われた場合は、任意の保存コマンドが使用できます。「保存」コマンドは、オブジェクトを元の場所に保存します。「保存先」コマンドは、保存ウィザードを開きます。このウィザードで、オブジェクトを新たな場所に保存できます。「すべて保存」コマンドは、すべてのアクティブ・オブジェクトを順番に保存します。このとき、オブジェクトが新規で、これまでに保存されたことがない場合にのみ、保存ウィザードが開きます。
- オブジェクトが新規で、これまでに保存されたことがない場合は、任意の保存コマンドを使用して保存ウィザードを開くことができます。

## オブジェクトをファイルに保存

作成したオブジェクト (書式、照会、プロシージャ) をファイルに保存できます。

### このタスクについて

オブジェクトをファイルに保存するには:

#### 手順

1. QMF for Workstation をご使用の場合:
  - a. 「ファイル」メニューから「保存先」 > 「ファイル」を選択します。
  - b. オブジェクトを保存するディレクトリーにナビゲートします。
  - c. 「ファイル名」フィールドに、オブジェクトの名前を指定します。
  - d. 「保存」をクリックします。指定した場所にオブジェクトが保存されます。
2. QMF for WebSphere をご使用の場合:
  - a. 「ファイル」メニューから「保存先」 > 「ファイル」を選択します。
  - b. 「入力ファイル名」フィールドに、オブジェクトの名前を指定します。
  - c. 「ファイルにリンク」ハイパーリンクをクリックします。ブラウザ固有のダウンロード・ダイアログが開きます。
  - d. ローカル・マシン上の必要な場所にオブジェクトをダウンロードします。

## オブジェクトをリポジトリーまたはリポジトリー・ワークスペースに保存

作成したオブジェクト (書式、照会、プロシージャ) を、「リポジトリーに保存」ダイアログを使用してリポジトリーまたは特定のリポジトリー・ワークスペースに保存できます。

### このタスクについて

オブジェクトをリポジトリーまたはリポジトリー・ワークスペースに保存するには:

#### 手順

1. 「ファイル」メニューから「保存先」 > 「リポジトリー」を選択します。「リポジトリーに保存」ウィンドウが開きます。



2. アクセス権のあるリポジトリとリポジトリ・ワークスペースのそれぞれが、「親項目の選択」ツリーにリストされます。ツリー構造内の親ノードを選択することにより、オブジェクトを保存する場所を選択します。
3. オブジェクトを識別するための名前を「名前」フィールドに入力します。「名前」フィールドには常時、アクティブ・オブジェクトの現在の名前が表示されません。
4. コメントを「コメント」フィールドに入力します。コメントは、オブジェクトのプロパティを表示すると表示されます。
5. 「OK」をクリックします。オブジェクトがリポジトリまたはリポジトリ・ワークスペースに保存されます。

## QMF カタログにおけるオブジェクトの保存

QMF 機能が接続先のリポジトリまたはワークスペースに対応している場合は、作成したオブジェクト (書式、ビジュアル照会、プロシージャ) を QMF カタログに保存できます。

### このタスクについて

オブジェクトを QMF カタログに保存するには:

#### 手順

1. 「QMF に保存」ウィザードを開くには、「ファイル」メニューからいずれかの保存コマンドを選択するか、または「保存」ツールバー・ボタンをクリックします。「[objectname] の保存」ウィンドウが開きます。「QMF カタログに保存」を選択します。「次へ」をクリックします。「QMF カタログに保存」ウィンドウが開きます。QMF カタログ・データ・ソースに接続していない場合には、ログオン情報を求められます。
2. 「データ・ソース」フィールドに、QMF カタログのあるデータ・ソースの名前を指定します。
3. 「所有者」フィールドに、オブジェクトの所有者 ID を指定します。ID の正しい形式で所有者を指定する必要があります。
4. 「名前」フィールドに、オブジェクトの名前を指定します。ID には正しい形式で名前を指定する必要があります。
5. 「フォルダー」フィールドで、保管されたオブジェクトへのリンクを格納するフォルダーを指定します。フォルダーを使用して、オブジェクトを簡単な方法でグループ化します。
6. 保存するオブジェクトのタイプを「タイプ」リストから選択します。QMF カタログに保存できるオブジェクトのタイプはビジュアル照会、書式、およびプロシージャです。
7. 「コメント」フィールドに、コメントを指定できます。
8. オブジェクトを他のユーザーと共有することを指定する場合は、「オブジェクトを他のユーザーと共有」を選択します。自分だけがオブジェクトを使用できるように指定する場合は、このチェック・ボックスを選択しないでください。
9. 「終了」をクリックします。オブジェクトが QMF カタログに保存されます。

---

## 保存オブジェクトを開く

保存オブジェクトを開くために指定する必要がある情報は、オブジェクトが保存されている場所によって異なります。

### このタスクについて

オブジェクトはリポジトリ、QMF カタログ、またはファイルに保存できます。

保存オブジェクトを開くには:

### 手順

1. 「ファイル」 > 「ファイルの場所」を選択します。
2. ポップアップ・メニューから、オブジェクトが保存されている場所に応じて以下のいずれかを選択します。
  - **QMF** カタログ: 開きたいオブジェクトが **QMF** カタログにある場合。
  - リポジトリ: 開きたいオブジェクトがリポジトリにある場合。
  - ファイル: 開きたいオブジェクトがファイルにある場合。
3. 「ファイルの場所」ウィンドウが開きます。要求される情報は、選択した項目によって異なります。

## QMF カタログ・オブジェクトを開く

QMF カタログ・オブジェクトを開くときは、QMF カタログがあるデータ・ソース、およびオブジェクトの所有者と名前を指定する必要があります。

### このタスクについて

QMF オブジェクトは、2 つある方法のいずれか一方で開くことができます。

### 手順

1. 「ワークスペース」ビューまたは「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで、開きたいオブジェクトが含まれている **QMF** カタログを開き、そのオブジェクトにナビゲートして、そのオブジェクトをダブルクリックします。エディターにその **QMF** オブジェクトが開きます。
2. ウィンドウを使用して **QMF** カタログを検索して開きます。
  - a. 「ファイル」 > 「ファイルの場所」 > 「**QMF** カタログ」を選択します。
  - b. 「データ・ソース」フィールドに、**QMF** カタログがあるデータ・ソースの名前を指定します。
  - c. 「所有者」フィールドに、開きたいオブジェクトの所有者を指定します。識別子の正しい形式で所有者を指定する必要があります。
  - d. 「名前」フィールドに、開きたいオブジェクトの名前を指定します。識別子の正しい形式で名前を指定する必要があります。
  - e. 「フォルダー」フィールドに、開くオブジェクトが格納されているフォルダーの名前を指定します。このサーバー上にある他のフォルダーを指定するには、省略符号 (...) をクリックします。

- f. 指定されたデータ・ソース上の QMF カタログに保存されたオブジェクトをリストするには、「リストから」ボタンをクリックします。「オブジェクト・リスト」ウィンドウが開きます。このウィンドウで、開くオブジェクトを検索、リスト、および選択します。
- g. 「OK」をクリックします。オブジェクトがエディター・ウィンドウで開きます。

## リポジトリ・オブジェクトを開く

リポジトリ・オブジェクトを開くには、現在接続しているリポジトリにある使用可能なオブジェクトのリストから選択します。

### このタスクについて

リポジトリに保存されたオブジェクトを開くには:

#### 手順

1. 「ファイル」 > 「ファイルの場所」 > 「リポジトリ」を選択します。
2. 現在のリポジトリが、「リポジトリ項目の選択」リスト・ボックスのツリー構造に表示されます。開きたいオブジェクトが見つかるまでフォルダーを展開します。オブジェクトを選択します。
3. 「OK」をクリックします。オブジェクトがエディター・ウィンドウで開きます。

## ファイルに保存されたオブジェクトを開く

ファイルに保存されたオブジェクトを開くには、オブジェクトが含まれるファイルの名前と場所を指定します。

### このタスクについて

ファイルに保存されたオブジェクトを開くには:

#### 手順

1. 「ファイル」 > 「ファイルの場所」 > 「ファイル」を選択します。
2. オペレーティング・システム固有の「開く」ウィンドウが開きます。ファイルの名前と場所を指定します。
3. 「開く」をクリックします。オブジェクトがエディター・ウィンドウで開きます。



## 第 4 章 照会の作成

照会とはデータ・ソースに情報を要求することです。リレーショナル・データ・ソースの情報を要求するには、構造化照会言語 (SQL) ステートメントを使用して標準の方法で照会を構成できます。または、SQL に精通していない場合は、照会ビルダー編集機能を使用することで照会をグラフィカルに構成できます。

### 照会タイプ

QMF では、データを照会する方法が複数用意されています。照会で実行できることと照会結果は、実行する照会のタイプによって異なる場合があります。

次の表では、QMF でサポートされる照会タイプをリストして、各タイプの使用方法について説明します。

タイプ	説明	このタイプの照会の特性
ビジュアル照会	SQL で記述されるか照会ビルダー・エディターで作成された照会。	<p>ビジュアル照会は、QMF for TSO/CICS とは共有されません。</p> <p>ビジュアル照会には、SQL と、QMF for Workstation および QMF for WebSphere ファミリーのフォーマット設定コマンドのセットが含まれ、結果セット上で実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 列のグループ化および集約</li><li>• データ・セルおよびテキストのフォーマット設定</li><li>• より強力な新しい構文 (JavaScript にユーザー定義関数を組み込む構文) の使用による、計算列の作成</li><li>• ユーザーが切り替えられるグラフを作成するための説明</li><li>• 結果セットに適用する基準のフィルタリング</li><li>• 置換変数のマルチレベル・プロンプト</li></ul> <p>結果はエクスポートすることも、ビジュアル報告書およびビジュアル・ダッシュボードで使用することもできます。</p>
分析照会	他の照会の結果セットを操作して、クライアント・サイドの結合、追加、クロス集計、その他のタイプの分析変換を実行します。	<p>リポジトリに保存されるか、ファイルとして保存されます。QMF カタログには保存されません。</p> <p>QMF for TSO/CICS とは共有されません。</p> <p>これが参照する他のすべての照会からの SQL と、フォーマット設定コマンドのセット (ビジュアル照会、QMF for Workstation、および QMF for WebSphere で使用できるコマンドと同等) が含まれ、結果セット上で実行されます。</p> <p>結果はエクスポートすることも、フォーム、ビジュアル報告書、およびビジュアル・ダッシュボードで使用することもできます。</p>

## 照会インターフェース

QMF は、堅固な照会機能を備えています。照会作成エディターを使用して新しい照会を作成するか、既存の照会をインポートすることができます。インポートした照会は、必要に応じて編集できます。

ビジュアル照会エディターでは、さまざまなスキル・レベルおよび知識レベルに合わせて調整された各種照会インターフェースを使用して、リレーショナル、分析、および OLAP の各照会を作成できます。技術ユーザーは慣れ親しんだ SQL インターフェースの使用を選択でき、ビジネス・ユーザーはグラフィカル・ユーザー・インターフェースを選択できます。

下表に、QMF でサポートされる各種照会エディターと、各エディターの使用方法に関する情報を示します。

タイプ	説明	このタイプのエディターの特性
SQL エディター	照会は SQL で作成されます。	<ul style="list-style-type: none"><li>ビジュアル照会の作成に使用します。</li><li>SQL ステートメントはエディターに直接入力します。</li><li>ユーザーは SQL に精通している必要があります。</li></ul>
指示照会エディター	照会は、照会の作成に使用する表、列、行、および条件に関する情報の入力を求めるプロンプトをユーザーに出すことによって作成されます。	<ul style="list-style-type: none"><li>照会作成プロセスを通じてユーザーをガイドします。</li><li>ユーザーは SQL に精通している必要がありません。</li><li>指示照会エディターが SQL ステートメントを構成します。</li></ul>
照会ビルダー・エディター	照会は、表、結合、列、ソート、および行の情報を指定することで視覚的に作成されます。	<ul style="list-style-type: none"><li>ビジュアル照会の作成に使用します。</li><li>ユーザーは照会で使用する情報を図示します。</li><li>ユーザーは SQL に精通している必要がありません。</li><li>照会ビルダー・エディターが SQL ステートメントを構成します。</li></ul>

ビジュアル照会エディターでは、照会インターフェース内の「SQL」タブ、「指示照会」タブ、または「作成」タブを選択して、エディターを切り替えることができます。

ヒント: 1 つのタブで実行されたアクションが、他のタブに表示される照会ビューに自動的に反映され、ユーザーは必要に応じて 3 つの照会エディターの組み合わせを使用して照会を作成できます。ただし、SQL エディターで照会テキストに対して行われた変更 (和集合や副選択など) により、照会が指示照会エディターまたは照会ビルダー・エディターに適さない状態になることがあります。このような場合、照会は SQL ビューでのみ引き続き編集可能です。

「照会のドロー」ウィザードを使用して、指定した照会タイプと表に基づいて照会オブジェクトを自動的に作成できます。このメニュー・オプションは、QMF for CICS/TSO の DRAW コマンドと同じです。

習熟した QMF ユーザーであれば、コマンド・バーを使用して照会またはデータベース表にアクセスできます。コマンド・バーには、コマンドの実行対象のサーバーを選択する手段に加えて、コマンド自体の領域も含まれています。

## SQL エディターを使用したビジュアル照会の作成

SQL 照会エディターで SQL ステートメントを入力すれば、照会を作成できます。  
SQL 照会エディターを使用することにより、ビジュアル照会を作成できます。

## SQL を使用したビジュアル照会の作成


QMF でビジュアル照会オブジェクトを作成できます。

### このタスクについて

このタスクでは、SQL を使用してビジュアル照会を作成する方法について説明します。

SQL を使用してビジュアル照会を作成するには、以下のようになります。


### 手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択して、「**QMF** オブジェクト」フォルダーを展開するか、ツールバー上の「新規ビジュアル照会」() アイコンをクリックして、「新規ビジュアル照会の作成」ウィザードを開きます。
2. 「QMF オブジェクト」のリストから「ビジュアル照会」を選択します。
3. 「名前」フィールドにビジュアル照会の名前を指定し、ビジュアル照会の保存先を「データ・ソース」フィールドに指定します。
4. 「終了」をクリックします。

ビジュアル照会エディターが開きます。

5. 「SQL」タブをクリックし、エディターで SQL 入力域を開きます。
6. 入力テキスト域に SQL ステートメントのテキストを入力します。

ご自分の責任で、SQL ステートメントの構文が正しいことを確認してください。

7. ツールバー上の「照会の実行」() アイコンをクリックします。

現在接続されているデータ・ソースに対して、ビジュアル照会が実行されます。結果がインターフェースに返されます。照会結果は、「結果」タブに表示されません。対応するタブをクリックすることで複数のビューを切り替えることができます。

8. 照会結果を取得した後、いくつかのオプションが用意されています。
  - 照会結果の列と行のフォーマット
  - 列または行の集約
  - 照会結果への計算列の追加
  - 置換ウィンドウを使用した変数の定義
  - 図表の生成
  - 即時報告書の生成
  - 照会結果を多数の形式にエクスポートする。

注: **SQL** ビジュアル照会オブジェクトは、閉じる操作を行うまで、開いたままになります。ビジュアル照会オブジェクトを、閉じるときに再度実行する必要がある場合は、リポジトリに保存しなければなりません。

9. 「保存」アイコンをクリックして、「オブジェクトの保存」ウィンドウを開きます。ビジュアル照会オブジェクトをファイルまたはリポジトリに保存することができます。

## ビジュアル照会にコンテンツ・アシストを使用

QMF for Workstation を使用している場合、コンテンツ・アシストを用いてステートメントを入力すると、その際にオプションのリストが提供されるので SQL ステートメントを完成させるのに役立ちます。

### このタスクについて

SQL ステートメントの入力時にコンテンツ・アシストを使用するには:

#### 手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択して、「**QMF** オブジェクト」フォルダーを展開します。「**QMF** オブジェクト」のリストから「ビジュアル照会」を選択します。
2. 「名前」フィールドに照会の名前を、さらに「データ・ソース」フィールドには照会を保存する場所を指定します。「終了」をクリックします。
3. 「**SQL**」タブをクリックします。
4. **SQL** ステートメントの入力中に、**Ctrl+Spacebar** を押します。カーソルの下にドロップダウン・リストが開きます。ドロップダウン・リストの内容は、**SQL** ステートメント内のカーソルの位置と、呼び出している表の内容によって異なります。例えば、コンテンツ・アシストの選択時に **SELECT \* FROM Q** が表示される場合、ドロップダウン・リストには所有者名が **Q** のデータ・ソース内のすべての表が表示されます。**SELECT \* FROM Q.STAFF WHERE** が表示される場合、ドロップダウン・リストには **Q.STAFF** 表のすべての列が表示されます。
5. 列、関数、または表参照の一部を入力する際にコンテンツ・アシストを選択すると、その部分的に入力されたキーワードがたくさん候補がある不明瞭なものではない限り、コンテンツ・アシストによってそのキーワードが自動的にすべて入力されます。例えば、**SELECT \* FROM Q.ST** と入力する際、**STAFF** 表が自動的に入力されます。この場合、文字 **ST** で始まる **Q** スキーマの表は 1 つだけだからです。
6. ドロップダウン・リストからオプションを選択します。選択したテキストが **SQL** ステートメントに自動的に挿入されます。

## ビジュアル照会にパラメーター・ヒントを使用

QMF for Workstation では、**SQL** ステートメントに入力中の関数のパラメーターの要約が、パラメーター・ヒントに示されます。

### このタスクについて

**SQL** テキストにパラメーター化関数を入力中にパラメーター・ヒントを使用するには:



## 手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択して、「**QMF** オブジェクト」フォルダーを展開します。「**QMF** オブジェクト」のリストから「ビジュアル照会」を選択します。
2. 「名前」フィールドに照会の名前を、さらに「データ・ソース」フィールドには照会を保存する場所を指定します。「終了」をクリックします。
3. 「**SQL**」タブをクリックします。
4. パラメーター化関数の最初の部分 (関数の名前と左括弧のある部分) を入力します。例えば、SUM( と入力します。
5. **Ctrl+Shift+Spacebar** キーを押します。ツールチップが開き、関数を完成させる方法が例示されます。例えば、SUM( が表示されている場合、ツールチップには SUM(<numeric-expression>) と表示されます。
6. 表示されたヒントを参考にしながら、パラメーター化関数を完成させます。

---

## 指示照会エディターを使用したビジュアル照会の作成

指示照会エディターを使用して、照会から複雑な照会までを作成できます。指示照会エディターは、SQL ステートメントを作成するために必要な情報を入力するようにプロンプトを出します。


### このタスクについて

「指示照会」エディターを使用して新しい SQL 照会を作成するには:

## 手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択して、「**QMF** オブジェクト」フォルダーを展開します。
  - a. 「ビジュアル照会」をダブルクリックします。
  - b. 「名前」フィールドに照会の名前を指定し、「データ・ソース」フィールドには照会を保存する場所を指定します。
  - c. 「終了」をクリックします。
  - d. 「指示照会」タブをクリックします。
2. 以下の各ペインを使用して照会を作成します。
  - 「表」: 照会で使用する表を指定する。

時間的なデータをサポートする DB2 のバージョン (例えば DB2 z/OS v10) を実行している場合に、時間的なデータ用に構成された表を指示照会に追加

すると、「時間枠」 アイコンが使用可能になります。照会に複数の表がある場合、「時間枠」アイコンは、時間的なサポート用に構成されている表が選択されたときに限り使用可能になります。


「時間枠」アイコンをクリックすると、システム時刻またはビジネス時刻のいずれか (表が構成されている時刻のタイプによって異なる) として特定の時点を指定できるウィンドウが起動します。特定の表に対してシステム時刻またはビジネス時刻の対のうち 1 つのみが使用可能になります。

時間的なデータのサポートにより、表データに履歴的な観点が提供されます。履歴データは、多くの場合、特定のビジネス・ケースに役立ちます。例えば、ビジネスで、過去数カ月の請求時に適用された保険の補償範囲レベルに関する情報へのアクセスが必要になることがあります。時間的なデータをサポートする表には、行がシステム時刻、ビジネス時刻、またはその両方について有効である期間に関する情報が、保管および記録されます。システム時刻 (またはトランザクション時刻) は、トランザクションが記録された時刻です。ビジネス時刻 (または有効時刻) は、実世界の最新ビジネス・データに関する情報について、データが有効な時刻です。

時間的なデータのサポートを必要とする表および列の作成時に、DBA がそのような表および列を指定した場合、DB2 は、データに対する更新が行われるたびに履歴を自動的に維持します。

時間枠を指定するには、「時間枠」アイコンをクリックして、「システム時刻」および「ビジネス時刻」に値を指定します。

- a. 「システム時刻」ラベルおよび「ビジネス時刻」ラベルの右側にあるドロップダウン・リストには、SQL リファレンス・オプションがあります。
- b. 「次の日時」、「開始」、または「期間」を選択します。これらのオプションの使用法の詳細については、SQL リファレンスの資料を参照してください。

- c. 「日時」アイコン  をクリックして、関連する日付を設定します。

指定した期間が必要ない場合、対応するチェック・ボックスをクリアします。表を削除するか、その所有者または名前を編集すると、指定したすべての時間枠が失われます。

「次の日時」オプションは、FOR ステートメントの SQL に時間的な指定を生成します。 <SYSTEM\_TIME | BUSINESS\_TIME> AS OF <selected timestamp>

「開始」オプションは、FOR ステートメントの SQL に時間的な指定を生成します。 <SYSTEM\_TIME | BUSINESS\_TIME> FROM <selected timestamp>

「期間」オプションは、FOR ステートメントの SQL に時間的な指定を生成します。 <SYSTEM\_TIME | BUSINESS\_TIME> BETWEEN <selected timestamp1> AND <selected timestamp2>

- 「結合条件」：照会で複数の表を使用する場合に、表の結合条件を指定する。
  - 「列」：照会結果に含める列を指定する。
  - 「ソート条件」：照会結果の行のソート方法を指定する。
  - 「行条件」：照会結果で戻される行を制限する条件を指定する。
  - 「重複行を組み込む」チェック・ボックス: 重複行を照会結果に含めるように指定する。
3. 照会の作成を終えたら、「照会の実行」アイコンをクリックします。

現在接続されているデータ・ソースに対して、照会が実行されます。結果が戻されます。

照会結果は、「結果」タブによって識別されます。

複数ある照会ビューを切り替えるには、対応するタブをクリックします。

照会結果を取得した後、いくつかのオプションが用意されています。以下のことが可能です。

- 照会結果の列および行をフォーマット設定する。
- 列または行を集約する。
- 計算列を照会結果に追加する。
- 報告書を生成する。
- 照会結果を多数の形式にエクスポートする。

照会オブジェクトは、閉じるまでは開いたままになっています。新しい照会文書を閉じるとき、照会オブジェクトを再度実行したい場合は、保存する必要があります。

4. 「保存」アイコンをクリックして、「オブジェクトの保存」ウィンドウを開きます。

ご使用のユーザー ID に付与されている許可に応じて、照会オブジェクトは、ファイル、ワークスペース、QMF カタログ、またはリポジトリに保存できます。

## 表の追加

指示照会編集機能を使用して照会を作成するときに、「表」ウィンドウを使用して表を照会に追加します。また、このダイアログで、照会で指定された表を変更することもできます。

### このタスクについて

指示照会編集機能を使用して照会を作成するときに、表を照会に追加するには、以下のようにします。

### 手順

1. 指示照会編集機能から「表」ウィンドウを開きます。
2. 照会に含める表を指定します。「表の所有者」フィールドに、表の所有者を入力します。
3. 「表」ペインで「表の追加」ツールバー・ボタンをクリックします。
4. 「表名」フィールドに、表名を入力します。
5. 表の所有者および名前がわからない場合は、データ・ソースを検索してどの表が使用可能かを確認することができます。表を検索するには:
  - a. リストに入れる表の所有者の ID を「表の所有者」フィールドに指定します。ID の正しい形式で所有者を指定する必要があります。複数の名前に一致する突き合わせパターンを指定することができます。すべての表をリストするには、% 記号を入力します。
  - b. 「名前」フィールドを使用して、リストされる表をさらに絞り込むことができます。リストに入れる表名の ID を「表名」フィールドに指定します。識別子の正しい形式で名前を指定する必要があります。突き合わせパターンを

指定して複数の名前を合致させることができます。特定の所有者の表をすべてリストするには、% 記号を入力します。

- c. 指定した基準と一致する表をデータ・ソースで検索するには、「リストから追加」ボタンをクリックします。「表リスト」ウィンドウが開き、データ・ソースにある、検索基準に一致するすべての表がリストされます。
  - d. 照会に組み込む表を表のリストから選択します。
6. 連続して追加する各照会で指定の所有者名を使用する場合は、「所有者フィルターの保管」チェック・ボックスを選択します。「表」ダイアログ・ボックスを開くたびに、保存した所有者名が「表の所有者」フィールドに自動的に表示されます。
  7. 「追加」をクリックします。表が照会に追加されます。表の名前が、指示照会編集機能の「表」ペインに表示されます。

## 表の結合

複数の表を追加できます。表を照会に追加するときに、新しい表を既存の表に結合する方法を指定する必要があります。

### このタスクについて

「表」ウィンドウを使用して別の表を照会に追加すると、「結合条件」ダイアログが自動的に開きます。

以下の 2 つの「結合条件」ダイアログがあります。

- 「表の結合」ウィンドウ: 表をリンクする結合のタイプを指定します。結合のタイプには、内部結合、左外部結合、右外部結合、または全外部結合があります。
- 「列の結合」ウィンドウ: 結合する各表の列を指定します。

制約事項: データベース表およびアクセラレーター表を 1 つの照会に結合することはできません。別々のアクセラレーターに保管されている複数の表を結合することもできません。

表を結合するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「指示照会」エディターを使用して「表の結合」ウィンドウを開きます。
2. 元の表に結合する表を、表の「照会に結合する表の選択」リストから選択します。
3. 2 つの表をリンクする結合のタイプを選択します。以下の結合のタイプのラジオ・ボタンの中からいずれかを選択してください。
  - 内部結合。両方の表で一致する値がある行のみを、照会結果に出力します。内部結合は、他の結合演算子を指定しない場合は暗黙的に実行されます。内部結合は、左表の各行を右表の各行と比較し、一致する行のみを保持します。結果表では、結合された表両方の行が欠落している場合があります。
  - 左外部結合。左の表のすべての行と、左の表の行と一致する右の表の行のみを、照会結果に出力します。
  - 右外部結合。右の表のすべての行と、右の表の行と一致する左の表の行のみを、照会結果に出力します。

- 完全外部結合。両方の表のすべての行を、照会結果に出力します。
4. 「続行」をクリックして、表の結合処理を完了します。

## 次のタスク

表の結合のステップは、列の結合です。

## 列の結合

表の結合に使用する列を指定する必要があります。

### このタスクについて

「列の結合」ウィンドウは、「指示照会」エディターを使用して照会を作成するときに、複数の表の結合条件を指定するための 2 番目の段階として自動的に開きます。各表のこれらの列の値が等しい行が結合されます。

列を結合するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「指示照会」エディターを使用して「列の結合」ウィンドウを開きます。
2. 「結合可能な列」リストから列を 1 つ選択します。

この照会に組み込まれたすべての表の列がリストされます。

「(表名の) 列」リストで選択された列として、同じデータ・タイプの列を選択する必要があります (NUMERIC、DATE、TIME)。

3. 「(表名の) 列」リストから列を 1 つ選択します。

右の表 (結合している表) の列のみがリストされます。

「結合可能な列」リストで選択された列として、同じデータ・タイプの列を選択する必要があります (NUMERIC、DATE、TIME、CHARACTER)。

4. 「追加」をクリックします。

「結合可能な列」リストおよび「(表名の) 列」リストに表示された列で、値が同じ行が結合されます。

「列の結合」ウィンドウが閉じます。

## 次のタスク

次のステップでは、照会結果に組み込む列を指定します。

## 照会結果の列の指定

照会結果に組み込む列を指定できます。

### このタスクについて

「列」ウィンドウを使用して、「指示照会」編集機能または「照会ビルダー」編集機能で、照会結果に組み込む列を指定します。デフォルトでは、照会に組み込まれ

た表のすべての列が照会結果に含まれます。複数の表が照会に含まれている場合は、各表に含まれる列がすべて組み込まれます。

照会結果に組み込む列を指定するには、以下のようになります。

## 手順

1. 「列の追加」ボタンをクリックして「列」ウィンドウを開きます。

- 照会に追加された各表は「表」フィールドにリストされます。

複数の表がある場合、各表は Q.STAFF(A) および Q.INTERVIEW(B) などの文字が接頭部として付加されます。

- 表の列はすべて、「列」フィールドにリストされます。
- 列に含まれるデータのタイプは、「タイプ」フィールドにリストされます。
- 列に関連付けられたラベルは、「ラベル」フィールドにリストされます。

列のラベルは、システムの列見出しまたは列テキストです。これは、照会が表示されるとき、または結果が印刷されるときに使用されます。

- 列に関連付けられたコメントは、「コメント」フィールドにリストされます。

2. 以下のいずれかの方法で、照会結果に列を組み込むことができます。

- a. 「列」フィールドに表示される列の名前をクリックして、使用可能な列のリストから列を選択します。

リストされる列をフィルター処理するには、「値」領域にあるテキスト・フィールドに、必要な列名または列ラベルを入力します。この列名または列ラベルは、列に関連付けられているものです。

- b. 「表」フィールドで表名を選択して、表のすべての列を選択します。
- c. 「列」フィールドで値「<すべての列>」を選択することにより、表のすべての列を選択します。
- d. 「または、ここに式を入力」フィールドに式を入力します。

入力した式は、列を評価して、その列を照会結果に含むかどうかを決定するために使用されます。

ヒント: 省略符号 (...) をクリックすると、式ビルダーが開きます。式ビルダーには、SQL 式の作成に使用する共通エレメント (列名、定数、関数、および演算子など) のパレットが用意されています。「式ビルダー」ボタンをクリックすると、式エレメントのテンプレートが式フィールドに挿入されます。

3. 「合計機能」リストから、照会結果の列を合計する方法を選択します。

以下の合計オプションを指定できます。

- (なし) - 合計処理は適用されません。
- 平均 - 列にあるすべての値の平均が合計フィールドに組み込まれます。
- カウント - すべての行のカウントが合計フィールドに組み込まれます。
- 最大 - 列に含まれていた最大値が合計フィールドに組み込まれます。
- 最小 - 列に含まれていた最小値が合計フィールドに組み込まれます。

- 合計 - 列にあるすべての値の合計が合計フィールドに組み込まれます。
4. 照会結果の列に新しい名前を指定するには、「新規列名」フィールドに新しい名前を入力します。

新しい名前を指定しない場合、照会結果の列見出しの列名は、「列」フィールドに表示される列名と完全に同じになります。

5. 「追加」をクリックします。

列が照会結果に組み込まれます。照会結果に含める各列について、これらのステップを繰り返します。

6. 「指示照会」編集機能での作業時に、照会結果に追加された列を変更する場合は、「変更」ボタンをクリックします。

列が変更され、「列」ウィンドウが閉じます。

7. 照会結果に組み込みたい列をすべて追加し終えたら、「閉じる」をクリックします。「列」ウィンドウが閉じます。

## 照会結果のソート条件の指定

照会結果で戻される行の順序を決定するソート条件を指定することができます。

### このタスクについて

「ソート条件」ダイアログを使用して、照会結果に適用するソート条件を指定します。「ソート条件」ダイアログは、「指示照会」エディターで照会を作成する場合に使用します。行は昇順 (A ~ Z) または降順 (Z ~ A) でソートできます。複数の列で照会結果行をソートする場合には、1 番目の列が最初に配列され、2 番目の列は最初の列に定義されたソート順で配列されます。

照会結果のソート条件を指定するには:

### 手順

1. 「指示照会」エディターの「ソート条件」ペインにある「ソート条件の追加」ボタンをクリックして、「ソート条件」ウィンドウを開きます。
2. 以下のいずれかの方法で、照会結果のソートに使用される列を指定します。
  - 「結果セットの列」リストから、1 つ以上の列を選択します。「結果セットの列」には、照会結果に入る列がリストされます。ソート条件を追加する場合、1 つまたは複数の列を選択することができます。ソート条件を変更する場合には、1 つの列のみを選択することができます。
  - 「または、ここに条件を入力」フィールドで条件式を指定します。省略符号 (...) をクリックすれば、式ビルダーが開きます。式ビルダーは条件式を作成するときに役立ちます。式ビルダーには、SQL 式の作成に使用する共通エレメント (列名、定数、関数、および演算子など) のパレットが用意されています。「式ビルダー」ボタンをクリックすると、式エレメントのテンプレートが式フィールドに挿入されます。
3. ソート方向を指定します。

照会結果を昇順 (最低値から最高値の順) でソートすることを指定するには、「昇順」をクリックします。

照会結果を降順 (最高値から最低値の順) でソートすることを指定するには、「降順」をクリックします。

最初の列は 1 次ソートに使用され、以降の列は最初のソート順序を使用してソートされます。

4. 「追加」をクリックして、ソート条件を照会結果に追加します。

ソート条件を変更する場合は、「変更」をクリックします。

ソート条件に含める各列について、この処理を繰り返します。

ソート条件に含める列を選択し終わったら、「閉じる」をクリックします。「ソート条件」ウィンドウが閉じます。

## 照会結果の行条件の指定

行条件を指定すれば、照会結果で返される行を制限できます。行条件を指定しない場合は、すべての修飾行が照会から戻されます。

### このタスクについて

「行条件」ダイアログを使用して、照会結果の行条件を指定します。「行条件」ダイアログは、「指示照会」エディターで照会を作成する場合に使用します。

照会結果の行条件を指定するには:

### 手順

1. 「指示照会」エディターの「行条件」ペインにある「行条件の追加」をクリックして、「行条件」ウィンドウを開きます。
2. 行を照会結果に含むために満たさなければならない複数の条件を指定する場合は、「コネクター」ラジオ・ボタンを使用して、それぞれの条件がどのように接続されるかを指示する必要があります。
  - 「および」を選択した場合、行が含まれるためには、指定している現在の条件と前の条件（「指示照会」エディターの「行条件」ペインにリストされている）の両方が満たされる必要があります。
  - 「または」を選択した場合は、現在の条件または前の条件のいずれかが満たされると、行が含まれます。

「および」と「または」の両方を使用して複数の条件を接続すると、データ・ソースの規則によって条件の処理方法が決まります。

3. 照会結果に含める対象として検査する列を、「リストから列を選択」から選択します。

「リストから列を選択」には、照会結果に含まれることになる列がすべてリストされます。

「左側」領域にあるテキスト・フィールドに、必要な行名を入力すれば、リストされる列をフィルター処理できます。

4. 列を決定する条件式を指定するには、「または、ここに式を入力」フィールドに式を入力します。



5. 省略符号 (...) をクリックして、式ビルダーを開きます。式ビルダーは条件式の作成に役立ちます。

式ビルダーには、SQL 式の作成に使用する共通エレメント (列名、定数、関数、および演算子など) のパレットが用意されています。

「式ビルダー」ボタンをクリックすると、式エレメントのテンプレートが式フィールドに挿入されます。

6. 「演算子」フィールドを使用して、行条件式の演算子を指定します。
  - a. 演算子をそのまま使用する場合は、「肯定」を選択します。
  - b. 演算子を否定形に変更する場合は、「否定」をクリックします。

例えば、「等しくない」を指定するには、「否定」をクリックし、リストから「等しい」演算子を選択します。行条件式の左右両側が数値データ・タイプである場合は、「で始まる」、「で終わる」、または「含む」演算子を使用することはできません。

注: IBM DB2 Spatial Extender がデータベースにインストールされている場合、地理情報データ・タイプ (点、線、および多角形) を使用できます。ただし、左右両側が地理情報データ・タイプである場合に限り、地理情報述部を使用することができます。

7. 「右側」領域で、行の検査条件を指定します。
  - a. 式ビルダー・ボタンを使用すると、容易に条件を作成できます。
  - b. コンマで区切られた値を持つ任意の形式のファイルから行条件を追加するには、「条件をファイルからインポート」をクリックします。
  - c. 一連の照会結果から行条件を指定するには、「SQL 照会の実行により条件をインポート」をクリックして照会の SQL テキストを入力します。
  - d. 1 つまたはすべての行条件を除去するには、「条件の除去」または「すべての条件を除去」ボタンを使用できます。
8. 「追加」をクリックします。

行条件が追加され、「指示照会」エディターの「行条件」ペインに表示されます。

追加する条件ごとにこのプロセスを繰り返します。

9. 各条件を指定し終わったら、「閉じる」をクリックします。

「行条件」ウィンドウが閉じて、制御が指示照会エディターに戻ります。

---

## 照会ビルダー・エディターでのビジュアル照会の作成

照会ビルダー・エディターを使用して、ビジュアル照会を作成できます。表、結合、列、ソート、および行の情報を指定すると、エディターによって SQL ステートメントが構成されます。

### このタスクについて

照会ビルダー・エディターでビジュアル照会を作成するには、表を追加する必要があります。その後で、結合を表に追加して特定の表のフィールドを指定したり、行

条件およびグローバル条件を追加して作成された照会の SQL テキストを編集したり、複数の SQL ステートメントを照会に追加したりすることができます。

## 照会ビルダー・エディターでの表の追加および結合

照会ビルダーエディターでビジュアル照会を作成するには、最初に表を追加する必要があります。

### このタスクについて

照会ビルダー・エディターで表を追加するには、以下のようになります。

### 手順

1. メインメニューから「ファイル」 > 「新規」 > 「ビジュアル照会」を選択します。「新規ビジュアル照会の作成」ウィザードが開きます。「名前」フィールドに照会の名前を指定し、「データ・ソース」フィールドには照会に使用するデータ・ソースを指定します。「終了」をクリックします。
2. 「作成」タブをクリックします。照会ビルダー編集機能が開きます。「作成」タブは、「表」、「フィールド」、および「SQL 編集機能」という 3 つのセクションに分かれています。

ヒント: セクション名の横にあるボタンをクリックしてセクションを展開/省略すると、特定のセクションのすべての機能が使用可能になります。

3. 表を照会に追加するには、「プラス」ボタンをクリックします。「表」ウィンドウで、照会に組み込む 1 つ以上の表を選択します。追加する各表のビジュアル表示は、「表」セクションに示されます。「推奨される表」リストには、指定したデータ・ソースの ER ダイアグラムからの表が含まれています。表を「推奨される表」から追加するには、その表をダブルクリックします。
4. 指定したデータ・ソースの使用可能な ER ダイアグラムを表示し、フィールドを追加または除去するには、「ER ダイアグラム」ボタンをクリックします。
5. 表を照会から除去するには、除去する表にナビゲートして「閉じる」をクリックします。
6. 表内の列をソートするには、ソートする列を持つ表にナビゲートしてソート・ボタンをクリックします。また、「すべての列を表示」チェック・ボックスをクリアすると、照会に含まれない列を非表示にすることができます。
7. いくつかの表の間に関係を指定し、表を結合するには、一方の表にある列を選択して他方の表にある列にドラッグします。複数の結合条件をセットアップできます。「表」セクションが展開されている場合は、一方の表の列から 2 番目の表の列へ、接続線が描画されます。

制約事項: データベース表およびアクセラレーター表を 1 つの照会に結合することはできません。別々のアクセラレーターに保管されている複数の表を結合することもできません。

8. オプション: 結合条件のタイプを編集するには、展開された「表」セクションで任意の 2 つの表間に示された結合線を右クリックします。メニューから「結合の変更」を選択して、結合条件を変更します。「表の結合」ウィンドウが開きます。新しい結合条件を選択できます。結合条件のタイプについて詳しくは、『複数の表に対する結合条件の編集』トピックのステップ 2 を参照してください。

9. 結合条件を除去するには、削除する結合を右クリックして「結合の除去」を選択します。

## 表に対する結合条件の編集

結合条件を編集して 2 つの表のリンク方法を変更できます。

### このタスクについて

2 つの表に指定された結合条件を編集するには:

#### 手順

1. 「照会ビルダー」編集機能ウィンドウの「表」セクションにある表の図を結合する線を右クリックします。「結合の変更」をクリックします。「表の結合」ウィンドウが開きます。
2. 以下のいずれかの選択項目から、2 つの表をリンクする結合のタイプを選択します。
  - 内部結合。両方の表で一致する値がある行のみを、照会結果に出力します。
  - 左外部結合。左の表のすべての行と、左の表の行と一致する右の表の行のみを、照会結果に出力します。
  - 右外部結合。右の表のすべての行と、右の表の行と一致する左の表の行のみを、照会結果に出力します。
  - 完全外部結合。両方の表のすべての行を、照会結果に出力します。
3. 「変更」をクリックして、新しい結合条件を保管します。

## ビジュアル照会のフィールドおよび条件を指定

照会ビルダー編集機能の「フィールド」では、照会結果セットに組み込む列を選択したり、照会結果のソート条件や行条件を指定したりできます。

### このタスクについて

照会ビルダー編集機能で表のフィールドを指定するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「作成」タブの「フィールド」セクションを展開します。

注: 照会に対して選択されているすべての表のすべての列が、照会結果の列表に自動的に組み込まれます。すべての表列が照会に組み込まれている場合は、「<すべての列>」項目が表示されます。

- 照会結果に特定の列を表示するには、対応するチェック・ボックスを選択するか、またはクリアすることができます。
  - 個別の列を照会結果に追加するには、列を「表」セクションのいずれかの表から、「フィールド」セクションの照会結果の表にある特定の行にドラッグします。
2. 特定の列を照会に指定するには、85 ページの『照会結果の列の指定』トピックを参照してください。

3. 列表に組み込んだ列ごとに、対応する表のフィールド内のソートおよび行の条件を適用できます。列のセルの 1 つをクリックして、以下の 1 つ以上の列に値を指定します。

表 12. 列および使用可能なアクション

列名	アクション
表	この列は、現在の列が含まれる表の名前を指定します。
列名	この列は、現在の列の名前を指定します。 ヒント: 「列名」セルをダブルクリックして、下矢印をクリックしてください。現在の表からのすべての列名がリストされます。現在の列に置き換わる別の列名を選択するか、または現在の列名を除去できます。
列タイプ	この列は、現在の列に含まれるデータのタイプを表示します。
表示名	この列は、照会結果で列見出しとして使用される名前を指定します。
集約	この列は、列に適用される集約のタイプを指定します。 「集約」セルをダブルクリックし、下矢印をクリックしてください。
ソート順序	この列は、この列が照会結果内で行をソートするために使用されるかどうかを指定します。「ソート順序」セルをダブルクリックし、下矢印をクリックしてソートを選択してください。
ソート順序	この列は、列のソート順シーケンスを指定します。数値の最も低い列が、最初にソートされます。
条件	この列は、データの行を照会結果に組み込むために満たす必要のある条件を指定します。この列に指定する条件は、列値に適用されます。例えば、Number という列があり、行条件 > 10 を入力した場合、照会結果には、Number 列の値が 10 よりも大きいデータ行のみが組み込まれます。各列に適用する行条件を入力してください。

4. 照会結果に重複する行を追加するかどうかを指定するには、「重複行を含む」チェック・ボックスを選択します。

### 照会結果の列の指定

照会結果に組み込む列を指定できます。

#### このタスクについて

「列」ウィンドウを使用して、「指示照会」編集機能または「照会ビルダー」編集機能で、照会結果に組み込む列を指定します。デフォルトでは、照会に組み込まれた表のすべての列が照会結果に含まれます。複数の表が照会に含まれている場合は、各表に含まれる列がすべて組み込まれます。

照会結果に組み込む列を指定するには、以下のようになります。

## 手順

1. 「列の追加」ボタンをクリックして「列」ウィンドウを開きます。

- 照会に追加された各表は「表」フィールドにリストされます。

複数の表がある場合、各表は Q.STAFF(A) および Q.INTERVIEW(B) などの文字が接頭部として付加されます。

- 表の列はすべて、「列」フィールドにリストされます。
- 列に含まれるデータのタイプは、「タイプ」フィールドにリストされます。
- 列に関連付けられたラベルは、「ラベル」フィールドにリストされます。

列のラベルは、システムの列見出しまたは列テキストです。これは、照会が表示される時、または結果が印刷される時に使用されます。

- 列に関連付けられたコメントは、「コメント」フィールドにリストされません。

2. 以下のいずれかの方法で、照会結果に列を組み込むことができます。

- a. 「列」フィールドに表示される列の名前をクリックして、使用可能な列のリストから列を選択します。

リストされる列をフィルター処理するには、「値」領域にあるテキスト・フィールドに、必要な列名または列ラベルを入力します。この列名または列ラベルは、列に関連付けられているものです。

- b. 「表」フィールドで表名を選択して、表のすべての列を選択します。
- c. 「列」フィールドで値「<すべての列>」を選択することにより、表のすべての列を選択します。
- d. 「または、ここに式を入力」フィールドに式を入力します。

入力した式は、列を評価して、その列を照会結果に含むかどうかを決定するために使用されます。

ヒント: 省略符号 (...) をクリックすると、式ビルダーが開きます。式ビルダーには、SQL 式の作成に使用する共通エレメント (列名、定数、関数、および演算子など) のパレットが用意されています。「式ビルダー」ボタンをクリックすると、式エレメントのテンプレートが式フィールドに挿入されます。

3. 「合計機能」リストから、照会結果の列を合計する方法を選択します。

以下の合計オプションを指定できます。

- (なし) - 合計処理は適用されません。
- 平均 - 列にあるすべての値の平均が合計フィールドに組み込まれます。
- カウント - すべての行のカウントが合計フィールドに組み込まれます。
- 最大 - 列に含まれていた最大値が合計フィールドに組み込まれます。
- 最小 - 列に含まれていた最小値が合計フィールドに組み込まれます。
- 合計 - 列にあるすべての値の合計が合計フィールドに組み込まれます。

4. 照会結果の列に新しい名前を指定するには、「新規列名」フィールドに新しい名前を入力します。

新しい名前を指定しない場合、照会結果の列見出しの列名は、「列」フィールドに表示される列名と完全に同じになります。

5. 「追加」をクリックします。

列が照会結果に組み込まれます。照会結果に含める各列について、これらのステップを繰り返します。

6. 「指示照会」編集機能での作業時に、照会結果に追加された列を変更する場合は、「変更」ボタンをクリックします。

列が変更され、「列」ウィンドウが閉じます。

7. 照会結果に組み込みたい列をすべて追加し終えたら、「閉じる」をクリックします。「列」ウィンドウが閉じます。

## グローバル行条件の指定

照会ビルダー編集機能で、ビジュアル照会に対してグローバル行条件を指定できます。

### このタスクについて

グローバル行条件は、照会結果内の特定の列だけでなく、より多くのものに影響を与えます。このペインは、ファイル内の使用可能なデータ列のうち、照会結果に含まれないデータ列を含む条件を設定する場合に使用できます。

グローバル行条件を指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「行条件の表示」をクリックし、「グローバル条件」ペインを開きます。
2. 「条件の挿入」をクリックします。「行条件」ウィンドウが開きます。
3. 行を照会結果に入れるために満たす必要のある複数の条件を指定する場合は、「コネクター」領域で、それぞれの条件がどのように接続されるかを指示する必要があります。
  - 「かつ」コネクターは、行を組み込むために現在の条件と前の条件を満たす必要があることを意味します。
  - 「または」コネクターは、行を組み込むために現在の条件または前の条件のいずれかを満たすことができることを意味します。

ヒント: 「および」と「または」の両方を使用して複数の条件を接続すると、データ・ソースの規則によって条件の処理方法が決まります。

4. 「左側」領域で、照会結果に追加するために条件式に使用する列をリストから選択します。

このリストには、照会結果に入るすべての列が含まれます。必要な行名をテキスト・フィールドに入力することにより、リストされる列をフィルター処理できます。

5. 列を決定する条件式を指定する場合は、「または、ここに式を入力」フィールドに式を入力します。

- a. 省略符号 (...) をクリックすれば、式ビルダーが開きます。式ビルダーは条件式を作成するときに役立ちます。式ビルダーには、SQL 式の作成に使用する共通エレメント (列名、定数、関数、および演算子など) のパレットが用意されています。
  - b. 式ビルダーのボタンをクリックすると、式要素のテンプレートが式フィールドに挿入されます。
6. 「演算子」領域で、グローバル行条件式の演算子を選択します。
    - a. 演算子をそのまま使用する場合は、「肯定」を選択します。
    - b. 演算子を否定形に変更する場合は、「否定」をクリックします。

例えば、「等しくない」を指定するには、「否定」をクリックし、リストから「次の指定に等しい」演算子を選択します。

重要: 行条件式の左右両側が数値データ・タイプである場合は、「で始まる」、「で終わる」、または「含む」演算子を使用することはできません。

重要: IBM DB2 Spatial Extender がデータベースにインストールされている場合、地理情報データ・タイプ (点、線、および多角形) を使用できません。ただし、左右両側が地理情報データ・タイプである場合に限り、地理情報述部を使用することができます。

7. 「右側」領域で、行の検査条件を指定します。
  - a. 式ビルダー・ボタンを使用すると、容易に条件を作成できます。
  - b. コンマで区切られた値を持つ任意の形式のファイルから行条件を追加するには、「条件をファイルからインポート」をクリックします。
  - c. 一連の照会結果から行条件を指定するには、「SQL 照会の実行により条件をインポート」をクリックして照会の SQL テキストを入力します。
  - d. 1 つまたはすべての行条件を除去するには、「条件の除去」または「すべての条件を除去」ボタンを使用できます。
8. 「追加」をクリックします。行条件が追加され、照会ビルダー編集機能の「グローバル条件」ペインに表示されます。追加する条件ごとにこのプロセスを繰り返します。
9. 各条件を指定し終わったら、「閉じる」をクリックします。
10. 「グローバル条件」ペインでは、以下の操作を実行できます。
  - a. 入力した条件の順序を変更するには、リストから条件を選択して、「条件を上へ移動」または「条件を下へ移動」をクリックします。
  - b. 特定の条件の前に条件を挿入するには、必要な条件にナビゲートして「条件の挿入」をクリックし、ブランク行に条件のテキストを入力します。リストの選択した条件の前に条件が追加されます。
  - c. 条件を編集するには、リストから選択して「条件の編集」をクリックし、条件のテキストを変更します。
  - d. 条件を除去するには、リストから選択して「条件の除去」をクリックするか、行から条件のテキストを削除します。

## SQL テキストの編集

「表」セクションおよび「フィールド」セクションで加えた変更は、自動的に「SQL 編集機能」セクションでビジュアル照会に適用されます。

### このタスクについて

照会ビルダー編集機能で照会の SQL テキストを編集するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「作成」タブの「SQL 編集機能」セクションを展開します。
2. 照会の SQL テキストを編集します。
3. 「照会の実行」ツールバー・ボタンをクリックします。現在接続されているデータ・ソースに対して、照会が実行されます。照会結果は、「結果」タブに表示されます。

---

## 「照会のドロワー」ウィザードを使用したビジュアル照会の作成

「照会のドロワー」ウィザードを使用して、指定した照会タイプと表に基づいて照会オブジェクトを自動的に作成します。このメニュー・オプションは、QMF for CICS/TSO の DRAW コマンドと同等の機能を提供します。

### このタスクについて

「照会のドロワー」ウィザードは、照会のための SQL ステートメントを作成します。

「照会のドロワー」ウィザードを使用して照会を作成するには:

### 手順

1. 「照会のドロワー」ツールバー・ボタンをクリックして「照会のドロワーを使用する新規照会の作成」ウィザードを開きます。

「照会のドロワーを使用する新規照会の作成」ウィザードは、「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」 > 「照会のドロワー・ウィザードを使用して照会」を選択して開くこともできます。
2. 「データ・ソース」リストから、照会で使用する表が保管されているデータ・ソースを選択します。
3. 「照会タイプ」ラジオ・ボタンのいずれかをクリックして、作成する照会のタイプを選択します。以下のいずれかを選択できます。
  - 「選択」で、1 つ以上の表からデータの行を取得する SQL SELECT ステートメントが作成されます。
  - 「更新」で、表に含まれるデータを変更するための SQL UPDATE ステートメントが作成されます。
  - 「挿入」で、表に新しい行を追加するための SQL INSERT ステートメントが作成されます。このステートメントを使用して更新できるのは、一度に 1 つの表だけです。
4. 「表の照会」リストで、照会に組み込む表 (1 つまたは複数) を指定します。



- a. 表を指定するには、「所有者」フィールドに表の所有者を、「名前」フィールドに表の名前を、および「ID」フィールドに表の相関 ID を入力します。
- b. 「追加」をクリックします。

この表が「表」リストにリストされます。

5. 表名が不明な場合は、「リストから追加」をクリックして、データ・ソース上で使用可能な表のリストを検索できます。

「オブジェクト・リスト」ウィンドウが開きます。照会タイプとして「選択」オプションを選択した場合、「オブジェクト・リスト」ウィンドウを使用して、照会に組み込む 1 つ以上の表を選択することができます。

6. 「表」リストから表を除去するには、表名を選択して「表の除去」アイコンをクリックします。「表」リストで表を上下に移動するには、「表をリスト内で上へ移動」または「表をリスト内で下へ移動」アイコンを使用します。
7. 「終了」をクリックして照会を作成します。

「照会のドロワー・ウィザードを使用した新規照会の作成」が閉じます。照会のための SQL が、照会ワークステーション・ウィンドウに表示されます。使用可能なウィンドウで、SQL を編集できます。

## データ・ソース表のリスト

「オブジェクト・リスト」ダイアログ・ボックスを使用して、データ・ソースで使用可能な表をリストします。

### このタスクについて

データ・ソースにある表をリストするには:

#### 手順

1. 「オブジェクト・リスト」ダイアログ・ボックスを開くには、「照会のドロワー」ウィザードにある「リストから追加」ボタンをクリックします。
2. リストする表の所有者を「所有者」フィールドに入力し、リストする表の名前を「名前」フィールドに入力します。

識別子の正しい形式で名前を指定する必要があります。複数の名前に一致する突き合わせパターンを指定することができます。任意の文字を含む任意の長さのストリングのマッチングを行うためには、パーセント文字 (%) を使用する。例えば、名前が文字 A で始まる表をすべてリストするためには A% と入力します。単一文字のマッチングを行うためには、下線文字 (\_) を使用する。例えば、2 番目の位置に文字 A が入っている所有者の表をすべてリストするためには \_A% と入力します。

3. 「リスト最新表示」ボタンをクリックして、「所有者」フィールドおよび「名前」フィールドで指定した検索基準と一致する表の検索を、データベースで開始します。

ユーザーが使用を許可されている表のみがリストに入ります。

結果は「オブジェクト・リスト」リスト・ボックスに戻されます。このリストから、照会で使用したい表を選択します。

4. 「OK」をクリックして、「オブジェクト・リスト」ダイアログ・ボックスを閉じます。

制御が「照会のドロー」ウィザードに戻ります。選択した 1 つまたは複数の表は、「表」リストにリストされます。

---

## 照会でのプロンプトの操作

照会または dynamart が特定の値または範囲にフォーカスするように指示するプロンプトを追加することによって、照会または dynamart をフィルター処理できます。これにより、照会するデータの量が制限され、照会の結果を絞り込むことができます。フィルター処理はデータベース・レベルで機能します。

### このタスクについて

オブジェクト・タイプに応じて、以下のタイプのプロンプトを使用します。

表 13. プロンプト・タイプ

オブジェクト・タイプ	使用可能なプロンプト
ビジュアル照会、dynamart	SQL プロンプト、単純プロンプト、およびプロンプト階層
分析照会、複合 dynamart	単純プロンプトまたはプロンプト階層で構成される共有プロンプト

以下のトピックには、プロンプトの追加に関する詳細情報が記載されています。

## SQL プロンプトの操作

ビジュアル照会または dynamart から取得されるデータを制限するには、SQL プロンプトを使用します。

### このタスクについて

SQL プロンプトは、指定された値によってフィルター処理されるデータのみを選択する条件を記述するときに追加する、SQL ステートメントの一部です。照会を実行するとき、結果セットを取得する前にこのプロンプトの値を指定する必要があります。

SQL プロンプトをビジュアル照会に追加するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「SQL」タブを開きます。

注: ビジュアル照会エディターの「作成」タブの「条件」列で、プロンプトを指定できます。

2. アンパーサンド (&) 文字でマークを付けた変数を使用して条件を記述します。
3. アンパーサンドの後にプロンプトの名前を入力します。

## 例

例えば、

```
SELECT DISTINCT A.AREA, A.STATE_NAME  
FROM DEMO.STATEDetails A  
WHERE (A.AREA >&S)
```

## 単純プロンプトの操作

照会から取得されるデータを制限するには、単純プロンプトを使用します。単純プロンプトは照会と密接に関連していて、照会内に保存できます。

単純プロンプト値を決定すれば、照会結果をフィルター処理して、設定値に基づく結果のみを表示できます。例えば、従業員データに対して照会を実行するときに、特定部門に関するデータのみを表示したい場合があります。照会に単純プロンプトを追加すれば、その照会を実行するたびに、関心のある部門名を入力するように求められます。

置換パラメーターを持つ照会を作成して、デフォルト値を持つ単純プロンプトを使用すれば、そのような値は照会に自動的に追加され、手動による入力はありません。照会結果には、単純プロンプトのデフォルト値として指定された部門名についてのデータのみが含まれています。

単純プロンプトを操作するには、「プロンプトの管理」ウィンドウを使用するか、またはビジュアル照会エディターの「デザイン」タブにある「プロンプト」ペインを使用します。

### 単純プロンプトの追加

この照会で取得するデータを決定するために、ビジュアル照会、dynamart、分析照会、または複合 dynamart に単純プロンプトを追加できます。これにより、指定した値または範囲のみが使用されます。

### このタスクについて

「単純プロンプト」ウィンドウを使用して、プロンプトを指定し、そのプロンプトを照会に追加します。

単純プロンプトを照会に追加するには、以下のようになります。

### 手順

1. 照会編集機能で「デザイン」タブに切り替えます。
2. 「デザイン」タブで「プロンプト」ペインを使用して、プロンプトを管理します。

注: ビジュアル照会または dynamart では、「プロンプト割り当て」ペイン内のテーブルには、照会の列と、その列に割り当てられているプロンプトがリストされます。分析照会では、「プロンプト」ペインにはこの照会に使用できる共有プロンプトがリストされます。共有プロンプトについては、『共有プロンプトの操作』を参照してください。

3. 単純プロンプトを作成するには、「プロンプト」ペイン・ツールバー上の「新規プロンプト」をクリックします。

4. 「単純プロンプト」ウィンドウの「プロンプト名」フィールドにプロンプトの名前を指定します。
5. 「表示ストリング」フィールドに、照会の実行時に表示されるプロンプト・テキストを入力します。
6. 「入力タイプ」リストで、以下のようにします。
  - データベースで要求される場合に、二重引用符で囲まれている値については「リテラル」を選択します。
  - 日付部分を含むが時刻部分は含まない値については「日付」を選択します。
  - 時刻部分を含むが日付部分は含まない値については「時刻」を選択します。
  - 日付と時刻の両方の部分を含む値については「タイム・スタンプ」を選択します。
  - 入力されたまま変更されることなくデータベースに渡される値については「現状のまま」を選択します。
  - 一連の事前定義定数として表される値については「列挙」を選択します。このトピックの終わりある使用例を参照してください。
7. 「時刻」、「タイム・スタンプ」、または「日付」オプションを選択した場合は、以下のことが可能です。
  - 「形式」フィールドに形式ストリングを指定できます。標準形式の 1 つを選択するか、「日時」パターンに対応する独自のストリングを指定できます。
  - 「日時」ウィンドウで値を設定できます。このウィンドウを開くには、「デフォルトの日付/時刻を選択」をクリックします。
8. 照会の実行時に特定の値を自動的に使用する必要がある場合、「デフォルト値」チェック・ボックスを選択して、「デフォルト値」フィールドに値を指定します。

注: 「デフォルト値」チェック・ボックスをクリアした場合は、照会の実行時に、値を入力するようプロンプトが出されます。このチェック・ボックスを選択すると、指定したデフォルト値が自動的に使用され、プロンプト・ウィンドウは表示されません。
9. 「割り当て済みの列」リストから選択可能な列の 1 つを選択することにより、照会の列にプロンプトを割り当てます。
10. 単純プロンプトを編集するには、「プロンプト」ペインで使用可能なプロンプトのリストから、編集するプロンプトを選択し、「プロンプトの編集」をクリックします。
11. 単純プロンプトを削除するには、「プロンプト」ペインで使用可能なプロンプトのリストからプロンプトを選択して、「プロンプトの削除」をクリックします。
12. 「OK」をクリックして、「単純プロンプト」ウィンドウを閉じます。

## タスクの結果

前回照会を実行した際に指定したプロンプト値を表示するには、「照会」 > 「プロンプト値の表示」を選択します。

## 例

「列挙」変数タイプは、パラメーターとして配列を要求する関数 (`getprompt()` が引数で使用された `in_op()` 関数など) で使用します。 `getprompt()` に入力された値は解析され、データベースに対して配列として表されます。Samples リポジトリからのサンプル・データ・ソースに基づく次の照会について考察してください。

```
SELECT SHOP_NAME, ADDRESS, CITY, STATE, ZIP, PHONE FROM DEMO.PIZZA
```

公式 `in_op@[STATE], getprompt("state_arr")` を使用してフリー・スタイル・フィルターを作成し、列挙タイプの `state_arr` プロンプトを作成し、照会を実行して '**AK**'、'**AL**' を「プロンプト変数」ダイアログに入力します。結果セットに、AK 状態と AL 状態に関するデータのみが表示されます。

## 照会を使用したプロンプト値の保存

照会の実行時に入力するプロンプト値は、この照会に保存できます。

### このタスクについて

「プロンプト値の保存」機能を使用すれば、「プロンプト変数」ウィンドウにおいて、現在の照会を次回実行したときに、最後に保存した値をデフォルトとして使用できます。

dynamart または複合 dynamart をプロンプトとともに使用した場合、入力したプロンプト値は必ず、この dynamart 内に保存されます。

プロンプト値を保存することにした場合、すべてのユーザーが「プロンプト変数」ウィンドウで前回のプロンプト値を確認したり、この値をデフォルトとして使用して照会を実行したりできることに注意してください。

照会内にプロンプト値を保存するには、以下のようにします。

### 手順

1. アクティブな照会がエディターに表示されている状態で、「照会」 > 「プロンプトの管理」を選択します。
2. 「プロンプトの管理」ウィンドウで「プロンプト値の保存」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスがクリアされている場合は、プロンプト値が保存されないため、照会を実行するたびにプロンプト値を入力する必要があります。このチェック・ボックスが選択されている場合は、「プロンプト変数」ウィンドウに前回の値を表示して、それをデフォルトとして使用できます。

注: dynamart および複合 dynamart とともにプロンプトを使用した場合は、「プロンプト値の保存」チェック・ボックスが必ず選択され、このチェック・ボックスをクリアできなくなります。

3. 「OK」をクリックして、ウィンドウを閉じます。
4. ツールバーの「照会の実行」をクリックして、照会を実行します。
5. 「プロンプト変数」ウィンドウで、照会の実行に使用する値を入力します。
6. ビジュアル照会が実行された後に、その照会をリポジトリまたはファイル・システムに保存します。

## プロンプト階層の操作

プロンプト階層により、オプションのフラット・リストまたは階層リストから 1 つ以上の値を選択できます。

プロンプト階層は、特定の照会とは無関係に保管される独特の QMF オブジェクトです。そのため、プロンプト階層は複数の照会オブジェクトで使用できます。プロンプト階層は、そのオプション・リストを、例えば「販売区域からの地域の選択」などの照会からドロースます。さらに、プロンプト階層は、値の階層を無制限の詳細レベルで表示できます。例えば、「販売区域からの地域、国の選択」と照会するとします。この場合、オプションのリストは、「南北アメリカ」、「ヨーロッパ」、「APAC」、さらに「南北アメリカ」の下に「アメリカ合衆国、カナダ、メキシコ」のように細分化されます。ユーザーは値をプロンプトの両レベルで選択できます。例えば、「APAC」はその全体を選択し、「南北アメリカ」は「メキシコ」を除外して選択できます。

### プロンプト階層の作成

プロンプト階層を作成するには、「新規プロンプト階層の作成」ウィザードを使用します。

#### このタスクについて

プロンプト階層を作成するには、以下のようにします。

#### 手順

1. メインメニューから「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択して、「新規」ウィザードの「ウィザードの選択 (Select a wizard)」ページを開きます。
2. 「**QMF** オブジェクト」フォルダーを展開し、「プロンプト階層」を選択し、「次へ」をクリックして、「新規プロンプト階層の作成」ウィザードを開きます。
3. 「名前」フィールドにプロンプト階層の名前を指定し、「終了」をクリックして「新規プロンプト階層の作成」ウィザードを閉じ、「プロンプト階層」編集機能を開きます。
4. 「プロンプト階層」編集機能の「データ・ソース」セクションで、プロンプト階層に使用するデータのソースを指定します。プロンプト階層のデータ・ソースとして、ビジュアル照会、分析照会、**dynamart**、または複合 **dynamart** を使用できます。
  - 作成したプロンプト階層内にデータ・ソース・オブジェクトへのリンクを保管する場合は、「リンク」を選択します。次にステップ 5 に進みます。
  - 作成したプロンプト階層内にデータ・ソースを保管する場合は、「組み込み」を選択します。次にステップ 6 に進みます。
5. 「リンク」を選択した場合は、「リソース」フィールドの横にある省略符号 (...) ボタンをクリックし、必要なデータ・ソースにナビゲートして、そのデータ・ソースを選択します。選択したデータ・ソースへのパスが「リソース」フィールドに表示されます。
6. 「組み込み」を選択した場合は、以下のいずれかのオプションを選択します。
  - 「インポート」をクリックして、必要なデータ・ソース・オブジェクトにナビゲートし、そのオブジェクトを選択します。

- 「新規」をクリックして、プロンプト階層のデータ・ソース照会または dynamart を作成します。
  - 「編集」をクリックして、プロンプト階層の組み込みデータ・ソースとして既に指定されている照会または dynamart を変更します。
7. 「階層レベル」セクションで「レベルの追加」をクリックして、プロンプト階層にレベルを追加します。
  8. 「階層レベル」リストで、追加したレベルを選択し、そのレベルに対して以下のプロパティを指定します。
    - 「レベル名」フィールドで、レベルに使用する名前を指定します。
    - 「表示値」リストから列を選択します。その列の値は、ユーザーが変数値の入力を求められたときに表示されます。
    - 「戻り値」フィールドで、表示値に対応する変数値を返す列を選択します。

例えば、「SALES」部門の部門番号が「10」としてあります。この部門名が表示値として設定され、部門番号列が戻り値として設定されます。ユーザーがプロンプトで SALES と入力すると、照会に 10 が返されます。

    - 「順序」リストで、照会結果の順序付けに使用する列を選択します。
  9. プロンプト階層内のレベルの位置を変更するには、レベルを選択して、「レベルを上に移動」または「レベルを下に移動」をクリックします。
  10. 「プロンプト階層のプレビュー」セクションで「最新表示」をクリックして、プロンプト階層をプレビューします。
  11. プロンプト階層にレベルを追加し終わったら、そのプロンプト階層をリポジトリまたはファイルに保管します。

## タスクの結果

前回照会を実行した際に指定したプロンプト値を表示するには、「照会」 > 「プロンプト値の表示」を選択します。


## 既存のプロンプト階層の追加

リポジトリまたはファイルに保管されている既存のプロンプト階層をビジュアル照会、分析照会、dynamart、または複合 dynamart に追加できます。

### このタスクについて

既存のプロンプト階層を追加するには、以下のようになります。


#### 手順

1. 照会エディターで「デザイン」タブに切り替えます。
2. 「新規プロンプト階層」 (  ) ボタンの矢印をクリックし、「プロンプト階層の追加」を選択します。
3. 「プロンプト名」フィールドで、プロンプト階層に使用する名前を指定します。
4. 「表示ストリング」フィールドで、照会の実行時に表示するテキストを指定します。

5. 省略符号 (...) ボタンをクリックして、追加するプロンプト階層にナビゲートし、その階層を選択します。 選択したプロンプト階層へのパスが「リソース」フィールドに表示されます。
6. リソースのタイプを選択します。
  - 「組み込み」を選択して、プロンプト階層を照会または dynamart に保管します。
  - 「リンク」を選択して、プロンプト階層へのリンクを照会または dynamart に保管します。
7. オプション: プロンプト階層をビジュアル照会または dynamart に追加する場合、「プロンプト・レベル」列で、照会列ごとに、必要なプロンプト階層レベルを選択できます。
8. 「OK」をクリックして「プロンプト階層」ダイアログを閉じ、照会エディターの「デザイン」タブに戻ります。 追加したプロンプト階層が「プロンプト」ペインに表示されます。
9. 選択した列にプロンプト階層レベルを割り当てます。
  - ビジュアル照会または dynamart で、選択したプロンプト階層レベルを照会列に割り当てます。
    - a. 「プロンプト割り当て」ペインで、列を選択します。
    - b. 「プロンプト」列で下矢印をクリックして、その列のプロンプト階層レベルを選択します。
  - 分析照会または複合 dynamart で、プロンプト階層を共有プロンプトのグループに追加して、これを子照会の列に割り当てます。
    - a. 「変換」ペインで、「フィルター」をダブルクリックして「dynamart フィルター」ウィザードを開きます。
    - b. 「フィルター処理を有効にする」を選択します。
    - c. 「フィルター・タイプ」域から「プロンプト階層フィルター」を選択します。「次へ」をクリックして「プロンプト階層レベルを列に割り当て (Assign prompt hierarchy levels to columns)」ページを開きます。
    - d. 列を選択し、「プロンプト」列で下矢印をクリックして、その列のプロンプト階層レベルを選択します。
    - e. 「終了」をクリックして、「dynamart フィルター」ウィザードを閉じます。

注: 照会に追加した計算列にプロンプト階層を割り当てることができません。
10. プロンプト階層を編集するには、「プロンプト」ペインで使用可能なプロンプトのリストからプロンプトを選択して、「プロンプトの編集」をクリックします。
11. プロンプト階層を削除するには、「プロンプト」ペインで使用可能なプロンプトのリストからプロンプトを選択して、「プロンプトの削除」をクリックします。
12. リンクされたプロンプト階層のデータを更新するには、「プロンプト」ペインで対象のプロンプト階層を選択し、「リンクされたプロンプト階層を最新表示」をクリックします。



13. プロンプト階層のレベル構造またはデータ・ソース・オブジェクトを編集するには、「プロンプト」ペインで「プロンプト階層編集機能で開く」()をクリックします。「プロンプト階層」編集機能でプロンプト階層が開かれます。

## プロンプト階層を照会に組み込む

組み込みプロンプト階層を作成して、ビジュアル照会、dynamart、分析照会、または複合 dynamart を使用して保管することができます。


### 始める前に

照会エディターの「デザイン」タブで、組み込みプロンプト階層の追加先の照会を開きます。

### このタスクについて


プロンプト階層を作成して照会に組み込むには、以下のようになります。

### 手順

- 「デザイン」タブの「プロンプト」ペインで下矢印をクリックして「組み込みプロンプト階層の作成」()を選択し、「組み込みプロンプト階層の作成」ウィザードを開きます。
- 「プロンプト名」フィールドで、プロンプト階層に使用する名前を指定します。
- 「表示ストリング」フィールドで、照会の実行時に表示するテキストを指定します。
- 「終了」をクリックして、「組み込みプロンプト階層の作成」ウィザードを閉じ、「プロンプト階層」編集機能を開きます。
- 「プロンプト階層」編集機能でプロンプト階層を作成して保管します。詳細については、102 ページの『プロンプト階層の作成』を参照してください。
- 照会エディターの「デザイン」タブに戻ります。作成したプロンプト階層が照会に組み込まれ、「プロンプト」ペインに表示されます。
- 選択した列にプロンプト階層レベルを割り当てます。
  - ビジュアル照会または dynamart で、選択したプロンプト階層レベルを照会列に割り当てます。
    - 「プロンプト割り当て」ペインで、列を選択します。
    - 「プロンプト」列で下矢印をクリックして、その列のプロンプト階層レベルを選択します。
  - 分析照会または複合 dynamart で、選択したプロンプト階層レベルを子照会の列に割り当てます。
    - 「変換」ペインで、「フィルター」をダブルクリックして「dynamart フィルター」ウィザードを開きます。
    - 「フィルター処理を有効にする」を選択します。

- c. 「フィルター・タイプ」域から「プロンプト階層フィルター」を選択します。「次へ」をクリックして「プロンプト階層レベルを列に割り当て (Assign prompt hierarchy levels to columns)」ページを開きます。
- d. 列を選択し、「プロンプト」列で下矢印をクリックして、その列のプロンプト階層レベルを選択します。
- e. 「終了」をクリックして、「dynamart フィルター」ウィザードを閉じます。

注: 照会に追加した計算列にプロンプト階層を割り当てることができません。

8. プロンプト階層を編集するには、「プロンプト」ペインで使用可能なプロンプトのリストからプロンプトを選択して、「プロンプトの編集」をクリックします。
9. プロンプト階層を削除するには、「プロンプト」ペインで使用可能なプロンプトのリストからプロンプトを選択して、「プロンプトの削除」をクリックします。
10. リンクされたプロンプト階層のデータを更新するには、「プロンプト」ペインで選択可能なプロンプトのリストからデータを選択し、「リンクされたプロンプト階層を最新表示」をクリックします。
11. プロンプト階層のレベル構造またはデータ・ソース・オブジェクトを編集するには、「プロンプト」ペインで「プロンプト階層編集機能で開く」() をクリックします。「プロンプト階層」編集機能でプロンプト階層が開かれます。

## タスクの結果

前回照会を実行した際に指定したプロンプト値を表示するには、「照会」 > 「プロンプト値の表示」を選択します。

## 照会を使用したプロンプト値の保存

照会の実行時に入力するプロンプト値は、この照会に保存できます。

### このタスクについて

「プロンプト値の保存」機能を使用すれば、「プロンプト変数」ウィンドウにおいて、現在の照会を次回実行したときに、最後に保存した値をデフォルトとして使用できます。

dynamart または複合 dynamart をプロンプトとともに使用した場合、入力したプロンプト値は必ず、この dynamart 内に保存されます。

プロンプト値を保存することにした場合、すべてのユーザーが「プロンプト変数」ウィンドウで前回のプロンプト値を確認したり、この値をデフォルトとして使用して照会を実行したりできることに注意してください。

照会内にプロンプト値を保存するには、以下のようになります。

## 手順

1. アクティブな照会がエディターに表示されている状態で、「照会」 > 「プロンプトの管理」を選択します。
2. 「プロンプトの管理」ウィンドウで「プロンプト値の保存」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスがクリアされている場合は、プロンプト値が保存されないため、照会を実行するたびにプロンプト値を入力する必要があります。このチェック・ボックスが選択されている場合は、「プロンプト変数」ウィンドウに前回の値を表示して、それをデフォルトとして使用できます。

注: dynamart および複合 dynamart とともにプロンプトを使用した場合は、「プロンプト値の保存」チェック・ボックスが必ず選択され、このチェック・ボックスをクリアできなくなります。

3. 「OK」をクリックして、ウィンドウを閉じます。
4. ツールバーの「照会の実行」をクリックして、照会を実行します。
5. 「プロンプト変数」ウィンドウで、照会の実行に使用する値を入力します。
6. ビジュアル照会が実行された後に、その照会をリポジトリまたはファイル・システムに保存します。

## 共有プロンプトの操作

共有プロンプトを使用して分析照会および複合 dynamart にフィルターを適用します。

### このタスクについて

分析照会では、共有された子照会プロンプト、新しく追加された単純プロンプト、またはプロンプト階層を含むプロンプト・グループを使用します。同じタイプのプロンプトをまとめてグループ化できます。これにより、1 つのプロンプト・グループ内のすべてのプロンプトが、このグループに渡された値を受け取ります。

分析照会または複合 dynamart で共有プロンプトを管理するには、以下のようになります。

## 手順

1. 照会エディターにアクティブな照会が表示された状態で、「照会」 > 「プロンプトの管理」を選択するか、「デザイン」タブの「プロンプト」ペインを開きます。「プロンプト」ペインに、子照会プロンプトや、新しく追加された単純プロンプトまたはプロンプト階層が表示されます。
2. 単純プロンプトを追加するには、『単純プロンプトの追加』の手順を実行します。新しく追加された単純プロンプトは、その名前を借用した新しく作成されたプロンプト・グループに自動的に追加されます。
3. 既存のプロンプト階層を追加するには、『既存のプロンプト階層の追加』の手順を実行します。新しく追加されたプロンプト階層は、その名前を借用した新しく作成されたプロンプト・グループに自動的に追加されます。
4. プロンプトをデフォルト・グループから別のグループに移動するには、以下のようになります。
  - a. 「使用可能なプロンプト」リストから、グループに追加する項目を選択します。

- b. 「プロンプト・グループ」リストから、選択された項目の追加先となるグループを選択します。
- c. 「グループに追加」をクリックします。選択された項目がプロンプト・グループに追加されます。

注: 同じタイプのプロンプトおよび同じリソースを持つプロンプト階層のみグループ化できます。

5. グループからプロンプトを削除するには、以下のようになります。
  - a. 「プロンプト・グループ」リストから、削除する項目を選択します。
  - b. 「プロンプトのデタッチ」をクリックします。選択された項目がプロンプト・グループからデタッチされます。
6. プロンプト・グループの名前を変更するには、以下のようになります。
  - a. 「プロンプト・グループ」リストから、名前を変更するプロンプトを選択します。
  - b. 「プロンプト・グループ名の変更」をクリックします。
  - c. 「プロンプト・グループ」ウィンドウで、表示する名前およびストリングを指定し、「OK」をクリックします。
7. 「プロンプト・グループ」リストのプロンプト・グループの順序を変更するには、以下のようになります。
  - a. 「プロンプト・グループ」リストで、プロンプト・グループのノードまたはグループ内のプロンプトを選択します。
  - b. 「プロンプト・グループを上へ移動」または「プロンプト・グループを下へ移動」をクリックします。
8. 「プロンプトの管理」ウィンドウで作業している場合は、「OK」をクリックしてウィンドウを閉じます。

## タスクの結果

前回照会を実行した際に指定したプロンプト値を表示するには、「照会」 > 「プロンプト値の表示」を選択します。

## 照会を使用したプロンプト値の保存

照会の実行時に入力するプロンプト値は、この照会に保存できます。

### このタスクについて

「プロンプト値の保存」機能を使用すれば、「プロンプト変数」ウィンドウにおいて、現在の照会を次回実行したときに、最後に保存した値をデフォルトとして使用できます。

dynamart または複合 dynamart をプロンプトとともに使用した場合、入力したプロンプト値は必ず、この dynamart 内に保存されます。

プロンプト値を保存することにした場合、すべてのユーザーが「プロンプト変数」ウィンドウで前回のプロンプト値を確認したり、この値をデフォルトとして使用して照会を実行したりできることに注意してください。

照会内にプロンプト値を保存するには、以下のようになります。

## 手順

1. アクティブな照会がエディターに表示されている状態で、「照会」 > 「プロンプトの管理」を選択します。
2. 「プロンプトの管理」ウィンドウで「プロンプト値の保存」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスがクリアされている場合は、プロンプト値が保存されないため、照会を実行するたびにプロンプト値を入力する必要があります。このチェック・ボックスが選択されている場合は、「プロンプト変数」ウィンドウに前回の値を表示して、それをデフォルトとして使用できます。

注: dynamart および複合 dynamart とともにプロンプトを使用した場合は、「プロンプト値の保存」チェック・ボックスが必ず選択され、このチェック・ボックスをクリアできなくなります。

3. 「OK」をクリックして、ウィンドウを閉じます。
4. ツールバーの「照会の実行」をクリックして、照会を実行します。
5. 「プロンプト変数」ウィンドウで、照会の実行に使用する値を入力します。
6. ビジュアル照会が実行された後に、その照会をリポジトリまたはファイル・システムに保存します。

---

## OLAP 照会の作成

OLAP 照会を実行すると、ユーザーは、マルチディメンション・データのさまざまな部分 (ディメンション、階層、メンバー、タイトル、値、インスタンス、行、列、データ・ポイントなど) に動的にアクセスできます。

### このタスクについて

QMF for Workstation および QMF for WebSphere を使用すると、MDX を使用して照会されて XMLA を使用してアクセスされるマルチディメンション・データ・ソースに対する OLAP 照会を作成できます。

## キューブ・データの検索

OLAP 照会はマルチディメンション・データのキューブに基づいて作成されます。新規 OLAP 照会を作成するには、最初にデータのキューブを選択して開き、次に表示するキューブからの情報を選択しなければなりません。

### このタスクについて

使用可能なすべてのデータ・キューブがワークスペースにリストされます。

OLAP 照会でキューブ・データを検索するには:

## 手順

1. 「新規 OLAP 照会の作成」ウィザードを開きます。
2. 「データ・ソースを選択します」ページで、データを含むキューブのあるマルチディメンション・データ・ソースを選択します。「次へ」をクリックします。
3. ウィザードの「キューブの選択」ページが開きます。データ・ソースで使用可能なキューブは、「キューブ・モデルとキューブ」リストに表示されます。リストからキューブを選択します。「終了」をクリックします。

キューブ情報が検索され、エディター・ウィンドウにレイアウト形式で表示されます。レイアウト形式で、「キューブ構造」ツリーに、キューブで使用可能なディメンションおよび測定値がリストされ、「照会構造」ツリーに、キューブの OLAP 照会のために選択されたディメンションおよび測定値がリストされます。

「照会構造」ツリーにリストされているディメンションおよび測定値を変更して、OLAP 照会を作成し、キューブ・データの各種ビューを取得します。OLAP 照会の構造は、「枠取り」ビューにも表示されます。

4. OLAP 照会をエディター・ウィンドウで開くと、以下のタブの 1 つを選択できます。
  - 結果 - 現行の OLAP 照会の結果を表示する、「結果」ページを開きます。「結果」タブを選択すると、OLAP 照会が戻されて結果が更新されます。「枠取り」ビューと「結果」ページを使用して、OLAP 照会を動的に作成できます。
  - フィルター - キューブから取り出されたディメンションおよび測定値をフィルターに掛ける「フィルター」ページが開きます。
  - MDX - OLAP 照会の MDX ステートメントを表示する、「MDX」ページを開きます。OLAP 照会の MDX を変更できます。
  - SQL - OLAP 照会の SQL ステートメントを表示する、「SQL」ページを開きます。これは OLAP 照会のために作成された SQL の読み取り専用ビューです。このページは、OLAP 照会用に作成された SQL を表示するための SQL ベースの API をマルチディメンション・データ・ソースが使用している場合のみ有効です。
  - 結果 XML - マルチディメンション・データ・ソースから取得した OLAP 照会の XML 結果が表示される XML ページを開きます。

これは、OLAP 照会用に作成された XML の読み取り専用ビューです。このタブは、マルチディメンション・データ・ソースで XML for Analysis (XMLA) が処理される場合に、使用可能になります。
  - レイアウト - キューブに組み込まれるすべてのディメンションおよび測定値と、現在の OLAP 照会に組み込まれるディメンションおよび測定値を表示する、「レイアウト」ページを開きます。「レイアウト」ページを使用して、OLAP 照会をオフラインで作成します。
  - プレビュー - OLAP 照会結果をプレビュー表示します。

## 既存の OLAP 照会を開く

ワークスペースに含まれている既存の OLAP 照会を開くことができます。

### このタスクについて

既存の OLAP 照会を開くには、ワークスペースのフォルダーの展開と縮小を行って、開きたい OLAP 照会を見つけます。OLAP 照会として作成および保存された照会は、照会名の前に小さなキューブが表示されている固有のアイコンで識別されます。照会をダブルクリックして、OLAP 照会を開きます。照会が「OLAP 照会エディター」ウィンドウで開きます。

## キューブ・データの各種ビューを取得するための **OLAP** 照会の変更

マルチディメンション・データのキューブを開いたら、キューブを照会し、含まれる情報を表示するいくつかの方法があります。

### オフラインでの **OLAP** 照会の作成

オフラインでの OLAP 照会の作成とは、OLAP 照会の作成または変更を終えたときにのみ、キューブ・データ・ソースからデータを検索することです。

#### このタスクについて

「レイアウト」ページを使用して、OLAP 照会をオフラインで作成します。「結果」タブを選択すると、OLAP 照会の実行が開始されます。

オフラインで OLAP 照会を作成するには、次のようにします。

#### 手順

1. ワークスペースでキューブをダブルクリックするか、既存の OLAP 照会を開きます。OLAP 照会がエディター・ウィンドウで開きます。
2. OLAP 照会には、下部に並んだ 4 つのタブがあります。「レイアウト」タブを選択します。「レイアウト」ページが開きます。これには「キューブ構造」ツリーと「照会構造」ツリーが含まれます。
3. 「キューブ構造」ツリーに、キューブに含まれるディメンションおよび測定値がリストされます。
4. 「照会構造」ツリーに、OLAP 照会に含むために選択したディメンションおよび測定値がリストされます。「照会構造」ツリーは次の 3 つの要素から構成されています。
  - トップのディメンション: このノードに含まれるディメンションの値が、要約されたデータとともに照会結果の上部に表示されます。
  - サイドのディメンション: このノードに含まれるディメンションの値が、要約データの行として照会結果 (最初の列で始まる) のサイドに沿って表示されます。
  - 測定値がデータの列として照会結果に表示されます。
5. OLAP 照会に含む測定値を選択するには、「キューブ構造」ツリーでその測定値をクリックします。マウス・ボタンを押したまま、測定値を「照会構造」ツリーの「測定値」ノードまでドラッグします。照会結果内の値を表示させたい場所と同じ場所にあるノードに測定値を配置します。マウス・ボタンを離します。
6. トップの次元またはサイドの次元として OLAP 照会に含む次元を選択するには、「キューブ構造」ツリーの次元をクリックします。マウス・ボタンを押したまま、ディメンションを「照会構造」ツリーの「トップのディメンション」または「サイドのディメンション」ノードまでドラッグします。照会結果に値を表示させたい順序で、ノードにディメンションを配置します。マウス・ボタンを離します。トップ・グループまたはサイド・グループとして使用できるのはディメンションのみです。

7. 「照会構造」ツリーから測定値またはディメンションを除去するには、それをツリーから選択して、ドラッグし、「キューブ構造」ツリーにドロップし戻します。
8. 「結果」タブをクリックして、OLAP 照会を実行します。OLAP 照会が実行され、結果が「結果」ページに表示されます。

## オンラインでの OLAP 照会の作成

オンラインでの OLAP 照会の作成とは、OLAP 照会を変更するたびに、キューブ・データ・ソースからデータを検索するということです。

### このタスクについて

「枠取り (概要)」ビューと「結果」ページを使用して、OLAP 照会をオンラインで作成します。

OLAP 照会を動的に作成し、それぞれの変更の後に結果を確認するには、次のようにします。

### 手順

1. ワークスペースでキューブをダブルクリックするか、既存の OLAP 照会を開きます。OLAP 照会がエディターで開きます。
2. 「枠取り (概要)」ビューを開きます。「枠取り」ビューを開くには、「ウィンドウ」>「ビューの表示」>「枠取り」を選択します。
3. 単一の構造ツリーが「枠取り」ビューまたは「レイアウト」ウィンドウに表示されます。キューブで使用可能な次元および測定値が、キューブの名前とともにノードの下に表示されます。OLAP 照会のために選択したディメンションおよび測定値が、「レイアウト」ノードの下に表示されます。
4. OLAP 照会に組み込む測定値を選択するには、ツリーのキューブの名前ノードでその測定値をクリックします。マウス・ボタンを押したまま、測定値を「レイアウト」ノードの「測定値」ノードまでドラッグします。照会結果内の値を表示させたい場所と同じ場所にあるノードに測定値を配置します。マウス・ボタンを離します。
5. トップ・ディメンションまたはサイド・ディメンションとして OLAP 照会に組み込むディメンションを選択するには、ツリーのキューブの名前ノードでディメンションをクリックします。マウス・ボタンを押したまま、ディメンションを「レイアウト」ノードの「トップのディメンション」ノードまたは「サイドのディメンション」ノードまでドラッグします。照会結果に値を表示させたい順序で、ノードにディメンションを配置します。マウス・ボタンを離します。トップ・グループまたはサイド・グループとして使用できるのはディメンションのみです。
6. 変更するたびに、キューブ・データ・ソースからデータを検索し、照会結果が「結果」ページに表示されます。

### キューブ・データのフィルター処理

フィルター処理により、キューブから取り出されるデータ量を制限することができます。



## このタスクについて

「フィルター」ページには、そのキューブ用に定義されたディメンションがリストされます。キューブのそれぞれのディメンションには、1 つ以上の属性があります。チェック・ボックスを選択することにより、その属性のデータやすべての次元のデータをキューブから取り出すデータに含めるか除外するかを選択できます。

OLAP キューブから取り出されるデータをフィルターに掛けるには、次のようにします。

### 手順

1. ワークスペースでキューブをダブルクリックするか、既存の OLAP 照会を開きます。
2. OLAP 照会には、下部に並んだ 6 つのタブがあります。「フィルター」タブを選択します。「フィルター」ページが開きます。「フィルター」ツリーおよび「フィルター・タイプ」フィールドが含まれています。
3. 「フィルター」ツリーに、キューブのディメンション、各ディメンションの階層レベル、および各階層レベルのディメンション値がリストされます。(+) をクリックして、ディメンションを展開します。
4. フィルター・オプションを選択するには、照会に含めるディメンション値のチェック・ボックスを選別します。ディメンション、階層レベル、およびディメンション値のそれぞれにチェック・ボックスがあります。プラス (+) およびマイナス (-) ボックスを使用して、ディメンションおよび階層を展開、縮小することができます。チェック・ボックスを選択するかしないかで、ツリー構造の最下位レベルであるディメンション値から順に、データを含むか除外するかを指定します。レベル内のすべての値を選択すると、ツリー構造の上位レベルが選択されます。レベル内の値に 1 つも選択しないと、ツリー構造の上位レベルのチェック・マークが外されます。レベル内の値をいくつか選択すると、ツリー構造の上位レベルにはグレーのチェック・ボックスでチェック・マークが付きます。階層レベルごとに少なくとも 1 つの値を選択する必要があります。
5. SQL ベースの API を使用するマルチディメンション・データ・ソース上にデータ・キューブが存在する場合、フィルター・タイプの選択に応じて、ツリーの編成を変更できます。
  - 「通常のフィルター」を選択して、単一階層レベルごとにディメンション値のリストを別個に表示します。ディメンション内の階層にかかわらず、とりうる値がすべてリストされます。例えば、複数年に複数の四半期がある場合、各ディメンション値は以下のように編成されます。

```
2001
2002
Q1
Q2
```
  - 「階層フィルター」を選択して、ディメンション値を編成し、それらが属すると思われるそれぞれの親階層レベルの下に表示します。このタイプのリスト表示は、指定された値のインスタンスが、複数の階層レベルに含まれる可能性のある場合に役立ちます。例えば、複数年に複数の四半期がある場合、各ディメンション値は以下のように編成されます。

2001  
Q1  
Q2  
2002  
Q1  
Q2

6. 「結果」タブをクリックして、OLAP 照会を実行します。チェックされた値のみが結果に含まれます。
7. フィルター処理を変更するには、OLAP 照会からフィルターで除外するディメンション項目ごとに、横のチェック・ボックスのチェック・マークを外します。「結果」タブをクリックします。OLAP 照会が再実行され、選択した値のみを含む結果が戻されます。

---

## 分析照会および関連する変換

分析照会を使用して、同じまたは異なるデータ・ソースからの複数データ・セットを、1 つの結果セットに結合させることができます。

分析照会では、複数の照会または表からの結果セットが 1 つの照会結果セットに変換される方法を構成するために、変換を適用します。分析照会構造に取り込むことができる主な変換タイプは複数あります。

- 追加 - 2 つの照会または表からの照会結果を結合して、1 つの照会結果セットにします。2 つの結果セット間で列を組み合わせる方法を指定できます。
- 結合 - 2 つの照会または表からの結果セットを結合して、1 つの統合結果セットにします。これは 1 つ以上の列を結合することによって行われ、SQL の結合操作に非常によく似ています。
- クロス集計照会 - 1 つ以上の列のクロス集計が行われます。これには 2 つ以上の表の列について計算される、合計、平均、最小、最大などがあります。これには例えば、地域と月との間での製品売上の合計についての集計などがあります。
- 正規化 - 除去される列のデータを追加行に入れて返すことによって、表内の列の数を削減します。照会データが正規化されると照会処理が容易になるため、例えば同じ照会を別々のパラメーターで実行したものを容易に相互比較して集約できます。
- 条件付きグループ化 - 条件式に基づく結果セット・データの集約要約を作成できます。
- 列フィルター - 既存の列の前後に計算列を追加してフィルター処理関数を入力できます。

分析照会を作成するには、以下の手順を実行します。

1. 分析照会構造の作成。分析照会に適用する変換を選択します。
2. 分析照会変換へのデータの追加。選択した変換に対してデータを提供する表または照会を追加します。
3. 分析照会変換の構成。分析照会の最終結果セットのために、ソース・データ・セットから列を構成します。

## 分析照会構造の作成

分析照会を作成するには、分析照会変換をノードのツリー状に配置した構造をまず作成します。

### このタスクについて

デフォルトでは、分析照会を作成すると、構造は単純で、「列フィルター」という1つの変換で構成されます。その変換を別のタイプの変換に変更したり、ツリー内のデフォルトの変換ノードの上下両方に配置できる変換を追加することによって構造を拡張したりできます。この場合、新しく追加された変換は、現在の変換を包含したり、あるいはその子オブジェクトとなることができます。

分析照会構造を作成するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。「新規」ウィンドウが開きます。
2. 「QMF オブジェクト」フォルダーを展開して、「分析照会」を選択し、「次へ」をクリックします。「新規分析照会の作成」ウィザードが開きます。
3. 「名前」フィールドに分析照会の名前を指定します。
4. 「終了」をクリックします。「新規分析照会の作成」ウィザードが閉じ、新しい分析照会が「分析照会構造」に表示され、「列フィルター」がデフォルトの変換になっています。
5. 現在の変換を別の変換に変更するには、以下のようにします。
  - a. 「分析照会構造」で、現在の変換ノードを選択します。
  - b. 「変更先...」アイコンをクリックします。
  - c. リストから、現在の変換の変更後の変換タイプを選択します。

現在の変換は選択された変換タイプに変更され、「項目エディター」ペインには新しい変換の項目が表示されます。

6. 現在の変換を、構造ツリー内でその変換の上に配置される別の変換に含めるには、以下のようにします。
  - a. 「分析照会構造」で、変換ノードを選択します。
  - b. 「項目エディター」ペインのツールバーで、追加する変換のアイコンをクリックします。

新しい変換は、分析照会構造内の選択された変換の上に配置され、「項目エディター」ペインには新しい変換の項目が表示されます。

7. 現在の構造内の変換の子オブジェクトとして別の変換を追加する場合は、以下のようにします。
  - a. 「分析照会構造」で、変換の下にあるノードを選択します。
  - b. 「項目エディター」ペインのツールバーで、追加する変換のアイコンをクリックします。

新しい変換は、分析照会構造内の選択された変換の下に配置され、「項目エディター」ペインには新しい変換の項目が表示されます。

- データの追加に進むために必要な分析照会構造があることを確認します。分析照会を再構築すると現在の変換設定が失われます。

## 分析照会変換へのデータの追加

分析照会の構造の作成が完了したら、データ・セットを追加します。

### このタスクについて

分析照会構造は、照会または表のいずれかからデータを追加する必要がある、変換ノードおよびデータ・セット・ノードで構成されています。データがまだ追加されていないノードは、「<なし>」ノードと表示されます。分析照会構造内の変換がどのようなタイプであるかに関係なく、データを追加する規則は同じです。

分析照会構造にデータを追加するには、以下のようになります。

### 手順

- 「分析照会構造」で、データを追加する変換ノードを選択します。「項目エディター」ペインで、選択された変換の項目を表示できます。
- 「リポジトリ・エクスプローラー」ツリーで、追加する照会または表にナビゲートし、選択した変換ノードの下にある「<なし>」ノードにドラッグするか、変換レイアウト内の対応する列リストに直接ドラッグします。選択されたデータ・セットの列は、「項目エディター」ペインに表示されます。列の表示は、これらの列を使用する変換のタイプによって異なります。

注: 「<なし>」ノードを選択した場合は、「項目エディター」ペインのブランク領域の任意の場所に照会または表をドラッグできます。

注: データが既に追加されているノードに表または照会をドラッグすることができます。これにより、現在のデータ・セットが新しいデータ・セットに置き換えられます。

注: 表または照会を変換ノードにドラッグすると、変換はこの表または照会で置き換えられ、変換の構造は失われます。

- 別のエディターで現在開いている照会を追加するには、分析照会構造にある「<なし>」ノードを右クリックし、「開かれている項目から追加...」にナビゲートして、選択可能な照会の 1 つを選択します。
- データ・ファイルに保存されている照会を追加するには、以下のようになります。
  - 「<なし>」ノードを右クリックします。
  - 「照会の追加」を選択します。
  - 「ファイルから開く」を選択し、「次へ」をクリックします。
  - 追加する照会を参照し、ダブルクリックします。
  - 「終了」をクリックして、「ファイルから開く」ウィザードを閉じます。データ・ファイルにある照会が分析照会構造に追加されます。
- データ・ファイルに保存されている表を追加するには、以下のようになります。
  - 「<なし>」ノードを右クリックします。
  - 「表の追加」を選択します。

- c. 「ファイルから開く」を選択し、「次へ」をクリックします。
- d. 追加する表を参照し、ダブルクリックします。
- e. 「終了」をクリックして、「ファイルから開く」ウィザードを閉じます。  
データ・ファイルにある表が分析照会構造に追加されます。
6. ノード内の照会または表を、別のエディターで開かれているいずれかの照会で置き換えるには、ノードを選択し。「変更先...」アイコンを選択します。「開かれている項目に変更...」にナビゲートし、選択可能な照会を 1 つ選択します。
7. ノード内の照会または表をデータ・ファイルの照会または表に置き換えるには、以下のようにします。
  - a. ノードを選択します。
  - b. 「変更先...」アイコンをクリックします。
  - c. 「照会に変更」または「表に変更」にナビゲートします。
  - d. 続行することに同意する場合は「項目の変更」ウィンドウで「はい」をクリックします。
  - e. 「ファイルから開く」を選択し、「次へ」をクリックします。
  - f. 追加する照会または表を参照し、ダブルクリックします。
  - g. 「終了」をクリックして、「ファイルから開く」ウィザードを閉じます。
8. 表または照会を名前変更するには、表または照会を選択して「名前変更」アイコンをクリックします。照会または表の新しい名前を「照会名」フィールドに指定して、「OK」をクリックします。
9. 表または照会をデタッチするには、表または照会を選択して「デタッチ」アイコンをクリックします。照会または表のコピーが別のエディターで開きます。このオブジェクトに変更を行っても、取得元の分析照会には影響しません。
10. 別のエディターで照会または表を開いて編集するには、照会または表を選択して「別のエディターで開く」アイコンをクリックします。照会または表が別のエディターで開きます。このオブジェクトに変更を行うと、取得元の分析照会に直接影響します。

注: 別のエディターで開いている間は「項目エディター」で照会または表を表示できません。

## タスクの結果

選択した変換およびデータ・セットの分析照会構造が得られました。各変換を個別に操作して結果列をカスタマイズできるようになります。

## 分析照会变換の構成

最終結果セットをカスタマイズするには、分析照会に変換を構成します。

### このタスクについて

分析照会構造を作成してデータを追加した後、「項目エディター」内の各変換を構成して、ソース列がどのように処理されて最終結果セットになるかを定義します。分析照会变換を構成するには、以下のようにします。

## 手順

1. 「分析照会構造」で、構成する変換ノードを選択します。「項目エディター」で、選択された変換の列のレイアウトを表示できます。
2. 以下のリストの各トピックに説明されている手順を実行して、変換を構成します。
3. 分析照会構造の各変換について、ステップを繰り返します。

## 追加変換の操作

異なる照会または表から選択した結果セット列を最終結果セットに追加するには、追加変換を使用します。

### このタスクについて

追加変換を使用すれば、同じデータ・ソースまたは異なるデータ・ソースからの異なる照会または表による結果セット列を 1 つの結果セットに結合することができます。2 つの異なる照会から 2 列を追加すると、最終照会結果では、選択された両方の列のすべての行が 1 列に結合されます。「最初」リストの列によって、最終照会結果セット列の名前が決まり、その列の行が最初に表示されます。

分析照会構造で追加変換を構成するには、以下のようになります。

## 手順

1. 「分析照会構造」で、追加変換ノードを選択します。「項目エディター」ペインで、追加変換の項目を表示できます。上位ノードのソース・データ・セットの列は、「最初」リストに表示されます。下位ノードのソース・データ・セットの列は、「2 番目」リストに表示されます。
2. オプション: 選択した追加変換にデータがまだ設定されていない場合は、「<なし>」ノードに照会または表を追加します。詳しくは、『分析照会変換へのデータの追加』を参照してください。
3. 追加して一緒にする照会結果列を指定します。
  - a. 「最初」リストから列を選択します。
  - b. 「2 番目」リストから列を選択します。
  - c. 「結果列」リストの上にある「列の追加」をクリックします。新しい追加条件が「結果列」リストに追加されます。
  - d. 追加する追加条件ごとにこの手順を繰り返します。
4. 同様の名前が含まれるオブジェクトを追加変換に追加する場合は、「自動突き合わせ」をクリックすることにより、適切な追加条件の自動作成を試みることができます。自動突き合わせによる一致候補がある場合、それらは「結果列」リストに表示されます。

注: 「自動突き合わせ」をクリックすると、以前に設定した追加条件がすべて削除されます。

5. 別のデータ・セットのどの列とも突き合わせずに列を組み込むには、この列を選択して、2 番目の列リストから「<不一致>」を選択します。「結果列」リストの上にある「列の追加」をクリックします。
6. オプション: 現在の分析照会構造に別の変換を追加するには、分析照会構造の作成の手順に従ってください。

## 結合変換の操作

異なる照会および表から結果セット列を結合するには、結合変換を使用します。

### このタスクについて

結合変換を使用すれば、同じデータ・ソースまたは異なるデータ・ソースからの異なる照会または表による列を 1 つの結果セットに結合することができます。任意の数の結合条件と、内部結合、左方結合、右方結合、または完全結合を指定します。

分析照会構造で結合変換を構成するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「分析照会構造」で、結合変換ノードを選択します。「項目エディター」ペインで、結合変換の項目を表示できます。上位ノードのソース・データ・セットの列は、「左の列」リストに表示されます。下位ノードのソース・データ・セットの列は、「右の列」リストに表示されます。
2. オプション: 選択した結合変換にデータがまだ設定されていない場合は、「<なし>」ノードに照会または表を追加します。詳しくは、『分析照会変換へのデータの追加』を参照してください。
3. 「項目エディター」のツールバーで、結合のタイプを選択します。
  - 内部結合。両方の表で一致する値がある行のみを、照会結果に出力します。
  - 左外部結合。左の表のすべての行と、左の表の行と一致する右の表の行のみを、照会結果に出力します。
  - 右外部結合。右の表のすべての行と、右の表の行と一致する左の表の行のみを、照会結果に出力します。
  - 完全外部結合。両方の表のすべての行を、照会結果に出力します。
4. 結合して一緒にする照会結果列を指定します。
  - a. 「左の列」リストから列を選択します。
  - b. 「右の列」リストから列を選択します。
  - c. 「列の結合」リストから、結合条件の隣にあるチェック・ボックスを選択します。新しい結合条件が「列の結合」リストに追加され、「追加された条件」チェック・ボックスが選択されます。
  - d. 追加する結合条件ごとにこの手順を繰り返します。それぞれの新しい結合条件については、前に選択されなかった列のみを使用することができます。
  - e. 「列の結合」リストを消去するには、「追加された条件」チェック・ボックスを選択解除します。
5. 列を「結果列」リストに追加するには、この列の横にあるチェック・ボックスを選択します。
6. 列を「結果列」リストの上下に移動するには、列を選択して、「結果列」リストの上にある「列を上へ移動」または「列を下へ移動」ボタンをクリックします。
7. すべての「左の列」または「右の列」を「結果列」リストに追加するには、それぞれの列リストの上にある「すべての列を含める」チェック・ボックスを選択します。

8. すべての「左の列」または「右の列」を「結果列」から削除するには、それぞれの列リストの上にある「すべての列を含める」チェック・ボックスを選択解除します。
9. オプション: 現在の分析照会構造に別の変換を追加するには、分析照会構造の作成の手順に従ってください。

### クロス集計変換の操作

クロス集計変換を使用して、選択した 1 つの列からの集約データを他の列にわたって返すことができます。

### このタスクについて

列の 1 つを新しい行に変換することによってさまざまな列の値の関係を表示するには、クロス集計変換を適用します。クロス集計を構成するとき、1 つ以上の列をサイド・グループに定義し、1 つの列をトップ・グループに定義します。次に、トップ・グループとサイド・グループの値の交点に新たに形成されたフィールドの値に対する 1 つの集合列を選択します。

例えば、異なる地域での資材の生産数量に関するデータを示す表があるとします。

表 14. 元の結果セット・データ

製品	数量	地域 ID
合板	485	1
合板	712	2
合板	787	3
板材	959	1
板材	2372	2
板材	2360	3
羽目板	1794	1
羽目板	1940	2
羽目板	739	3
産業用パネル	1225	1
産業用パネル	627	2
産業用パネル	934	3

そして、集約値が製品のタイプと地域番号に関連付けられるように「数量」列データをクロス集計します。行を表すサイド・グループ列として「製品」列を選択してグループ化し、列を表すトップ・グループ列として「地域 ID」を選択します。「数量」列の集約値は、トップ・グループとサイド・グループの列の値の交点で形成されたフィールドにわたって配分されます。結果として、以下の表が得られます。

表 15. クロス集計による結果セット・データ

製品	数量 (1)	数量 (2)	数量 (3)
産業用パネル	1225	627	934
板材	959	2372	2360



表 15. クロス集計による結果セット・データ (続き)

製品	数量 (1)	数量 (2)	数量 (3)
合板	485	712	787
羽目板	1794	1940	739

分析照会構造でクロス集計変換を構成するには、以下のようになります。

### 手順

- 「分析照会構造」で、クロス集計変換ノードを選択します。「項目エディター」ペインで、クロス集計変換の項目を表示できます。ソース・データ・セットの列は、「グループ」および「クロス集計」セクションに表示されます。
- オプション: 選択したクロス集計変換にデータがまだ設定されていない場合は、「<なし>」ノードに照会または表を追加します。詳しくは、『分析照会変換へのデータの追加』を参照してください。
- 「グループ」セクションで、サイド・グループに使用する列の横にあるチェック・ボックスを選択します。上記の例では、「製品」列がこれに該当します。

注: 「すべての列を含める」チェック・ボックスを使用して、使用可能な列をすべて選択したり選択解除したりします。

- 「集約」列で、値をクリックし、選択される列の集約タイプをリストから選択します。
- 「クロス集計」セクションの「グループ化列」リストから、トップ・グループの列を形成する固有の値を提供する列を 1 つ選択します。上記の例では、「地域 ID」列がこれに該当します。
- 「説明列」リストで、トップ・グループ列の説明に値を提供する列を 1 つ選択します。上記の例では、「地域 ID」列がこれに該当します。
- 「値列」列で、クロス集計セルの値を提供する列の横にあるチェック・ボックスを選択します。上記の例では、「数量」列がこれに該当します。
- 「集約」列で、値をクリックし、クロス集計セル内の値の集約タイプを選択します。
- オプション: 現在の分析照会構造に別の変換を追加するには、分析照会構造の作成の手順に従ってください。

### 正規化変換の操作

正規化変換を使用して、複数の行を作成することによって、複数の列からの値を単一の列に結合します。

### このタスクについて

元の結果セットにおける異なる列値はそれぞれ、新しい結果セットにおける新しい単一データ列内の各行に配置されます。新しい結果セットでは、2 列目を使用して、特定の行に、元の結果セットのどの列値が含まれているかが示されます。

表 16. 元の結果セット・データ

地域	収益	販売数	純利益
北アメリカ	250	452	87

表 16. 元の結果セット・データ (続き)

地域	収益	販売数	純利益
アジア太平洋	290	538	92
ヨーロッパ	320	675	120

正規化を使用すると、データを以下の 2 つの書式に変換できます。

表 17. 正規化照会結果

地域	KPI	KPI 値
北アメリカ	収益	250
北アメリカ	販売数	452
北アメリカ	純利益	87
アジア太平洋	収益	290
アジア太平洋	販売数	538
アジア太平洋	純利益	92
ヨーロッパ	収益	320
ヨーロッパ	販売数	675
ヨーロッパ	純利益	120

表 18. もう 1 つの正規化照会結果

地域	KPI	KPI 値	販売数
北アメリカ	収益	250	452
北アメリカ	純利益	87	452
アジア太平洋	収益	290	538
アジア太平洋	純利益	92	538
ヨーロッパ	収益	320	675
ヨーロッパ	純利益	120	675

最初の変換では、3 つの数値列のすべてが 1 つの列ペアに正規化されています。2 つ目の例では、「収益」と「純利益」が正規化され、「販売数」が独立した列として保持されています。値の種類を示す列の名前 (このサンプルでは KPI) と、元の結果セットの列値を示す列の名前 (KPI 値) はどちらも任意であり、ユーザーが定義できることに注意してください。

正規化照会は、集約を元に戻すためによく使用され、表のピボットを回転したり、集約したデータの個々の行を表示したりします。ただし正規化は、集約した値に適用できるだけでなく、任意の結果セット・データに適用できることに注意してください。

集約したデータを含む照会は、正規化することができます。これは実質的に、クロス集計を元に戻したり、照会結果データを正規化フォーマットで表示できるようにしたりすることです。例えば、発注日ごとの売上総利益を表示するために、「家具の売上」表が「発注日」、「カテゴリー」、および「総利益」の各列で構成されているとします。表をクロス集計すると、カテゴリーごとの総利益列と、発注日列が表示されます。クロス集計照会結果は、以下に示す例のように表示されます。

表 19. 家具の売上に対するクロス集計照会結果

発注日	総利益 (いす)	総利益 (ソファ)	総利益 (その他)
2008 年 11 月 19 日	160	452	87
2008 年 11 月 23 日	0	680	181
2008 年 11 月 26 日	120	642	0

照会を正規化すると、クロス集計による結果セットが元に戻され、クロス集計が適用される前の元の照会結果に似ている照会結果が生成されます。正規化照会結果は、以下に示す例のように表示されます。

表 20. 家具の売上に対する正規化照会結果

発注日	カテゴリー	総利益
2008 年 11 月 19 日	いす	160
2008 年 11 月 19 日	その他	87
2008 年 11 月 19 日	ソファ	452
2008 年 11 月 23 日	その他	181
2008 年 11 月 23 日	ソファ	680
2008 年 11 月 26 日	いす	120
2008 年 11 月 26 日	ソファ	642

正規化変換を構成するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「分析照会構造」で、正規化変換ノードを選択します。「項目エディター」ペインで、正規化変換の項目を表示できます。ソース・データ・セットの列は、「列の正規化」セクションに表示されます。
2. オプション: 選択した正規化変換にデータがまだ設定されていない場合は、「<なし>」ノードに照会または表を追加します。詳しくは、『分析照会変換へのデータの追加』を参照してください。
3. 「ディメンション」セクションで、「変換なし」リスト・ボックスの上にある「追加」をクリックし、変更せずに含める必要がある列を選択して「OK」をクリックします。これらの列は、変換されずに表示され、正規化された列の各行に対して繰り返しの値を含むようになります。上記の例では、「発注日」列は「変換なし」列です。
4. 「列」リスト・ボックスの上にある「追加」をクリックします。「ディメンション列」ウィンドウが開きます。
5. 「名前」フィールドと「タイプ」リストで、列の名前とタイプを指定します。これは、正規化された列の名前を表示する新しい列です。上記の例では、「カテゴリー」列がこれに該当します。
6. 「定数」表に表示される正規化された列の名前を指定して、「OK」をクリックします。上記の例では、これらの列は「いす」、「その他」、および「ソファ」などの異なる製品タイプの列です。これらは正規化された列の名前に対するラベルであるため、どのようなラベルにすることもできます。例えば、照会結果をより読みやすくするために、「chairs」、「misc」、および「sofas」のように小文字の名前を指定することができます。

7. 「値」リスト・ボックスの上にある「追加」をクリックします。「値列」ウィンドウが開きます。
8. 「名前」フィールドと「タイプ」リストで、列の名前とタイプを指定して、「OK」をクリックします。これは、正規化された列の値を表示する新しい列です。上記の例では、「総利益」列がこれに該当します。
9. 「列の正規化」セクションで、正規化する列の横にあるチェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これらの列は、指定したディメンション列へ移動する列です。上記の例では、これらは「総利益 (いす)」、「総利益 (ソファァー)」、および「総利益 (その他)」の各列です。

注: 「すべての列を含める」チェック・ボックスを使用して、使用可能な列をすべて選択したり選択解除したりします。

10. 「値」から、正規化された列の値を選択します。
11. ステップ 5 で指定した列の値をリストから選択します。上記の例では、「カテゴリー」列がこれに該当します。
12. 「ゼロの抑止」または「NULL の抑止」チェック・ボックスを選択し、正規化された結果セットから、値としてゼロが含まれる行、または値が含まれない行を除外します。
13. 正規化変換の構造を埋めるには、「項目エディター」の右下にある「自動突き合わせ」をクリックし、「正規化の構造を自動的に埋める」ウィンドウで「はい」をクリックします。
14. オプション: 現在の分析照会構造に別の変換を追加するには、分析照会構造の作成の手順に従ってください。

### 条件付きグループ化変換の操作

条件付きグループ化変換を使用して、条件式に基づく結果セット・データの集約要約を作成できます。

#### このタスクについて

条件付きグループ化変換を使用すると、特定の値列からどの値を集約要約に含めるかを制御するフィルターを作成できます。例えば、会社のスタッフのデータが含まれる表があるとします。特定部門の全従業員の給与の合計を各ジョブ・タイプにまたがって表示する照会を作成します。そして、勤続年数が 5 年以上の従業員のみでの給与の合計を表示します。条件付きグループ化を使用すると、「年数」列の値が 5 以上の行の給与の値のみが集約に含まれるフィルターを作成できます。

表 21. 元のデータ

部門	名前	年数	給与
SALES	Smith	12	60
SALES	Edwards	7	40
SUPPORT	Jones	6	40
R&D	Adams	2	25
R&D	Baker	7	50

条件付きグループ化を使用すると、結果セットを以下のように変換できます。

表 22. 条件付きグループ化を行ったデータ

部門	合計給与	一致従業員数	合計従業員数
SALES	100	2	2
SUPPORT	40	1	1
R&D	50	1	2

この条件付きグループ化は、以下のステップを実行することによって行いました。

1. グループ化する列として、「部門」と「名前」を追加しました。「部門」は GROUP として追加し、「名前」は COUNT として追加しました。この「名前」列によって、部門の合計従業員数を示す列を含めることができ、給与の合計を計算するために使用した従業員数と対比することができます。
2. 勤続年数が 5 年以上の従業員を選択するためのフィルターを定義しました。
3. 上記フィルターによって決定される 2 つの条件付き列を追加しました。「合計給与」は、「給与」列の合計を実行し、「一致従業員数」は、「名前」列のカウントを実行します。
4. 最後に、結果セットの「名前」列を編集 (列を右クリックして、コンテキスト・メニューから「列見出しの変更」を選択) し、「デザイン」タブに「合計従業員数」が表示されるようにしました。

条件付きグループ化変換を構成するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「分析照会構造」で、条件付きグループ化変換ノードを選択します。「項目エディター」ペインで、条件付きグループ化変換の項目を表示できます。ソース・データ・セットの列は、「グループ」セクションに表示されます。
2. オプション: 選択した条件付きグループ化変換にデータがまだ設定されていない場合は、「<なし>」ノードに照会または表を追加します。詳しくは、『分析照会变換へのデータの追加』を参照してください。
3. 「グループ」セクションで、集約結果をグループ化する行を示す列の横にあるチェック・ボックスを選択します。

注: 「すべての列を含める」チェック・ボックスを使用して、使用可能な列をすべて選択したり選択解除したりします。

4. 「集約」列で、値をクリックし、選択される列の集約タイプをリストから選択します。
5. 「条件付きグループ化」セクションで、「フィルターの追加」をクリックします。「フィルター・ウィザード」が開きます。
6. 「フィルター名」フィールドにフィルターの名前を指定します。フィルターの機能を反映する名前を付けるのは良い考えです。例えば、勤続年数が 5 年を超える従業員を表示するフィルターに「長期グループ」という名前を付けるなどです。
7. フィルター・タイプを選択して、「次へ」をクリックします。ウィザードの次のページは、前の選択内容によって異なります。

フィルターの作成の詳細については、以下を参照してください。

- 206 ページの『複合条件フィルターの作成』
  - 208 ページの『フリー・スタイル条件フィルターの作成』
8. オプションの表、または式デザイナーを使用してフィルターを作成し、「終了」をクリックします。「フィルター・ウィザード」が閉じ、「フィルター」表に、指定したフィルターが表示されます。
  9. 「列」表の上にある「列の追加」をクリックします。
  10. 「ソース列」列のリストから、フィルター処理する列を選択します。この列には、グループ列間でフィルター処理および集約された値が含まれることになります。
  11. この列で使用するフィルターを「フィルター」リストから選択します。このリストには、「フィルター」表で作成したすべてのフィルターが含まれています。
  12. 「集約」列で、値をクリックし、選択される列内の値の集約タイプを選択します。
  13. 集約した値列の名前を「列名」フィールドで指定します。
  14. 表示対象とする、フィルター処理した値列をすべて追加し終わったら、「照会の実行」ツールバー・ボタンをクリックします。照会が実行されて、結果が「結果」エディターに表示されます。選択したすべてのグループ列および値列に、対応する列があることが分かるはずですが、値列の見出しには、指定した列名が表示されます。値列の内容は、設定した条件付きフィルターに含まれるすべての値を表しており、選択した方式に従って集約されます。
  15. オプション: 現在の分析照会構造に別の変換を追加するには、分析照会構造の作成の手順に従ってください。

## タスクの結果

### 列フィルター変換の操作

列フィルター変換を使用して、ソース照会自体を変更せずに、計算列およびフィルターをソース照会に追加します。また、結果照会から列を除外するよう選択することもできます。

### このタスクについて

例えば、会社のスタッフ・データを表示する照会があり、この照会では計算列を使用して行を列挙するとします。この照会にフィルターを適用すると、いくつかの行が結果セットから除外されます。列フィルター照会を使用して、ソースではなく結果照会の行番号を表示する、別の計算列を追加することができます。

次の表に、行番号を返す計算列を使用した照会を示します。

部門名	部門番号	課	ロケーション	マネージャー	行
本社	10	法人	ニューヨーク	160	0
ニュー・イングランド	15	東部	ボストン	50	1
大西洋岸中部	20	東部	ワシントン	10	2
大西洋岸南部	38	東部	アトランタ	30	3
五大湖	43	中西部	シカゴ	100	4

部門名	部門番号	課	ロケーション	マネージャー	行
大平原	51	中西部	ダラス	140	5

この照会にフィルターを適用すると、一部の行が結果セットから除去されます。ただし、計算列は、次の表に示すようにソース照会の場合と同じ行番号を返します。

部門名	部門番号	課	ロケーション	マネージャー	行
本社	10	法人	ニューヨーク	160	0
五大湖	43	中西部	シカゴ	100	4
大平原	51	中西部	ダラス	140	5

列フィルター照会を使用して、次の表に示すように、結果照会の行番号を表示する別の計算列を追加することができます。

部門名	部門番号	課	ロケーション	マネージャー	行	行 2
本社	10	法人	ニューヨーク	160	0	0
五大湖	43	中西部	シカゴ	100	4	1
大平原	51	中西部	ダラス	140	5	2

列フィルター変換を構成するには、以下のようにします。

#### 手順

- 「分析照会構造」で、列フィルター変換ノードを選択します。「項目エディター」ペインで、列フィルター変換の項目を表示できます。ソース・データ・セットの列は、「結果列」リストに表示されます。
- オプション: 選択した列フィルター変換にデータがまだ設定されていない場合は、「<なし>」ノードに照会または表を追加します。詳しくは、『分析照会変換へのデータの追加』を参照してください。
- 「結果列」リストで、「すべての列を含める」チェック・ボックスを使用して、使用可能な列をすべて選択したり選択解除したりします。
- 「結果列」リストに組み込んだ列にソート条件を適用するには、「ソート順序」列および「キー・シーケンス」列に値を指定します。
  - 「ソート順序」列で、値をダブルクリックし、照会結果セット内のデータをソートするために列を使用するのかどうかを指定します。該当する列についてリストからソート順序として「昇順」、「降順」、または「なし」を選択します。
  - 「キー・シーケンス」列で、値をダブルクリックし、ソート順序条件が列に適用されるシーケンスを指定します。ソート順序条件を持つ列について、リストからシーケンス番号を選択します (キー・シーケンス番号「1」を持つ列が最初のソート基準となり、以降同様に処理されます)。
- 「デザイン」タブをクリックします。「デザイン」ページで、プロンプト、計算列、およびフィルターを管理できます。
- 「プロンプト」ペインで、プロンプトを追加および編集できます。

7. 「計算列」ウィンドウを使用して、計算列を追加します。「**dynamart**」ペインをクリックしてから、「計算列の追加」を選択します。
8. 「**dynamart**」ペインの矢印ボタンを使用して照会列の順序を変更します。この列の順序は、照会がダッシュボードや分析照会などの他のアプリケーション部分でデータ・ソースとして使用される場合のみ適用されます。
9. 「**dynamart** フィルター」ウィザードを使用して、照会結果の内容を制御する条件式を作成します。「変換」ペインで、「フィルター」ノードを右クリックして「フィルターの編集」を選択します。

注: アプリケーション内でフィルター処理が適用されている「変換」ペインのコントロールを使用した場合、データベース内で実行される SQL テキストは変更されません。

計算列の追加およびフィルターの作成の詳細については、以下を参照してください。

- 照会結果への計算列の追加
  - 照会結果のフィルター処理
10. オプション: 現在の分析照会構造に別の変換を追加するには、分析照会構造の作成の手順に従ってください。

---

## 照会のプロファイル作成

複雑な照会を分析するためにプロファイル作成を使用します。

### 始める前に

分析する照会を開いておく必要があります。



### このタスクについて

SELECT ステートメントのみが含まれる、以下の照会タイプのプロファイルを作成できます。

- ビジュアル照会
- 分析照会

照会のプロファイルを作成するには、以下のようになります。

### 手順

1. 必要な照会をビジュアル照会エディターで開きます。
2. 「照会のプロファイルを作成」 () ツールバー・ボタンをクリックします。「照会プロファイラー」ビューが開きます。ここでは、照会の実行と結果のフェッチに費やされた時間が表示されます (ある場合)。
3. 「照会プロファイラー」ビューで「SQL テキスト」 () ツールバー・ボタンをクリックし、最後にプロファイルを作成した照会の SQL テキストを参照します。SQL テキストが「照会プロファイラー」ウィンドウに表示されます。



---

## QMF Vision へのオブジェクトの公開

照会および表を QMF Vision のオブジェクト・フォルダーに公開して、これらを QMF Vision で使用することができます。

### このタスクについて

QMF Vision オブジェクト・フォルダーに公開できるオブジェクトのリストには、以下のものがあります。

- ビジュアル照会
- 分析照会
- 指示照会
- dynamart
- 複合 dynamart
- 表

注: プロンプトおよび置換変数を使用して照会をインポートすることはできません。

オブジェクトを QMF Vision に公開することによって、データ・ソース情報を持つリンクとしてこれらを QMF Vision オブジェクト・フォルダーに保存します。この操作によって、公開済みオブジェクトに QMF Vision からアクセスできます。この手順を実行するとき、ログイン要件およびパスワード要件があるデータ・ソースを使用するオブジェクトについてはユーザー情報を指定する必要があります。これにより、QMF Vision 内で公開済みオブジェクトを正しく機能させることができます。QMF Vision での公開済みオブジェクトの操作について詳しくは、「QMF Vision 入門」マニュアルを参照してください。

照会または表を QMF Vision に公開するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」または「ワークスペース」ビューで、公開するオブジェクトを右クリックします。複数のオブジェクトを選択するには、Ctrl キーまたは Shift キーを使用します。
2. 「QMF Vision に発行」を選択します。
3. 以下のいずれかの方法で宛先フォルダーを指定します。
  - デフォルトの「QMF Vision オブジェクト」フォルダーを選択します。
  - 「QMF Vision オブジェクト」内にサブフォルダーを作成します。
    - a. 「新規フォルダー」をクリックします。
    - b. フォルダーの名前を指定します。
    - c. 別の親フォルダーを指定するには、「参照」をクリックして「QMF Vision オブジェクト」内でサブフォルダーを選択できます。
    - d. サブフォルダーのプロパティーで表示できるコメントを指定します。
    - e. 「終了」をクリックします。
  - 「QMF Vision オブジェクト」でいずれかのサブフォルダーを選択します。
4. 単一のオブジェクトを公開する場合、新しい名前を指定できます。

5. ログイン情報およびパスワード情報必要とするデータ・ソースを持つオブジェクトの場合、「次へ」をクリックします。表内で、各データ・ソースのユーザー資格情報を指定します。
6. 「終了」をクリックします。

---

## データベース表に対する作業

デフォルトのエディター、「表エディター」、「表ビューアー」、または「ビジュアル照会エディター」を使用して、アクセス可能な任意のデータベース表をワークスペース内で開くことができます。

### このタスクについて

データベース表を開くには:

#### 手順

1. 任意のビューで表を右クリックして、「開く」を選択します。
2. 以下のいずれかの項目をクリックします。
  - 表ビューアー: 表の内容を「照会結果」ビューに表示します。表ビューアーを使用して表を開くと、照会が作成および実行されて、結果が戻されます。
  - ビジュアル照会エディター: 照会ビルダー編集機能に表を表示します。ビジュアル照会エディターを使用して表を開くと、照会が作成されて照会ビルダー編集機能に表示されます。照会は実行されず、結果は戻されません。ユーザーは、照会ビルダー編集機能を使用して照会を変更できます。
  - 表エディター: 表を編集モードで表示します。

表エディターのデフォルト・ビューは「結果」ビューです。これは、編集領域内の「結果」タブで示されます。

注: 表エディターを使用する許可は管理者によって設定されます。表エディターを使用する許可があるかどうかを確認するには、「表示」 > 「リソース限界」をクリックして、「オプション」タブを選択します。表を編集する許可がある場合は、「表の編集を可能にする」プロパティが「はい」に設定されています。

表エディターを使用すれば、SQL ステートメントを作成せずに、表に格納されているデータを検索、追加、編集、および削除できます。

「結果」メニュー項目を使用してデータベース表を操作

「結果」メニュー項目は、表エディターの「結果」ビューで表を表示するとアクティブ化されます。

「結果」メニューからは、表エディターの多くの機能にアクセスできます。

「結果」メニュー・オプションにアクセスして、そのオプションを使用するには、以下のようになります。

- a. 表エディターで表が開かれている状態で、「結果」タブを選択します。

- b. メニュー・リストから「結果」をクリックして、使用可能なオプションを表示します。

次の表は「結果」メニュー・オプションをリストしたものです。各オプションの目的について説明があります。

オプション	目的
すべて検索	このオプションは、表からすべての行を取得する場合に選択します。
検索	このオプションは、表で特定のデータを検索する場合に選択します。  「検索」ダイアログに検索基準を入力して、「次を検索」をクリックします。
行の挿入	このオプションは、表の行を挿入する場合に選択します。
行を削除	このオプションは、表の行を削除する場合に選択します。  削除対象として選択された行はアスタリスクでマークされます。表に対する変更がコミットされると、その行は削除されます。
行の編集	このオプションは、行データを編集する場合に選択します。
コミット	このオプションは、表に対して行った変更を手動でコミットする場合に選択します。
ロールバック	このオプションは、表に対して行った変更を取り消す場合に選択します。
即時にコミット	このオプションは、即時コミット機能を使用可能にする場合に選択します。即時コミット機能が使用可能になっている場合、表に対する変更は即時にコミットされます。

#### 表に含まれる内容を直接編集

以下の方法を使用すれば、表エディターで表データを直接編集できます。

- 編集する情報が含まれているセルにカーソルを置き、右クリックして、ポップアップ・メニューから「編集」を選択します。

「セル値」ウィンドウで変更内容を入力し、「OK」をクリックします。更新がデータベースにコミットされることを確認するために、「OK」をもう一度クリックします。

更新をロールバックする場合は、「キャンセル」をクリックします。

- セル内にカーソルを置き、**Enter** を押すか、または表のセル内をダブルクリックします。

#### 表の構造の変更

表エディターで表の構造 (列の数やデータ・タイプなど) を直接変更するには、以下の方法を使用します。

- 1 つの行または複数の行を削除する場合:
  - a. 削除する行の行番号をクリックします。複数の行を選択するには、**Shift** キーを押しながら表の行をクリックします。
  - b. 右クリックして、ポップアップ・メニューから「行の削除」を選択します。
  - c. その行を表から削除することに間違いがない場合は、「はい」をクリックします。その行を表から削除しないことにする場合は、「いいえ」をクリックします。
- 表の行を編集する場合:
  - a. 編集する行の行番号をクリックします。
  - b. 右クリックして、ポップアップ・メニューから「行の編集」を選択します。
- 行を挿入する場合:
  - a. 「結果」メニューから「行の挿入」を選択します。

対象の行とその内容が「行の編集」ウィンドウに表示されます。

- c. 「行の編集」ウィンドウの「値」にあるデータを変更して、「**OK**」をクリックします。
- d. 更新を適用して変更内容をデータベースにコミットする場合は「**OK**」をクリックします。変更をロールバックする場合は「キャンセル」をクリックします。

メニュー上のオプション「即時にコミット」が選択されている場合、表に対して行った変更は、変更を行って「**OK**」をクリックしたときにデータベースに適用されます。

オプション「即時にコミット」がクリアされている場合、行った変更はローカルに保管されます。その変更は、「コミット」オプションが選択されると一斉に適用され、「ロールバック」オプションが選択されると一斉に破棄されます。

「コミット」オプションも「ロールバック」オプションも選択せずにエディター・オブジェクトを閉じると、保留中のすべての変更をコミットまたはロールバックするようにメッセージが表示されます。

挿入された行は、コミット実行後に結果セットの最後の行となります。

注: 「行の挿入」をクリックする前に行を選択すると、その行の内容が「挿入」ダイアログに事前に取り込まれ、新しい行のテンプレートとして使用できるようになります。

非数値の表データを表示する方法を指定するには、表示フォーマットの設定対象となるテキスト・ストリングが含まれているセルにカーソルを置きます。右クリックして、ポップアップ・メニューから「編集」を選択し、「拡張」をクリックします。「フォーマット・モード」リストから「**16 進数**」(16 進フォーマットでデータを表示する場合) または「**2 進数**」(2 進フォー

マツトでデータを表示する場合) を選択します。「ズーム」ウィンドウには、データのサンプルが、選択したフォーマットで表示されます。

表エディターの「指示照会」ビューを使用すれば、表においてソートおよび行の条件を設定できます。ソートおよび行の条件を設定する方法については、『表のソート条件の指定』および『表の行条件の指定』を参照してください。

- ビジュアル照会エディター: 照会ビルダー編集機能に表を表示します。ビジュアル照会エディターを使用して表を開くと、照会が作成されて照会ビルダー編集機能に表示されます。照会は実行されず、結果は戻されません。ユーザーは、照会ビルダー編集機能を使用して照会を変更できます。
- デフォルト・エディター: 最後に使用されたエディターを使用して、表を表示します。

## 表のソート条件の指定

表に表示される行の順序を決定するソート条件を指定できます。

### このタスクについて

表に対するソート条件を設定するには、「指示照会」メニューの「ソート条件」ペインを使用します。表エディターの「指示照会」メニューは、「ソート条件」ペインと「行条件」ペインのみが使用可能であるということを除いては、指示照会エディターによく似ています。

### 手順

1. 「ワークスペース」ビューにある表を右クリックし、「開く」 > 「表エディター」を選択します。表がエディター・ウィンドウで開きます。
2. 「指示照会」タブをクリックします。「指示照会」メニューは、「ソート条件」ペインと「行条件」ペインが使用可能である場合にのみ開きます。
3. 「ソート条件」ツールバーの「ソート条件の追加」ボタンをクリックします。「ソート条件」ウィンドウが開きます。
4. 以下のいずれかの方法で、照会結果のソートに使用される列を指定します。
  - 「結果セットの列」リストから、1 つ以上の列を選択します。「結果セットの列」には、表に含められる列がリストされます。ソート条件を追加する場合、1 つまたは複数の列を選択することができます。ソート条件を変更する場合には、1 つの列のみを選択することができます。
  - 「または、ここに条件を入力」フィールドで条件式を指定します。省略符号 (...) をクリックすれば、式ビルダーが開きます。式ビルダーは条件式を作成するときに役立ちます。式ビルダーには、SQL 式の作成に使用する共通エレメント (列名、定数、関数、および演算子など) のパレットが用意されています。「式ビルダー」ボタンをクリックすると、式エレメントのテンプレートが式フィールドに挿入されます。
5. ソート方向を指定します。照会結果を昇順 (最低値から最高値の順) でソートすることを指定するには、「昇順」を選択します。照会結果を降順 (最高値から最低値の順) でソートすることを指定するには、「降順」を選択します。最初の列は 1 次ソートに使用され、以降の列は最初のソート順序を使用してソートされます。

6. 「追加」をクリックして、ソート条件を表に追加します。ソート条件を変更する場合は、「変更」をクリックします。ソート条件に含める各列について、この処理を繰り返します。ソート条件に含める列を選択し終わったら、「閉じる」をクリックします。「ソート条件」ウィンドウが閉じます。

## 表の行条件の指定

QMF for Workstation を使用している場合は、表に表示される行を制限する行条件を指定できます。行条件の指定がない場合は、既存のすべての行が表示されます。表に表示される行を制限する行条件を指定できます。行条件の指定がない場合は、既存のすべての行が表示されます。

### このタスクについて

表に対する行条件を指定するには、「指示照会」メニューの「行条件」ペインを使用します。表エディターの「指示照会」メニューは、「ソート条件」ペインと「行条件」ペインのみが使用可能であるということを除いては、指示照会エディターによく似ています。

### 手順

1. 「ワークスペース」ビューにある表を右クリックし、「開く」 > 「表エディター」を選択します。表がエディター・ウィンドウで開きます。
2. 「指示照会」タブをクリックします。「指示照会」メニューは、「ソート条件」ペインと「行条件」ペインが使用可能である場合にのみ開きます。
3. 「行条件」ツールバーの「行条件の追加」をクリックします。「行条件」ウィンドウが開きます。
4. 行を表に含むために満たさなければならない複数の条件を指定する場合は、「コネクター」ラジオ・ボタンを使用して、それぞれの条件がどのように接続されるかを指示する必要があります。「および」を選択した場合、含まれる行は、現在指定しようとする条件と前の条件（「指示照会」メニューの「行条件」ペインにリストされているもの）の両方を満たしている必要があります。「または」を選択した場合は、現在の条件または前の条件のいずれかが満たされると、行が含まれます。「および」と「または」の両方を使用して複数の条件を接続すると、データ・ソースの規則によって条件の処理方法が決まります。
5. 表に含める対象として検査する列を、「リストから列を選択」リスト・ボックスから選択します。「リストから列を選択」リスト・ボックスには、表結果に含まれることになる列がすべてリストされます。列を決定する条件式を指定するには、「または、ここに式を入力」フィールドに式を入力します。省略符号 (...) をクリックすれば、式ビルダーが開きます。式ビルダーは条件式を作成するとき役に立ちます。
6. 「演算子」フィールドを使用して、行条件式の演算子を指定します。演算子をそのまま使用する場合は、「肯定」を選択します。演算子を否定形に変更するには、「否定」をクリックします。例えば、「等しくない」を指定するには、「否定」を選択し、リストから「等しい」演算子を選択します。行条件式の左右両側が数値データ・タイプである場合は、「で始まる」、「で終わる」、または「含む」演算子を使用することはできません。左右両側が地理情報データ・タイプでない限り、地理情報述部のいずれも使用することはできません。

注: IBM DB2 Spatial Extender がデータベースにインストールされている場合、地理情報データ・タイプ (点、線、および多角形) を使用できます。ただし、左右両側が地理情報データ・タイプである場合に限り、地理情報述部を使用することができます。

7. 「右側」領域で、行の検査条件を指定します。
  - a. 式ビルダー・ボタンを使用すると、容易に条件を作成できます。
  - b. コンマで区切られた値を持つ任意の形式のファイルから行条件を追加するには、「条件をファイルからインポート」をクリックします。
  - c. 一連の照会結果から行条件を指定するには、「SQL 照会の実行により条件をインポート」をクリックして照会の SQL テキストを入力します。
  - d. 1 つまたはすべての行条件を除去するには、「条件の除去」または「すべての条件を除去」ボタンを使用できます。
8. 「追加」をクリックします。行条件が追加され、「指示照会」メニューの「行条件」ペインに表示されます。追加する条件ごとにこのプロセスを繰り返します。各条件を指定し終えたら、「閉じる」をクリックします。「行条件」ウィンドウが閉じます。「指示照会」メニューに戻ります。

## DB2 特殊レジスターを使用してデータベース表を編集

DB2 特殊レジスター を使用して、データベース表にあるデータを変更できます。特殊レジスターとは一種の記憶域のことです。この記憶域は DB2 でアプリケーション・プロセスに対して定義され、参照用に情報を格納するために使用されます。特殊レジスターを参照することは、現行サーバーから提供される値を参照することです。使用可能な特殊レジスターのリストは、データベースのバージョンによって異なります。

### 始める前に

表編集機能の「結果」タブで、編集するデータベース表を開きます。

### このタスクについて

特殊レジスターを使用してデータベース表を編集するには、以下のようになります。

### 手順

1. 編集対象の値が存在する表のセルに特殊レジスターを入力します。
2. 変更をコミットし、入力した特殊レジスターを特殊レジスターの値で置き換えます。編集、データの挿入、および表に対する変更のコミットについて詳しくは、130 ページの『データベース表に対する作業』トピックを参照してください。

注: 特殊レジスターを使用して、表の重複行のいずれか 1 つにおいて列値を変更すると、すべての重複行で列値が更新されます。

データベースは、特殊レジスター値のデータ・タイプを列データ・タイプにキャストします。

## 表のコピー

「リポジトリ・エクスプローラー」ビューを使用して、現在開いているデータ・ソース内の表をコピーします。

## このタスクについて

表をコピーするには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで、コピーする表を右クリックしてメニューから「コピー」を選択します。
2. オブジェクトのツリーの「表」ノードを右クリックし、メニューから「貼り付け」を選択します。「コピー表」ウィンドウが開きます。
3. 「宛先表パラメーター」領域で、「表の名前」および「表の所有者」フィールドに新しい表の名前と所有者を入力します。
4. 「詳細な宛先」領域で、照会結果セットをエクスポートする宛先を指定します。「データベースおよびアクセラレーター」または「アクセラレーターのみ」オプションを選択した場合、使用するアクセラレーターを「アクセラレーター」リストから指定します。

注: 「詳細な宛先」領域は、DB2 z/OS データベースを使用していて、照会加速が有効な場合のみ使用できます。

5. 「方式」領域で、以下のようしてデータを保存する方式を指定します。
  - 「通常」を選択した場合、QMF は照会結果をデータベースに送り返し、データ行ごとに個別の SQL INSERT ステートメントを使用することによって照会結果をデータベース表に挿入します。
  - 「高速」を選択した場合、QMF は SQL を元の照会に追加し、照会を再実行し、データを指定された表に直接保存します。
6. 「既存のデータ・オプション」領域で、以下のようして既存のデータの処理方法を指定します。
  - 「既存のデータを置換」。データベースの指定された表に既存のデータがあれば、それを置き換えます。
  - 「既存のデータに追加」。データベースの指定された表に既存のデータがあれば、それに追加します。
7. 「コミット有効範囲」フィールドで、変更をコミットする前に挿入する行数を指定します。この値がゼロに設定された場合は、すべての行がコミット発生前に挿入されます。
8. 「OK」をクリックします。



---

## 第 5 章 新規データ・ソースの選択

「データ・ソースの設定」ダイアログを使用して、照会オブジェクトの実行対象のデータ・ソースを選択します。

### このタスクについて

照会オブジェクトはすべてデフォルトのデータ・ソースと関連付けられます。それらは照会オブジェクトの実行時に、デフォルトのデータ・ソースに対して自動的に実行されます。照会オブジェクトに関するデフォルトのデータ・ソースは、照会の保存前に最後に使用されたデータ・ソースか、または照会が新規でまだ保存されていない場合は、QMF セッションで最後に使用されたデータ・ソースになります。

現行の照会オブジェクトを実行するデータ・ソースを選択するには:

### 手順

1. 以下のいずれかのメニューから「データ・ソースの設定」コマンドを選択して、「データ・ソースの設定」ウィンドウを開きます。
  - 照会
  - 書式
  - プロシージャ
2. 照会オブジェクトを実行するデータ・ソースを、「データ・ソース」リストから選択します。「データ・ソース」リストには、自分のユーザー ID で使用できるデータ・ソースがすべて含まれます。
3. 「ユーザー名」フィールドに、新しいデータ・ソースに接続する際に QMF で使用するユーザー ID を入力します。
4. 「パスワード」フィールドに、「ユーザー名」フィールドに入力したユーザー ID に関連付けられたパスワードを指定します。
5. このユーザー ID に指定したパスワードを保存して、このデータ・ソースに接続するたびにそのパスワードを使用するには、「パスワードを保存」チェックボックスを選択します。
6. 「OK」をクリックします。「データ・ソース」フィールドに指定したデータ・ソースに対してオブジェクトが実行されます。



---

## 第 6 章 SQL ステートメントのフォントの設定

QMF for Workstation では、SQL ステートメント・テキストの固有のフォント属性を設定できます。

### このタスクについて

固有のフォント属性を設定するには:

#### 手順

1. ワークステーションの照会エディターで SQL ステートメントを表示します。
2. 以下のいずれかの方法で「フォント」ウィンドウを開きます。
  - 「照会」 > 「フォントの設定」を選択します。
  - 「書式」 > 「フォントの設定」を選択します。
  - 「プロシージャ」 > 「フォントの設定」を選択します。
3. 「フォント」フィールドの使用可能なフォントのリストから、照会ウィンドウに表示される SQL ステートメント用のフォントを選択します。
4. 「フォント・スタイル」フィールドに、フォントのスタイルを指定します。
5. 「サイズ」フィールドに、フォントのサイズを指定します。
6. 「OK」をクリックして、指定した新しいフォント設定値を設定します。「フォント」ウィンドウが閉じます。



---

## 第 7 章 置換変数の指定

置換変数は、実行時に変更値を SQL 照会に入力するのに使用します。

### このタスクについて

この機能により、SQL ステートメントの一部を置換して、これをより汎用的なものにすることができます。置換変数は、オブジェクト (照会、書式、またはプロシージャ) が実行されている間だけアクティブになります。その結果、1 つのオブジェクトのみが置換変数にアクセスすることができます。この変数は、オブジェクトの実行後は存在しなくなります。

置換変数は、アンパーサンド文字 (&) で始まる、照会内の特殊テキストです。置換変数には、最大 18 文字の英字、数字、または特殊文字を使用できます。

置換変数は照会内のあらゆる場所に配置できます。また、置換変数の値は、照会で使用する任意の要素 (ただしコメントは除く) にすることができます。例えば、列名、検索条件、副照会、または任意の特定の値の代わりに置換変数を使用できます。

以下の例では、次の照会を実行するたびにカスタマー番号を入力するようプロンプトが出されます。

```
SELECT ORDERNO, SALESREPNO, PRODNO, QUANTITY, &CUSTNO AS CUSTOMER#  
FROM Q.SALES
```

照会を実行し、プロンプトに応じてカスタマー番号を入力すると、その指定されたカスタマー番号に関連するレコードのみが照会によって検索されます。後で、別個の照会を作成する代わりに、照会を起動して異なるカスタマー番号を入力することができます。

置換変数を使用するには:

### 手順

1. 照会を開く。
2. SQL ステートメント `SELECT * FROM Q.STAFF WHERE DEPT = &MIN_DEPT` を入力する。
3. 照会を実行する。「プロンプト変数」ウィンドウが開きます。
4. ウィンドウの「値」フィールドに 50 を入力する。
5. 「OK」をクリックします。DEPT の値が 50 で照会が実行されるようになります。

### 次のタスク

**SELECT** および **FROM** 文節内の値を置換して、置換変数を試してください。作成した照会により戻される結果を確認してください。



---

## 第 8 章 プロシージャーでの作業

プロシージャーとはコマンドの集合のことです。プロシージャーを使用して、照会の実行、報告書の印刷、データのインポートとエクスポート、およびその他の機能の実行を行うことができます。

「プロシージャー」ウィンドウを使用して、プロシージャーの作成、オープン、表示、および実行を行うことができます。プロシージャーとは、QMF プロシージャー・コマンドの集合のことです。プロシージャーを使用して、照会の実行、報告書の印刷、データのインポートとエクスポート、およびその他の機能の実行を行うことができます。プロシージャーはリポジトリ、QMF カタログ、またはファイルに保存できます。プロシージャーを通して発行されるすべてのコマンドは、リソース限界によって管理されます。プロシージャーには以下が含まれます。

- 任意の QMF プロシージャー・コマンド
- コメント行
- ブランク行
- 他のプロシージャーや照会を実行する RUN コマンド
- 置換変数

注:

- QMF は、旧ジョブ・ファイルをサポートします。旧ジョブ・ファイルは、実行する前に変換する必要があります。Windows オペレーティング・システムの場合、変換されたジョブ・ファイルは、Windows スケジューラーを使用して実行をスケジュールできます。さらに、変換されたジョブ・ファイルは、QMF for Workstation コマンド行から実行することもできます。
- QMF は、ロジックを持つプロシージャー (REXX プロシージャー) をサポートします。ロジックを持つプロシージャーには、REXX 言語ディレクティブが含まれています。ロジックを持つプロシージャーを実行するには、OBJECTREXX がインストールされている必要があります。

制約事項: REXX プロシージャーは、64 ビット・アプリケーションでサポートされていません。

---

### 新規プロシージャーの作成

新しいプロシージャーは、「プロシージャー」ウィンドウを使用して作成することができます。

このタスクについて

プロシージャーを作成するには:

## 手順

1. 「ユーザー」パースペクティブから「ファイル」 > 「新規」 > 「プロシージャ」を選択します。「プロシージャの作成」ウィザードが開きます。「新規プロシージャ」ツールバー・ボタンを選択することもできます。
2. 「名前」フィールドに新しいプロシージャの名前を指定します。
3. 「データ・ソース」フィールドで、選択可能なデータ・ソースのリストから選択します。新しいプロシージャは、保存時にこのデータ・ソースに入れられます。このフィールドに何も入力しなかった場合、新しいプロシージャは、現在のデータ・ソースに保存されます。
4. 「終了」をクリックします。新しいプロシージャ・オブジェクトが、「ユーザー」パースペクティブのエディター・ビューで開きます。
5. 「プロシージャ」エディターで、プロシージャに含めるコマンドを入力します。REXX 言語ディレクティブを使用するロジックを持つプロシージャを作成する場合は、プロシージャの最初の行として REXX コメント行を入力する必要があります。REXX コメント行は、/\*REXX\*/ のようになります。さらに、ロジックを持つプロシージャに QMF プロシージャ・コマンドを含める場合は、QMF プロシージャ・コマンドを単一引用符で囲む必要があります。

制約事項: REXX プロシージャは、64 ビット・アプリケーションでサポートされていません。

6. プロシージャを保存、実行、または出力します。プロシージャの実行後、結果は使用可能なエディター・ウィンドウに返されます。ロジックを持つプロシージャを実行する場合、プロシージャとのやり取りは「REXX コンソール」ビューを通して行われます。
7. QMF for WebSphere タスク・スケジューラーやローカル・スケジューラーを使用すれば、別の時刻に実行されるようにプロシージャをスケジュールできます。

---

## JavaScript プロシージャの作成

JavaScript 構文を使用すれば、より複雑であり、より線形ではないプロシージャを作成できます。

### このタスクについて

JavaScript プロシージャを作成するには、以下のようにします。

## 手順

1. 「プロシージャ」編集機能で /\*JavaScript\*/ と入力します。現行プロシージャが JavaScript プロシージャとして処理されます。
2. 「プロシージャ」編集機能で JavaScript プロシージャのスクリプトを入力します。proc オブジェクトとその関数を使用します。

注: JavaScript プロシージャは JavaScript モジュールの構文をサポートしません。

制約事項: JavaScript プロシージャは、ビジュアル照会の結果セットにある計算列のみを処理します。



3. 作成したプロシージャーを保管または実行します。

---

## フローチャートとしてプロシージャーを作成

拡張プロシージャー編集機能を使用すれば、線形または複雑な JavaScript プロシージャーをフローチャートとして作成できます。

### このタスクについて

フローチャート・プロシージャーにコマンドを追加するには、以下のようにします。

### 手順

1. プロシージャー編集機能を開き、「デザイン」タブをクリックします。「プロシージャー・デザイナー」が開きます。
2. プロシージャー・コマンドを追加するには、「デザイン」タブでブロックをダブルクリックします。また、追加するコマンドを「パレット」ビューからブロックにドラッグすることもできます。
3. 「コマンドの追加」ウィザードで「コマンド」リストから、プロシージャーに追加するコマンドを選択します。
4. 一部のコマンドについては、コマンドの適用先のオブジェクトを「オブジェクト」リストから選択します。
5. 指定されたオブジェクトが使用されるコマンドにパラメーターが必要な場合は、「次へ」をクリックして、「コマンドの追加」ウィザードの 2 ページ目でパラメーターを指定します。
  - a. 「[コマンド名] コマンド」領域で、必要な値を、対応するフィールドに入力します。「参照」をクリックして、追加するオブジェクトを検索するか、またはコマンドで使用するディレクトリーを指定できます。

ヒント: 「参照」ボタンを使用すると、二重引用符がオブジェクト名に自動的に追加されます。オブジェクト名を手動で入力する場合は、そのオブジェクト名に二重引用符を必ず追加してください。

- b. 一部のコマンドについては、以下のいずれかのオプションを選択します。
  - 現行オブジェクト: アプリケーションで開かれているオブジェクトが使用されます。
  - オブジェクト: リポジトリまたは QMF カタログに保管されているオブジェクトが使用されます。
  - **JavaScript** 変数: 以前に作成された JavaScript 変数が使用されます。JavaScript プロシージャーでの JavaScript 変数とその使用の例を参照してください。

例

JavaScript 変数:

```
var tableName = proc.prompt("Enter a table name", "");
```

JavaScript プロシージャー:

```
/*JavaScript*/
var tableName = proc.prompt("Enter a table name", "");
proc.exec('DISPLAY TABLE ' + tableName);
```

- c. 「パラメーター」領域でコマンド・パラメーターを指定します。使用可能なプロシージャとそのパラメーターについて詳しくは、『プロシージャ・コマンド』セクションを参照してください。
6. 「終了」をクリックしてウィザードを閉じ、コマンドをプロシージャに追加します。各コマンドをプロシージャに追加するには、上記の手順に従ってください。

ヒント: フローチャート内のコマンドに注釈を追加するには、「注釈」オプションを使用します。この注釈は、「プロシージャ・デザイナー」でのみ表示されます。

## フローチャート・プロシージャの編集

「プロシージャ・デザイナー」で既存のプロシージャ・コマンドを編集できます。

### このタスクについて

フローチャート・プロシージャを編集するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「デザイン」タブで、編集するプロシージャを開きます。
2. 編集するコマンドをダブルクリックします。「コマンドの編集」ウィザードが開きます。
3. コマンドに適用する変更を追加します。

ヒント: 任意のコマンドを新しいコマンドで置き換えるには、「コマンドの編集」ウィザードを使用します。

4. 既存のコマンドの前後にコマンドを追加するには、コマンドを、「パレット」から既存のコマンドの前または後ろにドラッグします。
  - a. 「コマンドの追加」ウィザードの最初のページでコマンドの位置を指定します。「次へ」をクリックします。
  - b. ウィザードの 2 ページ目でコマンドとそのパラメーターを指定します。「終了」をクリックします。
5. また、以下のアクションを実行すれば、プロシージャ・フローチャートの外観を変更することもできます。
  - デフォルトですべてのコマンドを連続して追加するには、「デザイン」タブを右クリックし、「自動レイアウト」を選択します。
  - カスタム順序でコマンドを追加するには、「デザイン」タブを右クリックし、「自動レイアウト」をクリアします。
  - プロシージャ・ブロックの位置を編集するには、ブロックを新しい位置にドラッグするか、またはブロックを右クリックして「上」項目や「下」項目を選択します。

- プロシージャー・ブロックの配置を編集するには、必要なブロックを右クリックして「位置合わせ」を選択し、現在のブロックに適用する配置を指定します。
- 複数のプロシージャー・ブロックの高さや幅を一致させるには、対象のブロックを右クリックして「突き合わせ」を選択し、現在のブロックに適用するオプションを指定します。

## プロシージャーに **JavaScript** 条件を追加

JavaScript 条件をプロシージャーに追加して、そのプロシージャーを線形プロシージャーではなく複雑なプロシージャーにすることができます。

### このタスクについて

「プロシージャー・デザイナー」で JavaScript 条件を追加するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「デザイン」タブで、条件の追加先となるプロシージャーを開きます。
2. 「パレット」から「条件」オプションを選択し、プロシージャー図表の空ブロックにドラッグします。
3. 「JavaScript 条件」ウィンドウで、プロシージャーに組み込む条件を入力します。
4. 「OK」をクリックして条件を追加します。

### タスクの結果

- 「はい」矢印の下で、最初の条件が満たされた場合に適用するコマンドまたは条件を指定します。
- 「いいえ」矢印の下で、最初の条件が満たされない場合に適用するコマンドまたは条件を指定します。

---

## プロシージャー・コマンド

このセクションでは、各プロシージャー・コマンドについて説明します。その中で構文図と使用例も示しています。

### インターフェースの違い

各 QMF インターフェースがサポートするプロシージャー・コマンドおよびプロシージャー・コマンド・パラメーターのリストはわずかに異なります。

あるインターフェースを使用してプロシージャーを作成中で、そのプロシージャーを別のインターフェースを使用して実行することを計画している場合は、それらのインターフェースの相違点を考慮する必要があります。あるインターフェースで実行されるコマンドやパラメーターの中には、別のインターフェースでは実行できないものがあります。インターフェースごとに、現在サポートされているコマンドおよびパラメーターが文書化されています。

一般に、サポートされていないプロシージャー・コマンドが検出された場合、インターフェースはエラー・メッセージを出して、プロシージャーの実行を停止します。

場合によっては、インターフェースはサポートされていないプロシージャー・コマンドまたはプロシージャー・コマンド・パラメーターを無視します。このような場合、インターフェースはエラー・メッセージを出さずに、プロシージャーの実行を続行します。サポートされていないプロシージャー・コマンドまたはプロシージャー・コマンド・パラメーターはスキップされます。機能によっては、このようなプロシージャーの実行結果は誤っている可能性があります。しかし、プロシージャーを停止しないで、エラー・メッセージも出さずに、あるインターフェースを使用して作成されたプロシージャーが別のインターフェースで実行できる場合があります。無視されるコマンドおよびコマンド・パラメーターはインターフェースについての資料に記載されています。

## プロシージャー構文

このトピックでは、各コマンドに共通する構文規則が要約されています。

一般に、プロシージャーの各行には 1 つのコマンドがあります。ただし、正符号 (+) を継続文字として各追加行の最初の列に置けば、コマンドを複数行にわたって継続することができます。

2 つのハイフン (--) を行に入力すると、プロシージャーにコメントを入れることができます。ハイフンに続くテキストは行の終わりまでコメントになり、プロシージャーの実行時に解釈されません。

置換変数を使用して、プロシージャーをパラメーター化することができます。プロシージャーを実行するたびに、実行前に置換変数がスキャンされます。プロシージャーの実行前にすべての置換変数に値を与える必要があります。置換変数の値は、RUN PROC コマンドから、大域変数から、または「置換変数値の入力」ウィンドウの表示によって取得できます。

### プロシージャー・パラメーター

一般的に、各プロシージャー・パラメーターは、<parameter\_name> = <parameter\_value> という構文になっています。

プロシージャー・パラメーターは、コンマまたはスペースで区切る必要があります。以下のコマンドを参照してください。これらは同一です。

- RUN QUERY Q.STAFF (CONFIRM = NO ROWLIMIT=10 &&ID=10
- RUN QUERY Q.STAFF (CONFIRM = NO, ROWLIMIT=10, &&ID=10
- RUN QUERY Q.STAFF (CONFIRM=NO,ROWLIMIT=10,&&ID=10

コンマまたはスペースを含むパラメーター値を使用したい場合は、パラメーターを単一引用符で囲む ('parameter value') か、二重引用符で囲む ("parameter value") か、または括弧で囲む ((parameter value)) 必要があります。

注: パラメーター値を単一引用符または二重引用符で囲んだ場合、これらの引用符はパラメーター値に含まれます。パラメーター値に引用符が不要な場合は、パラメーター値を括弧で囲んでください。

以下のコマンドではパラメーター値の構文が異なり、パラメーター値はアプリケーションによって異なる処理が行われます。

- RUN QUERY Q.STAFF (&&NAME="MY NAME" - このプロシージャーでは、パラメーター値は二重引用符を含む "MY NAME" として処理されます。
- RUN QUERY Q.STAFF (&&NAME='MY NAME' - このプロシージャーでは、パラメーター値は単一引用符を含む 'MY NAME' として処理されます。
- RUN QUERY Q.STAFF (&&NAME=(MY NAME) - このプロシージャーでは、パラメーター値は記号なしの MY NAME として処理されます。

## 構文図の読み方

構文図では、特定のプロシージャー・コマンドの作成方法に関する詳細が示されます。

プロシージャー・コマンド構文図は左から右、上から下に向かって読みます。各コマンドの先頭は「>>」で末尾は「<<」です。1つのコマンドが複数の行に分かれている場合は、最初の行の末尾が「<」になり、次の行の先頭が「>」になります。

コマンドには2つのタイプのパラメーターがあります。定位置パラメーターは、コマンド内の特定の位置に置かれます。キーワード・パラメーターには値が割り当てられ、コマンド内に任意の順序で指定できます。コマンドで使用される最初のキーワード・パラメーターは、その前に左括弧が付いていなければなりません。パラメーターは80文字を超えることはできません。パラメーターはすべて、他のパラメーターとコンマで区切られます。右括弧は必須ではありませんが、コマンドを終わらせるために使用できます。

### 必須パラメーター

パラメーターは、必須の場合は次のようにメインパスに置かれています。

```
>>-- CONNECT TO ServerName -----<<
```

あるパラメーターがメインパスにあり、他は別の行にリストされている場合は、そのリストのパラメーターから少なくとも1つを選択する必要があります。

```
>>-- DISPLAY --- QUERY -----<<
      +- PROC ---+
      +- FORM ---+
      +- REPORT -+
```

### 任意指定パラメーター

パラメーターがメインパスとは別のリストに含まれている場合、そのパラメーターはオプションです。すべてのパラメーターがメインパスとは別のリストに示されているときは、その中から1つを指定することも、何も指定しないこともできます。

```
>>-- ERASE --- ObjectName -----<<
      +- QUERY -+
      +- FORM  -+
      +- PROC  -+
      +- TABLE -+
```

2つの値がスラッシュ (/) で区切られている場合があります。これは、2つの値のうち1つを入力する必要があることを示しています。

>>-----<<  
+- ( CONFIRM = YES/NO -+)

## QMF カタログ・オブジェクトとリポジトリ・フォルダー・オブジェクト

QMF オブジェクト (照会、フォーム、ビジュアル報告書、またはプロシージャ) を扱うプロシージャ・コマンドを使用する際は、QMF カタログ内に格納されているオブジェクトおよびリポジトリ・フォルダー内に格納されているオブジェクトを識別するために、異なる構文を使用する必要があります。

### QMF カタログに格納されているオブジェクト

QMF オブジェクトが QMF カタログに格納されている場合にプロシージャでこのオブジェクトを参照するには、<TYPE> <OWNER>.<OBJECT\_NAME> という構文を使います。例えば、

#### 例 1:

```
RUN QUERY ADMIN.TESTQ  
DISPLAY FORM ADMIN.TESTF
```

QMF カタログで <OWNER>.<OBJECT\_NAME> は固有なので <TYPE> による識別はオプションですが、プロシージャを分かりやすくするために推奨されています。したがって、プロシージャは次のようになります。

#### 例 2:

```
RUN QUERY ADMIN.TESTQ  
DISPLAY FORM ADMIN.TESTF
```

このプロシージャは次のように書くこともできます。

```
RUN ADMIN.TESTQ  
DISPLAY ADMIN.TESTF
```

また、QMF カタログ・オブジェクトを扱うプロシージャがオブジェクトの所有者によって実行されている場合も、<OWNER> による識別はオプションです。例えば、ADMIN としてサインオンされるユーザーによってこのプロシージャが実行される場合は、次のように書くこともできます。

#### 例 3:

```
RUN QUERY TESTQ  
DISPLAY FORM TESTF
```

または

```
RUN TESTQ  
DISPLAY TESTF
```

オブジェクト ID は短くすることができ、その方が便利な場合もありますが、一般的には、『例 1』で示したように、プロシージャ・オブジェクト ID を完全修飾することがベスト・プラクティスです。

注: 通常、QMF カタログ名へのプロシージャ参照では大/小文字の区別がありません。QMF カタログ・オブジェクトで従来の 8 文字の名前ではなく特殊な名前を使用することは可能ですが、一般的ではありません。例えば、名前を初めて保存す

るときに二重引用符で囲まれている場合、大/小文字混合の名前や、スペース、特殊文字を含む名前を使用できます。それ以降そのオブジェクトを参照する場合にも常に、オブジェクト名を二重引用符で囲む必要があります。 For example:

例 4:

```
RUN QUERY ADMIN."Test Case for Query @ HQ"
```

## リポジトリ・フォルダーに保管されているオブジェクト

QMF オブジェクトがリポジトリ・フォルダーに格納されている場合にプロシージャでこのオブジェクトを参照するには、<TYPE> <OBJECT\_NAME> という構文を使います。例えば、

例 5:

```
RUN QUERY TESTQ
```

この例の構文は、QMF カタログ・セクションの『例 3』で示した構文と一致しています。したがって、プロシージャ・コマンドを実行する際、QMF は特定の検索順序で、プロシージャで参照されるオブジェクトを見つけます。

1. QMF は QMF カタログを探し、一致する <OWNER>.<OBJECT\_NAME> を求めてその QMF カタログ内を検索します。見つかった場合はそれが使用されます。  
『例 5』のように <OWNER> が指定されない場合は、QMF カタログ・セクションの 3 番目の例で説明されているように、<OWNER> 値に現行ユーザー ID が使用されます。これは、リポジトリ・フォルダーに格納されているプロシージャが、QMF カタログに格納されているオブジェクトにアクセスすることができることを意味します。
2. QMF は、実行されるプロシージャが入っているリポジトリ内のフォルダーを検索します。新しいプロシージャを最初からオーサリングする場合、このことを覚えておくことは非常に重要です。新しいプロシージャでは、それがリポジトリに保存されるまでは、リポジトリ・フォルダーが作成されません。QMF が QMF カタログを検索して、一致するものが見つからなかった場合は、検索が停止し、リポジトリ・オブジェクトは検出されません。
3. QMF は一致するものを求めて残りのリポジトリ・フォルダーを検索します。その時点までにプロシージャがリポジトリ・フォルダーに保存されていなければ、この検索は行われません。残りのリポジトリ・ツリーを検索するときと同じ名前のオブジェクトが複数存在していると、期待どおりの結果が得られない場合があることにご注意ください。QMF カタログとは異なり、リポジトリ・ツリーでは、同じフォルダーにないオブジェクトの名前の固有性は考慮されません。そのため、<OBJECT\_NAME> によってオブジェクトを参照するプロシージャでは、参照元のプロシージャと同じフォルダーにオブジェクトを配置することを強くお勧めします。

## 「キー」プロパティを使ったオブジェクトの参照

参照元のプロシージャと同じフォルダーではない場所に保管される複合的なりポジトリ・ツリーおよびオブジェクトの場合、別の構文を使ってそれらが固有になるようにすることができます。リポジトリ・ツリー内のオブジェクトを選択する際、そのオブジェクトの「プロパティ」ビューに「キー」というフィールドが含ま

まれています。「キー」は固有であり、プロシージャはこれを使用してオブジェクトを参照することができます。例えば、

```
RUN QUERY qmf:/.workspaces/Default/Queries/TESTQ
```

「キー」内のテキストにスペースが含まれている場合、「キー」を二重引用符で囲む必要があります。まだリポジトリに保存されていない開発中のプロシージャも「キー」構文を使用して実行することができます。QMF カタログ内に格納されているプロシージャは「キー」構文を使用して、リポジトリ・フォルダー内に格納されているオブジェクトにアクセスすることができます。

## BOTTOM コマンド

BOTTOM コマンドを使用すると、照会結果セットの最終行にスクロールします。

このコマンドは FORWARD MAX と同等です。

### 構文

```
>>-- BOTTOM -----<<
```

### 例

```
BOTTOM
```

## CHECK コマンド

CHECK コマンドは、書式フィールドを動的に検査してエラーがないか確認します。

書式エディターが表示されているときに、コマンド行に CHECK を入力するか、Check ファンクション・キーを押すことができます。QMF™ は、書式フィールドに検出可能なエラーがないか検査します。エラーの情報は、エラー・メッセージ・ウィンドウまたは出力ビューに表示されます。

### 構文

```
>>--CHECK-----<<
```

## CONNECT コマンド

CONNECT コマンドは、データベース・データ・ソースへの接続を確立します。

後続のプロシージャ・コマンドは、指定したデータ・ソースで実行されます。実行中のプロシージャのサーバーも、指定されたサーバーに変更されます。プロシージャ内の他の現行オブジェクトには即時アクションは有効ではありません。ただし、これらのオブジェクトに影響を与える後続のコマンドによって追加の処理が行われる可能性があります。

例えば、照会 Q1 がサーバー X で実行されたが完了しなかったとします。次に CONNECT TO 'SERVER Y' コマンドが出され、サーバー Y に接続します。次に SAVE DATA AS T1 コマンドが出されます。

照会 Q1 はサーバー Y に対する CONNECT コマンドの影響を即時に受けることはありませんが、SAVE DATA コマンドが実行されるには、サーバー X で照会 Q1 で完



了する (または取り消される) 必要があります。データ・オブジェクトが完了すると、照会 Q1 のサーバーは Y に変更され、データはサーバー Y の表 T1 に保存されます。

## 構文

```
>>-- CONNECT ----- TO ServerName -----<<
      +- UserName -+          (PASSWORD=password)
```

パラメーター	説明
ServerName	データベース・サーバーの名前。名前にスペースが含まれている場合は、引用符で囲んでください。
UserName	データベース・サーバーに接続するために使用されるユーザー名。 UserName はオプション・パラメーターです。
PASSWORD	データベース・サーバーに接続するために使用されるパスワード。 UserName を指定する場合は、PASSWORD パラメーターを使用してパスワードを提供する必要があります。

## 例

```
CONNECT TO SERVER1
CONNECT pjones TO SERVER1 (PASSWORD=sales)
```

## CONVERT コマンド

CONVERT コマンドは、現行照会 (SQL または照会ビルダー・エディターのいずれかで表示) を SQL ビューに変換します。

オリジナルの照会 (データベース内の名前の付いたオブジェクトまたは一時オブジェクト) はこの操作には影響を受けません。

## 構文

データベースに保管された照会を変換するには:

```
>>-- CONVERT ----- QueryName -----<<
      +- QUERY -+          (+- SUBSTITUTE = YES/NO --+)
```

現在開いているウィンドウ (一時ストレージ) にある照会を変換するには:

```
>>-- CONVERT QUERY -----<<
```

パラメーター	説明
QueryName	変換する照会の名前
SUBSTITUTE	照会変数を置換する必要があるかどうかを定義します。選択可能なオプションは以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• YES。照会に変数が含まれる場合、QMF はそれらの変数に値を代入しようとします。すべての変数が (&amp;変数パラメーターまたは事前定義大域変数のいずれかを使用して) 定義されている場合、プロンプト・パネルは表示されません。QMF がすべての変数を解決できない場合は、必要な値の入力を求めるプロンプトが出されます。</li> <li>• NO。照会内の変数名は解決されません。</li> </ul>

## 例

次の例では、開いているウィンドウ (一時ストレージ) にある照会を変換します。

```
CONVERT QUERY (SUBSTITUTE=YES
```

次の例では、QMF カタログに格納されている Q.STAFF 照会を変換します。

```
CONVERT Q.STAFF
```

```
CONVERT QUERY Q.STAFF
```

## DISPLAY コマンド

DISPLAY コマンドは、開いているウィンドウの内容から派生するオブジェクト (照会結果など) やリポジトリまたは QMF カタログに保存されているオブジェクトを表示します。

### 構文

オブジェクトを表示するには:

```
>>-- DISPLAY ----- ObjectName -----<<
      +- QUERY ----+          ( +- &&Variable = Value ----+
      +- FORM ----+
      +- PROC ----+
      +- TABLE ----+
      +- REPORT ---+
      +- DASHBOARD-+
      +- ANALYTICS-+
```

注:

DB2 for z/OS データベースで作業を行う場合、分析オブジェクトは QMF カタログからのみ開くことができます。

最後に開かれたウィンドウの内容から派生するオブジェクトを表示するには:

```
>>-- DISPLAY ----- ObjectName -----<<
      +- QUERY ----+
      +- FORM ----+
          +- .MAIN-----+
          +- .BREAK1-----+
          +- .BREAK2-----+
          +- .BREAK3-----+
          +- .BREAK4-----+
          +- .BREAK5-----+
          +- .BREAK6-----+
          +- .CALC-----+
          +- .COLUMNS-----+
          +- .CONDITIONS-+
          +- .DETAIL-----+
          +- .FINAL-----+
          +- .OPTIONS-----+
          +- .PAGE-----+
      +- PROC -----+
      +- REPORT -----+
```

DISPLAY コマンドでは、表示されるオブジェクトのオブジェクト名または完全オブジェクト・キーのいずれかを指定できます。プロシージャが QMF カタログに格納されている場合、同じカタログに格納されているオブジェクトは、そのオブジェ

クト名だけを使って表示することができます。例えば、Q.STAFF 照会がプロシージャーと同じカタログに保管されている場合、DISPLAY Q.STAFF を使用して Q.STAFF 照会を表示します。

注: DISPLAY FORM.Section# コマンドは、「標準報告書」エディターの書式構造ツリーのセクションをアクティブ化するか (書式が開いている場合)、新しい書式を作成します (書式がまだ存在しない場合)。

プロシージャーがリポジトリに保管されている場合、プロシージャーと一緒に同じリポジトリ・フォルダーに保管されているオブジェクトを、そのオブジェクト名だけを使って表示することができます。例えば、Q.STAFF 照会がプロシージャーと同じリポジトリ・フォルダーに保管されている場合、DISPLAY Q.STAFF を使用して Q.STAFF 照会を表示することができます。

しかし、表示されるオブジェクトがプロシージャーにも同じリポジトリ・フォルダーにも保管されていない場合には、DISPLAY コマンドで完全オブジェクト・キーを指定する必要があります。例えば、DISPLAY "rsbi:/.workspaces/Traditional DBA View/Query1" のように指定します。

注: オブジェクトのキーを参照するには、リポジトリまたはワークスペース・エクスプローラーでオブジェクトをクリックし、「プロパティ」ビューでキー・プロパティ値を確認します。キーにスペースが含まれている場合は、キーが二重引用符で囲まれていることを確認してください。ビジュアル報告書形式で現行オブジェクトを表示するには、SHOW コマンドを使用する必要があります。ビジュアル・ダッシュボードを表示する場合は、完全オブジェクト・キーを指定する必要があります。ビジュアル・ダッシュボードは QMF カタログに格納できないからです。

パラメーター	説明
ObjectName	表示されるオブジェクトの名前または完全オブジェクト・キー。
&&Variable	オブジェクトが照会またはプロシージャーの場合、実行する照会またはプロシージャーにある変数に値を割り当てます。変数名の長さは 1 文字から 17 文字まで、値の長さは 1 文字から 55 文字までです。DISPLAY コマンドには、任意の数の変数および値を指定できます。照会またはプロシージャーに DISPLAY コマンドで値が与えられていない変数があり、これがグローバル変数でない場合は、値を指定するためのプロンプトがユーザーに出されます。プロシージャーに変数割り当てを組み込むときは、プロシージャーの実行前に変数が置換されないように、2 つのアンパーサンドを使用する必要があります。

## 例

次の例では、QMF カタログに格納されている照会を表示します。

```
DISPLAY USER1.QUERY1
```

次の例では、リポジトリに格納されている照会を表示します。

```
DISPLAY "rsbi:/.workspaces/Traditional DBA View/Query1"  
DISPLAY QUERY  
DISPLAY FORM.MAIN
```

## DRAW コマンド

DRAW コマンドは、データベース中の表の説明を基にして、表の基本照会を作成します。

### 構文

```
>>-- DRAW TableName -----<<
      ( +- TYPE = SELECT/INSERT/UPDATE +-
        +- IDENTIFIER = CorrName      +-)
```

パラメーター	説明
TableName	照会を作成する表の名前。
TYPE	作成する SQL 照会のタイプを指定します。 デフォルトは SELECT です。
IDENTIFIER	結果の照会内の表に関連する相関名。 TYPE=INSERT の場合は無視されます。 デフォルトはありません。

### 例

```
DRAW Q.STAFF (TYPE=SELECT
```

## EDIT コマンド

EDIT コマンドは、開いているエディター・ウィンドウの内容から派生するオブジェクト (照会、書式、プロシージャー、表など) や、リポジトリまたは QMF カタログに保存されているオブジェクトを表示します。

### 構文

エディター・ウィンドウでオブジェクトを編集するには:

```
>>-- EDIT -----ObjectName -----<<
      +- QUERY ----+          ( +- &&Variable = Value ----+
      +- FORM ----+
      +- PROC ----+
      +- TABLE ----+
```

最後に開かれたウィンドウの内容から派生するオブジェクトを編集するには:

```
>>-- EDIT -----+- QUERY --+-----<<
      +- FORM ---+
      +- PROC ---+
      +- REPORT -+
```

EDIT コマンドでは、編集するオブジェクトの完全オブジェクト・キーを指定します。

注: オブジェクトのキーを参照するには、リポジトリまたはワークスペース・エクスプローラーでオブジェクトをクリックし、「プロパティ」ビューでキー・プロパティ値を確認します。キーにスペースが含まれている場合は、キーを引用符で囲ってください。ビジュアル報告書形式で現行オブジェクトを表示するには、SHOW コマンドを使用する必要があります。

パラメーター	説明
ObjectName	編集するオブジェクトの完全オブジェクト・キー。

パラメーター	説明
&&Variable	オブジェクトが照会またはプロシージャの場合、実行する照会またはプロシージャにある変数に値を割り当てます。変数名の長さは 1 文字から 17 文字まで、値の長さは 1 文字から 55 文字までです。EDIT コマンドには、任意の数の変数および値を指定できます。照会またはプロシージャに EDIT コマンドで値が与えられていない変数があり、これがグローバル変数でない場合は、値を指定するためのプロンプトがユーザーに出されます。プロシージャに変数割り当てを組み込むときは、プロシージャの実行前に変数が置換されないように、2 つのアンバーサンドを使用する必要があります。

## 例

次の例では、リポジトリに格納されている照会を編集します。

```
EDIT "qmf:/.workspaces/Traditional DBA View/Query1"
```

次の例では、最後に開かれたウィンドウの内容から派生するオブジェクトを編集します。

```
EDIT QUERY
```

## END コマンド

**END** コマンドは、エディターが開いている場合は現行エディターを閉じ、使用できるエディターがない場合は QMF アプリケーションを閉じます。

### 構文

アクティブ・エディターを閉じるか、アクティブ・エディターがない場合にアプリケーションを閉じるには、次のコマンドを使用します。

```
>>-END-----<<
```

注: **END** コマンドの結果は、使用しているエディターや、初期手順を実行しているかどうかによって変わります。

表 23. END コマンドの結果と、関連するユーザー・アクション

ユーザー・アクション	ユーザー・アクションが行われるときのインターフェースの状態	動作
<b>END</b> と入力 (または「終了 (End)」ファンクション・キーを押す)	使用可能なエディターはありません。	QMF アプリケーションが閉じます。
<b>END</b> と入力 (または「終了 (End)」ファンクション・キーを押す)	以下のいずれかのエディターが開いています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>照会</li> <li>プロシージャ</li> <li>書式</li> <li>表</li> </ul>	エディターが閉じます。

END コマンドは CLOSE コマンドと同等です。

## ERASE コマンド

ERASE コマンドは、データベースからオブジェクト (照会、書式、プロシージャ、または表) を削除します。

### 構文

```
>> -- ERASE ----- ObjectName -----<<
      +- QUERY -+          ( +- CONFIRM = YES/NO --+
      +- FORM  --+          +- FOLDER = foldername-+
      +- PROC  --+
      +- TABLE -+
```

パラメーター	説明
ObjectName	データベースから除去するオブジェクトの名前。
CONFIRM	オブジェクトを除去する前に確認ダイアログを表示するかどうかを指定します。CONFIRM が指定されないか NO の場合は、対応するリソース限界が使用されます。
FOLDER	消去するオブジェクトへのリンクが格納されている、QMF カタログ内のフォルダーを指定します。デフォルト値は DSQEC_CURR_FOLDER グローバル変数によって指定されます。 注: フォルダーが指定されている場合は、オブジェクトへのリンクのみがフォルダーから削除され、オブジェクトは QMF カタログに残ります。フォルダーが指定されていない場合は、オブジェクトへのすべてのリンクがすべてのフォルダーから削除され、オブジェクト自体がデータベースから削除されます。

### 例

次の例では、QMF カタログに格納されている照会を消去します。

```
ERASE QUERY USER1.QUERY1
```

## EXECUTE コマンド

EXECUTE コマンドは、ターゲット・アプリケーション、オブジェクト、または URL を活動化します。

### 構文

このコマンドは WINDOWS コマンドと同様です。

注: このコマンドは、QMF for WebSphere では無視されます。

```
>>-- Execute CommandLine -----<<
```

パラメーター	説明
CommandLine	開始するアプリケーション・コマンド行、オブジェクト名、または URL。 コマンドが開始され、プロシージャの実行はコマンドの完了を待たずに続行します。

例

```
EXECUTE c:%programs%notepad.exe
```

## EXIT コマンド

EXIT コマンドは、QMF アプリケーションを閉じます。

構文

```
>>--EXIT-----<<
```

コマンド・バーにこのコマンドを入力すると、QMF アプリケーションを閉じることができます。

## EXPORT コマンド

EXPORT コマンドは、データベースに格納されているオブジェクト、または現在開いているウィンドウにあるオブジェクトをファイルに保存します。

構文

データベース上のオブジェクトをファイルにエクスポートするには:

```
>>-- EXPORT --- QUERY --- ObjectName TO FileName -----<<
      +- PROC ---          ( +- CONFIRM = YES/NO -+
                           +- SAVEATSERVER = YES/NO -+

>>-- EXPORT FORM ObjectName TO FileName -----<<
      ( +- CONFIRM = YES/NO          -+
        +- LANGUAGE = ENGLISH/SESSION -+
        +- SAVEATSERVER = YES/NO -----+

>>-- EXPORT TABLE ObjectName TO FileName -----<<
      ( +- CONFIRM = YES/NO -----+
        +- DATAFORMAT = CSV/DBF/HTML/IXF/PDF/SHP/TEXT/WQML/XLS/XLSX/XML -+
        +- DATEFORMAT = Java date format string -----+
        +- TIMEFORMAT = Java time format string -----+
        +- OUTPUTMODE = BINARY/CHARACTER/PC -----+
        +- LOBSINFILE = YES/NO -----+
        +- LOBSTO = path1;path2;... -----+
        +- LOBFILE = basefile1;basefile2;... -----+
        +- CCSID = integer or Java encoding name -----+
        +- COLUMNHEADINGS = YES/NO -----+
        +- UNICODE = YES/NO -----+
        +- SAVEATSERVER = YES/NO -----+
```

注: EXPORT TABLE は、常に名前をエクスポートします。

DB2 for z/OS データベースで作業を行う場合に QMF カタログから分析オブジェクトをエクスポートするには、以下のコマンドを使用します。

```
>>-- EXPORT --- ANALYTICS --- ObjectName TO FileName -----<<
      ( +- CONFIRM = YES/NO -----+
        +- DATAFORMAT = PNG/PDF -+
        +- HEIGHT -----+
        +- SAVEATSERVER-----+
        +- WIDTH -----+
```

現在開いているウィンドウにあるオブジェクトをファイルにエクスポートするには:

```
>>-- EXPORT --- QUERY --- TO FileName -----<<
      +- PROC ---          ( +- CONFIRM = YES/NO -+
                           +- SAVEATSERVER = YES/NO -+
```

```

>>-- EXPORT FORM TO FileName -----<<
    ( +- CONFIRM = YES/NO -----+
      +- LANGUAGE = ENGLISH/SESSION -+
      +- SAVEATSERVER = YES/NO -----+

>>-- EXPORT DATA TO FileName -----<<
    ( +- CONFIRM = YES/NO -----+
      +- DATAFORMAT = CSV/DBF/HTML/IXF/PDF/SHP/TEXT/WQML/XLS/XLSX/XML -+
      +- DATEFORMAT = Java date format string-----+
      +- TIMEFORMAT = Java time format string-----+
      +- OUTPUTMODE = BINARY/CHARACTER/PC -----+
      +- LOBSINFILE = YES/NO -----+
      +- LOBSTO = path1;path2;... -----+
      +- LOBFILE = basefile1;basefile2;... -----+
      +- CCSID = integer or Java encoding name -----+
      +- COLUMNHEADINGS = YES/NO -----+
      +- UNICODE = YES/NO -----+
      +- MODE = GRID/RAW -----+
      +- SAVEATSERVER = YES/NO -----+

>>-- EXPORT REPORT TO FileName -----<<
    ( +- CONFIRM = YES/NO -----+
      +- DATAFORMAT = TEXT/HTML/PDF -----+
      +- SPLIT = YES/NO -----+
      +- ORDER = 0/1/2 -----+
      +- WIDTH = integer -----+
      +- LENGTH = integer -----+
      +- UNITS = INCHES/CENTIMETERS/MILLIMETERS/POINTS--+
      +- USEFORMPS = YES/NO -----+
      +- SEPARATOR = any HTML text -----+
      +- CCSID = integer or Java encoding name -----+
      +- SAVEATSERVER = YES/NO -----+

```

パラメーター	説明
ObjectName	データベースからエクスポートするオブジェクトの名前。
FileName	オブジェクトのエクスポート先となる、事前に作成したファイルの名前、または一時ディレクトリー C:¥Temp。
CONFIRM	既存のファイルを置き換える前に確認ダイアログ・ボックスを表示するかどうかを指定します。 CONFIRM が指定されないか NO の場合は、対応するリソース限界が使用されます。
LANGUAGE	英語あるいは現行セッション言語のどちらで書式をエクスポートするか指定します。英語でエクスポートされた書式は、どの NLS セッションでも実行可能です。セッション言語でエクスポートされた書式は、同じ言語のセッションでのみ実行が可能です。デフォルト値が DSQEC_FORM_LANG グローバル変数で提供されます。



パラメーター	説明
DATAFORMAT	<p>エクスポート対象データのファイル・フォーマットを指定します。このパラメーターを省略すると、使用する形式を DSQQW_EXP_DT_FRMT グローバル変数が提供します。DSQQW_EXP_DT_FRMT グローバル変数で以下のように指定することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 0: テキスト形式</li> <li>• 2: HTML 形式</li> <li>• 3: CSV 形式</li> </ul> <p>注: 区切り文字は常にコンマですが、小数点にコンマが使用されるロケールでは別です。その場合は、セミコロンが区切り文字に使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 4: IXF</li> <li>• 5: dBASE III ファイル</li> <li>• 6: 形状ファイル形式</li> <li>• 7: WQML 形式</li> <li>• 8: XML 形式</li> <li>• 9: PDF 形式</li> <li>• 10: XLS 形式</li> <li>• 11: XLSX 形式</li> </ul> <p>IXF を指定した場合、DSQQW_EXP_OUT_MDE グローバル変数には、文字モード System/370 IXF の場合は 0、PC/IXF の場合は 1 を設定します。報告書をエクスポートする場合、HTML 形式では &lt;PRE&gt; タグが追加され、テキスト形式はテキスト・ベースのファイルに使用され、PDF 形式は PDF ベースのファイルに使用されます。</p>
DATEFORMAT	<p>HTML、CSV、または TXT 形式のエクスポート・ファイルで日付の形式を指定します。</p> <p>日付の形式は、Java の日付パターン・ストリングによって指定されます。日付のパターン・ストリング内で、引用符に囲まれていない「A」から「Z」および「a」から「z」の文字は、日付ストリングのコンポーネントを表すパターン文字と解釈されます。</p> <p>単一引用符 (') でテキストを囲むことによって、テキストが解釈されないようにすることができます。</p> <p>注: 形式ストリングにスペースが含まれている場合は、引用符で囲んでください。Java 形式ストリングについて詳しくは、Java 2 SDK Standard Edition の資料を参照してください。</p>

パラメーター	説明
TIMEFORMAT	HTML、CSV、または TXT 形式のエクスポート・ファイルで時刻の形式を指定します。  時刻の形式は、Java の時刻パターン・ストリングによって指定されます。時刻のパターン・ストリング内で、引用符に囲まれていない「A」から「Z」および「a」から「z」の文字は、時刻ストリングのコンポーネントを表すパターン文字と解釈されます。  単一引用符 (') でテキストを囲むことによって、テキストが解釈されないようにすることができます。 注: 形式ストリングにスペースが含まれている場合は、引用符で囲んでください。Java 形式ストリングについて詳しくは、Java 2 SDK Standard Edition の資料を参照してください。
OUTPUTMODE	データの出力形式を指定します。
LOBSINFILE	エクスポートされるデータに LOB を含めるかどうかを指定します。
LOBSTO	LOB を保存する位置。
LOBFILE	エクスポートされる LOB のベース名。
CCSID	ファイルの保存時に使用するコード・ページ (コード化文字セット識別番号) を指定します。この値は、整数またはコード・ページの Java エンコード名です。「エクスポート」ダイアログでリストされるすべての Java エンコード名がサポートされます。JVM によってサポートされるエンコード名もすべて使用できます。
COLUMNHEADINGS	列見出しをエクスポートするかどうかを指定します。HTML ファイル、CSV ファイル、または TEXT ファイルへのエクスポートでのみ選択可能です。
UNICODE	グラフィック列を UNICODE として保存するかどうかを指定します。このオプションは、データを IXF 形式で保存するときのみ適用されます。
SPLIT	報告書を複数のページに分割するかどうかを指定します。ビジュアル報告書をエクスポートするときのみ使用してください。
ORDER	報告書を複数のページに分割する方法を制御します。ビジュアル報告書をエクスポートするときのみ使用してください。  <ul style="list-style-type: none"> <li>• 0 - ビジュアル報告書の各ページが個別のファイルにエクスポートされます。</li> <li>• 1 - 単一の出力ファイルに、ビジュアル報告書のページが「横から下へ」の順に入ります。</li> <li>• 2 - 単一の出力ファイルに、ビジュアル報告書のページが「下から横へ」の順に入ります。</li> </ul>
WIDTH	<ul style="list-style-type: none"> <li>• これは、報告書ページの幅を単位付きで指定します。 注: 標準報告書でもビジュアル報告書でも使用されます。</li> <li>• エクスポートする分析オブジェクトの幅をピクセル単位で指定します。</li> </ul>
LENGTH	報告書ページの長さを単位で指定します。 注: 標準報告書でもビジュアル報告書でも使用されます。

パラメーター	説明
UNITS	WIDTH および LENGTH パラメーターで使用される計算単位を指定します。 注: ビジュアル報告書をエクスポートするときのみ使用してください。
USEFORMPS	オブジェクトに関連付けられている Windows 書式を使用するかどうかを指定します。
SEPARATOR	ページ区切り記号として使用されるストリングを指定します。必要に応じて、引用符を使用します。 注: ビジュアル報告書をエクスポートするときのみ使用してください。
MODE	照会結果データをフォーマットおよび追加された計算列を含めて保存するかどうかを指定します。次のいずれかの値を指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>GRID</b> - 現在の照会結果のすべてのデータを現在のフォーマットのとおり保存することを指定します。照会結果に追加された計算列も含まれます。  これは PDF 形式のデフォルト値です。 注: MODE <b>GRID</b> は、DSQDC_COL_LABELS が 1 に設定されていればラベルをエクスポートします。MODE <b>GRID</b> は、DSQDC_COL_LABELS が 0 に設定されていれば名前をエクスポートします。</li> <li>• <b>RAW</b> - 現在の照会結果のデータをすべて保存することを指定します。データに適用されたフォーマットは保存されません。照会結果に追加された計算列は保存されません。  これは、PDF 以外のすべての形式のデフォルト値です。 注: MODE <b>RAW</b> は、常に名前をエクスポートします。これは、MODE パラメーターが省略されているときにも適用されます。</li> </ul>
SAVEATSERVER	オブジェクトのエクスポート・パスにルート出力ディレクトリーを含めるかどうかを指定します。このディレクトリーは、「設定」ウィンドウの「サーバー・サイド・ファイル・システム ( <b>Server-Side File System</b> )」ページで設定されます。QMF for WebSphere で指定できるのは、管理者が設定したルート・ディレクトリー内のパスのみです。それ以外の場合、エクスポートは禁止され、エラーが発生します。
HEIGHT	エクスポートする分析オブジェクトの高さをピクセル単位で指定します。

## 例

次の例では、事前に作成したディレクトリーに QMF カタログから照会をエクスポートします。

```
EXPORT QUERY USER1.QUERY TO C:%Queries%query1.vry
```

以下に、DATEFORMAT パラメーターと TIMEFORMAT パラメーターの使用例を示します。

```
EXPORT DATA TO C:¥Results¥example.txt (DATEFORMAT="yyyy MM dd", TIMEFORMAT=HH:mm)
EXPORT TABLE Q.INTERVIEW TO "C:¥Tables¥interview.txt" (DATEFORMAT=yyyy/MM/dd,
TIMEFORMAT="HH mm")
```

以下に、SAVEATSERVER パラメーターの使用例を示します。「サーバー・サイド・ファイル・システム (**Server-Side File System**)」設定ページでルート出力パラメーターが C:¥Temp に設定されているとします。

```
EXPORT QUERY USER1.QUERY TO query1.vry (SAVEATSERVER=YES)
```

このコマンドの結果、C:¥Temp¥query1.vry に新しいファイルができます。

関連タスク:

エクスポート・アクションで生成されるオブジェクトのディレクトリー・ロケーションの設定

さまざまな QMF アクションから生成されたオブジェクトがローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システム上の特定の場所にエクスポートされるように、QMF で設定を行うことができます。

## FORWARD コマンド

FORWARD コマンドは、照会結果セットの最終行にスクロールします。

このコマンドで使用できるパラメーターは MAX だけです。これを指定すると BOTTOM コマンドと同じになります。

構文

```
>>-- FORWARD MAX -----<<
```

例

```
FORWARD MAX
```

## HELP コマンド

HELP は、QMF ヘルプ・ウィンドウを開きます。

構文

QMF の「ヘルプ」ウィンドウを開くには、次のようにします。

```
>>-HELP-----<<
```

## IMPORT コマンド

IMPORT コマンドは、ファイルに格納されているオブジェクトをインポートし、使用可能なウィンドウ (一時ストレージ) で開くか、現行データベースに保存します。

構文

ファイルからオブジェクトをインポートし、使用可能なウィンドウでオブジェクトを開いて現行データベースに保存するには、次のようにします。

```
>>-- IMPORT --- QUERY --- ObjectName FROM FileName -----<<
      +- PROC -+
      ( +- CONFIRM = YES/NO -----+
        +- COMMENT = Text -----+
        +- SHARE = YES/NO -----+
```

```

>>-- IMPORT FORM ObjectName FROM FileName -----<<
      ( +- CONFIRM = YES/NO -----+
        +- COMMENT = text -----+
        +- LANGUAGE = ENGLISH/SESSION -----+
        +- SHARE = YES/NO -----+
>>-- IMPORT TABLE ObjectName FROM FileName -----<<
      ( +- CONFIRM = YES/NO -----+
        +- COMMENT = Text -----+
        +- ACTION = REPLACE/APPEND -----+
        +- ACCELERATOR = acceleratorname -----+
        +- SPACE = tablespace/database.tablespace+
        +- SPACE DATABASE = database-----+

```

オブジェクト、照会結果データ、または LOB データをファイルから開いているウィンドウ (一時ストレージ) にインポートするには:

```

>>-- IMPORT --- QUERY --- FROM FileName -----<<
      +- PROC --+
>>-- IMPORT -- DATA --- FROM FileName -----<<
      ( +- LOBSFROM = path1;path2; -+
>>--IMPORT --- FORM --- FROM FileName -----<<
      +- REPORT -+      ( +- LANGUAGE = ENGLISH/SESSION -----+

```

QMF for Windows で作成したビジュアル報告書をインポートするには、以下のコマンドを使用します。

```

>>-- IMPORT -- REPORT ObjectName -- FROM FileName -----<<
      ( +- COMMENT = Text -----+
        +- CONFIRM = YES/NO -----+
        +- LANGUAGE = ENGLISH/SESSION -----+
        +- SHARE = YES/NO -----+

```

パラメーター	説明
ObjectName	データベースにインポートするオブジェクトの名前。
FileName	オブジェクトのインポート元であるファイルの名前。
CONFIRM	既存のオブジェクトを置き換える前に確認ダイアログ・ボックスを表示するかどうかを指定します。CONFIRM が指定されないか NO の場合は、対応するリソース限界が使用されます。
COMMENT	インポートされるオブジェクトにコメントを指定します。コメントのテキストを引用符で囲んでください。
SHARE	他のユーザーがインポートされたオブジェクトを使用できるかどうかを指定します。
LANGUAGE	英語あるいは現行セッション言語のどちらで書式をインポートするか指定します。英語でインポートした書式は、どの NLF セッションでも実行できます。セッション言語でインポートされた書式は、同じ言語のセッションでのみ実行が可能です。デフォルト値は DSQEC_FORM_LANG 大域変数で指定します。
ACTION	データベース表全体を置き換えるのか、既存の表に新規データを追加するのかを指定します。
LOBSFROM	LOB を保存する位置。

パラメーター	説明
SPACE	<p>表を特定のデータベース・コンテナおよび表スペースに保存するために、データベース名と表スペース名の両方を指定します。</p> <p>注: 指定する表スペース名は、リソース限界設定の「データの保存」タブでユーザー ID に設定されているデフォルトの表スペース名に一致している必要があります。デフォルトの表スペース名をオーバーライドする権限があれば、表の保存先にしたい任意の表スペース名を指定できます。表スペース名のオーバーライド権限は、リソース限界設定の「データの保存」タブで設定されています。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>DB2 for z/OS データベースの場合、database.tablespace が使用されます。</li> <li>DB2 for LUW データベースの場合、tablespace が使用されます。</li> </ul>
SPACE DATABASE	<p>作成した表の名前で自動的に作成される表スペースを持つ特定のデータベース・コンテナに表を保存するために、データベース名のみを指定します。</p> <p>注: このパラメーターは z/OS データベースにのみ使用します。</p>
ACCELERATOR	<p>データの保存に使用するアクセラレータの名前を指定します。</p> <p>ACCELERATOR キーワードの長さは最大 128 文字です。コマンドに SPACE キーワードがすでに指定されている場合、DSQEC_SAV_ALLOWED 大域変数の値が 5 に設定されている場合を除き、ACCELERATOR キーワードを指定することはできません。</p> <p>ACCELERATOR キーワードのデフォルト値は DSQEC_SAV_ACCELNM 大域変数から取得されます。</p> <p>ACCELERATOR キーワードは、IDAA をサポートしていない DB2 z/OS サーバーでは無視されます。</p>

## 例

```
IMPORT QUERY FROM C:¥Queries¥query1.qry
```

## LIMIT LOCAL コマンド

**LIMIT LOCAL** コマンドは、既存のローカル変数の値を指定します。

このコマンドを使用して設定されるパラメーターのみが、オブジェクトの実行時に「プロンプト変数」ウィンドウに表示されます。

新しく作成されるローカル変数は、現在の照会、報告書、またはダッシュボードでのみ有効です。

## 構文

```
>>-- LIMIT LOCAL ( VariableName = Value, ... -----<<
```

パラメーター	説明
VariableName	使用可能な値を設定するローカル変数の名前。
Value	「プロンプト変数」ウィンドウで選択できる値または値のリスト。

## 例

```
LIMIT LOCAL (id=10;20;30  
LIMIT LOCAL (TableName=Q.STAFF;Q.INTERVIEW;
```

## LIST コマンド

**LIST** コマンドは、「オブジェクト・リスト」ダイアログ・ボックスを呼び出して、データベースに格納されている QMF オブジェクトやデータベース表を表示します。

### 構文

このコマンドを実行するには、コマンド・バーにコマンドを入力します。

```
>>-- LIST -----ALL -----<<  
      +- FORMS ----+      ( +- OWNER = authorizationid/patternstring/ALL -+  
      +- PROCS ----+      +- NAME = ALL/objectname/patternstring -----+  
      +- QMF -----+      +- LOCATION = servername -----+  
      +- QUERIES -+      +- FOLDER = foldername -----+  
      +- TABLES --+      
```

パラメーター	説明
ALL	すべてのオブジェクト (QMF オブジェクトおよびデータベース表) をリストします。
FORMS	QMF 書式のみをリストします。
PROCS	QMF プロシージャのみをリストします。
QMF	QMF カタログからすべてのオブジェクトをリストします。
QUERIES	QMF カタログからすべての照会をリストします。
TABLES	データベース表オブジェクト (表、ビュー、および別名) のみをリストします。
OWNER	リストするオブジェクトの所有権修飾子を指定します。  ユーザー自身のデータベース許可 ID がデフォルトになります。  有効な値は以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"><li>• <b>authorizationid</b>  所有者がユーザー、スキーマ、またはデータベース・コレクションの指定された名前と一致するオブジェクトをリストします。</li><li>• <b>patternstring</b>  特定のパターンの所有者名を検索します。パターンは、『例』セクションで示すように、下線や % 記号が特別な意味を持つストリングで指定されます。</li><li>• <b>ALL</b>  所有者に関係なく、すべてのオブジェクトをリストします。</li></ul>





## MAIL TO コマンド

MAIL TO コマンドは、指定されたオブジェクトをインターネット・メールの添付ファイルとして送信します。

指定したオブジェクトを、データベースまたはリポジトリに格納するか、ウィンドウ (一時ストレージ) で開くことができます。

### 構文

データベースにあるオブジェクトを送信するには:

```
>>-- MAIL ----- ObjectName TO Address -----<<
      +- QUERY -+      ( +- FROM = Address -----+
      +- PROC  --+      +- CCLIST = Address1;Address2 -----+
      +- FORM  --+      +- SUBJECT = Subject -----+
                        +- BODY = Text -----+
                        +- FORMAT = Text/HTML -----+
                        +- SMTPSERVER = SMTP Server -----+
                        +- SMTPPORT = SMTP Server port number ---+
                        +- SMTPUSER = SMTP Username -----+
                        +- SMTPPASSWORD = SMTP Password -----+
                        +- DATEFORMAT = Java date format string -+
                        +- TIMEFORMAT = Java time format string -+

>>-- MAIL ----- ObjectName TO Address -----<<
      +- TABLE -+      ( +- FROM = Address -----+
                        +- CCLIST = Address1;Address2 -----+
                        +- DATAFORMAT = CSV/DBF/HTML/IXF/PDF/QMF/SHP/TEXT/WQML/XLS/XLSX/XML -+
                        +- SUBJECT = Subject -----+
                        +- BODY = Text -----+
                        +- FORMAT = Text/HTML -----+
                        +- SMTPSERVER = SMTP Server -----+
                        +- SMTPPORT = SMTP Server port number ---+
                        +- SMTPUSER = SMTP Username -----+
                        +- SMTPPASSWORD = SMTP Password -----+
                        +- DATEFORMAT = Java date format string ---+
                        +- TIMEFORMAT = Java time format string ---+

>>-- MAIL ----- ObjectName TO Address -----<<
      +- REPORT -+      ( +- FROM = Address -----+
                        +- CCLIST = Address1;Address2 -----+
                        +- SUBJECT = Subject -----+
                        +- BODY = Text -----+
                        +- FORMAT = Text/HTML -----+
                        +- SMTPSERVER = SMTP Server -----+
                        +- SMTPPORT = SMTP Server port number ---+
                        +- SMTPUSER = SMTP Username -----+
                        +- SMTPPASSWORD = SMTP Password -----+
                        +- DATEFORMAT = Java date format string -+
                        +- TIMEFORMAT = Java time format string -+
                        +- TYPE = PDF/HTML-----+
                        +- METHOD = SPLIT/CONT -----+

>>-- MAIL ----- ObjectName TO Address -----<<
      +- VISUAL REPORT -+      ( +- FROM = Address -----+
                        +- CCLIST = Address1;Address2 -----+
                        +- SUBJECT = Subject -----+
                        +- BODY = Text -----+
                        +- FORMAT = Text/HTML -----+
                        +- SMTPSERVER = SMTP Server -----+
                        +- SMTPPORT = SMTP Server port number -+
                        +- SMTPUSER = SMTP Username -----+
                        +- SMTPPASSWORD = SMTP Password -----+
                        +- TYPE = PDF/HTML-----+
                        +- METHOD = SPLIT/CONT -----+
```

開いているウィンドウ (一時ストレージ) に現在あるオブジェクトを送信するには:

```
>>-- MAIL --- QUERY --- TO Address -----<<
      +- PROC  --+      ( +- FROM = Address -----+
      +- FORM  --+      +- CCLIST = Address1;Address2 -----+
                        +- SUBJECT = Subject -----+
                        +- BODY = Text -----+
                        +- FORMAT = Text/HTML -----+
                        +- SMTPSERVER = SMTP Server -----+
                        +- SMTPPORT = SMTP Server port number ---+
                        +- SMTPUSER = SMTP Username -----+
```

```

+- SMTPPASSWORD = SMTP Password -----+
+- DATEFORMAT = Java date format string -+
+- TIMEFORMAT = Java time format string -+

>>-- MAIL --- REPORT --- TO Address -----<<
( +- FROM = Address -----+
+- CCLIST = Address1;Address2 -----+
+- SUBJECT = Subject -----+
+- BODY = Text -----+
+- FORMAT = Text/HTML -----+
+- SMTPSERVER = SMTP Server -----+
+- SMTPPORT = SMTP Server port number -+
+- SMTPUSER = SMTP Username -----+
+- SMTPPASSWORD = SMTP Password -----+
+- DATEFORMAT = Java date format string -+
+- TIMEFORMAT = Java time format string -+
+- TYPE = PDF/HTML-----+
+- METHOD = SPLIT/CONT -----+

>>-- MAIL --- VISUAL REPORT --- TO Address -----<<
( +- FROM = Address -----+
+- CCLIST = Address1;Address2 -----+
+- SUBJECT = Subject -----+
+- BODY = Text -----+
+- FORMAT = Text/HTML -----+
+- SMTPSERVER = SMTP Server -----+
+- SMTPPORT = SMTP Server port number -+
+- SMTPUSER = SMTP Username -----+
+- SMTPPASSWORD = SMTP Password -----+
+- TYPE = PDF/HTML-----+
+- METHOD = SPLIT/CONT -----+

>>-- MAIL --- DATA --- TO Address -----<<
( +- FROM = Address -----+
+- CCLIST = Address1;Address2 -----+
+- DATAFORMAT = CSV/DBF/HTML/IXF/PDF/QMF/SHP/TEXT/WQML/XLS/XLSX/XML -+
+- SUBJECT = Subject -----+
+- BODY = Text -----+
+- FORMAT = Text/HTML -----+
+- SMTPSERVER = SMTP Server -----+
+- SMTPPORT = SMTP Server port number -----+
+- SMTPUSER = SMTP Username -----+
+- SMTPPASSWORD = SMTP Password -----+
+- DATEFORMAT = Java date format string -----+
+- TIMEFORMAT = Java time format string -----+

>>-- MAIL --- MESSAGE --- TO Address -----<<
( +- FROM = Address -----+
+- CCLIST = Address1;Address2 -----+
+- SUBJECT = Subject -----+
+- BODY = Text -----+
+- FORMAT = Text/HTML -----+
+- SMTPSERVER = SMTP Server -----+
+- SMTPPORT = SMTP Server port number -+
+- SMTPUSER = SMTP Username -----+
+- SMTPPASSWORD = SMTP Password -----+
+- ATTACHMENT = File1;File2 -----+

```

パラメーター	説明
ObjectName	送信するオブジェクトの名前。
FROM	送信者の E メール・アドレス。
CCLIST	受信者の E メール・アドレス。

パラメーター	説明
DATAFORMAT	<p>添付するデータ・オブジェクトのファイル形式を指定します。このパラメーターを省略すると、使用する形式を DSQQW_EXP_DT_FRMT グローバル変数が提供します。DSQQW_EXP_DT_FRMT グローバル変数で以下のように指定することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 0: テキスト形式</li> <li>• 2: HTML 形式</li> <li>• 3: CSV 形式</li> <li>• 4: IXF 形式</li> <li>• 5: dBASE III ファイル</li> <li>• 6: 形状ファイル形式</li> <li>• 7: WQML 形式</li> <li>• 8: XML 形式</li> <li>• 9: PDF 形式</li> <li>• 10: XLS 形式</li> <li>• 11: XLSX 形式</li> </ul> <p>IXF を指定した場合、DSQQW_EXP_OUT_MDE グローバル変数には、文字モード System/370 IXF の場合は 0、PC/IXF の場合は 1 を設定します。報告書をエクスポートする場合、HTML 形式では &lt;PRE&gt; タグが追加され、テキスト形式はテキスト・ベースのファイルに使用され、PDF 形式は PDF ベースのファイルに使用されます。</p>
SUBJECT	E メール件名行参照。
BODY	E メール・メッセージの内容。
FORMAT	E メール形式。サポートされる形式はテキストと HTML です。
SMTPSERVER	定義済み SMTP サーバーの名前、またはカスタム SMTP サーバーのアドレス。
SMTPPORT	SMTP サーバーのポート番号。
SMTPUSER	SMTP サーバーで許可に使用されるユーザー名。
SMTPPASSWORD	SMTP サーバーで許可に使用されるパスワード。
ATTACHMENT	添付するファイルの名前とパス。
TYPE	エクスポートするファイルがビジュアル報告書であることを指定するタイプ。
METHOD	ページの分離方式。
DATEFORMAT	<p>HTML、CSV、または TXT 形式のエクスポート・ファイルで日付の形式を指定します。</p> <p>日付の形式は、Java の日付パターン・ストリングによって指定されます。日付のパターン・ストリング内で、引用符に囲まれていない「A」から「Z」および「a」から「z」の文字は、日付ストリングのコンポーネントを表すパターン文字と解釈されます。</p> <p>単一引用符 (') でテキストを囲むことによって、テキストが解釈されないようにすることができます。</p> <p>注: 形式ストリングにスペースが含まれている場合は、引用符で囲んでください。Java 形式ストリングについて詳しくは、Java 2 SDK Standard Edition の資料を参照してください。</p>

パラメーター	説明
TIMEFORMAT	<p>HTML、CSV、または TXT 形式のエクスポート・ファイルで時刻の形式を指定します。</p> <p>時刻の形式は、Java の時刻パターン・ストリングによって指定されます。時刻のパターン・ストリング内で、引用符に囲まれていない「A」から「Z」および「a」から「z」の文字は、時刻ストリングのコンポーネントを表すパターン文字と解釈されます。</p> <p>単一引用符 (') でテキストを囲むことによって、テキストが解釈されないようにすることができます。</p> <p>注: 形式ストリングにスペースが含まれている場合は、引用符で囲んでください。Java 形式ストリングについて詳しくは、Java 2 SDK Standard Edition の資料を参照してください。</p>

### 例 1

次の例では、照会を送信します。照会は照会エディターで開かれます。

```
MAIL QUERY TO abc@mail.com ( SUBJECT="Opened Query"
+ SMTPSERVER=smtp.example.com
```

### 例 2

以下に、DATEFORMAT パラメーターと TIMEFORMAT パラメーターの使用例を示します。

```
MAIL DATA TO abc@mail.com (DATEFORMAT="dd.MM.yy" TIMEFORMAT="hh:mm"
+ BODY="DATA"
+ SUBJECT="DATA"
+ SMTPSERVER=smtp.example.com FROM=cba@mail.com
```

### 例 3

次の例では、指定した E メール・アドレスにイメージを HTML 形式で送信します。

```
MAIL MESSAGE TO abc@mail.com (
+ SUBJECT="Image"
+ BODY="<h1>image</h1></br><img src='cid:image.png'></img>"
+ FROM=cba@mail.com
+ SMTPSERVER="smtp.example.com"
+ SMTPUSER=user
+ SMTPPASSWORD=password
+ ATTACHMENT="D:/image.png"
+ FORMAT=HTML
```

## PRINT コマンド

PRINT コマンドは、現行ウィンドウ (一時ストレージ) にあるオブジェクト、またはデータベースに格納されているオブジェクトのコピーを印刷します。

### 構文

注: このコマンドは QMF for WebSphere ではサポートされていません。

データベースにあるオブジェクトのコピーを印刷するには:

```
>>-- PRINT ----- ObjectName -----<<
( +- PRINTER = Printer -----+
  +- LEFTMARGIN = integer -----+
  +- RIGHTMARGIN = integer -----+
```

```

+ - TOPMARGIN = integer -----+
+ - BOTTOMMARGIN = integer -----+
+ - COPIES = NumCopies-----+
+ - WIDTH = NumChars/CONT/AUTO --+
+ - HEIGHT = NumChars/CONT/AUTO -+

>>-- PRINT ----- ObjectName -----<<
+ - QUERY -+          ( + - PRINTER = Printer -----+
+ - PROC  -+          + - LEFTMARGIN = integer -----+
+ - TABLE -+         + - RIGHTMARGIN = integer -----+
+ - TOPMARGIN = integer -----+
+ - BOTTOMMARGIN = integer -----+

>>-- PRINT ----- ANALYTICS --- ObjectName -----<<
+ - WIDTH = NumChars/CONT/AUTO -+
+ - HEIGHT = NumChars/CONT/AUTO -+
+ - PRINTER = Printer -----+

>>-- PRINT FORM --- ObjectName-----<<
( + - DATETIME = YES/NO -----+
+ - PAGENO = YES/NO -----+
+ - PRINTER = Printer -----+
+ - LENGTH = NumLines/CONT/AUTO -----+
+ - WIDTH = NumChars/CONT/AUTO -----+
+ - LEFTMARGIN = integer -----+
+ - RIGHTMARGIN = integer -----+
+ - TOPMARGIN = integer -----+
+ - BOTTOMMARGIN = integer -----+

```

開いているウィンドウ (一時ストレージ) にある現行オブジェクトのコピーを印刷するには:

```

>>-- PRINT ----- QUERY -----<<
+ - PROC -+          ( + - PRINTER = Printer -----+
+ - TABLE -+         + - LEFTMARGIN = integer ----+
+ - TOPMARGIN = integer ----+
+ - BOTTOMMARGIN = integer -+

>>-- PRINT REPORT -----<<
( + - DATETIME = YES/NO -----+
+ - PAGENO = YES/NO -----+
+ - PRINTER = Printer -----+
+ - COPIES = NumCopies-----+
+ - TYPEFACE = fontname -----+
+ - SIZE = FontSize -----+
+ - BOLD = YES/NO -----+
+ - ITALIC = YES/NO -----+
+ - CHARSET = ANSI/DEFAULTS/SYMBOL/SHIFTJIS/GB2312/ -+
+ - HANGUEL/CHINESEBIG5/OEM/JOHAB/HEBREW/ --+
+ - ARABIC/GREEK/TURKISH/THAI/EASTEUROPE/ --+
+ - RUSSIAN/MAC/BALTIC -----+
+ - ORIENTATION = PORTRAIT/LANDSCAPE -----+
+ - USEFORMPS = YES/NO -----+
+ - LENGTH = NumLines/CONT/AUTO -----+
+ - WIDTH = NumChars/CONT/AUTO -----+
+ - LEFTMARGIN = integer -----+
+ - RIGHTMARGIN = integer -----+
+ - TOPMARGIN = integer -----+
+ - BOTTOMMARGIN = integer -----+

>>-- PRINT FORM -----<<
( + - DATETIME = YES/NO -----+
+ - PAGENO = YES/NO -----+
+ - PRINTER = Printer -----+
+ - LENGTH = NumLines/CONT/AUTO -----+
+ - WIDTH = NumChars/CONT/AUTO -----+
+ - LEFTMARGIN = integer -----+

```

```

+- RIGHTMARGIN = integer -----+
+- TOPMARGIN = integer -----+
+- BOTTOMMARGIN = integer -----+

```

パラメーター	説明
ObjectName	印刷するオブジェクトの名前。
DATETIME	ページ・フッターに現在の日時を組み込むかどうかを指定します。報告書を印刷するときは、DATETIME=NO を指定するか、または書式内のページ・テキストに &DATE または &TIME 変数を組み込まない限り、ページ・フッターに日付と時刻が印刷されます。組み込まれた場合、日付と時刻は、現在の Windows の地域設定にしたがってフォーマットされます。
PAGENO	ページ番号をページ・フッターに組み込むかどうかを指定します。報告書を印刷するときは、PAGENO=NO を指定するか、または書式内のページ・テキストに &PAGE 変数を組み込まない限り、ページ・フッターにページ番号が印刷されます。
PRINTER	オブジェクトまたは報告書を印刷するプリンターの名前を指定します。 ヒント: プリンターの名前は、「印刷」ウィンドウの「一般」タブから取得できます。プリンターの名前を PRINTER パラメーターの値として指定する場合は、名前を二重引用符で囲みます。例えば、PRINTER="My_Printer" のように指定します。
TYPEFACE	オブジェクトを印刷するときに使用するフォント書体を指定します。
COPIES	オブジェクトを印刷するときに印刷する部数を指定します。
SIZE	オブジェクトを印刷するときに使用するフォント・サイズを指定します。
BOLD	オブジェクトを印刷するときに太字テキストを使用することを指定します。
ITALIC	オブジェクトを印刷するときにイタリック・テキストを使用することを指定します。
CHARSET	オブジェクトを印刷するときに使用する文字セットを指定します。
ORIENTATION	印刷オブジェクトの用紙方向を指定します。
USEFORMPS	オブジェクトに関連付けられている Windows 書式を使用するかどうかを指定します。
LENGTH	各ページに印刷する最大行数 (1 から 999)、CONT (改ページなしで連続して印刷)、または AUTO を指定します。LENGTH が省略された場合、DSQQW_RPT_LEN_TYP 大域変数および DSQQW_RPT_NUM_LNS 大域変数の値が使用されます。
WIDTH	<ul style="list-style-type: none"> <li>各行に印刷する最大文字数 (1 から 999)、CONT (改ページなしで連続して印刷)、または AUTO を指定します。報告書を印刷する際に、WIDTH より長い行は後続ページに書式設定されます。</li> <li>分析オブジェクトの場合: 印刷ページの幅を指定します。幅の単位は 1 文字の 1 バイト文字です。</li> </ul>
HEIGHT	分析オブジェクトの場合: 印刷ページの高さを指定します。高さの単位は 1 文字の 1 バイト文字です。
LEFTMARGIN	左マージンに使用される値を指定します。単位はインチです。
RIGHTMARGIN	右マージンに使用される値を指定します。単位はインチです。
TOPMARGIN	上部マージンに使用される値を指定します。単位はインチです。

パラメーター	説明
BOTTOMMARGIN	下部マージンに使用される値を指定します。 単位はインチです。

## 例

次の例では、開いているウィンドウに現行オブジェクトのコピーを印刷します。オブジェクトをデータベースから印刷したい場合は、オブジェクトの名前をプロシージャで指定します。

```
PRINT QUERY
PRINT REPORT (LENGTH=60, DATETIME=NO)
```

## RESET コマンド

**RESET** コマンドは、一時ストレージ内のオブジェクトをその初期状態にリストアします。

### 構文

一時ストレージ内の QMF オブジェクトをリセットするには、次のようにします。

```
>>-RESET----FORM-----<<
      +-.BREAK1-----+
      +-.BREAK2-----+
      +-.BREAK3-----+
      +-.BREAK4-----+
      +-.BREAK5-----+
      +-.BREAK6-----+
      +-.CALC-----+
      +-.COLUMNS-----+
      +-.CONDITIONS-----+
      +-.DETAIL-----+
      +-.FINAL-----+
      +-.OPTIONS-----+
      +-.PAGE-----+
      +- PROC -+
>>-RESET----QUERY-----<<
      ( +- LANGUAGE=SQL/PROMPTED -+
        +- MODEL=REL
```

パラメーター	説明
PROC	プロシージャをリセットします。
QUERY	照会をリセットします。
QUERY オプション	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>LANGUAGE</b> 照会パネルで初期化する照会言語を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>- <b>SQL</b> 照会の「SQL」タブを開きます。</li> <li>- <b>PROMPTED</b> 「指示照会」タブを表示します。</li> </ul> </li> <li>• <b>MODEL</b> 照会に使用するデータ・モデルを指定します。リレーショナル・データは、サポートされている唯一の値 (REL) です。</li> </ul>

パラメーター	説明
FORM	書式をリセットします。
<ul style="list-style-type: none"> <li>• FORM</li> <li>• FORM.BREAK1</li> <li>• FORM.BREAK2</li> <li>• FORM.BREAK3</li> <li>• FORM.BREAK4</li> <li>• FORM.BREAK5</li> <li>• FORM.BREAK6</li> <li>• FORM.CALC</li> <li>• FORM.COLUMNS</li> <li>• FORM.CONDITIONS</li> <li>• FORM.FINAL</li> <li>• FORM.OPTIONS</li> <li>• FORM.PAGE</li> <li>• FORM.DETAIL</li> </ul>	書式の該当する部分だけをデフォルト値にリセットして、指定された書式ツリー・セクションを表示します。

## RESET GLOBAL

RESET GLOBAL コマンドは、ユーザー大域変数の名前と値を削除します。

### 構文

特定のグローバル変数をリセットするには:

```
>>-- RESET GLOBAL (VarName1, VarName2,... -----<<
```

すべてのグローバル変数をリセットするには:

```
>>-- RESET GLOBAL ALL -----<<
```

パラメーター	説明
VariableName	削除する特定の変数の名前。以前に SET GLOBAL コマンドで設定した変数の名前を最大 10 個まで指定できます。  ALL は、SET GLOBAL コマンドで以前に設定されたすべての変数の名前と値を削除します。DSQ で始まる名前の変数には制約があり、削除することはできません。

### 例

```
RESET GLOBAL (Variable1, Variable2
```

```
RESET GLOBAL ALL
```

## RUN コマンド

RUN コマンドは、データベースに格納されているか、開いているウィンドウ内の (一時ストレージにある) 現行オブジェクトである、プロシーチャー、照会、または Dynamart を実行します。照会の場合、RUN コマンドは、取得した結果をデータベースに保存する機能を提供します。



## 構文

データベースにあるオブジェクトを実行するには:

```
>>-- RUN ----- ObjectName -----<<
      +- QUERY -+      ( +- &&Variable = Value -----+
                        +- CONFIRM = YES/NO -----+
                        +- FORM = FORM/formname-----+
                        +- ROWLIMIT = NumRows-----+
                        +- TABLE = owner.name-----+
                        +- COMMENT = text -----+
                        +- CONFIRM = YES/NO -----+
                        +- METHOD = REGULAR/FAST/FASTSAFE-----+
                        +- SCOPE = NumChars -----+
                        +- ROWIDADD = YES/NO -----+
                        +- ROWIDNAME = text -----+
                        +- ROWIDDISP = EXCLUDE/CONVERT/ALWAYS/BYDEFAULT----+
                        +- ACTION = REPLACE/APPEND -----+
                        +- SPACE = tablespace/database.tablespace-----+
                        +- SPACE DATABASE = database-----+
                        +- ACCELERATOR = acceleratorname -----+
                        +- MODE = GRID/RAW -----+

>>-- RUN ----- ObjectName -----<<
      +- PROC -+      ( + &&Variable = Value -----+

>>-- RUN ----- ObjectName -----<<
      +- DYNAMART -+      ( +- &&Variable = Value -----+
                           +- CONFIRM = YES/NO -----+
                           +- REFRESH = YES/NO -----+
                           +- ROWLIMIT = NumRows -----+
```

開いているウィンドウ (一時ストレージ) からオブジェクトを実行するには:

```
>>-- RUN QUERY -----<<
      ( +- &&Variable = Value -----+
        +- CONFIRM = YES/NO -----+
        +- FORM = FORM/formname -----+
        +- ROWLIMIT = NumRows/NO -----+
        +- TABLE = owner.name-----+
        +- COMMENT = text -----+
        +- CONFIRM = YES/NO -----+
        +- METHOD = REGULAR/FAST/FASTSAFE-----+
        +- SCOPE = NumChars -----+
        +- ROWIDADD = YES/NO -----+
        +- ROWIDNAME = text -----+
        +- ROWIDDISP = EXCLUDE/CONVERT/ALWAYS/BYDEFAULT----+
        +- ACTION = REPLACE/APPEND -----+
        +- SPACE = tablespace/database.tablespace-----+
        +- SPACE DATABASE = database-----+
        +- ACCELERATOR = acceleratorname -----+
        +- MODE = GRID/RAW -----+

>>-- RUN PROC -----<<
      ( +- &&Variable = Value ... -----+

>>-- RUN DYNAMART -----<<
      ( +- &&Variable = Value -----+
        +- CONFIRM = YES/NO -----+
        +- REFRESH = YES/NO -----+
        +- ROWLIMIT = NumRows -----+
```

表 24. オブジェクトを実行するためのパラメーター

パラメーター	説明
ObjectName	実行する照会、プロシージャ、または Dynamart の名前。

表 24. オブジェクトを実行するためのパラメーター (続き)

パラメーター	説明
&&Variable	実行する照会、プロシージャー、または Dynamart 内の変数に値を割り当てます。変数名の長さは 1 文字から 17 文字まで、値の長さは 1 文字から 55 文字までです。RUN コマンドで指定する変数と値の数はいくつでもかまいません。照会、プロシージャー、または Dynamart に RUN コマンドで値が与えられていない変数があり、これが大域変数でない場合は、値を指定するためのプロンプトがユーザーに出されます。プロシージャーに変数割り当てを組み込むときは、プロシージャーの実行前に変数が置換されないように、2 つのアンパーサンドを使用する必要があります。
CONFIRM	このコマンドの結果としてオブジェクトを置換または変更する前に確認ダイアログ・ボックスを表示するかどうかを指定します。CONFIRM が指定されないか NO の場合は、対応するリソース限界が使用されます。
FORM	照会で検索されたデータを使用して表示された報告書を生成するときに使用する書式を指定します。キーワード FORM を指定して現在の書式オブジェクトを使用するか、またはデータベースに保存された書式の名前を指定することができます。
REFRESH	Dynamart に以前に保存されたデータをリフレッシュするかどうかを指定します。このパラメーターを YES に設定すると、「照会」エディターで Dynamart が開き、データをリフレッシュする照会が実行され、更新済みのデータが自動的に Dynamart に保存されます。
ROWLIMIT	照会または Dynamart で取得する最大行数を指定します。

表 25. 照会結果をデータベースに保存するためのパラメーター

パラメーター	説明
TABLE	照会結果の保存先となるデータベース表の名前を指定します。
COMMENT	照会結果の保存先となるデータベース表のコメントを指定します。コメントのテキストは引用符で囲む必要があります。
CONFIRM	このコマンドの結果としてオブジェクトを置換または変更する前に確認ダイアログ・ボックスを表示するかどうかを指定します。CONFIRM が指定されないか NO の場合は、対応するリソース限界が使用されます。
METHOD	照会結果データの保存方式を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>照会結果データをクライアントからデータベース・サーバーに送り戻して表に挿入するには、REGULAR を指定します。</li> <li>サーバーで照会を再実行して照会結果を表に直接挿入するには、FAST を指定します。</li> <li>サーバーで照会を ORDER BY 節なしで再実行して、照会結果を表に直接挿入するには、FASTSAFE を指定します。</li> </ul>
SCOPE	データのコミット有効範囲を指定します。
ROWIDADD	行 ID 列を表に追加するかどうかを指定します。
ROWIDNAME	新しい行 ID 列の名前を指定します。
ROWIDDISP	新しい行 ID 列の後処理を指定します。

表 25. 照会結果をデータベースに保存するためのパラメーター (続き)

パラメーター	説明
ACTION	<p>データベース表全体を置き換えるか、既存の表にデータを追加するかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>データベース表内のデータを照会結果データで置き換えるには、REPLACE を指定します。</li> <li>照会結果を既存のデータベース表に追加するには、APPEND を指定します。</li> </ul>
SPACE	<p>表を特定のデータベース・コンテナおよび表スペースに保存するために、データベース名と表スペース名の両方を指定します。</p> <p>注: 指定する表スペース名は、リソース限界設定の「データの保存」タブでユーザー ID に設定されているデフォルトの表スペース名に一致している必要があります。デフォルトの表スペース名をオーバーライドする権限があれば、表の保存先にしたい任意の表スペース名を指定できます。表スペース名のオーバーライド権限は、リソース限界設定の「データの保存」タブで設定されています。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>DB2 for z/OS データベースの場合、database.tablespace が使用されます。</li> <li>DB2 for LUW データベースの場合、tablespace が使用されます。</li> </ul>
SPACE DATABASE	<p>作成した表の名前で自動的に作成される表スペースを持つ特定のデータベース・コンテナに表を保存するために、データベース名のみを指定します。</p> <p>注: このパラメーターは z/OS データベースにのみ使用します。</p>
MODE	<p>照会結果データをフォーマットおよび追加された計算列を含めて保存するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>現在の照会結果でフォーマット設定されているとおりにすべてのデータを保存するように設定するには、GRID を指定します。照会結果に追加された計算列も含められます。</li> <li>現在の照会結果のデータをすべて保存するように設定するには、RAW を指定します。データに適用されている書式設定はいずれも保存されません。照会結果に追加された計算列は保存されません。これがデフォルト値です。</li> </ul>
ACCELERATOR	<p>データの保存に使用するアクセラレーターの名前を指定します。</p> <p>ACCELERATOR キーワードの長さは最大 128 文字です。コマンドに SPACE キーワードがすでに指定されている場合、DSQEC_SAV_ALLOWED 大域変数の値が 5 に設定されている場合を除き、ACCELERATOR キーワードを指定することはできません。</p> <p>ACCELERATOR キーワードのデフォルト値は DSQEC_SAV_ACCELNM 大域変数から取得されます。</p> <p>ACCELERATOR キーワードは、IDAA をサポートしていない DB2 z/OS サーバーでは無視されます。 ACCELERATOR キーワードは、TABLE キーワードが指定されていない場合は無視されます。</p>

## 例

次の例では、QMF カタログから照会を実行します。

```
RUN QUERY USER1.QUERY1 (&&Var1=10
```

## RUNTSO コマンド

Q.DSQQMFSP ストアド・プロシージャを CALL ステートメントから開始するには、**RUNTSO** コマンドを発行します。照会またはプロシージャの名前を渡して QMF for TSO 上で実行するには、**RUNTSO** コマンドを使用します。このコマンドで指定された照会またはプロシージャは、**RUNTSO** コマンドが実行されるサブシステム内の QMF カタログ内に存在している必要があります。

**RUNTSO** は、プロシージャ内で以下のコマンドが出現するたびに、結果セットを 1 つ返します。

```
PRINT REPORT (PRINTER=' '
```

返された結果セットに基づいて、標準書式が作成されます。この標準書式は追加の書式フォーマットなしで生成されますが、追加フォーマットは「書式设计 (**Form design**)」タブで指定できます。

注: このコマンドのサポートには、QMF for TSO に対するストアド・プロシージャ・インターフェースがインストールされている必要があります。また、QMF for TSO インストール済み環境でデフォルトのコマンド同義語表 Q.COMMAND\_SYNONYMS を使用しない場合は、発行するすべての同義語で、ユーザー・プロファイルの「**SYNONYMS**」フィールドで指定されている表に定義が格納されている必要があります。この表に同義語の定義が見つからない場合、コマンドは失敗します。ストアド・プロシージャ・インターフェースのインストールについては、「*Installing and Managing DB2 QMF for TSO and CICS*」(GC19-2886-04) の『Installing the QMF stored procedure interface (TSO only)』の章を参照してください。

## 構文

プロシージャに **RUNTSO** コマンドを組み込むには、以下の構文を使用します。

```
>>-RUNTSO--ObjectName--(--+-----+-----+----->
|                                     .--. .-NONE-. |
| -TRACELEVEL+-----+L2--+ |
|                                     +-ALL--+
|                                     '-PTF--'
|
>+-----+-----+-----+-----+----->
|                                     .--. .-NONE----- |
| -L2DESTINATION+-----+DSQDEBUG+ |
|
>+-----+-----+-----+-----+-----><
|                                     .--. |
| -LANGUAGE+-----+language-id--- |
```

パラメーター	説明
<b>ObjectName</b>	<p>QMF の開始後に実行する QMF プロシージャまたは照会の名前を指定します。すべてのタイプの QMF 照会が受け入れられます。プロシージャは、QMF 線形プロシージャ、またはロジックを持つプロシージャのいずれかです。</p> <p>このパラメーターで指定された照会またはプロシージャは、ストアード・プロシージャ・インターフェース・コンポーネントがインストールされているサブシステム内の QMF カタログ内に存在している必要があります。</p> <p>指定したオブジェクトが照会の場合は、1 つの結果セットが返されます。最大 21 までの結果セットがプロシージャから返されます (<b>TRACELEVEL</b> パラメーターが L2 で <b>L2DESTINATION</b> パラメーターが blank または null の場合に最後の結果セットとして返されるトレース出力を含む)。</p>
<b>TRACELEVEL</b>	<p>トレースの詳細のレベルを指定します。有効な値は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• NONE <p>QMF トレース出力は生成されません。これがデフォルトのトレース・レベルです。</p> </li> <li>• L2 <p>このオプションは、QMF メッセージおよびコマンドを最高の詳細レベルでトレースします。トレース出力の宛先は <b>L2DESTINATION</b> 設定によって異なります。</p> </li> <li>• ALL <p>このオプションは、最も詳細なレベルまで QMF アクティビティをトレースします。このトレースには、プログラム初期化エラー、およびユーザー・プロファイルの確立前に発生する可能性があるその他のエラーも含まれます。トレース出力は、DSQDEBUG DD カードに送信されます。</p> </li> <li>• PTF <p>このオプションは、ストアード・プロシージャ・インターフェースが正常に実行されていることを確認する場合に使用します。 注: IBM® ソフトウェア・サポートの担当者が指示しない限り、このオプションは使用しないでください。</p> </li> </ul>
<b>L2DESTINATION</b>	<p><b>TRACELEVEL</b> が L2 に設定されている場合のトレース・ログの宛先を指定します。有効な値は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• NONE <p>トレース出力を、実行されるストアード・プロシージャからの最後の結果セットとして返します。これがデフォルトです。</p> </li> <li>• DSQDEBUG <p>トレース出力を DSQDEBUG DD カードに送信します。</p> </li> </ul>

パラメーター	説明
<b>LANGUAGE</b>	<p>QMF が実行される言語を指定します。</p> <p>このパラメーターには、次の表に示す 1 文字の言語 ID を使用できます。</p> <p>デフォルト値は、<i>DSQEC_NLFCMD_LANG</i> 変数によって決まります。例えば、<i>DSQEC_NLFCMD_LANG=0</i> の場合は、<i>DSQAO_NLF_LANG</i> が言語として使用されます。</p> <p><i>DSQEC_NLFCMD_LANG=1</i> の場合は、E が使用されます。</p>

次の表に、サポートされる言語と、その言語に関連付けられる言語 ID を示します。

表 26. 言語と言語 ID

各国語機能	QMF がこの NLF で使用する名前	言語 ID
英語	ENGLISH	E
U/C 英語	UPPERCASE	U
デンマーク語	DANSK	Q
カナダ・フランス語	FRANCAIS CANADIEN	C
フランス語	FRANCAIS	F
ドイツ語	DEUTSCH	D
イタリア語	ITALIANO	I
日本語	NIHONGO	K
韓国語	HANGEUL	H
ブラジル・ポルトガル語	PORTUGUES	P
スペイン語	ESPANOL	S
スウェーデン語	SVENSKA	V
スイス・フランス語	FRANCAIS (SUISSE)	Y
スイス・ドイツ語	DEUTSCH (SCHWEIZ)	Z

## 例

以下は、Q.STAFF 照会を渡して QMF for TSO で実行する場合に使用される **RUNTSO** コマンドの例です。

```
RUNTSO Q.STAFF (TRACELEVEL=NONE L2DESTINATION=NONE LANGUAGE=E
```

次の例では、パラメーターを含むオブジェクト名を **RUNTSO** コマンドで使用する方法を示しています。

注: STAFFPROC は、Q.STAFF 照会を実行する QMF プロシーチャーの例です。

- 次の例では、変数値の区切り文字として括弧を渡します。

```
RUNTSO "STAFFPROC(&NAME=('PERNAL'),&DEPT=(20),&JOB=('SALES'))" (LANGUAGE=E TRACELEVEL=L2 L2DESTINATION=NONE
```

例のコマンドは、以下の行を含む結果セットを Q.STAFF サンプル表から返します。

```

ID NAME          DEPT JOB    YEARS  SALARY  COMM
-----
 20 PERNAL        20 SALES    8   18171.25  612.45

```

- 次の例では、区切り文字として括弧を使用せずに変数値を渡します。

```
RUNTSO "STAFFPROC(&NAME='PERNAL',&DEPT=20,&JOB='SALES')" (LANGUAGE=E TRACELEVEL=L2 L2DESTINATION=NONE)
```

- 次の例では、アポストロフィを含む変数値を渡します。

```
RUNTSO "STAFFPROC(&NAME='O'BRIEN',&DEPT=38,&JOB='SALES')" (LANGUAGE=E TRACELEVEL=L2 L2DESTINATION=NONE)
```

このコマンドは、最初の結果セットとして以下の行を返します。

```

ID NAME          DEPT JOB    YEARS  SALARY  COMM
-----
 40 O'BRIEN       38 SALES    6   18006.00  846.55

```

## SAVE コマンド

SAVE コマンドは、オブジェクトを一時ストレージからデータベースに保存します。

### 構文

```

>>-- SAVE --- QUERY --- AS ObjectName -----<<
      +- PROC -+                               ( +- COMMENT = text -----+
                                               +- CONFIRM = YES/NO -----+
                                               +- SHARE = YES/NO -----+
                                               +- FOLDER = foldername -+

>>-- SAVE -- FORM -- AS ObjectName -----<<
      ( +- COMMENT = text -----+
        +- CONFIRM = YES/NO -----+
        +- SHARE = YES/NO -----+
        +- LANGUAGE = ENGLISH/SESSION -+
        +- FOLDER = foldername -----+

>>-- SAVE -- DATA -- AS TableName -----<<
      ( +- COMMENT = text -----+
        +- CONFIRM = YES/NO -----+
        +- METHOD = REGULAR/FAST/FASTSAFE-----+
        +- SCOPE = NumChars -----+
        +- ROWIDADD = YES/NO -----+
        +- ROWIDNAME = text -----+
        +- ACCELERATOR = acceleratorname -----+
        +- ROWIDDISP = EXCLUDE/CONVERT/ALWAYS/BYDEFAULT----+
        +- ACTION = REPLACE/APPEND -----+
        +- SPACE = tablespace/database.tablespace-----+
        +- SPACE DATABASE = database-----+
        +- MODE = GRID/RAW -----+

```

QMF for Windows で作成したビジュアル報告書を保存するには、以下のコマンドを使用します。

```

>>-- SAVE -- REPORT -- AS ObjectName -----<<
      ( +- COMMENT = text -----+
        +- CONFIRM = YES/NO -----+

```

パラメーター	説明
ObjectName	オブジェクト (照会、書式、プロシージャー、または表) を保存する際にそのオブジェクトに割り当てる名前。
COMMENT	保存されるオブジェクトにコメントを指定します。テキストを引用符で囲んでください。

パラメーター	説明
CONFIRM	このコマンドの結果としてオブジェクトを置換または変更する前に確認ダイアログ・ボックスを表示するかどうかを指定します。 CONFIRM が指定されないか NO の場合は、対応するリソース限界が使用されます。
SHARE	他のユーザーが保存されたオブジェクトを使用できるかどうかを指定します。
LANGUAGE	書式を英語で保存するか、または現在のセッション言語で保存するかを指定します。英語で保存された書式は、どの NLF セッションでも実行可能です。セッション言語で保存された書式は、同じ言語のセッションでのみ実行が可能です。デフォルト値が DSQEC_FORM_LANG グローバル変数で提供されます。
FOLDER	オブジェクトへのリンクの保存先とする必要がある QMF カタログ内のフォルダーを指定します。デフォルト値は DSQEC_CURR_FOLDER グローバル変数によって指定されます。
METHOD	データの保存方法を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>REGULAR は、表に挿入するためにデータをクライアントからデータベース・サーバーに送り返します。</li> <li>FAST は、照会をサーバーで再実行し、その結果を表に直接挿入します。</li> <li>FASTSAFE は、ORDER BY 節なしで照会をサーバーで再実行し、その結果を表に直接挿入します。</li> </ul>
SCOPE	データのコミット有効範囲を指定します。
ROWIDADD	行 ID 列を表に追加するかどうかを指定します。
ROWIDNAME	新しい行 ID 列に割り当てる名前を指定します。
ROWIDDISP	新しい行 ID 列の後処理を指定します。
ACTION	データベース表全体を置き換えるか、既存の表にデータを追加するかを指定します。
SPACE	表を特定のデータベース・コンテナおよび表スペースに保存するために、データベース名と表スペース名の両方を指定します。 注: 指定する表スペース名は、リソース限界設定の「データの保存」タブでユーザー ID に設定されているデフォルトの表スペース名に一致している必要があります。デフォルトの表スペース名をオーバーライドする権限があれば、表の保存先にしたい任意の表スペース名を指定できます。表スペース名のオーバーライド権限は、リソース限界設定の「データの保存」タブで設定されています。 注: <ul style="list-style-type: none"> <li>DB2 for z/OS データベースの場合、database.tablespace が使用されます。</li> <li>DB2 for LUW データベースの場合、tablespace が使用されます。</li> </ul>
SPACE DATABASE	作成した表の名前で自動的に作成される表スペースを持つ特定のデータベース・コンテナに表を保存するために、データベース名のみを指定します。 注: このパラメーターは z/OS データベースにのみ使用します。



パラメーター	説明
MODE	照会結果データをフォーマットおよび追加された計算列を含めて保存するかどうかを指定します。次のいずれかの値を指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>GRID</b> - 現在の照会結果のすべてのデータを現在のフォーマットのとおり保存することを指定します。照会結果に追加された計算列も含められます。</li> <li>• <b>RAW</b> - 現在の照会結果のデータをすべて保存することを指定します。データに適用されたフォーマットは保存されません。照会結果に追加された計算列は保存されません。これがデフォルト値です。</li> </ul>
ACCELERATOR	データの保存に使用するアクセラレーターの名前を指定します。ACCELERATOR キーワードの長さは最大 128 文字です。コマンドに SPACE キーワードがすでに指定されている場合、DSQEC_SAV_ALLOWED 大域変数の値が 5 に設定されている場合を除き、ACCELERATOR キーワードを指定することはできません。ACCELERATOR キーワードのデフォルト値は DSQEC_SAV_ACCELNM 大域変数から取得されます。  ACCELERATOR キーワードは、IDAA をサポートしていない DB2 z/OS サーバーでは無視されます。

## 例

```
SAVE QUERY AS USER1.QUERY1 (CONFIRM=NO
```

## SET GLOBAL コマンド

SET GLOBAL コマンドは、既存の大域変数の値を設定するか、変数および値を作成します。

## 構文

```
>>-- SET GLOBAL ( VariableName = Value, ... -----<<
+- LIFETIME = CURRENT/PERMANENT -+
```

パラメーター	説明
VariableName	設定または作成するグローバル変数の名前。グローバル変数名の長さは 1 文字から 17 文字までです。DSQ で始まる名前の変数には制約があり、作成または削除はできません。
Value	グローバル変数に与える値。値の長さは 1 文字から 55 文字までです。DSQ で始まる名前の変数の値には制約があります。詳しくは『グローバル変数を使用した作業』トピックを参照してください。
LIFETIME	変数が使用可能な期間は以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>CURRENT</b> - 変数は現行セッションで使用可能です (デフォルト値)。</li> <li>• <b>PERMANENT</b> - 変数は永続的に使用可能です。</li> </ul>

## 例

```
SET GLOBAL (Var1=abc, Var2=def LIFETIME = PERMANENT
```

## SET INVISIBLE コマンド

**SET INVISIBLE** コマンドは、指定された変数を「プロンプト変数」ダイアログで非表示にします。

「プロンプト変数」ダイアログは、指定された変数については値を要求しません。ローカル変数がすべて不可視に設定されると、「プロンプト変数」ダイアログは表示されません。

例えば、q.staff からの照会 `select * (id=&id または id=&visible)` がある場合にプロシージャ `run query (&&id=20` を実行すると、`id` 変数および `visible` 変数に値を入力するよう求めるプロンプトが出されます。また、`id` 変数はデフォルトで 20 に設定されます。ただし、プロシージャ `set invisible (id run query (&&id=20` を実行すると、`visible` 変数の値のみを入力するよう求められます。`id` 変数は 20 に設定され、ダイアログでは非表示になります。さらにまた、プロシージャ `set invisible (id visible run query (&&id=20` を実行すると、変数値の入力は求められません。`id` 変数は 20 に設定され、`visible` 変数は空ストリングに設定されます。

### 構文

```
>>-- SET INVISIBLE ( VariableName1, VariableName2, ... -----<<
```

### パラメーター

パラメーター	説明
VariableName	「プロンプト変数」ダイアログに表示されない変数の名前。

### 例

```
SET INVISIBLE (Var1, Var2
```

## SET LOCAL コマンド

**SET LOCAL** コマンドは、既存のローカル変数の値を設定するか、新しい変数と値を作成します。

**SET LOCAL** で指定された変数は、現行オブジェクト (照会、報告書、またはダッシュボード) でのみ使用可能で、「グローバル変数」リストには表示されず、他のプロシージャに影響を与えることもありません。

### 構文

```
>>-- SET LOCAL ( VariableName = Value, ... -----<<
```

### パラメーター

パラメーター	説明
VariableName	設定または作成するローカル変数の名前。ローカル変数名の長さは 1 ~ 17 文字です。DSQ で始まる名前の変数には制約があり、作成または削除はできません。
Value	ローカル変数に与える値。値の長さは 1 文字から 55 文字までです。DSQ で始まる名前の変数の値には制約があります。

例

```
SET LOCAL (Var1=abc, Var2=def
```

## SET LOCAL WITH VALUES コマンド

SET LOCAL WITH VALUES は、ローカル変数に指定できる値を設定します。

SET LOCAL WITH VALUES は LIMIT LOCAL と同様に機能しますが、「プロンプト変数」ダイアログでは、指定した値から 1 つを選択することも、別の値を入力することもできます。

構文

```
>>-- SET LOCAL WITH VALUES ( VariableName = Value, ... -----<<
```

パラメーター

パラメーター	説明
VariableName	設定または作成するローカル変数の名前。ローカル変数名の長さは 1 ～ 17 文字です。 DSQ で始まる名前の変数には制約があり、作成または削除はできません。
Value	ローカル変数を取得するための値または値リスト。指定した値は「プロンプト変数」ウィンドウで選択できます。値の長さは 1 文字から 55 文字までです。 DSQ で始まる名前の変数の値には制約があります。

例

```
SET LOCAL WITH VALUES (Var1=abc
```

## SET OPTIONS コマンド

SET OPTIONS コマンドは、プロシージャの実行オプションを指定します。

構文

```
>>-- SET OPTIONS -----<<  
      ( +- STOPONERROR = YES|NO -----+  
        +- SUPPRESSMESSAGES=ALL|INFORM|ERROR -+)
```

## パラメーター

パラメーター	説明
STOPONERROR	<p>エラーが発生したときにプロシージャの実行を停止するかどうかを指定します。有効な値は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• YES</li></ul> <p>エラーが発生したときには、プロシージャは実行を停止します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• NO</li></ul> <p>エラーが発生しても、プロシージャは実行を停止しません。</p> <p>このパラメーターに関連付けられている処理は、DSQQW_PROC_FAIL_ON_ERROR に関連付けられている処理と同じです。ただし、STOPONERROR に設定された値の方が、DSQQW_PROC_FAIL_ON_ERROR に設定された値より優先されます。</p> <p>STOPONERROR に値が指定されていない場合は、DSQQW_PROC_FAIL_ON_ERROR の値によって、エラー発生時に処理を停止するか続行するかが決まります。</p> <p>STOPONERROR に値が指定されていれば、DSQQW_PROC_FAIL_ON_ERROR の値は無視されます。</p>
SUPPRESSMESSAGES	<p>プロシージャの実行中は表示しないメッセージのタイプを指定します。有効な値は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• ALL</li></ul> <p>プロシージャの実行中はすべてのメッセージ・ダイアログを表示しません。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• INFORM</li></ul> <p>プロシージャの実行中は、通知 (確認) メッセージ・ダイアログを表示しません。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• ERROR</li></ul> <p>プロシージャの実行中は、エラー・メッセージ・ダイアログを表示しません。</p>

## 例

```
SET OPTIONS (STOPONERROR=YES SUPPRESSMESSAGES=ALL)
```

## SHOW コマンド

SHOW コマンドは、DISPLAY コマンドに似ていて、一時記憶域中のオブジェクトを表示します。

SHOW QUERY、SHOW FORM、および SHOW PROC コマンドはそれぞれ、現在の照会、書式、プロシージャを含むウィンドウをアクティブにします。SHOW REPORT コマンドは、SHOW FORM コマンドと同義です。SHOW GLOBALS コマンドは、「グローバル変数」ダイアログを開きます。

## 構文

```
>>-- SHOW --- PROC -----<<
      +- GLOBALS -+
      +- FORM ----+
          +- .MAIN-----+
          +- .BREAK1-----+
          +- .BREAK2-----+
          +- .BREAK3-----+
          +- .BREAK4-----+
          +- .BREAK5-----+
          +- .BREAK6-----+
          +- .CALC-----+
          +- .COLUMNS----+
          +- .CONDITIONS-+
          +- .DETAIL-----+
          +- .FINAL-----+
          +- .OPTIONS-----+
          '- .PAGE-----'

>>-- SHOW QUERY -----<<
      ( +- VIEW = BUILD/CHART/DESIGN/DISPLAY/LAYOUT/PROMPTED/RESULTS/SQL/STRUCTURE ---+
        +- RESULTSET = integer -----+

>>-- SHOW REPORT -----<<
      ( VIEW = CLASSIC/VISUAL/QUICK
```

パラメーター	説明
VIEW	ターゲット照会または報告書の外観を指定します。
RESULTSET	表示される結果セットの数を指定します。このパラメーターは、VIEW が RESULTS に等しく、照会がストアード・プロシージャ呼び出しである場合にのみ使用可能です。

## 例

```
SHOW QUERY (VIEW=RESULTS)
```

## USE REPOSITORY コマンド

USE REPOSITORY コマンドは、指定されたリポジトリへの接続を確立します。

このコマンドを実行すると、次のアクションが発生します。

- 開いているすべてのオブジェクト (プロシージャを含む) が閉じる
- 現行のリポジトリ接続が停止する
- 指定されたリポジトリへの新規接続が確立される

リポジトリが保護されていない場合、リポジトリの USER/PASSWORD を省略できます。DBUSER/DBPASSWORD は、指定されたリポジトリ接続に対して指定されている (および保存されている) 場合は省略できます。

## 構文

```
>>-- USE REPOSITORY ----- RepositoryName -----<<
      (+- USER = ... -----+
      +- PASSWORD = ... -----+
      +- DBUSER = ... -----+
      +- DBPASSWORD = ... -----+
```

## パラメーター

### RepositoryName

接続先のリポジトリの名前です。名前にスペースが含まれている場合は、引用符で囲んでください。

### USER

保護されているリポジトリへの接続に使用するユーザー名です。

注: このパラメーターが必須なのは、リポジトリが保護されている場合のみです。

### PASSWORD

保護されているリポジトリへの接続に使用するパスワードです。

注: このパラメーターが必須なのは、リポジトリが保護されている場合のみです。

### DBUSER

指定されたりポジトリのデータベースに接続するために使用されるユーザー名です。

「リポジトリ接続」設定の「ユーザー名とパスワードを保存する (**Remember user name and password**)」にチェック・マークを付けた場合は、ここでの値の指定を省略できます。

注: ここに入力したパラメーター値は、「リポジトリ接続」設定で設定された値をオーバーライドします。

### DBPASSWORD

指定されたりポジトリのデータベースに接続するために使用されるパスワードです。

「リポジトリ接続」設定の「ユーザー名とパスワードを保存する (**Remember user name and password**)」にチェック・マークを付けた場合は、ここでの値の指定を省略できます。

注: ここに入力したパラメーター値は、「リポジトリ接続」設定で設定された値をオーバーライドします。

## 例

```
USE REPOSITORY Default
USE REPOSITORY SomeRepository (USER=User PASSWORD=password)
```

---

## プロシージャー内の JavaScript 関数

以下のトピックでは、proc オブジェクトおよび現在開いている照会の結果セットのための関数について説明します。

これらの関数を使用して、プロシージャーの実行、大域変数値の取得、表の有無の検査、およびプロンプトまたはメッセージ・ボックスの表示を行うことができます。また、これらの関数を使用して、列数または行数、セル値、列のタイプと名前を取得するために、照会エディターで開いた照会の結果セットを処理することもできます。

説明には構文図と使用例も含まれています。

## proc.exec () 関数

proc.exec() 関数は、プロシージャ・コマンドを実行する場合に使用します。

### 構文

```
proc.exec('procedure_command');
```

パラメーター	説明
procedure_command	実行したいプロシージャ・コマンドを指定します。使用可能なプロシージャ・コマンドについて詳しくは、『プロシージャ・コマンド』セクションを参照してください。

### 例

```
/*JavaScript*/  
proc.exec('RUN QUERY "qmf:/workspaces/Business Analyst View/Q.STAFF"');
```

このプロシージャ例では、Samples リポジトリ内の Business Analyst View ワークスペースに保存される Q.STAFF 照会を実行します。

## proc.exists () 関数

proc.exists() 関数は、リポジトリ内のオブジェクトへの指定されたパス、QMF カタログからのオブジェクト、ファイルの有無を検査する場合に使用します。

### 構文

```
proc.exists('key');
```

パラメーター	説明
key	リポジトリ・キー、QMF カタログからのオブジェクト、または有無を検査するファイルを指定します。

### 例

```
/*JavaScript*/  
var tableName = proc.prompt('What table do you want check for the existence?', 'Q.STAFF');  
if (proc.exists(tableName))  
{  
  proc.messageBox('The ' + tableName + ' table exists', MB_OK, ID_OK);  
}  
else  
{  
  proc.messageBox('The ' + tableName + ' table does not exist', MB_OK, ID_OK);  
}
```

このプロシージャ例では、Q.STAFF 表の有無を検査し、その結果を伴うメッセージを表示します。

## proc.getVariable () 関数

proc.getVariable() 関数は、指定した変数の値を取得する場合に使用します。

## 構文

```
proc.getVariable('global_variable');
```

パラメーター	説明
global_variable	値を取り出したい大域変数を指定します。大域変数について詳しくは、『システム定義グローバル変数』セクションを参照してください。

## 例

```
/*JavaScript*/  
var fetchedRowsNum = proc.getVariable('DSQAO_NUM_FETCHED');  
proc.messageBox('The value of DSQAO_NUM_FETCHED is ' + fetchedRowsNum);
```

DSQAO\_NUM\_FETCHED 大域変数の値が fetchedRowsNum 変数に保存され、メッセージ・ボックスに表示されます。

## proc.getCellValue () 関数

proc.getCellValue() 関数は、セルの値を取得する場合に使用します。この値は、現行結果セット内の行および列によって指定されます。

## 構文

```
proc.getCellValue(row, column);
```

パラメーター	説明
row	値を取得したいセルの行を指定します。
column	値を取得したいセルの列を指定します。

## 例

```
/*JavaScript*/  
proc.exec('DISPLAY Q.STAFF');  
var row = 30;  
proc.messageBox(proc.getCellValue(row, 2) + ' was hired ' + proc.getCellValue(row,5) + ' years ago.');
```

このプロシージャ例では、Q.STAFF 表を表示し、行 30 の列 2 および 5 の値を検索し、メッセージ「DAVIS was hired 5 years ago」を表示します。

## proc.getColumnName () 関数

proc.getColumnName() 関数は、現行結果セット内の列名を取得する場合に使用します。

## 構文

```
proc.getColumnName(column);
```

パラメーター	説明
column	名前を取得したい列を指定します。

## 例

```
/*JavaScript*/  
proc.exec('DISPLAY Q.STAFF');  
proc.messageBox('The column with the index 3 is "' + proc.getColumnName(3) + '"', MB_OK, ID_OK);
```



このプロシージャ例では、Q.STAFF 表を表示し、列 3 を検索し、「OK」ボタンにフォーカスを置いたメッセージ・ボックス「The column with the index 3 is "DEPT"」を表示します。

## proc.getColumnType () 関数

proc.getColumnType() 関数は、現行結果セット内の列タイプを文字列として取得する場合に使用します。

### 構文

```
proc.getColumnType(column);
```

パラメーター	説明
column	文字列としてタイプを取得したい列を指定します。

### 例

```
/*JavaScript*/  
var columnIndex = 6;  
proc.exec('DISPLAY Q.STAFF');  
proc.messageBox('The column with the index ' + columnIndex +  
' has the database type "' + proc.getColumnType(columnIndex) + "'", MB_OK, ID_OK);
```

このプロシージャ例では、Q.STAFF 表を表示し、列 6 を検索し、「OK」ボタンにフォーカスを置いたメッセージ・ボックス「The column with the index 6 has the database type "DECIMAL (7,2)"」を表示します。

## proc.getNumColumns () 関数

proc.getNumColumns() 関数は、現行結果セットの列数を取得する場合に使用します。

### 構文

```
proc.getNumColumns();
```

### 例

```
/*JavaScript*/  
proc.exec('DISPLAY Q.STAFF');  
proc.messageBox('The Q.STAFF table has ' + proc.getNumColumns() + ' columns');
```

このプロシージャ例では、Q.STAFF 表を表示し、メッセージ「The Q.STAFF table has 7 columns」を表示します。

## proc.getNumRows () 関数

proc.getNumRows() 関数は、現行結果セットの行数を取得する場合に使用します。

### 構文

```
proc.getNumRows();
```

### 例

```
/*JavaScript*/  
proc.exec('DISPLAY Q.STAFF');  
proc.messageBox('The Q.STAFF table has ' + proc.getNumRows() + ' rows');
```

このプロシージャー例では、Q.STAFF 表を表示し、メッセージ「The Q.STAFF table has 35 rows」を表示します。

## proc.include () 関数

proc.include() 関数は、外部コードをプロシージャー・スクリプトに追加する場合に使用します。

### 構文

注: proc.include() を使用してプロシージャー・スクリプトを持つ必要な外部 JavaScript モジュールを接続した後でのみ、外部の関数およびオブジェクトを使用できます。

```
proc.include(strLocation);
```

パラメーター	説明
strLocation	リポジトリ内の JavaScript モジュールへのパス、またはインターネットから外部ソースへのリンクを指定します。

### 例

例 1. この例では、algorithm() 関数を含む外部モジュールをインターネットから組み込みます。

```
/*JavaScript*/  
proc.include('http://example.com/algorithm.js');
```

例 2. この例では、algorithm() 関数を含む algorithm JavaScript モジュールを qmf:/workspaces/Business Analyst View/algorithm リポジトリから組み込みます。

```
/*JavaScript*/  
proc.include("qmf:/workspaces/Business Analyst View/algorithm");
```

## proc.messageBox () 関数

proc.messageBox() 関数は、指定したタイプのメッセージをデフォルト値とともに表示する場合に使用します。この関数はまた、クリックしたボタンの ID を返します。

### 構文

```
proc.messageBox('message', type, defaultValue);
```

パラメーター	説明
message	メッセージのテキストを指定します。

パラメーター	説明
type	<p>使用可能な定数の組み合わせを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• MB_OK - 1 つの「OK」ボタンを持つメッセージ・ボックスを表示します。</li> <li>• MB_OKCANCEL - 「OK」ボタンと「キャンセル」ボタンを持つメッセージ・ボックスを表示します。</li> <li>• MB_ABORTRETRYIGNORE - 「打ち切り」ボタン、「再試行」ボタン、および「無視」ボタンを持つメッセージ・ボックスを表示します。</li> <li>• MB_YESNOCANCEL - 「はい」ボタン、「いいえ」ボタン、および「キャンセル」ボタンを持つメッセージ・ボックスを表示します。</li> <li>• MB_YESNO - 「はい」ボタンと「いいえ」ボタンを持つメッセージ・ボックスを表示します。</li> <li>• MB_RETRYCANCEL - 「再試行」ボタンと「キャンセル」ボタンを持つメッセージ・ボックスを表示します。</li> <li>• MB_OKABORTIGNORE - 「OK」ボタン、「打ち切り」ボタン、および「無視」ボタンを持つメッセージ・ボックスを表示します。</li> <li>• MB_COMMITKOCANCEL - 「コミット」ボタン、「OK」ボタン、および「キャンセル」ボタンを持つメッセージ・ボックスを表示します。</li> <li>• MB_COPY - 「コピー」ボタンを持つメッセージ・ボックスを表示します。</li> <li>• MB_ASYNC - 実行されるプロシージャと同期せずに、メッセージ・ボックスを表示します。</li> <li>• MB_ERROR - エラー・メッセージ・ボックスを表示します。</li> <li>• MB_WARNING - 警告メッセージ・ボックスを表示します。</li> </ul>
defaultValue	<p>デフォルトでフォーカスを持つボタンの ID を指定します。使用可能な ID は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ID_OK - ユーザーが「OK」ボタンをクリックしたことを示します。</li> <li>• ID_CANCEL - ユーザーが「キャンセル」ボタンをクリックしたことを示します。</li> <li>• ID_YES - ユーザーが「はい」ボタンをクリックしたことを示します。</li> <li>• ID_NO - ユーザーが「いいえ」ボタンをクリックしたことを示します。</li> <li>• ID_ABORT - ユーザーが「打ち切り」ボタンをクリックしたことを示します。</li> <li>• ID_RETRY - ユーザーが「再試行」ボタンをクリックしたことを示します。</li> <li>• ID_IGNORE - ユーザーが「無視」ボタンをクリックしたことを示します。</li> </ul>

## 例

```
/*JavaScript*/
proc.messageBox('Message box from the JavaScript procedure.');
```

この例では、指定したテキストと、フォーカスが置かれた 1 つの「OK」ボタンを持つメッセージ・ボックスを表示します。

## proc.prompt () 関数

proc.prompt() 関数は、プロシージャーに対する値を入力するようユーザーに促すプロンプトを表示する場合に使用します。

### 構文

```
proc.prompt('question', 'hint');
```

パラメーター	説明
question	ユーザーへのプロンプトにおける質問を指定します。
hint	パラメーターの初期値を指定します。

### 例

```
/*JavaScript*/  
var tableName = proc.prompt('What table do you want to display?', 'Q.STAFF');  
proc.exec('DISPLAY ' + tableName);
```

この例では、ユーザーが変更し、必要な表を開くことができる、指定した質問とヒントを持つプロンプトを表示します。この例では、Q.STAFF 表が開きます。

## proc.setCellValue () 関数

setCellValue() 関数は、結果セットの現行コピーにある特定のセル値を編集する場合に使用します。新たに編集された結果セットは、SAVE コマンドまたは EXPORT コマンドで使用できます。

### 構文

```
setCellValue(row, column, value);
```

パラメーター	説明
row	値を取得したいセルの行を指定します。
column	値を取得したいセルの列を指定します。

### 例

```
/*JavaScript*/  
proc.exec('DISPLAY Q.INTERVIEW');  
  
var currentTime = new Date();  
currentTime = currentTime.getHours() + ':' + currentTime.getMinutes()  
+ ':' + currentTime.getSeconds();  
var numRows = proc.getNumRows();  
for (var i = 1; i <= numRows; i++)  
{  
  proc.setCellValue(i, 4, currentTime);  
}  
proc.exec('EXPORT DATA TO D:%qinterview_updated.txt');
```

このプロシージャー例では、Q.INTERVIEW 照会を表示し、照会結果セットの行数を取得し、4 列目の時刻データを現在時刻で置き換え、更新された結果セットのコピーを指定ファイル D:%qinterview\_updated.txt にエクスポートします。

---

## 第 9 章 照会結果の管理

使用可能なエディター・ウィンドウに照会結果が表示されている状態で、いくつかのフォーマット・タスクを実行できます。

---

### 照会結果のフォーマット設定

照会結果をどのようにエディター・ウィンドウに表示するかをカスタマイズすることができます。

#### このタスクについて

列の列見出しごとおよびセルごとに、さまざまなフォント、色、およびテキスト配置を指定できます。列およびセルのフォーマット設定が条件式の結果に基づいて適用されるように指定することもできます。

### 「プロパティ」ビューの使用

「プロパティ」ビューから、照会結果に多くのフォーマット・オプションを素早く適用することができます。

#### このタスクについて

フォーマット・オプションを適用するには:

#### 手順

1. 「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「プロパティ」を選択して、「プロパティ」ビューをいつでも開くことができます。
2. 照会結果のセルまたは列を選択します。「プロパティ」ビューにセルまたは列のプロパティがリストされます。
3. フォーマットを適用するには、「プロパティ」ビューにリストされたプロパティの 1 つを変更します。

### 「レイアウト・プロパティ」ダイアログ・ボックスの使用

「レイアウト・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、照会結果のフォーマット設定に使用できるすべてのオプションを設定できます。

#### このタスクについて

「レイアウト・プロパティ」ダイアログ・ボックスでは、ツリー構造を使用して照会結果の列を表します。照会結果で選択したものによって、「レイアウト・プロパティ」ツリーは照会結果にあるすべての列の分岐、または単一の列の分岐を表示します。フォーマット・オプションは、列全体、個別のセル、列見出し、および要約セルに適用できます。これらのオプションは、次のグループに分けられます。

- 一般
- フォント

- フォーマット
- 条件付き

照会結果にフォーマットを適用するには:

## 手順

1. 以下のいずれかの方法で「レイアウト・プロパティ」ダイアログ・ボックスを開きます。
  - 列の見出しセルを右クリックし、ポップアップ・メニューから「フォント」または「フォーマット」を選択します。
  - 「結果」 > 「フォント」を選択します。
  - 「結果」 > 「フォーマット」を選択します。
2. 「レイアウト」ツリーは、照会結果から選択した内容に応じてさまざまな方法で開きます。特定の列を選択していない場合は、照会結果のすべての列がツリーに表示されます。列を選択すると、ツリーはその列と関連付けられた分岐を表示します。1 つ以上の列を選択して表示している場合にのみ、「すべての列を表示」チェック・ボックスを選択できます。このチェック・ボックスを選択して、「レイアウト」ツリーに照会結果のすべての列を表示します。このチェック・ボックスのチェック・マークを外し、選択した列のみを表示します。
3. 分岐を展開するには、列名の左にある正符号 (+) をクリックします。照会結果の各列に関して、「レイアウト」ツリーには 3 つの分岐があります。それらは「見出し」、「明細」、および「総合計」です。分岐の名前は、各列名と同じです。分岐を展開できる場合は、各分岐の左側に正符号 (+) があります。分岐を展開するには、正符号 (+) をクリックします。
4. 「レイアウト」ツリーで選択した分岐のレベルによって、データの列で実行可能なフォーマット設定が決まります。それぞれの分岐を選択すると「レイアウト・プロパティ」ダイアログが変わります。選択した分岐で使用できるフォーマット設定フィールドが選択可能になります。
5. 列全体に適用するフォーマット・オプションを指定するには、列名分岐を選択します。「レイアウト・プロパティ」ダイアログ・ボックス内に「一般」ページが開きます。このページから、見出し名、列幅、および合計行の高さを指定できます。
6. 照会結果の列の見出しに使用するフォントとフォーマット・オプションを指定するには、列の「見出し」分岐を選択します。「レイアウト・プロパティ」ダイアログ・ボックス内に「フォント」および「フォーマット」ページが開きます。
7. 列の明細セルと合計セルに、デフォルト・フォーマット設定と条件付き書式設定を指定できます。デフォルトのフォーマット設定は、特定の条件を満たすセルを除く、列内のすべてのセルに適用されます。条件付き書式設定は、特定の条件を満たす列内のセルに適用されます。
8. 列内の各セルに使用するデフォルトのフォントとフォーマット・オプションを指定するには、その列の「明細」分岐を展開して、次に「デフォルト」分岐を選択します。「レイアウト・プロパティ」ダイアログ・ボックス内に「フォント」および「フォーマット」ページが開きます。「フォント」タブを選択して、列の明細セルのデータの表示に使用するフォントに適用するフォーマット

ト・オプションを指定します。「フォーマット」タブを選択して、列の明細セルでデータがどのようにフォーマット設定されるかを指定します。

9. 列の明細セルに条件付き書式オプションを指定するには、列の「明細」分岐を展開して、次に「デフォルト」分岐または既存の条件分岐を選択します。条件付き書式の指定に使用するフィールドが使用可能になります。条件名と式を指定します。明細セルに対して 1 つ以上の条件を追加できます。
10. 列の合計行に使用されるデフォルトのフォントおよびフォーマット・オプションを指定するには、「総合計」分岐を展開して、次にその列の「デフォルト」分岐を選択します。「レイアウト・プロパティ」ダイアログ・ボックス内に「フォント」および「フォーマット」ページが開きます。「フォント」タブを選択して、列の合計行セルでのデータの表示に使用されるフォントに適用するフォーマット・オプションを指定します。「フォーマット」タブを選択して、列の合計行セルでデータがどのようにフォーマット設定されるかを指定します。
11. 列の合計セルに条件付き書式オプションを指定するには、列の「総合計」分岐を展開して、次に「デフォルト」分岐または既存の条件分岐を選択します。条件付き書式の指定に使用するフィールドが使用可能になります。条件名と式を指定します。合計行セルに対して 1 つ以上の条件を追加できます。
12. 「適用」をクリックします。指定した「一般」、「フォント」、または「フォーマット」オプションは保存されます。
13. この処理を繰り返して、照会結果内の各列に対して固有のフォーマット・オプションを設定できます。また、1 つの列に対して指定したオプションを複製して、次のボタンのいずれかを使用して他の列に適用できます。
  - すべての列に適用: このボタンを使用して、照会結果から現在選択されているすべての列に対して、指定した「フォント」または「フォーマット」オプションを適用します。例えば、列の「明細」「デフォルト」分岐に対して特別なフォント・オプションを指定して、「すべての列に適用」ボタンを選択した場合、指定したフォント・オプションは、レイアウト・プロパティ・ツリーで現在選択され、表示されている各列の「明細」「デフォルト」分岐に適用されます。
  - すべてのレベルに適用: このボタンを使用して、列の現在のレベルに対して指定した「フォント」または「フォーマット」オプションを列のすべてのレベルに適用します。例えば、列の「明細」「デフォルト」分岐に対して特別なフォント・オプションを指定して、「すべてのレベルに適用」ボタンを選択した場合、指定したフォント・オプションは列の「総合計」「デフォルト」分岐に適用されます。
14. 「OK」をクリックします。「レイアウト・プロパティ」ダイアログ・ボックスが閉じます。指定したフォーマット情報が保存され、照会結果内の列に適用されます。

### 列の一般形式オプションの指定

「レイアウト・プロパティ」ダイアログの「一般」ページで、列の見出しテキスト、列幅、または行の高さを変更します。さらに、列に適用されたグループ化または集約の値、および列の名前を表示できます。

## このタスクについて

一般形式オプションは、見出しセル、各明細セル、および列の合計行セルを含む、照会結果列のすべてのセルに適用されます。

一般フォーマット・オプションを指定するには:

### 手順

1. 「レイアウト・プロパティ」ウィンドウを開き、列名 分岐をクリックします。「レイアウト・プロパティ」ウィンドウ内に「一般」ページが開きます。
2. 「見出し」フィールドには、照会結果内に表示されるとおりに列の名前が表示されます。このフィールドに新しい名前を入力することで、見出しテキストを変更できます。
3. 「グループ化および集約」フィールドには、列に指定された集約コードが表示されます。何も指定されていない場合でも、このフィールドはブランクではありません。このフィールドは通知用で変更できません。
4. 「幅」フィールドでは、列の幅をピクセルで指定します。フィールドに新しい数値を入力して、幅を変更することができます。
5. 「合計行の高さ」フィールドでは、合計列の高さをピクセルで指定します (集約が選択されている場合)。フィールドに新しい数値を入力して、高さを変更することができます。
6. 「ソース」フィールドは、「レイアウト・プロパティ」ツリーで現在選択されている列を示します。選択されている列が計算列である場合、列の結果を作成するのに使用された条件式が表示されます。これは通知フィールドで変更できません。
7. 「適用」をクリックして、指定したフォーマット・オプションを保存します。

### 「フォント」フォーマット・オプションの指定

「レイアウト・プロパティ」ウィンドウの「フォント」ページから、各列の見出しセル、各列の各明細セル、各ブレイクポイントの合計セル (ブレイク列が指定された場合)、および列の最終合計セルに、固有のフォントおよび色属性を指定することができます。

## このタスクについて

「フォント」フォーマット・オプションを指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「レイアウト・プロパティ」ウィンドウを開きます。「フォント」タブをクリックします。
2. 列の見出しセルのフォント属性を指定するには、列名の下「見出し」分岐を選択します。

列の見出しセルに必要なフォント属性を、「フォント」、「フォント・スタイル」、「サイズ」、「前景」、および「背景」の各フィールドに指定します。

3. 列の明細セルにフォント属性を指定するには、列名の下「明細」分岐を選択します。



- a. 列のすべての明細セルに使用されるフォント属性を指定するには、「明細」分岐で「デフォルト」分岐を選択します。
- b. 特定の条件を満たす明細セルに使用されるフォント属性を指定するには、「条件」分岐を選択します。
- c. 列内の明細セルに複数の条件ステートメントを作成することができます。

「デフォルト」または「条件」分岐を選択したら、条件を満たす明細セルに適用するフォント属性を「フォント」、「フォント・スタイル」、「サイズ」、「前景色」、および「背景色」の各フィールドに指定します。

4. 列の合計セルにフォント属性を指定するには、列名の下「総合計」分岐を選択します。

合計セルは、照会結果列に常に表示されるわけではありません。合計セルは、列にグループ化および集約コードを指定した場合のみ表示されます。

- a. 合計セルに使用されるフォント属性を指定するには、「総合計」分岐で「デフォルト」分岐を選択します。
- b. セルの値が特定の条件を満たす場合に合計セルに使用されるフォント属性を指定するには、「条件」分岐を選択します。

列内の合計セルに複数の条件ステートメントを作成することができます。「デフォルト」または「条件」分岐を選択したら、必要なフォント属性を「フォント」、「フォント・スタイル」、「サイズ」、「前景色」、および「背景色」の各フィールドに指定します。

5. 「適用」をクリックして、指定したフォント属性を保存します。

列に指定したフォーマット情報が、照会結果に適用されます。

## 次のタスク

照会結果列のフォーマット設定を続行することも、「OK」をクリックして「レイアウト・プロパティ」ウィンドウを閉じることもできます。

フォント・フィールド:

照会結果列の見出し、明細、合計セルに適用できるフォント属性それぞれの説明。

フォント

フォントの名前 (Arial や Times Roman など)

フォント・スタイル

フォントのスタイル (太字やイタリックなど)

サイズ

フォントのサイズ (ポイント単位)

スクリプト

使用されているスクリプトのタイプ (例えば、Western)

前景色

テキストの色 (紺など)

背景色

テキストの背景となる色 (グレーの背景など)

## サンプル

現在のフォーマットのレンダリング

## デフォルトとして設定

現在のフォント属性を、これ以降の照会結果のデフォルトとして設定します。このデフォルトは、新しいフォントを選択するか、デフォルトを変更するまで有効です。

## デフォルトにリセット

フォントのフォーマット設定の属性をデフォルト設定にリセットします。

## フォーマット・オプションの指定

「レイアウト・プロパティ」ウィンドウの「フォーマット」ページで、照会結果列にどのようにデータを配置し表示するか (例えば、小数部の桁数) を制御する固有の属性を指定できます。

## このタスクについて

各列の見出しセル、列の各明細セル、各ブレイクポイントの合計セル (ブレイク列が指定された場合)、および列の最終合計セルに、種々のフォーマット属性を指定することができます。使用可能な「形式」のオプションは、選択した列が文字データなのか、数値データなのか、日時データなのかによって異なります。

データ・フォーマット・オプションを指定するには:

## 手順

1. 「レイアウト・プロパティ」ウィンドウを開きます。「フォーマット」タブをクリックします。
2. 列の見出しセルにフォーマット属性を指定するには、列名の下「見出し」分岐を選択します。列の見出しセルに適用するフォーマット情報を「フォーマット」、「横に配置」、「縦に配置」、および「オプション」の各フィールドに指定します。
3. 列の明細セルにフォーマット属性を指定するには、列名の下「明細」分岐を選択します。列のすべての明細セルに使用されるフォーマット設定を指定するには、「明細」分岐で「デフォルト」分岐を選択します。特定の条件を満たす明細セルに使用されるフォーマット設定を指定するには、「条件」分岐を選択します。列内の明細セルに複数の条件ステートメントを作成することができます。「デフォルト」または「条件」分岐を選択したら、必要なフォーマット設定を「フォーマット」、「横に配置」、「縦に配置」、および「オプション」の各フィールドに指定します。
4. 列の合計セルにフォーマット設定を指定するには、列名の下「総合計」分岐を選択します。合計セルは、照会結果列に常に表示されるわけではありません。合計セルは、列にグループ化および集約コードを指定した場合のみ表示されます。合計セルに使用されるフォーマット設定を指定するには、「総合計」分岐で「デフォルト」分岐を選択します。セルの値が特定の条件を満たす場合に合計セルに使用されるフォーマット設定を指定するには、「条件」分岐を選択します。列内の合計セルに複数の条件ステートメントを作成することができます。「デフォルト」または「条件」分岐を選択したら、必要なフォーマット設定を「フォーマット」、「横に配置」、「縦に配置」、および「オプション」の各フィールドに指定します。

5. 「適用」をクリックして、指定したフォーマット属性を保存します。列に指定したフォーマット情報が、照会結果に適用されます。照会結果列のフォーマット設定を続行することも、「OK」をクリックして「レイアウト・プロパティ」ウィンドウを閉じることもできます。

フォーマット・フィールド:

照会結果列の見出し、明細、合計セルに適用できるフォーマット属性それぞれの説明。

フォーマット

- 「現状のまま」は数値、文字、および日時データに適用できます。
- 「通貨」は数値データだけに適用できます。
- 「10 進数」は数値データだけに適用できます。
- 「浮動小数」は数値データだけに適用できます。
- 「パーセント」は数値データだけに適用できます。
- 「ユーザー通貨」は数値データだけに適用できます。
- 「16 進数」は文字データだけに適用できます。
- 「2 進数」は文字データだけに適用できます。
- 「YYYYxMMxDD」は日付データだけに適用できます。
- 「MMxDDxYYYY」は日付データだけに適用できます。
- 「DDxMMxYYYY」は日付データだけに適用できます。
- 「YYxMMxDD」は日付データだけに適用できます。
- 「MMxDDxYY」は日付データだけに適用できます。
- 「DDxMMxYY」は日付データだけに適用できます。
- 「HHxMMxSS」は時刻データに適用できます。
- 「カスタム」はさまざまなデータ・タイプに適用できます。

サンプル

データがどのようにフォーマットされるかのスナップショットを表示します。

横に配置

ドロップダウン・リストから、データを列内で水平方向に配置する方法を選択します。オプションは次のとおりです。

- 左
- 右
- 中央

縦に配置

ドロップダウン・リストから、データを列内で垂直方向に配置する方法を選択します。オプションは次のとおりです。

- 上部
- 中央
- 下部

オプション

- 「千の位の区切り文字」は数値データに適用できます。このチェック・ボックスを選択すると、数値に 3 桁ごとの区切りが挿入されます (この記号は、オペレーティング・システムの設定から取られます)。
- 「負の数」は数値データに適用できます。使用可能なオプションのリストから負の数値のフォーマットを選択します。
- 「小数部」は数値データに適用できます。数値に含める小数点以下の桁数を指定します。
- 「テキストの折り返し」は文字データに適用できます。このチェック・ボックスを選択すると、セルの内容がそのセル内で次の行に折り返されます。
- 「区切り文字記号」は日時データに適用できます。使用可能な形式のリストから、日付または時刻データの形式設定に使用するものを選択します。例えば、03/25/02 のようにデータをフォーマットするには日付データ用にスラッシュ (/) を選択します。時刻データを形式設定する記号 (例えばコロン (:)) を選択します。例えば、12:03:02 となります。
- 「12 時間モード」は時刻データに適用できます。時刻を 12 時間間隔で表示する場合 (例えば、03:12:30 PM や 10:05:07 AM など) は、チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスをクリアすると、時刻は 24 時間形式 (例えば、15:12:06) で表示されます。

#### デフォルトとして設定

現在のフォーマット属性を、これ以降の照会結果のデフォルトとして設定します。現在の設定は、デフォルトを変更するまで有効です。

#### デフォルトにリセット

フォーマット属性をデフォルト設定にリセットします。

使用可能な日付形式は、以下のとおりです。

- **YYYYxMMxDD**
- **MMxDDxYYYY**
- **DDxMMxYYYY**
- **YYxMMxDD**
- **MMxDDxYY**
- **DDxMMxYY**

使用可能な時刻形式は、以下のとおりです。

- **HHxMMxSS**
- **HHxMM**

使用可能なタイム・スタンプ形式は、以下のとおりです。

- **YYYYxMMxDD HHxMMxSS**
- **DDxMMxYYYY HHxMMxSS**
- **YYYYxMMxDD HHxMM**
- **DDxMMxYYYY HHxMM**
- **YYxMMxDD HHxMMxSS**
- **DDxMMxYY HHxMMxSS**

- YYxMMxDD HHxMM
- DDxMMxYY HHxMM

## 条件付き書式オプションの指定

照会結果に含まれるデータの列全体、または列の明細、合計、および総合計の各セルに、条件付きのフォーマット・オプションを設定することができます。条件式の評価に基づいて、照会結果に含まれるそれぞれの列およびセルに、フォーマット属性の固有のセットを持たせることができます。

### このタスクについて

例えば、列内で、セルの内容が 0 に等しければそのセルを赤の背景色で表示し、値が 100 であればそのセルを青の背景色で表示するよう指定できます。

条件付き書式を設定するには:

### 手順

1. 「レイアウト・プロパティ」ウィンドウを開きます。セルまたは列のデータに適用する結果に応じて、「フォント」ページまたは「フォーマット」ページで条件付き書式を指定できます。
2. 条件付き書式を適用します。
  - a. 列の明細セルに条件付き書式を適用するには「明細」分岐をクリックします。
  - b. 列の要約セルに条件付き書式を適用する場合は、「列名合計」分岐をクリックします。
  - c. 列の総合計セルに条件付き書式を適用する場合は「総合計」分岐をクリックします。
3. 該当する分岐を選択し、「追加」アイコンをクリックする。制御フィールドの「条件名」および「条件式」が使用可能になります。
4. 式の名前を「条件名」フィールドに入力することで、作成する各条件式に固有の名前を指定します。

その条件名を使用して、分岐がツリー内に自動的に作成されます。

各条件は、式を必要とする。

5. 式を「条件式」フィールドに入力します。

条件付き書式を行うための式を作成する規則に従ってください。式言語は、定数式、結果セット内の他の列をソースとする変数として定義されている式 (例えば、1, 2)、数値演算子 (+、-、\*、/ など)、文字演算子 (+、CONCAT)、数値関数と文字関数 (MIN、MAX、AVG、SQRT、CONCAT、SUBSTR など)、および論理演算子および関係演算子のセット (<、=、!= など) をサポートしています。

6. 式の作成後、「レイアウト・プロパティ」ウィンドウの「フォント」または「フォーマット」ページを選択し、式の条件セットに適合する列内のすべてのセルに適用するフォーマットを指定する。

## 照会結果のフィルター処理

「dynamart フィルター・ウィザード」を使用して、照会結果の内容を制御する条件式を作成できます。

### このタスクについて

フィルターを使用すると、返された照会結果セットの行および値を、指定内容に合わせて制限できます。フィルターには任意の数の式を含めることが可能であり、これにより、グリッドの内容を完全に制御できます。照会結果のフィルター処理を行うには、以下のようにします。

### 手順

1. 「結果」エディターで、フィルター処理する照会結果セットを開きます。
2. 「結果」 > 「結果のフィルター処理」を選択します。「dynamart フィルター・ウィザード」が開きます。
3. 「フィルター処理を使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。ここで、フィルターを作成するために用意された 2 つの方法のいずれかを選択できます。1 つは、オプションの表を使用してフィルターを作成する方法、もう 1 つは式デザイナーを使用してフリー・スタイル・フィルターを作成する方法です。
4. フィルターの作成方法を選択して、「次へ」をクリックします。ウィザードの次のページは、前の選択内容によって異なります。
5. オプションの表、または式デザイナーを使用してフィルターを作成し、「終了」をクリックします。「dynamart フィルター・ウィザード」が閉じて、指定したフィルターが照会結果に適用されます。

### 複合条件フィルターの作成

複合条件フィルターにより、複数の条件を使用して、照会結果をフィルターに掛けることができます。

### このタスクについて

複合条件フィルターを使用して、照会結果をフィルター処理するための複数の条件を設定します。「dynamart フィルター・ウィザード」で、オプションの表から複数の条件を追加できます。複合条件フィルターを作成するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「dynamart フィルター・ウィザード」を開き、「フィルター処理を使用可能にする」チェック・ボックスを選択して、「複合条件フィルター」を選択し、「次へ」をクリックします。「dynamart フィルターの編集」ページが開きます。
2. 「列」ドロップダウン・リストから、フィルター処理する列を選択します。
3. 「演算子」ドロップダウン・リストから、フィルターの演算子を選択します。有効なオプションには以下があります。
  - より小さくない - 指定された値以上のすべての値が含まれます。
  - より大きい - 指定された値より大きいすべての値が含まれます。

- より大きくない - 指定された値以下のすべての値が含まれます。
  - より小さい - 指定された値より小さいすべての値が含まれます。
  - 等しい - 指定された値と等しい値のみが含まれます。
  - 等しくない - 指定された値と等しくないすべての値が含まれます。
  - 類似 - 指定されたパターンと一致するすべての値が含まれます。パターンには以下の特殊文字を含めることができます。
    - % は 0 個以上の文字と一致します。
    - \_ は 1 つの文字のみと一致します。
    - ? は 1 つの文字のみと一致します。
  - 大/小文字を区別しない Like - Like 演算子の大/小文字を区別しないバージョンです。
  - 非類似 - 指定された値に類似していないすべての値が含まれます。
  - NULL - NULL 値のみが含まれます。
  - NULL ではない - NULL ではないすべての値が含まれます。
  - 範囲内 - 2 つの指定値の間にあるすべての値およびこれらの指定値が含まれます。
  - 範囲外 - 2 つの指定値の外にあるすべての値およびこれらの指定値が含まれます。
  - 間 - 2 つの指定値の間にあるすべての値が含まれます。
  - 間がない - 2 つの指定値の外にあるすべての値が含まれます。
4. 「タイプ 1」ドロップダウン・リストから、指定する値のタイプを選択します。有効なオプションには以下があります。
    - 定数 - 指定された値は、数表示または文字などの設定済み定数です。
    - 列 - 指定された値は、結果セット内の別の列です。
    - プロンプト - 指定された値は、照会に関連付けられたプロンプト階層です。
  5. 「値 1」列に、式の値を指定します。
  6. 該当する演算子タイプを選択した場合は、「Type2」列にタイプを、「Value2」列に値を指定します。
  7. 複数の式をリストした場合は、「条件」ドロップダウン・リストから、式の実行条件を選択します。
  8. 別の式の実行順序を変更するには、「上へ移動」または「下へ移動」をクリックします。
  9. 各式の優先順位を変更するには、「レベルを下へ」または「レベルを上へ」をクリックします。低いレベル番号の式は、高いレベル番号の式よりも優先されます。
  10. 式を削除するには、式を選択して、「削除」をクリックします。
  11. 式の作成および調整が完了したら、「終了」をクリックします。「dynamart フィルター・ウィザード」が閉じて、照会結果がフィルターに掛けられます。

## フリー・スタイル条件フィルターの作成

フリー・スタイル条件フィルターにより、式デザイナーを使用して、照会結果をフィルターに掛けることができます。

### このタスクについて

照会結果をフィルターに掛ける 1 つの方法として、式デザイナーを使用して 1 組の式を作成することができます。QMF 式デザイナーの構文に精通している場合は、この方法をお勧めします。フリー・スタイル条件フィルターを作成するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「dynamart フィルター・ウィザード」を開き、「フィルター処理を使用可能にする」チェック・ボックスを選択して、「フリー・スタイル条件フィルター」を選択し、「次へ」をクリックします。「dynamart フィルター式の編集」ページが開きます。
2. 適切な、式の構文を使用して、結果のフィルター処理に使用する式を「式」フィールドに入力します。
3. フィルター式の作成に役立つ、右側の関数カテゴリーを使用できます。

注: 独自の関数を使用してフィルター式を構成できます。詳しくは、『カスタム関数の追加』を参照してください。

4. フィルター式の作成が終了したら、「終了」をクリックします。「dynamart フィルター・ウィザード」が閉じて、照会結果がフィルターに掛けられます。

---

## 計算列の操作

計算列とは、照会結果セットに追加できるデータの列のことです。

計算列機能を使用する前に適切な構文参照情報と関数参照情報にアクセスすると、より素早く式を作成するのに役立ちます。

構文については、ユーザー・ヘルプの参照セクションで『計算列の式の構文』を参照してください。

計算列の関数を含む、すべての使用可能な関数のリストについては、ユーザー・ヘルプの参照セクションで『計算列の関数』を参照してください。

## 照会結果への計算列の追加

照会結果セットに計算列を追加するには、「計算列」ウィンドウを使用します。計算列は、既存の列の前にも後にも追加できます。

### このタスクについて

追加された列の内容は、定義された式を使用して計算されます。この式では、他の列のデータ、および定数を使用できます。追加された列の値の計算に使用した式は、照会に保存されます。計算列は、照会が実行されるたびに照会結果セットに組み込まれます。



照会結果セットに計算列を追加するには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. 以下のいずれかの方法で、「計算列」ウィンドウを開きます。
  - QMF for Workstation を使用する場合は、エディターの「結果」ページで照会結果の列の見出しを右クリックし、ポップアップ・メニューから「計算列を後に追加」または「計算列を前に追加」のいずれかを選択します。
  - アクティブ・エディターの照会結果で、「結果」 > 「計算列の追加」を選択します。
2. 「計算列」ウィンドウの「名前」フィールドに、照会結果に表示されるとおりに計算列の名前を指定します。
3. 計算列のタイプを「タイプ」リストから選択します。計算列のデータのフォーマットがこのタイプによって決まります。有効な選択項目は以下のとおりです。
  - 整数: データは整数で表されます。例えば、「5」や「100」などです。
  - 10 進数: データは実数として表されます。例えば、「10.5」や「0.25」などです。
  - 文字: データは特定のテキスト・ストリングとしてのみ表されます。例えば、「John Smith」や「10 Main Street」などです。
  - 日付: データは日付形式で表されます。例えば、「12/03/2000」や「1/2/09」などです。
  - ブール: データはブール値として表されます。例えば、「true/false」や「yes/no」などです。
  - カテゴリー化: データは、一定範囲のデータ値に対して定義されているカテゴリー名で表されます。例えば、「small、average、large」を使用して、1,000 個から 100,000 個までの範囲の売上数量をカテゴリー化できます。
4. 使用可能なすべての関数が含まれる領域で、必要な関数にナビゲートして、それを選択します。フィルターを使用すれば、必要な関数を素早く見つけることができます。
5. JavaScript モジュールから関数をロードする場合は、「JavaScript モジュールの追加」ボタンをクリックし、「JavaScript モジュール」ウィンドウで、関数を含むモジュールを追加します。ロードされた関数は、「JavaScript モジュール」ノードで使用可能になります。

ヒント: 「JavaScript モジュール」ウィンドウで、照会からの JavaScript モジュールを削除できます。

6. 式を作成します。

「式:」ウィンドウで、列の内容を計算するために使用する式の構文を入力します。

作成する式には、他の列のデータ、定数、および関数を使用できます。計算列の式を作成するための一連の構文規則に従ってください。

式言語では以下の規則がサポートされます。

- 結果セット内の他の列 (列 1 や列 2 など) をソースとする変数として定義されている定数式

- 数値演算子 (+、-、\*、/) と文字演算子 (+、CONCAT)
- 数値関数と文字関数 (MIN、MAX、AVG、SQRT、CONCAT、SUBSTR)
- 論理演算子と関係演算子のセット (<、=、!=、など)。

追加された列の値の計算に使用した式は、照会に保存されます。

7. 「OK」をクリックして、「計算列」ウィンドウを閉じます。

## タスクの結果

列の内容は、指定された式に従って計算され、照会結果セットに追加されます。

ポップアップ・メニューから「計算列の追加」を選択した場合、新しい列は照会結果の最後の列に追加されます。

ポップアップ・メニューから「計算列を後に追加」を選択した場合、新しい列は照会結果の選択列の前に挿入されます。

ポップアップ・メニューから「計算列を前に追加」を選択した場合、新しい列は照会結果の選択列の後に挿入されます。

## カスタム関数の追加

JavaScript 関数を QMF for Workstation および QMF for WebSphere に追加して、計算列の追加時や dynamart フィルターの作成時などに、この関数をさまざまな式の作成に使用できます。

### このタスクについて

functions.js ファイルを作成したり、リポジトリから JavaScript モジュールを使用したりすれば、カスタム JavaScript 関数を追加できます。

以下のトピックでは、カスタム関数を追加する詳細な手順について説明します。

### ファイルからカスタム関数を追加

JavaScript 関数を含むファイルを作成し、それを QMF for Workstation および QMF for WebSphere に追加できます。計算列の追加時や dynamart フィルターの作成時などに、この関数をさまざまな式の作成に使用します。

### このタスクについて

カスタム関数を作成および追加するには、以下のようにします。

#### 手順

1. JavaScript 関数とその実装に関する説明が記載されたファイル *functions.js* を作成します。
2. 各関数はキーワード 'function' で始めます。
3. 各関数の前に注釈を追加します。

アプリケーションは、この注釈を関数の説明と解釈します。

4. オプション: 新しい関数の追加先となるカテゴリを定義します。

関数を追加するには、注釈内で '@category' タグを使用します。当該カテゴリーは存在しなければ作成されません。

注: 以下のカテゴリーは、アプリケーション内に既に存在しています。

- 列
  - 集約
  - 変換
  - 日時
  - 情報
  - 論理
  - 計算および三角法
  - 各種
  - テキスト
  - オブジェクト
5. `functions.js` ファイルを、QMF for Workstation または QMF for WebSphere ユーザー・ホーム・ディレクトリーに配置します。 `functions.js` を他のユーザーと共有する場合、そのユーザーは `functions.js` ファイルを自分のホーム・ディレクトリーにコピーする必要があります。
  6. アプリケーションを起動または再始動します。

## タスクの結果

関数が、定義されたカテゴリーに追加され、計算列、dynamart フィルター、およびスケジューラー用に式を作成するために使用できるようになります。

これにより、ビジュアル・ダッシュボードなど、他の QMF オブジェクトに各種機能を実装できるようになります。例えば、表から取得されたデータを、その表からのアドレス情報に従って、マップ上に表示できます。詳しくは、451 ページの『照会から取得されたアドレス情報に従ってマップ上にデータを表示』を参照してください。

## リポジトリからカスタム関数を追加

計算列でさまざまな式を作成するために、JavaScript モジュールからの関数を使用できます。

### 始める前に

リポジトリ内の関数を含む JavaScript モジュールが必要です。JavaScript モジュールについて詳しくは、457 ページの『JavaScript モジュールの作成』を参照してください。

### このタスクについて

JavaScript モジュールから関数を追加するには、以下のようにします。

### 手順

1. 照会エディターで、関数を持つ JavaScript モジュールの追加先となる照会を開きます。

2. メインメニューから「照会」 > 「JavaScript モジュールの管理」を選択します。「JavaScript モジュール」ウィンドウが開きます。
3. 「JavaScript モジュールの追加」ボタンをクリックします。「リポジトリから開く」ウィンドウが開きます。
4. 追加する JavaScript モジュールを選択し、「終了」をクリックします。そのモジュールが追加され、使用可能な関数が「使用可能な関数」リストにリストされます。

### タスクの結果

JavaScript モジュールが照会に追加されました。これで、計算列でモジュール関数を使用できます。追加された JavaScript モジュールからの関数は、「計算列」ウィンドウの「JavaScript モジュール」ノードで使用できます。

---

## 照会結果にカテゴリー化を適用

ビジュアル照会の結果における計算列にカテゴリー化を適用できます。作業を効果的に行うために、カテゴリー化を使用して、データを階層化してカテゴリーに編成します。

### 始める前に

ビジュアル照会エディターの「デザイン」タブで照会を開きます。この照会の結果にカテゴリー化を適用します。

### このタスクについて

カテゴリー化を追加するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「変換」ペインで「新規カテゴリー化」ボタンをクリックし、「カテゴリー化」ダイアログを開きます。
2. カテゴリー化に使用する名前を「カテゴリー化名」フィールドに入力します。
3. 「規格適合規則セットの追加」をクリックして「規格適合規則」ダイアログを開き、適切な結果セット値をカテゴリーに組み込むために使用する規則を指定します。
4. 「カテゴリーの追加」をクリックして「カテゴリー」ダイアログを開き、カテゴリー化の式を指定します。
5. 「カテゴリー化」ダイアログで、カテゴリーに組み込まれない値の表示を選択します。
  - 空の値を表示するには、「除外」を選択します。
  - 「グループ化」を選択し、「グループ名」フィールドで、カテゴリーに組み込まれないすべての値に対して表示する名前を指定します。
  - 結果セットの値を表示するには、「個別にリスト」を選択します。
6. 「OK」をクリックして、「カテゴリー化」ダイアログを閉じます。作成したカテゴリー化が「変換」ペインの「カテゴリー化」ノードに追加されます。

## タスクの結果

作成したカテゴリ化を使用すれば、照会結果の計算列に特定データを表示できます。

## カテゴリ化用の規格適合規則を追加

適切な結果セット値をカテゴリに組み込むための規格適合規則を指定します。

### このタスクについて

規格適合規則を追加するには、以下のようにします。

#### 手順

1. 「カテゴリ化」ダイアログで「規格適合規則セットの追加」をクリックして、「規格適合規則」ダイアログを開きます。
2. 「カテゴリ名」フィールドで、カテゴリに組み込まれる結果セット値に使用する名前を入力します。
3. 「追加」をクリックして、「カテゴリの規則」フィールドに規則を追加します。

注: 複数の規則を同じカテゴリに追加できます。

4. 「タイプ」領域から規則のタイプを選択します。
5. 規則が実行される時の条件を指定するには、「演算子」リストから演算子を選択し、必要な値を「値 1」フィールドおよび「値 2」フィールドに指定します。

注: 「値 2」フィールドが使用可能かどうかは、選択した演算子によって異なります。

6. 指定した規則の順序を変更するには、「上」ボタンおよび「下」ボタンを使用します。
7. 規則の指定が終了したら、「OK」をクリックして「カテゴリ化」ダイアログに戻ります。

## カテゴリ化用の式を追加

結果セットの値をカテゴリ化するための式を指定します。

### このタスクについて

カテゴリ化用の式を追加するには、次のようにします。

#### 手順

1. 「カテゴリ化」ダイアログで「カテゴリの追加」をクリックして「カテゴリ」ダイアログを開きます。
2. 「カテゴリ名」フィールドで、カテゴリに組み込まれる結果セット値に使用する名前を入力します。
3. 「規則の式」フィールドに、結果セット値のカテゴリ化に使用する式を指定します。「規則の式」フィールドの右にある式デザイナー関数を使用してください。

4. 式を指定したら、「OK」をクリックして「カテゴリー化」ダイアログに戻ります。

---

## 照会結果列へのグループ化および集約の適用

照会結果列にグループ化および集約のオプションを適用して、結果データを論理グループまたは要約グループに編成できます。

### このタスクについて

グループ化および集約を追加することにより、データの要約情報の取得と、データのより論理的な表示を自動的に行えます。例えば、報告書のデータを部門別にロールアップしたり、部門別の歩合を平均したりできます。

照会結果列にグループ化および集約を適用するには:

### 手順

1. 以下のいずれかの方法で、グループ化および集約のオプションのメニューにアクセスします。
  - 使用可能なエディターに照会結果が表示されている状態で、「結果」 > 「グループ化および集約」を選択します。
  - QMF for Workstation を使用している場合は、エディターの「結果」ページで照会結果の列の見出しセルを右クリックし、ポップアップ・メニューから「グループ化および集約」を選択します。
  - エディターの「レイアウト」ページから、「レイアウト構造」ツリー内の列名を右クリックし、ポップアップ・メニューから「グループ化および集約」を選択します。
2. 使用可能なエディターの「レイアウト」ページで、「レイアウト構造」ツリーにある列ラベル・フィールドを右クリックします。選択した列に応じたポップアップ・メニューが右側に開きます。
3. 列に適用するグループ化および集約のオプションを選択します。
4. このプロセスを、グループ化および集約を追加する照会結果のデータ列ごとに繰り返します。

## グループ化および集約のフィールド

照会結果列にグループ化および集約のオプションを適用して、結果データを論理グループまたは要約グループに編成できます。

### 集約なし

選択されている列から集約または要約フォーマットを除去する場合は、このオプションを選択します。

### トップ・グループ

このオプションを選択すると、選択された列のデータが照会結果の上部にグループ化されます。トップ・グループに列を置くと、その列の関連付けられている値が水平軸上に表示されます。これは、ピボット または ACROSS 機能として知られています。トップ・グループの複数の列を定義することができます。「トップ・グループ」に要約情報が含まれるように指定することができます。列が選択されている状態で、ポップアップ・メニューから「総

合計の表示」をクリックします。列が結果セット内の他の列全体にわたるように、照会結果が再フォーマットされます。照会結果内の各行の要約行が追加されます。

#### サイド・グループ

このオプションを選択すると、選択された列のデータが照会結果の左側を縦断する形でグループ化されます。

#### カウント

このオプションを選択すると、その列の値の数を表示する要約行が、照会結果の下部に作成されます。

**最初** このオプションを選択すると、その列の最初の値を示す要約行が、照会結果の下部に作成されます。

**最後** このオプションを選択すると、その列の最後の値を示す要約行が、照会結果の下部に作成されます。

**最大** このオプションを選択すると、その列の最大値を示す要約行が、照会結果の下部に作成されます。

**最小** このオプションを選択すると、その列の最小値を示す要約行が、照会結果の下部に作成されます。

**合計** このオプションを選択すると、その列の値の合計を示す要約行が照会結果に作成されます。要約付きでグループ化するために別の列が選択されている場合は、このオプションを指定すると、一時的な要約と全体要約が計算されます。

**累計** このオプションを選択すると、その列の値が、累積 (順次和) として表示されます。値がその下の行の値に順次加算されていき、2 つの値の合計が次に加算される値になります。累積要約が最後に表示されます。

**平均** 列の値の平均を示す合計行を作成する場合は、このオプションを選択します。

#### 標準偏差

列の値の標準偏差を示す合計行を作成する場合は、このオプションを選択します。標準偏差とは、すべての標本が、データ・セット内で平均の周りにどの程度密に集中しているかを示す統計値です。

#### グループのパーセンテージ

列の値をグループ合計のパーセンテージとして表示し、そのパーセンテージの合計を示す合計行も表示する場合は、このオプションを選択します。グループのパーセンテージは、グループ内の各値が全体に対して占める割合を示します。例えば、給与が 1,000 ドルの場合、この給与は、総給与 10,000 ドルの 10% になります。

#### 合計のパーセンテージ

列の値を列合計のパーセンテージとして表示し、そのパーセンテージの合計を示す合計行も表示する場合は、このオプションを選択します。

#### グループの累積パーセンテージ

このオプションを選択すると、その列の値がグループ合計のパーセンテージとして表示されます。照会結果の下部の要約行は、パーセンテージの合計を示しています。例えば、DEPT 42 は、歩合の 0.42% を獲得します。

### 合計の累積パーセンテージ

このオプションを選択すると、その列の値が、グループの合計のパーセンテージとその列の合計のパーセンテージとして表示されます。照会結果の下部の要約行は、パーセンテージの合計を示しています。例えば、DEPT 42 内では、Wheeler は歩合の 44.60% を獲得し、Williams は 55.40% を確保しましたが、Smith の歩合はありません。全体で、この DEPT 42 は、会社の歩合の 5.75% を得ることになります。

---

## 照会結果のエクスポート

照会結果データは、データベースまたはファイルにエクスポートできます。

### このタスクについて

「照会結果のエクスポート」ウィザードを使用して、照会結果をエクスポートします。

照会結果をエクスポートするには:

### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「照会結果のエクスポート」ウィザードを開きます。
  - 使用可能なエディターに照会結果のセットが表示されている状態で、「結果」 > 「エクスポート」を選択します。
  - 「ファイル」 > 「エクスポート」を選択します。使用可能なエクスポート・ウィザードのリストから「結果セット」を選択します。
2. 「照会結果のエクスポート」ウィザードが開き、「照会結果のエクスポート」ページが示されます。

「結果」 > 「エクスポート」を使用して「照会結果のエクスポート」ウィザードを開いた場合、エクスポートするアクティブな照会結果の名前が「ソース」フィールドにリストされます。

「ファイル」 > 「エクスポート」を使用して「照会結果のエクスポート」ウィザードを開いた場合、エクスポートする照会結果のセットを「ソース」フィールドで選択する必要があります。

3. 以下のいずれかを選択して、照会結果データをエクスポートする場所を選択します。
  - 「ファイル・システム」をクリックすると、照会結果データがファイルにエクスポートされます。照会結果をファイル・システムにエクスポートするために必要なフィールドが表示されます。
  - 「データベース」をクリックすると、照会結果データがデータベースにエクスポートされます。照会結果をデータベースにエクスポートするために必要なフィールドが表示されます。

## 照会結果を E メールで送信

「インターネット・メール・ウィザード」を使用すれば、照会結果を E メールで送信できます。



## このタスクについて

このタスクでは、照会結果を E メールで送信する方法について説明します。

### 手順

1. アクティブ・エディターに照会結果のセットが表示されている状態で、「ファイル」 > 「送信先」 > 「メール受信者...」を選択します。

「照会結果のエクスポート」ウィザードが開き、「エクスポート・ファイル・タイプの選択」ページが表示されます。

2. 表示されたファイル・タイプからファイル・タイプを選択し、「次へ」をクリックします。

- テキスト - 区切り文字で区切られているテキスト (\*.txt)
- HTML - ハイパーテキスト・マークアップ言語 (\*.htm)
- IXF - 統合交換フォーマット (\*.ixf)
- CSV - コンマ区切り値 (\*.csv)
- DBF - dbase III (\*.dbf)
- XML - QMF マークアップ言語ファイル (\*.xml)
- WQML - Web 照会マークアップ言語 (\*.wqml)
- PDF - Portable Document Format (\*.pdf)
- XLS - Microsoft Excel 97 から 2003 (\*.xls)
- XLSX - Microsoft Excel 2007 (\*.xlsx)

「照会結果のエクスポート」ウィザードの 2 ページ目が開きます。

3. ファイル・タイプの追加オプションを選択し、「終了」をクリックします。

注: 使用可能なオプションは、選択したファイル・タイプによって異なります。詳しくは、『ファイル・エクスポート・オプションの指定』を参照してください。

「インターネット・メール・ウィザード」が開きます。

4. 「メッセージ・パラメーター」ページで、以下のパラメーターの値を指定します。
  - 本文テキストのフォーマットを「フォーマット」リストから選択します。使用可能な形式は、「テキスト」と「HTML」です。
  - E メールを送信する必要がある送信先アドレスを「宛先」フィールドに指定します。
  - Eメールの写しを送信する必要がある送信先アドレスを「cc」フィールドに指定します。
  - Eメールの件名を「件名」フィールドに指定します。
  - Eメールの本文テキストを「メッセージ」フィールドに指定します。
  - Eメールを送信する必要がある送信元アドレスを「送信元」フィールドに指定します。
5. SMTP サーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP 設定」をクリックします。「SMTP 設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。

- a. 事前定義された SMTP サーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストからサーバーを選択するか、「サーバーの追加」をクリックしてサーバーを作成します。
- b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTP サーバーに認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされるキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。

「OK」をクリックして、「SMTP 設定」ウィンドウを閉じます。

6. 「次へ」をクリックして、別の添付ファイルを追加します。
7. 「新規ファイルを追加するにはここをクリック」ラベルをクリックします。
8. 省略符号 (...) をクリックして、必要なファイルをハード・ディスク・ドライブから選択します。

イメージや、他の使用可能なタイプのファイルを添付できます。

E メール本文テキストにイメージを組み込む場合は、次の HTML タグを、イメージを表示するテキストの領域に追加する必要があります。

```
</img>
```

`cid:[image name]` は、埋め込むイメージ・ファイルを識別します。例えば、`chartx` という名前の `.gif` ファイルを埋め込む場合は、次の HTML タグをテキストに挿入します。

```
</img>
```

9. 「終了」をクリックして、メッセージを送信します。

## 照会結果をデータベースにエクスポート

「照会結果のエクスポート」ウィザードを使用して、照会結果のデータをデータベースにエクスポートできます。

### このタスクについて

照会結果データをデータベースにエクスポートするには:

#### 手順

1. 「照会結果のエクスポート」ウィザードを開くには、「ファイル」 > 「エクスポート」を選択します。使用可能なエクスポート・ウィザードのリストから「結果セット」を選択して、「次へ」をクリックします。
2. 「データベース」を選択します。照会結果をデータベースにエクスポートするために必要なフィールドが表示されます。
3. 「ソース」リストから、エクスポートする照会結果セットを選択します。
4. 照会結果データの保存先となるデータベースを「データベース」フィールドに指定します。データベースを選択すると、使用可能な表スペース名を反映して、「表スペース」フィールドが更新されます。

5. 「表の所有者」フィールドで、データを保存する表の所有者を指定します。  
「表名」フィールドで、データを保存する表の名前を指定します。表の所有者または名前を入力する際は、識別子の正しい形式を使用する必要があります。
6. オプション: データにコメントを添付する場合は、コメントを「コメント」フィールドに入力します。
7. 表スペース名を指定します。

データベースを選択すると、ユーザー ID のリソース限界で指定したデフォルト表スペース名が表示されます。この表スペース名は、「表スペース」フィールドで別の表スペース名を指定しない限り、そのまま使用されます。

新しい表スペース名は、データを追加する表が存在しない場合のみ指定することができます。さらに、ユーザー ID のリソース限界により、表スペース名の指定または変更を行うための許可が必要となります。

8. 「次へ」をクリックします。「加速オプションの設定」ページが開きます。

制約事項: 「加速オプションの設定」ページが開くのは、次の条件に該当する場合のみです。

- ステップ 4 (218 ページ) で選択したデータベースは IDAA をサポートする DB2 z/OS データベースである。
  - 「加速を有効にする」リソース限界が有効になっている。
9. 「加速オプションの設定」ページで、照会結果セットをエクスポートする宛先を指定します。「データベースおよびアクセラレーター」オプションまたは「アクセラレーターのみ」オプションを選択した場合、使用するアクセラレーターを「アクセラレーター」リストから選択します。
  10. 「次へ」をクリックします。「保存オプションの設定」ページが開きます。
  11. 以下のいずれかを選択して現在の照会結果のうちどのぐらいのデータをエクスポートするかを指定します。

- 「すべて」は、適用されたすべての変更とともに、現行結果グリッドにあるすべてのデータが保管されることを指定します。

例えば、レイアウトから除去された列はエクスポート・ファイルに保管されません。

- 「すべて - 結果セットのみ」は、結果グリッドの適用された変更に依存しない、元の照会結果セットにあるすべてのデータが保管されることを指定します。

例えば、レイアウトから除去された列もエクスポート・ファイルに保管されます。

注: 計算列は、ビジュアル照会および分析照会に関してのみエクスポートされます。

- 「選択」は、現在の照会結果で選択したデータのみを保存することを指定します。計算列を含めることができます (選択した場合)。「照会結果のエクスポート」ウィンドウを開く前に、保存する照会結果データを選択しておく必要があります。

注: 予測から照会結果セットをエクスポートするときを選択できるオプションは「すべて - 結果セットのみ」のみです。

12. 以下のいずれかを選択して、データを保存する方式を指定します。
  - 通常の保存モードを選択するには、「通常 - 検索したデータをデータ・ソースに送り戻して保存 (行ごとに **INSERT** ステートメントを使用)」を選択します。
  - **ORDER BY** 節を保持する高速保存モードを選択するには、「高速 - データ・ソースで照会を再実行することによりデータ・ソースに結果を直接保存」を選択します。

このラジオ・ボタンをクリックすると、データベースで照会が再実行され、その照会結果が指定した表に直接挿入される、高速のデータ保存処理を実行します。

すべてのデータベース・サーバーでデータの高速の保存を実行できるというわけではありません。この方式でデータを保存しているときにエラーを受け取った場合には、システム管理者に検査を依頼してください。この方式では、**ORDER BY** 節があれば、すべて保持されます。

高速保存方式を選択すると、「照会を再実行する前に元の **SQL** から **ORDER BY** 節を除去」チェック・ボックスが選択可能になります。

このチェック・ボックスを選択すると、**ORDER BY** 節を照会から取り去る高速保存モードが呼び出されます。

13. 以下のいずれかを選択して、既存のデータの処理方法を指定します。
  - 「既存のデータを置換」。データベースの指定された表に既存のデータがあれば、それを置き換えます。
  - 「既存のデータに追加」。データベースの指定された表に既存のデータがあれば、それに追加します。
14. 「計算列の保存」チェック・ボックスにチェック・マークを付けて、照会結果に追加された計算列をエクスポートすることを選択できます。
15. 変更をコミットする前に挿入する行数を表す値を「コミット有効範囲」フィールドに指定します。この値を省略するかゼロにすると、コミットが行われる前にすべての行が挿入されます。
16. 「終了」をクリックして、照会結果データをエクスポートします。「照会結果のエクスポート」ウィザードが閉じます。

## 照会結果をファイルにエクスポート

「照会結果のエクスポート」ウィザードを使用して、照会結果データをファイル・システムにエクスポートすることができます。

### 始める前に

照会結果セットを Microsoft Excel に正しくエクスポートするには、照会内で各 Excel 公式を「=」で始めます。


例えば次のようにします。

```
SELECT 45.5 AS PRODPRICE, 30 AS AMOUNT, '=A2*B2' AS PRICE
FROM SYSIBM.SYSDUMMY1
```

## このタスクについて

照会結果をファイルに保存するには:

### 手順

- 以下のいずれかの方法で「照会結果のエクスポート」ウィザードを開きます。
  - 編集機能で照会結果セットを開いた状態で、「ファイル」 > 「エクスポート」を選択し、「エクスポート」ウィザードの「選択」ページを開き、使用可能なエクスポート・ウィザードのリストから「結果セット」を選択します。
  - 編集機能で照会結果セットを開いた状態で、「エクスポート」 () ツールバー・ボタンをクリックします。
- 「ソース」リストから、エクスポートする照会結果セットを選択します。
- QMF for Workstation を使用している場合、「ファイル名」フィールドに作成するファイルの名前を指定します。デフォルトでは、ファイルはホーム・ディレクトリー内に保存されます。
- 作成するファイル・タイプを指定します。「エクスポート・タイプ」フィールドにある使用可能なファイル・タイプのリストから、ファイル・タイプを選択します。以下のファイル・タイプのいずれか 1 つを選択できます。
  - PDF (\*.pdf)
  - CSV (\*.csv)
  - IXF (\*.ixf)
  - XML QMF マークアップ言語ファイル (\*.xml)
  - HTML (\*.htm)
  - TEXT (\*.txt)
  - dbase III (\*.dbf)
  - XLS Microsoft Excel 97-2003 (\*.xls)
  - XLSX Microsoft Excel 2007 (\*.xlsx)
- 「XLS」や「XLSX」とは別のオプションを選択した場合は、「次へ」をクリックします。「照会結果のエクスポート」ウィザードの 2 ページ目が開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。例えば、DATAFORMAT=TEXT を選択したときに、グレー化された選択項目にオプションを入力できるようにするボックスがウィザードに表示されます。
- 「終了」をクリックします。QMF for Workstation を使用している場合、オペレーティング・システムに固有の保存ウィンドウが開きます。QMF for WebSphere を使用している場合、ダウンロード可能なファイルがリストされた保存ウィンドウが開きます。ハイパーリンクをクリックして、ワークステーションにファイルをダウンロードします。

## ファイル・エクスポート・オプションの指定

照会結果をファイルにエクスポートするときは、以下のオプションを 1 つ以上指定する必要があります。指定するオプションは、エクスポートするファイルのタイプによって異なります。

表 27. テキスト・オプション

フィールド	ファイル・タイプ	説明
データ選択	<ul style="list-style-type: none"><li>• .txt</li><li>• .html</li><li>• .csv</li><li>• .ixf</li><li>• .wqml</li><li>• .xml</li><li>• .dbf</li></ul>	<p>以下のラジオ・ボタンを使用して、照会結果内の保存するデータを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 「すべて」は、適用されたすべての変更とともに、現行結果グリッドにあるすべてのデータが保管されることを指定します。</li></ul> <p>例えば、レイアウトから除去された列はエクスポート・ファイルに保管されません。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 「すべて - 結果セットのみ」は、結果グリッドの適用された変更依存しない、元の照会結果セットにあるすべてのデータが保管されることを指定します。</li></ul> <p>例えば、レイアウトから除去された列もエクスポート・ファイルに保管されます。</p> <p>注: 計算列は、ビジュアル照会および分析照会に関してのみエクスポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 「選択」は、現在の照会結果で選択したデータのみを保存することを指定します。計算列を含めることができます (選択した場合)。「照会結果のエクスポート」ウィンドウを開く前に、保存する照会結果データを選択しておく必要があります。</li></ul>
列見出しを組み込む	<ul style="list-style-type: none"><li>• .txt</li><li>• .html</li><li>• .csv</li></ul>	<p>このチェック・ボックスを選択すると、照会結果の列見出しがファイルの 1 行目に含まれます。</p>

表 27. テキスト・オプション (続き)

フィールド	ファイル・タイプ	説明
日付/時刻形式	<ul style="list-style-type: none"> <li>• .txt</li> <li>• .html</li> <li>• .csv</li> </ul>	<p>いずれかのラジオ・ボタンを選択して、ファイルでの日時の形式を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「ISO」は、ISO 形式のファイルでの日時設定を指定します。日付は (YYYY-MM-DD) 形式に設定され、時刻は (HH:mm:ss) 形式に設定されます。</li> <li>• 「USA」は、USA 形式のファイルでの日時設定を指定します。日付は (MM/DD/YYYY) 形式に設定され、時刻は (HH:mm PM/AM) 形式に設定されます。</li> <li>• 「JIS」は、JIS 形式のファイルでの日時設定を指定します。日付は (YYYY-MM-DD) 形式に設定され、時刻は (HH:mm:ss) 形式に設定されます。</li> <li>• 「EUR」は、EUR 形式のファイルでの日時設定を指定します。日付は (DD.MM.YYYY) 形式に設定され、時刻は (HH.mm.SS) 形式に設定されます。</li> <li>• 「カスタム」には、日時値のカスタム形式を指定します。「日付:」テキスト・フィールドおよび「時刻:」テキスト・フィールドでは、Java 形式ストリングを使用できます。(詳しくは、<a href="http://java.sun.com/j2se/1.4.2/docs/api/java/text/SimpleDateFormat.html">http://java.sun.com/j2se/1.4.2/docs/api/java/text/SimpleDateFormat.html</a> を参照してください。)</li> </ul>
CCSID	<ul style="list-style-type: none"> <li>• .txt</li> <li>• .html</li> <li>• .csv</li> <li>• .ixf</li> <li>• .dbf</li> </ul>	このフィールドは、このファイルの保存時に使用するコード・ページの選択に使用します。
NULL 値の表示	<ul style="list-style-type: none"> <li>• .txt</li> </ul>	このフィールドは、NULL 値を表示するためのストリングの指定に使用します。
列の区切り	<ul style="list-style-type: none"> <li>• .txt</li> </ul>	このフィールドは、列を区切るためのストリングの指定に使用します。
値の区切り	<ul style="list-style-type: none"> <li>• .txt</li> </ul>	このフィールドは、値を区切るためのストリングの指定に使用します。
値をいつ区切るか	<ul style="list-style-type: none"> <li>• .txt</li> </ul>	<p>このフィールドで、どのような場合に値を区切るかを指定します。次のような選択肢があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 区切らない</li> <li>• 必要な場合にのみ区切る</li> <li>• 常に区切る</li> </ul>

表 27. テキスト・オプション (続き)

フィールド	ファイル・タイプ	説明
区切る値のタイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• .txt</li> </ul>	<p>以下のチェック・ボックス (複数可) を選択して、ファイルで区切る値のタイプを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 列見出し</li> <li>• 文字値</li> <li>• 数値</li> <li>• 日付/時刻値</li> </ul>
フォーマット	.ixf	<p>以下のいずれかのラジオ・ボタンを選択して、.ixf 出力ファイルのフォーマット設定を指定します。次のような選択肢があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「PC/IXF (バージョン 1)」は、PC/IXF バージョン 1 形式でデータをエクスポートします。</li> <li>• 「PC/IXF (バージョン 2)」は、PC/IXF バージョン 2 形式でデータをエクスポートします。</li> <li>• 「System/370IXF」は、System/370 IXF 形式でデータをエクスポートします。</li> </ul>
文書情報の追加	.pdf	<p>PDF が作成されるときに文書のプロパティ・フィールドに識別情報を追加する場合は、このチェック・ボックスを選択します。文書情報は、文書に関する基本データのほかに、検索を容易にする基準も示します。文書情報には、以下の項目があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「タイトル」は、PDF 文書のタイトルを指定します。</li> <li>• 「作成者」は、PDF 文書の作成者を指定します。</li> <li>• 「件名」は、PDF 文書の件名を指定します。</li> <li>• 「キーワード」は、PDF 文書のキーワードを指定します。キーワードは検索条件として使用されません。</li> </ul>
ANSI フォントのみ使用	.pdf	<p>PDF の作成時に ANSI フォントのみを使用することを指定するには、このチェック・ボックスを選択します。PDF 文書に英文字のみが含まれる場合は、このチェック・ボックスを選択することにより、PDF のサイズと作成時間を減らすことができます。</p>

## CSV およびテキスト・ファイルからの照会結果のインポート

CSV ファイルやテキスト・ファイルをデータ・ソースにインポートするには、「CSV ファイルのインポート」ウィザードを使用します。

### このタスクについて

CSV または TXT ファイルをインポートするには、以下のようになります。



## 手順

1. 「ファイル」 > 「インポート」を選択します。「インポート」ウィザードが開きます。
2. 「CSV ファイル」を選択し、「次へ」をクリックします。「インポート」ウィザードの「ファイル (\*.csv、\*.txt) から結果セットをインポート」ページが開きます。
3. 「ファイル名」フィールドの横の「参照」をクリックします。「開く」ウィンドウで「CSV ファイル (\*.csv)」かまたは「テキスト・ファイル (\*.txt)」を選択し、インポートする CSV または TXT ファイルを選択します。
4. ファイルをインポートするときに使用するエンコード方式を、「エンコード」リストの中から指定します。
5. 「次へ」をクリックします。「区切り記号オプションの選択」ページが開きます。
6. CSV または TXT ファイルの区切り記号オプションを指定し、「次へ」をクリックします。「結果セット構造」ページが開きます。
7. 「フィールド定義」表で結果セットの列オプションを指定し、「終了」をクリックします。

注: CSV または TXT ファイルから照会結果セットをインポートする際に、QMF は照会結果セットの最初の 1000 行をスキャンして VARCHAR データ・タイプの最大長を決定します。後続の行にこの最大値より長い VARCHAR データ・タイプが含まれている場合、セル値は切り捨てられます。「フィールド定義」表でデータ・タイプの長さを増やすことができます。

「CSV ファイルのインポート」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウに新しい結果セットが開きます。

## CSV および TXT ファイルの区切り記号オプションの指定

CSV または TXT ファイルのデータを QMF がどのように結果セットの列に変換するかを指定するには、「CSV ファイルのインポート」ウィザードの「区切り記号オプションの選択」ページを使用します。

### このタスクについて

「CSV ファイルのインポート」ウィザードの区切り記号オプションを使用することにより、CSV または TXT ファイルのフォーマットを QMF がどのように解釈して新しい結果セットに変換するかを指定できるほか、完成した結果セットの外観をどうするかも指定できます。CSV または TXT ファイルの区切り記号オプションを指定するには、以下のようにします。

## 手順

1. 「CSV ファイルのインポート」ウィザードの「区切り記号オプションの選択」ページを開きます。
2. 結果セットから特定の行を除外する場合は、「次で始まる行をスキップ」チェック・ボックスを選択し、テキスト・フィールドにストリングを指定します。
3. 「小数点」ドロップダウン・リストで、ファイル内の小数点の表示に使用する記号を選択します。

4. 作成する列の名前がファイルの最初の行にあることを指定する場合は、「最初の行は列名」チェック・ボックスを選択します。
5. 文字長の固定セットに基づいて列を作成することを指定するには、「固定幅」をクリックし、「列幅の指定」フィールドに文字長を入力して列の具体的な幅を指定します。テキストが文字長に達するたびに、テキストの内容にかかわらず、その次の位置の文字から別個の列に入れられるようになります。
6. 特定の記号で区切ることにより列を自動的に作成することを指定するには、「区切り記号」をクリックし、下の記号チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。結果セットが作成される時、こうした記号がテキストで検出されるたびに、その記号の次の文字から別個の列に入れられるようになります。
7. 隣接する複数の区切り記号によって作成される各列を 1 つの列に統合するには、「区切り記号のマージ」チェック・ボックスを選択します。例えば、「コンマ」と「スペース」を選択した場合、テキストにストリング `NAME, DEPT` があると、3 つの列が作成されます。最初の列には `NAME` が入っています。この列は、コンマが検出されたときに作成されたものです。2 番目の列は空です。この列は、スペースが検出されたときに作成されたものです。3 番目の列には `DEPT` が入っています。この列は、残りのテキストが検出されたときに作成されたものです。「区切り記号のマージ」チェック・ボックスを選択すると、コンマとスペースが検出されても列は 1 つだけ作成されるようになります。
8. 「テキストを囲む引用符」ドロップダウン・リストで、テキストであることを示すために単一引用符を使用するのか二重引用符を使用するのかを選択します。指定した引用符で囲まれたテキストは、その中に区切り記号があるかないかにかかわらず、常にそのまま表示されます。

注: 選択するたびに、結果セットのレイアウトがどのように変わったかを「プレビュー」表で追跡できます。

## CSV およびテキスト・ファイルの結果セット構造の指定

結果セットの列および表示する列をカスタマイズするには、「CSV ファイルのインポート」ウィザードの「結果セット構造」ページを使用します。

### このタスクについて

「フィールド定義」表でオプションを指定することにより、インポートされた結果セットの構造をカスタマイズできます。方法は以下のとおりです。

### 手順

1. 結果セットに含める列を選択するには、「フィールド名」列の左のチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
2. 列名を編集するには、「フィールド名」列のセルをクリックして、新しい名前を入力します。
3. 別のデータ・タイプを指定するには、「タイプ」列でセルをクリックし、リストからデータ・タイプを選択します。使用可能なオプションは次のとおりです。
  - **INTEGER:** -2 147 483 648 から 2 147 483 647 までの符号付き整数を格納する場合に使用します。
  - **BIGINT:** -9 223 372 036 854 775 808 から 9 223 372 036 854 775 807 までの大きな符号付き整数を格納する場合に使用します。

- **DOUBLE**: 浮動小数点付きの大きな数値を格納する場合に使用します。
- **CHAR**: 固定長文字列を格納する場合に使用します。例えば、一般的に長さの固定された、従業員の電話番号などを格納することができます。
- **VARCHAR**: 従業員名などの可変長文字列を格納する場合に使用します。
- **DECIMAL**: 固定された精度やスケールの数値を格納する場合に使用します。このデータ・タイプは、高精度の値 (通貨など) に使用してください。
- **DATE**: 日付のみを格納する場合に使用します。
- **TIME**: 時刻のみを格納する場合に使用します。
- **TIMESTAMP**: 日付と時刻の両方を格納する場合に使用します。

注: DATE、TIME、TIMESTAMP の各データ・タイプは、結果セットでの値の表示方法を定義する各種形式オプションをサポートしています。

注: サポートされる範囲と値の精度は、使用するデータベースによって異なる場合があります。

4. 「長さ」フィールドで、VARCHAR タイプの最大文字数を指定します。

注: CSV または TXT ファイルから照会結果セットをインポートする際に、QMF は照会結果セットの最初の 1000 行をスキャンして VARCHAR データ・タイプの最大長を決定します。後続の行にこの最大値より長い VARCHAR データ・タイプが含まれている場合、セル値は切り捨てられます。「フィールド定義」表でデータ・タイプの長さを増やすことができます。

5. 「精度」フィールドで、DECIMAL タイプの最大総桁数を指定します。
6. 「スケール」フィールドで、以下の最大数を指定します。
  - DECIMAL タイプの小数桁数
  - TIMESTAMP タイプまたは TIMESTAMP WITH TIMEZONE タイプの秒の小数部分の桁数
7. 選択するたびに、結果セットのレイアウトがどのように変わったかを「プレビュー」ペインで追跡できます。
8. 「終了」をクリックします。「CSV ファイルのインポート」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウに新しい結果セットが開きます。

---

## IXF ファイルに含まれているデータをインポート

IXF ファイルに含まれているデータは、アプリケーションで直接開くことができます。

### 後続処理のために IXF ファイルの内容を開く

IXF ファイルを開いたら、その内容が結果ビューに表示されます。これは、照会からの出力とほぼ同じです。

#### このタスクについて

結果ビューでは、データのフォーマット設定、報告書の生成、ファイルまたはデータベース表への報告書のエクスポートを実行できます。照会結果を表示したときに使用できるオプションと同じオプションが提供されます。

## 手順

1. 「ファイルから開く」ツールバー・ボタンをクリックし、IXF ファイル名を入力します。IXF ファイルに含まれているデータは、エディターで結果ビューとして開きます。
2. 以下のコマンドを実行するには、「結果」メニューを使用します。
  - 「フォント」を選択すると、「レイアウト・プロパティ」ウィンドウの「フォント」ページが開きます。このページでは、照会結果内での選択項目のフォント属性を表示および変更できます。
  - 「フォーマット」を選択すると、「レイアウト・プロパティ」ウィンドウの「フォーマット」ページが開きます。このページでは、照会結果内で選択した列のフォーマット・オプションを表示および変更できます。
  - 「グループ化および集約」では、照会結果内の情報の論理グループを指定します。
  - 「総合計の表示」を選択すると、選択した合計列の合計情報が表示されます。
  - 「計算列の追加」を選択すると、「計算列」ウィンドウが開きます。このウィンドウでは、照会結果に計算列を追加できます。計算列は、定義した式に基づいて動的に作成されたデータの列です。
  - 「フォーマットのリセット」を選択すると、照会結果内で選択した列に適用されているフォーマット設定が、元のフォーマット設定属性にリセットされます。
  - 「すべてリセット」を選択すると、照会結果内のすべての列に適用されているフォーマット設定が、元のフォーマット設定属性にリセットされます。
  - 「自動フィット」を選択すると、列および行の内容が自動的に収まります。
  - 「ソート」を選択すると、「ソート」ウィンドウが開きます。このウィンドウでは、複数レベルのソート基準をセットアップできます。
  - 「報告書の表示」を選択すると、エディターでアクティブな照会結果を使用して、ビジュアル報告書または標準の報告書が生成されます。
  - 「Excel シートの表示」を選択すると、Microsoft Excel が開き、Excel データ・シートに照会結果データが表示されます。
  - 「エクスポート」を選択すると、「照会結果のエクスポート」ウィザードが開きます。このウィザードでは、照会結果をファイルまたはデータベースに保存するように選択できます。

## データベース表に IXF ファイルを直接インポート

IXF ファイルの内容をデータベース表に直接インポートすることもできます。

### このタスクについて

IXF ファイルに含まれているデータをデータベース表にインポートするには、以下のようになります。

## 手順

1. 「ファイル」 > 「インポート」を選択します。「インポート」ウィザードが開きます。

2. 「表」を選択して、「次へ」をクリックします。「表のインポート」ウィザードの「表をファイル (\*.ixf, \*.xml, \*.csv, \*.txt, \*.dbf) からインポートします」ページが開きます。
3. 「ファイル名」フィールドの横の「参照」をクリックして、IXF ファイル名を入力します。
4. 「次へ」をクリックします。「表のインポート」ウィザードの「結果と宛先情報を選択します」ページが開きます。
5. 「データベース」リストからデータベースを選択します。
6. 「表の所有者」フィールドに表の所有者名を指定し、「表の名前」フィールドに表の名前を指定します。
7. 「次へ」をクリックします。「加速オプションの設定」ページが開きます。

制約事項: 「加速オプションの設定」ページが開くのは、次の条件に該当する場合のみです。

- 選択したデータベースは IDAA をサポートする DB2 z/OS データベースである。
  - 「加速を有効にする」リソース限界が有効になっている。
8. 「加速オプションの設定」ページで、ターゲットの表データをインポートする宛先を指定します。「データベースおよびアクセラレーター」オプションまたは「アクセラレーターのみ」オプションを選択した場合、使用するアクセラレーターを「アクセラレーター」リストから選択します。
  9. 「次へ」をクリックします。「表をインポートします」ウィザードの「保存オプションの設定」ページが開きます。
  10. 「既存のデータ・オプション」を指定します。以下のラジオ・ボタンを使用して、既存のデータをデータベース表に保存する方法を指定します。
    - 「既存のデータを置換」。データベース表内の既存のデータを IXF ファイルの内容で置き換えます。
    - 「既存のデータに追加」。データベース表内に既にあるデータに IXF ファイルの内容を追加します。
  11. 「終了」をクリックします。「表のインポート」ウィザードが閉じ、IXF ファイル内に含まれているデータがデータベース表に保存されます。

---

## Excel ファイルからの照会結果のインポート

Excel ファイルの内容をデータ・ソースにインポートできます。

### このタスクについて

Excel ファイルをインポートするには、以下のようになります。

### 手順

1. メインメニューから「ファイル」 > 「インポート」を選択します。「インポート」ウィザードが開きます。
2. 「Excel ファイル」を選択し、「次へ」をクリックします。「インポート」ウィザードの「Excel ファイルのインポート」ページが開きます。
3. インポートするファイルを指定するには、以下のようになります。

- a. 「ファイル名」フィールドの横の「参照」をクリックします。
  - b. 「開く」ウィンドウで「\*.xls」または「\*.xlsx」を選択します。
  4. 「シート」リストで、インポートする Excel ファイルのシートを選択します。
  5. 「最初の行番号」フィールドで、結果セットの最初の行にする Excel シートの行番号を入力します。
  6. 「最初の列番号」フィールドで、結果セットの最初の列にする Excel シートの列番号を入力します。
  7. 結果セットの行数を制限するには、「行の制限」チェック・ボックスを選択して行数を入力します。
  8. 結果セットの列数を制限するには、「列の制限」チェック・ボックスを選択して列数を入力します。
  9. Excel 文書の最初の行を結果セットの列名にする場合は、「最初の行は列名」チェック・ボックスを選択します。
  10. 「次へ」をクリックして、インポートされる Excel ファイルから表の構造を指定します。
  11. 「フィールド定義」領域で、結果セットに含める列を選択するには、「フィールド名」列の左のチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
  12. 列名を編集するには、「フィールド名」列のセルをクリックして、新しい名前を入力します。
  13. 別のデータ・タイプを指定するには、「タイプ」列でセルをクリックし、リストからデータ・タイプを選択します。使用可能なオプションは次のとおりです。
    - **INTEGER:** -2 147 483 648 から 2 147 483 647 までの符号付き整数を格納する場合に使用します。
    - **BIGINT:** -9 223 372 036 854 775 808 から 9 223 372 036 854 775 807 までの大きな符号付き整数を格納する場合に使用します。
    - **DOUBLE:** 浮動小数点付きの大きな数値を格納する場合に使用します。
    - **CHAR:** 固定長文字列を格納する場合に使用します。例えば、一般的に長さの固定された、従業員の電話番号などを格納することができます。
    - **VARCHAR:** 従業員名などの可変長文字列を格納する場合に使用します。
    - **DECIMAL:** 固定された精度やスケールの数値を格納する場合に使用します。このデータ・タイプは、高精度の値 (通貨など) に使用してください。
    - **DATE:** 日付のみを格納する場合に使用します。
    - **TIME:** 時刻のみを格納する場合に使用します。
    - **TIMESTAMP:** 日付と時刻の両方を格納する場合に使用します。
- 注: DATE、TIME、TIMESTAMP の各データ・タイプは、結果セットでの値の表示方法を定義する各種形式オプションをサポートしています。
- 注: サポートされる範囲と値の精度は、使用するデータベースによって異なる場合があります。
14. 「長さ」フィールドで、VARCHAR タイプの最大文字数を指定します。
  15. 「精度」フィールドで、DECIMAL タイプの最大総桁数を指定します。
  16. 「スケール」フィールドで、以下の最大数を指定します。

- DECIMAL タイプの小数桁数
  - TIMESTAMP タイプまたは TIMESTAMP WITH TIMEZONE タイプの秒の小数部分の桁数
17. 選択するたびに、結果セットのレイアウトがどのように変わったかを「プレビュー」ペインで追跡できます。
  18. 「終了」をクリックします。

---

## 保存済みファイルの表の内容をデータベース表にインポート

ファイルに保存した表の内容をデータベース表にインポートすることができます。

### このタスクについて

ファイルに含まれるデータをデータベース表にインポートするには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 「ファイル」 > 「インポート」を選択します。
2. 選択可能なウィザードのリストから、「表」を選択し、「次へ」をクリックします。

「表をインポートします」ウィザードの「表をファイルからインポート」ページが開きます。

3. 「ファイル名」フィールドの横の「参照」をクリックし、ファイルの名前と場所を指定します。

以下のファイル形式がサポートされています。

- \*.tab
  - \*.ctab
  - \*.txt
  - \*.xml
  - \*.ixf
  - \*.csv
  - \*.dbf
  - \*.xls
  - \*.xlsx
4. 「次へ」をクリックします。
    - 表の内容を \*.txt または \*.csv ファイルからインポートする場合は、「CSV ファイルのインポート」ページが開きます。オプションのインポートについては、224 ページの『CSV およびテキスト・ファイルからの照会結果のインポート』を参照してください。
    - \*.xls または \*.xlsx ファイルをインポートすると、「Excel ファイルのインポート」ページが開きます。オプションのインポートについては、229 ページの『Excel ファイルからの照会結果のインポート』を参照してください。

5. 「次へ」をクリックします。「結果と宛先情報を選択します」ページが開きます。
6. 「データベース」リストからデータベースを選択します。
7. 「表の所有者」フィールドに表の所有者名を指定し、「表の名前」フィールドに表の名前を指定します。
8. 「次へ」をクリックします。「加速オプションの設定」ページが開きます。

制約事項: 「加速オプションの設定」ページが開くのは、次の条件に該当する場合のみです。

- 選択したデータベースは IDAA をサポートする DB2 z/OS データベースである。
  - 「加速を有効にする」リソース限界が有効になっている。
9. 「加速オプションの設定」ページで、ターゲットの表データをインポートする宛先を指定します。「データベースおよびアクセラレーター」オプションまたは「アクセラレーターのみ」オプションを選択した場合、使用するアクセラレーターを「アクセラレーター」リストから選択します。
  10. 「次へ」をクリックします。

「表をインポートします」ウィザードの「保存オプションの設定」ページが開きます。

11. 「既存のデータ・オプション」を指定します。

ラジオ・ボタンを使用して、既存のデータをデータベース表に保存する方法を指定します。

- 「既存のデータを置換」を選択すると、データベース表の既存のデータがインポート・ファイルの内容で置き換えられます。
- 「既存のデータに追加」を選択すると、インポート・ファイルの内容がデータベース表の既存のデータに追加されます。

12. 「終了」をクリックします。

## タスクの結果

「表をインポートします」ウィザードが閉じ、ファイルに含まれるデータがデータベース表に保存されます。

---

## dynamart としてのデータ・オブジェクトの保存

dynamart は、結果セットをそのすべての変更も含めて保存するための形式です。

### このタスクについて

データ・ファイルを dynamart として保存すると、そのファイルへのリンクが dynamart 内に保存されます。dynamart を開くと、dynamart によって、リンクされたソース・ファイルからデータが再ロードされ、ソース・ファイルが変更または置換されていた場合は、結果セットが更新されます。「dynamart 設定」ウィンドウでは、ソース・オブジェクトを変更したり、特定の dynamart のデータ更新を非アクティブにしたりすることができます。



照会を dynamart として保存すると、照会の結果セットおよび操作が dynamart 内に保存されます。 dynamart を開くと、dynamart によって結果セットが再ロードされ、フィルター処理または計算列の追加などのすべてのカスタム変更が自動的に適用されます。

データ・オブジェクトを dynamart として保存するには、以下のようになります。

### 手順

1. dynamart として保存するデータ・ファイルがアクティブ・ウィンドウで開いていることを確認します。分析照会またはビジュアル照会を操作する場合、dynamart として保存する前にそれを実行します。
2. メインメニューから「ファイル」 > 「保存先」を選択します。
3. dynamart を保存する場所に応じて以下のいずれかのオプションを選択します。
  - リポジトリに保存
  - ファイルに保存
4. 「リポジトリに保存」ウィンドウで、親項目、ファイル名、およびコメントを指定します。
5. 「ファイルに保存」ウィンドウで、ファイルを保存するディレクトリとそのファイル名を指定します。「参照」をクリックして、宛先ディレクトリを検索することができます。
6. 「タイプ」リストから、以下のオプションのいずれかを選択します。
  - 「**dynamart**」: ビジュアル照会、CSV、DBF、IXF、TXT、または XML ファイルを保存します。
  - 「複合 **dynamart**」: 分析照会を保存します。
7. 「終了」をクリックして、dynamart ファイルを保存します。

## dynamart でのソース・データ・ファイルの管理

dynamart を保存したら、ソース・データ・オブジェクトへのリンクを変更したり、完全に削除したりすることができます。

### このタスクについて

データ・ファイルを dynamart として保存すると、このデータ・ファイルへのリンクおよびその最終変更時刻が dynamart 内に保存されます。この dynamart を開くと、QMF によって、リンクされたソース・ファイルからデータが再ロードされ、ソース・ファイルが変更または置換されていた場合は、結果セットが更新されます。

「dynamart 設定」ウィンドウでは、ソース・オブジェクトを変更したり、特定の dynamart のデータ更新を使用不可に設定したりすることができます。

ソース・データ・ファイルを置換するには、またはデータ更新を使用不可に設定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「結果」 > 「**dynamart** 設定」を選択します。

2. 「dynamart 設定」ウィンドウの「データ・ファイル」フィールドに、ソース・ファイルとして使用するデータ・ファイルの名前と場所を指定します。「参照」をクリックすると、ファイルを検索できます。
3. リンクされたデータ・ファイルが変更されたときに結果セットを更新するには、「ファイルの変更時に **dynamart** を更新」チェック・ボックスを選択します。
4. ソース・データ・ファイルのリンクを解除するには、「ファイルの変更時に **dynamart** を更新」チェック・ボックスをクリアします。この場合、データ・ファイルが置換または更新されていても、必ず **dynamart** に元のデータが表示されます。
5. 「OK」をクリックして、「dynamart 設定」ウィンドウを閉じます。

関連タスク:

32 ページの『dynamart ソース・ファイルのルート・ディレクトリーの場所の設定』

dynamart ソース・データ・ファイルが格納されるルート・ディレクトリーの場所を指定できます。

---

## 照会結果の **LOB** データでの作業

ラージ・オブジェクト・データを取得する場合、照会結果列に組み込まれている **LOB** データを表示するために使用するアプリケーションを特定する必要があります。

### このタスクについて

大量のデータの取得および保存には、かなり時間がかかる場合があります。過度のリソース消費を避けるために、ラージ・オブジェクト・データをどの程度ユーザーが取得および保存できるかに対しては、一定の制限が課されます。**LOB** データを取り出したり保存する機能は、**QMF** 管理者によってユーザー ID またはグループに設定された **LOB** オプションのリソース限界に基づいて決定されます。

**LOB** データを取得または保存するには:

### 手順

1. **LOB** データが保管されているデータベース表を呼び出す照会またはプロシージャを実行します。
2. **LOB** データをデータ・ソースから検索します。**LOB** データを含む列の各セルの内容は、ユーザー ID に設定された **LOB** のリソース限界によって、以下のように表示の仕方が異なります。
  - 「**LOB** 検索オプション」リソース限界が「**LOB** データを自動的に検索する」である場合、すべての **LOB** データが使用可能であり、照会結果に表示されます。

このオプションが選択された場合は、すべての **LOB** 列のすべての **LOB** データがデータベースからローカル・コンピューターにプルされます。実際の **LOB** データは、グリッドや報告書には表示されません。代わりに、**LOB** データへのポインターが表示されます。

注: このオプションが選択されると、ローカル・コンピューター上の大量のリソースが消費される可能性があります。

- 「**LOB 検索オプション**」リソース限界が「要求時に **LOB** データを検索する」である場合、LOB データが含まれている列の各セルは、LOB locator というラベルで識別されます。LOB データの取得を開始する必要があります。
3. LOB データの取得を開始するには、LOB locator というラベルが付けられたセルをダブルクリックします。「LOB タイプの関連付け」ウィンドウが開きます。また、LOB データが含まれている照会結果列の見出しセルを右クリックしてポップアップ・メニューから「**LOB タイプの関連付け**」を選択すれば、「LOB タイプの関連付け」ウィンドウを開くこともできます。
  4. 「LOB タイプの関連付け」ウィンドウから、照会結果列の各セルに含まれている LOB データのタイプを識別します。LOB データ・ファイルを開くために使用されるアプリケーションは、選択したファイル拡張子に基づいて決定されます。以下のいずれかを選択できます。
    - 照会結果列の各セルに含まれる LOB データ・ファイルのタイプを指定するには、「ファイル拡張子」を選択します。使用可能な拡張子のドロップダウン・リストから選択します。このオプションにより、選択した拡張子は、照会結果列内のすべてのセルに適用されます。
    - どのアプリケーションを照会結果列内の各 LOB データ・セルにマップするかを個別に指定するには、「マッピング列」を選択します。ドロップダウン・リストから、LOB データのファイル拡張子情報を含む照会結果内の列を選択します。「マッピング」をクリックします。「ファイル拡張子マッピング」ウィンドウが開きます。
      - a. 「表のマッピング」には、以下のフィールドがあります。
        - 「マッピング値」: マッピング列内に存在する固有の各データ・タイプをリストします。
        - 「ファイル拡張子」: 固有のデータ・タイプのファイル拡張子、および LOB データを開くために使用されるアプリケーションが入ります。
      - b. 「ファイル拡張子」フィールドをクリックします。固有のデータ・タイプを表すファイル拡張子を入力します。例えば、照会結果内のマッピング列にテキスト・ストリング「ビットマップ」が含まれている場合、ファイル拡張子として .bmp と入力します。さらに、ドロップダウン・リストから定義済みのファイル拡張子と、そのタイプのファイルを開く際に使用する関連付けしたアプリケーションを選択することもできます。
      - c. すべてのファイル拡張子を指定してから、「**OK**」をクリックします。「LOB タイプの関連付け」ウィンドウに制御が戻ります。
  5. 「**OK**」をクリックします。「列の LOB タイプの関連付け」ウィンドウが閉じます。
  6. LOB データを取得して表示するには、LOB データのセルをダブルクリックします。LOB データが、指定されたアプリケーションで開きます。照会結果グリッドで、セルのラベルが LOB locator から LOB value に変わり、LOB データが

取得されたことが示されます。「すべての LOB 値の検索」を選択すると、照会結果列に含まれているすべてのラージ・オブジェクト・データ・ファイルを取得できます。

## LOB のリソース限界オプションのオーバーライド

QMF アドミニストレーターがユーザー ID の権限を付与した場合、リソース限界グループに設定された LOB のリソース限界をオーバーライドすることができます。

### このタスクについて

LOB 検索のリソース限界をオーバーライドするには:

#### 手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。
2. 「LOB」をクリックして、LOB を取り出すためのデフォルトのオプションを変更する。
3. 「可能な場合に LOB オプションをオーバーライドする」チェック・ボックスにチェック・マークを付け、LOB オプションを変更します。このチェック・ボックスが選択できない場合、ご自身のユーザー ID には、LOB リソース限界をオーバーライドする権限がありません。

---

## 照会結果のセルの内容の表示および編集

QMF for Workstation を使用している場合は、「ズーム」オプションを使用して、照会結果のセルの内容を 16 進形式または 2 進形式で表示できます。

### このタスクについて

このトピックでは、以下を行うための方法について説明します。

- 結果が読み取り専用の場合に、照会結果セルの内容を表示します。ステップ 1 を参照してください。
- 結果が書き込み可能 (読み取り専用ではない) の場合に、照会結果セルの内容を表示および編集します。ステップ 2 を参照してください。

#### 手順

1. 結果が読み取り専用の場合に照会結果セルの内容を表示するには、以下のようになります。
  - a. 照会結果のセルを右クリックします。ポップアップ・メニューから「ズーム」を選択します。「ズーム」ウィンドウが開きます。
  - b. 「CCSID」フィールドは、選択された照会結果のセルにデータを保存するために使用されたコード・ページを示します。
  - c. 選択された照会結果のセルの現行値は、「セル値」フィールドに表示されません。
  - d. 「拡張」をクリックすると、ダイアログが拡張されて追加フィールドが表示され、データが 16 進形式または 2 進形式で表示されます。数値データが含まれているセルの場合は、このボタンは使用不可になっています。

- e. 「16 進数」を選択すると、データが 16 進形式で表示されます。「2 進数」を選択すると、データが 2 進形式で表示されます。「ズーム」ウィンドウには、データのサンプルが、選択したフォーマットで表示されます。
  - f. 「キャンセル」を選択して、「編集」ウィンドウを閉じます。
2. 結果が書き込み可能 (読み取り専用ではない) の場合に照会結果セルの内容を表示および編集するには、次のようにします。
- a. 照会結果のセルを右クリックして、ポップアップ・メニューから「編集」を選択します。

「ズーム編集」ウィンドウが開きます。

「CCSID」フィールドは、選択された照会結果のセルにデータを保存するために使用されたコード・ページを示します。

選択された照会結果のセルの現行値は、「セル値」フィールドに表示されます。「セル値」フィールドは編集可能です。

- b. 必要な変更を行い、「OK」を選択して適用します。
- c. 「拡張」をクリックすると、ダイアログが拡張されて追加フィールドが表示され、データが 16 進形式または 2 進形式で表示されます。

数値データが含まれているセルの場合は、このボタンは使用不可になっています。

- d. データを 16 進形式で表示する場合は「16 進数」を選択し、データを 2 進形式で表示する場合は「2 進数」を選択します。

「ズーム編集」ウィンドウに、データのサンプルが、選択したフォーマットで表示されます。

- e. 「キャンセル」を選択して、「ズーム編集」ウィンドウを閉じます。

照会の基になっている表でセルを編集するには、表エディターを使用できます。

---

## 複数の結果セットの表示

複数の照会結果セットが戻される可能性のある 2 つの状況があります。最初のインスタンスは、ストアード・プロシージャを実行した結果です。2 番目のインスタンスは、複数の SQL ステートメントを持つ単一の照会を実行した結果です。

### このタスクについて

すべての結果セットはエディター・ウィンドウに戻され、番号 1 で始まる索引番号が割り当てられます。照会結果の各セットは、照会エディター・ツールバー上のドロップダウン・リストで識別されます。特定の結果セットを表示するには、それをドロップダウン・リストから選択します。

---

## 「結果」メニュー

「結果」メニューは、照会の結果が戻され、それがエディター内のアクティブ・コンテンツである場合に使用可能になります。

使用可能なメニュー・コマンドは以下のとおりです。

### すべて検索

すべての照会結果データを完全に検索するには、「すべて検索」を選択します。大量のデータを検索するとき、特に指定がなければ、最初の 100 データ行のみが検索されます。

### フォント

「レイアウト・プロパティ」ウィンドウの「フォント」ページが開き、照会結果内で選択されているもののフォント属性を表示、変更することができます。

### フォーマット

「レイアウト・プロパティ」ウィンドウの「フォーマット」ページが開き、照会結果内で選択されている列のフォーマット・オプションを表示、変更することができます。

### グループ化および集約

「グループ化および集約」メニュー項目は、照会結果内の情報の論理グループを指定する場合に使用します。使用可能なオプションは以下のとおりです。

- 選択されている列から集約または要約フォーマットを削除する場合は、「集約なし」を選択します。
- 選択されている列を、要約情報を付けずに照会結果の一番上にまとめる場合は、「トップ・グループ」を選択します。
- 選択されている列を、要約情報を付けずに照会結果の左側にまとめる場合は、「サイド・グループ」を選択します。
- 列の値の総数を要約する場合は、「カウント」を選択します。
- 列の最初の値を示す要約行を作成する場合は、「最初」を選択します。
- 列の最後の値を示す要約行を作成する場合は、「最後」を選択します。
- 列の最大値を示す要約行を作成する場合は、「最大」を選択します。
- 列の最小値を示す要約行を作成する場合は、「最小」を選択します。
- 列の値の合計を示す要約行を作成する場合は、「合計」を選択します。
- 列の値を要約と一緒に累計として表示する場合は、「累計」を選択します。
- 列の値の平均を示す要約行を作成する場合は、「平均」を選択します。
- 列の値の標準偏差を示す要約行を作成する場合は、「標準偏差」を選択します。
- 列の値をグループ合計のパーセンテージ値として表示し、そのパーセンテージの合計を示す合計行も表示する場合は、「グループのパーセンテージ」を選択します。

- 列の値を列合計のパーセンテージ値として表示し、そのパーセンテージの合計を示す合計行も表示する場合は、「合計のパーセンテージ」を選択します。
- 列の値をグループ合計に対する累積パーセンテージ値として表示し、パーセンテージの合計を示す要約行も表示する場合は、「グループの累積パーセンテージ」を選択します。
- 列の値を列合計に対する累積パーセンテージ値として表示し、パーセンテージの合計を示す要約行も表示する場合は、「合計の累積パーセンテージ」を選択します。

#### 要約の表示

選択されているトップ・グループ列またはサイド・グループ列の合計情報を表示します。

#### 総合計の表示

選択されている合計列の合計情報を表示します。

#### ドリルダウン

トップ・グループまたはサイド・グループの詳細情報を拡張します。

#### ドリルアップ

トップ・グループまたはサイド・グループの詳細情報を縮小します。

#### 計算列を追加

「計算列」ウィンドウを開きます。ここで、計算列を照会結果に追加することができます。計算列は、定義した式に基づいて動的に作成されたデータの列です。

#### フォーマットのリセット

照会結果内で選択されている列に適用されているフォーマットを、元のフォーマット属性にリセットします。

#### すべてリセット

照会結果内のすべての列に適用されているフォーマットを、元のフォーマット属性にリセットします。

#### 自動フィット

「自動フィット」では、次のいずれかの内容を自動的に合わせます。

- 「選択列」を選択して、選択されている列の内容を同じ列サイズに自動的に合わせます。
- 「すべての列」を選択して、照会結果内のすべての列の内容を同じ列サイズに自動的に合わせます。
- 「すべての行」を選択して、照会結果内のすべての行の内容を同じ行サイズに自動的に合わせます。
- 「すべて」を選択して、照会結果全体の内容を自動的に合わせます。

#### ソート

「ソート」ウィンドウを開きます。ここで、ソート条件の複数のレベルを設定することができます。

#### 移動

「次の行へ移動」ウィンドウが開き、特定の行にナビゲートできます。

#### 検索

特定のストリングについて照会結果の検索を開始します。「検索」ウィンドウで検索ストリングを指定します。

## 報告書の表示

エディターでアクティブになっている照会結果を使用してビジュアル報告書または標準報告書が生成されます。照会結果の既存フォーマットまたはより単純なデフォルト・フォーマットに基づいて報告書を生成することができます。

## Excel シートの表示

Microsoft Excel を開いて、照会結果データを Excel データ・シートに表示します。(QMF for Workstation のみ)。いくつかの結果セットとともに照会をエクスポートすると、各結果セットが別々のワークブックに表示されます。

注: 列に切れ目と取扱コードがあるリレーショナル照会結果の場合、Excel ピボット表が自動的に作成されます。この機能の処理時間は、データ量に応じて長くなります。

## すべての LOB 値の検索

照会結果セット内のすべての LOB 値が検索されます。

## EXPORT

「照会結果のエクスポート」ウィザードを開きます。ここで、照会結果をファイルまたはデータベースに保存することができます。

## 図表の表示

編集機能で開かれている照会結果セットから図表を生成します。

---

## 照会結果のソート

「ソート」ダイアログを使用して、最大 3 つのデータ列で照会結果をソートできます。

### このタスクについて

照会結果のソート対象となる列を指定するには:

### 手順

1. 使用可能なウィンドウに照会結果が表示されている状態で、「結果」 > 「ソート」を選択して、「ソート」ウィンドウを開きます。
2. 「第 1 ソート条件」のフィールドを使用して、照会結果のソートに使用される最初の列を指定します。「列」リストから列を選択し、「ソートのタイプ」リストでソートのタイプを指定し、さらに「昇順」か「降順」を選択してソート順を指定する必要があります。
3. オプションで、照会結果のソートに使用される 2 番目と 3 番目の列を指定できます。「第 2 ソート条件」と「第 3 ソート条件」のフィールドを使用して、列、ソートのタイプ、および各追加列のソート順を指定します。
4. デフォルトでは、「ロケール条件に基づいてストリングをソート」チェック・ボックスはクリアされた状態です。つまり、Unicode のコード・ポイント値に従った文字の比較に基づいて照会結果がソートされるということです。「ロケール条件に基づいてストリングをソート」チェック・ボックスを選択すると、現行ロケールに対して定義された各国語アルファベットでの文字の位置に基づいて照会結果がソートされるようになります。



5. 「OK」をクリックします。照会結果がソートされ、「ソート」ウィンドウが閉じます。

## タスクの結果

DSQQW\_QUERY\_PRESERVE\_SORT グローバル変数がソート順を保存する (1) ように設定されている場合、指定したソート順は照会内に保管され、次に照会を実行するときに使用されます。指定したソート順を適用せずに照会を再実行する必要がある場合は、DSQQW\_QUERY\_PRESERVE\_SORT グローバル変数をゼロに設定してから (ソート順は保存されません)、照会を実行します。指定したソート順は「ソート」ダイアログからいつでも適用できます。

---

## 照会結果セットおよび即時報告書の印刷オプションの指定

QMF for Workstation では、エディター・ウィンドウで開いたビジュアル照会または即時報告書を印刷するときに使用する「ページ設定」オプションを指定できます。

### このタスクについて

照会結果セットまたは即時報告書の印刷ページの外観を制御するには、以下のようになります。

### 手順

1. エディター・ウィンドウにアクティブ・オブジェクトが表示されている状態で、「ファイル」 > 「ページ設定」を選択して「ページ設定」ウィンドウを開きます。
2. オブジェクトに適用する印刷オプションを指定します。

オプションのセットは、印刷するオブジェクトのタイプに応じて変わります。次の表に、照会結果セットおよび即時報告書に指定できるページ・オプションを示します。

表 28. 照会結果セットおよび即時報告書の印刷オプション

照会結果セット	即時報告書
プリンター・パラメーターおよびページ・パラメーター (タイプとサイズ、用紙方向とマージンを含む)	用紙パラメーター (タイプとサイズ、用紙方向とマージンを含む)
見出しと脚注のテキスト	脚注のテキスト
行番号、列番号、列見出し、罫線、集約タイプ、ページ見出し、およびページ脚注を印刷するかどうか	行番号、列番号、列見出し、およびページ脚注を印刷するかどうか
ページ順序	固定グループ
固定サイド・グループおよび固定トップ・グループ	

注: 特別なコードを使用すると、特定のデータを見出しフィールドおよび脚注フィールドに挿入できます。

3. 指定した値をデフォルトにするには、「デフォルトとして設定」をクリックします。
4. 「OK」をクリックして、「ページ設定」ウィンドウを閉じます。印刷されるオブジェクトの外観を制御するために、指定したオプションが使用されます。

## ページ見出しおよびページ脚注に特定のデータを挿入するためのコード

特別なコードを使用して見出しまたは脚注に特定のデータを挿入できます。

ビジュアル照会結果セット、または即時報告書を印刷するときに、文書名や合計印刷ページ数などのデータをページのヘッダーまたは脚注に追加したい場合があります。そのために、下の表で説明されている特別なコードを使用することができます。

表 29. 特定のデータを挿入するためのコード

コード	説明
&f	オブジェクトの名前を印刷します。
&n	現在のページ番号を印刷します。
&N	総ページ数を印刷します。
&d	現在の日付を印刷します。
&t	現在の時刻を印刷します。
&<	最初の印刷ページのページ番号を印刷します。
&>	最後の印刷ページのページ番号を印刷します。
&&	単一のアンパーサンドを印刷します。
&	見出しまたは脚注の左、中央、および右の部分の境界を定義します。

### 例

&  &n	現在のページ番号を見出し (脚注) の中央に印刷します。
&  &  &d	現在の日付を見出し (脚注) の右側に印刷します。
&f &  &  &d	オブジェクト名を見出し (脚注) の左側に印刷し、現在の日付を見出し (脚注) の右側に印刷します。

## 通常保存方式および高速保存方式を使用したデータの保存

照会結果のデータをデータベースに保存する際、データの保存に「通常保存」方式を使用するか「高速保存」方式を使用するかを選択することができます。

照会結果データを「通常保存」方式で保存すると、使用しているインターフェース (QMF for Workstation または QMF for WebSphere) が、得られた照会結果を、

データの行ごとに別個の SQL INSERT ステートメントを使用してデータベースに保存します。このタイプの保存では、大量のデータをデータベースに戻すオーバーヘッドのためにパフォーマンス・コストが高くなります。

照会結果のデータを「高速保存」方式で保存する場合は、すべての処理がデータベースで行われます。この方式では、QMF インターフェースとデータベースの間でさらにデータのやり取りが行われることはありません。QMF インターフェースはオリジナルの照会に SQL を追加し、照会が再実行されて、データは指定された表に直接保存されます。大量のデータを保存するときには、「高速保存」の処理を使用して照会結果データを保存すると、パフォーマンスが大幅に向上します。

## 高速保存方式を選択する

「高速保存」方式を使用して照会結果データを保存することを選択した場合は、データベースで実行される照会にすべての ORDER BY 節が残ります。ORDER BY 節を保持することによって、照会結果データの行の順序が保持されます。

DB2 for z/OS システムの一部のインスタンスでは、ORDER BY 節を保持していると SQL エラーが発生することがあります。このエラーは、QMF インターフェースが照会の前に INSERT ステートメントを付加することによって発生します。これによってオリジナルの照会は従属の照会となり、ORDER BY 節を持つことが許可されなくなってしまう。

例えば、次の照会を入力したとします。

```
Select [Columns] from [SourceTable]
Order By [Column]
```

照会はエラーを戻すことなく実行されます。次に、ユーザーは高速保存モードを使用してこの照会を特定の表 (例えば DestTable) に保存することを選択します。QMF インターフェースは、次のように照会の前に 1 つの行を付加します。

```
Insert into [DestTable]
Select [Columns] from [SourceTable]
Order By [Column]
```

オリジナルの照会が従属の照会となり、ORDER BY 節を持つことが許可されなくなるため、ある特定の DB2 for z/OS システムにおいては、この新しい SQL は無効になってしまいます。

## 通常保存方式または高速保存方式を設定する

通常保存方式または高速保存方式を設定するには、以下のようになります。

1. エディター・ウィンドウに照会結果を表示し、「結果」メニューから「エクスポート」を選択します。「照会結果のエクスポート」ウィンドウが表示されます。「照会結果のエクスポート」ウィンドウから「データベース」を選択します。「エクスポートの宛先」フィールドに値を入力します。「次へ」をクリックします。「保存オプションの設定」ページが開きます。
2. 以下のいずれかを選択します。
  - 通常保存方式を選択するには、「通常 - 検索したデータをデータ・ソースに送り戻して保存 (行ごとに INSERT ステートメントを使用)」をクリックします。

- すべての ORDER BY 節を保持する高速保存方式を選択するには、「高速 - データ・ソースで照会を再実行することによりデータ・ソースに結果を直接保存」をクリックします。
- ORDER BY 節を使用せずに照会を実行する高速保存方式を選択するには、「照会を再実行する前に元の SQL から ORDER BY 節を除去」チェック・ボックスを選択します。このオプションは、ORDER BY 節を削除しても返されるデータに影響しない場合に使用してください。

## ORDER BY 節を除去するオプションを指定して高速保存方式を選択する

「高速保存」方式を使用して照会結果データを保存することを選択した場合は、照会をデータベースに送信する前に QMF インターフェイスにすべての ORDER BY 節を照会から除去させるオプションが選択できます。243 ページの『高速保存方式を選択する』と同じ例を使用すると、以下の照会が送信されます。

```
Insert into [DestTable]
Select [Columns] from [SourceTable]
```

ほとんどのケースでは、ORDER BY 節を除去しても、保存される照会結果データには影響はありません。ただし一部のケースで、照会から ORDER BY 節を除去したときに、保存される結果セットに影響が生じることがあります。これは、オリジナルの照会で、戻す行の数が制限されている場合に起こります。例えば、以下の照会から ORDER BY 節を除去すると、結果が変わります。

```
select x,y,z from table
order by x
fetch first 10 rows only
```

## プロシージャに通常保存方式または高速保存方式を設定する

グローバル変数 DSQQW\_FST\_SV\_DATA を使用して、プロシージャ照会結果データの保存方式として通常保存方式または高速保存方式を設定できます。

DSQQW\_FST\_SV\_DATA のデフォルト値は 0 です。

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。QMF フォルダーを展開します。「グローバル変数」を選択します。「グローバル変数」ウィンドウが開きます。
2. 「グローバル変数」ウィンドウから DSQQW\_FST\_SV\_DATA 変数を選択します。
3. 以下を選択または指定します。
  - 0 - 通常保存
  - 1 - ORDER BY 節を除去して高速保存
  - 2 - ORDER BY 節を保持して高速保存

以下のいずれかの方法でグローバル変数を設定することもできます。

- QMF インターフェイスで、グローバル・プロシージャの設定コマンドを使用します。例えば、SET GLOBAL ( DSQQW\_FST\_SV\_DATA = 2 ) のようにします。
- また、いずれかの QMF インターフェイスの API の SetGlobalVariables() を使用して、DSQQW\_FST\_SV\_DATA を 2 に設定することもできます。

---

## 「結果」タブを「結果」編集ビューに変換


QMF オブジェクトの編集時に、処理された結果が動的に表示されるように「結果」タブをデタッチすることができます。

### このタスクについて

以下のオブジェクトの「結果」タブをデタッチすることができます。


- 分析照会
- DBF、CSV、IXF、または XML ファイル
- Dynamart
- 予測
- ビジュアル照会

「結果」タブをビューに変換するには、以下の 3 つの方法を使用します。

1. メインメニューから、「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「その他」 > 「一般」 > 「結果」を選択します。
2. メインメニューから、「照会」 > 「結果ビューのデタッチ」または「予測」 > 「結果ビューのデタッチ」を選択します。
3. 「結果ビューのデタッチ」 () ツールバー・ボタンをクリックします。

「結果」ビューが別個のビューで使用可能になります。

「結果」ビューをタブに変換するには、以下のようになります。

1. 「結果」ビューを閉じます。
2. メインメニューから、「照会」 > 「結果ビューのデタッチ」または「予測」 > 「結果ビューのデタッチ」を選択します。
3. 「結果ビューのデタッチ」 () ツールバー・ボタンをクリックします。

「結果」ビューがタブに変換されます。



---

## 第 10 章 図表での作業

照会から取得したデータをグラフィカルに表現するために図表を使用することができます。

### このタスクについて

ビジュアル照会の単一の結果セットに対して複数の異なる図表を作成できます。

以下のトピックでは、図表を作成およびカスタマイズする方法について説明します。

---

### 図表の作成

「新規図表」ウィザードを使用すれば、照会結果セットから図表を作成できます。


#### 始める前に

照会を実行し、照会結果セットを「結果」タブで開いておく必要があります。

#### このタスクについて

図表を作成するには、以下のアクションを実行します。

#### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「新規図表」ウィザードを開きます。
  - a. メインメニューから「結果」 > 「図表の表示」を選択し、作成する図表のタイプを指定します。次に手順のステップ 3 に進みます。
  - b. 「図表の表示」 () ツールバー・ボタンをクリックします。
2. 「図表タイプ」ページで図表のタイプを指定します。図表タイプについて詳しくは、248 ページの『図表タイプ・オプションの指定』トピックを参照してください。「次へ」をクリックします。
3. 「データ系列」ページで、図表のデータ・ポイントを生成するために使用される結果セットの列を指定します。詳しくは、249 ページの『データ系列オプションの指定』トピックを参照してください。「次へ」をクリックします。
4. 「形式」ページで、図表のビジュアル出力を定義するオプションを指定します。詳しくは、249 ページの『フォーマット・オプションの指定』トピックを参照してください。
5. 「終了」をクリックして「新規図表」ウィザードを閉じ、作成した図表を表示します。
6. ビジュアル照会結果から作成した図表を除去するには、259 ページの『表示モードの管理』トピックを参照してください。

## 図表タイプ・オプションの指定

「新規図表」ウィザードの「図表タイプ」ページで、図表を表示する方法を指定できます。「図表タイプ」オプションは、図表のタイプおよび表示モードのビジュアル・フォーマットを決定します。

### このタスクについて

図表タイプ・オプションを指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「図表タイプ」リストで、図表に必要な表示モードを選択します。選択可能なオプションは以下のとおりです。

- 柱 – データ・ポイントは垂直柱で表されます。
- 棒 – データ・ポイントは水平棒で表されます。
- 線 – データ・ポイントは、相互接続された線を使用して X 軸と Y 軸の値によって示される位置に作図されます。
- 面 – データ・ポイントは、折れ線グラフと同様に作図されます。ただし、データ系列と X 軸の間にある領域が指定の色で塗りつぶされます。
- 円 – データ・ポイントは、円を構成する扇形として表示されます。
- 散布図 – データ・ポイントは、ユーザーが構成できるデータ記号を使用して、離散ポイントとして作図されます。
- バブル – データ・ポイントは、球形データ記号を使用して作図されます。それぞれの記号は、式や列の値に応じてサイズ変更できます。
- 速度計 – データ・ポイントは、ダイヤル上のポイントとして表示されます。

また、表グリッドにデータ・ポイントを表示する場合は、「グリッド」モードも選択できます。

2. 「ディメンション」リストで、必要なディメンションを選択します。選択可能なバリエーションは以下のとおりです。

- **2D** – 図表はフラットな 2 次元オブジェクトとして表示されます。これは、すべての図表タイプに対して選択できます。
- 深さのある **2D** – 図表は、データ・ポイントが 3 次元で表示された 2 次元オブジェクトとして表示されます。これは、「柱」、「棒」、「面」、および「円」の各図表タイプに対して選択できます。

注: 積み重ね面グラフでは、「深さのある **2D**」ディメンションはサポートされていません。

3. 図表タイプに「柱」、「棒」、または「線」を選択した場合は、必要なサブタイプを選択します。使用可能なオプションは以下のとおりです。

- 横並び
- 積み重ね
- 積み重ねパーセント



## データ系列オプションの指定

「新規図表」ウィザードの「データ系列」ページで、図表のデータ・ポイントを生成するために使用される結果セットの列を指定できます。

### このタスクについて

図表のデータ系列オプションを指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. カテゴリー軸を取り込む列を指定するには、「結果セット」ツリーから列を選択して「カテゴリーに追加」をクリックします。「系列」ツリーの「カテゴリー軸」ノードに列が追加されます。
2. 値として表示される列を指定するには、「結果セット」ツリーから列を選択して「値に追加」をクリックします。「系列」ツリーの「値」ノードに列が追加されます。
3. 「集約」ドロップダウン・リストから値列の集約タイプを選択します。有効なオプションは以下のとおりです。
  - 集約なし
  - カウント
  - 最初
  - 最後
  - 最大
  - 最小
  - 合計
  - 平均
  - 標準偏差
4. 「公式として計算」チェック・ボックスを選択したりクリアしたりして、値列の集約方法を指定します。「公式として計算」チェック・ボックスは、計算列を値として使用する場合にのみ選択できます。計算列に指定した式が集約の公式として使用されます。

「公式として計算」チェック・ボックスを選択した場合は、計算列 (すなわち値列) に対してデータを提供する列のフィールドが最初に集約されます。この公式では、結果値を計算するために、すでに集約されたフィールド値が引数として使用されます。

「公式として計算」チェック・ボックスをクリアした場合は、定義済みの公式によって値列フィールドが個別に計算されます。この計算が終わると、結果値を計算するために、それらのフィールドが集約されます。

5. 「系列」ツリーから列を削除するには、列を選択して「削除」をクリックします。削除された列は、「結果セット」ツリーに再び追加されます。

## フォーマット・オプションの指定

図表オブジェクトのビジュアル・フォーマットを決定するには、図表フォーマット・オプションを指定します。

## このタスクについて

「新規図表」ウィザードの「フォーマット」ページで、系列オプションと図表域オプションを指定できます。

系列オプションは、図表に表示されるカテゴリ軸と値軸の系列、およびそれらのフォーマット方法を決定するものです。

図表域オプションは、図表オブジェクトのビジュアル・フォーマット (図表タイトル、凡例、図表域カラー・スキームなど) を決定するものです。

### 「系列」図表フォーマット・オプションの指定

「系列」オプションは、図表に表示するカテゴリ軸および値軸の系列と、これらのフォーマット設定方法を決定します。

## このタスクについて

「系列」図表形式オプションを指定または編集するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページにあるツリーで「系列」を選択します。「系列」オプションが表示されます。
2. 図表のデータ・ポイントの色分けを値系列に従って行うか、カテゴリに従って行うかを、「色分けの基準」リストで指定します。
3. 図表に値系列の 1 つを含めるか除外するには、「可視」列のチェック・ボックスを選択するかクリアします。

### 「カテゴリ」図表フォーマット・オプションの指定

「カテゴリ」図表フォーマット・オプションは、カテゴリ軸に沿って図表データ・ポイントを表示する方法を制御します。

## このタスクについて

「カテゴリ」図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページにあるツリーで「カテゴリ」を選択します。「カテゴリ」オプションが表示されます。
2. カテゴリ軸に沿ったデータ・ポイントをソートするために使用する一連のデータを「順序」リストで指定します。
3. 「順序」リストで「値」を指定した場合、使用する値列を選択します。
4. カテゴリ軸に沿ったデータ・ポイントのソートを昇順にするのか降順にするのかを「順序」リストで指定します。
5. カテゴリ軸に沿ったデータ・ポイントの表示を制限するために使用するカットオフのタイプを「タイプ」リストで選択します。有効なオプションには以下があります。
  - 「カットオフなし」 - カテゴリ軸データ・ポイントを制限するためにカットオフは使用されません。

- 「項目番号」 - 指定した数のデータ・ポイントのみが表示されます。
  - 「データ値 (より小さい)」 - 指定した値より大きい値を含む行のみが表示されます。
  - 「データ値 (より大きい)」 - 指定した値より小さい値を含む行のみが表示されます。
  - 「パーセント (より小さい)」 - 指定したパーセンテージのデータ範囲より大きい値を含む行のみが表示されます。
  - 「パーセント (より大きい)」 - 指定したパーセンテージのデータ範囲より小さい値を含む行のみが表示されます。
6. カットオフを決定するために使用する値列を「値系列」リストで指定します。
  7. カットオフを決定するために使用する値を「値」フィールドで指定します。
  8. 除外したデータ・ポイントを可視にするには、「可視」チェック・ボックスを選択します。
  9. 除外したデータ・ポイントとともに表示されるラベルを「ラベル」フィールドで指定します。

### 「値 (Y) 系列」図表フォーマット・オプションの指定

「値 (Y) 系列」図表フォーマット・オプションは、値系列軸が表示される方法を制御します。

#### このタスクについて

「値 (Y) 系列」図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページにあるツリーで「値 (Y) 系列」を選択します。「値 (Y) 系列」オプションが表示されます。
2. 「タイトル」フィールドに値系列軸のタイトルを指定します。
3. 値系列軸のタイトルを表示するには、「可視」チェック・ボックスを選択します。
4. 「色」フィールドに値系列データ・ポイントの色を指定します。
5. 「値 (Y) 系列」ノードを展開して、「ラベル」を選択します。
6. 値系列軸のラベル・オプションを指定します。

#### 関連タスク:

254 ページの『「ラベル」図表フォーマット・オプションの指定』

「ラベル」図表フォーマット・オプションは、軸のラベルを表示するかどうか、およびラベルのフォーマット設定方法を制御します。

### 「図表域」図表フォーマット・オプションの指定

「図表域」図表フォーマット・オプションは、図表の領域が表示される方法を制御します。

#### このタスクについて

「図表域」図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようになります。

## 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページにあるツリーで「図表域」を選択します。「図表域」オプションが表示されます。
2. 図表域の背景色を「背景」フィールドで指定します。
3. 図表域の周囲の枠取りを表示するには、「可視」チェック・ボックスを選択します。
4. 円グラフの図表プロパティを編集する場合、「範囲」領域で「自動」チェック・ボックスを選択して、複数の円グラフのためにスペースを自動的に作成します。円グラフの「範囲」プロパティは、個々の円グラフが占める図表域の比率を制御します。「自動」チェック・ボックスをオンにすると、図表域内の個々の円グラフはどれも重なり合いません。
5. 「自動」チェック・ボックスをクリアする場合、円グラフが占める図表域の比率を「値」フィールドに指定します。例えば、「値」フィールドに値 90 を指定すると、円グラフは、図表域の合計の高さのうち 90% を占めます。

### 「軸」図表フォーマット・オプションの指定

「軸」図表フォーマット・オプションは、図表に組み込む軸とその表示方法を制御します。

#### このタスクについて

「軸」図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようにします。

## 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページにあるツリーで「軸」を選択します。「軸」オプションが表示されます。
2. 図表に軸を組み込むには、「可視」列のチェック・ボックスを選択します。
3. 「タイトル」列に軸のタイトルを指定します。
4. 軸を線形にするか対数にするかを「タイプ」列で選択します。
5. 「軸」ノードを展開して、「X 軸」を選択します。
6. 「X 軸」図表フォーマット・オプションを指定します。
7. 「Y 軸 1」図表フォーマット・オプションを指定します。
8. 「Y 軸 2」図表フォーマット・オプションを指定します。

### 「X 軸」図表フォーマット・オプションの指定

「X 軸」図表フォーマット・オプションは、図表の X 軸が表示される方法を制御します。

#### このタスクについて

「X 軸」図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようにします。

## 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページで「軸」ノードを展開し、ツリーで「X 軸」を選択します。「X 軸」オプションが表示されます。
2. 図表の X 軸を表示するには、「可視」チェック・ボックスを選択します。

3. X 軸のタイトルを表示するには、「タイトル」フィールドの横にある「可視」チェック・ボックスを選択します。
4. 「タイトル」フィールドに X 軸のタイトルを指定します。
5. 「フォント」フィールドにタイトルのフォントを指定します。
6. 「色」フィールドに X 軸の色を指定します。
7. 「起点」リストから X 軸の位置を選択します。有効なオプションは以下のとおりです。
  - 最大 - X 軸は、Y 軸の最大値の上にあります。
  - 最小 - X 軸は、Y 軸の最小値の下にあります。
  - 値 - X 軸は、図表のクライアント域の下部に揃えられます。
8. カテゴリー軸に従って X 軸の値を表示するには、「カテゴリー軸」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択すると、データ・ポイントは X 軸に沿って均等に表示され、次のデータ・ポイントを表す主目盛りマークはすべて線に沿って表示されます。このチェック・ボックスをクリアすると、データ・ポイントは X 軸に沿って不揃いに表示され、主目盛りマークは一定の間隔で配置されます。

### 「Y 軸」図表フォーマット・オプションの指定

「Y 軸」図表フォーマット・オプションは、図表の Y 軸が表示される方法を制御します。

#### このタスクについて

「Y 軸」図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページで「軸」ノードを展開し、ツリーで「Y 軸」を選択します。「Y 軸」オプションが表示されます。
2. 図表の Y 軸を表示するには、「可視」チェック・ボックスを選択します。
3. Y 軸のタイトルを表示するには、「タイトル」フィールドの横にある「可視」チェック・ボックスを選択します。
4. 「タイトル」フィールドに Y 軸のタイトルを指定します。
5. 「フォント」フィールドにタイトルのフォントを指定します。
6. 「色」フィールドに Y 軸の色を指定します。
7. 「起点」リストで Y 軸の位置を指定します。有効なオプションは以下のとおりです。
  - 最大 - Y 軸は、X 軸の最大値の後にあります。
  - 最小 - Y 軸は、X 軸の最小値の前にあります。
  - 値 - Y 軸は、図表のクライアント域の側面に揃えられます。
8. Y 軸値を線形関数として表示するか、対数関数として表示するかを「タイプ」リストで指定します。

### 「罫線」図表フォーマット・オプションの指定

「罫線」図表オプションは、罫線を表示するかどうか、および罫線のフォーマット設定方法を制御します。

## このタスクについて

「罫線」図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページで「軸」ノードを展開します。
2. 「**X** 軸」ノードまたは「**Y** 軸」ノードを展開し、ツリーで「罫線」を選択します。「罫線」オプションが表示されます。
3. 主罫線を表示するには、「主グリッド」セクションで「可視」チェック・ボックスを選択します。
4. 「色」フィールドに主罫線の色を指定します。
5. 補助罫線を表示するには、「補助グリッド」セクションで「可視」チェック・ボックスを選択します。
6. 「色」フィールドに補助罫線の色を指定します。

### 「ラベル」図表フォーマット・オプションの指定

「ラベル」図表フォーマット・オプションは、軸のラベルを表示するかどうか、およびラベルのフォーマット設定方法を制御します。

## このタスクについて

「ラベル」図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページで「軸」ノードを展開します。
2. 「**X** 軸」ノードまたは「**Y** 軸」ノードを展開し、ツリーで「ラベル」を選択します。「ラベル」オプションが表示されます。
3. 軸のラベルを表示するには、「可視」チェック・ボックスを選択します。
4. 「フォント」フィールドに、軸ラベルのフォントを指定します。
5. 「フォーマット」フィールドの横にある省略符号 (...) をクリックします。「フォーマットの選択」ウィンドウが開きます。
6. 「フォーマット」リストから列セル値のフォーマットを選択します。

数値データ・タイプに使用できる形式は以下のとおりです。

- 現状のまま - 厳密な列値が形式設定されずに表示されます。
- 通貨 - 列値は通貨として表示されます。表示される通貨単位は、現行セッションのロケール設定によって決まります。
- **10** 進数 - 列値は 10 進数として表示されます。
- 浮動小数 - 列値は浮動小数で表示されます。
- パーセント - 列値はパーセンテージとして表示されます。
- カスタム - 「パターン」フィールドで指定されたパターンに従って、データ・ポイント値が表示されます。

日付データ・タイプに使用できる形式は以下のとおりです。

- 現状のまま - 厳密な列値が形式設定されずに表示されます。
- データベース - データベースの形式で日付が表示されます。

- 日付 - 使用可能な形式から日付表示を選択します。
- カスタム - 「パターン」フィールドで指定されたパターンに従って、日付が表示されます。

タイム・スタンプ・データ・タイプに使用できる形式は以下のとおりです。

- 現状のまま - 厳密な列値が形式設定されずに表示されます。
  - データベース - データベースの形式でタイム・スタンプが表示されます。
  - タイム・スタンプ - 使用可能な形式からタイム・スタンプ表示を選択します。
  - 日付 - タイム・スタンプの日付構成要素のみが表示されます。
  - 時刻 - タイム・スタンプの時刻構成要素のみが表示されます。
  - カスタム - 「パターン」フィールドで指定されたパターンに従って、タイム・スタンプが表示されます。
7. 列値に千の位の区切り文字を含めるには、「千の位の区切り文字」チェック・ボックスを選択します。
  8. 表示する小数部の桁数を「小数部」フィールドに指定します。値に「0」を指定すると、小数点以下の桁が表示されません。
  9. 「OK」をクリックして、「フォーマットの選択」ダイアログを閉じます。
  10. 軸のラベルの角度を「回転」フィールドに指定します。値「0」は回転しないことを示します。ラベルは角度なしで表示されます。数値が高いほど、角度が大きいことを示します。値には、正または負をどちらも指定できます。正数はラベルを左回りに回転させ、負の値はラベルを右回りに回転させます。

### 「範囲」図表フォーマット・オプションの指定

「範囲」オプションを使用すると、図表の軸の範囲および軸のステップ・カウントを手動でフォーマット設定することができます。

#### このタスクについて

「範囲」図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページで「軸」ノードを展開します。
2. 「X 軸」ノードまたは「Y 軸」ノードを展開し、ツリーで「範囲」を選択します。「範囲」オプションが表示されます。
3. 軸の範囲を手動で設定するには、「手動の範囲」チェック・ボックスを選択します。
4. 軸でのステップの数を指定するには、「ステップ・カウント」をクリックして、ステップの数をフィールドに指定します。
5. 軸での各ステップのサイズを指定するには、「ステップ・サイズ」をクリックして、各ステップのサイズをテキスト・フィールドに指定します。
6. 「最小」フィールドに軸の範囲の最小値を指定します。
7. 「最大」フィールドに軸の範囲の最大値を指定します。

## 「タイトル」 図表フォーマット・オプションの指定

「タイトル」 図表フォーマット・オプションは、図表のタイトルを表示するかどうか、およびタイトルのフォーマット設定方法を制御します。

### このタスクについて

「タイトル」 図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようにします。

#### 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページにあるツリーで「タイトル」を選択します。「タイトル」オプションが表示されます。
2. 図表のタイトルを表示するには、「可視」チェック・ボックスを選択します。
3. 軸列を使用して図表のタイトルを自動的に生成する場合は、「タイプ」ドロップダウン・リストで「自動生成」を選択します。図表タイトルを手動で指定する場合は、「カスタム・テキスト」を選択します。
4. 「カスタム・テキスト」を選択した場合は、「テキスト」フィールドに図表のタイトルを指定します。プロンプト値を図表タイトルに追加して、別のプロンプト値が指定されたときにタイトルが自動的に更新されるようにすることができます。

例えば、図表が Q.STAFF 表に基づいているときに、図表のタイトルに PRMPT という単純なプロンプト値を挿入する場合、式は %G for DEPT No. = &PRMPT となります。DEPT No. は、単純なプロンプト値 PRMPT の説明テキストで、%G は図表のカテゴリ列および値列の名前を図表のタイトルに付ける変数です。さらに、現在の日付を図表のタイトルに付ける %D 変数も使用できます。

5. 「フォント」フィールドにタイトルのフォントを指定します。
6. 「位置」リストから図表の位置を選択します。

## 「凡例」 図表フォーマット・オプションの指定

「凡例」 図表フォーマット・オプションは、凡例を表示するかどうか、および凡例のフォーマット設定方法を制御します。

### このタスクについて

「凡例」 図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようにします。

#### 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページにあるツリーで「凡例」を選択します。「凡例」オプションが表示されます。
2. 図表の凡例を表示するには、「可視」チェック・ボックスを選択します。
3. 凡例のタイトルを表示するには、「タイトル」フィールドの横にある「可視」チェック・ボックスを選択します。
4. 「タイトル」フィールドに凡例のタイトルを指定します。
5. 「フォント」フィールドにタイトルのフォントを指定します。
6. 「位置」ドロップダウン・リストで凡例の位置を指定します。
7. 「フォント・テキスト」フィールドに凡例のテキストのフォントを指定します。



8. 凡例の周囲の枠取りを表示するには、「枠取り」フィールドの横にある「可視」チェック・ボックスを選択します。

### 「作図領域」図表フォーマット・オプションの指定

「作図領域」図表フォーマット・オプションは、データ軸が含まれている図表の領域およびクライアント域の外観を制御します。

#### このタスクについて

「作図領域」図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようにします。

#### 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページにあるツリーで「作図領域」を選択します。「作図領域」オプションが表示されます。
2. 作図領域の背景色を「背景」フィールドで指定します。
3. 作図領域の周囲の枠取りを表示するには、「枠取り」フィールドの横にある「可視」チェック・ボックスを選択します。
4. 「inset 枠 (ポイント)」フィールドに、図表域を差し込む、作図領域の端からの距離を指定します。

### 「クライアント域」図表フォーマット・オプションの指定

「クライアント域」図表フォーマット・オプションは、図表のクライアント域が表示される方法を制御します。

#### このタスクについて

「クライアント域」図表フォーマット・オプションを指定するには、以下のようにします。

#### 手順

1. 「新規図表」ウィザードの「形式」ページにあるツリーで「クライアント域」を選択します。「クライアント域」オプションが表示されます。
2. クライアント域の背景色を「背景」フィールドで指定します。
3. クライアント域の周囲の枠取りを表示するには、「枠取り」フィールドの横にある「可視」チェック・ボックスを選択します。

---

## 照会結果グリッドからの図表の作成

照会結果グリッドから必要な列を選択することにより、簡単に図表を作成できます。これにより、返されたデータを確認して、表示する内容およびその表示方法を決定できます。

### 始める前に

ビジュアル照会を実行し、照会結果グリッドを「結果」タブで開いておく必要があります。

## このタスクについて

照会結果グリッドから図表を作成するには、以下のようにします。

### 手順

1. 図表に組み込む列を選択します。複数の列を選択するときは、**Ctrl** キーを押しながら列を 1 つ 1 つクリックします。
2. 「図表の表示」ツールバー・ボタンの横にある下矢印をクリックして、表示する図表のタイプを選択します。「新規図表」ウィザードの「データ系列」ページが開きます。選択した列が、「系列」ツリーに表示されます。

注: 列のデータ・タイプに従って、列が自動的に「カテゴリー軸」ノードおよび「値」ノードに編成されます。カテゴリー列とは、文字データを含む列のことです。値列とは、数値データを含む列のことです。例えば、部門名の列と年俸合計の列を選択した場合、部門名の列は自動的に「カテゴリー軸」の下に配置され、年俸列は自動的に「値」の下に配置されます。

3. 各値列を選択し、「集約」リストからその集約方法を選びます。
4. 「次へ」をクリックします。「フォーマット」ページが開きます。
5. 図表のさまざまなフォーマット・オプションを指定し、「終了」をクリックして「新規図表」ウィザードを閉じ、作成した図表を表示します。図表は「結果」タブに表示されます。

---

## 表示編集機能での図表の操作

表示編集機能を使用して、ビジュアル照会結果セットに対して図表を作成し、それらを管理することができます。

### このタスクについて

ビジュアル照会結果セットに対して作成したすべての図表が、この結果セットとともに保管されます。表示編集機能を使用して、照会結果セットの表示モードを管理します。表示編集機能には以下のペインが含まれています。

- 結果セット
- レイアウト構造
- 表示モード

「結果セット」ペインには、選択した表示モードに関係なく、使用可能なすべての結果セット列が表示されます。照会結果列は、「カテゴリー列」、「値列」、および「集約を含む列」の 3 つのタイプに自動的にグループ化されます。「カテゴリー列」は、文字データが含まれている列であり、列図表の X 軸など、数値ではないデータ軸に使用することが推奨されます。「値列」は、数値データが含まれている列であり、円グラフの扇形など、数値データ軸に使用することが推奨されます。「集約を含む列」は、集約が割り当てられている列のコピーです。「結果セット」ペインを使用して、結果セット内の任意の列にグループ化および集約を追加することができます。

「レイアウト構造」ペインには、選択した表示モードの特定のレイアウト構造が表示されます。「結果セット」ペインとは異なり、「レイアウト構造」ペインには、

選択されている表示モードの列、グループ化、および集約のみが表示されます。「レイアウト構造」ペインを使用して、表示モードの個々のレイアウト構造を編集することができます。

「表示モード」ペインには、使用可能な表示モードのリストが表示されます。各表示モードには、独立したレイアウト構造および表示設定があります。「表示モード」ペインを使用して、特定の照会結果セットの表示モードを追加、削除、および編集することができます。

## 表示編集機能での図表の作成

表示編集機能で列を選択することにより、ビジュアル照会結果セットに対して簡単に図表を作成できます。


### 始める前に

ビジュアル照会を実行して、「表示」タブに切り替える必要があります。

### このタスクについて

表示編集機能で図表を作成するには、以下の操作を実行します。

### 手順

1. 「結果セット」ペインで、図表に組み込む列を選択します。複数の列を選択するときは、**Ctrl** キーを押しながら列を 1 つ 1 つクリックします。
2. マウス・ボタンを押したまま、列を「表示モード」ペインの「図表」ツリーまでドラッグします。マウス・ボタンを離します。新規の図表が「図表」ツリーに表示されます。この図表がデフォルトになります。
3. 作成した図表を変更することができます。詳しくは、『図表の編集』トピックを参照してください。
4. 「照会の実行」  ツールバー・ボタンをクリックし、作成した図表を「結果」タブに表示します。

### タスクの結果

ビジュアル照会結果セットに対して作成した図表が、この結果セットとともに保管されます。

## 表示モードの管理

照会結果セットの表示モードを追加、編集、および削除するには、「表示」編集機能の「表示モード」ペインを使用します。

### このタスクについて

表示モードを使用すれば、多種多様な方法で結果セット・データを視覚化できます。さまざまなコンテンツとビジュアル形式を持つ任意の数の表示モードを作成できます。すべての結果セットは、「結果グリッド」というグリッドを使用して開始されます。これは、初めて照会を実行したときに表示される標準の照会結果グリッ

ドです。このグリッドは編集できませんが、「表示モード」ツリーの「グリッド」ノードに新規グリッドを追加して、必要に応じてそのレイアウトを編集することができます。

照会結果セットの表示モードを管理するには、以下のようにします。

### 手順

1. 編集する結果セットを含む照会にナビゲートし、その照会をビジュアル照会エディターで開きます。
2. 「表示」タブをクリックします。表示エディターが開きます。
3. 表示モードを追加するには、「グリッド」または「図表」のいずれかを右クリックして、「新規」を選択し、追加する表示モードを選択します。
4. 表示モードを名前変更するには、モードを右クリックして、ポップアップ・メニューから「名前変更」を選択します。
5. 表示モードを編集するには、モードを右クリックして、ポップアップ・メニューから「編集」を選択します。
6. 表示モードを削除するには、モードを右クリックして、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。
7. 表示モードをリスト内で上または下に移動するには、モードを右クリックして、ポップアップ・メニューから「上へ移動」または「下へ移動」を選択します。
8. 特定の表示モードをデフォルトとして設定するには、モードを右クリックして、ポップアップ・メニューから「デフォルトにする」を選択します。照会を実行するたびに、デフォルトの表示モードが最初に開きます。

## 照会結果セット列の編集

結果セットの列を変更するには、表示エディターの「結果セット」ペインを使用します。

### このタスクについて

結果セット列を変更するには、以下のようにします。

### 手順

1. 編集する結果セットを含む照会にナビゲートし、その照会をビジュアル照会エディターで開きます。
2. 「表示」タブをクリックします。表示エディターが開きます。
3. 列をトップ・グループにロールアップするには、列を右クリックし、メニューから「トップ・グループ」を選択します。
4. 列をサイド・グループにロールアップするには、列を右クリックし、メニューから「サイド・グループ」を選択します。
5. 列に集約を追加するには、列を右クリックし、メニューから集約タイプを選択します。使用可能な集約は以下のとおりです。
  - カウント
  - 最初
  - 最後

- 最大
  - 最小
  - 合計
  - 平均
  - 標準偏差
6. 列から集約を削除するには、列を右クリックし、メニューから「集約なし」を選択します。
  7. 選択した表示モードのレイアウト構造にカウント列を追加するには、「集約を含む列」ノードの「(カウント)」列を右クリックし、メニューから「レイアウト構造へ」を選択します。

## 表示モードのレイアウト構造の編集

個々の表示モードのレイアウト構造を編集するには、表示エディターの「レイアウト構造」ペインを使用します。

### このタスクについて

照会結果セットのレイアウト構造を変更するには、以下のようになります。

### 手順

1. 編集する結果セットを含む照会にナビゲートし、その照会をビジュアル照会エディターで開きます。
2. 「表示」タブをクリックします。表示エディターが開きます。
3. 編集する表示モードを選択します。選択した表示モードのレイアウト構造が、「レイアウト構造」ペインで開きます。
4. 列をトップ・グループまたはサイド・グループまでロールアップするには、列をクリックし、「トップ・グループ」ノードまたは「サイド・グループ」ノードまでドラッグします。
5. 列に集約を追加するには、列を右クリックし、メニューから集約タイプを選択します。使用可能な集約は以下のとおりです。
  - カウント
  - 最初
  - 最後
  - 最大
  - 最小
  - 合計
  - 平均
  - 標準偏差
6. 列から集約を削除するには、列を右クリックし、ポップアップ・メニューから「集約なし」を選択します。
7. レイアウト構造から列を削除するには、列を右クリックし、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。
8. 列の順序を変更するには、列をクリックしてドラッグし、結果セット内で適切な順序になるように列を配置します。

9. 図表のレイアウト構造を編集する場合は、列をクリックしてドラッグし、「カテゴリー軸」ノードと「値」ノードの間で移動します。

---

## 図表の編集

図表プロパティを変更すれば、図表を編集したり図表の外観を変更したりできます。

### このタスクについて

図表を編集するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「図表プロパティの編集」ウィザードを開きます。
  - 「結果」タブにある図表を開き、メインメニューから「結果」 > 「図表プロパティ」を選択します。
  - 「表示モード」ペインで、編集する図表を右クリックし、メニューから「編集」を選択します。
2. 「図表プロパティの編集」ウィザードで、適切なタブに切り替えて、図表タイプ・オプション、データ系列オプション、または形式オプションを編集します。図表プロパティについて詳しくは、以下のトピックを参照してください。
  - 図表タイプ・オプションの指定
  - データ系列オプションの指定
  - フォーマット・オプションの指定
3. 「OK」をクリックして変更を保管し、「図表プロパティの編集」ウィザードを閉じます。

---

## 図表のエクスポート

「図表のエクスポート」ウィザードを使用すれば、照会結果セットから作成した図表をファイル・システムにエクスポートできます。


### 始める前に

ビジュアル照会結果の「結果」タブで、エクスポートする図表を開きます。

### このタスクについて

図表をエクスポートするには、以下のようになります。

### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「図表のエクスポート」ウィザードを開きます。
  - エディターで図表を開いた状態で、「ファイル」 > 「エクスポート」を選択し、「エクスポート」ウィザードの「選択」ページを開き、使用可能なエクスポート・ウィザードのリストから「図表」を選択します。
  - エディターで図表を開いた状態で、「エクスポート」 () ツールバー・ボタンをクリックします。

2. 「ソース」リストからソース・オブジェクトを選択します。
3. 「エクスポート・タイプ」リストから、エクスポートするファイルのタイプを選択します。以下の形式が選択可能です。
  - PDF
  - PNG
4. 「次へ」をクリックします。「図表のエクスポート」ウィザードの 2 ページ目が開きます。
5. 「エクスポート・パラメーターの選択」セクションでイメージのサイズを指定します。
6. 「図表エクスポート・プレビュー」ウィンドウを最新表示するには、「図表の更新」をクリックします。
7. 「終了」をクリックして、

---

## 図表の印刷オプションを指定

印刷用のページ・セットアップ・オプションを図表に対して指定できます。

### 始める前に

ビジュアル照会結果から作成された図表は、「結果」タブで開きます。

### このタスクについて

図表の印刷ページの外観を制御するには、次のようにします。

### 手順

1. メインメニューから「ファイル」 > 「ページ設定」を選択して、「ページ設定」ウィンドウを開きます。
2. 「プリンター」リストで、使用するプリンターを選択します。
3. 詳細な設定については、「プロパティ」をクリックします。
4. 「サイズ」リストから、印刷可能域のサイズを選択します。
5. 「ソース」リストから、使用する用紙トレイを選択します。
6. 「用紙方向」領域で、印刷出力の方向を選択します。
7. 「マージン」フィールドでページのマージンのサイズを指定し、「OK」をクリックします。
8. 「拡大縮小オプション」領域で、選択可能ないずれかの印刷オプションを選択します。
  - a. 印刷可能域に図表サイズを合わせるには、「印刷可能域に合わせる」を選択します。
  - b. 必要な図表サイズをパーセントで指定するには、「印刷の拡大縮小 %」を選択します。
9. 指定した値をデフォルトにするには、「デフォルトとして設定」をクリックします。
10. 「OK」をクリックして、「ページ設定」ウィンドウを閉じます。印刷されるオブジェクトの外観を制御するために、指定したオプションが使用されます。





---

## 第 11 章 ドリルダウン・パスの使用

ドリルダウン・パスとは、所定の照会の複数の詳細レベルを表示できる対話式の一連のグラフです。

---

### ドリルダウン・パスについて

ドリルダウン・パスとは、所定の照会の複数の詳細レベルを表示できる対話式の一連のグラフです。

ドリルダウン・パスでは、照会結果のさまざまなビューにドリルダウンすることができます。各詳細レベルは、異なる表示モードで表され、各表示モード・グラフは完全にカスタマイズすることができます。異なる詳細レベル間でのデータの受け渡しは、表示モード・グラフのデータ・ポイントとのユーザーの対話によって発生します。レベル間でのデータの移動のことを分析パスと呼びます。

例えば、会社の各部署内の従業員の給与の合計を表示する柱グラフを作成するとします。柱グラフでは、部署ごとに異なる柱が表示されます。次に、特定の部署の全従業員の給与の合計を職種で分けて表示する円グラフを作成します。この円グラフでは、職種ごとに異なる扇形が表示されます。分析パスは、指定された部署の柱のデータを次のグラフに渡します。これで、1 つ目のグラフの特定の柱をクリックすると、指定された部署が円グラフに表示されます。元の柱グラフに戻れば、別の部署の柱をクリックできます。これで、円グラフには、新しい部署のデータ・ポイントが表示されます。照会データをさらに詳しく調べるために、分析パスはいくつでも作成できます。

---

### ドリルダウン・パスの作成

ドリルダウン・パスを使用すれば、複数の異なる照会結果ビューにドリルダウンできます。

#### このタスクについて

ドリルダウン・パスを作成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「新規ドリルダウン・パスの作成」ウィザードを開きます。
    - エディター・ウィンドウにアクティブ照会が表示された状態で、「照会」 > 「転送先」 > 「ドリルダウン・パス」を選択します。
    - 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。
- 「QMF オブジェクト」フォルダーから「ドリルダウン・パス」ウィザードを選択します。
- 「新規ドリルダウン・パス」ツールバー・ボタンをクリックします。

「新規ドリルダウン・パスの作成」ウィザードが開きます。

「照会」 > 「転送先」 > 「ドリルダウン・パス」を選択して「新規ドリルダウン・パスの作成」ウィザードを開いた場合は、ウィザードの「図表タイプ」ページが開きます。

それ以外の場合は、「新規ドリルダウン・パスの作成」ページが開くので、以下のアクションを実行する必要があります。

- ドリルダウン・パスの名前を「名前」フィールドに指定します。
- 「データ・ソース」セクションで、使用する照会を指定します。

保存済みの照会を使用するには、省略記号 (...) をクリックして、保存済み照会をリポジトリまたはファイルから選択して開きます。

開いている照会を使用するには、対応するリスト・ボックスで、開いているいずれかの照会を選択します。

- 「次へ」をクリックします。ウィザードの「図表タイプ」ページが開きます。
2. 図表タイプ・オプションを指定し、「次へ」をクリックします。「データ系列」ページが開きます。
  3. データ系列のオプションを指定し、「次へ」をクリックします。「フォーマット」ページが開きます。
  4. フォーマット・オプションを指定し、「終了」をクリックします。「新規ドリルダウン・パスの作成」ウィザードが閉じて、結果エディターにドリルダウン・パスの最初の図表が表示されます。
  5. ドリルダウン・パスに別のレベルを追加するには、図表のデータ・ポイントの1つをクリックします。「新規ドリルダウン・パス・ノード」ウィザードが開きます。
  6. 図表タイプ、データ系列、および図表フォーマットのオプションを指定し、「OK」をクリックします。結果エディターに新規図表が表示されます。作成した図表は、以前の図表からデータを受け入れるように自動的にパラメータ化されます。例えば、最初の図表に部門名の列からのデータ値が表示されていた場合、新しい図表には特定の部門からのデータ値のみが表示されます。
  7. ドリルダウン・パスに組み込む明細レベルごとに、このプロセスを繰り返し、「ドリルダウン・パスの記録を停止」ツールバー・ボタンをクリックします。ドリルダウン・パスの記録を停止することを確認するように指示されます。
  8. 記録を破棄するには、「いいえ」をクリックします。以前のレベルおよび図表がすべて破棄されます。
  9. 記録を保存するには、「はい」をクリックします。ドリルダウン・パス、およびドリルダウン・パスのすべてのレベルと図表が保存されます。
  10. ドリルダウン・パスを保存したら、「前のシーンに切り替える」ツールバー・ボタンおよび「次のシーンに切り替える」ツールバー・ボタンを使用して図表間でナビゲートします。
  11. 特定の図表を編集するには、その図表にナビゲートし、「ドリルダウン・パス・ノード・プロパティ」ツールバー・ボタンをクリックします。「ドリルダウン・レベル・プロパティ」ウィンドウが開きます。

図表プロパティの編集について詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- 図表タイプ・オプションの指定
  - データ系列オプションの指定
  - フォーマット・オプションの指定
12. 変更する図表プロパティを編集し、「OK」をクリックして変更を保管し、「ドリルダウン・レベル・プロパティ」ウィンドウを閉じます。
  13. 既存の図表を基本図表として使用して新規ドリルダウン・パスを記録するには、最初に使用する図表にナビゲートし、「ドリルダウン・パスの記録」ツールバー・ボタンをクリックします。「新規ドリルダウン・パス・ノード」ウィザードが開きます。このウィザードで新規図表レベルを作成できます。ツールバー・ボタンをクリックしたときに開いていた図表から新規ドリルダウン・パスが開始されます。新規図表は 1 つ下のレベルになります。
  14. ドリルダウン・パスの新しい枝を記録するには、現行ドリルダウン・パス記録において分岐元となる図表にナビゲートし、「ドリルダウン・パスを分岐して記録モードに切り替える」ツールバー・ボタンをクリックします。「ドリルダウン・パス・ノードの編集」ウィザードが開きます。このウィザードで、ツールバー・ボタンをクリックした位置から 1 つ下の図表レベルを変更できます。それにより、開始ポイントから、ツールバー・ボタンをクリックしたポイントまでの、以前の図表レベルをすべて保持する新規のドリルダウン・パス記録が作成されますが、オリジナルの記録から分岐する新規図表レベルを記録できません。保存したオリジナルの記録は保持されます。

---

## ドリルダウン・パス記録の表示モードの管理

ドリルダウン・パス・デザイン・エディターの「ドリルダウン構造」ペインを使用すれば、表示モードを管理できます。

### このタスクについて

ドリルダウン・パス記録の明細の各レベルは、異なる表示モードで表されます。各ドリルダウン・パス表示モードは個別に編集されます。これにより、さまざまな図表やフォーマット・オプションを使用してデータを表示できます。使用可能な表示モードや、その表示モードで表される分析パスを管理するには、ドリルダウン・パス・デザイン・エディターの「ドリルダウン構造」ペインを使用します。

ドリルダウン・パス表示モードを管理するには、以下のようになります。

### 手順

1. ドリルダウン・パス・デザイン・エディターでドリルダウン・パスを開きます。
2. 「ドリルダウン構造」ペインで表示モードを右クリックし、「新規」を選択して、追加する表示モードのタイプを指定します。
3. 「データ・ソース」リストで、照会、dynamart、表、または予測を選択します。これらに基づいて、ドリルダウン・レベルを作成します。

4. 新規オブジェクトを追加するには、「データ・ソース・オブジェクトの追加」をクリックします。「データ・ソースの設定」ダイアログで、必要なデータ・ソース・オブジェクト・タイプを選択し、オブジェクトへのパスを「パス」フィールドで指定します。
  - a. 組み込み - オブジェクトがドリルダウン・パスに保存されます。そのため、当該ドリルダウンを保存したときに、ドリルダウン・パスとともにオブジェクトをファイルまたはリポジトリに転送できます。
  - b. リンク - データ・ソース・オブジェクトへのリンクがドリルダウン・パスに保存されます。このオブジェクトは、ドリルダウン・パスとともにファイルやリポジトリには保存されません。
5. 新規データ・ソース・オブジェクトを追加した場合は、「データ・ソース間の関係」領域の「マスター列」リストから親オブジェクトの列を選択し、「明細列」リストから子オブジェクトの列を選択します。これら 2 つの列は、2 つのオブジェクトのデータを結合するために使用されます。
6. 指定した列の形式が **TIMESTAMP** である場合は、必要な値を「カレンダー関数」リストから選択して、列の形式設定を指定できます。カレンダー機能は、さまざまなデータ・ソースからの **TIMESTAMP** データを持つ列同士を結合します。ただし、これが行われるのは、そのデータが同じ 1 つの時間枠 (例えば、1 年、四半期、1 カ月など) に属する場合に限られます。
7. 「次へ」をクリックして、「新規ドリルダウン・パス表示モード」ウィザードの「図表タイプ」ページを開きます。
8. 図表タイプ・オプションを指定し、「次へ」をクリックします。「データ系列」ページ・オプションが表示されます。
9. データ系列のオプションを指定し、「次へ」をクリックします。「フォーマット」ページが開きます。
10. フォーマット・オプションを指定し、「終了」をクリックします。「新規ドリルダウン・パスの作成」ウィザードが閉じて、最初の図表がドリルダウン・パス・エディターの「ドリルダウン構造」ペインに表示されます。

注: 右クリックしたときに示される表示モードの下に新規の表示モードが配置されます。このモードは、ドリルダウン構造内の次の明細レベルを表します。

11. 表示モードを右クリックして「デフォルトにする」を選択します。デフォルトの表示モードは、照会結果を表示したときに最初に表示される図表です。
12. 表示モードを右クリックし、ポップアップ・メニューから「編集」を選択します。「表示モードの編集」ウィザードが開きます。
13. 必要に応じて、図表タイプ、データ系列、および図表フォーマットのオプションを変更し、「**OK**」をクリックします。「表示モードの編集」ウィザードが閉じます。
14. 表示モードを右クリックし、ポップアップ・メニューから「削除」を選択して、「ドリルダウン構造」ツリーからその表示モードを削除します。
15. 表示モードを右クリックし、「上へ移動」または「下へ移動」を選択して、「ドリルダウン構造」ツリー内での表示モードの位置を変更します。

注: ドリルダウンに表示する必要な明細レベルを選択するには、相応の図表域をクリックします。「ドリルダウン」ウィンドウが表示され、使用可能なサブ

レベルのリストが示されます。必要なサブレベルを選択し、「OK」をクリックします。サブレベルが 1 つしかない場合や、ドリルダウン・パスが記録中の場合は、レベルを選択できません。

---

## ドリルダウン・パスの印刷オプションを指定

編集機能ウィンドウで開かれているドリルダウン・パスを印刷するときに使用されるページ・セットアップ・オプションを指定できます。

### このタスクについて

ドリルダウン・パスの印刷ページの外観を制御するには、次のようにします。

### 手順

1. エディター・ウィンドウにアクティブ・オブジェクトが表示されている状態で、「ファイル」 > 「ページ設定」を選択して「ページ設定」ウィンドウを開きます。
2. 「プリンター」リストで、使用するプリンターを選択します。
3. 詳細な設定については、「プロパティ」をクリックします。「ページ設定」ウィンドウが開きます。
4. 「サイズ」リストから、印刷可能域のサイズを選択します。
5. 「ソース」リストから、使用する用紙トレイを選択します。
6. 「用紙方向」領域で、印刷出力の方向を選択します。
7. 「マージン」フィールドで、ページのマージンのサイズを指定します。
8. 「OK」をクリックして、「ページ設定」ウィンドウを閉じます。
9. 「拡大縮小オプション」領域で、選択可能ないずれかの印刷オプションを選択します。
  - a. 印刷可能域にドリルダウン・パス・サイズを合わせるには、「印刷可能域に合わせる」を選択します。
  - b. 必要なドリルダウン・パス・サイズをパーセントで指定するには、「印刷の拡大縮小 %」を選択します。
10. 指定した値をデフォルトにするには、「デフォルトとして設定」をクリックします。
11. 「OK」をクリックして、「ページ設定」ウィンドウを閉じます。印刷されるオブジェクトの外観を制御するために、指定したオプションが使用されます。



---

## 第 12 章 スケジュール・タスクの操作

タスクをスケジュールすれば、照会の実行や照会結果のエクスポートなどを自動化したアクションを作成できます。アクションをユーザー・インターフェースから直接実行する必要はありません。

### このタスクについて

スケジュール・タスクは、指定の日時にビジネス・プロセスが自動的に実行されるように支援する便利なツールです。スケジュール・タスクは、定期的に行われなければならないアクション (さまざまな場所に配布されることになっている週次販売報告書や、四半期収益報告書など) の場合に特に役立ちます。

スケジュール・タスクを作成するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「ビュー」 > 「スケジュール・タスク」を選択するか、「ファイル」 > 「新規」 > 「スケジュール・タスク」を選択します。
2. 「タスク・リスト」ダイアログを使用している場合は、「タスクの追加」をクリックして、スケジュール・タスクを作成します。
3. 「ファイル」 > 「新規」 > 「スケジュール・タスク」を選択することによって「新規スケジュール済みタスクの作成」ウィザードを使用する場合は、使用するスケジューラーのタイプを選択します。ローカル・スケジューラーまたは QMF for WebSphere スケジューラーを使用できます。その後、「次へ」をクリックします。
4. 「タスク名」フィールドにタスクの名前を指定します。
5. 「アクションの追加」をクリックします。「アクション・ウィザード」が開きます。
6. 「アクション名」フィールドにアクションの名前を指定します。
7. 追加するアクションのタイプを選択し、「次へ」をクリックします。
8. 選択したタスク・タイプのオプションを指定し、「終了」をクリックします。「アクション・ウィザード」が閉じて、「アクション」リストに新規リストが追加されます。
9. このタスク実行の詳細なログを生成するには、「ロギング可能化」チェック・ボックスを選択します。タスクがオペレーティング・システムのスケジューラーから実行されている場合、エラー・ログおよびタスク実行報告書がユーザーのホーム・ディレクトリーに保管されます。
10. タスクで実行するアクションをすべて追加したら、「OK」をクリックします。「タスク」ウィンドウが閉じて、「タスク・リスト」ウィンドウに制御が戻ります。
11. 「タスクのインポート」をクリックして、タスクをインポートします。
12. 「タスクのエクスポート」をクリックして、タスクをエクスポートします。

13. タスクをスケジュールするには、スケジュールするタスクを選択し、「タスクをスケジュールします」をクリックします。
14. 「OK」をクリックします。「タスク・リスト」ウィンドウが閉じます。

---

## オブジェクトの実行アクションの追加

オブジェクトの実行アクションを使用して、照会、ビジュアル報告書、プロシージャー、または即時報告書を自動的に実行し、それをエクスポート、メール送信、または印刷することができます。

### このタスクについて

オブジェクトの実行アクションをスケジュール・タスクに追加するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「タスク・リスト」ウィンドウでタスクを開きます。
2. 「アクションの追加」をクリックします。「アクション・ウィザード」が開きます。
3. 「アクション名」フィールドにアクションの名前を指定し、「オブジェクトの実行」をクリックしてから、「次へ」をクリックします。「オブジェクトの指定」ページが開きます。
4. 実行するオブジェクトのタイプを選択します。
5. オブジェクトのロケーションを指定します。以下の 2 つのオプションがあります。
  - a. オブジェクトの静的ソース・ロケーションを指定するには、「パス」をクリックしてから、「ソース」領域の右下の省略符号 (...) をクリックします。「開く」ウィンドウが開きます。
  - b. オブジェクトまでナビゲートして選択し、「終了」をクリックします。「開く」ウィンドウが閉じます。
  - c. オブジェクトの条件付きソース・ロケーションを指定するには、「公式」をクリックしてから、省略符号 (...) をクリックします。「公式エディター」が開きます。
  - d. オブジェクトのロケーションを決定するために使用する公式を指定して、「OK」をクリックします。「公式エディター」が閉じます。
6. 「新規データ・ソースの設定」チェック・ボックスを選択して、オブジェクトの実行対象となる特定データ・ソースを指定します。次に省略符号 (...) をクリックします。「データ・ソースの追加」ウィンドウが開いたら、必要なデータ・ソースを選択して「OK」をクリックします。
7. 使用可能なデータ・ソースを追加するには、「データ・ソースの追加」をクリックします。「データ・ソースの追加」ウィンドウが開きます。
8. 追加するデータ・ソースまでナビゲートして選択し、そのデータ・ソースのログイン名とパスワードを指定して、「OK」をクリックします。「データ・ソースの追加」ウィンドウが閉じます。
9. 「次へ」をクリックします。「操作の指定」ページが開きます。
10. 「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。



11. 操作を選択して、「次へ」をクリックします。
12. 選択した操作のオプションを指定して、「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。
13. アクションで実行するすべての操作の追加が終了したら、「終了」をクリックします。「アクション・ウィザード」が閉じて、「タスク」ウィンドウに制御が戻ります。
14. 「OK」をクリックします。「タスク」ウィンドウが閉じて、「タスク・リスト」ウィンドウに制御が戻ります。
15. 「OK」をクリックします。「タスク・リスト」ウィンドウが閉じます。

## 「照会のエクスポート」操作のオプションの指定

「照会のエクスポート」操作を使用して、照会結果をファイルにエクスポートします。

### このタスクについて

「照会のエクスポート」操作をアクションに追加するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
2. 「照会のエクスポート」をクリックして、「次へ」をクリックします。「エクスポート・パラメーターの指定」ページが開きます。
3. 「結果セット」フィールド内の必要な結果セット番号をクリックします。
4. 複数の表示モードが使用可能なときは「表示モード」リストから必要な表示モードを選択します。
5. 「エクスポート・タイプ」ドロップダウン・リストからエクスポートするファイルのタイプを選択します。有効なファイル・タイプは、以下のとおりです。
  - テキスト (\*.txt)
  - CSV (\*.csv)
  - PDF (\*.pdf)
  - HTML (\*.htm)
  - IXF (\*.ixf)
  - XML Extensible Markup Language ファイル (\*.xml)
  - XLS Microsoft Excel 97-2003 (\*.xls)
  - XLSX Microsoft Excel 2007 (\*.xlsx)
  - PNG (\*.png)
6. オブジェクトを保存する場所を指定します。以下の 2 つのオプションがあります。
  - a. オブジェクトの静的保管場所を指定するには、「パス」をクリックして、「宛先」領域の右下にある省略符号 (...) をクリックします。「別名保存」ウィンドウが開きます。
  - b. オブジェクトを保存するディレクトリー位置までナビゲートして、「終了」をクリックします。「別名保存」ウィンドウが閉じます。

- c. 「設定」ウィンドウの「サーバー・サイド・ファイル・システム」ページで「ルート出力ディレクトリー」が指定されている場合は、「パス」フィールドに、パスとファイル名、またはファイル名のみを入力できます。ファイルは自動的にこのルート・ディレクトリーにエクスポートされます。QMF for WebSphere で指定できるのは、管理者が設定したルート・ディレクトリー内のパスのみです。それ以外の場合、エクスポートは禁止され、エラーが発生します。
  - d. オブジェクトの保存場所を条件付きで指定するには、「公式」をクリックして、省略符号 (...) をクリックします。「公式エディター」が開きます。
  - e. オブジェクトの保存場所を決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。「公式エディター」が閉じます。
7. スケジュール・タスクの完了時にエクスポート・ファイルを指定の場所から除去するには、「タスクの完了後に除去」チェック・ボックスを選択します。
  8. この照会結果セットを E メールに自動的に添付できるようにする場合は、「添付ファイルとしてマークを付ける」チェック・ボックスを選択します。
  9. 「次へ」をクリックします。「[file type] エクスポート・オプションの指定」ページが開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。
  10. 「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。

#### 関連タスク:

31 ページの『エクスポート・アクションによって生成されたオブジェクトのディレクトリーの場所の設定』

さまざまな QMF アクションから生成されたオブジェクトがローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システム上の特定の場所にエクスポートされるように、QMF で設定を行うことができます。

#### 関連資料:

222 ページの『ファイル・エクスポート・オプションの指定』

照会結果をファイルにエクスポートするときは、以下のオプションを 1 つ以上指定する必要があります。指定するオプションは、エクスポートするファイルのタイプによって異なります。

## 「照会をメールにエクスポート」操作のオプションの指定

「照会をメールにエクスポート」操作を使用して、照会結果を E メールで送信します。

### このタスクについて

「照会をメールにエクスポート」操作をアクションに追加するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
2. 「照会をメールにエクスポート」をクリックして、「次へ」をクリックします。「エクスポート・パラメーターの指定」ページが開きます。

3. 「結果セット」フィールド内の必要な結果セット番号をクリックします。
4. 複数の表示モードが使用可能なときは「表示モード」リストから必要な表示モードを選択します。
5. 「エクスポート・タイプ」ドロップダウン・リストからエクスポートするファイルのタイプを選択します。有効なファイル・タイプは、以下のとおりです。
  - テキスト (\*.txt)
  - **CSV** (\*.csv)
  - **PDF** (\*.pdf)
  - **HTML** (\*.htm)
  - **IXF** (\*.ixf)
  - **XML** Extensible Markup Language ファイル (\*.xml)
  - **XLS** Microsoft Excel 97-2003 (\*.xls)
  - **XLSX** Microsoft Excel 2007 (\*.xlsx)
  - **PNG** (\*.png)
6. 「添付ファイル名」フィールドに、Eメールの添付ファイルの名前を指定します。
7. 添付ファイル名を条件付きで指定する場合は、フィールドの横にあるボタンをクリックします。「公式エディター」が開きます。
8. 添付ファイルの名前を決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。「公式エディター」が閉じます。
9. 「次へ」をクリックします。

[file type] エクスポート・オプションの指定」ページが開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。

「次へ」をクリックします。

10. 「操作ウィザード」の次のページで Eメールの設定を指定します。

注: 設定する値を、イテレーター処理時に置換変数を使用して動的に指定することができます。イテレーターでアクション・グループを使用して、複数の受信者に別個の Eメール・メッセージを送信できます。これを行うには、必要なすべての Eメール情報を返すイテレーター照会を指定し、イテレーター変数を定義し、「メール設定の指定」ページの該当するフィールドに、等号を使用して変数名を入力する (=Form、=SMTP) 必要があります。

タスクが実行されると、イテレーターはイテレーター照会レコードを処理し、反復のたびに Eメール・パラメーターのセットを抽出し、これを「照会をメールにエクスポート」操作に渡します。

- 「フォーマット」リストから本体テキストの形式を選択します。使用可能な形式は、「テキスト」と「HTML」です。
- 「宛先」フィールドに、受信者の Eメール・アドレスを指定します。
- 「cc」フィールドに、追加の受信者を指定します。
- 「件名」フィールドに、Eメールの件名を指定します。
- 「メッセージ」フィールドに、Eメールの内容を指定します。

注:

E メールテキストに組み込みイメージを含めたい場合は、次の HTML スニペットをテキストに挿入する必要があります。

```
</img>
```

この `cid:` は、フォーマット設定された E メール内で組み込みイメージを参照する際に必要となる標準のコンテンツ ID の省略形であり、`[image name]` はイメージ・ファイルの名前です。例えば、`image1.png` という名前のイメージ・ファイルを組み込むには、E メールテキストに以下の HTML スニペットを挿入します。

```
</img>
```

- 「送信元」フィールドに、送信元の E メール・アドレスを指定します。
11. SMTP サーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP 設定」をクリックします。「SMTP 設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。
    - a. 事前定義された SMTP サーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストから必要なサーバーを選択するか、「サーバーの追加」をクリックして作成します。
    - b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTP サーバーに認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、`javamail` でサポートされる必要なキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。

「OK」をクリックして、「SMTP 設定」ウィンドウを閉じます。

12. 「終了」をクリックして、「操作ウィザード」を閉じます。

関連資料:

222 ページの『ファイル・エクスポート・オプションの指定』

照会結果をファイルにエクスポートするときは、以下のオプションを 1 つ以上指定する必要があります。指定するオプションは、エクスポートするファイルのタイプによって異なります。

## HTML テーブルを E メールで送信

スケジュール・タスクを操作するときに照会結果を HTML テーブルとして E メールで送信できます。

### 始める前に

選択されたレター・フォーマットが HTML であること、および追加するテーブルも HTML フォーマットで保存されていることを確認してください。

### このタスクについて

挿入されたテーブルは HTML フォーマットでレターの本文に表示されます。

HTML テーブルを追加できるのは、以下のスケジューラー・タスクの場合に限られます。

- 照会をメールにエクスポートするタスク。このタスクの結果として、照会結果セットを HTML フォーマットで取得します。このフォーマットの照会セットは、E メールで送信できます。
- リソースをメールで送信する操作タスク。このタスクでは、他のタスクの実行時に作成された必要な HTML 表を挿入することができます。

HTML レターの本文に HTML テーブルを挿入するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「アクション・ウィザード」ウィンドウで「メッセージ」フィールドの省略符号ボタン (...) をクリックします。「公式エディター」が開きます。
2. 関数のリストで「スケジューラー」を展開して「**insertHTMLTable**」を選択するか、または「フィルター」フィールドに `insertHTMLTable` と入力します。
3. この関数をダブルクリックし、そのパラメーターを指定します。
4. 「OK」をクリックして、この関数を追加します。指定したテーブルがレターに追加されます。

#### 例

以下のパラメーターを使用すれば、レターに `grid.html` テーブルを追加できます。

- エクスポート・タスクを操作するときは、パラメーターを指定せずに単に関数を追加します。

```
=insertHTMLTable()
```

- リソース操作タスクを操作するときは、エクスポートした HTML ファイルのエンコードが UTF-8 であれば、パラメーターを 1 つのみ指定します。

```
=insertHTMLTable("grid.html")
```

- エクスポートした HTML ファイルのエンコードが UTF-8 でなければ、両方のパラメーターを指定する必要があります。

```
=insertHTMLTable("grid.html", "UTF-16")
```

## 「照会の印刷」操作のオプションの指定

指定した照会結果を印刷するには、「照会の印刷」操作を使用します。

### このタスクについて

「照会の印刷」操作をアクションに追加するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
2. 「照会の印刷」をクリックしてから、「次へ」をクリックします。「プリンターの指定」ページが開きます。
3. 「プリンター」ドロップダウン・リストから、照会結果を印刷するために使用するプリンターを選択します。

4. 「プロパティ」をクリックします。「ページ設定」ウィンドウが開きます。
5. 「サイズ」ドロップダウン・リストから、印刷可能域のサイズを選択します。
6. 「ソース」ドロップダウン・リストから、使用する用紙トレイを選択します。
7. 「用紙方向」ラジオ・グループから、印刷出力の方向を選択します。
8. 「マージン」フィールドで、ページのマージンのサイズを指定します。
9. 「OK」をクリックします。「ページ設定」ウィンドウが閉じて、「操作ウィザード」に制御が戻ります。
10. 「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。

## 「即時報告書をメールにエクスポート」操作のオプションの指定

「即時報告書をメールにエクスポート」操作を使用して、即時報告書を E メールで送信します。

### このタスクについて

「即時報告書をメールにエクスポート」操作のオプションを指定するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
2. 「即時報告書をメールにエクスポート」をクリックして、「次へ」をクリックします。「エクスポート・パラメーターの指定」ページが開きます。
3. 「エクスポート・タイプ」ドロップダウン・リストからエクスポートするファイルのタイプを選択します。有効なファイル・タイプは、以下のとおりです。
  - PDF (\*.pdf)
  - HTML (\*.htm)
4. 「添付ファイル名」フィールドに、Eメールの添付ファイルの名前を指定します。
5. 添付ファイル名を条件付きで指定する場合は、省略符号 (...) をクリックします。「公式エディター」が開きます。
6. 添付ファイルの名前を決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。「公式エディター」が閉じます。
7. 「次へ」をクリックします。「[file type] エクスポート・オプションの指定」ページが開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。
8. 「次へ」をクリックします。「Eメール設定の指定」ページで、以下のパラメーターの値を指定します。
  - 本文テキストのフォーマットを「フォーマット」リストから選択します。使用可能なフォーマットは「テキスト」および「HTML」です。
  - Eメールの送信先アドレスを「宛先」フィールドに指定します。
  - Eメールの写しの送信先アドレスを「cc」フィールドに指定します。
  - Eメールの件名を「件名」フィールドに指定します。
  - Eメールの本文テキストを「メッセージ」フィールドに指定します。

- Eメールの送信側の Eメール・アドレスを「送信元」フィールドに指定します。
9. SMTP サーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP 設定」をクリックします。「SMTP 設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。
    - a. 事前定義された SMTP サーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストから必要なサーバーを選択するか、「サーバーの追加」をクリックして作成します。
    - b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTP サーバーに認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされる必要なキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。
- 「OK」をクリックして、「SMTP 設定」ウィンドウを閉じます。

10. 「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。

関連資料:

222 ページの『ファイル・エクスポート・オプションの指定』

照会結果をファイルにエクスポートするときは、以下のオプションを 1 つ以上指定する必要があります。指定するオプションは、エクスポートするファイルのタイプによって異なります。

## 「即時報告書のエクスポート」操作のオプションの指定

「即時報告書のエクスポート」操作を使用して、即時報告書の結果をファイルにエクスポートします。

### このタスクについて

「即時報告書のエクスポート」操作のオプションを指定するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
2. 「即時報告書のエクスポート」をクリックして、「次へ」をクリックします。「エクスポート・パラメーターの指定」ページが開きます。
3. 「エクスポート・タイプ」ドロップダウン・リストからエクスポートするファイルのタイプを選択します。有効なファイル・タイプは、以下のとおりです。
  - PDF (\*.pdf)
  - HTML (\*.htm)
4. オブジェクトを保存する場所を指定します。以下の 2 つのオプションがあります。

- a. オブジェクトの静的保管場所を指定するには、「パス」をクリックして、「宛先」領域の右下にある省略符号 (...) をクリックします。「別名保存」ウィンドウが開きます。
  - b. オブジェクトを保存するディレクトリー位置までナビゲートして、「終了」をクリックします。「別名保存」ウィンドウが閉じます。
  - c. 「設定」ウィンドウの「サーバー・サイド・ファイル・システム」ページで「ルート出力ディレクトリー」が指定されている場合は、「パス」フィールドに、パスとファイル名、またはファイル名のみを入力できます。ファイルは自動的にこのルート・ディレクトリーにエクスポートされます。QMF for WebSphere で指定できるのは、管理者が設定したルート・ディレクトリー内のパスのみです。それ以外の場合、エクスポートは禁止され、エラーが発生します。
  - d. オブジェクトの保存場所を条件付きで指定するには、「公式」をクリックして、省略符号 (...) をクリックします。「公式エディター」が開きます。
  - e. オブジェクトの保存場所を決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。「公式エディター」が閉じます。
5. スケジュール・タスクの完了時にエクスポート・ファイルを指定の場所から除去するには、「タスクの完了後に除去」チェック・ボックスを選択します。
  6. この即時報告書を E メールに自動的に添付できるようにする場合は、「添付ファイルとしてマークを付ける」チェック・ボックスを選択します。
  7. 「次へ」をクリックします。「[file type] エクスポート・オプションの指定」ページが開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。
  8. 「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。

関連タスク:

31 ページの『エクスポート・アクションによって生成されたオブジェクトのディレクトリーの場所の設定』

さまざまな QMF アクションから生成されたオブジェクトがローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システム上の特定の場所にエクスポートされるように、QMF で設定を行うことができます。

関連資料:

222 ページの『ファイル・エクスポート・オプションの指定』

照会結果をファイルにエクスポートするときは、以下のオプションを 1 つ以上指定する必要があります。指定するオプションは、エクスポートするファイルのタイプによって異なります。

## 「ビジュアル報告書をメールにエクスポート」操作のオプションの指定

「ビジュアル報告書をメールにエクスポート」操作を使用して、ビジュアル報告書を E メールで送信します。

### このタスクについて

「ビジュアル報告書をメールにエクスポート」操作のオプションを指定するには、以下の手順を実行します。



## 手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
  2. 「ビジュアル報告書をメールにエクスポート」をクリックして、「次へ」をクリックします。「エクスポート・パラメーターの指定」ページが開きます。
  3. 「エクスポート・タイプ」ドロップダウン・リストからエクスポートするファイルのタイプを選択します。有効なファイル・タイプは、以下のとおりです。
    - **PDF (\*.pdf)**
    - **HTML (\*.htm)**
  4. 「添付ファイル名」フィールドに、Eメールの添付ファイルの名前を指定します。
  5. 添付ファイル名を条件付きで指定する場合は、省略符号 (...) をクリックします。「公式エディター」が開きます。
  6. 添付ファイルの名前を決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。「公式エディター」が閉じます。
  7. 「次へ」をクリックします。「[file type] エクスポート・オプションの指定」ページが開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。
  8. 「次へ」をクリックします。「Eメール設定の指定」ページで、以下のパラメーターの値を指定します。
    - 本文テキストのフォーマットを「フォーマット」リストから選択します。使用可能なフォーマットは「テキスト」および「HTML」です。
    - Eメールの送信先アドレスを「宛先」フィールドに指定します。
    - Eメールの写しの送信先アドレスを「cc」フィールドに指定します。
    - Eメールの件名を「件名」フィールドに指定します。
    - Eメールの本文テキストを「メッセージ」フィールドに指定します。
    - Eメールの送信側のEメール・アドレスを「送信元」フィールドに指定します。
  9. SMTPサーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP設定」をクリックします。「SMTP設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。
    - a. 事前定義されたSMTPサーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストから必要なサーバーを選択するか、「サーバーの追加」をクリックして作成します。
    - b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTPサーバーに認証が必要な場合は、「SMTP認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張SMTP設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamailでサポートされる必要なキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。
- 「OK」をクリックして、「SMTP設定」ウィンドウを閉じます。
10. 「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。

関連資料:

222 ページの『ファイル・エクスポート・オプションの指定』

照会結果をファイルにエクスポートするときは、以下のオプションを 1 つ以上指定する必要があります。指定するオプションは、エクスポートするファイルのタイプによって異なります。

## 「ビジュアル報告書のエクスポート」操作のオプションの指定

「ビジュアル報告書のエクスポート」操作を使用して、ビジュアル報告書をファイルにエクスポートします。

### このタスクについて

「ビジュアル報告書のエクスポート」操作のオプションを指定するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
2. 「ビジュアル報告書のエクスポート」をクリックして、「次へ」をクリックします。「エクスポート・パラメーターの指定」ページが開きます。
3. 「エクスポート・タイプ」ドロップダウン・リストからエクスポートするファイルのタイプを選択します。有効なファイル・タイプは、以下のとおりです。
  - PDF (\*.pdf)
  - HTML (\*.htm)
4. オブジェクトを保存する場所を指定します。以下の 2 つのオプションがあります。
  - a. オブジェクトの静的保管場所を指定するには、「パス」をクリックして、「宛先」領域の右下にある省略符号 (...) をクリックします。「別名保存」ウィンドウが開きます。
  - b. オブジェクトを保存するディレクトリー位置までナビゲートして、「終了」をクリックします。「別名保存」ウィンドウが閉じます。
  - c. 「設定」ウィンドウの「サーバー・サイド・ファイル・システム」ページで「ルート出力ディレクトリー」が指定されている場合は、「パス」フィールドに、パスとファイル名、またはファイル名のみを入力できます。ファイルは自動的にこのルート・ディレクトリーにエクスポートされます。QMF for WebSphere で指定できるのは、管理者が設定したルート・ディレクトリー内のパスのみです。それ以外の場合、エクスポートは禁止され、エラーが発生します。
  - d. オブジェクトの保存場所を条件付きで指定するには、「公式」をクリックして、省略符号 (...) をクリックします。「公式エディター」が開きます。
  - e. オブジェクトの保存場所を決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。「公式エディター」が閉じます。
5. スケジュール・タスクの完了時にエクスポート・ファイルを指定の場所から除去するには、「タスクの完了後に除去」チェック・ボックスを選択します。
6. このビジュアル報告書を E メールに自動的に添付できるようにする場合は、「添付ファイルとしてマークを付ける」チェック・ボックスを選択します。

7. 「次へ」をクリックします。「[file type] エクスポート・オプションの指定」ページが開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。
8. 「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。

関連タスク:

31 ページの『エクスポート・アクションによって生成されたオブジェクトのディレクトリーの場所の設定』

さまざまな QMF アクションから生成されたオブジェクトがローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システム上の特定の場所にエクスポートされるように、QMF で設定を行うことができます。

関連資料:

222 ページの『ファイル・エクスポート・オプションの指定』

照会結果をファイルにエクスポートするときは、以下のオプションを 1 つ以上指定する必要があります。指定するオプションは、エクスポートするファイルのタイプによって異なります。

---

## リソース操作タスクの追加

リソース操作アクションを使用して、スケジュール・タスクにより生成されるリソースを自動的にコピー、貼り付け、削除、および E メール送信することができます。

### このタスクについて

リソース操作アクションをスケジュール・タスクに追加するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「タスク・リスト」ウィンドウでタスクを開きます。
2. 「アクションの追加」をクリックします。「アクション・ウィザード」が開きます。
3. 「アクション名」フィールドにアクションの名前を指定し、「リソース操作」をクリックしてから、「次へ」をクリックします。「リソース操作タイプの指定」ページが開きます。
4. 「コピー」または「メールの送信」をクリックしてから、「次へ」をクリックします。ウィザードの次のページが開きます。
5. 「コピー」または「E メール送信」オプションを指定して、「終了」をクリックします。「アクション・ウィザード」が閉じて、「タスク」ウィンドウに制御が戻ります。
6. 「OK」をクリックします。「タスク」ウィンドウが閉じて、「タスク・リスト」ウィンドウに制御が戻ります。
7. 「OK」をクリックします。「タスク・リスト」ウィンドウが閉じます。

## リソース・コピーのパラメーターの指定

リソース・コピー操作アクションを使用すれば、スケジュールされたタスクによって生成されたリソースを自動的にコピー、貼り付け、および削除できます。

## このタスクについて

リソース・コピーのパラメーターを指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「アクション・ウィザード」の「リソース操作タイプの指定」ページを開きます。
2. 「コピー」をクリックしてから「次へ」をクリックします。「リソース・コピーのパラメーターの指定」ページが開きます。
3. コピーするリソースを指定します。以下の 2 つのオプションがあります。
  - a. オブジェクトの静的なソース位置を指定するには、「パス」をクリックしてから、「ソース」領域の右下にある省略符号 (...) をクリックします。「開く」ウィンドウが開きます。
  - b. オブジェクトにナビゲートして、そのオブジェクトを選択し、「終了」をクリックします。「開く」ウィンドウが閉じます。
  - c. オブジェクトに対して条件付きソースの場所を指定するには、「公式」をクリックしてから、省略符号 (...) をクリックします。「公式エディター」が開きます。
  - d. オブジェクトのロケーションを決定するために使用する公式を指定して、「OK」をクリックします。「公式エディター」が閉じます。
4. リソースの保存場所を指定します。以下の 2 つのオプションがあります。
  - a. リソースの静的なソース宛先を指定するには、「パス」をクリックしてから、「ソース」領域の右下にある省略符号 (...) をクリックします。「別名保存」ウィンドウが開きます。
  - b. リソースとそのファイルを保存する場所にナビゲートし、「終了」をクリックします。「別名保存」ウィンドウが閉じます。
  - c. 「設定」ウィンドウの「サーバー・サイド・ファイル・システム」ページで「ルート出力ディレクトリー」が指定されている場合は、「パス」フィールドに、パスとファイル名、またはファイル名のみを入力できます。ファイルは自動的にこのルート・ディレクトリーにエクスポートされます。QMF for WebSphere で指定できるのは、管理者が設定したルート・ディレクトリー内のパスのみです。それ以外の場合、エクスポートは禁止され、エラーが発生します。
  - d. リソースに対して条件付きソースの宛先を指定するには、「公式」をクリックしてから、省略符号 (...) をクリックします。「公式エディター」が開きます。
  - e. リソースの保存場所を判別するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。「公式エディター」が閉じます。
5. ソースの場所から宛先の場所にリソースをカット・アンド・ペーストするには、「移動」チェック・ボックスを選択します。
6. 移動したリソースを格納する新規フォルダーを作成するには、「フォルダーの作成」チェック・ボックスを選択します。
7. タスク完了後に、移動したリソースのコピーを削除するには、「タスクの完了後に削除」チェック・ボックスを選択します。

- このリソースのコピーを E メールに自動的に添付できるようにする場合は、「添付ファイルとしてマーク」チェック・ボックスを選択します。
- 「終了」をクリックします。「アクション・ウィザード」が閉じて、制御が「タスク」ウィンドウに戻ります。

関連タスク:

31 ページの『エクスポート・アクションによって生成されたオブジェクトのディレクトリーの場所の設定』

さまざまな QMF アクションから生成されたオブジェクトがローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システム上の特定の場所にエクスポートされるように、QMF で設定を行うことができます。

## メール設定の指定

リソース・メール送信操作アクションを使用すれば、生成されたリソースを E メールで自動的に送信できます。

### このタスクについて

メール設定を指定するには、以下のようにします。

### 手順

- 「アクション・ウィザード」の「リソース操作タイプの指定」ページを開きます。
- 「メールの送信」をクリックしてから、「次へ」をクリックします。「メール設定の指定」ページが開きます。
- 本文テキストのフォーマットを「フォーマット」リストで指定します。使用可能なフォーマットは「テキスト」および「HTML」です。
- Eメールの宛先を「宛先:」フィールドに指定します。
- 追加の宛先を「cc:」フィールドに指定します。
- 「件名」フィールドに、Eメールの件名を指定します。
- Eメールのテキストを「メッセージ」フィールドに指定します。

イメージや、他の使用可能なタイプのファイルを添付できます。

Eメールのテキストに組み込みイメージを含めたい場合は、次の HTML スニペットをテキストに挿入する必要があります。

```
</img>
```

この *cid:* は、フォーマット設定された Eメール内で組み込みイメージを参照する際に必要となる標準のコンテンツ ID の省略形であり、*[image name]* はイメージ・ファイルの名前です。例えば、*image1.png* という名前のイメージ・ファイルを組み込むには、Eメールのテキストに以下の HTML スニペットを挿入します。

```
</img>
```

- Eメールの送信側の Eメール・アドレスを「送信元:」フィールドに指定します。

9. SMTP サーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP 設定」をクリックします。「SMTP 設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。
  - a. 事前定義された SMTP サーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストから必要なサーバーを選択するか、「サーバーの追加」をクリックして作成します。
  - b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTP サーバーに認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされる必要なキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。

「OK」をクリックして、「SMTP 設定」ウィンドウを閉じます。
10. 「追加」をクリックします。「パスをテキストまたは公式として入力」ウィンドウが開きます。
11. タスクによって E メールで送信するリソースへのパスを指定し、「OK」をクリックします。「パスをテキストまたは公式として入力」ウィンドウが閉じます。
12. 「添付」領域で、2 つのリストから必須指定のオプションを選択します。
  - a. 最初のリストから、自動的に追加する添付ファイルを選択します。使用可能なオプションは以下のとおりです。
    - 自動添付ファイルなし: リソースを自動的に添付しません。
    - マーク済みのみ添付: エクスポート操作またはコピー操作でマークされたリソースのみ添付します。
    - すべて添付: エクスポート操作またはコピー操作で作成されたすべてのリソースを添付します。
  - b. 2 番目のリストから、アクションの実行後に添付ファイルに適用する手順を選択します。使用可能なオプションは以下のとおりです。
    - 自動添付ファイルをすべてクリア: アクションの実行後に、自動的に送信されたすべての添付ファイルを削除します。
    - グループ内の自動添付ファイルをクリア: アクションの実行後に、Eメールの送信アクションによりアクションのグループに対して作成された自動添付ファイルをすべて削除します。
    - 自動添付ファイルをクリアしない: アクションの実行後にすべての自動添付ファイルを保管します。
13. 「終了」をクリックします。「アクション・ウィザード」が閉じて、「タスク」ウィンドウに制御が戻ります。

---

## アクション・グループの追加

アクション・グループを使用して、連続して実行する必要がある一連のアクションを作成することができます。

## 始める前に

アクション・グループを作成する前に、まずスケジュール・タスクを作成する必要があります。

## このタスクについて

アクション・グループをスケジュール・タスクに追加するには、以下のようになります。

### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「タスク」ウィンドウを開きます。
  - 「タスク」リストでタスクをダブルクリックします。
  - 「タスク」リストからタスクを選択し、「タスクの編集」をクリックします。
2. 「タスク」ウィンドウで、「アクションの追加」をクリックして、「アクション」ウィザードを開きます。
3. 「アクション名」フィールドに名前を入力します。
4. 「アクション・グループ」を選択してから、「終了」をクリックします。

## アクション・グループへのアクションの追加

アクション・グループにアクションを追加するには、ドラッグ・アンド・ドロップの方法を使用できます。

## 始める前に

アクション・グループを作成する必要があります。

アクションを作成する必要があります。

## このタスクについて

アクション・グループにアクションを追加するには、以下のようになります。

### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「タスク」ウィンドウを開きます。
  - 「タスク」リストでタスクをダブルクリックします。
  - 「タスク」リストからタスクを選択し、「タスクの編集」をクリックします。
2. 「タスク」ウィンドウで、グループに追加するアクションを選択します。
3. 選択したアクションをアクション・グループ項目にドラッグします。

## 次のタスク

次のセクション: イテレーター・パラメーターの設定

関連タスク:

272 ページの『オブジェクトの実行アクションの追加』

オブジェクトの実行アクションを使用して、照会、ビジュアル報告書、プロシージャ、または即時報告書を自動的に実行し、それをエクスポート、メール送信、または印刷することができます。

283 ページの『リソース操作タスクの追加』

リソース操作アクションを使用して、スケジュール・タスクにより生成されるリソースを自動的にコピー、貼り付け、削除、および E メール送信することができます。

## アクション・グループからのアクションの削除

アクション・グループからアクションを削除するには、ドラッグ・アンド・ドロップ方式を使用できます。

### 始める前に

アクション・グループを作成し、そのグループにアクションを取り込んでおく必要があります。

### このタスクについて

アクション・グループからアクションを削除するには、以下のようにします。

### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「タスク」ウィンドウを開きます。
  - 「タスク」リストでタスクをダブルクリックします。
  - 「タスク」リストからタスクを選択し、「タスクの編集」をクリックします。
2. 「タスク」ウィンドウで、編集するアクション・グループを展開します。
3. アクション・グループから削除するアクションを選択します。
4. 選択したアクションをアクション・グループの外側にドラッグします。

## イテレーター・パラメーターの設定

イテレーターを使用すれば、周期的に何度もアクション・グループを実行できます。イテレーター設定を管理するには、「イテレーター・パラメーター」ウィンドウを使用します。

### 始める前に

アクション・グループを作成する必要があります。

### このタスクについて

イテレーター・パラメーターを設定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「タスク」ウィンドウの「アクション」リストで、周期的に実行するアクション・グループを右クリックし、ポップアップ・メニューから「イテレーターの設定」を選択します。



2. イテレーターの「パラメーター」ウィンドウで、省略符号 (...) をクリックして、イテレーターの照会を指定します。

この照会の列ではイテレーター変数が定義されます。行数は反復数を示します。

3. 「開く」ウィンドウで、イテレーターの照会として使用するオブジェクトにナビゲートし、そのオブジェクトを選択します。

照会として以下のオブジェクトを使用できます。

- 図表
- ビジュアル照会
- 分析照会
- dynamart
- 複合 dynamart
- 表

4. 「終了」をクリックします。選択したオブジェクトへのパスが「照会パス」フィールドに表示されます。
5. 選択したオブジェクトを含むデータ・ソースが「データ・ソース」リストに追加されます。「ログイン」フィールドと「パスワード」フィールドでデータ・ソースのログイン情報を指定できます。
6. 別のデータ・ソースをリストに追加するには、以下の手順を実行します。
  - a. 「データ・ソースの追加」をクリックして、「データ・ソースの追加」ウィンドウを開きます。
  - b. 「データ・ソース」リストで、追加するデータ・ソースを選択します。
  - c. 「ユーザー名」フィールドと「パスワード」フィールドにログイン情報を入力します。
  - d. 「ユーザー名」フィールドに入力したユーザー ID のパスワードを QMF に記憶させるには、「パスワードを保存」チェック・ボックスを選択します。
7. 以前追加したデータ・ソースをリストから削除するには、対象のデータ・ソースを選択し、「データ・ソースの削除」をクリックします。
8. 「変数」リストで、「オブジェクトの実行」アクションで指定するソース・オブジェクトで使用されるプロンプトに照会列をリンクします。「プロンプト名」セルをクリックし、ドロップダウン・リストからプロンプトを選択します。
9. 「失敗時に続行」チェック・ボックスを使用して、エラーが発生したときにイテレーターの動作を続行するのかどうかを指定します。このチェック・ボックスが選択されている場合は、反復内でエラーが発生したときに、イテレーターはこの反復をスキップして動作し続けます。このチェック・ボックスがクリアされている場合にエラーが発生すると、イテレーターは動作を停止します。

注: エラー・メッセージはすべて「出力」ビューに表示できます。

10. 「OK」をクリックして、「イテレーター・パラメーター」ウィンドウを閉じます。

## 次のタスク

次: アクション・グループでのプロンプトの管理

関連タスク:

272 ページの『オブジェクトの実行アクションの追加』

オブジェクトの実行アクションを使用して、照会、ビジュアル報告書、プロシージャ、または即時報告書を自動的に実行し、それをエクスポート、メール送信、または印刷することができます。

## アクション・グループでのプロンプトの管理

各種データ・オブジェクト (パラメーターを含む照会、即時報告書、ビジュアル報告書、プロシージャなど) を実行するスケジュール・タスクを作成できます。

### このタスクについて

タスクに指定されたソース・オブジェクトにパラメーター値を渡す方法を定義するには、「共有プロンプトの管理」ウィンドウを使用します。

注: オブジェクトのタイプに応じて、パラメーターはさまざまなエレメントで表されます。照会のパラメーターは、これらの照会に定義されたプロンプトです。即時報告書およびビジュアル報告書のパラメーターは、これらの報告書の基となっている照会に指定されたプロンプトです。プロシージャのパラメーターは、これらのプロシージャに定義されている変数です。

ソース・オブジェクトで使用する、類似したプロンプトをまとめてグループ化できます。これにより、1 つのプロンプト・グループ内のすべてのプロンプトが、このグループに渡された値を受け取ります。デフォルトでは、アクション・グループ内のソース・オブジェクトに含まれるプロンプトと同じ数のグループが存在します。各グループは特定のプロンプトを 1 つ保管し、そのプロンプトの名前を借用します。プロンプトは、グループ間で移動できます。空のグループは許可されないため、グループから最後のプロンプトが移動されると、そのグループは自動的に削除されます。

アクション・グループを作成し、オブジェクトの実行アクションをグループに取り込んでおく必要があります。

共有プロンプトを管理するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「タスク」リストからタスクを選択し、「タスクの編集」をクリックして「タスク」ウィンドウを開きます。
2. 「タスク」ウィンドウで、アクション・グループを右クリックしてから、「プロンプトの管理」を選択します。
3. 「共有プロンプトの管理」ウィンドウの「使用可能なプロンプト」リストから、グループに追加するプロンプトを選択します。
4. 「共有プロンプト」リストから、プロンプトを追加するグループを選択します。

5. 「グループに追加」をクリックします。選択したプロンプトがプロンプト・グループに追加されます。
6. プロンプト・グループからプロンプトを削除するには、「共有プロンプト」リストからプロンプトを選択した後、「プロンプトのデタッチ」をクリックします。
7. プロンプト・グループの名前を変更するには、名前変更するプロンプト・グループを選択してから、「プロンプト・グループの名前変更」をクリックします。
8. 「プロンプト・グループ」ウィンドウで、表示する名前およびストリングを指定してから、「OK」をクリックします。
9. 「共有プロンプト」リスト内のプロンプト・グループの順序を変更するには、プロンプト・グループのノード、またはグループ内のプロンプトを選択し、「プロンプト・グループを上へ移動」または「プロンプト・グループを下へ移動」をクリックします。
10. アクション・グループのイテレーター照会を追加し、アクション・グループ内のアクションに指定した、ソース・オブジェクトで使用されているパラメーターを含む照会列にリンクします。

関連タスク:

98 ページの『照会でのプロンプトの操作』

照会または dynamart が特定の値または範囲にフォーカスするように指示するプロンプトを追加することによって、照会または dynamart をフィルター処理できます。これにより、照会するデータの量が制限され、照会の結果を絞り込むことができます。フィルター処理はデータベース・レベルで機能します。

---

## アクションおよびアクション・グループの変数の指定

各種データ・オブジェクト (パラメーターを含む照会、即時報告書、ビジュアル報告書、プロシージャーなど) を実行するスケジュール・タスクを作成できます。

### このタスクについて

タスクで指定されたソース・オブジェクトにパラメーター値をどのように渡さなければならないのかを定義するには、「変数の設定」ウィンドウを使用します。また、アクションで指定されたパラメーター自体を置換変数として使用することもできます。例えば、パラメーターを使用することでファイル・システム・パスを形成できます。

注: オブジェクトのタイプに応じて、パラメーターはさまざまなエレメントで表されます。照会の場合、パラメーターは、照会に対して定義されたプロンプトです。即時報告書およびビジュアル報告書の場合、パラメーターは、報告書が基づいている照会に指定されたプロンプトです。プロシージャーの場合、パラメーターは、プロシージャーで定義されている変数です。

パラメーター値は、アクション・グループと単一アクションの両方に対して設定できます。また、同じグループにイテレーターを設定することもできます。単一アクションによって提供されたパラメーターが優先され、次に、グループに対して設定されたパラメーター値、その次に、イテレーターによって設定されたパラメーター値の順で使用されます。

パラメーター値を指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「タスク」リストからタスクを選択し、「タスクの編集」をクリックして「タスク」ウィンドウを開きます。
2. 「タスク」ウィンドウで、「変数の設定」ツールバー・ボタンをクリックします。選択されたデータ・オブジェクトに対して指定されているすべてのパラメーターが、「変数の設定」ウィンドウのパラメーター・リストに表示されます。

注: 共有プロンプトがすでに割り当てられているアクション・グループにパラメーター値を設定する場合は、ソース・オブジェクトに定義されているパラメーターではなく、指定された共有プロンプトが表示されます。

3. パラメーターを追加するには、「変数の追加」をクリックして、「変数の追加」ウィンドウでパラメーターの名前と値を指定します。
4. 変数を編集または削除するには、編集または削除する変数を選択し、「編集」または「削除」をクリックします。
5. パラメーター値を設定するには、「変数の追加」ウィンドウまたは「変数の編集」ウィンドウを開き、「値」フィールドに定数値または公式を入力します。公式エディター・ウィンドウを開くには、「値」フィールドの横にある省略符号 (...) をクリックします。

注: また、「変数の設定」ウィンドウに直接、パラメーター値を設定できます。それには、単にパラメーター・テーブルの必須セルにパラメーター値を入力するだけです。

6. 「上へ移動」や「下へ移動」をクリックすれば、パラメーターの計算順序を変更できます。パラメーターは、リストに表示されているとおりに順番に計算されます。すでに計算されているパラメーターは、他のパラメーターを計算するために使用できます。
7. 「OK」をクリックして、「変数の設定」ウィンドウを閉じます。

---

## スケジュール済みタスクについてのユーザー資格情報の編集

スケジュール済みタスクで使用されるリポジトリ、リポジトリ接続、およびデータ・ソースについてのユーザー資格情報を変更できます。

### このタスクについて

ユーザー名とパスワードなどのユーザー情報は、リポジトリおよびデータ・ソースにアクセスしたり、リポジトリ接続を確立したりするために、スケジュール済みタスクで使用されます。このユーザー情報は、セキュリティ上の理由で定期的に変更されます。1 つまたは複数のリポジトリ、リポジトリ接続、またはデータ・ソースについてのユーザー資格情報を変更するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. メインメニューから「表示」 > 「スケジュール・タスク」を選択します。「タスク・リスト」ウィンドウが開きます。

2. 編集するユーザー資格情報を持つタスクを選択し、「タスク資格情報」をクリックします。「タスク資格情報」ウィンドウが開きます。
3. ユーザー資格情報の編集が必要なリポジトリ、リポジトリ接続、またはデータ・ソースを表示するには、「タスク資格情報を指定します」ページですべてのチェック・ボックスを選択し、「妥当性検査」をクリックします。
4. ユーザー名およびパスワードを編集するリポジトリ、リポジトリ接続、またはデータ・ソースをダブルクリックします。「ユーザー情報」ウィンドウが開きます。
5. 選択されたオブジェクトについての新しいユーザー資格情報を指定し、「OK」をクリックします。

注: 同じユーザーに関連付けられているすべてのリポジトリ、リポジトリ接続、またはデータ・ソースのパスワードを変更する場合は、「このユーザーの [ObjectName] パスワードをすべて変更」チェック・ボックスを選択します。

6. 入力されたユーザー情報が正しいことを確認するには、「タスク資格情報」ウィンドウで編集済みオブジェクトのチェック・ボックスを選択し、「妥当性検査」をクリックします。
7. 「OK」をクリックします。

---


## スケジュール・タスクのコピー

既存のスケジュール・タスクをコピーして変更することにより、スケジュール・タスクを追加できます。

### このタスクについて

スケジュール・タスクをコピーするには、以下のようにします。

### 手順

1. 「ビュー」 > 「スケジュール・タスク」を選択します。「タスク・リスト」ウィンドウが開きます。
2. 「タスク」リストから、コピー対象のタスクを選択し、「コピー」()をクリックします。「タスク」ウィンドウが開きます。

注: コピーするタスクは「タスク」リストから 1 つのみ選択できます。

3. 「タスク名」フィールドで、コピーするタスクの名前を入力します。
4. 「リポジトリ接続」リストから、タスク・アクセス先のリポジトリの接続を選択します。
5. 「ユーザー情報の設定」をクリックして、「リポジトリのユーザー情報の設定」ウィンドウでリポジトリのログイン名とパスワードを指定します。
6. 「アクション」リストで、タスクとともにコピーするアクションを編集、追加、または除去できます。

注: スケジュール・タスク実行の時間設定はコピーされません。

7. 「OK」をクリックします。スケジュール・タスクがコピーされて、「タスク・リスト」ウィンドウの「タスク」リストに追加されます。

---

## ローカル・タスクのスケジュール

ご使用のオペレーティング・システムに固有のスケジューラー・ウィンドウまたは特定のアプリケーションのスケジュール・タスク・ウィンドウを使用して、実行するタスクをスケジュールします。

### 始める前に

スケジュールするタスクを用意しておく必要があります。

### このタスクについて

「設定」ウィンドウの「一般」タブで「ネイティブ」を選択すると、タスクをスケジュールするために、QMF がオペレーティング・システムの組み込みスケジューラーと統合されます。使用可能な組み込みスケジューラーについては、ご使用のオペレーティング・システムの資料を調べるか、またはスケジューラー・ウィンドウのコンテキスト・ヘルプを使用してください。

制約事項: 「ネイティブ」が選択されている場合、ユーザー・アカウント制御が無効に設定されている Windows 7 または Windows Vista にインストールされている 64 ビット・アプリケーションではスケジュール・タスクは予定通りに実行されません。

「設定」ウィンドウの「一般」タブで「**QMF for Workstation** スケジューラー」を選択すると、アプリケーションのスケジュール・タスク・ウィンドウが開きます。

QMF for Workstation スケジューラーでタスクをスケジュールするには、以下のようになります。

### 手順

1. 「ビュー」 > 「スケジュール・タスク」を選択します。「タスク・リスト」ウィンドウが開きます。
2. 「ローカル・タスク」タブで、スケジュールするタスクを選択し、「タスクをスケジュールします」をクリックします。
3. 「ユーザー」フィールドと「パスワード」フィールドに、オペレーティング・システムのユーザー名とパスワードを入力します。
4. オプション: 「作業ディレクトリー」フィールドに、タスクの実行時に作成される一時ファイルのディレクトリーを指定します。
  - 「完了時に削除」チェック・ボックスを選択すると、タスクの実行後にスケジューラー・ウィンドウからそのタスクが削除されます。
  - 「ログオン時にのみ実行」チェック・ボックスを選択すると、「ユーザー」および「パスワード」フィールドに指定された資格情報を持つユーザーがオペレーティング・システムにログオンしている場合にのみタスクが実行されます。
  - 「無効」チェック・ボックスを選択すると、タスクの実行が無効になります。
5. 「スケジュール」リストにタスクに適用するスケジュールを指定します。
6. スケジュールを追加するには、「スケジュールの追加」をクリックします。

7. オプション: 不要なスケジュールを除去するには、「スケジュールの除去」をクリックします。
8. 「スケジュールのタイプ」リストからタスクの実行頻度を選択します。
9. 「スケジュールのタイプ」リストの隣の領域に頻度の詳細を指定します。オプションは、選択したスケジュール・タイプに応じて異なります。
10. 「OK」をクリックして、スケジューラー・ウィンドウを閉じます。

---

## リモート・タスクをスケジュール

リモート・スケジュール・タスクを使用すれば、リモート・サーバーを利用することで照会を実行して照会結果をエクスポートするなど、さまざまな操作を実行できます。

### このタスクについて

リモート・タスクを操作するには、以下の前提条件に従います。

### 手順

1. QMF for WebSphere をリモート・サーバーとして使用するには、QMF for WebSphere への Web サービス接続が必要です。
2. 「ビュー」 > 「スケジュール・タスク」を選択します。「タスク・リスト」ウィンドウが開きます。
3. 「リモート・タスク」タブの「リポジトリ接続」リストからリモート・タスク用の接続を選択します。
4. スケジュールするタスクを選択し、「タスクのスケジュール」をクリックします。
5. 「スケジュール」リストにタスクに適用するスケジュールを指定します。
6. スケジュールを追加するには、「スケジュールの追加」をクリックします。
7. オプション: 不要なスケジュールを除去するには、「スケジュールの除去」をクリックします。
8. 「スケジュールのタイプ」リストからタスクの実行頻度を選択します。
9. 「スケジュールのタイプ」リストの隣の領域に頻度の詳細を指定します。オプションは、選択したスケジュール・タイプに応じて異なります。
10. タスクの実行を無効/有効にするには、「タスクを無効にする」チェック・ボックスを選択したりクリアしたりします。
11. 「OK」をクリックして、スケジューラー・ウィンドウを閉じます。

---

## 失敗したタスクに関する E メール通知を指定

失敗したタスクに関するデバッグ情報とともに特定のアドレスに送信される E メール通知を指定できます。

### このタスクについて

特定のタスク失敗に関する E メール通知を指定するには、以下のようになります。

## 手順

1. 「タスク・リスト」ウィンドウで、通知の追加先となるタスクを選択し、「E メール通知」ボタンをクリックします。
2. 「タスク通知設定」ウィンドウで「タスクが失敗した場合に E メール通知を送信」チェック・ボックスを選択します。
3. 「事前定義設定の使用」オプションを選択して、「設定」ウィンドウの「E メール通知」領域にある「E メール」ページで管理者がグローバルに設定した構成のいずれかを使用します。

注: リモート・タスクの場合、設定は Web サーバーで指定する必要があります。

- a. 通知で使用する構成を選択します。
  - b. リストが空の場合は、「設定の追加」をクリックすることでグローバル構成を追加できます。グローバル構成が追加され、「設定」ウィンドウの「E メール通知」領域にある「E メール」ページで使用可能になります。
4. 「カスタム」オプションを選択して、この特定タスクの通知設定を指定します。
  5. 「メッセージ・プロパティ」領域で、以下の設定を指定します。
    - 本文テキストのフォーマットを「フォーマット」リストから選択します。使用可能な形式は、「テキスト」と「HTML」です。
    - E メールを送信する必要がある送信先アドレスを「宛先」フィールドに指定します。
    - Eメールの写しを送信する必要がある送信先アドレスを「cc」フィールドに指定します。
    - Eメールを送信する必要がある送信元アドレスを「送信元」フィールドに指定します。
  6. SMTP サーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP 設定」をクリックします。「SMTP 設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。
    - a. 事前定義された SMTP サーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストからサーバーを選択するか、「サーバーの追加」をクリックしてサーバーを作成します。
    - b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTP サーバーに認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされるキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。

「OK」をクリックして、「SMTP 設定」ウィンドウを閉じます。
  7. サポート・データを E メール添付ファイルに組み込んで送信する場合は、「サポート・データの添付」チェック・ボックスを選択します。
  8. 「OK」をクリックして、指定した通知設定を保管します。指定した通知が、「タスク・リスト」ウィンドウの「E メール通知」列に表示されます。



---

## 旧ジョブ定義ファイルの変換

QMF for Windows を使用して作成されたジョブ定義ファイルは、QMF for Workstation を使用して実行する前に、まず新規フォーマットに移行する必要があります。

### このタスクについて

旧ジョブ定義ファイルを新規フォーマットに移行するには:

#### 手順

1. 「ファイル」 > 「インポート」を選択します。「インポート」ウィザードが開きます。
2. 「ジョブのインポート・ウィザード」を選択します。「次へ」をクリックします。「インポート用の JDF ファイルを指定します」ページが開きます。
3. 「ジョブ・ファイル・ディレクトリー」に、旧ジョブ定義ファイル (.jdf) が見つかるディレクトリーを指定します。「参照」ボタンを使用してディレクトリーを検索できます。
4. 新規フォーマットに移行させるジョブ・ファイルを、「ジョブ・ファイル」リストから選択します。ディレクトリー内にある各 .jdf ファイルは、「ジョブ・ファイル」リストにリストされます。
5. 「次へ」をクリックします。 .jdf ファイルを移行する準備が整います。ウィザードの「サーバー・マッピング」ページが開きます。
6. 新規フォーマットへの移行が完了する前に、タスクで使用されるデータ・ソースを識別する必要があります。QMF for Windows では、データ・ソースはサーバーと呼ばれており、サーバー定義ファイル (SDF) で定義されていました。旧ジョブ・ファイルで使用される各サーバーは、SDF に表示されるとおりに、「サーバー・マッピング表」の「**QMF** サーバー」セルにリストされます。これらのサーバーは、リポジトリー内でデータ・ソースとして構成される必要があります。これは通常、QMF for Workstation 管理者によって実行されます。「サーバー・マッピング表」の「リポジトリー・データ・ソース」セルで、リポジトリーで構成されたサーバーのデータ・ソース名を指定します。
7. データ・ソースにログインするために使用する名前とパスワードを指定するには、データ・ソースを選択し、「ユーザー情報の設定」をクリックします。「ユーザー情報の設定」ウィンドウが開きます。名前とパスワードを指定します。「**OK**」をクリックします。情報が「サーバー・マッピング表」の「リポジトリー・データ・ソース」セルにリストされます。
8. 「次へ」をクリックし、新規タスク・ファイル (.jdfx) の保存場所のディレクトリーを、「出力ディレクトリー」フィールドに指定します。「参照」ボタンを使用してディレクトリーを検索できます。
9. ジョブ・ファイルの新規フォーマットへの移行プロセスを完了した後に、以下のいずれかの方法でタスクを実行できます。
  - オペレーティング・システムのスケジューラーまたは QMF for Workstation のスケジューラーを使用して、QMF for Workstation ファイル (.jdfx) をタスクとしてスケジュールします。詳しくは、『スケジュール・タスクの操作』のトピックを参照してください。

- QMF for Workstation コマンド・ライブラリー・インターフェースを使用して、ファイル (.jdfx) を実行します。詳しくは、API ヘルプの『コマンド・ライブラリー・インターフェースからのタスクの実行』を参照してください。

---

## 第 13 章 予測の操作

予測により、時系列の履歴データの将来の値を予想できます。

予測機能を使用することで、過去の値に基づいて将来の値を予測できます。企業は、予測を使用して時系列の履歴データを分析し、パフォーマンスおよび将来の傾向を予測することで、経済または競合条件の変化に備えることができます。例えば、サプライ・チェーンにおいて、予測需要が実際の需要と一致すれば、生産、物流、および返品面で大幅な効率の向上を達成できます。

QMF の予測では、時系列の履歴データを基に将来の需要をモデル化する数学アルゴリズムに基づく、さまざまな予測方式が使用されます。履歴データは日付または時刻の列を含む照会および表から取得できます。全体の目的は、過去の値の最適なモデルを作成する時系列方式を選択することです。これは、データから既存のパターンを識別し、このモデルを将来に投影して予測を作成することによって行います。

以下の方式を使用して、将来の値を予測できます。

- 時系列に比較的定常性があり、系列の一部を他の部分と比べても、全体的な傾向に変動が見られない場合、「移動平均」、「加重移動平均」、または「単一指数平滑法」が最適なモデルを提供します。
- 時系列に、時間とともに一貫して上方または下方に移動する傾向が見られる場合、「二重指数平滑法」が最適なモデルを提供します。
- 系列に、通常は 1 年以下の時間フレームにわたって反復される、ピークと谷のパターンを持つ傾向および季節性が見られる場合、「Holt-Winters 法」が最適なモデルを提供します。
- 系列に、通常は 1 年を超える長い時間フレームにわたって反復される、ピークと谷のパターンを持つ傾向、季節性、および循環性が見られる場合、「乗法分解方式」が最適なモデルを提供します。
- 前述の方式がいずれも当てはまらない系列の場合は、履歴データを数学的に適合させるため、「ニューラル・ネットワーク」が使用されます。
- データが明確な数学関数に従うものであることを示す理論的な理由が存在する場合は、「カーブ・フィッティング方式」の 1 つを使用できます。
- 前述の方式に加えて、予測者が、予測者の知識と外部イベントに基づき、予測された値を手動で調整することもできます。

多くの新規ユーザーが見い出すように、迅速に作図して各予測方式を比較する機能は、QMF の予測の主要機能です。ただし、予測者の知識と経験は可能性を限定するために役立ち、結果として予測の信頼性が大きく向上します。

---

### 予測の作成

予測エディターを使用すれば、予測を作成できます。「予測」エディターの「グループ」ページおよび「モデル」ページを使用して、予測モデルを設定します。

## このタスクについて

予測を作成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 以下の方法のいずれかを使用して、「予測」 エディターを開きます。
  - エディター・ウィンドウにアクティブ照会が表示された状態で、「照会」 > 「転送先」 > 「予測」を選択します。
  - 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。

「新規」ウィザードが開きます。「QMF オブジェクト」フォルダーから、「予測ウィザード」を選択します。

- 「新規予測」 ツールバー・アイコンをクリックします。

別のタブで「予測」エディターが開きます。

2. 履歴データのソースとして使用する、照会または表を選択します。
3. 「日付パラメーター」オプションを指定します。
4. 予測モデルのグループ化を指定します。

「グループ化階層」は、グループ化する値と、それらの順序を指定するために使用します。例えば、ワインの販売の場合、ワインを種類別にグループ化してからロケーション別にグループ化するか、ロケーション別にグループ化してから種類別にグループ化します。

5. 予測対象の値および集約方式を含む照会列を指定します。
6. 予測モデルの構成戦略と配布戦略を指定します。
  - 「構成戦略」を使用して、トップダウンまたはボトムアップのいずれかの方法を指定します。この場合、ルート・ノードは階層ツリー・ダイアグラムの上位にあり、リーフ・ノードは下位にあります。
  - 「配布戦略」には、トップダウン (つまり、ルート・ノードからリーフ・ノードへ) の構成戦略を使用して予測値をどのように配布するかを指定します。
7. 使用する予測モデル、およびその関連パラメーターを含めて、「予測モデル」のオプションを指定します。
8. ツールバーの「予測の実行」をクリックします。予測をグラフ化したものが「結果」エディターに表示されます。
9. 1 つ以上の予測モデルを試して、最適なものを判別します。妥当性検査には、以下の方式があります。
  - パフォーマンス測定値を使用した予測モデルの妥当性検査。

以下の 5 つのパフォーマンス測定値を比較基準として使用できます。

- 累積予測誤差
- 平均絶対偏差
- 平均二乗誤差
- 平均絶対率誤差
- トラッキング信号

多くの場合は、「平均二乗誤差」が比較基準として使用されます。

- 観測された傾向、季節性、および循環性に基づく予測モデルの時系列エレメントの妥当性検査。

傾向の場合は、下位ノードで観測された傾向が、予測全体の予測モデルの選択に影響する可能性があります。例えば、新製品のマーケティングでは、特定の傾向が見られない、または傾向にひずみがある、幅広く多様な購買層ではなく、観測可能な傾向を示している代表的な購買層に絞って予測モデルを作成する方が効果的であると考えられます。

10. 予測をファイルまたはリポジトリに保存します。

注: 分析照会、プロンプト階層、ドリルダウン・パス、即時報告書、およびビジュアル・プロジェクトを作成するときに、保存済みの予測を照会オブジェクトとして使用できます。

---

## 予測のデータ・ソース・オプションの指定

「グループ」ページの「データ・ソース」ペインを使用して、予測のデータ・ソースを指定します。

### このタスクについて

予測を作成してデータ・ソース・オプションを指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 日付形式の列を少なくとも 1 つ含むアクティブなデータ・オブジェクトがエディター・ウィンドウに表示された状態で、「照会」 > 「転送先」 > 「予測」を選択します。「予測」エディターが開きます。照会を組み込むことを選択するか、またはリンク先の照会を選択できます。組み込みデータ・オブジェクトは、予測とは別に保存されます。予測の作成後にオリジナルのソースに加えられた更新は反映されません。リンクされたデータ・オブジェクトは、データ・ソースと保存された予測の間のリンクを作成します。オリジナルのソースに加えられた更新は、予測に自動的に反映されます。
2. 組み込むデータ・オブジェクトを指定するには、「組み込み」を選択して、「インポート」をクリックします。「開く」ウィンドウが開きます。
3. 予測に組み込むデータ・オブジェクトまでナビゲートして、そのデータ・オブジェクトを選択し、「終了」をクリックします。「開く」ウィンドウが閉じます。
4. 「新規」をクリックします。新規照会が「SQL」エディターで開きます。予測に組み込む照会を作成して保存します。
5. 「編集」をクリックします。組み込みオブジェクトがエディターで開きます。オブジェクトを編集して保存します。
6. 「リンク」を選択した場合は、「パス」フィールドの横の省略符号 (...) をクリックします。「開く」ウィンドウが開きます。
7. 予測にリンクするオブジェクトまでナビゲートして、そのオブジェクトを選択し、「終了」をクリックします。「開く」ウィンドウが閉じ、照会へのパスが「パス」フィールドに表示されます。

注: 組み込む照会、またはリンク先の照会には、日付形式の列が少なくとも 1 つ含まれていなければなりません。

---

## 予測の日付パラメーターの指定

「グループ」ページの「日付パラメーター」ペインを使用して、予測の日付範囲オプションを指定します。

### このタスクについて

予測の日付パラメーターを指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「予測」エディターの「グループ」ページを開きます。
2. 「日付列」リストから、予測値の作成に使用する日付形式の列を選択します。

注: 「日付列」リストでは、日付形式の列のみが選択可能です。

使用可能な日付形式は、以下のとおりです。

- YYYYxMMxDD
- MMxDDxYYYY
- DDxMMxYYYY
- YYxMMxDD
- MMxDDxYY
- DDxMMxYY

使用可能な時刻形式は、以下のとおりです。

- HHxMMxSS
- HHxMM

使用可能なタイム・スタンプ形式は、以下のとおりです。

- YYYYxMMxDD HHxMMxSS
- DDxMMxYYYY HHxMMxSS
- YYYYxMMxDD HHxMM
- DDxMMxYYYY HHxMM
- YYxMMxDD HHxMMxSS
- DDxMMxYY HHxMMxSS
- YYxMMxDD HHxMM
- DDxMMxYY HHxMM

3. 予測値の計算に使用する履歴データ値を「履歴データ」リストから選択します。使用可能なオプションは以下のとおりです。
  - a. すべてのデータ: このオプションは、すべてのデータ値を予測値の計算に使用することを指定する場合に選択します。
  - b. 開始日: このオプションは、予測値の計算に使用される開始データ値を指定する場合に選択します。「開始日」カレンダー・フィールドに開始日を入力

します。「終了日」カレンダー・フィールドに終了日を入力することもできます。この場合、開始日と終了日の間に取得されたデータ値が予測値の計算に使用されます。

- c. 最後: このオプションは、最後のいくつかの期間のデータ値を予測値の計算に使用することを指定する場合に選択します。最後の期間の数を「期間」フィールドで指定します。
4. 「期間」リストから、データ値を集約する期間を選択します。
5. 「今後の期間の数」フィールドで、予測値を計算するための期間の数を指定します。

---

## 予測のグループ化階層オプションの指定

予測データをグループ化する列を指定するには、「グループ」ページの「グループ化階層」ペインを使用します。

### このタスクについて

グループ化階層オプションを指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「予測」エディターの「グループ」ページを開きます。
2. 「使用可能な列」リスト・ボックスから 1 つ以上の列を選択して、「>」ボタンをクリックします。1 つ以上の列が、「選択した列」リスト・ボックスに追加されます。
3. 「選択した列」リスト・ボックスから 1 つ以上の列を選択して、「<」ボタンをクリックします。1 つ以上の列が「選択した列」リスト・ボックスから削除され、「使用可能な列」リスト・ボックスに戻ります。
4. 選択したすべての列を追加または削除するには、「>>」ボタンまたは「<<」ボタンをクリックします。
5. 選択した列の順序を変更するには、「選択した列を上へ移動」または「選択した列を下へ移動」をクリックします。
6. 「実行」ツールバー・ボタンをクリックして、予測を実行します。ハイレベルの要約が予測に表示されます。

注: 他の階層レベルの結果を参照するには、予測で表示するレベルを「概要」ビューで選択します。

---

## 予測戦略のオプションの指定

「予測」エディターの「戦略」ペインを使用して、予測データのフォーマット設定の方法を指定します。

### このタスクについて

戦略のオプションを指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「予測」エディターの「モデル」ページを開きます。

2. 「予測列」ドロップダウン・リストから、予測対象の値を含む列を選択します。「予測列」ドロップダウン・リストには、使用可能なすべての数値列が表示されています。
3. 「集約戦略」ドロップダウン・リストで、予測値の集約方法を指定します。集約戦略は、予測対象である値列のタイプに大きく依存します。ほとんどの場合は、「グループ合計」オプションを使用します。ただし、温度を集約する場合など、「グループ平均」オプションを使用する状況もあります。
4. 「構成戦略」ドロップダウン・リストで、予測モデルの構成方法を指定します。「リーフ」を選択した場合、モデルはリーフ・レベルで計算され、ボトムアップの方法を使用して上方へ集約されます。報告書の下位レベルに完全な履歴がある場合 (例えば、最下位レベルに NULL を含まないリッチ・データ・セットがある場合) は、この戦略が最も効果的です。「ルート」を選択した場合、モデルはルート・レベルで計算され、トップダウンの方法を使用してリーフ・ノードに配布されます。ルート・レベルの戦略は、小さいデータ・セットがある場合により効果的です。
5. 「ルート」構成戦略を選択した場合は、「配布戦略」ドロップダウン・リストで、ルート・レベルの予測値をリーフ・レベルに配布する方法を選択します。使用可能な値は以下のとおりです。
  - 等しい - ルート・レベルの予測を各リーフ・レベルに等分に配布します。
  - 履歴合計 - 履歴データ・セット全体に対する各グループの寄与分の合計に従って、比例的にルートの値予測をサブレベルに配布します。
  - 最新期間 - ルートの値予測を最新の予測期間に配布します。

---

## 予測モデルのオプションの指定

予測データの計算に使用する予測モデルを指定するには、「予測」エディターの「予測モデル」ペインを使用します。

### このタスクについて

予測モデルのオプションを指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 予測エディターの「モデル」ページを開きます。
2. 「追加」をクリックします。「予測」ウィザードの「予測モデルの選択」ページが開きます。
3. 予測モデルを選択します。使用可能な予測モデルは以下のとおりです。
  - 単純移動平均
  - 加重移動平均
  - 単一指数平滑法
  - 二重指数平滑法
  - Holt-Winters 法
  - 乗法分解
  - カーブ・フィッティング
  - 多項式回帰



- ニューラル・ネットワーク
4. 「次へ」をクリックします。指定した予測モデルのパラメーター・ページが開きます。
  5. 予測モデルのパラメーターを指定して、「終了」をクリックします。「予測」ウィザードが閉じ、「予測モデル」表に予測モデルが表示されます。
  6. 「予測モデル」表から予測モデルを削除するには、「モデルの削除」をクリックします。
  7. 予測モデルのパラメーターを編集するには、以下の手順を実行します。
    - a. 予測モデルを選択して、「モデルの編集」をクリックします。選択した予測モデルのパラメーター・ページが開きます。
    - b. 予測モデルのパラメーターを編集して、「終了」をクリックします。「予測」ウィザードが閉じ、変更が保存されます。
  8. 予測モデルをコピーするには、「モデルのコピー」をクリックします。モデルが複製され、「予測モデル」表に表示されます。この機能は、同じタイプの複数のモデルを、毎回わずかに異なるパラメーターを使用してテストする場合に便利です。

## 単純移動平均のパラメーターの設定

移動平均は、過去の複数の期間の平均を使用して各期間の値を予測することで、時系列を平滑化します。

### このタスクについて

単純移動平均のパラメーターを指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 予測エディターの「モデル」ページを開きます。
2. 「追加」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「予測モデルの選択」ページが開きます。
3. 「単純移動平均」をクリックして、「次へ」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「単純移動平均」ページが開きます。
4. 「期間の数」ドロップダウン・リストから、移動平均の計算に使用する過去の期間の数を選択します。
5. 「終了」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードが閉じ、表に予測モデルが表示されます。

## 加重移動平均のパラメーターの設定

加重移動平均は、過去の複数の期間の加重平均を使用して各期間の値を予測することで、時系列を平滑化します。

### このタスクについて

加重移動平均のパラメーターを指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 予測エディターの「モデル」ページを開きます。

2. 「追加」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「予測モデルの選択」ページが開きます。
3. 「加重移動平均」をクリックして、「次へ」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「加重移動平均」ページが開きます。
4. 「期間の数」ドロップダウン・リストで、移動平均の計算に使用する過去の期間の数を指定します。
5. 表の「重み」列に、過去の各期間の重みを指定します。期間は、古いものから新しいものの順にリストされています。例えば、リストの最後の期間に大きな重みを与えると、最新データの重大度がそれ以前のデータと比較して高まります。
6. 「終了」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードが閉じ、表に予測モデルが表示されます。

## 単一指数平滑法のパラメーターの設定

単一指数平滑法は、一連の期間において期間ごとに重みが指数的に減少する、加重移動平均の 1 つのタイプです。

### このタスクについて

単一指数平滑法のパラメーターを指定するには、以下のようにします。

#### 手順

1. 予測エディターの「モデル」ページを開きます。
2. 「追加」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「予測モデルの選択」ページが開きます。
3. 「単一指数平滑法」をクリックして、「次へ」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「単一指数平滑法」ページが開きます。
4. 「指数平滑法定数」フィールドに値を指定します。この数値は 0 から 1 の間である必要があります。高い値は、最近の期間により大きな重みを適用し、低い値は、過去のデータにより大きな重みを適用します。
5. 「終了」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードが閉じ、表に予測モデルが表示されます。

## 二重指数平滑法のパラメーターの設定

二重指数平滑法を使用して、以前の値と、以前の値間の傾向の両方に、指数的に減少する重みを適用できます。

### このタスクについて

二重指数平滑法のパラメーターを指定するには、以下のようにします。

#### 手順

1. 予測エディターの「モデル」ページを開きます。
2. 「追加」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「予測モデルの選択」ページが開きます。
3. 「二重指数平滑法」をクリックして、「次へ」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「二重指数平滑法」ページが開きます。

4. 「指数平滑法定数」フィールドに値を指定します。この数値は 0 から 1 の間である必要があります。高い値は、最近の期間により大きな重みを適用し、低い値は、過去のデータにより大きな重みを適用します。
5. 「傾向平滑化定数」フィールドに値を指定します。この数値は 0 から 1 の間である必要があります。高い値は、最近の傾向により大きな重みを適用し、低い値は、過去の傾向により大きな重みを適用します。
6. 「終了」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードが閉じ、表に予測モデルが表示されます。

## Holt-Winters 法のパラメーターの設定

Holt-Winters 法を使用して、季節性を反映した加重指数平滑法を適用できます。

### このタスクについて

Holt-Winters 法のパラメーターを指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「モデル」エディターで予測を開きます。
2. 「追加」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「予測モデルの選択」ページが開きます。
3. 「**Holt-Winters 法**」をクリックして、「次へ」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「Holt-Winters 法」ページが開きます。
4. 「季節性頻度」ドロップダウン・リストから、データが季節的影響を受けると予想される頻度を選択します。
5. 「平滑化定数 (アルファ)」フィールドに値を指定します。この数値は 0 から 1 の間である必要があります。高い値は、最近の期間により大きな重みを適用し、低い値は、過去のデータにより大きな重みを適用します。
6. 「季節性定数 (ベータ)」フィールドに値を指定します。この数値は 0 から 1 の間である必要があります。高い値は、最近の期間により大きな重みを適用し、低い値は、過去のデータにより大きな重みを適用します。
7. 「傾向定数 (ガンマ)」フィールドに値を指定します。この数値は 0 から 1 の間である必要があります。
8. 「終了」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードが閉じ、表に予測モデルが表示されます。

## 乗法分解のパラメーターの設定

乗法分解は、データから傾向、季節性、および循環性の情報を抽出し、これらのエレメントを使用して将来の値を予測します。

### このタスクについて

乗法分解のパラメーターを指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「モデル」エディターで予測を開きます。

2. 「追加」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「予測モデルの選択」ページが開きます。
3. 「乗法分解」をクリックして、「次へ」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「乗法分解」ページが開きます。
4. 「季節性頻度」ドロップダウン・リストで、データが季節的影響を受けると予想される頻度を指定します。
5. 「循環の長さ」ドロップダウン・リストで、データが循環的影響を受けると予想される頻度を指定します。
6. 「終了」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードが閉じ、表に予測モデルが表示されます。

## カーブ・フィッティングのパラメーターの設定

カーブ・フィッティングは、データに最も近似して適合する数学関数を検出します。これには、最適な線、指数曲線、または対数曲線が含まれます。

### このタスクについて

カーブ・フィッティングのパラメーターを指定するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「モデル」エディターで予測を開きます。
2. 「追加」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「予測モデルの選択」ページが開きます。
3. 「カーブ・フィッティング」をクリックして、「次へ」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「カーブ・フィッティング」ページが開きます。
4. 曲線タイプのラジオ・ボタンを選択します。以下の 3 つの曲線タイプがあります。
  - 線形回帰 - 複数期間の間で予測列の値の変化率が比較的一定の場合は、このオプションを選択します。
  - 累乗回帰 - 複数期間の間で予測列の値の変化率が時間の経過とともに増加する場合は、このオプションを選択します。
  - 対数回帰 - 複数期間の間で予測列の値の変化率が時間の経過とともに減少する場合は、このオプションを選択します。
5. 「累乗回帰」をクリックした場合は、使用する指数関数を選択します。
6. 「終了」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードが閉じ、表に予測モデルが表示されます。

## 多項式回帰のパラメーターの設定

多項式回帰は、データに最も近似して適合する一定順序の数学関数を検出します。

### このタスクについて

多項式回帰のパラメーターを指定するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 予測エディターの「モデル」ページを開きます。

2. 「追加」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「予測モデルの選択」ページが開きます。
3. 「多項式回帰」をクリックして、「次へ」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「多項式回帰」ページが開きます。
4. 「順序」ドロップダウン・リストに、多項式の順序を指定します。
5. ラジオ・ボタンの 1 つをクリックして、係数の設定方法を指定します。
  - a. システムに係数を計算させるには、最初のラジオ・ボタンをクリックします。
  - b. 係数を手動で設定するには、2 番目のラジオ・ボタンをクリックします。
6. 2 番目のラジオ・ボタンをクリックした場合は、表の「値」列に、各係数の値を指定します。
7. 「終了」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードが閉じ、表に予測モデルが表示されます。

## ニューラル・ネットワークのパラメーターの設定

ニューラル・ネットワークは、履歴データの一部を使用してパターンを派生させ、これを使用して追加のデータを予測します。

### このタスクについて

この手順は正確に行う必要があります。

### 手順

1. 予測エディターの「モデル」ページを開きます。
2. 「追加」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「予測モデルの選択」ページが開きます。
3. 「ニューラル・ネットワーク」をクリックして、「次へ」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードの「ニューラル・ネットワーク」ページが開きます。
4. 「許容減少率 (%)」フィールドに値を指定します。
5. 「許容増大率 (%)」フィールドに値を指定します。
6. 「季節性頻度」ドロップダウン・リストから、データが季節的影響を受けると予想される頻度を選択します。
7. 「トレーニング反復回数」ドロップダウン・リストに、ニューラル・ネットワークが自らのトレーニング用にデータを実行する回数を指定します。
8. 使用するニューラル・ネットワーク・アルゴリズムのタイプを指定します。使用可能なアルゴリズムは以下のとおりです。
  - グラジエント降下 - 一次最適化アルゴリズムです。
  - クイック・プロップ - エラー・アルゴリズムの標準バック・プロパゲーションを多少変更したものです。
  - **R-Prop** - エラー・アルゴリズムの弾力的なバック・プロパゲーションです。
9. 「非表示ニューロン」ドロップダウン・リストから、非表示のニューロンの数を選択します。

10. 「ランダム・シード」フィールドに、ニューロン・ネットワークのランダム・シードを指定します。
11. 「トレーニング・セット (%)」フィールドに値を指定します。
12. ニューラル・ネットワークのトレーニングの進行状況を表示するには、「トレーニング進行状況の表示」チェック・ボックスを選択します。
13. 「終了」をクリックします。「モデルの追加」ウィザードが閉じ、表に予測モデルが表示されます。

---


## 予測モデルのパフォーマンスのモニター

予測のパフォーマンス・メトリックを使用して、予測データに対して最適なモデルを判別します。

### このタスクについて

予測モデルのパフォーマンス・メトリックの要約を生成するには、以下のようになります。

### 手順

1. テストする予測を開きます。
2. 予測エディターで予測を開きます。
3. テストする予測モデルを実行します。結果エディターに予測結果が表示されず。
4. 「パフォーマンスの作成」  ツールバー・ボタンをクリックします。予測モデルのパフォーマンス・メトリックを含む表が表示されます。

#### 累積予測誤差

予測値と実際の値の差の合計に等しくなります。

#### 平均絶対偏差

予測誤差の絶対値の合計を値の数で除算した値に等しくなります。このメトリックは、一般的にパフォーマンスの最良の指標になるため、予測グラフでデフォルトの比較基準として使用されます。

#### 平均二乗誤差

誤差を二乗した値の合計 (または平均) として計算されます。このパフォーマンス・メトリックは、固有値または大きな値に対する感度が非常に高いため、誤差が増幅されます。

#### 平均絶対率誤差

予測値と実際の値の差を値の数で除算した絶対値のパーセンテージとして計算されます。

#### トラッキング信号

平均絶対偏差に対する累積予測誤差の比率として計算されます。

一般的に、誤差がゼロに近いほど、モデルのパフォーマンスは良好になります (例えば、パフォーマンス誤差がゼロであることは、予測された値と実際の値の間の適合性が完全であることを暗黙指定します)。

5. オプション: 予測階層構造を表示するには、メインメニューから「ウィンドウ」>「ビューの表示」>「枠取り」を選択して「枠取り」ビューを開きます。

---

## 傾向の観測


傾向を使用して、予測データの移動の方向を追跡します。

### このタスクについて

履歴データの傾向を観測するには、以下のようにします。

### 手順

1. 傾向を作成する予測を開きます。
2. 予測エディターで予測を開きます。
3. テストする予測モデルを実行します。結果エディターに予測結果が表示されません。

4. 「傾向の作成」 ツールバー・ボタンをクリックします。「結果」エディターに傾向のグラフと傾向の表が表示されます。
5. 傾向の図表で3つのタイプの傾向を観測して、データに重要な傾向が見られるかどうか、およびそのデータの移動方向を判別します。

#### ローカル傾向

1つの期間内の現在の値と、最後の期間の値の間の差。

#### グローバル傾向

1つの期間内の現在の値と、すべての値の平均の間の差。期間、順序、および正の値と負の値の間の変動の大きさを使用して、線形傾向の重大度を判別できます。

#### 線形傾向

傾向のグラフに表示された、現行期間の線形回帰値。

6. オプション: 予測階層構造を表示するには、メインメニューから「ウィンドウ」>「ビューの表示」>「枠取り」を選択して「枠取り」ビューを開きます。

---

## 季節性の観測


季節性は、一貫した方向性を持つ、傾向と相対的にほぼ同じ大きさの、一定間隔のピークと谷から構成される反復パターンとして、グラフで表現されます。

### このタスクについて

季節性の例としては、休日の買い物による小売売上高の急増、夏季の高温による水の消費量の増加、および会計年度末の財政支出の増加などが挙げられます。履歴データ内の季節性を観測するには、以下のようにします。

### 手順

1. 季節性を観測する予測を開きます。
2. 予測エディターで予測を開きます。

3. テストする予測モデルを実行します。 結果エディターに予測結果が表示されます。
4. 「季節性の作成」ツールバー・ボタン  をクリックします。「季節性の作成」ウィンドウが開きます。
5. 「時間枠」ドロップダウン・リストから季節性の期間を選択します。
6. 「季節性タイプ」ドロップダウン・リストから履歴データの平均化方式を選択します。
7. 「OK」をクリックします。「季節性の作成」ウィンドウが閉じ、季節性の図表および季節性のグラフが「結果」エディターに表示されます。季節性の表には、1 つの期間ごとに、全季節の全体平均と、各季節期間の平均が表示されます。
8. オプション: 予測階層構造を表示するには、メインメニューから「ウィンドウ」>「ビューの表示」>「枠取り」を選択して「枠取り」ビューを開きます。

---


## 循環性の観測

循環性により、一般的には 1 年を超える期間にわたって、値の時系列内で繰り返される周期的変動を観測できます。

### このタスクについて

需要に循環性が見られる業種の例として、自動車、防衛、鉱物、および建設業界が挙げられます。履歴データ内の循環性を観測するには、以下のようにします。

### 手順

1. 循環性を観測する予測を開きます。
2. 予測エディターで予測を開きます。
3. テストする予測モデルを実行します。 結果エディターに予測結果が表示されます。
4. 「循環性の作成」  ツールバー・ボタンをクリックします。「循環性の作成」ウィンドウが開きます。
5. 「ポイントの数」ドロップダウン・リストから循環の長さを選択します。 循環の長さは、1 つの完全な循環内で予期される期間の数です。
6. 「OK」をクリックします。「循環性の作成」ウィンドウが閉じ、循環性の図表および循環性の表が「結果」エディターに表示されます。循環性の表には、1 つの循環内の期間ごとに、全循環の全体平均と、個々の循環の平均が表示されます。例えば、1 つの循環に 12 の期間があり、データ履歴が 3 年である場合は、3 つの循環について平均値が表示されます。
7. オプション: 予測階層構造を表示するには、メインメニューから「ウィンドウ」>「ビューの表示」>「枠取り」を選択して「枠取り」ビューを開きます。



---

## 図表のプロパティの編集

「図表プロパティ」ウィザードを使用して、予測結果の図表のプロパティを編集します。

### このタスクについて

予測モデルの実行後、生成された図表のフォーマットを、指定に合わせてカスタマイズできます。予測結果の図表を編集するには、以下のようになります。

### 手順

1. 予測エディターで予測を開きます。
2. テストする予測モデルを実行します。結果エディターに予測結果が表示されます。
3. メニュー・バーの「図表プロパティ」アイコンをクリックします。「図表プロパティ」ウィザードが開きます。
4. 図表フォーマット・オプションを編集して、「OK」をクリックします。「図表プロパティ」ウィザードが閉じ、変更が保存されます。

---

## グリッドのプロパティの編集

「グリッド・プロパティ」ウィザードを使用して、予測結果のグリッドのプロパティを編集します。

### このタスクについて

予測モデルの実行後、生成されたグリッドのフォーマットを、指定に合わせてカスタマイズできます。予測結果のグリッドを編集するには、以下のようになります。

### 手順

1. 予測エディターで予測を開きます。
2. テストする予測モデルを実行します。結果エディターに予測結果が表示されます。
3. 「グリッド・プロパティ」ツールバー・ボタンをクリックします。「グリッド・プロパティ」ウィザードが開きます。
4. ツリーで「列」を選択します。「列」オプションが表示されます。
5. 「可視」列にあるチェック・ボックスを選択して、グリッドに表示する列を指定します。
6. ツリーで「値列」を選択します。「値列」オプションが表示されます。
7. 「テキスト」フィールドに、列見出しの名前を指定します。
8. 「フォント」フィールドに、列見出し名のフォントを指定します。
9. 「背景」フィールドに、列見出しセルの背景色を指定します。
10. 「フォント」フィールドに、明細セル内のテキストのフォントを指定します。
11. 「フォーマット」フィールドに、明細セル内のテキストのフォーマットを指定します。
12. 「背景」フィールドに、明細セルの背景色を指定します。

13. 値列ごとに、前のステップを繰り返します。
14. 「OK」をクリックします。「グリッド・プロパティ」ウィザードが閉じ、変更が保存されます。

---

## 予測のエクスポート

「図表のエクスポート」ウィザードまたは「照会結果のエクスポート」ウィザードを使用すれば、生成した予測の図表および照会結果セットをファイル・システムまたはデータベースにエクスポートできます。

### このタスクについて

- 図表をエクスポートするには、262 ページの『図表のエクスポート』トピックを参照してください。
- 照会結果をデータベースにエクスポートするには、218 ページの『照会結果をデータベースにエクスポート』トピックを参照してください。
- 照会結果をファイルにエクスポートするには、220 ページの『照会結果をファイルにエクスポート』トピックを参照してください。

---

## 予測の印刷オプションを指定

編集機能ウィンドウで開かれている予測を印刷するときに使用されるページ・セットアップ・オプションを指定できます。

### このタスクについて

予測の印刷ページの外観を制御するには、次のようにします。

### 手順

1. エディター・ウィンドウにアクティブ・オブジェクトが表示されている状態で、「ファイル」 > 「ページ設定」を選択して「ページ設定」ウィンドウを開きます。
2. 「プリンター」リストで、使用するプリンターを選択します。
3. 詳細な設定については、「プロパティ」をクリックします。「ページ設定」ウィンドウが開きます。
4. 「サイズ」リストから、印刷可能域のサイズを選択します。
5. 「ソース」リストから、使用する用紙トレイを選択します。
6. 「用紙方向」領域で、印刷出力の方向を選択します。
7. 「マージン」フィールドで、ページのマージンのサイズを指定します。
8. 「OK」をクリックして、「ページ設定」ウィンドウを閉じます。
9. 「ページ」領域で、「図表」チェック・ボックスおよび「テーブル」チェック・ボックスを選択したりクリアしたりして、印刷する予測オブジェクトを指定します。
10. 同じ領域で、使用可能ないずれかのページ・オプションを選択します。
  - a. 予測オブジェクト (図表およびテーブル) を別々のページに印刷するには、「別々のページに印刷」を選択します。

- b. 両方の予測オブジェクトを 1 つのページに印刷するには、「同じページに印刷」を選択します。
11. 「拡大縮小オプション」領域で、選択可能ないずれかの印刷オプションを選択します。
  - a. 印刷可能域に予測サイズを合わせるには、「印刷可能域に合わせる」を選択します。
  - b. 必要な予測サイズをパーセントで指定するには、「印刷の拡大縮小 %」を選択します。
12. 指定した値をデフォルトにするには、「デフォルトとして設定」をクリックします。
13. 「OK」をクリックして、「ページ設定」ウィンドウを閉じます。印刷されるオブジェクトの外観を制御するために、指定したオプションが使用されます。

---

## 「結果」タブを「結果」編集ビューに変換


QMF オブジェクトの編集時に、処理された結果が動的に表示されるように「結果」タブをデタッチすることができます。

### このタスクについて

以下のオブジェクトの「結果」タブをデタッチすることができます。


- 分析照会
- DBF、CSV、IXF、または XML ファイル
- Dynamart
- 予測
- ビジュアル照会

「結果」タブをビューに変換するには、以下の 3 つの方法を使用します。

1. メインメニューから、「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「その他」 > 「一般」 > 「結果」を選択します。
2. メインメニューから、「照会」 > 「結果ビューのデタッチ」または「予測」 > 「結果ビューのデタッチ」を選択します。
3. 「結果ビューのデタッチ」 () ツールバー・ボタンをクリックします。

「結果」ビューが別個のビューで使用可能になります。

「結果」ビューをタブに変換するには、以下のようになります。

1. 「結果」ビューを閉じます。
2. メインメニューから、「照会」 > 「結果ビューのデタッチ」または「予測」 > 「結果ビューのデタッチ」を選択します。
3. 「結果ビューのデタッチ」 () ツールバー・ボタンをクリックします。

「結果」ビューがタブに変換されます。



---

## 第 14 章 標準報告書および即時報告書の生成

報告書の開発者は、照会結果のセットのための報告書を生成する際に使用するフォーマットをいくつかの中から選択できます。

使用可能な報告書フォーマットは以下のとおりです。

- テキスト・ベースで表形式の標準の報告書。これは、旧 QMF インフラストラクチャーと後方互換性があります。
- 組み込みビジュアル・デザイナーを使用して作成したグラフィカルなビジュアル報告書。

注: 標準の報告書は、キーボードの矢印キー、**Home** キー、および **End** キーを使用してナビゲートできます。上矢印および下矢印は、報告書の複数のページを垂直方向にスクロールします。左矢印および右矢印は、1 つのページを水平方向にスクロールします。**Home** キーは、報告書の最初のページの先頭にナビゲートします。**End** キーは、報告書の最後のページの末尾にナビゲートします。

---

### 新規報告書の作成

新規の報告書は、「報告書の表示」ウィザードを使用して作成できます。

#### このタスクについて

いずれかのフォーマットで報告書を生成するには、次のようにします。

#### 手順

1. 「結果」 > 「報告書の表示」と選択します。「報告書の表示」ウィザードが開きます。
2. ウィザードの最初のページで、新しい報告書を作成するか、既存の報告書を使用するかを選択します。次のような選択肢があります。
  - 新規報告書の作成
  - ファイルに保管された既存の報告書を使用
  - QMF カタログに格納された既存の報告書を使用
  - リポジトリに保管された既存の報告書を使用
3. 「次へ」をクリックします。
4. 選択内容に応じて、以下のいずれかのダイアログが開きます。
  - 「新規報告書の作成」を選択した場合は、ウィザードの 2 番目のページで、作成する報告書のタイプを指定するよう要求されます。使用可能な報告書作成のオプションは以下のとおりです。
    - 「標準の報告書の作成」は標準の報告書を作成します。
    - 「ビジュアル報告書の作成」はビジュアル報告書を作成します。

報告書のタイプごとに、現行の照会のフォーマットに基づいて報告書を生成するか、それとも単純なデフォルトのフォーマットで報告書を生成するかを

指定しなければなりません。現行の照会結果のフォーマットに基づいて報告書を生成するよう指定する場合は、「照会からの作成」を選択します。単純なデフォルトのフォーマットで報告書を生成するよう指定する場合は、「デフォルト」を選択します。標準の報告書の場合は「取り出しオプション」を指定する必要があります。既に取り出されているデータのみを報告書に含める場合は、「使用可能なデータの使用」を選択します。報告書の生成の前にデータの取り出し処理を完了することによってすべてのデータが含まれるようにする場合は、「すべてのデータを取り出す」を選択します。

- 「ファイルに保管された既存の報告書を使用」を選択した場合は、ウィザードの 2 番目のページで、報告書が含まれるファイルへのパスを「名前」フィールドに指定するよう要求されます。
  - 「**QMF** カタログに格納された既存の報告書を使用」を選択した場合は、ウィザードの 2 番目のページで、**QMF** カタログのあるデータベースを「データベース」フィールドに指定し、報告書の所有者、名前、およびタイプをそれぞれのフィールドに指定するよう要求されます。報告書のリストを表示するには、「オブジェクトのリスト」をクリックします。
  - 「リポジトリに保管された既存の報告書を使用」を選択した場合は、ウィザードの 2 番目のページで、リポジトリまたはリポジトリ・ワークスペースから開く報告書を選択するよう要求されます。
5. 「終了」をクリックします。報告書は、アクティブになっているエディター・ウィンドウに表示されます。

---

## 標準の報告書のデータ・ソース・オブジェクトの選択

現在の標準の報告書に使用する新しいデータ・ソース・オブジェクトを選択するか、標準の報告書を作成するための書式に常に特定のデータ・ソース・オブジェクトを使用することを指定できます。

### このタスクについて

「データ・ソース・オブジェクト」ダイアログを使用してデータ・ソース・オブジェクトを変更すれば、同じ標準報告書フォーマットで異なる照会結果データ・セットを容易に表示できるようになります。**QMF** は新たに選択されたデータ・ソース・オブジェクトを実行し、現在の書式を使用して照会結果をフォーマット設定し、更新された報告書をアクティブ・エディター・ウィンドウで表示します。

書式が開かれたときに常に特定のデータ・ソース・オブジェクトが使用されるように指定すれば、標準報告書の作成に必要な手順が簡素化されます。指定した場合、**QMF** がそのような書式を開くと、割り当てられたデータ・ソース・オブジェクトを検出し、オブジェクトを実行し、書式の仕様に従って照会結果のフォーマット設定を行い、エディター・ウィンドウに生成された標準の報告書を表示します。特定のデータ・ソース・オブジェクトを書式に割り当てないと、書式を開いたときに、**QMF** は現在アクティブになっている照会結果を報告書にフォーマットします。報告書の特定の照会結果データが必要である場合は、オブジェクトを検索して、実行し、その後で報告書を生成する必要があります。

データ・ソース・オブジェクトを指定するには:

## 手順

1. 「データ・ソース・オブジェクト」ウィンドウを開きます。

アクティブ・ウィンドウに書式が表示されている状態で、「書式」 > 「データ・ソース・オブジェクト」を選択します。

2. 以下のいずれかのオプションを選択して、データ・ソース・オブジェクトの場所を指定します。
  - データ・ソース・オブジェクトがローカル・ドライブまたはネットワーク・ドライブ上のファイルに保存されていることを指定するには、「ファイルから」をクリックします。必須フィールドが使用可能になります。「名前」フィールドでファイルの名前を指定します。「参照」ボタンをクリックして、使用可能なファイルのリストを検索できます。
  - データベースに保管されているデータ・ソース・オブジェクトを指定するには、「データ・ソースから」をクリックします。必須フィールドが使用可能になります。「データ・ソース」フィールドで、オブジェクトが保管されているデータ・ソースを指定します。「所有者」、「名前」、および「タイプ」フィールドで、データ・ソース・オブジェクトについての所有者、名前、およびタイプを指定します。「オブジェクトのリスト」ボタンをクリックして、オブジェクトのデータベースを検索することができます。
  - 「リポジトリから」をクリックして、リポジトリ内に保存されているデータ・ソース・オブジェクトを指定します。必須フィールドが使用可能になります。リポジトリ・ディレクトリおよびフォルダーを展開して、選択するデータ・ソース・オブジェクトを表示します。
  - 「開いているオブジェクトから」をクリックして、現在開いている照会オブジェクトの 1 つからデータ・ソース・オブジェクトを取得します。開いている照会オブジェクトの「タイトル」リスト・ボックスから、オブジェクトの名前を選択します。
3. 選択したデータ・ソース・オブジェクトから複数の結果セットが生成される場合は、ストアード・プロシージャや複数の SQL ステートメント照会の場合と同様に、使用する結果セットの索引番号を「結果セット」フィールドに指定します。
4. 「この文書を開くときは常にこのオブジェクトを使用する」チェック・ボックスにチェック・マークを付けて、現在アクティブな書式が開かれると、指定したオブジェクトがデータ・ソース・オブジェクトとして必ず使用されるように指定します。このオプションは、選択されたデータ・ソース・オブジェクトが現在開いているオブジェクトである場合には使用できません。
5. 「OK」をクリックして、選択したデータ・ソース・オブジェクトを使用して、報告書を生成します。この書式が開かれると現在選択されているデータ・ソース・オブジェクトが必ず使用されるように指定した場合、次回、この書式を開くとオブジェクトが実行され、照会結果は書式の仕様に従って書式設定されて報告書が作成されます。

## データ・ソース・オブジェクトのリスト

データ・ソースに保存されたオブジェクトをリストするには、「オブジェクト・リスト」ウィンドウを使用します。

## このタスクについて

このリストから報告書のデータ・ソースとして使用するオブジェクトを選択できます。

データ・ソースにあるオブジェクトをリストするには:

### 手順

1. 「データ・ソース・オブジェクト」ウィンドウを開きます。

アクティブ・ウィンドウに書式が表示されている状態で、「書式」 > 「データ・ソース・オブジェクト」を選択します。
2. 「データ・ソースから」ラジオ・ボタンを選択した後、「オブジェクトのリスト」をクリックします。
3. 「データ・ソース」ドロップダウン・リストで、リストするオブジェクトが含まれているデータ・ソースの名前を選択します。
4. 「所有者」フィールドに、リストするオブジェクトの所有者を入力します。識別子の正しい形式で所有者を指定する必要があります。
5. 「名前」フィールドに、リストするオブジェクトの名前を入力します。識別子の正しい形式で名前を指定する必要があります。複数の名前に一致する突き合わせパターンを指定することができます。
6. 「フォルダー」フィールドで、リストするオブジェクトを保管するフォルダーの名前を指定します。このサーバー上にある他のフォルダーを指定するには、省略符号 (...) をクリックします。
7. 「リスト最新表示」をクリックして、「所有者」フィールドおよび「名前」フィールドで指定した検索基準と一致するオブジェクトの検索を、データベースで開始します。リストには、ユーザーが使用を許可されているオブジェクトのみが入ります。結果は「オブジェクト・リスト」表に返されます。
8. このリストから、標準の報告書のデータ・ソース・オブジェクトとして使用するオブジェクトを選択します。
9. 「OK」をクリックします。「オブジェクト・リスト」ウィンドウが閉じます。制御が「データ・ソース・オブジェクト」ウィンドウに戻ります。

---

## 報告書をファイルにエクスポート

標準の報告書、即時報告書、またはビジュアル報告書をファイルにエクスポートできます。ご使用の報告書が標準報告書の場合、報告書はテキスト・ファイル、HTML ファイル、または PDF ファイルとしてエクスポートできます。ご使用の報告書が即時報告書またはビジュアル報告書の場合、報告書は HTML ファイルまたは PDF ファイルとしてエクスポートできます。


## このタスクについて

報告書をエクスポートするには、次のようにします。

### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「報告書のエクスポート」ウィザードを開きます。



- 活動状態のウィンドウに報告書を表示した状態で、「ファイル」 > 「エクスポート」を選択し、「エクスポート」ウィザードの「選択」ページを開き、使用可能なエクスポート・ウィザードのリストから「報告書」を選択します。
  - 活動状態のウィンドウに報告書を表示した状態で、「エクスポート」 () ツールバー・ボタンをクリックします。
2. 「報告書」リスト・ボックスから、エクスポートする報告書を選択します。
  3. QMF for Workstation を使用している場合、「報告書ファイル」フィールドで、報告書ファイルの保存場所を指定します。「参照」ボタンを使用して、場所を検索できます。
  4. エクスポートするファイルのタイプを選択します。標準の報告書は、テキスト・ファイル (\*.txt)、HTML ファイル (\*.htm;\*.html)、または PDF ファイル (\*.pdf) としてエクスポートできます。即時報告書およびビジュアル報告書は、HTML ファイル (\*.htm;\*.html) または PDF ファイル (\*.pdf) としてエクスポートできます。
  5. PDF ファイルをエクスポートしようとしている場合は、「次へ」ボタンをクリックします。「PDF エクスポート・オプションを設定します」ページが開きます。「文書情報の追加」チェック・ボックスを選択し、「タイトル」、「作成者」、「件名」、および「キーワード」フィールドに文字ストリングを指定して、文書情報を PDF に追加します。PDF で ANSI フォントしか使用しないようにするには、「ANSI フォントのみ使用」チェック・ボックスを選択します。
  6. 報告書を HTML ファイルとしてエクスポートするには、「エクスポート・タイプ」リストから HTML を選択して、「次へ」をクリックします。「ファイル・エクスポート・オプションを設定します」ページが開きます。「報告書を別のページに分割」チェック・ボックスを選択して報告書の各ページを個別に保存します。
  7. 「終了」をクリックします。
    - QMF for Workstation を使用している場合、報告書は選択したフォーマットでファイルにエクスポートされます。
    - QMF for WebSphere を使用している場合、「保存」ウィンドウが開き、ダウンロードする個々のファイルと、ダウンロードするすべてのファイルが入っているアーカイブ済み ZIP ファイル (\*.zip) がリストされます。1 つ以上のハイパーリンクをクリックして、ファイルをダウンロードします。ファイルのダウンロードが終了したら、「OK」をクリックします。

---

## 標準の報告書書式の作成

標準の報告書は、データ・ソースと書式テンプレートとして照会結果を使用して生成されます。書式テンプレート（「書式」とも呼ばれます）は、報告書で照会結果をどのようにフォーマット設定するかを指定します。

### このタスクについて

書式はオブジェクトと見なされ、リポジトリ、QMF カタログ、またはファイルに保存できます。保存された書式オブジェクトを開いたときは、報告書を生成するた

めに書式オブジェクトを実際に実行していることとなります。書式を開くと、現在アクティブな照会結果がデータ・ソースとして自動的に使用されます。

あるいは、報告書を作成するために特定の書式で常に使用する、照会結果データの特定のセットを指定することもできます。このオプションを選択した場合、書式オブジェクトを開くと、特定の照会オブジェクトが実行されて必要な照会結果を取得し、それらの照会結果は書式の仕様を使用してフォーマットされて、報告書が作成されます。

書式の作成や編集は、「標準の報告書エディター」ウィンドウの「デザイン」ページを使用して行います。報告書は、「標準の報告書エディター」ウィンドウの「報告書」ページに表示されます。

## 標準の報告書の書式のデザイン

書式の作成や編集は、「標準の報告書エディター」ウィンドウの「デザイン」ページを使用して行うことができます。生成された報告書は「報告書」ページに表示されます。

### このタスクについて

書式を作成するには、次のようにします。

### 手順

1. 次のいずれかの方法で、標準の報告書の「デザイン」ページを開きます。
  - 「ファイル」 > 「新規」 > 「書式」を選択します。「新規書式の作成」ウィザードが開きます。「名前」フィールドに書式の名前を指定し、フォームの保存先を「データ・ソース」フィールドに指定します。「終了」をクリックします。
  - 「新規書式」ツールバー・ボタンを選択します。「デザイン」タブをクリックして、「書式」ウィンドウの「デザイン」ページを開きます。
2. 「デザイン」ページは 2 つのセクションに分かれています。左側は、「書式構造」ツリーです。ツリーの各ノードは、報告書のセクションを表しています。ツリーからノードを選択すると、報告書のそのセクションに指定する必要があるフィールドが表示されます。
3. 書式を設計するには、「書式構造」ツリーから 1 つ以上のセクションを選択し、対応するフィールドに入力を行います。標準の報告書には以下のセクションが含まれています。
  - メイン
  - 切れ目
  - 計算
  - 列
  - 条件
  - 明細
  - 最終
  - オプション
  - ページ

4. 書式のデザインが完了したら、書式をリポジトリ、QMF カタログ、またはファイルに保存できます。

### 「メイン」フォーマット・オプションの指定

報告書の「メイン」セクションに含まれるフォーマット・フィールドは、列、書式の見出し、脚注、切れ目など、報告書の最も一般的なエレメントに関する書式設定上の指示を定義します。

#### このタスクについて

報告書の「メイン」セクションで定義されるエレメントのうちいくつかは、他のセクションでも定義することができます。

表 30. 標準報告書の「メイン」セクション・エレメント

エレメント	説明
報告書列の合計幅	このプロパティには、報告書内の表データの合計幅が表示されます。
列のプロパティ	ページの上にある表で、表示する列を指定でき、それらのプロパティを設定できます。列を追加または削除したり、「編集」列ダイアログを開いたり、列の順序を変更したりするには、表の上にあるボタンを使用できます。  詳細については、『列のプロパティ』を参照してください。
ページ	ページの見出しおよび脚注を指定するには、「見出しテキスト」フィールドおよび「脚注テキスト」フィールドを使用します。
最終	最終行のテキストを指定するには、「テキスト」フィールドを使用します。
切れ目	切れ目プロパティを指定するには、以下のエレメントを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>切れ目ごとに改ページ  現在の切れ目レベルが発生したときに、報告書を改ページするには、このチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。</li> <li>脚注テキスト  このフィールドで、切れ目脚注テキストを指定します。</li> </ul>
切れ目列の枠取り	切れ目列は、「取扱コード」が「切れ目」に設定されている列です。報告書の行は、切れ目列の値に従ってグループ化されます。このチェック・ボックスにチェック・マークを付けると、グループの先頭行にのみ値が表示されます。チェック・マークを外した場合は、グループのすべての行に値が表示されます。
デフォルト切れ目テキスト (*)	デフォルト切れ目テキストとしてアスタリスクを設定するには、このチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。いずれの列にも集約が設定されていない場合は、切れ目行の終わりにアスタリスクが表示されます。

#### 列のプロパティ

表の列のプロパティを編集するには、「列の編集」ダイアログを使用します。以下のフィールドを使用して、列のプロパティを指定します。

- 「番号」:

列を識別するには、このプロパティを使用します。この番号は、書式変数を解決し、照会結果の列を報告書の列にマップする方法を決定するために使用されません。

列挙は 1 から開始します。列リスト内で列を上下に移動することにより、列番号を変更できます。そのためには、「列を上へ移動」ボタンおよび「列を下へ移動」ボタンを使用します。

- 「見出し」:

このフィールドを使用して列見出しを指定します。長さは最大 40 文字です。下線文字 ( \_ ) を使用して、複数行の見出しを作成します。先行下線文字は無視されます。例えば、FIRST\_SECOND は次のように表示されます。

```
FIRST  
SECOND
```

- 「使用法」または「取扱コード」:

このフィールドを使用して、列に取扱コードを割り当てます。取扱コードは、列のデータに関する合計情報を提供します。例えば、取扱コードは列の終わりで総計情報を提供でき、また表の制御の切れ目で小計を提供できます。使用可能な取扱コードは、列のデータと合計のタイプによって異なります。使用可能な取扱コードのドロップダウン・リストから、適切な取扱コードを選択します。各取扱コードについての詳細は、オンライン・ヘルプ・システムを参照してください。

- 「列間隔」:

列の左側に付加する空白の数を指定します。範囲は、0 から 999 までです。

- 「幅」:

このフィールドに、列の幅を指定します。1 から 32,767 までの数値を指定できます。通貨記号や負の符号などの特殊文字のための十分な幅を持たせておいてください。列の幅が数値データに対して狭すぎる場合は、アスタリスクに置き換えられます。列の幅が文字または日付/時刻データに対して狭すぎる場合は、指定した配置に基づいて切り捨てられます。折り返し編集コードを使用して、列幅内でデータを折り返すようにすることができます。

- 「編集」:

報告書内のデータの書式設定方法を制御する編集コードを選択します。編集コードは、文字、日付、グラフィック、数値、時間、タイム・スタンプ・データに対して使用できます。また、ユーザー定義の編集コードも作成できます。

使用可能な編集コードのドロップダウン・リストから、適切な編集コードを選択します。編集コードについての詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。

- 「順序」:

このフィールドに、報告書の列の順序を指定します。2 つの列の順序番号が同じ場合は、列番号の順に報告書に表示されます。

注: 「順序」フィールドは、ACROSS 取扱コードを使用する報告書では無視されます。また、「書式オプション」ウィンドウで「報告書列の自動並べ替え」が選択されている場合も無視されます。

### 「切れ目」フォーマット・オプションの指定

報告書の「切れ目」セクションに含まれる書式設定エレメントでは、報告書内の最大 6 つまでの小計行の特性、内容、および配置や、切れ目見出しテキストおよび切れ目脚注テキストを指定することができます。

#### このタスクについて

表 31. 標準報告書の「切れ目」セクション・エレメント

エレメント	説明
切れ目ごとに改ページ	このチェック・ボックスにチェック・マークを付けると、現在の切れ目レベルが発生すると、報告書が改ページされます。
明細見出しの反復	このチェック・ボックスにチェック・マークを付けると、現在の切れ目レベルで現在の明細見出しが繰り返して表示されます。
見出し前のブランク行数	このフィールドに、最初の切れ目見出し行の前に含まれるブランク行の行数を指定します。この値は 0 から 999 までの数値でなければなりません。
見出し後のブランク行数	このフィールドに、最後の切れ目見出し行の後に含まれるブランク行の行数を指定します。この値は 0 から 999 までの数値でなければなりません。

表 31. 標準報告書の「切れ目」セクション・エレメント (続き)

エレメント	説明
切れ目見出しテキスト	<p>「切れ目見出しテキスト」表の上にあるボタンを使用して、行の追加、編集、または削除を行ったり、行の順序を変更したりします。</p> <p>以下のフィールドを使用して、切れ目見出しテキストを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>行: このフィールドで、切れ目見出しテキストの行と、それらの行の報告書における相対位置を識別することができます。1 から 999 の任意の数値、またはブランクを指定できます。行番号 1 から始める必要はなく、連続する行番号を指定する必要もありません。複数の行に同じ値を使用すると、これらの行は「配置」フィールドで指定された値に従って結合されます。「行」フィールドに同じ値を持つ行は、それらの行が報告書の幅よりも長い場合、または「配置」フィールドの値が矛盾している場合は、重なり合います。</li> <li>配置: このフィールドに、行のどこにこのテキストを配置するかを、横方向に指定します。有効な配置の値は LEFT、RIGHT、CENTER、APPEND、または行の特定位置の番号です。APPEND を指定すると、テキストは前のテキスト行の直後に配置されます。</li> <li>テキスト: このフィールドに、切れ目見出しに表示するテキストを指定します。このフィールドでは、書式変数とグローバル変数を使用することができます。</li> </ul>
脚注で改ページ	<p>このチェック・ボックスにチェック・マークを付けると、現在の切れ目レベルの終了時に、報告書が改ページされます。</p>
切れ目合計行の位置	<p>このフィールドに、切れ目脚注行に切れ目合計行を配置する場所を縦方向に指定します。この値は 1 から 999 までの数値でなければなりません。合計行を必要としない場合は、NONE を指定します。</p>
脚注前のブランク行数	<p>このフィールドに、最初の切れ目脚注行の前に入れるブランク行の行数を指定します。この値は 0 から 999 までの数値、または BOTTOM (報告書作成時に値 0 として扱われます) でなければなりません。</p>
脚注後のブランク行数	<p>このフィールドに、最後の切れ目脚注行の後に入れるブランク行の行数を指定します。この値は 0 から 999 までの数値でなければなりません。</p>

表 31. 標準報告書の「切れ目」セクション・エレメント (続き)

エレメント	説明
切れ目脚注テキスト	<p>「切れ目脚注テキスト」表の上にあるボタンを使用して、行の追加、編集、または削除を行ったり、行の順序を変更したりします。</p> <p>以下のフィールドを使用して、切れ目脚注テキストを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>行: このフィールドで、切れ目脚注テキストの行と、それらの行の報告書における相対位置を識別することができます。1 から 999 の任意の数値、またはブランクを指定できます。行番号 1 から始める必要はなく、連続する行番号を指定する必要もありません。複数の行に同じ値を使用すると、これらの行は「配置」フィールドで指定された値に従って結合されます。「行」フィールドに同じ値を持つ行は、それらの行が報告書の幅よりも長い場合、または「配置」フィールドの値が矛盾している場合は、重なり合います。</li> <li>配置: このフィールドに、行のどこにこのテキストを配置するかを、横方向に指定します。有効な配置の値は LEFT、RIGHT、CENTER、APPEND、または行の特定位置の番号です。APPEND を指定すると、テキストは前のテキスト行の直後に配置されます。</li> <li>テキスト: このフィールドに、切れ目脚注に表示するテキストを指定します。このフィールドでは、書式変数、HTML 変数、およびグローバル変数を使用することができます。</li> </ul>

テキスト・フィールドでの **HTML** 変数の使用:

テキスト・データを HTML 表示用に書式設定するため、テキスト・フィールドに HTML 変数を挿入することができます。これらの HTML 変数は、書式のどのセクションにも配置できます。

このタスクについて

表 32. HTML 変数

HTML 変数	書式変数の使用目的
IMAGE <sub>n</sub>	「n」列の内容を HTML イメージ参照タグの中に配置し、グラフィック・ファイルを報告書の中で参照可能にします。
LINK <sub>n</sub>	「n」列の内容を HTML リンク・タグの中に配置します。HTML リンク・タグは、他の HTML ページへのリンクを追加するために使用されます。
MAILTO <sub>n</sub>	「n」列の内容を HTML メール内に配置して、E メール・リンクにタグを付けます。

表 32. HTML 変数 (続き)

HTML 変数	書式変数の使用目的
ANCHORn	変数値のロケーションにアンカー・ポイントを配置します。これらのアンカーは、報告書の中のページのトップや切れ目セクションの先頭などから参照することができます。
REFn	DSQQW_HTML_REFTXT (報告書内に表示されるテキストを含むグローバル変数で、デフォルトは「BACK TO」) に含まれているテキストを HTML 参照タグの中に配置するもので、その報告書の中の ANCHORn 変数で作成されたアンカーへのリンクの作成に使用されます。

## 「計算」フォーマット・オプションの指定

「計算」オプションを使用して、報告書の計算式を定義します。

### このタスクについて

「計算」表では、「計算」フォーマット・オプションを指定できます。インターフェース上のボタンを使用して、計算を追加、編集、または削除したり、計算の順序を変更したりします。

下の表で説明されているエレメントを使用して、計算のプロパティを設定します。

表 33. 標準報告書の「計算」オプション・エレメント

エレメント	説明
ID	計算式を識別する 1 から 999 までの番号を指定します。
式	有効な式を、50 文字以内で入力します。このフィールドでは、書式変数は使用することができません。
NULL を渡す	定義内の変数にヌル値が入っている場合に、評価のために式を渡すかどうかを指定します。
幅	書式内で変数として使用される場合、計算式の結果の書式設定に使用される幅を指定します。  列の中でマウスをクリックし、スピン・ボタンを使用することによって必要な値を指定します。
編集	書式内で変数として使用される場合、この計算式の結果の書式設定に使用される編集コードを指定します。  列の中でマウスをクリックし、使用できる編集コードのドロップダウン・リストを開いて必要なものを選択します。  編集コードについての詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。



## 「列」フォーマット・オプションの指定

「列」フォーマット・オプションは、報告書の列の外観や書式設定を制御するのに使用します。

### このタスクについて

報告書の「列」セクションでは、表の「列」フォーマット・オプションを指定できます。列を追加または削除したり、「編集」列ダイアログを開いたり、列の順序を変更したりするには、表の上にあるボタンを使用します。

表の列の特性を編集できます。列の特性を編集する方法として、「列の編集」ダイアログを使用することもできます。

定義可能な特性には、列見出し、列の使用法、列間隔、幅、編集コード、および順序があります。「報告書列の合計幅」プロパティでは、報告書の表データの合計幅が表示されます。

報告書の「列」セクション内で定義する「列」フォーマット・オプションは、「メイン」セクション内で定義することもできます。

表 34. 標準報告書の「列」オプション・エレメント

エレメント	説明
番号	列を識別する番号を指定します。このプロパティを使用して、変数の参照が解決され、照会結果列と報告書の列のマッピング方法が決定されます。列挙は 1 から開始します。列リスト内で列を上下に移動することにより、列番号を変更できます。そのためには、「列を上へ移動」ボタンおよび「列を下へ移動」ボタンを使用します。
見出し	このフィールドを使用して列見出しを指定します。長さは最大 40 文字です。複数行の見出しを作成するには、下線文字を使用します。先行下線文字は無視されます。例えば、FIRST_SECOND は次のように表示されます。  FIRST SECOND
使用法	列の最後にある総合計情報、および表の制御の切れ目にある一部の要約など、列内のデータに関する要約情報を収集するために使用される取扱コードを指定します。使用可能な取扱コードは、列内のデータと要約のタイプによって異なります。取扱コードについての詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。
列間隔	列の左側を字下げするための空白の数を指定します。範囲は、0 から 999 までです。

表 34. 標準報告書の「列」オプション・エレメント (続き)

エレメント	説明
幅	列の幅を指定します。範囲は、1 から 32767 までです。数値データに対して列の幅が小さすぎる場合、データはアスタリスクで置き換えられます。文字または日時データに対して列の幅が小さすぎる場合、データは指定の配置に基づいて切り捨てられます。これを避けるには、折り返し編集コードを使用して、データが列幅内で折り返されるようにすることができます。編集コードについての詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。
編集	報告書内のデータの書式設定方法を制御する編集コードを指定します。編集コードは、文字、日付、グラフィック、数値、時間、タイム・スタンプ・データに対して使用できます。また、ユーザー定義の編集コードも作成できます。編集コードについての詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。
順序	報告書内の列の順序番号を指定します。2 つの列に同じ順序番号が付けられている場合、それらの列は、「番号」フィールド内の列番号の順に報告書内に表示されます。 注: ACROSS 取扱コードを使用する報告書や、「報告書列の自動並べ替え」チェック・ボックスにチェック・マークを付けている場合、順序番号は無視されます。

## 「条件」フォーマット・オプションの指定

「条件」フォーマット・オプションは、条件付書式設定の制約 (特定の特性を満たしていないレコードを除外するなど) を定義するのに使用します。

### このタスクについて

「条件」形式設定オプションは、「条件」テーブルで指定できます。条件行の追加、編集、または除去を行ったり、条件行の順序を変更したりするには、インターフェース上にあるボタンを使用します。

条件プロパティを設定するには、次の表で説明されている要素を使用します。

表 35. 標準報告書の「条件」オプション要素

要素	説明
ID	条件式を識別する 1 から 999 までの番号を指定します。
式	有効な式を、50 文字以内で入力します。1 に評価される式が true とみなされ、その他はすべて false とみなされます。このフィールドでは、書式変数は使用することができません。
NULL を渡す	定義内の変数にヌル値が入っている場合に、評価のために式を渡すかどうかを指定します。

## 「明細」フォーマット・オプションの指定

「明細」書式設定フィールドは、報告書の明細見出しと本文を定義するのに使用します。

### このタスクについて

ここで、書式文字や住所ラベルを作成するためのフリー・フォームのテキストを使用して表データを結合したり、置換したりすることができます。見出しとテキストの明細バリエーションはそれぞれ、「条件」ノードを使用して指定する条件に対応可能です。

「書式構造」ツリーで「明細」ノードを選択すると、「明細を追加」ボタンおよび「明細を削除」ボタンがツリーの上に表示されます。これらのボタンを使用して、明細を追加または削除できます。

表 36. 標準の報告書の「明細」セクションの要素

要素	説明
使用可能	<p>明細バリエーションをいつ使用可能にするかを以下のように指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• <b>YES</b> と指定すると、バリエーションはフォーマット時に常に選択されます。</li><li>• <b>NO</b> と指定すると、バリエーションはフォーマット時に選択されません。</li></ul> <p>Cnn および Enn 指定を使用する書式条件式を参照することにより、バリエーションを条件付きで使用可能にすることができます。</p>
明細見出しに列見出しを組み込む	<p>このチェック・ボックスにチェック・マークを付けると、明細見出しと一緒に列見出しが表示されます。</p>
明細見出しテキスト	<p>「明細見出しテキスト」表の上にあるボタンを使用して、行の追加、編集、または削除を行ったり、行の順序を変更したりします。明細見出しテキストの行を以下のように指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 行: 明細見出し中のテキスト表示の縦方向の位置を指定します。行番号 1 から始めたり、連続する行番号を指定する必要はありません。</li><li>• 配置: 行におけるテキストの横方向の位置を指定します。有効な配置の値は LEFT、RIGHT、CENTER、APPEND、または行の特定位置の番号です。APPEND を指定すると、テキストは前のテキスト行の直後に配置されます。</li><li>• テキスト: 明細見出しに表示されるテキストを入力します。このフィールドでは、書式変数、グローバル変数、および HTML 変数を使用することができます。</li></ul>
明細ブロックで改ページ	<p>このチェック・ボックスにチェック・マークを付けると、明細ブロックで報告書が改ページされます。</p>

表 36. 標準の報告書の「明細」セクションのエレメント (続き)

要素	説明
ブロック後の空白行数	最後の明細ブロック行の後の空白行の行数を指定します。範囲は、0 から 999 までです。
明細見出しの反復	このチェック・ボックスにチェック・マークを付けると、各明細ブロックの前に明細見出しが繰り返し表示されます。
表データの表示行	明細ブロック中の表データ行の縦方向の位置を指定します。範囲は、1 から 999 までです。表データ行を必要としない場合は、NONE を指定します。
ブロックをページに保持	このチェック・ボックスにチェック・マークを付けると、明細ブロックが 1 つのページに保持されます。このチェック・ボックスにチェック・マークが付いていて、明細ブロックが長すぎて 1 ページに収まらない場合、その明細ブロックは新しいページから開始されます。このチェック・ボックスにチェック・マークを付けないと、明細ブロックは複数ページに渡り分割されます。
明細ブロック・テキスト	<p>「明細ブロック・テキスト」表の上にあるボタンを使用して、行の追加、編集、または削除を行ったり、行の順序を変更したりします。明細ブロック・テキストの行を以下のように指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>行: この番号により、明細ブロック中のテキストの縦方向の位置を指定します。行番号 1 から始めたり、連続する行番号を指定する必要はありません。</li> <li>配置: 行におけるテキストの横方向の位置を指定します。有効な配置の値は LEFT、RIGHT、CENTER、APPEND、または行の特定位置の番号です。APPEND を指定すると、テキストは前のテキスト行の直後に配置されます。</li> <li>テキスト: 明細ブロックに表示されるテキストを入力します。このフィールドでは、書式変数、グローバル変数、および HTML 変数を使用することができます。</li> </ul>

## 「オプション」フォーマット・オプションの指定

「オプション」フォーマット・オプションは、報告書の外観に関するさまざまなオプションを定義するために使用します。

### このタスクについて

表 37. 標準の報告書の「オプション」セクションのエレメント

要素	説明
明細の行間隔	表データ行間または明細ブロック間の行送りの行数を指定します。この値は 1 から 999 までの数値でなければなりません。

表 37. 標準の報告書の「オプション」セクションのエレメント (続き)

要素	説明
行折り返し幅	このフィールドは、ISPF バージョンの QMF for TSO/CICS アプリケーションを使用して作成した書式にのみ適用されます。報告書の列を折り返す文字数を指定します。範囲には 0 から 999 までか、キーワード NONE を指定します。
報告書のテキスト行幅	報告書について、報告書の最終テキスト、明細見出しテキスト、明細ブロック・テキスト、および切れ目テキストの幅を指定します。範囲には、1 から 32767 か、キーワード DEFAULT または COLUMNS を指定します。  DEFAULT を指定した場合は、切れ目脚注テキストと最終脚注テキストで、最初の合計列までのすべての列の全幅を使用します。COLUMNS を指定した場合は、すべてのテキスト域で、すべての列の全幅を使用します。
報告書の固定列数	報告書を画面上で横にスクロールしたり、印刷時に複数ページに報告書を分割するときに、その場所に残される列数を指定します。範囲には、1 から 999 か、キーワード NONE を指定します。
切れ目列の枠取り	このチェック・ボックスを選択すると、値が変更されたときに BREAK 取扱コードが使用されている列に値を表示します。
デフォルト切れ目テキスト (*)	このチェック・ボックスを選択すると、切れ目脚注テキストを指定しなかった切れ目に切れ目脚注テキストが生成されます。  デフォルトの切れ目テキストは、最も大きい番号の切れ目レベル・テキストに対してはアスタリスクが 1 つ、2 番目に大きい番号の切れ目レベル・テキストに対してはアスタリスクが 2 つというようになります。
グループ化したときに列見出しの関数名使用	このチェック・ボックスを選択すると、合計列があって、取扱コード GROUP を使用して表データ行を表示しないようにする報告書の集合列の見出しに、合計関数の名前が追加されます。
列折り返し行を同一ページに表示	このフィールドは、ISPF バージョンの QMF for TSO/CICS アプリケーションを使用して作成した書式にのみ適用されます。  このチェック・ボックスを選択すると、1 つ以上の列に列折り返しが指定されている場合に、2 つのページ間の列が折り返されます。
横方向合計列	このチェック・ボックスを選択すると、自動生成された横方向要約列が表示され、指定された列全体を要約する追加の列が作成されます。

表 37. 標準の報告書の「オプション」セクションのエレメント (続き)

要素	説明
報告書列の自動並べ替え	このチェック・ボックスを選択すると、取扱コード <b>BREAK</b> 、 <b>GROUP</b> 、または集合取扱コードのいずれかを指定したときに、報告書の列が自動的に並べ替えられます。  選択されると、列は <b>BREAK</b> 列が左端に、 <b>GROUP</b> 列は <b>BREAK</b> 列の右横に、非集合列のすべてが <b>BREAK</b> 列および <b>GROUP</b> 列の右横に、そして集合列のすべてが右端になるように並べ替えられます。
最高位の切れ目レベルごとに新しいページ番号	このチェック・ボックスを選択すると、印刷される報告書は、最高位の切れ目レベルを持つ制御列の値が変わるたびに改ページされ、番号 1 から始まります。 注: 最高切れ目レベルは、一番低い番号を使用するレベルです。
列見出しの区切り記号	このチェック・ボックスを選択すると、列見出しと表データ行の間に鎖線の行が表示されます。
横方向見出しの区切り記号	このチェック・ボックスを選択すると、 <b>ACROSS</b> 報告書の列に破線と矢印でマークが付けられます。
切れ目合計の区切り記号	このチェック・ボックスを選択すると、表データ行と切れ目合計の間に等号の行が表示されます。
最終合計の区切り記号	このチェック・ボックスを選択すると、表データ行と最終合計の間に等号の行が表示されます。
<b>LOB</b> の内容をインラインに置く	このチェック・ボックスを選択すると、 <b>LOB</b> の内容が書式の内容にインラインで表示されます。

### 「最終」フォーマット・オプションの指定

「最終」フォーマット・オプションは、報告書の最終テキストの内容および配置を定義するのに使用します。例えば、報告書の終わりに最終テキストと要約データを組み込むことができます。

#### このタスクについて

表 38. 標準報告書の「最終」セクション・エレメント

エレメント	説明
最終テキストで改ページ	このチェック・ボックスにチェック・マークを付けると、最終テキストで報告書が改ページされます。
最終合計行の位置	最終テキスト行における最終合計行の縦方向の位置を指定します。範囲は、1 から 999 までです。最終合計行を必要としない場合は、 <b>NONE</b> を指定します。
テキスト前のブランク行数	最初と最後のテキスト行の前のブランク行の行数を指定します。範囲は 0 から 999 またはキーワード <b>BOTTOM</b> (ゼロとして扱われる) までです。

表 38. 標準報告書の「最終」セクション・エレメント (続き)

エレメント	説明
テキスト	<p>「最終テキスト」表の上にあるボタンを使用して、行の追加、編集、または削除を行ったり、行の順序を変更したりします。最終テキストの行を以下のように指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 行: 最終テキストの縦方向の位置を指定します。行番号 1 から始めたり、連続する行番号を指定する必要はありません。</li> <li>• 配置: 行におけるテキストの横方向の位置を指定します。有効な配置の値は LEFT、RIGHT、CENTER、APPEND、または行の特定位置の番号です。APPEND を指定すると、テキストは前のテキスト行の直後に配置されます。</li> <li>• テキスト: 報告書の下部に表示されるテキストを入力します。このフィールドでは、書式変数、グローバル変数、および HTML 変数を使用することができます。</li> </ul>

### 「ページ」フォーマット・オプションの指定

「ページ」オプションは、報告書のページ見出しとページ脚注の内容と配置を定義するのに使用します。

#### このタスクについて

表 39. 標準の報告書の「ページ」セクションのエレメント

要素	説明
見出し前の空白行数	最初のページ見出し行の前に組み込まれる空白行の行数を指定します。範囲は、0 から 999 までです。
見出し後の空白行数	最後のページ見出し行の後の空白行の行数を指定します。範囲は、0 から 999 までです。

表 39. 標準の報告書の「ページ」セクションの要素 (続き)

要素	説明
ページ見出しテキスト	<p>「ページ見出しテキスト」表の上にあるボタンを使用して、行の追加、編集、または削除を行ったり、行の順序を変更したりします。ページ見出しテキストの各行を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>行: 最終テキストの縦方向の位置を指定します。行番号 1 から始めたり、連続する行番号を指定する必要はありません。</li> <li>配置: 行におけるテキストの横方向の位置を指定します。有効な配置の値は LEFT、RIGHT、CENTER、APPEND、または行の特定位置の番号です。APPEND を指定すると、テキストは前のテキスト行の直後に配置されます。</li> <li>テキスト: 報告書のページ見出しに表示される最終テキストを入力します。このフィールドでは、書式変数、グローバル変数、および HTML 変数を使用することができます。</li> </ul>
脚注前の空白行数	<p>最初のページ脚注行の前に組み込まれる空白行の行数を指定します。範囲は、0 から 999 までです。</p>
脚注後の空白行数	<p>最後のページ脚注行の後の空白行の行数を指定します。範囲は、0 から 999 までです。</p>
ページ脚注テキスト	<p>「ページ脚注テキスト」表の上にあるボタンを使用して、行の追加、編集、または削除を行ったり、行の順序を変更したりします。ページ下部のページ脚注に印刷されるテキストの各行を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>行: 最終テキストの縦方向の位置を指定します。行番号 1 から始めたり、連続する行番号を指定する必要はありません。</li> <li>配置: 行におけるテキストの横方向の位置を指定します。有効な配置の値は LEFT、RIGHT、CENTER、APPEND、または行の特定位置の番号です。APPEND を指定すると、テキストは前のテキスト行の直後に配置されます。</li> <li>テキスト: 報告書の下部に表示されるページ脚注テキストを入力します。</li> </ul>

## 書式変数の使用

書式変数は、報告書に情報を表示するためにテキスト・フィールドに挿入できるコードです。

例えば、報告書が印刷されるたびに現在日付を提供する日付変数を挿入できます。以下の書式変数が使用可能です。

- **&ROW** : この変数は、データの現在行の番号を表示します。



- **&DATE** : この変数は、現在日付を表示します。
- **&TIME** : この変数は、現在時刻を表示します。
- **&PAGE** : この変数は、現在のページ番号を表示します。
- **&COUNT** : この変数は、同じレベルで最後の切れ目以降に検索または印刷された行数を表示します。
- **&CALCid**: この変数は、使用する書式の計算式を識別します。"id" は式の ID 番号です。
- **&n**: この変数は、列の値を表示します。"n" は列番号です。
- **&an**: この変数は、列の集約を表示します。"n" は列番号で、"a" は次の集約変数のいずれかになります: AVG、COUNT、CPCT、CSUM、FIRST、LAST、MAX、MIN、PCT、STDEV、SUM、TCPCT、または TPCT。集約は、同じレベルの最後の切れ目以降に検索または印刷された行に基づきます。
- **&Global Variables** : これは、グローバル変数の値を表示します。
- **&HTML Variables** : これは、HTML 変数の値を表示します。

書式の中の編集する部分に応じて、異なる変数を使用できます。下のリストに、書式の各部分に使用できる変数のタイプを示します。

- ページ見出し: **&an**、**&COUNT**、または **&CALCid** を除くすべての変数を使用できます。
- ページ脚注: **&an**、**&COUNT**、または **&CALCid** を除くすべての変数を使用できます。
- 切れ目見出し: **&an**、**&COUNT**、または **&CALCid** を除くすべての変数を使用できます。
- 切れ目脚注: すべての変数を使用できます。
- 計算式: **&CALCid** を除くすべての変数を使用できます。
- 列式: **&Page**、**&an**、**&COUNT**、または **&CALCid** を除くすべての変数を使用できます。
- 条件: **&Page**、**&an**、**&COUNT**、または **&CALCid** を除くすべての変数を使用できます。
- 明細見出し: **&COUNT** または **&CALCid** を除くすべての変数を使用できます。
- 明細ブロック: すべての変数を使用できます。
- 最終テキスト: すべての変数を使用できます。

## 取扱コードの使用

取扱コードは、列のデータに関する合計情報を提供します。

例えば、取扱コードは列の終わりで総計情報を提供でき、また表の制御の切れ目で小計を提供できます。使用可能な取扱コードは列のデータと合計のタイプによって異なります。

取扱コード	説明	注
ACROSS	水平な制御の切れ目での報告書の作成を可能にします。	<p>ACROSS 報告書では以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 報告書の列の数とタイトルは、ACROSS 列の値によって決まります。ACROSS 列の値ごとに 1 セットの報告書列があり、列の値が各報告書列の見出しになります。報告書の列セットには、集約取扱コード (例えば SUM、AVERAGE、COUNT) を使用するそれぞれの列が含まれています。</li> <li>• 1 つの報告書に ACROSS の列を 1 つだけ持てます。</li> <li>• 報告書の行数と各行のタイトルは、GROUP 列の値によって決まります。GROUP 列の各値ごとに 1 つの行があり、各行のタイトルはその列の値です。</li> <li>• CSUM、PCT、CPCT、TPCT、TCPCT の取扱コードは、ACROSS 取扱コードも使用する報告書の生成時に部分的にサポートされるだけです。</li> </ul>
AVERAGE	列の平均値	この取扱コードは数値データのみ有効です。この計算値は、報告書の合計として表示されます。計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。
Breakn	制御の切れ目レベルを提供します (ここで「n」は 1 から 6 の数です)。	例えば、BREAK1 はレベル 1 の切れ目の制御列を指定し、BREAK2 はレベル 2 の切れ目の制御列を指定します。その列の値が変更すると報告書のセクションの切れ目が発生します。取扱コードが集約取扱コードの 1 つである列の小計が表示されます。また、適切な「書式の切れ目」コンポーネントに指定されたテキストが表示されます。照会には BREAK 列に一致する ORDER BY 文節を使用してください。
BREAKnX	制御列が報告書から省略されることを除いて、BREAKn と同じです。	BREAKn と同じです。
CALCid	ID が「id」と等しい書式計算コンポーネントの計算式の評価です。	この計算された値は、報告書の合計として表示され、データの最終行にのみ適用されます。計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。列の値が計算に使用される場合、データの最終行のみが評価されます。
COUNT	列の NULL 以外の値のカウントです。	この計算値は、報告書の合計として表示されます。計算値は、編集コード K でフォーマットされています。

取扱コード	説明	注
CPCT	列の各値の現在の合計に対する累積パーセンテージです。	<ul style="list-style-type: none"> <li>この計算値は各明細行の値を置き換えて、また報告書の合計として表示されます。</li> <li>計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。</li> <li>CPCT 取扱コードは、ACROSS 取扱コードも使用する報告書の生成時に部分的にサポートされるだけです。</li> </ul>
CSUM	列の値の累計。	<ul style="list-style-type: none"> <li>この計算値は各明細行の値を置き換えて、また報告書の合計として表示されます。</li> <li>計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。</li> <li>CSUM 取扱コードは、ACROSS 取扱コードも使用する報告書の生成時に部分的にサポートされるだけです。</li> </ul>
FIRST	列の最初の値。	この計算値は、報告書の合計として表示されます。計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。
GROUP	列の値の各セットごとに合計データを 1 行だけ表示します。	複数の列で、取扱コード GROUP を使用できます。その場合、いずれかの列で値が変化すると新しいグループが開始されます。取扱コードのないその他の列はすべて報告書から省略されます。
LAST	列の最後の値です。	この計算値は、報告書の合計として表示されます。計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。
MAXIMUM	列の最大値です。	この計算値は、報告書の合計として表示されます。計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。
MINIMUM	列の最小値です。	この計算値は、報告書の合計として表示されます。計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。
OMIT	報告書から列を除外します。	列とその値が表形式の報告書に含まれません。この場合でも、書式変数 (&n (n は列番号を表す) など) を使用することによって、列に含まれる値を報告書に (例えば、切れ目の脚注に) 表示できます。
PCT	列の各値の現在の合計に対するパーセンテージです。	<ul style="list-style-type: none"> <li>この計算値は各明細行の値を置き換えて、また報告書の合計として表示されます。</li> <li>計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。</li> <li>PCT 取扱コードは、ACROSS 取扱コードも使用する報告書の生成時に部分的にサポートされるだけです。</li> </ul>

取扱コード	説明	注
STDEV	列の値の標準偏差です。	この取扱コードは数値データのみ有効です。この計算値は、報告書の合計として表示されます。計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。
SUM	列の値の合計です。	この取扱コードは数値データのみ有効です。この計算値は、報告書の合計として表示されます。計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。
TPCT	列の各値の最終合計に対するパーセンテージです。	<ul style="list-style-type: none"> <li>この計算値は各明細行の値を置き換えて、また報告書の合計として表示されます。</li> <li>計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。</li> <li>TPCT 取扱コードは、ACROSS 取扱コードも使用する報告書の生成時に部分的にサポートされるだけです。</li> </ul>
TCPCT	列の各値の最終合計に対する累積パーセンテージです。	<ul style="list-style-type: none"> <li>この計算値は各明細行の値を置き換えて、また報告書の合計として表示されます。</li> <li>計算値は、その列の編集コードでフォーマットされています。</li> <li>TCPCT 取扱コードは、ACROSS 取扱コードも使用する報告書の生成時に部分的にサポートされるだけです。</li> </ul>

## 標準の報告書の保存

標準の報告書を保存するということは、実際には、報告書の作成に使用された書式を保存するということになります。書式は、ローカル・ファイルやネットワーク・ファイル、ワークスペース、QMF カタログ、またはリポジトリに 1 つのオブジェクトとして保存できます。

### このタスクについて

保存された書式を開く際の動作は、書式が関連データ・ソース・オブジェクト付きで保存されたかどうかに応じて異なります。

- 関連データ・ソース・オブジェクト付きで書式を保存した場合は、報告書の作成に使用された両方のエレメントが保存されます。データ・ソース・オブジェクトと書式の両方で保存されているフォームが開かれるプロセスはこうです。まず、データ・ソース・オブジェクトの場所が特定されます。次いで、そのデータ・ソース・オブジェクトが実行されて照会結果が取得されます。次に、書式の設定が適用されます。こうして、標準の報告書が表示されます。書式を開くときに、常に特定のデータ・ソース・オブジェクトが使用されるように指定することで、標準の報告書を作成するために必要な手順を簡素化できます。
- 関連データ・ソース・オブジェクトを付けずに書式を保存した場合は、フォーマット・オプションだけが保存されます。書式を開く際、照会結果を指定する必要

があります。これは、標準の報告書を作成するために照会を実行し、照会結果をアクティブにし、書式を開く必要があることを意味します。使用できる照会結果がない場合、書式は編集用のみ開かれます。

## 関連データ・ソース・オブジェクト付きでの書式の保存

関連データ・ソース・オブジェクト付きで書式を保存した場合は、報告書の作成に使用された両方のエレメントが保存されます。この保存方法により、標準の報告書の作成に必要な手順を簡素化できます。

### このタスクについて

関連データ・ソース・オブジェクト付きで書式を保存するには、次のようにします。

### 手順

1. 照会オブジェクトを作成してその照会オブジェクトを保存するか、保存済みの照会オブジェクトを開きます。
2. 照会オブジェクトを実行して照会結果を取得します。
3. 新しい書式または保存されている書式を使用して、あるいはデフォルト書式設定または照会結果に基づく書式設定を使用して、標準の報告書を生成します。
4. 書式を保存します。この保存した書式を開くとき、この書式には既知の関連データ・ソース・オブジェクトがあります (オブジェクトを保存したため)。データ・ソース・オブジェクトの場所が特定され、データ・ソース・オブジェクトが実行されて照会結果が取得され、書式の設定が適用されて標準の報告書が表示されます。

## 関連データ・ソース・オブジェクトを付けない書式の保存

関連データ・ソース・オブジェクトを付けずに書式を保存した場合は、フォーマット・オプションのみが保存されます。

### このタスクについて

関連データ・ソース・オブジェクトを付けずに書式を保存するには、次のようにします。

1. 照会オブジェクトを作成するか、既存の照会を開きます。
2. 照会オブジェクトを実行して照会結果を取得します。
3. デフォルト設定を使用するか、照会結果に基づく書式設定を使用するか、保存済みの書式を開くか、または新規書式を作成して、標準の報告書を生成します。
4. 「書式」 > 「データ・ソース」を選択します。「この文書を開くときは常にこのオブジェクトを使用する」チェック・ボックスのチェックを外します。
5. 書式を保存します。この保存した書式を開くとき、この書式には既知の関連データ・ソース・オブジェクトがありません。一連の照会結果がアクティブになっている場合はそれらの結果が標準の報告書に書式設定されますが、アクティブになっている照会結果がない場合、書式は編集用のみ開かれます。

---

## 即時報告書の操作

印刷可能な報告書を照会結果セットから素早く生成するには、即時報告書を使用します。

「新規即時報告書の作成」ウィザードを使用して、報告書の「切れ目」セクションを定義し、データの報告に使用される列を決定します。例えば、地域別の販売を報告し、その後に各地域内の国別の販売を報告します。また、「新規即時報告書の作成」ウィザードでは、各列値に適用される集約関数 (昇順、降順、カウント、最大、最小、合計、平均など) を定義したり、報告書の明細行および合計行の両方のフォーマット (テキスト、配置、フォント、背景色など) を定義したりすることもできます。

## 即時報告書の作成

「新規即時報告書の作成」ウィザードを使用すれば、照会のデータから即時報告書を作成できます。

### このタスクについて

即時報告書を作成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードを開くには、「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択し、「**QMF** オブジェクト」を展開して、「即時報告書」を選択します。
2. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの最初のページで、即時報告書の名前を指定し、必要なソース照会を選択します。「グリッドから設定をコピー」チェック・ボックスを選択し、グループ化列と明細列の配分などのグリッド設定、およびフォーマット・オプションを即時報告書に適用します。「次へ」をクリックします。
3. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列」ページで、グループ化用の列と、明細列を選択します。「次へ」をクリックします。

注: 開かれた照会結果セットに基づいて即時報告書を作成できます。エディター・ウィンドウにアクティブ照会が表示された状態で、「照会」 > 「転送先」 > 「即時報告書」を選択します。この場合、「新規即時報告書の作成」ウィザードの最初のページはスキップされ、「列」ページが自動的に開かれます。

4. ウィザードの「フォーマット」ページで、以下の即時報告書オプションを設定します。
  - 報告書タイトルと合計行フォーマット・オプション
  - 列の順序
  - 列見出しフォーマット・オプション
  - 列グループ
  - 合計列と明細列のセット
  - 報告書列の条件付き書式
  - グループ化列フォーマット・オプション
  - グループ化列の見出しと脚注

- 明細列フォーマット・オプション
  - 報告書列に割り当て可能なカスタム・データ・オブジェクト
5. 「終了」をクリックします。即時報告書が編集機能の「デザイン」ページに表示されます。このページでは、即時報告書の外観を手動でカスタマイズすることができます。編集機能の「プレビュー」ページに即時報告書の印刷バージョンを表示できます。

## グループ化列および明細列の配置

グループ化列と明細列を即時報告書に追加したり即時報告書から削除したりすること、およびグループ化列を明細列に変換したり明細列をグループ化列に変換したりすることが可能です。

### 始める前に

「新規即時報告書の作成」ウィザードを開く必要があります。

### このタスクについて

即時報告書にグループ化列と明細列を配置するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列」ページを開きます。
2. グループ化列を追加または削除するには、「グループ化列セットに移動」または「グループ化列セットから削除」をクリックします。
3. 明細列を追加または削除するには、「明細列セットに移動」または「明細列セットから削除」をクリックします。

注: 使用可能なすべての列を「明細列」リストに追加するには、「すべてを明細列セットに移動」をクリックします。「明細列」リストからすべての列を除去するには、「すべてを明細列セットから移動」をクリックします。

4. グループ化列を明細列に変換したり、明細列をグループ化列に変換したりするには、列を選択して「グループ化列セットに移動」ボタンまたは「明細列セットに移動」ボタンをクリックします。
5. グループ化列の順序を変更するには、「グループ化列」リストの右側にある「選択された列を上へ移動」ボタンまたは「選択された列を下へ移動」ボタンを使用します。
6. 即時報告書に必要なパラメーターをすべて指定したら、「終了」をクリックして「新規即時報告書の作成」ウィザードを閉じ、エディターの「デザイン」ページに即時報告書を表示します。このページでは、報告書の外観を手動でカスタマイズできます。

### 次のタスク

次: 344 ページの『報告書タイトルおよび報告書合計情報の表示方法の指定』

関連タスク:

344 ページの『報告書タイトルおよび報告書合計情報の表示方法の指定』  
即時報告書の報告書タイトルおよび報告書合計情報を表示する方法を指定できます。

#### 346 ページの『列見出しの表示方法の指定』

「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列見出し」ページで、即時報告書に表示される列見出しの外観および順序を指定できます。

#### 347 ページの『列グループの作成』

即時報告書に表示されるデータを制限するには、相互に排他的な列グループに列を編成することができます。

#### 349 ページの『合計列と明細列のセットの作成』

即時報告書に常に表示する必要のない明細列を、合計列に関連付けることができます。

#### 350 ページの『条件付き書式の適用』

即時報告書で条件付き書式を使用すれば、データをビジュアルに探索して分析したり、クリティカルな問題を検出したり、パターンや傾向を特定したりできます。

#### 353 ページの『グループ化列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書のグループ化列に対してフォーマット・オプションを指定できます。

#### 354 ページの『見出し情報および脚注情報の表示方法の指定』

即時報告書のグループ化列に関する見出し情報と脚注情報を表示する方法を指定できます。

#### 356 ページの『明細列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書の明細列の表示方法を指定できます。

#### 357 ページの『即時報告書の列フォーマット・オプションの指定』

即時報告書の個別の列のフォーマット・オプションを指定できます。

#### 360 ページの『即時報告書の列へのカスタム・データ・オブジェクトの割り当て』

即時報告書の列をクリックすると開くカスタム・データ・オブジェクトを割り当てることができます。

### 報告書タイトルおよび報告書合計情報の表示方法の指定

即時報告書の報告書タイトルおよび報告書合計情報を表示する方法を指定できます。

#### 始める前に

「新規即時報告書の作成」ウィザードを開く必要があります。

#### このタスクについて

即時報告書の報告書タイトルおよび報告書合計情報を表示する方法を指定するには、以下のようにします。

#### 手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「フォーマット」ページを開きます。
2. ツリーから「報告書設定」を選択します。
3. 「報告書タイトル」セクションの「可視」チェック・ボックスを選択して、報告書のタイトルを表示します。「報告書タイトル」オプションが使用可能になります。
4. 「テキスト」フィールドに報告書のタイトルを指定します。

注: 即時報告書タイトルは、印刷された報告書にのみ表示できます。



5. 「配置」メニューから、ページのどこに報告書タイトルを表示しなければならないのかを指定します。有効なオプションは以下のとおりです。
  - 左 - タイトルは見出しの左側に表示されます。
  - 中央 - タイトルは見出しの中央に表示されます。
  - 右 - タイトルは見出しの右側に表示されます。
6. 「フォント」フィールドにタイトルのフォントを指定します。
7. タイトルの背景色を「背景」フィールドに指定します。
8. 「合計行」セクションの「可視」チェック・ボックスを選択して、報告書の下部に合計行を組み込みます。「合計行」オプションが使用可能になります。
9. 合計行テキストのフォントを「フォント」フィールドに指定します。
10. 合計行の背景色を「背景」フィールドに指定します。
11. 「共通設定」領域で、以下の手順を実行して、即時報告書グリッドを表示する方法を指定します。
  - 行番号と列番号を表示するには、「行番号と列番号を表示」チェック・ボックスを選択します。
  - 罫線を表示するには、「罫線を表示」チェック・ボックスを選択します。省略時設定では、両方のチェック・ボックスはクリアされています。
12. 即時報告書に必要なパラメーターをすべて指定したら、「終了」をクリックして「新規即時報告書の作成」ウィザードを閉じ、エディターの「デザイン」ページに即時報告書を表示します。このページでは、報告書の外観を手動でカスタマイズできます。

## 次のタスク

次: 346 ページの『列見出しの表示方法の指定』

関連タスク:

343 ページの『グループ化列および明細列の配置』

グループ化列と明細列を即時報告書に追加したり即時報告書から削除したりすること、およびグループ化列を明細列に変換したり明細列をグループ化列に変換したりすることが可能です。

346 ページの『列見出しの表示方法の指定』

「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列見出し」ページで、即時報告書に表示される列見出しの外観および順序を指定できます。

347 ページの『列グループの作成』

即時報告書に表示されるデータを制限するには、相互に排他的な列グループに列を編成することができます。

349 ページの『合計列と明細列のセットの作成』

即時報告書に常に表示する必要のない明細列を、合計列に関連付けることができます。

350 ページの『条件付き書式の適用』

即時報告書で条件付き書式を使用すれば、データをビジュアルに探索して分析したり、クリティカルな問題を検出したり、パターンや傾向を特定したりできます。

353 ページの『グループ化列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書のグループ化列に対してフォーマット・オプションを指定できます。

354 ページの『見出し情報および脚注情報の表示方法の指定』  
即時報告書のグループ化列に関する見出し情報と脚注情報を表示する方法を指定できます。

356 ページの『明細列のフォーマット・オプションの指定』  
即時報告書の明細列の表示方法を指定できます。

357 ページの『即時報告書の列フォーマット・オプションの指定』  
即時報告書の個別の列のフォーマット・オプションを指定できます。

360 ページの『即時報告書の列へのカスタム・データ・オブジェクトの割り当て』  
即時報告書の列をクリックすると開くカスタム・データ・オブジェクトを割り当てることができます。

## 列見出しの表示方法の指定

「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列見出し」ページで、即時報告書に表示される列見出しの外観および順序を指定できます。

### 始める前に

「新規即時報告書の作成」ウィザードを開く必要があります。

### このタスクについて

列見出しの表示方法を指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「フォーマット」ページを開きます。
2. ツリーで「報告書設定」ノードを展開し、「列見出し」ノードを選択します。
3. 列の順序を変更するには、列を選択して、必要とする位置までドラッグします。
4. 列を非表示にするには、列を選択して「非表示」チェック・ボックスを選びます。
5. 階層列見出しを作成したり既存の列見出しをグループ化したりするには、「見出しの作成」をクリックして、必要とする列見出しを対象の見出しまでドラッグします。

注: 見出しを作成しても、その見出しに既存の見出しを 1 つも取り込まなければ、その見出しは報告書に表示されません。

6. 「見出し」領域で、列見出しの名前、フォント、背景色、水平配置、および垂直配置を指定します。
7. 即時報告書に必要なパラメーターをすべて指定したら、「終了」をクリックして「新規即時報告書の作成」ウィザードを閉じ、エディターの「デザイン」ページに即時報告書を表示します。このページでは、報告書の外観を手動でカスタマイズできます。

### 次のタスク

次: 347 ページの『列グループの作成』

関連タスク:

### 343 ページの『グループ化列および明細列の配置』

グループ化列と明細列を即時報告書に追加したり即時報告書から削除したりすること、およびグループ化列を明細列に変換したり明細列をグループ化列に変換したりすることが可能です。

### 344 ページの『報告書タイトルおよび報告書合計情報の表示方法の指定』

即時報告書の報告書タイトルおよび報告書合計情報を表示する方法を指定できます。

### 『列グループの作成』

即時報告書に表示されるデータを制限するには、相互に排他的な列グループに列を編成することができます。

### 349 ページの『合計列と明細列のセットの作成』

即時報告書に常に表示する必要のない明細列を、合計列に関連付けることができます。

### 350 ページの『条件付き書式の適用』

即時報告書で条件付き書式を使用すれば、データをビジュアルに探索して分析したり、クリティカルな問題を検出したり、パターンや傾向を特定したりできます。

### 353 ページの『グループ化列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書のグループ化列に対してフォーマット・オプションを指定できます。

### 354 ページの『見出し情報および脚注情報の表示方法の指定』

即時報告書のグループ化列に関する見出し情報と脚注情報を表示する方法を指定できます。

### 356 ページの『明細列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書の明細列の表示方法を指定できます。

### 357 ページの『即時報告書の列フォーマット・オプションの指定』

即時報告書の個別の列のフォーマット・オプションを指定できます。

### 360 ページの『即時報告書の列へのカスタム・データ・オブジェクトの割り当て』

即時報告書の列をクリックすると開くカスタム・データ・オブジェクトを割り当てることができます。

## 列グループの作成

即時報告書に表示されるデータを制限するには、相互に排他的な列グループに列を編成することができます。

### 始める前に

「新規即時報告書の作成」ウィザードを開く必要があります。

### このタスクについて

その後、グループを切り替えて、そのグループに割り当てられている列のみを表示することができます。他のグループに割り当てられた列は表示されません。どのグループにも割り当てられていない列は、常に即時報告書に表示されます。

列グループを作成するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「フォーマット」ページを開きます。

2. 「報告書設定」ノードを展開して、ツリーから「列グループ」ノードを選択します。
3. 「列グループ」ページで「グループの追加」をクリックします。新規グループが「グループ」リストに表示されます。
4. 必要な列を「列」リストから選択して、グループに追加します。
5. オプション: グループに既に割り当てられている列を「列」リストで非表示にするには、「グループ化された列を表示」チェック・ボックスをクリアします。
6. オプション: 列グループの順序を変更するには、グループを選択して、「上へ移動」または「下へ移動」をクリックします。

注: 即時報告書を開くと、リスト内の最初のグループがデフォルトで表示されません。

7. 即時報告書に必要なパラメーターをすべて指定したら、「終了」をクリックして「新規即時報告書の作成」ウィザードを閉じ、エディターの「デザイン」ページに即時報告書を表示します。このページでは、報告書の外観を手動でカスタマイズできます。

## 次のタスク

次: 349 ページの『合計列と明細列のセットの作成』

関連タスク:

343 ページの『グループ化列および明細列の配置』

グループ化列と明細列を即時報告書に追加したり即時報告書から削除したりすること、およびグループ化列を明細列に変換したり明細列をグループ化列に変換したりすることが可能です。

344 ページの『報告書タイトルおよび報告書合計情報の表示方法の指定』

即時報告書の報告書タイトルおよび報告書合計情報を表示する方法を指定できます。

346 ページの『列見出しの表示方法の指定』

「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列見出し」ページで、即時報告書に表示される列見出しの外観および順序を指定できます。

349 ページの『合計列と明細列のセットの作成』

即時報告書に常に表示する必要のない明細列を、合計列に関連付けることができます。

350 ページの『条件付き書式の適用』

即時報告書で条件付き書式を使用すれば、データをビジュアルに探索して分析したり、クリティカルな問題を検出したり、パターンや傾向を特定したりできます。

353 ページの『グループ化列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書のグループ化列に対してフォーマット・オプションを指定できます。

354 ページの『見出し情報および脚注情報の表示方法の指定』

即時報告書のグループ化列に関する見出し情報と脚注情報を表示する方法を指定できます。

356 ページの『明細列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書の明細列の表示方法を指定できます。

357 ページの『即時報告書の列フォーマット・オプションの指定』

即時報告書の個別の列のフォーマット・オプションを指定できます。

360 ページの『即時報告書の列へのカスタム・データ・オブジェクトの割り当て』  
即時報告書の列をクリックすると開くカスタム・データ・オブジェクトを割り当て  
ることができます。

## 合計列と明細列のセットの作成

即時報告書に常に表示する必要のない明細列を、合計列に関連付けることができま  
す。

### 始める前に

「新規即時報告書の作成」ウィザードを開く必要があります。

### このタスクについて

例えば、「項目コスト」 および「出荷された項目の数」 から計算される「製品コ  
スト」 列があるとします。即時報告書には「製品コスト」 列のみを表示するが、  
必要に応じて他の列も使用できるようにしておく必要があります。この機能を使用  
して、「製品コスト」 列を合計列にし、合計列の計算に使用する列を明細列として  
指定することができます。

合計列見出しの矢印をクリックすることで、明細列を表示したり非表示にしたりす  
ることができます。

合計列と明細列のセットを作成するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「フォーマット」ページを開きます。
2. 「報告書設定」ノードを展開して、ツリーから「合計/明細セット」ノードを選  
択します。
3. 「合計/明細セット」ページで、「合計/明細セットの追加」をクリックします。  
新規セットが表に表示されます。
4. 使用可能な列のリストから合計列を指定します。選択されていないすべての列が  
自動的に「明細列」リストに表示されます。
5. 「明細列」リストから、指定した合計列に関連付ける明細列を選択します。
6. 即時報告書に必要なパラメーターをすべて指定したら、「終了」をクリックして  
「新規即時報告書の作成」ウィザードを閉じ、エディターの「デザイン」ペー  
ジに即時報告書を表示します。このページでは、報告書の外観を手動でカスタマイ  
ズできます。

### 次のタスク

次: 350 ページの『条件付き書式の適用』

関連タスク:

343 ページの『グループ化列および明細列の配置』

グループ化列と明細列を即時報告書に追加したり即時報告書から削除したりするこ  
と、 およびグループ化列を明細列に変換したり明細列をグループ化列に変換したり  
することが可能です。

344 ページの『報告書タイトルおよび報告書合計情報の表示方法の指定』

即時報告書の報告書タイトルおよび報告書合計情報を表示する方法を指定できま

す。

#### 346 ページの『列見出しの表示方法の指定』

「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列見出し」ページで、即時報告書に表示される列見出しの外観および順序を指定できます。

#### 347 ページの『列グループの作成』

即時報告書に表示されるデータを制限するには、相互に排他的な列グループに列を編成することができます。

#### 『条件付き書式の適用』

即時報告書で条件付き書式を使用すれば、データをビジュアルに探索して分析したり、クリティカルな問題を検出したり、パターンや傾向を特定したりできます。

#### 353 ページの『グループ化列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書のグループ化列に対してフォーマット・オプションを指定できます。

#### 354 ページの『見出し情報および脚注情報の表示方法の指定』

即時報告書のグループ化列に関する見出し情報と脚注情報を表示する方法を指定できます。

#### 356 ページの『明細列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書の明細列の表示方法を指定できます。

#### 357 ページの『即時報告書の列フォーマット・オプションの指定』

即時報告書の個別の列のフォーマット・オプションを指定できます。

#### 360 ページの『即時報告書の列へのカスタム・データ・オブジェクトの割り当て』

即時報告書の列をクリックすると開くカスタム・データ・オブジェクトを割り当てることができます。

## 条件付き書式の適用

即時報告書で条件付き書式を使用すれば、データをビジュアルに探索して分析したり、クリティカルな問題を検出したり、パターンや傾向を特定したりできます。

## 始める前に

「新規即時報告書の作成」ウィザードを開く必要があります。

## このタスクについて

条件付き書式を使用すれば、基礎データに基づいて、データの表示と即時報告書の動作の両方を制御する条件式を指定できます。例えば、条件付き書式を使用すれば、年末売り上げを示すフィールドのうち、特定の数字を下回るフィールドを赤色で強調表示できます。

条件付き書式を適用するには、以下のようにします。

## 手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「フォーマット」ページを開きます。
2. ツリーで「報告書設定」ノードを展開し、「条件付き書式」ノードを選択します。
3. 「条件付き書式」ページで「フォーマットの追加」をクリックします。

4. 「新規条件付き書式」ウィザードの最初のページで、条件付き書式の名前を指定し、対象のフォーマットが適用される列と明細レベルを選択します。「次へ」をクリックします。

注: 選択した列または明細レベルのフォーマットがすでに設定されている場合、そのフォーマットは新しいフォーマットによってオーバーライドされません。

5. ウィザードの 2 ページ目で条件式およびフォーマット・オプションを指定します。
6. 「基本列」リストで、フォーマットの条件の一部として使用される値を含む列を選択します。「<同じ列に基づく>」オプションを選択すれば、条件付き書式を適用する列の値を使用できます。このオプションを選択した場合、形式は、同じタイプ (数値、ストリング、または日時) の列にのみ適用できます。
7. 「条件の追加」をクリックし、「選択された条件」領域で条件パラメーターを指定します。
  - a. 「演算子」リストで、必要とする演算子を選択します。選択可能なオプションは以下のとおりです。
    - より小さくない - 指定された値以上のすべての値が含まれます。
    - より大きい - 指定された値より大きいすべての値が含まれます。
    - より大きくない - 指定された値以下のすべての値が含まれます。
    - より小さい - 指定された値より小さいすべての値が含まれます。
    - 等しい - 指定された値と等しい値のみが含まれます。
    - 等しくない - 指定された値と等しくないすべての値が含まれます。
    - 類似 - 指定されたパターンと一致するすべての値が含まれます。パターンには以下の特殊文字を含めることができます。
      - % は 0 個以上の文字と一致します。
      - \_ は 1 つの文字のみと一致します。
      - ? は 1 つの文字のみと一致します。
    - 大/小文字を区別しない **Like** - Like 演算子の 大/小文字を区別しないバージョンです。
    - 非類似 - 指定された値に類似していないすべての値が含まれます。
    - **NULL** - NULL 値のみが含まれます。
    - **NULL** ではない - NULL ではないすべての値が含まれます。
    - 範囲内 - 2 つの指定値の間にあるすべての値およびこれらの指定値が含まれます。
    - 範囲外 - 2 つの指定値の外にあるすべての値およびこれらの指定値が含まれます。
    - 間 - 2 つの指定値の間にあるすべての値が含まれます。
    - 間がない - 2 つの指定値の外にあるすべての値が含まれます。
  - b. オペランドのタイプと値を指定します。定数値、または必要な値を提供する列の名前を設定できます。
8. エディターで条件付き書式のオプションを指定します。「サンプル」領域で結果のフォーマットをプレビューできます。

- a. エディターの「テキスト」ページで、テキストのフォント、データ・フォーマット、および配置を設定します。
  - b. 「色」ページで前景色と背景色を設定します。単一の色またはグラジエントを使用できます。
  - c. 「イメージ」ページでは、報告書に表示するイメージを選択して、その位置を設定できます。使用可能な位置オプションは以下のとおりです。
    - テキストの前
    - テキストの後
    - テキストの置換
9. 「終了」をクリックして、「新規条件付き書式」ウィザードを閉じます。作成した条件付き書式が、「新規即時報告書の作成」ウィザードの「条件付き書式」ページに表示されます。
10. 即時報告書に必要なパラメーターをすべて指定したら、「終了」をクリックして「新規即時報告書の作成」ウィザードを閉じ、エディターの「デザイン」ページに即時報告書を表示します。このページでは、報告書の外観を手動でカスタマイズできます。

## タスクの結果

作成した条件付き書式は、「条件付き書式の編集」ウィザードを使用して編集できます。また、「割り当て」ページでは、作成した条件付き書式を他の列や明細レベルに割り当てし直すこともできます。

## 次のタスク

次: 353 ページの『グループ化列のフォーマット・オプションの指定』

関連タスク:

343 ページの『グループ化列および明細列の配置』

グループ化列と明細列を即時報告書に追加したり即時報告書から削除したりすること、およびグループ化列を明細列に変換したり明細列をグループ化列に変換したりすることが可能です。

344 ページの『報告書タイトルおよび報告書合計情報の表示方法の指定』

即時報告書の報告書タイトルおよび報告書合計情報を表示する方法を指定できます。

346 ページの『列見出しの表示方法の指定』

「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列見出し」ページで、即時報告書に表示される列見出しの外観および順序を指定できます。

349 ページの『合計列と明細列のセットの作成』

即時報告書に常に表示する必要のない明細列を、合計列に関連付けることができます。

353 ページの『グループ化列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書のグループ化列に対してフォーマット・オプションを指定できます。

354 ページの『見出し情報および脚注情報の表示方法の指定』

即時報告書のグループ化列に関する見出し情報と脚注情報を表示する方法を指定できます。



356 ページの『明細列のフォーマット・オプションの指定』  
即時報告書の明細列の表示方法を指定できます。

357 ページの『即時報告書の列フォーマット・オプションの指定』  
即時報告書の個別の列のフォーマット・オプションを指定できます。

360 ページの『即時報告書の列へのカスタム・データ・オブジェクトの割り当て』  
即時報告書の列をクリックすると開くカスタム・データ・オブジェクトを割り当て  
ることができます。

## グループ化列のフォーマット・オプションの指定

即時報告書のグループ化列に対してフォーマット・オプションを指定できます。

### 始める前に

「新規即時報告書の作成」ウィザードを開く必要があります。

### このタスクについて

「グループ化列」のフォーマット・オプションを指定するには、以下のようによ  
します。

### 手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「フォーマット」ページを開きます。
2. ツリーから「グループ化列」を選択します。
3. グループ化列の名前を変更するには、「見出し」セルをクリックし、新しいテキ  
ストを指定します。

指定するテキストは、即時報告書にグループ化列名として表示されます。複数行  
の見出しを設定するには、「\_」記号を使用して行を区切る必要があります。こ  
の記号は報告書において行の区切り文字で置き換えられます。

4. グループ化列のソート順序を変更するには、「ソート」セルをクリックし、「昇  
順」または「降順」を選択します。
5. グループ化列の幅を変更するには、「幅」セルをクリックして、新規の幅を指定  
します。
6. 即時報告書に必要なパラメーターをすべて指定したら、「終了」をクリックして  
「新規即時報告書の作成」ウィザードを閉じ、エディターの「デザイン」ページ  
に即時報告書を表示します。このページでは、報告書の外観を手動でカスタマイ  
ズできます。

### 次のタスク

次: 354 ページの『見出し情報および脚注情報の表示方法の指定』

関連タスク:

343 ページの『グループ化列および明細列の配置』

グループ化列と明細列を即時報告書に追加したり即時報告書から削除したりするこ  
と、 およびグループ化列を明細列に変換したり明細列をグループ化列に変換したり  
することが可能です。

344 ページの『報告書タイトルおよび報告書合計情報の表示方法の指定』

即時報告書の報告書タイトルおよび報告書合計情報を表示する方法を指定できま

す。

#### 346 ページの『列見出しの表示方法の指定』

「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列見出し」ページで、即時報告書に表示される列見出しの外観および順序を指定できます。

#### 350 ページの『条件付き書式の適用』

即時報告書で条件付き書式を使用すれば、データをビジュアルに探索して分析したり、クリティカルな問題を検出したり、パターンや傾向を特定したりできます。

#### 『見出し情報および脚注情報の表示方法の指定』

即時報告書のグループ化列に関する見出し情報と脚注情報を表示する方法を指定できます。

#### 356 ページの『明細列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書の明細列の表示方法を指定できます。

#### 357 ページの『即時報告書の列フォーマット・オプションの指定』

即時報告書の個別の列のフォーマット・オプションを指定できます。

#### 360 ページの『即時報告書の列へのカスタム・データ・オブジェクトの割り当て』

即時報告書の列をクリックすると開くカスタム・データ・オブジェクトを割り当てることができます。

## 見出し情報および脚注情報の表示方法の指定

即時報告書のグループ化列に関する見出し情報と脚注情報を表示する方法を指定できます。

### 始める前に

「新規即時報告書の作成」ウィザードを開く必要があります。

### このタスクについて

「グループ化列」オプションに関する見出し情報と脚注情報を指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「フォーマット」ページを開きます。
2. ツリーで「グループ化列」を展開してから、その下にある列名の 1 つを展開し、「見出し」を選択します。
3. すべてのグループ化列の行に対する見出しを表示するには、「可視」チェック・ボックスを選択します。
4. グループ化列の行の見出しに表示するテキストを「テキスト」フィールドに指定します。デフォルトのテキストは `= 'column_name: '+@[column]` です。  
'column\_name' はグループ化列の列名、'column' は指定のグループ化列の行の値です。例えば、グループ化列の名前が DEPT であり、この列に、ある会社の部門番号が含まれている場合は、このテキストによって、連続する行見出し (DEPT: 10、DEPT: 20 など) を生成できます。このテキストは必要に応じて変更できますが、この構造全体を保持することをお勧めします。
5. グループ化列の行の見出しのフォントを「フォント」フィールドに指定します。
6. グループ化列の行の見出しの背景色を「背景」フィールドに指定します。

7. 見出しの高さを「高さ」フィールドに指定します。
8. グループ化列の見出しには、図表を表示できます。見出しに図表を表示するには、「図表を使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。「新規図表」ウィザードで図表のパラメーターを指定します。

注: 「図表を使用可能にする」チェック・ボックスをクリアすると、指定した図表は表示されなくなりますが、即時報告書から削除されるわけではありません。

9. 作成した図表は、「図表プロパティの編集」ウィンドウで編集できます。「図表プロパティの編集」ウィンドウを開くには、「図表設定」をクリックします。
10. 図表を削除するには、「図表の削除」をクリックします。
11. 「脚注」オプションは、「見出し」オプションと同じです。「脚注」ページを開くには、ツリーで「脚注」を選択します。
12. 指定した明細列の集約合計を表示するには、「可視」チェック・ボックスを選択し、「テキスト」フィールドに合計行テキストを指定します。

デフォルトのテキストは ='Summary of ' + @[column] です。 'column' は、集約される値を含む明細列の名前です。

13. 即時報告書に必要なパラメーターをすべて指定したら、「終了」をクリックして「新規即時報告書の作成」ウィザードを閉じ、エディターの「デザイン」ページに即時報告書を表示します。このページでは、報告書の外観を手動でカスタマイズできます。

## 次のタスク

次: 356 ページの『明細列のフォーマット・オプションの指定』

関連タスク:

247 ページの『図表の作成』

「新規図表」ウィザードを使用すれば、照会結果セットから図表を作成できます。

343 ページの『グループ化列および明細列の配置』

グループ化列と明細列を即時報告書に追加したり即時報告書から削除したりすること、およびグループ化列を明細列に変換したり明細列をグループ化列に変換したりすることが可能です。

344 ページの『報告書タイトルおよび報告書合計情報の表示方法の指定』

即時報告書の報告書タイトルおよび報告書合計情報を表示する方法を指定できます。

346 ページの『列見出しの表示方法の指定』

「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列見出し」ページで、即時報告書に表示される列見出しの外観および順序を指定できます。

347 ページの『列グループの作成』

即時報告書に表示されるデータを制限するには、相互に排他的な列グループに列を編成することができます。

349 ページの『合計列と明細列のセットの作成』

即時報告書に常に表示する必要のない明細列を、合計列に関連付けることができます。

す。

#### 350 ページの『条件付き書式の適用』

即時報告書で条件付き書式を使用すれば、データをビジュアルに探索して分析したり、クリティカルな問題を検出したり、パターンや傾向を特定したりできます。

#### 353 ページの『グループ化列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書のグループ化列に対してフォーマット・オプションを指定できます。

#### 『明細列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書の明細列の表示方法を指定できます。

#### 357 ページの『即時報告書の列フォーマット・オプションの指定』

即時報告書の個別の列のフォーマット・オプションを指定できます。

#### 360 ページの『即時報告書の列へのカスタム・データ・オブジェクトの割り当て』

即時報告書の列をクリックすると開くカスタム・データ・オブジェクトを割り当てることができます。

## 明細列のフォーマット・オプションの指定

即時報告書の明細列の表示方法を指定できます。

### 始める前に

「新規即時報告書の作成」ウィザードを開く必要があります。

### このタスクについて

「明細列」フォーマット・オプションを指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「フォーマット」ページを開きます。
2. ツリーから「明細列」を選択します。「明細列」ページが開きます。
3. 明細列の列名を変更するには、「見出し」セルをクリックし、新しいテキストを指定します。指定するテキストは、即時報告書に明細列名として表示されません。複数行の見出しを設定するには、「\_」記号を使用して行を区切る必要があります。この記号は報告書において行の区切り文字で置き換えられます。
4. 明細列の集約方法を変更するには、「集約」セルをクリックし、新規の値を選択します。有効なオプションには以下があります。
  - カウント
  - 最初
  - 最後
  - 最大
  - 最小
  - 合計
  - 平均
  - 標準偏差

列から集約を削除するには、「なし」を選択します。

5. 明細列の幅を変更するには、「幅」セルをクリックして、新規の幅を指定します。

6. 即時報告書に必要なパラメーターをすべて指定したら、「終了」をクリックして「新規即時報告書の作成」ウィザードを閉じ、エディターの「デザイン」ページに即時報告書を表示します。このページでは、報告書の外観を手動でカスタマイズできます。

## 次のタスク

次: 『即時報告書の列フォーマット・オプションの指定』

関連タスク:

343 ページの『グループ化列および明細列の配置』

グループ化列と明細列を即時報告書に追加したり即時報告書から削除したりすること、およびグループ化列を明細列に変換したり明細列をグループ化列に変換したりすることが可能です。

344 ページの『報告書タイトルおよび報告書合計情報の表示方法の指定』

即時報告書の報告書タイトルおよび報告書合計情報を表示する方法を指定できます。

346 ページの『列見出しの表示方法の指定』

「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列見出し」ページで、即時報告書に表示される列見出しの外観および順序を指定できます。

347 ページの『列グループの作成』

即時報告書に表示されるデータを制限するには、相互に排他的な列グループに列を編成することができます。

349 ページの『合計列と明細列のセットの作成』

即時報告書に常に表示する必要のない明細列を、合計列に関連付けることができます。

350 ページの『条件付き書式の適用』

即時報告書で条件付き書式を使用すれば、データをビジュアルに探索して分析したり、クリティカルな問題を検出したり、パターンや傾向を特定したりできます。

353 ページの『グループ化列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書のグループ化列に対してフォーマット・オプションを指定できます。

354 ページの『見出し情報および脚注情報の表示方法の指定』

即時報告書のグループ化列に関する見出し情報と脚注情報を表示する方法を指定できます。

『即時報告書の列フォーマット・オプションの指定』

即時報告書の個別の列のフォーマット・オプションを指定できます。

360 ページの『即時報告書の列へのカスタム・データ・オブジェクトの割り当て』

即時報告書の列をクリックすると開くカスタム・データ・オブジェクトを割り当てることができます。

## 即時報告書の列フォーマット・オプションの指定

即時報告書の個別の列のフォーマット・オプションを指定できます。

### このタスクについて

即時報告書の合計行の外観をカスタマイズできるだけでなく、報告書に表示される列ごとにフォーマット・オプションを指定できます。

個々の列のフォーマット・オプションを指定するには、以下のようにします。

## 手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「フォーマット」ページを開きます。
2. ツリーから列名を選択します。列がグループ化列であるのか明細列であるのかに関係なく、各行のフォーマット・オプションは同一です。
3. 列の幅を「列幅」フィールドに指定します。
4. 「明細」領域で、列のフォント、データ形式、背景色、水平位置合わせ、および垂直位置合わせを指定します。文字データが含まれた列では、自動テキスト折り返しを適用できます。自動テキスト折り返しを適用するには、「テキストの折り返し」チェック・ボックスを選択します。
5. 即時報告書に必要なパラメーターをすべて指定したら、「終了」をクリックして「新規即時報告書の作成」ウィザードを閉じます。「プレビュー」ウィンドウに即時報告書が表示されます。

## 関連タスク:

### 343 ページの『グループ化列および明細列の配置』

グループ化列と明細列を即時報告書に追加したり即時報告書から削除したりすること、およびグループ化列を明細列に変換したり明細列をグループ化列に変換したりすることが可能です。

### 344 ページの『報告書タイトルおよび報告書合計情報の表示方法の指定』

即時報告書の報告書タイトルおよび報告書合計情報を表示する方法を指定できます。

### 346 ページの『列見出しの表示方法の指定』

「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列見出し」ページで、即時報告書に表示される列見出しの外観および順序を指定できます。

### 347 ページの『列グループの作成』

即時報告書に表示されるデータを制限するには、相互に排他的な列グループに列を編成することができます。

### 349 ページの『合計列と明細列のセットの作成』

即時報告書に常に表示する必要のない明細列を、合計列に関連付けることができます。

### 350 ページの『条件付き書式の適用』

即時報告書で条件付き書式を使用すれば、データをビジュアルに探索して分析したり、クリティカルな問題を検出したり、パターンや傾向を特定したりできます。

### 353 ページの『グループ化列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書のグループ化列に対してフォーマット・オプションを指定できます。

### 354 ページの『見出し情報および脚注情報の表示方法の指定』

即時報告書のグループ化列に関する見出し情報と脚注情報を表示する方法を指定できます。

### 356 ページの『明細列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書の明細列の表示方法を指定できます。

### 360 ページの『即時報告書の列へのカスタム・データ・オブジェクトの割り当て』

即時報告書の列をクリックすると開くカスタム・データ・オブジェクトを割り当てることができます。

即時報告書列のデータ・フォーマット・オプションの指定:

「フォーマットの選択」ウィンドウで個別の列に対してデータ値フォーマット・オプションを指定できます。

このタスクについて

データ・フォーマット・オプションを指定するには:

手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「フォーマット」ページを開きます。
2. ツリーから列名を選択します。「明細」領域で「フォーマット」フィールドの横にある省略符号 (...) をクリックします。
3. 「フォーマット」リストからデータ値のフォーマットを選択します。有効なオプションには以下があります。

数値データ・タイプに使用できる形式は以下のとおりです。

- 現状のまま - 厳密な列値が形式設定されずに表示されます。
- 通貨 - 列値は通貨として表示されます。表示される通貨単位は、現行セッションのロケール設定によって決まります。
- 10 進数 - 列値は 10 進数として表示されます。
- 浮動小数 - 列値は浮動小数で表示されます。
- パーセント - 列値はパーセンテージとして表示されます。
- カスタム - 「パターン」フィールドで指定されたパターンに従って、データ・ポイント値が表示されます。

日付データ・タイプに使用できる形式は以下のとおりです。

- 現状のまま - 厳密な列値が形式設定されずに表示されます。
- データベース - データベースの形式で日付が表示されます。
- 日付 - 使用可能な形式から日付表示を選択します。
- カスタム - 「パターン」フィールドで指定されたパターンに従って、日付が表示されます。

タイム・スタンプ・データ・タイプに使用できる形式は以下のとおりです。

- 現状のまま - 厳密な列値が形式設定されずに表示されます。
  - データベース - データベースの形式でタイム・スタンプが表示されます。
  - タイム・スタンプ - 使用可能な形式からタイム・スタンプ表示を選択します。
  - 日付 - タイム・スタンプの日付構成要素のみが表示されます。
  - 時刻 - タイム・スタンプの時刻構成要素のみが表示されます。
  - カスタム - 「パターン」フィールドで指定されたパターンに従って、タイム・スタンプが表示されます。
4. データ・ポイント値に千の位の区切り文字を含めるには、「千の位の区切り文字」チェック・ボックスを選択します。
  5. 表示する小数点以下の桁数を「小数部」フィールドに指定します。値に「0」を指定すると、小数点以下の桁が表示されません。

6. 負数のフォーマットを「負の数」リストで選択します。
7. 「OK」をクリックします。「フォーマットの選択」ウィンドウが閉じて、制御が「新規即時報告書の作成」ウィザードに戻ります。

## 即時報告書の列へのカスタム・データ・オブジェクトの割り当て

即時報告書の列をクリックすると開くカスタム・データ・オブジェクトを割り当てることができます。

### 始める前に

「新規即時報告書の作成」ウィザードを開く必要があります。

### このタスクについて

列のクリック・イベントを指定するには、次のようにします。

### 手順

1. 「新規即時報告書の作成」ウィザードの「フォーマット (**Format**)」ページを開きます。
2. グループ化列ノードまたは明細列ノードのどちらかを展開し、ツリーから「クリック・イベント (**Click Events**)」ノードを選択します。「新規即時報告書の作成」ウィザードの「クリック・イベント (**Click Events**)」ページには、次の 2 つのページがあります。
  - 「ドリル・オブジェクト (**Drill objects**)」ページ。このページでは、選択した列にオブジェクトを割り当てることができます。
  - 「列プロンプト (**Column prompts**)」ページ。このページでは、割り当てたオブジェクトに渡す必要がある変数値を指定できます。
3. 「ドリル・オブジェクト (**Drill objects**)」ページで、「新規ドリル・オブジェクトの追加 (**Add new drill object**)」をクリックし、リポジトリまたはファイル・システム内の必要なオブジェクトを参照します。選択したオブジェクトにプロンプトが含まれている場合、そのプロンプトが「プロンプトの割り当て (**Prompts Assignments**)」リストに表示されます。

注: 1 つの同じ列に複数のオブジェクトを割り当てることができます。列をクリックすると、割り当てたオブジェクトのリスト内の最初のオブジェクトが開きます。オブジェクトの順序を変更するには、「オブジェクトを上を移動 (**Move Object Up**)」または「オブジェクトを下を移動 (**Move Object Down**)」をクリックします。

4. 「列プロンプト (**Column prompts**)」ページでは、割り当てたオブジェクトに渡す列パラメーターを指定できます。
5. 列プロンプトを追加するには、「新規列プロンプトの追加 (**Add new column prompt**)」をクリックし、列プロンプトの名前、タイプ、値など、列プロンプトのパラメーターを指定します。使用可能なタイプ・オプションは次のとおりです。
  - 定数値を使用する場合は「定数」
  - 値を提供する列を設定する場合は「列」



- 選択した列に割り当てるドリル・オブジェクトに値を渡す、報告書のベースとなる照会のプロンプトを指定する場合は、「入力プロンプト (Input prompt)」
6. 「ドリル・オブジェクト (Drill objects)」ページの「プロンプトの割り当て (Prompts Assignments)」領域で、作成した列プロンプトと、データ・オブジェクトの必須プロンプトを割り当てます。「名前による列の自動マッチ (Automatch columns by name)」をクリックして、プロンプトの自動割り当てを試みることもできます。列プロンプトの名前とオブジェクト・プロンプトの名前が一致しない場合は、手動で割り当てることができます。
  7. 即時報告書に必要なパラメーターをすべて指定したら、「終了」をクリックして「新規即時報告書の作成」ウィザードを閉じ、エディターの「デザイン」ページに即時報告書を表示します。このページでは、報告書の外観を手動でカスタマイズできます。

#### 関連タスク:

##### 343 ページの『グループ化列および明細列の配置』

グループ化列と明細列を即時報告書に追加したり即時報告書から削除したりすること、およびグループ化列を明細列に変換したり明細列をグループ化列に変換したりすることが可能です。

##### 344 ページの『報告書タイトルおよび報告書合計情報の表示方法の指定』

即時報告書の報告書タイトルおよび報告書合計情報を表示する方法を指定できます。

##### 346 ページの『列見出しの表示方法の指定』

「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列見出し」ページで、即時報告書に表示される列見出しの外観および順序を指定できます。

##### 349 ページの『合計列と明細列のセットの作成』

即時報告書に常に表示する必要のない明細列を、合計列に関連付けることができます。

##### 350 ページの『条件付き書式の適用』

即時報告書で条件付き書式を使用すれば、データをビジュアルに探索して分析したり、クリティカルな問題を検出したり、パターンや傾向を特定したりできます。

##### 353 ページの『グループ化列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書のグループ化列に対してフォーマット・オプションを指定できます。

##### 354 ページの『見出し情報および脚注情報の表示方法の指定』

即時報告書のグループ化列に関する見出し情報と脚注情報を表示する方法を指定できます。

##### 356 ページの『明細列のフォーマット・オプションの指定』

即時報告書の明細列の表示方法を指定できます。


##### 357 ページの『即時報告書の列フォーマット・オプションの指定』

即時報告書の個別の列のフォーマット・オプションを指定できます。


## 即時報告書の編集

既存の即時報告書のレイアウトを編集するには、グループ化列および明細列を追加、削除、または再配列します。

## このタスクについて

「即時報告書の編集」ウィザードの「列」ページで報告書内のグループ化列および明細列を追加、削除、または再配列できます。ウィザードの「列」ページを開くには、「即時報告書列の編集」ツールバー・ボタン () をクリックします。

「即時報告書の編集」ウィザードの「フォーマット」ページでは、報告書のタイトルおよび合計行を変更したり、グループ化列および明細列のフォーマット・オプションを変更したりできます。ウィザードの「フォーマット」ページを開くには、

「即時報告書フォーマットの編集」ツールバー・ボタン () をクリックします。

これらのページは、「新規即時報告書の作成」ウィザードの「列」ページおよび「フォーマット」ページによく似ています。

また、即時報告書の作成に使用するデータ・ソースを変更することもできます。

## データ・ソースの変更

すでに作成されている即時報告書のデータ・ソースを変更できます。

### 始める前に

即時報告書を作成しておく必要があります。

## このタスクについて

データ・ソースを変更するには、以下のようになります。

### 手順

1. 即時報告書が「プレビュー」ウィンドウで開かれている状態で「報告書」 > 「データ・ソースの変更」を選択します。
2. 「即時報告書の編集」ウィザードの最初のページで新規データ・ソースを指定します。以前に保存したデータ・ソースを選択しても、開いているデータ・ソースを選択してもかまいません。
3. 新規データ・ソース内の列が、以前に指定したデータ・ソースの列と一致する場合は、「終了」をクリックしてウィザードを閉じ、報告書を更新できます。それ以外の場合は、「次へ」をクリックして先に進みます。
4. ウィザードの 2 ページ目で、データ・ソースの列を報告書の列と突き合わせます。報告書の列と一致させる必要がない列については、「一致しない列を削除」チェック・ボックスを選択して先に進みます。このような列はすべて報告書から除外されます。
5. 「終了」をクリックしてウィザードを閉じ、報告書を更新します。

注: 報告書の列はすべて初期プロパティのままです。データ・ソースを変更した後で列出力フォーマットが列データ・タイプと適合しない場合は、そのデータ・タイプのデフォルト・フォーマットが使用されます。

### 関連タスク:

363 ページの『データ・ソースの編集』

すでに作成されている即時報告書に関する関連データ・ソース情報を編集できま

す。

## データ・ソースの編集

すでに作成されている即時報告書に関する関連データ・ソース情報を編集できます。

### 始める前に

即時報告書を作成しておく必要があります。

### このタスクについて

データ・ソースを編集するには、以下のようになります。

### 手順

1. 即時報告書が「プレビュー」ウィンドウで開かれている状態で「報告書」 > 「データ・ソースの編集」を選択します。指定したデータ・ソースが、別のエディターで開かれます。
2. データ・ソースを編集して保存します。変更したデータ・ソースを保存するときに、そのデータ・ソースの列が報告書の列と比較されます。列が少しでも整合していない場合は、「即時報告書の編集」ウィザードで列を手動で突き合わせる必要があります。
3. 「即時報告書の編集」ウィザードの「列」ページで、データ・ソースの列を報告書の列と突き合わせます。報告書の列と一致させる必要がない列については、「一致しない列を削除」チェック・ボックスを選択して先に進みます。一致しない列はすべて報告書から除外されます。

注: 報告書の列とデータ・ソースの列を一致させることができない場合は、「即時報告書の編集」ウィザードを閉じて、データ・ソースを編集します。列を一致させなかった場合、データ・ソースは報告書内に保存されません。

4. 「終了」をクリックしてウィザードを閉じ、報告書を更新します。

注: 報告書の列はすべて初期プロパティのままです。編集後に列出力フォーマットが列データ・タイプと適合しない場合は、そのデータ・タイプのデフォルト・フォーマットが使用されます。

関連タスク:

362 ページの『データ・ソースの変更』

すでに作成されている即時報告書のデータ・ソースを変更できます。

## 即時報告書デザインの変更

即時報告書を作成したら、「プレビュー」モードでレイアウトを多少変更できます。

### 始める前に

即時報告書を作成しておく必要があります。

### このタスクについて

「プレビュー」モードで即時報告書を変更するには、以下のようになります。

## 手順

1. グループの内容を展開したり省略したりするには、対象グループ名の左側にある正符号または負符号をクリックします。
2. すべてのグループを省略し、集約された情報のみを表示するには、グループ化列の見出しにある負符号をクリックします。
3. 合計列に割り当てられている明細列の内容を表示したり非表示にしたりするには、合計列の見出しにある矢印をクリックします。
4. 列の順序を変更するには、列を選択して別の位置にドラッグします。赤色の縦線は、列を移動できる位置を示します。
5. 列の幅または行の高さを変更するには、列または行の枠をドラッグします。
6. グループ化列の見出し内および脚注内でラベルや図表を移動するには、単にそのラベルや図表を新しい位置にドラッグします。

注: コンポーネントのサイズと位置は、「プロパティ」ビューでも変更できます。

7. グループ化列の見出しまたは脚注にテキスト・フィールドを追加するには、見出しまたは脚注を右クリックして「テキストを割り込ませる」を選択します。
8. 見出しまたは脚注に表示されているタイトル、および追加したテキスト・フィールドを変更するには、「プロパティ」ビューを使用します。
9. グループ化列の見出しまたは脚注に図表を追加するには、見出しまたは脚注を右クリックして、「図表の追加」を選択します。
10. グループ化列または明細列のソートを迅速に変更したり、選択した列を非表示にしたり、計算列を追加したりするには、列のポップアップ・メニューを使用します。

---

## 書式メニュー

QMF の「書式」メニューは、書式がエディター内のアクティブ・オブジェクトである場合に使用可能になります。

使用可能なメニュー・コマンドは以下のとおりです。

### データ・ソース・オブジェクト

「データ・ソース・オブジェクト」ダイアログを開きます。ここで、書式に関連付けられるデータ・ソース・オブジェクトを指定することができます。書式のデータ・ソース・オブジェクトは、フォーマットされて報告書になる照会結果を取得するために実行されるオブジェクトです。

### ビジュアル報告書に変換

アクティブな書式をビジュアル報告書に変換します。生成されたビジュアル報告書が、新しいウィンドウで開きます。

### HTML に変換

「HTML に変換」ダイアログが開きます。このダイアログには、以下のオプションが含まれます。

- 「以下のタグを書式に追加」リスト・ボックスで、書式に追加するタグを指定します。

- HTML フォーマットの表に表データを挿入する場合は、「表データを HTML 表として組み込む」チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
- HTML フォーマットの数値値をアプリケーションが自動的に調整するには、「HTML 表タグの追加数値の値を調整する」チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
- 現在の設定値と選択内容をユーザー・デフォルト設定として保存するには、「ユーザー・デフォルトとして保存」チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
- ユーザー・デフォルト設定を再設定する場合は、「ユーザー・デフォルト設定」ボタンをクリックします。
- 製品のデフォルトにリセットするには、「製品デフォルト設定」ボタンをクリックします。
- リスト・ボックスの「値」列から選択済みの値をすべてクリアするには、「値をクリア」ボタンをクリックします。

#### データ・ソースの設定

アクティブな照会を実行するデータ・ソースを (リポジトリ内の使用可能なデータ・ソースのリストから) 選択します。「データ・ソースの設定」ダイアログが開きます。

#### ユーザー情報の設定

「ユーザー情報の設定」ダイアログを開きます。ここで、QMF がデータ・ソースへの接続に使用するユーザー ID とパスワードを指定します。

#### フォントの設定

「フォント」ダイアログを開きます。ここで、アクティブ・ウィンドウに表示されている現在の標準の報告書の表示フォント属性を変更することができます。



---

## 第 15 章 ビジュアル・プロジェクトでの作業

ビジュアル・プロジェクトには、ビジュアル報告書とビジュアル・ダッシュボードが含まれています。

### このタスクについて

#### ビジュアル報告書

ビジュアル報告書は、ページ・ベースの印刷可能レポートであり、多様なユーザーに永続データを表示するために、定様式テキストとグラフィックスの両方が含まれています。ビジュアル報告書には、報告書の異なるセクション（見出しや脚注など）に挿入されたデータ主導型のグラフィックス（マップおよび図表など）も入れることができます。データ主導型のグラフィックスはそれぞれ、企業全体にわたって実行される複数の照会からのデータを表示できます。

#### 随時報告書

随時報告書では、柔軟性に優れた分かりやすい方法で報告書を作成できる一方で、デザイン・プロセス全体の効率化も実現できます。この報告書には、シーンに加え、報告書を作成できるキャンバスも含まれています。キャンバスには、グラフ、照会、Dynamart など、データ・オブジェクトを入れることができます。

#### ビジュアル・ダッシュボード

ビジュアル・ダッシュボードは、企業全体にわたる複数の異種データ・ソースの照会から入手した対話式または永続データを表示します。ビジュアル・ダッシュボードは、図表、グラフ、マップ、およびユーザー・インターフェース・ウィジェットを含む、多様なグラフィックスを使用するシーン・フォーマットでデータを表示します。データ駆動型のグラフィカル・オブジェクトは簡単にリンクでき、ユーザー選択によって固有のデータ表示を起動することができます。コンテンツ開発者は、複数のユーザーが QMF for Workstation または QMF for WebSphere のいずれかで表示可能なビジュアル・ダッシュボードを作成できます。

#### ビジュアル・アプリケーション

バージョン 11.1 フィックスパック 4 以降の QMF for Workstation では、ビジュアル・アプリケーションを作成できません。最新リリースでは、旧バージョンの QMF で作成したビジュアル・アプリケーションを実行できます。既存のビジュアル・アプリケーションは、編集用に関くと自動的にビジュアル・ダッシュボードに変換されます。元のビジュアル・アプリケーションは、変換後もそのまま残ります。作成したビジュアル・ダッシュボードは編集でき、リポジトリまたはファイルに保存できます。この場合、作成したビジュアル・ダッシュボードは、旧バージョンの QMF では実行できません。

ビジュアル・アプリケーションに固有の以下の機能が、ビジュアル・ダッシュボードで使用できるようになりました。

- キャンバス・オブジェクト

- ツリー・オブジェクト
- 「ダイアログの表示」 イベント・アクション
- 「ダイアログを閉じる」 イベント・アクション

---

## ビジュアル・プロジェクトのテンプレート

テンプレートは、標準化され、事前書式設定されたビジュアル・プロジェクト (ビジュアル報告書およびビジュアル・ダッシュボード) サンプルを提供します。これらは、デザイン・プロセスを促進する再使用可能なコンポーネントです。

ビジュアル・プロジェクトのデザイナーは、ビジュアル・プロジェクトのテンプレートを、プロジェクト開発プロセスの出発点として使用することができます。

テンプレートを使用することで、開発者は開発を反復することなく、効果的な再使用戦略を推進できます。例えば、社内に特定のデータ・ソースに接続する複数のビジュアル・ダッシュボードがある場合は、複数のビジュアル・ダッシュボードで接続プロパティを定義するのではなく、必要な接続を持つ 1 つのテンプレートを作成することができます。この 1 つのテンプレートを基に、新しいビジュアル・ダッシュボードを作成できます。

ビジュアル・プロジェクトには次の 3 つのテンプレート型があります。

- 事前定義
- ローカル
- リポジトリ

### 事前定義テンプレート

事前定義テンプレートは QMF for Workstation に組み込まれています。

事前定義されたテンプレートのレイアウトは、変更できません。

現在、QMF for Workstation に組み込まれているデフォルトの事前定義テンプレートは 1 つです。このデフォルトの事前定義テンプレートの名前は **Blank** です。

**Blank** テンプレートに、構造的な要素はありません。

事前定義テンプレートは、まだ作成中のビジネス機能の基本レベルの機能として使用できます。例えば、事前定義テンプレートをデータ・ソースへ接続するためのベースとして使用して、照会の標準セットまたはグラフや表のカスタマイズ・セットを実行し、リストや他のデータ主導型のコントロールに接続できます。

### ローカル・テンプレート

ローカル・テンプレートは、ユーザーの組織のために作成されてローカル に保存されたものです。

各テンプレートには、事前定義されたコンテンツ (企業のロゴ、標準化されたテキスト、使用頻度の高いグラフィカル・レイアウトなど) が組み込まれています。

テンプレートは、編成上の理由でカテゴリ別にリストされます。



一般に、ローカル・テンプレートは、独自の目的のために個々の開発者が使用します。ローカル・テンプレートとして保存されたビジュアル・プロジェクトは、リポジトリ・サービスを介して共有できません。

## リポジトリ・テンプレート

リポジトリ・テンプレートとは、組織用に作成され、共有リポジトリ に保存されているテンプレートです。

各テンプレートには、事前定義されたコンテンツ (企業のロゴ、標準化されたテキスト、使用頻度の高いグラフィカル・レイアウトなど) が組み込まれています。

テンプレートは、編成上の理由でカテゴリ別にリストされます。

ユーザーは、必要に応じて、リポジトリ・テンプレートの構造的なコンテンツを編集できます。

一般に、リポジトリ・テンプレートは複数の開発者で使用されます。リポジトリ・テンプレートとして保存されたビジュアル・プロジェクトは、リポジトリ・サービスを介して複数の開発者が使用できます。

---

## ビジュアル・プロジェクトのテンプレート・カテゴリの作成

ビジュアル報告書およびダッシュボードのテンプレート・カテゴリを作成するには、「新規 [オブジェクト名] テンプレート・カテゴリの作成」ウィザードを使用します。

### このタスクについて

ビジュアル・プロジェクト (ビジュアル報告書またはダッシュボード) のテンプレート・カテゴリを作成するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. メインメニューから、「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」 > 「**QMF** オブジェクト」 > 「[オブジェクト名] テンプレート・カテゴリ」を選択し、「次へ」をクリックして「新規 [オブジェクト名] テンプレート・カテゴリの作成」ウィザードを開きます。
2. 「名前」フィールドにテンプレート・カテゴリの名前を指定します。
3. オプションで、テンプレート・カテゴリについて説明する注釈を「注釈」フィールドに入力します。
4. 「終了」をクリックしてウィザードを閉じます。ビジュアル・プロジェクト用に作成したテンプレート・カテゴリが、「リポジトリ・エクスプローラー」ビューの「テンプレート」ノードの下にある適切な「[オブジェクト名] テンプレート」フォルダーに追加されます。

### 注:

以前のバージョンの **QMF** で作成されたビジュアル・アプリケーション・テンプレート・カテゴリは、「テンプレート」ノードの下にある「ビジュアル・アプリケーション・テンプレート」フォルダーに格納されています。このカテゴリ

ーは、編集して、ビジュアル・ダッシュボードとしてリポジトリまたはファイルに保管できます。 QMF で新規のビジュアル・アプリケーション・テンプレートを追加することはできません。

「ビジュアル・アプリケーション・テンプレート」フォルダーは、作成した新規リポジトリではサポートされていません。

---

## ビジュアル報告書の作成

ビジュアル報告書とは、ページ・ベースの報告書のことで、テキストおよびグラフィックスの両方が含まれます。

### このタスクについて

QMF for Workstation を使うと、使いやすい「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブを使用して、ビジュアル報告書を手早くデザインすることができます。このパースペクティブには、報告書のデザインおよびランタイム・ビューの両方を表示するエディター、各ビジュアル報告書の構造的内容の詳細を示す「プロジェクト・エクスプローラー」ビュー、および「ビジュアル・デザイナー」エディターをサポートし、ビジュアル報告書の作成を支援する「パレット」、「プロパティ」、および「出力」ビューがあります。

注: 前に QMF for WebSphere でデザインしたビジュアル報告書を生成して表示することはできませんが、ビジュアル報告書をデザインすることはできません。「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブが使用不可になっています。

以下のステップは、ビジュアル報告書の作成時または編集時に実行するタスクを概説しています。

### 手順

1. エディター・ウィンドウでビジュアル報告書を活動化します。ワークステーション・エディター・ウィンドウでのビジュアル報告書の活動化は、以下のいずれかの方法で行うことができます。
  - 「報告書の表示」ウィザードを使用して、照会結果のセットから新規のビジュアル報告書を作成します。
  - 「新規ビジュアル報告書」ウィザードを使用して、新規のビジュアル報告書を作成します。
  - 既存のビジュアル報告書を開きます。
  - 旧ビジュアル報告書をインポートします。
2. 「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブを開きます。「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブには、ビジュアル報告書で作業するために使用するエディター・ウィンドウ、複数のビュー、およびメニューが表示されます。「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブは、「パースペクティブを開く」ツールバー・ボタンを使用するか、または「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを開く」 > 「ビジュアル・デザイナー」を選択して開くことができます。
3. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューにリストされているビジュアル報告書のキー・コンポーネントを表示します。各ビジュアル報告書は、「プロジェク

ト・エクスプローラー」ツリーの「ビジュアル報告書」ノードにリストされま  
す。各ビジュアル報告書には、以下のフォルダーがあります。

- 接続
  - 照会
  - グローバル
  - メインページ
  - 固定ページ
4. データ・ソース接続を作成します。ビジュアル報告書は、企業全体で共有される  
よう意図されています。ビジュアル報告書の共用および配布を簡易化するため、  
QMF for Workstation ではビジュアル報告書に含まれる照会を特定のデータ・  
ソースに結合しません。代わりに、照会は接続情報別名に結合されます。ビジュ  
アル報告書のデータを取得するために使用するデータ・ソースごとに、接続情報  
別名を設定する必要があります。報告書に使用可能なすべての接続情報別名は、  
「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの、報告書の「接続」フォルダーに  
リストされます。データ・ソースの接続情報別名は、「接続の挿入」ダイアログ  
を使用するか、またはデータ・ソースを「ワークスペース」ビューから「プロジ  
ェクト・エクスプローラー」ビューのビジュアル報告書の「接続」フォルダーに  
ドラッグすることで設定できます。
  5. ビジュアル報告書にデータを提供するメイン照会を指定します。既存の照会を指  
定するか、または新規照会を作成することができます。照会を指定するときに、  
照会を接続情報別名と関連付けるように指示されます。接続情報別名は、照会の  
実行対象になるデータ・ソースを識別します。報告書のメイン照会は、「プロジ  
ェクト・エクスプローラー」ビューのビジュアル報告書の「照会」フォルダーに  
リストされます。照会の指定は、「照会の挿入」ダイアログを使用するか、また  
は照会を「ワークスペース」ビューから、「プロジェクト・エクスプローラー」  
ビューのビジュアル報告書の「照会」フォルダーにドラッグすることで実行でき  
ます。
  6. 報告書のメインページをデザインします。メイン照会はレポートにデータを提供  
しますが、そのデータはメインページのデザインに基づいてフォーマットされま  
す。メインページのデザインについて詳しくは、378 ページの『ビジュアル報  
告書のメインページのデザイン』を参照してください。
  7. 報告書に含める 1 つ以上の固定ページをデザインします。固定ページとは、ビ  
ジュアル報告書に挿入できる固有の要素を持つ単一ページです。固定ペー  
ジのデザインについて詳しくは、379 ページの『ビジュアル報告書の固定ペー  
ジのデザイン』を参照してください。
  8. 「プレビュー」ボタンをクリックするたびに、実際にはビジュアル報告書オブジ  
ェクトを実行していることになり、結果がどのように表示されるかを見ることが  
できます。
  9. ビジュアル報告書のデザインまたは編集を完了したら、報告書の保存や印刷、  
HTML または PDF ファイルへのエクスポートが可能です。

制約事項: アプリケーションの 64 ビット・バージョンでは、ビジュアル報告書  
が PDF モードで実行される場合、ビジュアル報告書はサード・パーティーのア  
プリケーションで開きます。

## ビジュアル報告書ウィザードを使用した報告書の作成

「新規ビジュアル報告書の作成」ウィザードは、新しいビジュアル報告書を作成するために役立ちます。

### このタスクについて

「新規ビジュアル報告書の作成」ウィザードを使用して新しいビジュアル報告書を作成するには:

### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「新規ビジュアル報告書の作成」ウィザードを開きます。
  - 「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブから、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「ビジュアル報告書」フォルダーを右クリックします。ポップアップ・メニューから「新規ビジュアル報告書」を選択します。「新規ビジュアル報告書の作成」ウィザードが開きます。
  - 「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブから、「ファイル」 > 「新規」 > 「ビジュアル報告書」を選択します。「新規ビジュアル報告書の作成」ウィザードが開きます。
  - エディター・ウィンドウにアクティブ照会が表示された状態で、「照会」 > 「転送先」 > 「ビジュアル報告書」を選択します。
  - 「新規ビジュアル報告書」ツールバー・ボタンをクリックします。
2. 「ビジュアル報告書名」フィールドに、新規ビジュアル報告書の名前を指定します。
3. 以下のいずれかの方法で、新しいビジュアル報告書に使用するテンプレートを選択します。
  - 「事前定義」タブを選択します。事前定義されたテンプレートのリストから、新しいビジュアル報告書を作成するための基礎とするテンプレートを選択します。事前定義されたテンプレートは、アプリケーションと共に出荷されます。事前定義されたテンプレートのレイアウトは、変更できません。「ブランク」という事前定義されたテンプレートは、すべてのビジュアル報告書のデフォルト・テンプレートです。それには構造的な要素が含まれていません。
  - 「ローカル」タブを選択します。ローカル・テンプレートのリストから、新しいビジュアル報告書を作成するための基礎とするテンプレートを選択します。ローカル・テンプレートは、ユーザーの組織のために作成されてローカルに保存されたものです。各テンプレートには、事前定義されたコンテンツ(企業のロゴ、標準化されたテキスト、使用頻度の高いグラフィカル・レイアウトなど)が組み込まれています。テンプレートは、編成上の理由でカテゴリ別にリストされます。ユーザーは、必要に応じて、ローカル・テンプレートの構造的なコンテンツを編集できます。

注: ローカルに保存されたテンプレートが「テンプレート」ディレクトリにない場合、「ローカル」タブは表示されません。

- 「リポジトリ」タブを選択します。リポジトリに保存されたテンプレートのリストから、新しいビジュアル報告書を作成するための基礎とするテンプレートを選択します。リポジトリ・ページにリストされたテンプレート

は、ユーザーの組織のために作成されてリポジトリに保存されたものです。各テンプレートには、事前定義されたコンテンツ (企業のロゴ、標準化されたテキスト、使用頻度の高いグラフィカル・レイアウトなど) が組み込まれています。テンプレートは、編成上の理由でカテゴリー別にリストされます。ユーザーは、必要に応じて、リポジトリ・テンプレートの構造的なコンテンツを編集できます。

4. 「終了」をクリックします。新規ビジュアル報告書オブジェクトがエディターに開きます。メインページのデザイン・テンプレートが表示されます。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューが開き (まだ開いていない場合)、ツリー内の「ビジュアル報告書」ノードの下に新規ビジュアル報告書がリストされます。

## 新規ビジュアル報告書のテンプレートの作成

ユーザーは、企業のロゴ、標準化されたテキスト、特別なグラフィックスなどの事前定義されたコンテンツを使用して、ビジュアル報告書を作成できます。その後、各ビジュアル報告書をテンプレートとして保存できます。他のユーザーはそのテンプレートを使用して、ビジュアル報告書を簡単に作成することができます。

### このタスクについて

新しいビジュアル報告書のテンプレートを作成するには:

#### 手順

1. 新しいビジュアル報告書を作成して共通エレメントを組み込むか、またはテンプレートの基礎となる既存のビジュアル報告書を開きます。
2. 「ファイル」 > 「別名保存」を選択します。「保存」ウィザードが開きます。
3. ビジュアル報告書テンプレートを保存する場所を指定します。報告書をリポジトリに保存するには、「リポジトリに保存」を選択します。ビジュアル報告書をローカルに保存するには、「ファイルに保存」を選択します。
4. 「テンプレートとして保存」チェック・ボックスを選択し、ビジュアル報告書をテンプレートとして保存します。
5. 「次へ」をクリックします。ウィザードの 2 番目のページは、ビジュアル報告書のテンプレートを保存する場所によって異なります。テンプレートをローカルに保存する場合、ウィザードの「ファイル名を入力するか、またはファイル・ダイアログでファイルを選択します」ページが開きます。「パス」フィールドに、テンプレートを保存するローカル・ディレクトリーのパスを指定してください。例えば、Windows オペレーティング・システムでは、パスは次のようになります。

- Windows XP 以前の場合:

```
C:%Documents and Settings%[UserName]%Application Data%IBM%  
QMF for Workstation%Templates%VR Templates%VisualReport1
```

- Windows Vista 以降の場合:

```
C:%Users%[UserName]%Application Data%IBM%  
QMF for Workstation%Templates%VR Templates%VisualReport1
```

VisualReport1 は、任意の名前に置き換えることができます。パスは、ローカル・ディレクトリーにすることをお勧めします。ユーザーが新しいビジュアル報告書を作成するとき、すべてのローカル・テンプレートをユーザーに表示す

るために QMF for Workstation が検索するのは、ローカル・ディレクトリーだからです。「参照」ボタンを使用して場所を検索できます。

6. テンプレートをリポジトリーに保存する場合は、ウィザードの「リポジトリー・オブジェクト・パラメーターを設定します」ページが開きます。「親項目の選択」リストには、リポジトリー・テンプレートを編成するために設定したカテゴリーのリストが表示されます。カテゴリーを設定していない場合には、このリストはブランクになります。「新規ビジュアル報告書・テンプレート・カテゴリー」アイコンをクリックして、カテゴリーを作成します。「名前」フィールドに報告書の名前を指定します。オプションで、「コメント」フィールドにコメントを指定できます。
7. 「新規ビジュアル報告書・テンプレート・カテゴリー」アイコンをクリックして、カテゴリーを作成します。「新規ビジュアル報告書テンプレート・カテゴリーの作成」ウィザードが開きます。
8. テンプレート・カテゴリーの名前を指定します。オプションで、「コメント」フィールドにコメントを指定できます。
9. 「終了」をクリックします。新規ビジュアル報告書テンプレート・カテゴリーが作成されました。これは、「親項目の選択」リストに表示されます。
10. 「名前」フィールドに報告書の名前を指定します。オプションで、「コメント」フィールドにコメントを指定できます。
11. 「終了」をクリックします。新しいビジュアル報告書のテンプレートが保存されます。これは、ユーザーが新しいビジュアル報告書を作成するときに表示されます。

## 旧ビジュアル報告書を開く

旧ビジュアル報告書とは、9.1 より以前の QMF アプリケーションを使用して作成されたビジュアル報告書のことです。

### このタスクについて

旧報告書は、直接開くことも、その報告書をインポートしてから開くこともできます。これらの報告書を QMF for Workstation V1.1 (またはそれ以降) で一度開くと、リポジトリーにしか保存できなくなります。これらの報告書は、V1.1 で一度開くと以前のバージョンの QMF アプリケーションで開けなくなるため、QMF カタログには保存できません。

以下のタスクに、旧ビジュアル報告書を開く方法についての説明があります。

### 旧ビジュアル報告書を直接開く

旧報告書を直接開くことができます。

### このタスクについて

旧ビジュアル報告書を直接開くには:

#### 手順

1. 「ファイル」 > 「ファイルの場所」を選択します。ポップアップ・メニューから、ビジュアル報告書がある場所に応じて、以下のいずれかを選択します。

- QMF カタログ

- リポジトリ
  - ファイル
2. 選択に応じて、以下の 3 つのウィンドウの 1 つが開きます。
- **QMF** カタログを選択した場合は、「**QMF** カタログから開く」ウィンドウが開きます。「データ・ソース」フィールドに、**QMF** カタログがあるデータ・ソースの名前を指定します。「所有者」フィールドに、開きたいオブジェクトの所有者を指定します。「名前」フィールドに、開きたいオブジェクトの名前を指定します。ビジュアル報告書オブジェクトを選択します。ビジュアル報告書がエディター・ウィンドウで開きます。ビジュアル報告書を開いたときに実行されるようにするには、「即時に実行」チェック・ボックスを選択します。ビジュアル報告書がエディター・ウィンドウで開きます。「即時に実行」チェック・ボックスを選択した場合は、結果セットが表示されます。
- 注: 「オブジェクト・リスト」ダイアログを使用すると、旧ビジュアル報告書を見つけることができます。見つけるには、「リストから」をクリックします。詳細については、『データ・ソース・オブジェクトのリスト』を参照してください。
- 「リポジトリ」を選択すると、「リポジトリから開く」ウィンドウが開きます。現在のリポジトリの内容が、「リポジトリ項目の選択」リスト・ボックスのツリー構造に表示されます。開きたい旧ビジュアル報告書オブジェクトが見つかるまでフォルダーを展開します。ビジュアル報告書オブジェクトを選択します。ビジュアル報告書がエディター・ウィンドウで開きます。
  - 「ファイル」を選択した場合は、オペレーティング・システム固有の「開く」ウィンドウが開きます。「ファイル名」フィールドに、ファイルの絶対パス名を入力します。「参照」機能を使用してファイルのロケーションを検索できます。ビジュアル報告書オブジェクトを選択します。ビジュアル報告書がエディター・ウィンドウで開きます。
3. 旧ビジュアル報告書が開きます。V9.1 より前のバージョンの **QMF** では、もう開くことができません。

## 旧ビジュアル報告書のインポート

旧ビジュアル報告書をインポートできます。

### このタスクについて

旧ビジュアル報告書をインポートするには:

#### 手順

1. 任意のパーспекティブから、「ファイル」 > 「インポート」を選択します。「インポート」ウィンドウが開きます。
2. 「**QMF** ビジュアル報告書ファイル」を選択します。「**QMF** ビジュアル報告書インポート・ウィザード」が開きます。
3. 「次へ」をクリックします。**QMF** ビジュアル報告書インポート・ウィザードが開きます。

4. 「ファイル・パス」フィールドに、インポートするビジュアル報告書ファイルのパスを指定します。「参照」ボタンを使用してファイルを検索できます。
5. 「報告書名」フィールドに、旧ビジュアル報告書から作成する新規ビジュアル報告書の固有名を入力します。
6. 「ロケーション」フィールドに、新規ビジュアル報告書を保存するロケーション(現在接続されているリポジトリ内)を入力します。
7. 「終了」をクリックします。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「ビジュアル報告書」ノードに、ビジュアル報告書名が付いたフォルダーが追加されます。新規ビジュアル報告書ごとに、「接続」、「照会」、「グローバル」、および「シーン」という名前のフォルダーも「プロジェクト・エクスプローラー」ツリーに追加されます。エディター・ウィンドウが開き、変換された報告書を編集するためのキャンバスが表示されます。

## ビジュアル・プロジェクトのデータ・ソース接続の指定

ビジュアル・プロジェクト(ビジュアル報告書またはダッシュボード)に関するデータを提供するデータ・ソースごとに接続情報別名をセットアップします。

### このタスクについて

ビジュアル・プロジェクトで使用する複数の照会を追加する際には、それぞれの照会に関連付ける接続情報別名を指定する必要があります。

照会に使用するデータ・ソースを変更するには、照会情報を編集して、使用するデータ・ソースを指す接続情報別名項目を選択します。この機能により、ユーザーは簡単にビジュアル報告書を共有し、ユーザー固有のデータ・ソースを使用することができます。さらに、テスト・データ・ソースと実働データ・ソース間の移動が容易になります。

データ・ソースの接続情報別名を指定するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 「接続の挿入」ウィンドウを開きます。

以下のいずれかの方法で「接続の挿入」ウィンドウを開くことができます。

- 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、特定のビジュアル・プロジェクトの「接続」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「接続の挿入」を選択します。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「接続」ノードをダブルクリックします。「接続の挿入」ウィンドウが開きます。
  - 「ワークスペース」または「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで照会をクリックします。マウス・ボタンを押したまま、照会を「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「照会」ノードまでドラッグします。新規データ・ソース接続が「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「接続」フォルダーに自動的に追加されます。
2. 使用可能なデータ・ソースのリストから、この接続情報別名に関連付けるデータ・ソースを選択します。
  3. 「接続名」フィールドに、この接続情報別名の固有名を指定します。



4. 「終了」をクリックします。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、ツリーの「接続」ノードの下に新規接続情報別名がリストされます。

注: データ・ソースの接続情報別名は、データ・ソースを「ワークスペース」ビューから、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューのビジュアル・プロジェクトの「接続」フォルダーにドラッグすることでも設定できます。接続情報別名は、「接続 N」という名前を追加されます。接続情報別名の名前は、項目を右クリックし、「名前変更」を選択して編集できます。

## タスクの結果

ビジュアル・データ・オブジェクトのデータ・ソース接続情報を設定しました。

## ビジュアル・プロジェクトの照会の指定

ビジュアル・プロジェクト (ビジュアル報告書またはビジュアル・ダッシュボード) には、結果データを取得してそれをビジュアル・プロジェクトで表示するために実行する 1 つ以上の照会を含めることができます。

### このタスクについて

新規照会を作成してビジュアル・プロジェクトに含めることも、既存の照会を使用することもできます。

ビジュアル・プロジェクトに対して照会を指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで「照会」ノードを右クリックし、メニューから「照会の挿入」を選択します。
2. 「照会名」フィールドに、照会の固有名を指定します。
3. 照会を識別し、その照会がある場所を以下のいずれかの方法で指定します。
  - a. 新規ビジュアル照会を作成する場合は、「新規ビジュアル照会の作成」を選択します。
  - b. 新規分析照会を作成する場合は、「新規分析照会の作成」をクリックします。
  - c. 新規予測を作成する場合は、「新規予測の作成」をクリックします。
  - d. 照会が存在する場合は、「既存の照会に付加」を選択します。「照会の選択」リストが表示されます。「照会の選択」フィールドに、照会の名前と場所を指定します。「参照」をクリックすれば、照会を検索できます。
  - e. 静的照会を挿入する場合は、「ファイルから」を選択します。
    - 照会を「照会」フォルダーに直接コピーするには、「データの挿入」を選択します。このオプションを選択すると、あるシステムから別のシステムへビジュアル・プロジェクトが移動しても、照会はビジュアル・プロジェクトと一緒にままと、可搬性が向上します。
    - 照会のシステム・ディレクトリー上の位置へのリンクを作成するには、「ファイルへのリンクを使用」を選択します。このオプションを選択すると、あるシステムから別のシステムへビジュアル・プロジェクトが移動すると照会を使用できなくなるため、可搬性が制限されます。

- 「データ・ファイルの選択」リストに、追加する照会を指定します。「参照」をクリックすると、照会を検索できます。

注: DBF、IXF、XML、および TAB ファイルを開いて照会として使用できません。インポートした結果セットは、フィルター処理を行ったり、計算された列を追加したり、グループ化や集約を適用したりすることで編集できます。ビジュアル・プロジェクトを保存すれば、これらのファイルを dynamart に変換してビジュアル・プロジェクトとともに保存することができます。変更はすべて保存されます。

4. ビジュアル照会を挿入する場合、照会に使用するデータ・ソース接続を「接続」リストから選択する必要があります。「接続」リストが空の場合、データ・ソース接続をビジュアル・プロジェクトに追加します。
5. 「接続の追加」をクリックして、「接続の挿入」ウィンドウを開きます。
6. データ・ソース・ツリーから、ビジュアル・プロジェクト用に追加するデータ・ソースを選択し、「終了」をクリックします。選択したデータ・ソース接続がビジュアル・プロジェクトに追加され、「接続」リストに表示されます。
7. 既存の予測または分析照会をビジュアル・プロジェクトに挿入する場合は、「接続の編集」ウィンドウで従属照会の接続設定を編集できます。
8. 新規の予測または分析照会を挿入する場合は、従属照会がまだ指定されていないため、従属照会の接続は設定できません。
9. 「終了」をクリックします。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューのツリーの「照会」ノードの下に、照会がリストされます。照会に必要な場合は、「パラメーター」フォルダーが追加されます。ビジュアル・プロジェクトの保存時には照会は自動的に保存されます。

## タスクの結果

注: また、「ワークスペース」ビューからビュー内のビジュアル・プロジェクトの「照会」ノードに照会をドラッグすることにより、照会を追加できます。選択された照会が「照会」フォルダーに追加されます。新規データ・ソース接続が「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「接続」フォルダーに自動的に追加されます。

## ビジュアル報告書のメインページのデザイン

ビジュアル報告書のメインページでは、報告書全体の内容を指定します。報告書の各ページに対して繰り返される見出し、明細、および脚注のテンプレート情報を指定します。

### このタスクについて

ビジュアル報告書のメインページは、以下のセクションに分かれています。

- 「報告書見出し」セクションは、報告書の先頭に表示される内容を記述します。
- 「ページ見出し」セクションは、報告書の各ページの上部に表示される内容を記述します。
- 「明細見出し」セクションには、各明細行に対する列見出しとして表示される内容が記述されます。
- 「明細」セクションは、データの各明細行の表示方法を記述します。

- 「明細脚注」セクションは、明細セクションの切れ目の行に表示される内容を記述します。
- 「ページ脚注」セクションは、報告書の各ページの下部に表示される内容を記述します。
- 「報告書脚注」セクションは、報告書の末尾に表示される内容を記述します。

ビジュアル報告書のメインページの各セクションをデザインするプロセスは、どのセクションにも共通です。ビジュアル報告書の各セクションに表示される内容を指定するには:

## 手順

1. 以下のいずれかの方法で、デザインするセクションを選択できます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ツリーから、デザインする報告書のセクション用のフォルダーを選択します。
  - デザイン・モードでは、エディター・ウィンドウがラベル付きの複数のセクションに分割され、それぞれのセクションが報告書のセクションに関連付けられます。デザインするセクションをクリックします。
2. 報告書の各セクションに、報告書のセクションに含まれる内容を特定するデザイン・エレメントを挿入することができます。デザイン・エレメントを「パレット」ビューから選択します。挿入するオブジェクトを選択します。次に、オブジェクトを配置する報告書のセクションをクリックします。
3. ビジュアル報告書の各セクションのプロパティおよび報告書に挿入できる各オブジェクトのプロパティが、「プロパティ」ビューに表示されます。「プロパティ」ビューでは、ビジュアル報告書の各セクションのプロパティおよび各オブジェクトのプロパティを変更できます。報告書のセクションおよびオブジェクトによっては、エディター・ウィンドウでプロパティを変更することもできます。
4. デザイン段階ではいつでも報告書を表示することができます。報告書をプレビュー・モードで表示するには、エディター・ウィンドウの「プレビュー」タブをクリックします。デザイン・モードに戻るには、「デザイン」タブを選択します。
5. 報告書をファイル、QMF カタログ (使用可能な場合)、またはリポジトリに保存できます。報告書を印刷したり、HTML または PDF ファイルとして保存することもできます。

## ビジュアル報告書の固定ページのデザイン

ビジュアル報告書の固定ページとは、ビジュアル報告書に挿入できる固有エレメントを持つ単一ページのことです。固定ページは例えば、カバー・ページ、章の開始ページ、特殊グラフィック・ページ、または報告書の最終ページとして使用できます。

### このタスクについて

ビジュアル報告書の固定ページは、以下のセクションに分かれています。

- 「ページ見出し」セクションは、固定ページの上部に表示される内容を記述します。

- 「固定 1」セクションは、ページの最初の固定セクションに表示される内容を記述します。
- 「固定 2」セクションは、ページの 2 番目の固定セクションに表示される内容を記述します。
- 「ページ脚注」セクションは、固定ページの下部に表示される内容を記述します。

固定ページの各セクションをデザインするプロセスは、どのセクションにも共通です。固定ページは報告書に必要なだけ、いくらでも作成できます。報告書でこれらのページを表示する場所を指定するには、各メインページ・セクションで選択可能な **FixedPages** プロパティを使用します。

ビジュアル報告書の固定ページを作成するには:

### 手順

1. 新規ビジュアル報告書オブジェクトを作成すると、プロジェクト・エクスプローラーに、最初の固定ページをデザインするために使用できる 1 つのフォルダーが自動的に作成されます。ただし、固定ページは報告書に必要なだけ、いくらでも作成できます。追加の固定ページを作成するには、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「固定ページ」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「固定ページの挿入」を選択します。「新規固定ページ」ウィザードが開きます。「固定ページ名」フィールドに、この固定ページの固有名を指定します。「終了」をクリックします。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューのツリーで、「固定ページ」ノードの下に新しい固定ページがリストされます。
2. 以下のいずれかの方法で、デザインするセクションを選択します。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ツリーから、デザインする固定ページのセクション用のフォルダーをクリックします。
  - 「デザイン」モードでは、編集機能ウィンドウがラベル付きの複数のセクションに分割され、それぞれのセクションが固定ページのセクションに関連付けられます。デザインするセクションをクリックします。
3. 固定ページの各セクションで、ページのセクションに含まれる内容を特定するデザイン・エレメントを挿入することができます。デザイン・エレメントを「パレット」ビューから選択します。挿入するオブジェクトを選択します。次に、オブジェクトを配置する固定ページのセクションをクリックします。
4. 固定ページの各セクションのプロパティおよび報告書に挿入できる各オブジェクトのプロパティは、「プロパティ」ビューに表示されます。「プロパティ」ビューでは、固定ページの各セクションのプロパティおよび各オブジェクトのプロパティを変更できます。固定ページのセクションおよびオブジェクトによっては、エディター・ウィンドウでプロパティを変更することもできます。
5. 各「メイン」ページ・セクションで選択可能な **FixedPages** プロパティを使用して、固定ページを挿入するメイン報告書内の場所を指定します。**FixedPages** プロパティを指定するセクションによって、以下のようになります。
  - 「報告書見出し」セクション: 固定ページは、報告書のカバー・ページとして表示されます。

- 「ページ見出し」セクション: 固定ページは、最上位の切れ目の前に表示されます。
  - 「明細見出し」セクション: 固定ページは、明細レベルの切れ目の前に表示されます。
  - 「明細脚注」セクション: 固定ページは、明細レベルの切れ目の前に表示されます。
  - 「ページ脚注」セクション: 固定ページは、最上位の切れ目の後に表示されます。
  - 「報告書脚注」セクション: 固定ページは、報告書の最終ページとして表示されます。
6. デザイン段階ではいつでも固定ページを表示することができます。報告書をプレビュー・モードで表示するには、エディター・ウィンドウの「プレビュー」タブをクリックします。「キャンバス」モードに戻るには、「デザイン」タブを選択します。

## 報告書データの検索の管理

ビジュアル報告書のデータをいつ検索するかを制御できます。

### このタスクについて

デフォルトでは、実データに対してビジュアル報告書が実行されます。ビジュアル報告書が実行されるたびに、照会が実行され、報告書内のデータが更新されます。ビジュアル報告書のデータ検索を制御するには、有効期限スケジュールのセットを使用します。このオプションを使用すると、ビジュアル報告書の照会を実行して報告書に表示するデータを更新する場合に、いつ実行するかを指定できます。

ビジュアル報告書のデータ検索の有効期限スケジュールをセットアップするには:

### 手順

1. データ検索に使用する照会を含む、新しいビジュアル報告書を作成します。
2. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」フォルダーを展開し、ビジュアル報告書の「有効期限スケジュール」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「スケジュールの挿入」を選択します。「有効期限スケジュール構成」ウィザードが開きます。
3. ビジュアル報告書のデータ検索を制御する 1 つ以上のスケジュールを作成できます。「スケジュール名」フィールドにスケジュールの名前を指定します。意味を持つ任意の名前を指定できます。
4. スケジュールのタイプは、このビジュアル報告書の検索したデータの期限がいつ切れるかを制御します。「データの有効期限」ラジオ・ボタンのいずれかを選択することにより、以下のスケジュール・タイプのいずれかを選択できます。
  - 日次 (**daily**): このオプションを選択して、同じデータが 24 時間使用されるように指定します。このオプションを選択した場合、ビジュアル報告書の実行およびデータ検索の際に、報告書を次の 24 時間以内に実行するたびに同じデータが使用されます。24 時間が過ぎると、次回この報告書を実行するときに新しいデータが検索されます。

- 週次 (**weekly**): このオプションを選択して、同じデータが 7 日間使用されるように指定します。このオプションを選択した場合、ビジュアル報告書の実行およびデータ検索の際に、報告書を次の 7 日以内に実行するたびに同じデータが使用されます。7 日が過ぎると、次回この報告書を実行するときに新しいデータが検索されます。
  - 月次 (**monthly**): このオプションを選択して、同じデータが 1 カ月間使用されるように指定します。このオプションを選択した場合、ビジュアル報告書の実行およびデータ検索の際に、報告書を次の 1 カ月以内に実行するたびに同じデータが使用されます。1 カ月が過ぎると、次回この報告書を実行するときに新しいデータが検索されます。
  - 特定の日付: このオプションを選択して、同じデータが特定の日付まで使用されるように指定します。このオプションを選択した場合、ビジュアル報告書の実行およびデータ検索の際に、指定した日付までは報告書を実行するたびに同じデータが使用されます。指定日付に達すると、次回この報告書を実行するときに新しいデータが検索されます。
  - 常に有効 (**never expires**): このオプションを選択して、同じデータが常に使用されるように指定します。このオプションを選択した場合、ビジュアル報告書の実行およびデータ検索の際に、報告書を実行するたびに同じデータが使用されます。
  - 常時 (**always expires**): このオプションを選択して、報告書を実行するたびにデータが常に更新されるように指定します。
  - 「ビジュアル・プロジェクトが閉じられた後」では、ビジュアル・プロジェクトを閉じた後にスケジュールの有効期限が切れます。
5. 「日次」、「週次」、「月次」、または「特定の日付」を選択した場合は、「次へ」をクリックします。
  6. 作成しているスケジュールのタイプにより、ウィザードの「スケジュールのプロパティを設定します」ページの次のバリエーションの内のいずれかが開きます。
    - 「日次」を選択した場合、「開始日」フィールドで 24 時間が始まる日付と、「開始時間」フィールドで 24 時間が始まる時間を指定します。「データの有効期限」ラジオ・ボタンを使用して、24 時間がいつ始まるかを指定します。「日次」を選択して、24 時間がすべての日に始まるように指定します。「日間隔」を選択して、24 時間が任意の日数ごとに始まるように指定します。ドロップダウン・リストから数を選択します。「曜日」を選択して、24 時間が 1 つ以上の特定の曜日に始まるように指定します。曜日のチェック・ボックスを選択する必要があります。
    - 「週次」を選択した場合、「開始日」フィールドで週が始まる日付と、「開始時間」フィールドで週が始まる時間を指定します。「週間隔」リストから数字を選択し、7 日間が任意の週ごとに始まるように指定します。「曜日」チェック・ボックスから曜日を選択し、7 日間が週の特定の曜日に始まるように指定します。
    - 「月次」を選択した場合、「開始日」フィールドで月が始まる日付と、「開始時間」フィールドで月が始まる時間を指定します。「または」を選択して、データ検索が 1 カ月の特定の週の特定の曜日に始まるように指定できます。チェック・ボックスの「月の選択」リストから月を選択します。

- 「特定の日付」を選択した場合、「日時」リスト・ボックスでデータ検索を起動する日時を指定します。セルをクリックして、日時を選択するカレンダーを表示します。
7. 「終了」をクリックします。スケジュールは作成されると、「プロジェクト・エクスプローラー」ビュー内にリストされます。追加のプロパティを定義するには、この処理を繰り返します。すべてのスケジュールが定義された後に、スケジュールをビジュアル報告書内の照会に割り当てます。

## ビジュアル報告書照会へのデータ検索スケジュールの割り当て

ビジュアル報告書のデータ検索を制御するには、データ検索スケジュールをビジュアル報告書内の照会に割り当てる必要があります。

### このタスクについて

ビジュアル報告書照会にデータ検索スケジュールを割り当てるには:

#### 手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、ビジュアル報告書の「照会」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「有効期限スケジュールの割り当て」を選択します。「有効期限スケジュールの管理」ウィザードが開きます。
2. 「有効期限スケジュールの使用」を選択して、有効期限スケジュールをビジュアル報告書に割り当てます。
3. デフォルトの有効期限スケジュールを「デフォルトの有効期限スケジュール」リストから選択します。このスケジュールは、照会に特定のスケジュールが割り当てられていない場合に、ビジュアル報告書に含まれるすべての照会のデータ検索を制御するのに使用されます。
4. 特定のスケジュールを特定の照会に割り当てることができます。ビジュアル報告書に含まれるそれぞれの照会は、「照会名」セルにリストされます。特定のスケジュールを照会に割り当てるには、対応する「スケジュール名」セルをクリックします。使用可能なスケジュールのドロップダウン・リストから固有のスケジュールを選択します。
5. 「キャッシュの最新表示」をクリックして、照会で検索したデータを最新表示します。
6. 「終了」をクリックします。行ったスケジュールの割り当てが保存されます。

## ビジュアル報告書のオフライン報告書への変換

ビジュアル報告書をオフライン報告書に変換することができます。オフライン報告書は、ビジュアル報告書の静的なバージョンです。ユーザーは報告書を開くと、同じデータが常に表示されます。

### このタスクについて

オフライン報告書をビジュアル報告書から作成するには:

#### 手順

1. ビジュアル報告書を開きます。

2. 「編集」 > 「オフライン報告書に変換」を選択します。ビジュアル報告書のすべての照会が実行され、報告書を提供するのに必要なすべてのデータが検索されます。
3. オフライン報告書をリポジトリに保存します。報告書はファイルに保存できません。
4. オフライン報告書をオンライン報告書に再び変換するには、オフライン報告書を開いた後に、「編集」 > 「オンライン報告書に変換」を選択します。


## 報告書をファイルにエクスポート

標準の報告書、即時報告書、またはビジュアル報告書をファイルにエクスポートできます。ご使用の報告書が標準報告書の場合、報告書はテキスト・ファイル、HTML ファイル、または PDF ファイルとしてエクスポートできます。ご使用の報告書が即時報告書またはビジュアル報告書の場合、報告書は HTML ファイルまたは PDF ファイルとしてエクスポートできます。

### このタスクについて

報告書をエクスポートするには、次のようにします。

### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「報告書のエクスポート」ウィザードを開きます。
  - 活動状態のウィンドウに報告書を表示した状態で、「ファイル」 > 「エクスポート」を選択し、「エクスポート」ウィザードの「選択」ページを開き、使用可能なエクスポート・ウィザードのリストから「報告書」を選択します。
  - 活動状態のウィンドウに報告書を表示した状態で、「エクスポート」() ツールバー・ボタンをクリックします。
2. 「報告書」リスト・ボックスから、エクスポートする報告書を選択します。
3. QMF for Workstation を使用している場合、「報告書ファイル」フィールドで、報告書ファイルの保存場所を指定します。「参照」ボタンを使用して、場所を検索できます。
4. エクスポートするファイルのタイプを選択します。標準の報告書は、テキスト・ファイル (\*.txt)、HTML ファイル (\*.htm;\*.html)、または PDF ファイル (\*.pdf) としてエクスポートできます。即時報告書およびビジュアル報告書は、HTML ファイル (\*.htm;\*.html) または PDF ファイル (\*.pdf) としてエクスポートできます。
5. PDF ファイルをエクスポートしようとしている場合は、「次へ」ボタンをクリックします。「PDF エクスポート・オプションを設定します」ページが開きます。「文書情報の追加」チェック・ボックスを選択し、「タイトル」、「作成者」、「件名」、および「キーワード」フィールドに文字ストリングを指定して、文書情報を PDF に追加します。PDF で ANSI フォントしか使用しないようにするには、「ANSI フォントのみ使用」チェック・ボックスを選択します。
6. 報告書を HTML ファイルとしてエクスポートするには、「エクスポート・タイプ」リストから HTML を選択して、「次へ」をクリックします。「ファイ



ル・エクスポート・オプションを設定します」ページが開きます。「報告書を別個のページに分割」チェック・ボックスを選択して報告書の各ページを個別に保存します。

7. 「終了」をクリックします。

- QMF for Workstation を使用している場合、報告書は選択したフォーマットでファイルにエクスポートされます。
- QMF for WebSphere を使用している場合、「保存」ウィンドウが開き、ダウンロードする個々のファイルと、ダウンロードするすべてのファイルが入っているアーカイブ済み ZIP ファイル (\*.zip) がリストされます。1 つ以上のハイパーリンクをクリックして、ファイルをダウンロードします。ファイルのダウンロードが終了したら、「OK」をクリックします。

## 随時報告書での作業

随時報告書は、データベースから取り出された情報をグラフィカルに表示する、キャンバス・ベースの報告書です。随時報告書には、キャンバスを使用してシーンが組み込まれます。

キャンバスに複数のオブジェクトを配置し、目的に合うようにキャンバス・スペースを管理することができます。

キャンバスの内部ツリーには、使用可能なすべてのワークスペース内のオブジェクトが表示され、オブジェクトを報告書に追加することができます。

キャンバスは、以下のオブジェクトに基づくことが可能な図表およびグリッドをサポートします。

- 分析照会
- 複合 Dynamart
- ドリルダウン・パス
- Dynamart
- 表
- ビジュアル照会

すべてのオブジェクトを含むキャンバスは、随時報告書が保存されるときに組み込みレイアウトとして保存されます。報告書ごとに複数のレイアウトを作成できます。

随時報告書およびビジュアル・ダッシュボードのキャンバス内のオブジェクトをリンクすることもできます。

## 随時報告書の作成

随時報告書ランタイム・エディターでは、随時報告書を作成し、その報告書にオブジェクトを追加することができます。

### このタスクについて

随時報告書には、キャンバスを使用してシーンが組み込まれます。随時報告書を作成する際には、キャンバスに複数のオブジェクトを配置し、目的に従ってキャンバス・スペースを管理することができます。

随時報告書を作成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. メインメニューから、「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。「新規」ウィンドウが開きます。
2. 「QMF オブジェクト」を展開し、「随時報告書」を選択します。「次へ」をクリックします。
3. 「名前」フィールドで、随時報告書の固有の名前を指定します。「終了」をクリックします。

#### タスクの結果

随時報告書が作成されました。次に、オブジェクトを追加する必要があります。

##### 関連概念:

510 ページの『キャンバス・ツールバーを使用したキャンバスの管理操作』  
キャンバス・ツールバーには、随時報告書およびビジュアル・ダッシュボード内のキャンバスを管理するためのアクションが用意されています。

##### 関連タスク:

512 ページの『キャンバス上のオブジェクトのワイヤリング』  
オブジェクトをワイヤリングすることで、オブジェクト間の関係および従属関係を定義します。オブジェクト・ワイヤリング・モードを使用してキャンバス上のオブジェクトを接続します。

---

## ビジュアル・ダッシュボードでの作業

ビジュアル・ダッシュボードは、対話式データまたは永続データを幅広いユーザーに表示する、ビジュアル・プロジェクトの 1 タイプです。

### このタスクについて

ビジュアル・ダッシュボードは、複数の異種データ・ソースからのデータを同時にドロワーし、さまざまなグラフ、図表、およびグラフィカル・ウィジェットを使用してデータを表示できます。コンテンツ開発者は QMF for Workstation を使用して、複数のユーザーが QMF for Workstation または QMF for WebSphere のいずれかで表示可能なビジュアル・ダッシュボードを作成できます。

注: 前に QMF for WebSphere でデザインしたビジュアル・ダッシュボードを表示することはできますが、それをデザインすることはできません。「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブが使用不可になっています。

以下のステップは、ビジュアル・ダッシュボードの作成時または編集時に実行するタスクを概説しています。

#### 手順

1. ワークステーション・エディター・ウィンドウでビジュアル・ダッシュボードを活動化します。ワークステーション・エディター・ウィンドウでのビジュアル・ダッシュボードの活動化は、以下のいずれかの方法で行うことができます。

- 「新規ビジュアル・ダッシュボードの作成」ウィザードを使用して、新規のビジュアル・ダッシュボードを作成します。
  - 既存のビジュアル・ダッシュボードを開きます。
2. 「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブを開きます。「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブには、ビジュアル・ダッシュボードで作業するために使用するエディター・ウィンドウおよびいくつかのビューとメニューが表示されます。「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブは、「パースペクティブを開く」ツールバー・ボタンを使用するか、または「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを開く」 > 「ビジュアル・デザイナー」を選択して開くことができます。
  3. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューにリストされているビジュアル・ダッシュボードのキー・コンポーネントが表示されます。各ビジュアル・ダッシュボードは、「プロジェクト・エクスプローラー」ツリーの「ビジュアル・ダッシュボード」ノードにリストされます。各ビジュアル・ダッシュボードには、以下のフォルダーがあります。
    - 接続
    - グローバル
    - 照会
    - シーン
  4. データ・ソース接続を作成します。

ビジュアル・ダッシュボードは、企業全体で共有されるよう意図されています。ビジュアル・ダッシュボードの共用および配布を簡易化するため、QMF for Workstation ではビジュアル・ダッシュボードに含まれる照会を特定のデータ・ソースに結合しません。代わりに、照会は接続情報別名に結合されます。

ビジュアル・ダッシュボード用のデータを取得するために使用されるデータ・ソースごとに、接続情報別名をセットアップする必要があります。接続情報別名のセットアップについては、『ビジュアル・プロジェクトのデータ・ソース接続の指定』を参照してください。

5. ビジュアル・ダッシュボードにデータを提供する最初の照会を指定します。

既存の照会を指定するか、または新規照会を作成することができます。照会を指定するときに、照会を接続情報別名と関連付けるようにシステムから指示されます。接続情報別名は、照会の実行対象になるデータ・ソースを識別するものです。照会のセットアップについては、377 ページの『ビジュアル・プロジェクトの照会の指定』を参照してください。

6. ダッシュボードの最初のシーンをデザインします。ビジュアル・ダッシュボードは、1 つ以上のシーンから構成されます。

シーンとは、データを表示するために使用されるすべてのエレメントを収容する (プレゼンテーション用スライドに似た) コンテナです。新規ビジュアル・ダッシュボードの作成後、システムからデフォルト・シーンが 1 つ提供されます。ビジュアル・ダッシュボード内のシーンを 1 つだけにすることも、あるいは他のシーンを追加することもできます。

7. オブジェクトをシーンに挿入します。

挿入できるオブジェクトは「パレット」ビューに表示され、それぞれのタイプに基づいて個別のパレット上で編成されます。「パレット」ビューから、シーンに挿入するオブジェクトを選択します。

8. 「プロパティ」ビューでオブジェクトのプロパティを変更します。

オブジェクトのプロパティを変更することで、オブジェクトの外観および動作を決定する値を設定します。「式デザイナー」を使用して、オブジェクトのプロパティを指定することができます。

9. レイアウト・オブジェクトを挿入します。

ビジュアル・ダッシュボードでは、シーン・レイアウト・オブジェクトに照会結果が表示されます。

レイアウト・オブジェクトの挿入時に、そのオブジェクトを、「照会」フォルダーに含まれている照会と関連付けるようにシステムから指示されます。ダッシュボードの作成プロセス中にはいつでも、照会を「照会」フォルダーに追加することができます。

レイアウト・オブジェクトはデータを多様な仕方で表示できます。多くのレイアウト・オブジェクトでは、複数の照会結果を単一のレイアウトで表示します。例えば、単一の XY グラフを作成し、そのグラフに、ある照会から取得した売上高と、別の照会から取得した経費が表示されることが考えられます。レイアウト・オブジェクトは複数追加できます。レイアウト・オブジェクトを配置すると、照会結果情報を高いレベルのレイアウト・オブジェクトから低いレベルのレイアウト・オブジェクトに受け渡すことができます。この情報の受け渡しが可能であるため、配置したレイアウト・オブジェクトを使用して、特定のデータ値に関連する明細情報を表示できます。

10. 「イベント」ビューを使用して、さまざまなナビゲーション・オプションを割り当てます。

シーンおよびオブジェクトにナビゲーション・オプションを割り当てることにより、ダッシュボードを通るパスを設定します。ナビゲーションの 1 つの形態に、ダッシュボード・コントロール・オブジェクト (コンボ・オブジェクトやリスト・ボックス・オブジェクトなど) とデータ駆動型レイアウト・オブジェクト (グリッド・オブジェクトや棒グラフ・オブジェクトなど) との間の依存関係を、「パレット」ビューから「接続」ツールを使用して定義する、というものがあります。

11. ビジュアル・ダッシュボードを実行します。

「ランタイム」タブをクリックするたびに、実際にはビジュアル・ダッシュボード・オブジェクトを実行していることとなります。このステップを実行することで、実行時にどのように結果が表示されるのかを確認することができます。このステップはダッシュボードのテスト実行として考えてください。このテスト実行により、ダッシュボードを保存したりデプロイしたりする前にデザインを改良できます。

12. ビジュアル・ダッシュボードを保存します。

ビジュアル・ダッシュボードのデザインまたは編集を完了したら、ダッシュボードを保存し、他のユーザーに配布するために 1 つ以上のワークスペースにコピーすることができます。

## ビジュアル・ダッシュボードの計画

ビジュアル・ダッシュボードを開発する前に、開発および設計プロセスの計画を立てます。ビジュアル・ダッシュボードを設計するために最も重要な計画アクティビティの 1 つは、ストーリーボードとして知られています。

### ストーリーボードの使用

ストーリーボードは、デザインおよびデザイン・プロセスの可視化に役立つ機能です。グラフィック・オーガナイザーとして機能するストーリーボードは、設計対象のダッシュボードをチームのすべてのメンバーに対して事前に可視化するために役立ちます。

このセクションにある情報は、ストーリーボードの使用法についての一般ガイドラインとして使用することを目的としています。

計画フェーズでストーリーボードを適切に使用すれば、ダッシュボードの外観および機能を明確に図示することで設計プロセスを促進できます。

ストーリーボードを使用することで、実際の設計フェーズから推測を取り除き、開発時にミスをする可能性を最小限に抑え、ダッシュボードをより効率的に展開することが可能になります。また、適切に設計されたダッシュボードは、企業の他の分野で再使用できる可能性が高くなります。

ストーリーボードを使用して、ビジュアル・ダッシュボードに組み込むシーンとオブジェクトの基本的な特性、機能、および表示フローを設計します。

ビジュアル・ダッシュボードのストーリーボードでは、以下を指定してください。

- 各シーンのデータ
- シーン、大まかなドロー
- 各シーンのレイアウト
- プレゼンテーションの順序
- ユーザーが詳細情報にアクセスできるポイント
- ユーザー・イベントから生じるアクション
- シーン間のジャンプ

ストーリーボードの作成には、さまざまなタイプのツールを使用でき、複雑性のレベルもそれぞれ異なります。デザインおよびフローのスケッチには、紙と鉛筆を使用できます。Microsoft PowerPoint などのプレゼンテーション・ツールを使って、ノート・ページにサポート詳細情報に記述したサンプル・レイアウトを作成することもできます。さらに、複数の Web ページをまとめて、実際のジャンプやナビゲーションのフローを示すこともできます。

次の一般的なトピックのリストを、ストーリーボードやデザインに盛り込むべき要素の指針として使用してください。

照会結果データの表示

照会結果データを表示するには、レイアウト・オブジェクト、またはリスト・ボックス・コントロールおよびコンボ・ボックス・コントロールを使用します。さまざまな表示オプションを検討し、表示する分析に最適なものを決定します。

#### ユーザー入力の取り込み

標準ユーザー・インターフェース・コントロールのユーザー設定を取り込むことができます。「パレット」ビューのコントロールを参照し、オプションを検討します。

#### 情報の受け渡し

パラメーターを使用して、ユーザー・アクションから取得した情報を受け渡すことができます。この情報は、ダッシュボードの表示、シーンの内容、または照会実行に影響を及ぼします。

#### ダッシュボードのナビゲート

ナビゲーション機能を使用すると、ユーザーはダッシュボード内を移動して、新しい情報を入手できます。

#### データの確認

ストーリーボードでは、データベースが指定され、使用する予定の表のリストが含まれていることが必要です。このリストを作成すると、作業を整理する助けになります。その後、最初のシーンを作成する前に、必要なすべての照会を作成する時間を取ることができます。別の方法としては、他の人と協力して、データベース表からデータを抽出し、それをサマリー表に整理することもできます。

## 「ビジュアル・ダッシュボード」ウィザードを使用したビジュアル・ダッシュボードの作成


「新規ビジュアル・ダッシュボードの作成」ウィザードを使用すれば、新規ビジュアル・ダッシュボードを作成できます。

### このタスクについて

新規ビジュアル・ダッシュボードを作成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「新規ビジュアル・ダッシュボードの作成」ウィザードを開きます。
  - 「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブから、「ファイル」 > 「新規」 > 「ビジュアル・ダッシュボード」を選択します。「新規ビジュアル・ダッシュボードの作成」ウィザードが開きます。
  - 「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブから、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「ビジュアル・ダッシュボード」フォルダーを右クリックします。ポップアップ・メニューから「新規ビジュアル・ダッシュボード」を選択します。「新規ビジュアル・ダッシュボードの作成」ウィザードが開きます。

- 「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブから、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「ビジュアル・ダッシュボード」フォルダーをダブルクリックします。「新規ビジュアル・ダッシュボードの作成」ウィザードが開きます。
  - 「新規ビジュアル・ダッシュボード」ツールバー・ボタン () をクリックします。
2. 「ダッシュボード名」フィールドに、ダッシュボードの固有名を入力します。
  3. 以下のいずれかの方法で、新しいビジュアル・ダッシュボードに使用するテンプレートを選択します。
    - 「事前定義」タブを選択します。事前定義されたテンプレートのリストから、新しいビジュアル・ダッシュボードを作成するための基礎とするテンプレートを選択します。事前定義されたテンプレートは、アプリケーションと共に出荷されます。事前定義されたテンプレートのレイアウトは、変更できません。「ブランク」という事前定義されたテンプレートは、すべてのビジュアル・ダッシュボードのデフォルト・テンプレートです。それには構造的な要素が含まれていません。
    - 「ローカル」タブを選択します。ローカル・テンプレートのリストから、新しいビジュアル・ダッシュボードを作成するための基礎とするテンプレートを選択します。ローカル・テンプレートは、ユーザーの組織のために作成されてローカルに保存されたものです。各テンプレートには、事前定義されたコンテンツ (企業のロゴ、標準化されたテキスト、使用頻度の高いグラフィカル・レイアウトなど) が組み込まれています。テンプレートは、編成上の理由でカテゴリ別にリストされます。ユーザーは、必要に応じて、ローカル・テンプレートの構造的なコンテンツを編集できます。
- 注: ローカルで保存されたテンプレートが「テンプレート」ディレクトリーに入っている場合のみ、「ローカル」タブが表示されます。
4. 「終了」をクリックします。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「ダッシュボード」ノードに、このダッシュボード名が付いたフォルダーが追加されます。

新規ダッシュボードごとに、「接続」フォルダー、「照会」フォルダー、および「グローバル」フォルダーが作成されます。さらに、デフォルトの最初のシーンを持つ「シーン」フォルダーが追加されます。エディター・ウィンドウが開き、ダッシュボードの最初のシーンをデザインするためのキャンバスが表示されます。

## タスクの結果

「新規ビジュアル・ダッシュボードの作成」ウィザードを使用して新規ビジュアル・ダッシュボードが作成されました。

## 次のタスク

これで、「接続」、「照会」、「グローバル」、および「シーン」を追加してダッシュボードを設計する準備が整いました。

## 新規ビジュアル・ダッシュボード・テンプレートの作成

ユーザーは、企業のロゴ、標準化されたテキスト、特別なグラフィックスなどの事前定義されたコンテンツを使用して、ビジュアル・ダッシュボードを作成できます。その後、各ビジュアル・ダッシュボードをテンプレートとして保存できます。他のユーザーはそのテンプレートを使用して、ビジュアル・ダッシュボードを簡単に作成することができます。

## このタスクについて

新規ビジュアル・ダッシュボード・テンプレートを作成するには:

### 手順

1. 「ファイル」 > 「別名保存」を選択します。「ウィザードを選択してください」ウィンドウが開きます。

「ウィザードを選択してください」ウィンドウで、使用するウィザードを選択し、「テンプレートとして保存」チェック・ボックスを選んで、「次へ」をクリックします。

- ファイルに保存

このオプションは、「ファイルに保存」ウィザードを使用してビジュアル・ダッシュボードをファイルにローカル保存する場合に選択します。

ステップ 2 を参照してください。

- リポジトリに保存

このオプションは、「リポジトリに保存」ウィザードを使用してビジュアル・ダッシュボードをリポジトリに保存する場合に選択します。

ステップ 3 (393 ページ) を参照してください。

2. 「ファイルに保存」ページで、「パス:」フィールドにファイルの場所を入力するか、または「参照」を選択してファイルを見つけ出し、「終了」をクリックします。

例えば、Windows オペレーティング・システムでは、パスは以下のいずれかになります。

- Windows XP 以前の場合:

```
C:\Documents and Settings\%[user_name]%Application Data\IBM\QMF for Workstation\Templates\VD Templates\VisualDashboard1
```

- Windows Vista 以降の場合:



C:\Users\%[user\_name]\Application Data\IBM\QMF for Workstation\Templates\VD Templates\VisualDashboard1

VisualDashboard1 は、任意の名前に置き換えることができます。パスは、ローカル・ディレクトリーにすることを勧めます。ユーザーが新しいビジュアル・ダッシュボードを作成するとき、すべてのローカル・テンプレートをユーザーに表示するために QMF for Workstation が検索するのは、ローカル・ディレクトリーだからです。「ビジュアル・ダッシュボード」テンプレートがファイルに保存されました。

3. 「リポジトリーに保存」ページでリポジトリー・オブジェクト・パラメーターをセットアップします。

「親項目の選択」リストには、リポジトリー・テンプレートを編成するために設定したカテゴリーのリストが表示されます。

カテゴリーを設定していない場合には、このリストはブランクになります。

4. 条件: 「新規ビジュアル・ダッシュボード・テンプレート・カテゴリーの作成」アイコン をクリックして、カテゴリーを作成します。

「新規ビジュアル・ダッシュボード・テンプレート・カテゴリーの作成」ウィザードが開きます。

5. テンプレート・カテゴリーの名前を指定します。オプションで、「コメント」フィールドにコメントを設定できます。
6. 「終了」をクリックします。

新規ビジュアル・ダッシュボード・テンプレート・カテゴリーが作成されました。これは「親項目の選択」リストに表示されます。

7. 「名前」フィールドにダッシュボードの名前を指定します。オプションで、「コメント」フィールドにコメントを設定できます。
8. 「終了」をクリックします。

新しいビジュアル・ダッシュボードのテンプレートが保存されます。これは、ユーザーが新しいビジュアル・ダッシュボードを作成するときに表示されます。

## 旧 Visionary ワールドのインポート

以前のバージョンの QMF Visionary を使用して作成された既存の Visionary ワールドから、新しいダッシュボードを作成できます。

### このタスクについて

インポートする Visionary ワールドが、QMF for Visionary バージョン 8.1 フィックスパック 13 以降を使用して、XML ファイルとしてエクスポート済みである必要があります。QMF for Visionary バージョン 8.1 フィックスパック 13 を使用して Visionary ワールドをエクスポートするには、「ファイル」 > 「XML でエクスポート」を選択します。

旧 Visionary ワールドをインポートするには:

## 手順

1. 任意のパーспекティブから、「ファイル」 > 「インポート」を選択します。「インポート」ウィンドウが開きます。
2. 「**Visionary** ワールド・ファイル」を選択します。
3. 「次へ」をクリックします。「Visionary ワールド・インポート」ウィザードが開きます。
4. 「ファイル・パス」フィールドに、インポートする Visionary ワールドのパスを指定します。「参照」ボタンを使用してファイルを検索できます。
5. 「ダッシュボード名」フィールドに、旧 Visionary ワールドから作成する新規ダッシュボードの固有名を入力します。
6. 「ロケーション」フィールドに、新規ダッシュボードを保存するロケーション(現行の接続先リポジトリ内)を入力します。
7. 「終了」をクリックします。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「ダッシュボード」ノードに、このダッシュボード名が付いたフォルダーが追加されます。新規ダッシュボードごとに、「接続」、「照会」、「グローバル」、および「シーン」というフォルダーが追加されます。エディター・ウィンドウが開き、変換されたワールド内のシーンを編集するためのキャンバスが表示されます。

## ビジュアル・ダッシュボードのデータ・ソース接続の指定

ビジュアル・ダッシュボードで使用するデータ・ソースごとに接続情報別名を設定します。

### このタスクについて

ビジュアル・ダッシュボードは、企業全体で共有されるよう意図されています。ビジュアル・ダッシュボードの共用および配布を簡易化するため、QMF for Workstation ではビジュアル・ダッシュボードに含まれる照会を特定のデータ・ソースに結合しません。代わりに、照会は接続情報別名に結合されます。接続情報はビジュアル・ダッシュボードと一緒に保存されているため、任意のデータ・ソースを指すように簡単に変更できます。

接続情報には、接続の名前、および接続が指すデータ・ソースの名前が含まれます。ビジュアル・ダッシュボードで使用する照会を追加する際には、その照会に関連付ける接続情報別名を指定します。

照会に使用するデータ・ソースを変更するには、接続情報を編集して、使用するデータ・ソースを指すようにします。この機能により、ユーザーは簡単にビジュアル・ダッシュボードを共有し、ユーザー固有のデータ・ソースを使用することができます。さらに、テスト・データ・ソースと実働データ・ソース間の移動が容易になります。

データ・ソースの接続情報を指定するには:

### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「接続の挿入」ウィンドウを開くことができます。

- 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「接続」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「接続の挿入」を選択します。「接続の挿入」ウィンドウが開きます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「接続」ノードをダブルクリックします。「接続の挿入」ウィンドウが開きます。
2. 使用可能なデータ・ソースのリストから、この接続情報別名に関連付けるデータ・ソースを選択します。
  3. 「接続名」フィールドに、この接続情報の固有名を指定します。
  4. 「終了」をクリックします。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、ツリーの「接続」ノードの下に新規接続情報別名がリストされます。

注: また、以下のいずれかの方法を使用しても、データ・ソースの接続情報別名をセットアップできます。

- 「ワークスペース」ビューから、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューにあるビジュアル・プロジェクトの「接続」フォルダーにデータ・ソースをドラッグします。
- 「ワークスペース」ビューまたは「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューにあるビジュアル・プロジェクトの「照会」ノードに照会をドラッグします。

新規データ・ソース接続が「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「接続」フォルダーに自動的に追加されます。

## タスクの結果

注: 接続情報別名は、「接続 N」という名前を追加されます。接続情報別名の名前は、項目を右クリックし、「名前変更」を選択して編集できます。

## シーンでの作業

ビジュアル・ダッシュボードは、データをユーザーに表示するための 1 つ以上のシーンから構成されます。

### このタスクについて

新しいビジュアル・ダッシュボードを作成すると、1 つのデフォルト・シーンを提供することになります。ビジュアル・ダッシュボード内のシーンを 1 つだけにすることも、あるいは他のシーンを追加することもできます。ダッシュボードの各シーン内では、ビジュアル・ダッシュボード・ユーザーにデータおよび情報を表示するオブジェクトを追加したり、シーン間やオブジェクト間でユーザーが移動するために必要なナビゲーションをセットアップしたりできます。

このトピックでは、以下の操作について説明します。

- ビジュアル・ダッシュボードへのシーンの追加
- ビジュアル・ダッシュボードでのシーンの名前変更
- ビジュアル・ダッシュボードからのシーンの削除

以下の手順では、シーンを操作するときに行えるタスクについて概説します。

## 手順

1. ダッシュボードにシーンを追加するには、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューから「新規シーン」ウィザードを使用します。

以下のいずれかの方法で「新規シーン」ウィザードを開くことができます。

- シーンの追加先となるビジュアル・ダッシュボードの「シーン」フォルダーを右クリックして、ポップアップ・メニューから「新規シーン」を選択します。
- シーンの追加先となるビジュアル・ダッシュボードの「シーン」フォルダーをダブルクリックします。

「新規シーン」ウィザードが開きます。

- a. 「シーン名」フィールドに、このシーンの固有名を指定します。
- b. 「終了」をクリックします。

「プロジェクト・エクスプローラー」ビューに、ビジュアル・ダッシュボード・プロジェクトの新しいシーンがリストされます。エディターに新しいシーン・キャンバスが開きます。

2. シーンを名前変更するには、以下の手順を実行します。
  - a. 以下のいずれかの方法を使用して、名前変更するシーンを選択します。
    - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、名前変更するシーンを右クリックして、ポップアップ・メニューから「名前変更」を選択します。
    - エディター・ウィンドウにアクティブ・シーンが表示された状態で、「編集」 > 「シーン」 > 「名前変更」を選択します。
  - b. 強調表示された編集ボックスにシーンの新しい名前を入力します。シーンが名前変更され、新しい名前が表示されます。
  - c. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、編集ボックスの外側をクリックします。

シーンが名前変更され、新しい名前が表示されます。

注: 元の名前によるシーンへの参照はどれも更新されません。

3. シーンを削除するには、以下のいずれかのステップを実行します。

注: 最後に残っているシーンは削除できません。

- a. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、削除するシーンを右クリックして、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。
- b. エディター・ウィンドウにアクティブ・シーンが表示された状態で、「編集」 > 「シーン」 > 「削除」を選択します。

ビジュアル・ダッシュボード・プロジェクトからシーンが削除されます。

注: 削除されたシーンへのダッシュボードからの参照はどれも更新されません。

## シーン・パラメーターの使用

パラメーターを使用すれば、シーンでオブジェクトのプロパティの値を変更できます。シーン・パラメーターは、そのシーン・パラメーターが定義されているシーンでのみ使用できます。

### このタスクについて

シーン・パラメーターは、そのシーン・パラメーターが定義されたシーンでのみ使用できます。作成するそれぞれのシーンは、プロジェクト・エクスプローラーに追加される「ローカル」フォルダーを持ち、シーンに定義されたすべてのパラメーターを含みます。

シーン・パラメーターを作成するには:

### 手順

1. プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、パラメーターを作成するシーンを右クリックします。「新規」 > 「パラメーター」を選択します。「パラメーターの挿入」ウィンドウが開きます。
2. 「名前」フィールドに、シーン・パラメーターの固有名を入力します。
3. 「データ・タイプ」リスト・ボックスで、データ・タイプを選択します。データ・タイプは、パラメーターに含まれるデータのタイプを記述します。以下のオプションがあります。

- ブール: true または false
- 色: 色
- 日時: 日時値
- 日時セット: 複数の日時値
- ファイル・パス: ファイルへのパス。
- フォント名: 有効なフォント・タイプ
- 整数: 整数
- リテラル: そのままのデータ。このデータ・タイプは、照会パラメーターにのみ適用されます。
- 数値: 浮動小数点数
- 数値セット: 複数の浮動小数点数
- パーセンテージ: パーセンテージとして使用される値
- ポイント: 単一の x-y ポイント値
- ポイント・セット: 複数の x-y ポイント値
- ポリ・セット: 多角形の構成に使用できる複数のポイント変数
- テキスト: テキスト・ストリング
- テキスト・セット: 複数のテキスト・ストリング

デフォルトのデータ・タイプは整数です。

4. 説明を追加する場合は、「説明」フィールドにテキストを入力します。
5. デフォルト値を指定する場合は、「デフォルト値」チェック・ボックスを選択します。フィールドは、パラメーターのデフォルト値を入力できる場合に表示されます。他の値が指定されない場合に、この値が使用されます。

6. 「終了」をクリックします。

「パラメーターの挿入」ウィンドウが閉じます。指定したパラメーターが「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで「パラメーター」ノードに追加されます。

## シーン・ビューの作成

ビジュアル・ダッシュボードではシーン・ビューを作成できます。このシーン・ビューを使用すれば、シーン・オブジェクトを配置したり変更したりして、シーンの表示をさまざまな画面解像度に調整できます。

### 始める前に

「キャンバス」タブでシーンを作成し、シーン・オブジェクトの振る舞いを定義します。このビューはシーンのデフォルト・ビューです。


### このタスクについて

シーン・ビューを使用すれば、ビジュアル・プロジェクトの表示をカスタマイズできます。シーン・ビューは、ビジュアル・プロジェクトに定義されているイベントおよびイベント・アクションを変更するために使用することはできません。

ビジュアル・プロジェクト内のシーンごとに、必要なシーン・ビューをいくつでも作成できます。



シーン・ビューを作成するには、以下のようにします。

### 手順

1. シーン・ビューを作成するときの対象となるシーンを「デザイン」タブで開きます。デフォルトのビューが「デフォルト・ビュー」タブに表示されます。
2. 「デザイン」タブの右下隅で、 をクリックして「シーン・ビューの作成」ウィザードを開きます。
3. 「カテゴリー」リストから画面のタイプを選択し、「テンプレート」リストから、作成するシーン・ビューの画面解像度を選択します。事前設定されている解像度を選択し、ステップ 10 に進みます。カスタム・テンプレートを作成するには、ステップ 4 に進みます。

ヒント: 各種モバイル装置でシーンを正しく表示するために、使用可能なすべての画面解像度に対してシーン・ビューを作成する必要はありません。テンプレートを 1 つ選択 (例えば、「電話」カテゴリーから「iPhone 5、5C、5S」を選択) し、そのテンプレート用の横長と縦長のシーン・ビューを作成します。実行時に、適切なシーン・ビューが選択され、各種モバイル装置の画面解像度に合わせて拡大縮小されます。シーン・ビューの拡大縮小を有効にするには、「ScaleToWindow」シーン・プロパティを必ず「true」に設定してください。

4. 特定のシーン・ビュー・テンプレートを追加するには、「カテゴリー」リストから「カスタム」を選択し、「カスタム・シーン・ビュー・テンプレートの追加」をクリックします。
5. 「ビューの説明」フィールドにテンプレートの説明を入力します。

6. 「幅」フィールドおよび「高さ」フィールドにテンプレートの幅と高さをピクセル単位で指定します。
7. 「OK」をクリックして、テンプレートを「テンプレート」リストに追加します。
8. カスタム・シーン・ビューを削除するには、カスタム・シーン・ビューを選択して「カスタム・シーン・ビュー・テンプレートの削除」をクリックします。
9. 作成したカスタム・ビューを「テンプレート」リストから選択します。
10. 「終了」をクリックして、「シーン・ビューの作成」ウィザードを閉じ、シーン・ビュー・タブを開きます。シーン・ビュー・タブに、画面区域を定義するフレームとともにキャンバスが表示されます。
11. シーン・ビュー・タブでシーンの内容を変更し、定義された画面区域に合わせて、その内容を調整します。シーンは以下のように変更できます。
  - ビューのシーン・オブジェクトの表示/非表示。これを行うには、「可視性」ビューにおいて、対応するチェック・ボックスを選択またはクリアします。
  - シーン・オブジェクトの位置の再調整。
  - シーン・オブジェクト・プロパティの変更。
 変更されたすべてのプロパティは太字でマークされます。
12. シーン・ビューの作成が完了したら、そのビューをビジュアル・プロジェクトとともに保管します。
13. ビジュアル・ダッシュボードの現在のシーン・ビューのタイプまたはサイズを編集する場合は、「デザイン」タブの右下隅で、 をクリックします。
14. ビジュアル・ダッシュボードから現在のシーン・ビューを削除する場合は、「デザイン」タブの右下隅で、 をクリックします。

## タスクの結果

ヒント: 組み込みシーン・コンテナにシーン・ビューを表示する場合は、組み込みシーン・コンテナと同じサイズのシーン・ビューを作成し、組み込みシーンの「SceneView」プロパティでそのシーン・ビューの名前を指定し、組み込みシーンの「AutoZoom」プロパティを使用して、シーン・ビューが適用されたときに組み込みシーンのコンテンツの大きさが自動的に調整されるようにします。

各種デバイス用のシーン・ビューの選択:

このトピックには、モバイル・デバイスまたはユーザー・マシンの Web ブラウザーでビジュアル・ダッシュボードを実行する際の適切なシーン・ビューの選択方法に関する有用な情報が示されています。

ビジュアル・ダッシュボードを実行すると、以下が行われます。

1. QMF は、モバイル・デバイスまたはユーザー・マシンで起動した Web ブラウザーの画面サイズに関する情報を受け取ります。
2. 該当するシーンに対して作成されたすべてのシーン・ビューから、Web ブラウザーの画面方向に対応する画面方向を持つシーン・ビューが選択されます。

3. 適切な画面方向のシーン・ビューのリストから、Web ブラウザーのサイズに近いサイズを持つシーン・ビューが選択されます。
4. 選択されたシーン・ビューは、縦横比を維持したまま Web ブラウザーのサイズに合わせて幅が拡大縮小されます。

注:

- 拡大縮小は、モバイル・デバイスの Web ブラウザーにおいてのみ使用可能であり、また、Web リンクを使用してビジュアル・ダッシュボードを開く場合に限り使用できます。
- 省略時設定のシーン・ビューは拡大縮小されません。これは、拡大縮小するにはシーン・ビューの正確なサイズが必要ですが、省略時設定のシーン・ビューの正確なサイズは、それが実行時に作成されるまで定義されないためです。
- サイズが小さすぎるシーン・ビューは、適切に拡大縮小されません。異なるモバイル・デバイスでは、シーン・ビューの最小サイズが異なります。モバイル・デバイスの Web ブラウザーでシーン・ビューが正しく表示および拡大縮小されることを確認することをお勧めします。

## ビジュアル・データ・オブジェクトへのナビゲーション機能の追加

ユーザーがダッシュボード内を移動する方法は、シーンおよびオブジェクトにナビゲーションを割り当てることによってデザインします。

### このタスクについて

ユーザーに対するデータの表示方法に応じて、以下のナビゲーション機能のいずれかをシーンおよびオブジェクトに適用することを選択できます。

ドリルダウン・ウィザードの使用:

クリック・イベントの作成、宛先シーンの識別、および必要なシーン・パラメーターのマッピングといったプロセスは手動でも行えますが、これらはドリルダウン・ウィザードによって自動化されています。

### このタスクについて

追加情報のドリルダウン機能は、非常に重要なナビゲーション機能です。この機能により、ユーザーはオブジェクトをクリックすると、元のオブジェクトの値に特定の関連する詳細情報が含まれる別のシーンにジャンプします。ドリルダウン・ウィザードは、照会結果データ (データ・テンプレートをサポートしている) を表示するすべてのレイアウト・オブジェクトで使用可能です。

注: クリック・イベントを作成して、宛先シーンを特定し、必要なシーン・パラメーターを手動でマップすることもできます。

ドリルダウン・ウィザードを使用して新しい宛先シーンにクリック・イベントを設定するには:

### 手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、クリック・イベント・ナビゲーション機能を追加するレイアウト・オブジェクトのフォルダーを展開します。そ



のレイアウト・オブジェクトの「データ・テンプレート」フォルダーを展開します。レベル・フォルダーを展開します。クリック・イベントを適用するオブジェクトを右クリックし、ポップアップ・メニューから「ドリルダウン」を選択します。これは、エディターでオブジェクトを開き、エディター・ウィンドウのオブジェクトを右クリックして行うこともできます。「ドリルダウン」ウィザードが開きます。

2. ウィザードの最初のページは、クリック・イベントを作成するために必要なステップを要約しています。
3. 「次へ」をクリックします。

ドリルダウン・ウィザードの最初のページで、ターゲット・シーンに渡す値が含まれる照会結果データ列を選択します。ターゲット・シーンは渡されたデータ値を使用して、元のデータ値に特定の適用される追加情報を引き渡します。データ列を「選択可能なフィールド」リスト・ボックスから「表示するフィールド」リスト・ボックスに移動するには、矢印キーを使用します。「表示するフィールド」リストに追加したそれぞれのデータ列が、宛先シーンにパラメーターとして渡されます。

4. 「次へ」をクリックします。

ドリルダウン・ウィザードの 2 番目のページで、ジャンプ先のシーンを指定します。「ロケーション」ラジオ・グループから、ドリルダウン・アクションによって、現在選択されているダッシュボード内のシーンにジャンプするのか、別のビジュアル・プロジェクト内のシーンにジャンプするのかを選択して決定します。

- 「このダッシュボード」を選択すると、現在選択されているダッシュボード内のシーンにジャンプします。
- 「別のビジュアル・プロジェクト」を選択すると、別のビジュアル・プロジェクト内のシーンまたはページにジャンプします。「ビジュアル・プロジェクト」フィールドが使用可能になります。

省略符号 (...) を使用して、ジャンプ先のビジュアル・プロジェクトを参照します。

- 「パラメーターの検索」をクリックして、指定のビジュアル・プロジェクトで使用可能なパラメーターから選択します。

注: 新規タブでビジュアル・プロジェクトを開くには、「新規タブで開く」チェック・ボックスを選択します。

5. 「シーン」リスト・ボックスから、ユーザーをジャンプさせる宛先シーンを選択します。シーンが存在しない場合は、作成するよう求められます。「視点」リスト・ボックスから視点を選択して、シーン内の視点を指定します。
6. 「次へ」をクリックします。

ドリルダウン・ウィザードの 3 番目のページで、宛先シーンのパラメーター値を指定します。宛先シーンに定義されているすべてのパラメーターが、「パラメーター」フィールドにリストされます。これには、宛先シーンに渡されるすべてのデータ列のパラメーターだけでなく、宛先シーンにのみ適用されるパラメーターも含まれます。

7. 「終了」をクリックします。

これで、クリック・イベント・ナビゲーション機能がレイアウト・オブジェクトに設定されました。

#### 視点の挿入:

特定のズーム・レベルでシーンの特定領域を分離するには、ナビゲーションに視点を挿入します。視点は、ビューアーがシーンのどの部分をどのような拡大率で参照するのかを定義するものです。

#### このタスクについて

シーン間のジャンプの宛先として視点を使用し、その視点を特定のズーム・レベルに関連付けることができます。例えば、工場の所在地を示すダッシュボード・マップがシーンに表示されるとします。ダッシュボードの領域ごとに視点を挿入して定義することができます。これにより、ユーザーは関心のある地域の場所と拡大率に素早く移動できます。

名前付き視点はナビゲーション・ツールを提供するだけでなく、イベント・アクションの宛先にすることもできます。例えば、ユーザーがオブジェクトをダブルクリックすると特定の視点を表示するように指定できます。

視点を挿入するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「新規視点」ウィンドウを開きます。
  - ビジュアル・ダッシュボード編集機能の「キャンバス」モードで、「挿入」 > 「視点の挿入」を選択して、「新規視点」ウィンドウを開きます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、視点の追加先となるシーンの「ローカル」ノードを右クリックし、ポップアップ・メニューから「視点の挿入」を選択します。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、視点の作成対象となるシーンを右クリックし、「新規」 > 「視点」を選択します。

「新規視点」ウィンドウが開きます。

2. 「名前」フィールドに視点の名前を入力します。
3. 「X 位置」フィールドに X 座標の位置を入力します。

X 座標は、水平軸に沿ってシーンの中心からどれくらい離れているのかを示します。デフォルト値は 0 です。

4. 「Y 位置」フィールドに Y 座標の値を入力します。

Y 位置は、表示の中央からのインチ数です。

Y 座標は、垂直軸に沿ってシーンの中心からどれくらい離れているのかを示します。デフォルト値は 0 です。

注: X 座標と Y 座標に使用されるデフォルトの単位は、クライアント・マシンに対して指定されている地域標準によって異なります。この単位は、値の後に単位の省略形を入力することで変更できます。計測単位について詳しくは、製品ヘルプの参考資料を参照してください。

5. 「ズーム・レベル」リストで視点のズーム・レベルを指定します。

デフォルト値は 100% です。

6. 「終了」をクリックします。

「新規視点」ウィンドウが閉じます。

タスクの結果

視点を変更するには:

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで変更する視点を見つけ、ダブルクリックします。「視点プロパティの編集」ウィンドウが開きます。
2. 「X 位置」および「Y 位置」フィールドに変更を入力します。
3. 「ズーム・レベル」リストに新しいズーム・レベルを指定します。
4. 「OK」をクリックします。

注:

**Home** キーを押せば、シーンをデフォルトの視点に復元できます。

デフォルトの視点 (0,0, 100% ズーム) は、シーンを開発するときに参照基準点として役立ちます。大きいシーンで中心点に戻りたいときは、**Home** キーを押せば、デフォルトの視点に戻ることができます。

「シーン」フォルダーの「デフォルト視点」フォルダーから、シーンに視点を設定することができます。「デフォルト視点」を右クリックし、「プロパティ」を選択してデフォルトの視点プロパティを変更するか、「視点の挿入」を選択して視点を作成します。

視点の変更:

視点を変更できます。

このタスクについて

視点を変更するには:

手順

1. 以下のいずれかの方法で「視点プロパティの編集」ウィンドウを開きます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで変更する視点を見つけ、ダブルクリックします。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、変更する視点を右クリックし、「視点の編集」を選択します。

「視点プロパティの編集」ウィンドウが開きます。

2. 「X 位置」および「Y 位置」テキスト・ボックスに変更を入力します。
3. 「ズーム・レベル」リストに新しいズーム・レベルを指定します。
4. 「OK」をクリックします。

「視点プロパティの編集」ウィンドウが閉じます。

デフォルトの視点 (0,0, 100% ズーム) は、シーンを開発するときに参照基準点として役立ちます。

シーンをデフォルトの視点に復元するには、以下のようになります。

- a. エディター・ビュー内を右クリックし、「ジャンプ...」を選択します。「ジャンプ先」ウィンドウが開きます。
- b. デフォルトを選択し、「OK」をクリックします。
- c. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューでデフォルト視点を右クリックし、ポップアップ・メニューから「視点にジャンプ」を選択します。
- d. **Home** キーを押します。

タスクの結果

視点を変更しました。

組み込みシーン・オブジェクトの使用:

組み込みシーン・オブジェクトとは一種のコンテナです。組み込みシーン・オブジェクトを使用すれば、別のシーンやその一部を表示して、そのシーンにナビゲートできます。

このタスクについて

組み込みシーン・オブジェクトが置かれたシーンは、ソース・シーンと見なされます。宛先シーンは、組み込みシーンです。組み込みシーン・オブジェクトを挿入すると、それは「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「シーン」フォルダーに表示されます。

組み込みシーンは、以下の点でジャンプまたはハイパーリンクとは異なります。

- 組み込みシーンはソース・シーンから表示します。
- パラメーター情報は、ソース・シーンから組み込みシーンに渡すことができます。

組み込みシーン・オブジェクトを使用すると、パラメーターを使用して 1 つのシーンから別のシーンに情報を受け渡すことができます。例えば、ソース・シーンが自動車の売り上げの散布図グラフを表示する場合、グラフの各ポイントを組み込みシーン・オブジェクトとして定義し、そこに特定の製造元の売り上げデータを表示する宛先シーンを含めることができます。この例を作成するには、組み込みシーン・オブジェクトを使用して、製造元の名前をパラメーターとして組み込みシーンに渡します。

タスクの結果

組み込みシーン・オブジェクトには、次に挙げる、いくつかの変更可能なプロパティがあります。

- **ZoomPercentage**。組み込みシーン・オブジェクトを介して表示したときの、組み込みシーンのズーム・パーセンテージを設定します。組み込みシーンが良く見えるように、ズーム率を下げると良いかもしれません。
- **SceneCenter**。組み込みシーン上の組み込みシーン・オブジェクトの位置を設定します。デフォルトでは、このプロパティは組み込みシーンの中央に設定され

ます。この値を変更して、組み込みシーンの別の領域を表示することができます。例えば、1 つのシーン上に複数のグラフがある場合に、そのうち 1 つだけを組み込みシーン・オブジェクトを介して表示したいかもしれません。

- **BorderStyle**。組み込みシーン・オブジェクトの周囲の枠のスタイルを設定します。枠のスタイルを選択するか、または枠なしを選択できます。

簡易組み込みシーン・オブジェクトの挿入:

簡易組み込みシーンは、2 つのシーンを接続します。

始める前に

例えば、ソース・シーンが 5 つの投資信託資金の概要を、それぞれの信託資金ごとの小さい図表を使って表示するとします。5 つの図表それぞれを、選択されたときにフルサイズの信託資金を表示する組み込みシーンにすることができます。

このタスクについて

簡易組み込みシーン・オブジェクトをビジュアル・ダッシュボード・シーンに挿入するには:

手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」から、ソース・シーンを「キャンバス」モードで開きます。
2. 「パレット」ビューで、組み込みシーン・オブジェクトをクリックします。
3. エディター・ウィンドウをクリックして、組み込みシーン・オブジェクトを挿入します。「組み込みシーン」ウィザードが開きます。
4. 現行ビジュアル・プロジェクトからのシーンを使用するのか、以前に保存したビジュアル・プロジェクトからのシーンを使用するのかを指定します。

別のビジュアル・プロジェクトからのシーンを開く場合は、対応するチェック・ボックスを選択して、プロジェクトを選びます。

現行プロジェクトからのシーンを使用する場合は、「別のビジュアル・プロジェクト」チェック・ボックスがクリアされていることを確認します。

5. 「組み込みシーン」リスト・ボックスで、組み込むシーンの名前を選択します。
6. 組み込みシーン・オブジェクトのイベント・アクションを自動的に生成するためには、「マウスでクリックした時に組み込みシーンにナビゲートする」チェック・ボックスを選択します。生成されたイベント・アクションの指定により、組み込みシーン・オブジェクトをマウス・クリックすると、組み込みシーンが表示されます。組み込みシーン・オブジェクトに別のイベント・アクションを指定する場合は、「マウスでクリックした時に組み込みシーンにナビゲートする」チェック・ボックスをクリアする必要があります。
7. 組み込みシーンの位置およびズーム・レベルを「X 位置」、「Y 位置」、および「ズーム」フィールドで指定します。
8. 「終了」をクリックします。「組み込みシーン」ウィザードが閉じて、新規組み込みシーンがエディター・ウィンドウに表示されます。

パラメーター化された組み込みシーン・オブジェクトの挿入:

パラメーター化された組み込みシーン・オブジェクトは、2 つのシーンを接続し、1 シーンから別のシーンへ情報を受け渡します。

このタスクについて

例えば、ソース・シーンが自動車の売り上げの散布図グラフを表示する場合、グラフの各ポイントを、特定のメーカーの売り上げデータを表示する宛先シーンを含む組み込みシーン・オブジェクトとして定義することができます。組み込みシーン・オブジェクトを使用して、パラメーターとしてメーカーの名前を宛先シーンに渡します。

注: 別のビジュアル・プロジェクトからのシーンを使用できます。別のビジュアル・プロジェクトからのシーンを開く場合は、対応するチェック・ボックスにチェック・マークを付けて、省略符号 (...) をクリックし、使用するビジュアル・プロジェクトを参照します。「開く」ウィザードを閉じると、選択したビジュアル・プロジェクトへのパスが「別のビジュアル・プロジェクト」フィールドに表示されます。

パラメーター化された組み込みシーン・オブジェクトを作成するには:

手順

1. 組み込みシーン・オブジェクトに組み込むシーンを選択します。「挿入」 > 「シーン」を選択して新規シーンを作成するか、または「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで既存のシーンをダブルクリックして開きます。これが新規シーンである場合、またはシーンを編集する必要がある場合は、テキスト・エレメントおよびグラフィカル・エレメントを追加します。
2. 組み込みシーンがパラメーターを受け取ることを指定します。組み込むシーンのフォルダーを展開します。シーンの「ローカル」フォルダーを拡張します。「パラメーター」フォルダーを右クリックして、「パラメーターの挿入」を選択します。「パラメーターの挿入」ウィンドウが開きます。
3. 「名前」フィールドにパラメーターの名前を入力し、「データ・タイプ」リスト・ボックスでパラメーターのデータ・タイプを選択します。「記述」フィールドに、パラメーターの説明を入力することができます。パラメーターのデフォルト値を指定する場合は、「デフォルト値」を選択します。デフォルト値を指定するフィールドが開きます。デフォルト値の指定で支援が必要な場合は、省略符号 (...) をクリックします。提供されるボタンは、選択したデータ・タイプに応じて異なります。「終了」をクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが閉じます。
4. 組み込みシーン・オブジェクトを置くソース・シーンを選択します。「挿入」 > 「シーン」を選択して新規シーンを作成するか、または「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで既存のシーンをダブルクリックして開きます。ソース・シーンがエディターに表示されます。
5. 組み込みシーン・オブジェクトをソース・シーンに追加します。「パレット」ビューの「コンテナ」パレットで「組み込みシーン」をダブルクリックします。「組み込みシーン」ウィザードが開きます。
6. 「組み込みシーン」リスト・ボックスで、組み込むシーンの名前を選択します。

7. 組み込みシーン・オブジェクトのイベント・アクションを自動的に生成するためには、「マウスでクリックした時に組み込みシーンにナビゲートする」チェック・ボックスを選択します。生成されたイベント・アクションの指定により、組み込みシーン・オブジェクトをマウス・クリックすると、組み込みシーンが表示されます。組み込みシーン・オブジェクトに別のイベント・アクションを指定する場合は、「マウスでクリックした時に組み込みシーンにナビゲートする」チェック・ボックスをクリアする必要があります。
8. 組み込みシーンの位置およびズーム・レベルを「**X** 位置」、「**Y** 位置」、および「ズーム」フィールドで指定します。
9. 「終了」をクリックします。「組み込みシーン」ウィザードが閉じて、新規組み込みシーンがエディター・ウィンドウに表示されます。
10. ユーザー入力を受け取ることができるオブジェクト (例えばコンボまたはリスト・ボックス) を選択または作成します。
11. 組み込みシーンに渡すパラメーター値を設定します。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、1 つ以上のソース・シーンのフォルダーを展開し、組み込みシーン・オブジェクトを表示します。組み込みシーン・オブジェクトのフォルダーを展開します。組み込みシーンの名前が表示されます。組み込みシーンの名前をクリックします。組み込みシーンに指定したパラメーターが、「プロパティ」ビューにリストされます。デフォルト値もすべてリストされます。「プロパティ」ビューで値を指定できます。「値」フィールドをダブルクリックして、式デザイナーを開きます。式デザイナーで、パラメーターの値を指定することができます。ユーザー入力を受け入れるためにリストを使用した場合は、リストのプロパティ値を選択してパラメーター値に組み込む必要があります。

#### イベント・アクション・ナビゲーションの設定:

シーン・オブジェクトまたはシーンに挿入可能なグラフィックス・オブジェクトにイベントを割り当てることにより、ユーザーがダッシュボードをナビゲートする時に、そのオブジェクトがユーザーのアクションに反応するように設定します。

イベントは、ダッシュボードのユーザーが実行するアクションです。イベントには、マウス・クリック、マウス移動、キーボード・キーの使用などのユーザー・アクションが含まれます。イベントをオブジェクトに割り当てるのと同時に、イベントの発生時にトリガーされる追加アクションの指定も行います。イベントに定義できる追加アクションには、新規シーンへのジャンプ、パラメーター値の設定、メッセージの発行などが含まれます。ユーザーがダッシュボードをナビゲートする際に、オブジェクトに割り当てたイベント (ボタン・オブジェクトのクリックなど) が発生すると、イベントに定義した追加アクションがトリガーされます。

以下のタスクでは、オブジェクトへのイベントの割り当てや、イベント発生時にトリガーされるアクションの指定について説明します。

#### イベントの割り当てとイベント・アクションの設定:

「イベント」ビューを使用して、イベントをオブジェクトに割り当て、イベント・アクションを設定します。

このタスクについて

「イベント」ビューには、ビジュアル・プロジェクトのオブジェクトに割り当てることができるイベントを持つイベント・ツリーと、そのイベントに対して定義されているイベント・アクションのリストが表示されます。

オブジェクトにイベント・アクションを定義することにより、シーンが対話的になり、ナビゲートできるようになります。ダッシュボードをユーザーがナビゲートするとき、マウス・アクションにより、シーンからシーンへのジャンプ、SQL ステートメントの実行、または他のアプリケーションの起動といった事前定義のイベントが起こります。

イベントをオブジェクトに割り当て、イベント・アクションを設定するには、以下のようにします。

#### 手順

1. ほとんどの場合、「イベント」ビューは「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブと一緒に開きます。「イベント」ビューが開いていない場合は、「ウィンドウ」>「ビューの表示」>「イベント」を選択して「イベント」ビューを開きます。
2. ビジュアル・プロジェクトにあるオブジェクトを（シーン編集機能または「プロジェクト・エクスプローラー」ビューのいずれかにおいて）選択します。選択したオブジェクトに割り当てることができるイベントが、「イベント」ビューの上部ペインのイベント・ツリーに表示されます。
3. 次のいずれかの方法で、選択したオブジェクトにイベントを追加できます。
  - イベント・ツリーで、オブジェクトに割り当てられるイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
  - イベント・ツリーで、オブジェクトに割り当てられるイベントを選択し、「イベント」ビューの下部ペインにある「新規アクションの追加」ボタンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。次に手順のステップ 5 に進みます。

注: 必要なイベントをイベント・ツリーで素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにイベントの名前を入力します。

4. オブジェクトに割り当てられるイベントは、「イベント」リスト・ボックスにリストされます。別のイベントを、使用可能なイベントのドロップダウン・リストから選択することができます。イベントに対して定義されたイベント・アクションが「アクション」リストにリストされます。アクションを追加するには、「追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。イベントによってトリガーできるアクションがアクション・ツリーに表示されます。
5. アクション・ツリーで、イベントに追加するアクションを選択します。選択するアクションによっては、追加情報の入力を求めるプロンプトが出されます。

注: 選択したイベントで使用できるイベント・アクションのみを表示するには、「使用不可になっているアクションを非表示」チェック・ボックスを選択します。



必要なアクションをアクション・ツリーで素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

6. 定義するイベント・アクションは、リスト・ボックスの「アクション」セルにリストされます。また、アクションごとに条件と説明を指定することもできます。

指定する条件は、アクションが実行される前に満たされなければなりません。条件を指定するには、リスト・ボックスの「条件」セルをクリックします。式を入力するか、省略符号 (...) をクリックして、式デザイナーを開きます。式デザイナーを使用して、条件式を作成することができます。

アクションの適用目的をユーザーが容易に判別できるように、説明を指定します。

7. イベントが一連の複数のアクションをトリガーするように指定することができます。追加するアクションごとに追加処理を繰り返します。定義するアクションはそれぞれ、「アクション」リスト・ボックスにリストされます。イベント用に定義したアクションは、「アクション」リスト・ボックスにリストされている順序と同じ順序で実行されます。「選択した項目の後に挿入」および「選択した項目の前に挿入」ボタンを使用して、リスト内に新規アクションを挿入する位置を決めることができます。ツールバーの「アクションをリスト内で上へ移動」アイコンと「アクションをリスト内で下へ移動」アイコンを使用して、リスト内のアクションを新しい位置に移動することができます。ツールバーの「アクションのコピー」アイコンと「アクションの貼り付け」アイコンを使用して、重複アクションを作成することができます。
8. イベントに定義されている任意のアクションを削除することができます。「アクション」リスト・ボックスから 1 つ以上のアクションを選択します。「選択したアクションをリストから除去」アイコンをクリックします。アクションが削除されます。
9. アクションの詳細を表示または変更することができます。「アクション」リスト・ボックスからアクションを選択します。「選択したアクションを編集」アイコンをクリックします。選択したアクションに応じて、アクションの詳細を示す固有のウィンドウが開きます。詳細に変更を加え、その変更を保存することができます。
10. 「OK」をクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが閉じます。

#### タスクの結果

1 つ以上のアクションの追加先となったイベントが「イベント」ビューの上部ペインのイベント・ツリーに太字フォントで表示されます。イベントに追加されたアクションのリストが「イベント」ビューの下部ペインに表示されます。

オブジェクトには複数のイベントを割り当てることができます。オブジェクトに別のイベントを割り当てるには、イベントを選択しこの処理を繰り返します。

ビジュアル・ダッシュボード内のオブジェクトへのジャンプ・イベントの割り当て:

ビジュアル・プロジェクト内のオブジェクトにジャンプ・イベント を割り当て、定義するには、「新しいロケーションへジャンプ」イベント・アクションを使用します。ジャンプ・イベントが発生すると、ユーザーはダッシュボードまたはアプリケ

ーションにおけるオブジェクトから別のシーンまたは別のシーンの視点に移動するか、あるいはビジュアル報告書に移動します。

#### 始める前に

シーンや視点の間にジャンプ・イベントを作成するには、事前にソース・シーンと宛先ダッシュボード・シーンの両方を作成するか、または視点を作成しておく必要があります。さらに、定義するジャンプ・イベントによってビジュアル報告書に移動する場合は、報告書へのジャンプ・イベントを作成する前に、その報告書を作成しておく必要があります。

#### このタスクについて

ジャンプにより、コンテキスト情報が新しいロケーションに送られます。例えば、ジャンプするときにシーン・パラメーターを設定するように指定し、計算値またはカテゴリー (店舗の位置など) に基づいてパラメーターを設定できます。このように、売上収益を表示する宛先シーンを店舗の位置に基づいたものとし、どのようなコンテキストでユーザーがこのシーンにたどり着くかに応じて、表示するデータを異なったものとすることができます。

注: シーンや視点の間にジャンプを作成するには、事前にソース・シーンと宛先プロジェクト・シーンの両方を作成するか、視点を作成しておかなければなりません。さらに、ビジュアル報告書へのジャンプを作成する前に、ビジュアル報告書を作成する必要があります。

ビジュアル・プロジェクト内のオブジェクトにジャンプ・イベントを割り当て、イベントを定義するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択して、「イベント」ビューでジャンプを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「新しいロケーションへジャンプ」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「次へ」をクリックします。「新しい位置へジャンプ」アクション・パラメーター・ページが開きます。
5. ジャンプの宛先を現行ビジュアル・プロジェクト内にするのか、別のビジュアル・プロジェクトにするのかを指定します。「このビジュアル・プロジェクト」を選択すると、ジャンプの宛先は現在のプロジェクト内のシーンまたは視点に指定されます。ジャンプの宛先として別のビジュアル・プロジェクトを指定するには、「別のビジュアル・プロジェクト」を選択します。
6. 「このビジュアル・プロジェクト」を選択した場合、「シーン」および「視点」フィールドが使用可能になります。「シーン」リスト・ボックスから、宛先シーン名を選択します。「視点」リスト・ボックスから、視点を選択します。シーンに視点がない場合、デフォルトが使用されます。

7. 「別のビジュアル・プロジェクト」を選択した場合、「ビジュアル・プロジェクト」フィールドが使用可能になります。「ビジュアル・プロジェクト」フィールドで、宛先のビジュアル・プロジェクトの名前を指定します。省略符号ボタンをクリックして、リポジトリまたはファイルからダッシュボードを検索し、プロジェクトを開きます。「開く」ウィンドウが開きます。イベント・アクションでジャンプする先のビジュアル・プロジェクトまでナビゲートして選択し、「終了」をクリックします。「開く」ウィンドウが閉じます。
8. オプション: 選択したビジュアル・プロジェクトにパラメーターがある場合は、「パラメーターの検索」ボタンをクリックします。

注: イベントの発生時に設定する必要があるパラメーターがリストされます。

9. 各パラメーターの「値」セルに、それぞれのパラメーターの値を指定します。
10. 「開く場所」領域で、必要なオプションを選択します。
  - a. 現在のタブで別のビジュアル・プロジェクトを開くには、「同一タブ」を選択します。
  - b. QMF for Workstation の新規タブ、または QMF for WebSphere の新規ブラウザー・タブで別のビジュアル・プロジェクトを開くには、「新規タブ」を選択します。
  - c. QMF for Workstation の新規タブ、または QMF for WebSphere の新規ブラウザー・ウィンドウで別のビジュアル・プロジェクトを開くには、「新規ウィンドウ」を選択します。
11. 「終了」をクリックします。「新しいロケーションへジャンプ」イベント・アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。制御が「[objectname] 動作」ダイアログに戻ります。
12. 「[objectname] 動作」ダイアログから、新しい位置へのジャンプ・アクションに条件式を追加できます。複数の新しい位置へのジャンプ・アクションを、それぞれ固有の条件を指定して定義することができます。新しい位置へのジャンプが実行されたら、そのオブジェクトに定義されている後続のアクションは実行されません。
13. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」ボタンをクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

グローバル・パラメーターおよびシーン・パラメーターの値の設定:

グローバル・パラメーターおよびシーン・パラメーターの値を設定するには、「値の設定」アクションを使用します。

このタスクについて

イベントの発生時に、グローバル・パラメーターとシーン・パラメーターに新しい値を設定できます。新規値は、定数、データ値の関数式、または他のパラメーター(グローバル、シーン、またはイベント・パラメーター)です。使用するパラメーターを作成する必要があります。

イベントの発生時にパラメーター値を設定するには:

## 手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択して、「イベント」ビューでジャンプを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「値の設定」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「次へ」をクリックします。「値の設定アクションのパラメーター」ページが開きます。
5. 「パラメーター」フィールドをクリックして、選択可能なパラメーターのリストからパラメーター名を選択します。作成済みで、シーンで使用可能なパラメーターがすべてリストされます。
6. 対応する「値」フィールドをクリックし、リスト・ボックスから値を選択します。パラメーター値は、パラメーター・タイプと一致していなければなりません。
7. パラメーターを追加するには、「新しい項目を追加」ボタンをクリックします。新しいパラメーターの名前を「パラメーター」フィールドに入力します。パラメーターの値を「値」フィールドに指定します。
8. パラメーターを削除するには、パラメーターを選択して「削除」アイコンをクリックします。
9. 「終了」をクリックします。「値の設定」アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
10. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」ボタンをクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
11. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

### **ExternalEvent** イベント:

**ExternalEvent** イベントは、ユーザーが「組み込みシーンに送信」イベント・アクションを使用して、組み込みシーン・オブジェクトに何らかのイベントを送信したときに発生します。

**ExternalEvent** イベントは、シーン・オブジェクト割り当てることができます。

シーン・オブジェクトに **ExternalEvent** イベントを取り込めば、さまざまなイベント・アクションをトリガーできます。イベント・アクションについては、407 ページの『イベントの割り当てとイベント・アクションの設定』を参照してください。

### 「組み込みシーンヘナビゲート」イベント・アクションの追加:

組み込みシーン・オブジェクトに組み込まれたシーンまたはシーンの視点にユーザーを移動するには、「組み込みシーンヘナビゲート」イベント・アクションを使用します。

このタスクについて

組み込みシーンは、組み込みシーン・オブジェクトをユーザーが直接クリックすると自動的に追加されてセットアップされます。これはデフォルトの動作です。

以下のシナリオでは、「組み込みシーンヘナビゲート」イベント・アクションを手動で追加することもできます。

- 組み込みシーン・オブジェクトの組み込みシーンに入ることをトリガーするイベント (クリックなど) を別のオブジェクト (ボタンなど) に対して指定する場合。

例えば、ダッシュボード・シーンにボタン・オブジェクトを挿入して、ユーザーがそのボタンをクリックしたときに特定の組み込みシーン (同じダッシュボード・シーンに挿入されている) に入るように指定することができます。

- 組み込みシーン・オブジェクトの組み込みシーンに入ることをトリガーするイベントを (クリック・イベントに加えて) 追加する場合。
- 組み込みシーン・オブジェクトの組み込みシーンに入ることをトリガーするイベント (クリック・イベント以外) を指定する場合。

例えば、**DbClick** イベントによって、組み込みシーン・オブジェクトの組み込みシーンに入ることをトリガーすることができます。

「組み込みシーンヘナビゲート」イベント・アクションをオブジェクトに追加して定義するには、以下のようにします。

手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択します。「イベント」ビューで、アクションを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「組み込みシーンヘナビゲート」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「次へ」をクリックします。組み込みシーン・アクションのパラメーターを要求するウィンドウが開きます。
5. 使用可能な組み込みシーン・オブジェクトの「組み込みシーン」リストから、組み込みシーン・オブジェクトを選択します。現在のソース・シーンに挿入した組み込みシーン・オブジェクトがそれぞれリストされます。
6. 組み込みシーンに選択可能な視点の「[scenename] 上の視点」リストから視点をを選択します。組み込みシーンに作成した視点オブジェクトがそれぞれリストされます。シーンに視点がない場合は、デフォルトの視点がリストされます。
7. 「終了」をクリックします。「組み込みシーンヘナビゲート」イベント・アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
8. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」をクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

「前のページのロード」 イベント・アクションの追加:

「前のページのロード」 イベント・アクションを使用して、ユーザーを現行オブジェクトから、直前のシーンまたはシーンの視点に戻します。例えば、ユーザーがイベント (マウス・クリックなど) をオブジェクト (ボタンなど) で実行した結果、前のシーンに戻るように指定することができます。

このタスクについて

「前のページのロード」 イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようにします。

手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択して、「イベント」ビューでジャンプを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「前のページのロード」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「終了」をクリックします。「前のページのロード」アクションに必要な追加パラメーターはありません。「前のページのロード」アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
5. 「[オブジェクト名] 動作ウィンドウで「適用」をクリックして、イベントに追加されたアクションをすべて適用します。「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

「SQL ステートメントの実行」 イベント・アクションの追加:

「SQL ステートメントの実行」 アクションを使用して、指定したイベントの発生後に SQL ステートメントを実行します。

このタスクについて

「SQL ステートメントの実行」 イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようにします。

手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択します。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。  
  
「イベント」ビューで、「SQL ステートメントの実行」アクションをトリガーするイベントをダブルクリックします。
2. 「追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「SQL ステートメントの実行」を選択し、「次へ」をクリックします。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「SQL ステートメント」フィールドに SQL ステートメントを入力します。

SQL ステートメントにはパラメーターを入れることができます。グローバルまたはシーン・パラメーターを SQL ステートメントに組み込む場合は、式をプロパティ値を入力する場合と同様、SQL ステートメントを式として入力する必要があります。例えば、以下のステートメントを実行するとします。

```
Update MyTable Set Shipped = 1
Where CustomerID = [value of g_nCustID global variable]
```

この場合「SQL ステートメント」フィールドに次のテキストを入力します。

```
= "Update MyTable Set Shipped = 1 Where CustomerID = " + g_nCustID
```

5. オプション: ユーザーに表示されるシーンの内容に SQL ステートメントが影響を与える場合は、必ず「完了時に表示を最新表示にする」チェック・ボックスを選択してください。
6. オプション: SQL ステートメントの実行が正常に行われたか失敗したかに関するメッセージを表示するには、「操作の結果を示すメッセージ・ボックスを表示する」を選択します。

操作の結果を示すメッセージ・ボックスを表示することに決めた場合、表示するメッセージのテキストを「成功」フィールドと「失敗」フィールドの両方に入力します。

注: 成功または失敗を示すメッセージ・テキストの一部としてシステム出力メッセージを含めるには、\$ (1) を使用します。

7. ローカルまたはグローバル・パラメーターのどちらかに、実行された SQL ステートメントの結果を保存するには、「指定された結果パラメーターに成功か失敗か (および戻り値) を保存する」を選択します。

このチェック・ボックスを選択すると、「結果パラメーター」リストが使用可能になります。

ダッシュボードに作成されたローカル・パラメーターおよびグローバル・パラメーターは、「結果パラメーター」ドロップダウン・リストにリストされます。

結果情報を保管するために使用するローカル・パラメーターまたはグローバル・パラメーターを選択します。結果は以下のように格納されます。

- SQL ステートメントが 1 つ以上の値を戻す場合、選択されたグローバルまたはシーン・パラメーターに入るのは、最初の行の最初の列です。例えば、ステートメント `select count(*) from MyTable` は、選択したパラメーターにカウントを入れます。ステートメント `select A, B, C from MyTable` は、選択したパラメーターに最初の行の A の値を入れます。
- 結果を出さないステートメントの場合、選択したパラメーターに入るのは、ステートメントの実行が成功したか失敗したかです。例えば、ステートメント `update MyTable Set A = 3 (CustomerID = 1)` の結果は、ステートメントが正常に実行された場合は `true` または `1` になり、ステートメントが実行に失敗した場合は `false` または `0` になります。このパラメーターを最初に作成

したとき、そのデータ・タイプは Boolean になります。グローバル・パラメーターの名前とデータ・タイプは変更可能です。

8. 「終了」をクリックします。「SQL ステートメントの実行」アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
9. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」をクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

#### タスクの結果

「SQL ステートメントの実行」 イベント・アクションをオブジェクトに追加しました。

「プロシージャー・コマンドの実行」 イベント・アクションの追加:

「プロシージャーの実行」アクションを使用して、指定したイベントの発生後にプロシージャー・コマンドを実行します。

#### このタスクについて

「プロシージャーの実行」 イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようにします。

#### 手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択します。「イベント」ビューで、アクションを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「プロシージャーの実行」を選択し、「次へ」をクリックして、「プロシージャーを実行するアクションのパラメーター」ページを開きます。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「リポジトリから」フィールドを使用して、プロシージャー・ステートメント名と場所を入力します。
5. 「プロシージャーの結果ウィンドウを非表示」チェック・ボックスを選択すると、プロシージャー・ステートメントの実行後に結果ウィンドウが非表示になります。
6. 「完了時に表示を最新表示する」チェック・ボックスを選択すると、プロシージャー・ステートメントの実行後にダッシュボード表示が最新表示されます。
7. 「操作の結果を示すメッセージ・ボックスを表示する」チェック・ボックスを選択すると、プロシージャー・ステートメントの実行が正常に行われたか、失敗したかが表示されます。チェック・ボックスにチェック・マークを付ける場合、以下のようにします。



- 「成功」フィールドに、正常に実行された場合に表示するテキストを入力します。メッセージで \$ (1) を使用して、システム出力メッセージを正常終了時のメッセージ・テキストの一部として含めることができます。
  - 「失敗」フィールドに、実行が失敗した場合に表示するテキストを入力します。メッセージ・テキストで \$(1) を使用して、システム出力メッセージを失敗時のメッセージの一部として含めることができます。
8. ローカルまたはグローバル・パラメーターのどちらかに、実行されたプロシージャ・ステートメントの結果を保存するには、「指定された結果パラメーターに成功か失敗か (および戻り値) を保存する」チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。このチェック・ボックスが選択されると、「結果パラメーター」リストが使用可能になります。ダッシュボードに作成されたローカル・パラメーターおよびグローバル・パラメーターは、「結果パラメーター」ドロップダウン・リストにリストされます。結果情報を保管するために使用するローカル・パラメーターまたはグローバル・パラメーターを選択します。結果は以下のように格納されます。
- プロシージャ・ステートメントが 1 つ以上の値を戻す場合、選択されたグローバルまたはシーン・パラメーターに入るのは、最初の行の最初の列です。例えば、ステートメント `select count(*) from MyTable` は、選択したパラメーターにカウントを入れます。ステートメント `select A, B, C from MyTable` は、選択したパラメーターに最初の行の A の値を入れます。
  - 結果を出さないプロシージャ・ステートメントの場合、選択したパラメーターに入るのは、ステートメントの実行が成功したか失敗したかです。例えば、ステートメント `update MyTable Set A = 3 (CustomerID = 1)` の結果は、ステートメントが正常に実行された場合は `true` または `1` になり、ステートメントが実行に失敗した場合は `false` または `0` になります。このパラメーターを最初に作成したとき、そのデータ・タイプは `Boolean` になります。グローバル・パラメーターの名前とデータ・タイプは変更可能です。
9. 「終了」をクリックします。「プロシージャの実行」アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
10. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」をクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

「JavaScript の実行」イベント・アクションの追加:

「JavaScript の実行」アクションを使用して、指定したイベントの発生後に JavaScript を実行します。例えば、JavaScript を実行して、新規ウィンドウを開いたり、システム印刷ダイアログを開始したりすることができます。

このタスクについて

「JavaScript の実行」イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようにします。

手順

1. 「イベント」ビューの編集機能ウィンドウでオブジェクトを選択し、「JavaScript の実行」アクションをトリガーするイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。

2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ダイアログが開きます。
3. アクション・ツリーで「**JavaScript** の実行」を選択し、「次へ」をクリックして、「JavaScript アクション・パラメーターの実行」ページを開きます。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「**JavaScript**」フィールドに JavaScript コマンドを入力し、「終了」をクリックします。

JavaScript コマンド・アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。

5. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」をクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
6. 「**OK**」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

#### タスクの結果

「JavaScript の実行」イベント・アクションをオブジェクトに追加しました。

「シーンの印刷」イベント・アクションの追加:

印刷イベント・アクションを追加するには、「シーンの印刷」を使用します。例えば、特定のシーンで「ボタン」オブジェクトをユーザーがクリックするタイミングを設定することができ、その結果として、表示される値が印刷されます。

#### このタスクについて

「シーンの印刷」イベント・アクションをオブジェクトに取り込むには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「イベント」ビューのエディター・ウィンドウでオブジェクトを選択し、「シーンの印刷」アクションをトリガーするイベントをダブルクリックします。  
「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ダイアログが開きます。
3. アクション・ツリーで「シーンの印刷」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「次へ」をクリックします。

「「シーンの印刷」アクションのパラメーター」ページが開きます。

5. 「終了」をクリックします。

「シーンの印刷」アクションが追加され、「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。

6. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」をクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
7. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

「E メール送信」イベント・アクションの追加:

割り当てられたイベントが発生した後でシーンを E メール宛先に送信するには、「E メール送信」イベント・アクションを使用します。例えば、ユーザーが特定のシーンで「プレビュー」をクリックしたときに、このアクションを取り込みます。その結果、シーンが E メール宛先に送信されます。

このタスクについて

「E メール送信」イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようになります。

手順

1. 「イベント」ビューのエディター・ウィンドウでオブジェクトを選択します。トリガーするイベントをダブルクリックします。
2. 「[objectname] 動作」ウィンドウで「追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「E メール送信」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「次へ」をクリックします。「E メール送信」パラメーターを要求するダイアログが開きます。
5. 「宛先」フィールドに、Eメールの送信先アドレスを指定します。
6. 「Cc」フィールドに、Eメールの写しの送信先アドレスを指定します。
7. 「件名」フィールドに、Eメールの件名を指定します。
8. Eメールの本文テキストを「メッセージ」フィールドに入力します。
9. Eメールの送信側のアドレスを「送信元」フィールドに指定します。
10. SMTPサーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP設定」をクリックします。「SMTP設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。
  - a. 事前定義されたSMTPサーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストから必要なサーバーを選択するか、「サーバーの追加」をクリックして作成します。
  - b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTPサーバーに認証が必要な場合は、「SMTP認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張SMTP設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamailでサポートされる必要なキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。

「OK」をクリックして、「SMTP設定」ウィンドウを閉じます。

11. E メールに添付ファイルを組み込むには、送信する項目のファイル・パスおよびファイル名を指定するローカル・パラメーターまたはグローバル・パラメーターを作成します。
12. ファイル・パスをグローバル・パラメーターから取得するのかローカル・パラメーターから取得するのかを選択し、使用するパラメーターを「パラメーターからファイル・パスを取得」ドロップダウン・リストで選びます。

注: 有効なパラメーター・タイプは「ファイル・パス」、「リテラル」、および「テキスト」です。

13. 「終了」をクリックします。「Eメールの送信」アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
14. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」ボタンをクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
15. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

「組み込みシーンへのイベントの送信」アクションの追加:

組み込みシーンにおいて特定イベントを開始するには、「組み込みシーンへのイベントの送信」アクションを使用します。

このタスクについて

「組み込みシーンへのイベントの送信」アクションは、指定された ID でイベントを生成し、そのイベントを、指定された組み込みシーンに送信します。

「組み込みシーンへのイベントの送信」イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようになります。

手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択します。「イベント」ビューで、アクションを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。「追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
2. アクション・ツリーで「組み込みシーンへのイベントの送信」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

3. 「次へ」をクリックします。「組み込みシーンへのイベントの送信」アクション・パラメーターを要求するダイアログが開きます。
4. 「ターゲット・シーン」フィールドで 1 つ以上の組み込みシーンを指定します。
5. オプション: 「結果オプション」セクションで、ターゲット・シーンで外部イベント ID として使用されるグローバル・パラメーターを指定します。

新規パラメーターを追加するには、「新規パラメーターの追加」をクリックします。

注: デフォルトでは **ExternalEventID** グローバル・パラメーターが使用されません。

6. 使用するパラメーターを「結果パラメーター」ドロップダウン・リストから選択します。
7. 固有のイベント ID を「イベント ID」フィールドで指定し、「終了」をクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
8. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」ボタンをクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
9. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。
10. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、ターゲット組み込みシーンに接続されているシーンを選択します。
11. 「イベント」ビューで **ExternalEvent** 項目を選択してダブルクリックします。

「[objectname] 動作」ウィンドウでイベント・アクションをセットアップします。

次の例を検討します。

- **Scene1** および **Scene2** というシーンがあるとします。 **Scene1** には **Button1** および **Button2** というボタンがあります。
- これらのボタンにアクションを追加します。 **Button1** のアクションは **ExportToPDF** です。 **Button2** のアクションは **SendEmail** です。
- 「イベント ID」の値を設定し、そこに任意のストリングを入力します。例えば、「**Button1** のイベント ID は *Btn1ExportToPDF*、**Button2** のイベント ID は *Btn2SendEmail*」と入力します。
- 別の **ExternalEvent** アクションを **Scene2** に追加し、**ExternalEventID** パラメーターの条件を以下のように設定します。

アクション	条件
ExportToPDF	=ExternalEventID ='Btn1ExportToPDF'
SendEmail	=ExternalEventID=' Btn2SendEmail '

これらのアクションは、**Scene2** の内容に適用されます。

「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

「シェル・コマンドの実行」イベント・アクションの追加:

指定したイベントが発生した後にシェル・コマンドを実行するには、「シェル・コマンドの実行」アクションを使用します。「シェル・コマンドの実行」イベント・アクションにより、「スタート」メニューからオペレーティング・システムの「ファイル名を指定して実行」コマンドを使用して実行する場合と同じように、シェル・コマンドを実行できます。

このタスクについて

例えば、シェル・コマンドを実行して「メモ帳」や E メール・プログラムを開くことができます。

「シェル・コマンドの実行」イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようにします。

## 手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択して、「イベント」ビューでジャンプを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「シェル・コマンドの実行」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「次へ」をクリックします。「「シェル・コマンドの実行」アクションのパラメーター」ページが開きます。
5. 「コマンド」ボックスにコマンドを入力するか、「参照」をクリックして参照することによりコマンドが含まれるファイルを選択します。

注: 式を使用して、コマンドを指定できます。例えば、`=%SystemRoot%\notepad.exe " + Var1` と入力してメモ帳でファイルを開きます。これは、Var1 パラメーターに保管されている値へのパスです。

6. 「終了」をクリックします。「シェル・コマンドの実行」アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
7. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」ボタンをクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
8. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

「データの變更」イベント・アクションの追加:

「データの變更」イベント・アクションを使用して、データベース内でデータを挿入、更新、または削除します。このイベント・アクションにより、SQL ステートメントを手動で書かずにデータを変更できます。

このタスクについて

「データの變更」イベント・アクションを追加するには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択します。「イベント」ビューで、「データの變更」イベント・アクションをトリガーするイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」をクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「データの變更」を選択し、「次へ」をクリックして、「データの變更アクション・パラメーター」ページを開きます。
4. 「操作タイプ」領域で、操作のタイプを選択します。
  - 「挿入」: 行として追加するデータを指定します。
  - 「更新」: 指定された条件で更新するデータを指定します。
  - 「削除」: 指定された条件で行として削除するデータを指定します。

5. 「表の選択」ツリーで、データを変更する表を選択します。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」の「接続」に表示されているデータ・ソースとは異なるデータ・ソースを使用するには、「すべてのデータ・ソース」を展開します。表の選択元のデータ・ソースが自動的に「接続」に追加されます。
  - 既存の接続からデータ・ソースを使用するには、「接続」に既に表示されている接続のいずれかを展開します。
6. 「データの変更」アクションの実行後にシーンを自動的に更新する場合、「完了時に表示を最新表示にする」チェック・ボックスを選択します。
7. 「次へ」をクリックして、選択された操作タイプに応じてアクション・パラメーターを設定します。
  - 「挿入」を選択した場合は以下のようになります。
    - a. ウィザードの「挿入操作の値パラメーター」ページで、データの挿入先となる列を選択します。
    - b. 正確なデータまたは計算式を使用して、列の値を指定する式を入力します。
    - c. ページの下側の「SQL ステートメントと値のプレビュー」は、指定されたオブジェクト・プロパティまたは式の結果と一緒に SQL ステートメントを表示する場合に選択し、「SQL ステートメントと式のプレビュー」は、入力された式と一緒に SQL ステートメントを表示する場合に選択します。
  - 「更新」を選択した場合は以下のようになります。
    - a. ウィザードの「更新操作の値パラメーター」ページで、データを更新する列を選択します。
    - b. 正確なデータまたは計算式を使用して、列の値を指定する式を入力します。
    - c. ページの下側の「SQL ステートメントと値のプレビュー」は、指定されたオブジェクト・プロパティまたは式の結果と一緒に SQL ステートメントを表示する場合に選択し、「SQL ステートメントと式のプレビュー」は、入力された式と一緒に SQL ステートメントを表示する場合に選択します。「次へ」をクリックします。
    - d. 「更新操作のための条件パラメーター」ページで、「行条件の追加」をクリックして新しい条件を入力します。
    - e. 「式」列に、リストから項目を選択するか、式を手動で入力します。
    - f. 「操作」列で、演算子を入力するか、リストから演算子を選択します。
    - g. 「条件」列で、値を手動でまたは式デザイナーを使用して指定します。
    - h. 「かつ」コネクターを使用するには 1 つの列にある別個の行で条件を入力し、「または」コネクターを使用するには 1 つの行にある別個の列で条件を入力します。
    - i. ページの下側の「SQL ステートメントと値のプレビュー」は、指定されたオブジェクト・プロパティまたは式の結果と一緒に SQL ステートメントを表示する場合に選択し、「SQL ステートメントと式のプレビュー」は、入力された式と一緒に SQL ステートメントを表示する場合に選択します。

- 「削除」を選択した場合は以下のようにします。
  - a. 「削除操作のための条件パラメーター」ページで、「行条件の追加」をクリックして新しい条件を入力します。
  - b. 「式」列に、リストから項目を選択するか、式を手動で入力します。
  - c. 「操作」列で、演算子を入力するか、リストから演算子を選択します。
  - d. 「条件」列で、値を手動でまたは式デザイナーを使用して指定します。
  - e. 「かつ」コネクターを使用するには 1 つの列にある別個の行で条件を入力し、「または」コネクターを使用するには 1 つの行にある別個の列で条件を入力します。
  - f. ページの下側の「SQL ステートメントと値のプレビュー」は、指定されたオブジェクト・プロパティまたは式の結果と一緒に SQL ステートメントを表示する場合に選択し、「SQL ステートメントと式のプレビュー」は、入力された式と一緒に SQL ステートメントを表示する場合に選択します。
- 8. 「終了」をクリックして「新規アクションの追加」ウィザードを閉じます。
- 9. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

例

表 PRODUCTIONBYREGION (rsbi:/Data Sources/Sample Data Source/Database/Tables/DEMO/PRODUCTIONBYREGION) を操作します。  
 「PRODUCT」列が「PLYWOOD」で「QTY」列の値が 600 より小さい場合、または「QTY」列の値が 1000 より大きい場合に行を削除するイベント・アクションを追加します。以下の表に示すような削除操作の条件パラメーターを指定します。

表 40. 削除操作の条件パラメーター

式	演算	条件	または	条件
PRODUCT	=	PLYWOOD	=	
QTY			>	1000
QTY	<	600	=	

```
DELETE FROM DEMO.PRODUCTIONBYREGION WHERE (PRODUCT ='PLYWOOD')
```

```
AND (QTY <600) OR (QTY >1000)
```

「メッセージの表示」イベント・アクションの追加:

「メッセージの表示」イベント・アクションを使用すれば、メッセージを表示し、ユーザー応答を保管し、そのユーザー応答を他のアクションで使用できます。

このタスクについて

「メッセージの表示」イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようにします。



## 手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択して、「イベント」ビューでジャンプを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ダイアログが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ダイアログが開きます。
3. アクション・ツリーで「メッセージの表示」を選択し、「次へ」をクリックします。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

「「メッセージの表示」アクションのパラメーター」ページが開きます。

4. 「メッセージのテキスト」フィールドに、発行するメッセージのテキストを入力します。
5. 「表示タイプ」ラジオ・ボタンを使用して、メッセージが発行される場所を指定します。標準メッセージ・ボックスにメッセージを表示するには、「メッセージ・ボックス」を選択します。メッセージを QMF for Workstation の「出力」ビューに表示するには、「「出力」ビュー (Output view)」を選択します。
6. 「ロギング・レベル」リストから、メッセージの重大度レベルを選択します。
7. 追加のメッセージ・ボックス・パラメーターを指定する場合は、「次へ」をクリックします。それ以外の場合は、ステップ 10 に進みます。
8. 「メッセージ・ボックス」領域で以下のパラメーターを指定します。
  - a. 「タイトル」フィールドに、メッセージ・ボックスに使用するタイトルを入力します。このフィールドをダブルクリックして、「式デザイナー」を開きます。
  - b. 「ボタン」リストで、メッセージ・ボックスに追加するボタンの組み合わせを選択します。選択したボタンの索引はパラメーターに保管できます。

ヒント: ボタンの索引は 1 から始まります。

ヒント: ユーザーによってメッセージ・ボックスが閉じられると、最後のボタンの索引を受け取ります。

- c. 「アイコン」リストで、メッセージ・ボックスに追加するアイコンを選択します。
9. ユーザーがクリックしたボタンのボタン索引を保管する場合は、以下の手順を実行します。
    - a. 既存のパラメーターに索引を保管するには、「結果オプション」域にある「結果をパラメーターに保管」チェック・ボックスを選択します。
    - b. 「結果パラメーター」リストで、使用するパラメーターを選択します。
    - c. パラメーターを追加するには、「新規パラメーターの追加」ボタンをクリックします。
  10. 「終了」をクリックします。「メッセージの表示」アクションが追加されず。「新規アクションの追加」ダイアログが閉じます。

11. 「[オブジェクト名] 動作」ダイアログで「適用」をクリックして、イベントについて追加されたアクションをすべて適用します。
12. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ダイアログを閉じます。

例

「はい」/「いいえ」/「取消し」のボタンの組み合わせを使用してメッセージを作成する場合は、以下の索引を受け取ることができます。

表 41. ボタンとその索引。

クリックしたボタン	受け取る索引
はい	1
いいえ	2
キャンセル	3
ユーザーがメッセージ・ボックスを閉じる	3

「Excel にエクスポート」 イベント・アクションの追加:

「Excel にエクスポート」 アクションを使用して、指定のイベントを Excel にエクスポートします。

始める前に

「Excel にエクスポート」 機能をサポートするために必要な Excel のバージョンについては、「インストールおよび管理」ガイドでシステム要件を参照してください。

このタスクについて

「Excel にエクスポート」 イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようにします。

手順

1. 「イベント」ビューで、エディター・ウィンドウ内のオブジェクトを選択し、トリガーするためのイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「Excel にエクスポート」を選択し、「次へ」をクリックして、「Excel にエクスポートするアクションのパラメーター」ページを開きます。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「データ・テンプレート」フィールドにソース・コンポーネント名を指定して、省略符号 (...) をクリックします。

「データ・テンプレートの選択」ウィンドウが開きます。

使用するデータ・ソース・テンプレートを選択し、「OK」をクリックしてウィンドウを閉じます。

システムによって、最上位のデータ・レベルが入力され、「データのエキスポート」テキスト・ブロックにプロパティと列エントリが取り込まれます。

5. ツールバーの「上へ移動」アイコンおよび「下へ移動」アイコンを使用して、リスト内の項目を新しい位置に移動します。
6. エクスポート列に定義されている任意の項目を削除できます。「エクスポート列」リスト・ボックスから項目を選択します。「項目を削除」アイコンをクリックします。項目が削除されます。
7. 「エクスポート・タイプ」ラジオ・グループで、以下の 3 つのラジオ・ボタンのうち 1 つを選択します。
  - 開く: これを選択すると、「別名保存」ダイアログが開きます。「ファイル名」フィールドにファイルの名前を入力して保存します。
  - 一時ファイルに保存: これを選択すると、生成されたファイルは一時ディレクトリに保管されます。このファイルへのパスは、グローバル・パラメーターまたはローカル・パラメーターに記録されます。パラメーターはウィンドウの下部で指定します。
    - 「結果パラメーター」ドロップダウン・リストから「グローバル・パラメーター」または「ローカル・パラメーター」を選択します。
    - 「新規パラメーターの追加」をクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが開きます。
    - 「名前」フィールドと「説明」フィールドにパラメーターの名前と説明を入力します。
    - パラメーター・タイプを選択します。有効なタイプは、「ファイル・パス」、「リテラル」、および「テキスト」です。
    - 「デフォルト値」チェック・ボックスを選択して、テキスト・フィールドにファイルの絶対パスを指定します。例えば、  
`C:¥DOCUME~1¥<user>¥LOCALS~1¥Temp¥<software_product_name>¥reporter-  
<user>¥pdf¥` などです。
  - ファイルに保存: これを選択すると、イベント発生時に、生成されたファイルが指定のルート・ディレクトリに自動的に保管されます。
8. 「ファイルに保存」チェック・ボックスを選択した場合は、「設定」ウィンドウの「サーバー・サイド・ファイル・システム」ページの「ルート出力ディレクトリ」フィールドに指定できるディレクトリに応じて、いくつかの方法でエクスポート・パスを作成できます。
  - 出力ルート・ディレクトリを指定した場合、ファイルのエクスポート・ディレクトリは、ルート出力ディレクトリと、「パス」フィールドに入力されたパスの組み合わせになります。
  - QMF for Workstation では、出力ルート・ディレクトリが指定されていない場合、ファイルのエクスポート・ディレクトリは、アプリケーションの作業ディレクトリと、「パス」フィールドに入力されたパスの組み合わせになります。

- QMF for WebSphere では、出力ルート・ディレクトリーが指定されていない場合、ファイルのエクスポート・ディレクトリーは、一時ディレクトリーとファイル名の組み合わせになります (入力されたパスは無視されます)。
9. 「形式タイプ」リストで、エクスポートしたデータを保管するときの Excel ファイル形式を選択します。使用可能なオプションは以下のとおりです。
    - **XLS** Microsoft Excel 97-2003 (\*.xls)
    - **XLSX** Microsoft Excel 2007 (\*.xlsx)
  10. 選択可能なダッシュボード・コンポーネントをフィルターに掛けるには、「フィルター・テキストの入力」フィールドでストリングを指定します。指定されたストリングが名前に含まれているコンポーネントのみが、「データのエクスポート」ツリーに表示されます。「一時ファイルに保存」または「ファイルに保存」を選択した場合は、「結果のオプション」セクションが活動状態になります。
  11. 以前にディレクトリー・パラメーターを指定していない場合は、「結果パラメーター」ドロップダウン・リストから「グローバル・パラメーター」または「ローカル・パラメーター」を選択して、「新規パラメーターの追加」ボタンをクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが開きます。
  12. 必要なパラメーターを指定して、「終了」をクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが閉じて、「新規アクションの追加」ウィンドウに制御が戻ります。
  13. 「終了」をクリックします。「**Excel** にエクスポート」アクションが追加されます。「[objectname] 動作」ウィンドウが更新されます。
  14. 「**OK**」をクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが閉じます。

#### 関連タスク:

エクスポート・アクションで生成されるオブジェクトのディレクトリー・ロケーションの設定

さまざまな QMF アクションから生成されたオブジェクトがローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システム上の特定の場所にエクスポートされるように、QMF で設定を行うことができます。

「フォーカスの設定」イベント・アクションの追加:

特定のコントロール名パラメーターへのフォーカスを設定するには、「フォーカスの設定」イベント・アクションを使用します。例えば、「フォーカスの設定」イベント・アクションを組み込むと、ユーザーが選択を行ったときに、フォーカスが設定されなければならないパラメーターとしてコントロール名が使用されます。

このタスクについて

「フォーカスの設定」イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようにします。

#### 手順

1. 「イベント」ビューで、エディター・ウィンドウ内のオブジェクトを選択し、トリガーするためのイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。

2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「フォーカスの設定」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「次へ」をクリックします。「フォーカス設定アクションのパラメーター」ウィンドウが開きます。
5. 以下のいずれかの方法でコンポーネントのコントロール名を指定します。
  - 「コンポーネント」フィールドに名前を入力します。
  - 「現在のレベルから設定」をクリックして、コンポーネントを選択します。

「コンポーネントの設定」ダイアログが開きます。現行レベルのコンポーネントを選択し、「OK」をクリックして、「コンポーネントの設定」ダイアログを閉じます。

6. 「終了」をクリックします。「フォーカスの設定」アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
7. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」ボタンをクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
8. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

#### タスクの結果

「フォーカスの設定」 イベント・アクションがオブジェクトに追加されました。

「シーンの再ロード」 イベント・アクションの追加:

翻訳テーブル言語を選択した後でシーンを再ロードするには、「シーンの再ロード」 イベント・アクションを使用します。例えばユーザーは、特定のシーンの「翻訳テーブル」言語を選択し、ユーザーが別のシーンにナビゲートしたときに選択済み言語を反映させることができます。

#### このタスクについて

「シーンの再ロード」 イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようになります。

#### 手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択して、「イベント」ビューでジャンプを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「シーンの再ロード」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「終了」をクリックします。「シーンの再ロード」アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
5. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」ボタンをクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
6. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

「セッションの終了」イベント・アクションの追加:

「セッションの終了」イベント・アクションを使用して、現行セッションを終了してアプリケーションを閉じます。

このタスクについて

「セッションの終了」イベント・アクションをビジュアル・ダッシュボードに追加することにより、アプリケーションのユーザー・インターフェースにアクセスすることなく、プロジェクトからアプリケーションを閉じることができます。これは、組み込みウィンドウからビジュアル・ダッシュボードにアクセスしているときに役立ちます。

「セッションの終了」イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようになります。

手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択して、「イベント」ビューでジャンプを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「セッションの終了」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「終了」をクリックします。「セッションの終了」アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
5. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」ボタンをクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
6. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

「PDF にエクスポート」イベント・アクションの追加:

「PDF にエクスポート」イベント・アクションを使用して、ビジュアル・ダッシュボードの特定のコンポーネントを PDF ファイルにエクスポートします。

このタスクについて

「PDF にエクスポート」イベント・アクションを使用して、PDF ファイルにエクスポートするビジュアル・ダッシュボードの特定のコンポーネントを選択し、不要なものや余分なものは除外することができます。これは、印刷形式において不要なスペースを占める、見出しなどの繰り返し発生するグラフィカル・オブジェクトがビジュアル・ダッシュボードに含まれている場合に便利です。

制約事項: HTML5 モードでは、このアクションを使用して Google マップとマップ・オブジェクトのコンテンツをエクスポートすることはできません。

「PDF にエクスポート」 イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようにします。

#### 手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択して、「イベント」ビューでジャンプを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「PDF にエクスポート」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「次へ」をクリックします。「PDF にエクスポート」固有のウィンドウが開きます。
5. 「エクスポート・タイプ」ラジオ・グループで、以下の 3 つのラジオ・ボタンのうち 1 つを選択します。
  - 開く: これを選択すると、「別名保存」ダイアログが開きます。「ファイル名」フィールドにファイルの名前を入力して保存します。
  - 一時ファイルに保存: これを選択すると、生成されたファイルは一時ディレクトリに保管されます。このファイルへのパスは、グローバル・パラメーターまたはローカル・パラメーターに記録されます。パラメーターはウィンドウの下部で指定します。
    - 「結果パラメーター」ドロップダウン・リストから「グローバル・パラメーター」または「ローカル・パラメーター」を選択します。
    - 「新規パラメーターの追加」をクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが開きます。
    - 「名前」フィールドと「説明」フィールドにパラメーターの名前と説明を入力します。
    - パラメーター・タイプを選択します。有効なタイプは、「ファイル・パス」、「リテラル」、および「テキスト」です。
    - 「デフォルト値」チェック・ボックスを選択して、テキスト・フィールドにファイルの絶対パスを指定します。例えば、  
C:\DOCUMENTS~1\<user>\LOCALS~1\Temp\<software\_product\_name>\reporter-<user>.pdf などです。
  - ファイルに保存: これを選択すると、イベント発生時に、生成されたファイルが指定のルート・ディレクトリに自動的に保管されます。
6. 「ファイルに保存」チェック・ボックスを選択した場合は、「設定」ウィンドウの「サーバー・サイド・ファイル・システム」ページの「ルート出力ディレクトリ」フィールドに指定できるディレクトリに応じて、いくつかの方法でエクスポート・パスを作成できます。

- 出力ルート・ディレクトリーを指定した場合、ファイルのエクスポート・ディレクトリーは、ルート出力ディレクトリーと、「パス」フィールドに入力されたパスの組み合わせになります。
  - QMF for Workstation では、出力ルート・ディレクトリーが指定されていない場合、ファイルのエクスポート・ディレクトリーは、アプリケーションの作業ディレクトリーと、「パス」フィールドに入力されたパスの組み合わせになります。
  - QMF for WebSphere では、出力ルート・ディレクトリーが指定されていない場合、ファイルのエクスポート・ディレクトリーは、一時ディレクトリーとファイル名の組み合わせになります。入力したパスは無視されます。
7. 選択可能なダッシュボード・コンポーネントをフィルターに掛けるには、「フィルター・テキストの入力」フィールドでストリングを指定します。指定されたストリングが名前に含まれているコンポーネントのみが、「データのエクスポート」ツリーに表示されます。「一時ファイルに保存」または「ファイルに保存」を選択した場合は、「結果のオプション」セクションが活動状態になります。
  8. 以前にディレクトリー・パラメーターを指定していない場合は、「結果パラメーター」ドロップダウン・リストから「グローバル・パラメーター」または「ローカル・パラメーター」を選択して、「新規パラメーターの追加」ボタンをクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが開きます。
  9. 必要なパラメーターを指定して、「終了」をクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが閉じて、「新規アクションの追加」ウィンドウに制御が戻ります。
  10. 使用するパラメーターを「結果パラメーター」ドロップダウン・リストから選択し、「OK」をクリックします。「新規アクションの追加」ダイアログが閉じます。
  11. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」をクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
  12. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

#### 関連タスク:

エクスポート・アクションで生成されるオブジェクトのディレクトリー・ロケーションの設定

さまざまな QMF アクションから生成されたオブジェクトがローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システム上の特定の場所にエクスポートされるように、QMF で設定を行うことができます。

「ファイルの作成」イベント・アクションの追加:

「ファイルの作成」を使用すれば、ビジュアル・プロジェクトの実行中に特定のコンテンツを作成し、そのコンテンツをさまざまな目的 (例えば、メールへの送信など) に使用できます。

このタスクについて

「ファイルの作成」イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようになります。



## 手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択して、「イベント」ビューでジャンプを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「ファイルの作成」を選択し、「次へ」をクリックして「ファイルの作成」固有のウィンドウを開きます。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「出力タイプ」ラジオ・グループで、3 つあるラジオ・ボタンのいずれかを選択します。
  - 開く: これを選択すると、「別名保存」ダイアログが開きます。「ファイル名」フィールドにファイルの名前を入力して保存します。
  - 一時ファイルに保存: これを選択すると、生成されたファイルは一時ディレクトリーに保管されます。このファイルへのパスは、グローバル・パラメーターまたはローカル・パラメーターに記録されます。パラメーターはウィンドウの下部で指定します。
    - 「結果パラメーター」ドロップダウン・リストから「グローバル・パラメーター」または「ローカル・パラメーター」を選択します。
    - 「新規パラメーターの追加」をクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが開きます。
    - 「名前」フィールドと「説明」フィールドにパラメーターの名前と説明を入力します。
    - パラメーター・タイプを選択します。有効なタイプは、「ファイル・パス」、「リテラル」、および「テキスト」です。
  - ファイルに保存: これを選択すると、イベント発生時に、生成されたファイルが指定のルート・ディレクトリーに自動的に保管されます。
5. 「ファイルに保存」チェック・ボックスを選択した場合は、「設定」ウィンドウの「サーバー・サイド・ファイル・システム」ページの「ルート出力ディレクトリー」フィールドに指定できるディレクトリーに応じて、さまざまな方法でエクスポート・パスを作成できます。
  - 出力ルート・ディレクトリーを指定した場合、ファイルのエクスポート・ディレクトリーは、ルート出力ディレクトリーと、「名前」フィールドに入力されたパスの組み合わせになります。
  - QMF for Workstation では、出力ルート・ディレクトリーが指定されていない場合、ファイルのエクスポート・ディレクトリーは、アプリケーション作業ディレクトリーと、「名前」フィールドに入力されたパスの組み合わせになります。
  - QMF for WebSphere では、出力ルート・ディレクトリーが指定されていない場合、ファイルのエクスポート・ディレクトリーは、一時ディレクトリーとファイル名の組み合わせになります (入力されたパスは無視されます)。

6. 作成するファイルのファイル名を「名前」フィールドに指定します。このフィールドでは、ファイル拡張子も指定できます。ファイル拡張子を指定しないと、使用可能なファイル・タイプのリストからファイル・タイプが選択されません。

- **application/octet-stream** - \*.bin
- **image/bmp** - \*.bmp
- **image/png** - \*.png
- **text/calendar** - \*.ics
- **text/plain** - \*.txt

注: リストされたファイル拡張子とは異なるファイル拡張子でファイルを作成する場合は、ファイル拡張子を指定してください。

7. 「ファイルの内容」領域の「内容」フィールドに、作成するファイルの内容を入力します。例えば、「**TextBox1**」からテキストを追加する場合は、値 = **TextBox1.Text** を入力します。
8. 「内容のタイプ」リストからタイプを選択するか、または必要な任意の値をリストに入力します。内容の選択に使用できるタイプは以下のとおりです。
  - **application/octet-stream**: これは、当該ファイルを開くアプリケーションに関連付けられているバイナリー・ファイルを指定します。
  - **image/bmp**: これは、\*.bmp 形式のイメージを作成します。
  - **image/png**: これは、\*.png 形式のイメージを作成します。
  - **text/calendar**: これは、カレンダー情報を表示、交換、記録、およびスケジュールするための文書を iCalendar データ形式で作成します。
  - **text/plain**: これは、あまり処理を行わずにテキスト形式素材として読み取ることができる通常の順次ファイルを作成します。
9. 以前にディレクトリー・パラメーターを指定していない場合は、「結果パラメーター」ドロップダウン・リストから「グローバル・パラメーター」または「ローカル・パラメーター」を選択して、「新規パラメーターの追加」ボタンをクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが開きます。
10. 必要なパラメーターを指定して、「終了」をクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが閉じて、「新規アクションの追加」ウィンドウに制御が戻ります。
11. 使用するパラメーターを「結果パラメーター」ドロップダウン・リストから選択し、「**OK**」をクリックします。「新規アクションの追加」ダイアログが閉じます。
12. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」をクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
13. 「**OK**」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

「コンポーネントの最新表示」イベント・アクションの追加:

照会キャッシュを無効にしてビジュアル・ダッシュボード内のコンポーネントを最新表示するには、「コンポーネントの最新表示」イベント・アクションを使用します。このイベント・アクションでは、照会が再実行され、最新表示されたコンポーネントに結果が表示されます。

このタスクについて

「コンポーネントの最新表示」 イベント・アクションは、関連コンポーネントのみを照会するときに適しています。

「コンポーネントの最新表示」 イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようにします。

手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択し、ジャンプをトリガーするイベントを「イベント」ビューでダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「コンポーネントの最新表示」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「次へ」をクリックします。

「コンポーネントの最新表示」 イベント・アクションのパラメーターを要求するウィンドウが開きます。

5. 最新表示するターゲット・コンポーネントを 1 つ以上指定し、「終了」をクリックします。

「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。

6. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

タスクの結果

「コンポーネントの最新表示」 イベント・アクションが追加されました。

指定したイベント・アクションが実行されると、ターゲット・コンポーネントが最新表示されます。

「照会キャッシュの無効化」 イベント・アクションの追加:

結果セット・データのキャッシュが有効になっている場合に、照会キャッシュを無効化するには、「照会キャッシュの無効化」 イベント・アクションを使用します。

このタスクについて

ターゲット照会表を変更したことによって以前の結果が無効になり、関連するコンポーネントに無効になった結果が引き続き表示されているシナリオでは、このイベント・アクションの使用が適しています。「照会キャッシュの無効化」 イベント・アクションを実装することにより、再描画を実行したときに、関連するすべてのコンポーネントが描画されるようになります。この照会が再実行され、有効な結果がコンポーネントに表示されます。

「照会キャッシュの無効化」 イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のようにします。

## 手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択し、ジャンプをトリガーするイベントを「イベント」ビューでダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ダイアログが開きます。
3. アクション・ツリーで「照会キャッシュの無効化」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「次へ」をクリックします。

「照会キャッシュの無効化」イベント・アクションのパラメーターを要求するウィンドウが開きます。

5. 照会キャッシュを無効にするターゲット・コンポーネントを 1 つ以上指定し、「終了」をクリックします。

「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。

6. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

## タスクの結果

「照会キャッシュの無効化」イベント・アクションを追加しました。

定義したイベント・アクションが実行されると、ターゲット・コンポーネント内の照会キャッシュが無効化され、次に最新表示したときに、有効な結果がコンポーネントに表示されます。

「LOB の起動」イベント・アクションの追加:

ビジュアル・ダッシュボードのオブジェクトからラージ・オブジェクト (LOB) データを開くには、「LOB の起動」イベント・アクションを使用します。

## このタスクについて

LOB データは、データベース表に保管できるあらゆるタイプのバイナリー・データ (例えば、PDF ファイル、および .gif ファイルや .jpeg ファイルなどのイメージ・ファイルのコンテンツ) です。

実行時には、「LOB の起動」イベント・アクションによって、データベース表に保管されている LOB 値が読み取られ、その値に関連付けられているアクションが実行されます。開発者は、アプリケーションで適切なプログラムを起動し、データを表示するために、LOB データ・タイプ を指定する必要があります。

注: 「LOB の起動」イベント・アクションは、データ・テンプレートに含まれているオブジェクトにのみ適用できます。

「LOB の起動」イベント・アクションを追加するには、以下のステップを実行します。

## 手順

1. エディター・ウィンドウでオブジェクトを選択し、ジャンプをトリガーするイベントを「イベント」ビューでダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「**LOB** の起動」を選択します。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「次へ」をクリックします。「**LOB** の起動」イベント・アクションのパラメータを要求するウィンドウが開きます。
  - a. ドロップダウン・リストから「データ」を選択するか、または必要な式を入力します。

注: 式の結果は、LOB データが含まれている列の名前である必要があります。

ドロップダウン・リストから「データ」を選択するか、または必要な式を入力します。式の結果は、LOB データが含まれている列の名前である必要があります。

- b. データ・タイプを指定するため、必要な式を入力します。
5. 「終了」をクリックします。

「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。

6. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」をクリックして、イベント用に追加したすべてのアクションを適用します。
7. 「**OK**」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

## タスクの結果

「**LOB** の起動」イベント・アクションを追加しました。

定義したイベント・アクションが実行されると、ターゲット構成要素における照会キャッシュが無効化され、次の最新表示のときに、有効な結果が構成要素に表示されます。

このアクションを処理するオブジェクトに指定のイベントを適用することによって、ビジュアル・ダッシュボードの実行時に、LOB データを開くことができます。QMF for Workstation では、関連付けられているシステム・アプリケーションでデータが開きます。QMF for WebSphere では、Web ブラウザーでデータが開きます。

ビジュアル・ダッシュボードでモーダル・ダイアログを操作:

「ダイアログの表示」イベント・アクションおよび「ダイアログを閉じる」イベント・アクションを使用すれば、モーダル・ダイアログ用のテンプレートを設計してビジュアル・ダッシュボードに追加できます。

このタスクについて

モーダル・ダイアログを設計してビジュアル・ダッシュボードに追加するには、以下のアクションを実行する必要があります。

手順

1. ダイアログ・テンプレートを作成して、ダイアログのビジュアル・パラメーターを指定します。テンプレートを既存のテンプレートから選択したり、既存のテンプレートを編集したりすることもできます。
2. ダイアログに使用するシーンを作成します。
3. シーン・プロパティーでダイアログ・パラメーターとダイアログ・テンプレートを指定します。
4. コントロール、ローカル変数、およびイベント・ハンドラーをダイアログ・シーンに追加します。
5. 「ダイアログの表示」アクションをビジュアル・ダッシュボードのメイン・シーンに追加して、パラメーターおよび動作を指定します。
6. 「ダイアログを閉じる」アクションを追加して、パラメーターを指定します。

次のタスク

ビジュアル・ダッシュボードにモーダル・ダイアログを追加する方法について詳しくは、以下のトピックを参照してください。

ダイアログ・テンプレートの作成:

ビジュアル・ダッシュボードに追加するモーダル・ダイアログについては、ダイアログ・テンプレートを作成するか、または既存のダイアログ・テンプレートを選択する必要があります。

このタスクについて

ダイアログ・テンプレートを作成するには、以下のようになります。

手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、モーダル・ダイアログの追加先となるビジュアル・ダッシュボードの「グローバル」ノードにナビゲートします。
2. 「グローバル」ノードを展開し、「ダイアログ・テンプレート」にナビゲートします。このノードには、ビジュアル・ダッシュボードに使用できるテンプレートがすべて含まれます。事前設定されたテンプレートを選択することも、独自のテンプレートを作成することもできます。
  - a. 「ダイアログ・テンプレート」ノードを右クリックして、「ダイアログ・テンプレートの挿入」を選択し、ダイアログ・テンプレートを作成します。
  - b. 「ダイアログ・テンプレート」ノードで既存のダイアログ・テンプレートを右クリックし、「ダイアログ・テンプレートの編集」を選択して、既存のテンプレートを変更します。
3. 「名前」フィールドに、当該ダイアログ・テンプレートに使用する名前を入力します。

4. このテンプレートに使用できるプロパティを指定します。
  - コンテンツ埋め込み
  - 背景
  - ボーダー
  - シャドウ
  - シーン背景
  - タイトル背景
  - タイトル・フォント
  - タイトル・フレーム
  - ナイン・パッチ
5. プロパティを指定したら、「終了」をクリックしてウィンドウを閉じ、ダイアログ・テンプレートを保管します。

#### 次のタスク

ダイアログ・テンプレートのプロパティの指定について詳しくは、以下のトピックを参照してください。

ダイアログ・テンプレートの背景プロパティを指定:

ダイアログ・テンプレートのコンテンツに対して背景プロパティを指定すれば、そのビューをカスタマイズできます。

このタスクについて

ダイアログ・テンプレートの背景を指定するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「新規ダイアログ・テンプレート・ウィザード」の「プロパティ」リストから「背景」を選択します。
2. 「パターン」リストで、背景に適用するパターンのタイプを選択します。
3. 「色」フィールドで背景の色を指定します。省略符号 (...) ボタンを使用して、パレットから色を選択します。
4. 「透明度」スライダーを移動して、背景色の透明度を設定します。
5. 「対比色」フィールドでコンテンツ枠の対比色を指定します。省略符号 (...) ボタンを使用して、パレットから色を選択します。
6. 「透明度」スライダーを移動して、背景対比色の透明度を設定します。
7. グラジエント・パターンを選択した場合は、「グラジエント・タイプ」リストで、コンテンツに適用するグラジエントを選択します。
8. 背景としてイメージを設定する場合は、「イメージ・ソース」フィールドで省略符号 (...) ボタンをクリックし、背景として使用するイメージを指定します。
9. 背景としてイメージを使用する場合は、「イメージ・アンカー」リストでイメージの位置を指定し、「イメージのタイル表示」リストでタイル表示を指定できます。
10. 「終了」をクリックして、このダイアログ・テンプレートに対する変更を保管し、ダイアログ・テンプレート・ウィンドウを閉じます。

ダイアログ・テンプレートの枠プロパティを指定:

データ・テンプレートの枠プロパティを指定すれば、そのビューをカスタマイズできます。

このタスクについて

枠プロパティを指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「新規ダイアログ・テンプレート・ウィザード」の「プロパティ」リストから「枠」を選択します。
2. 「色」フィールドでウィンドウ枠の色を指定します。省略符号 (...) ボタンを使用して、パレットから色を選択します。
3. 「透明度」スライダーを移動して、枠の色の透明度を設定します。
4. 「幅」スライダーを移動するか、または特定の値を入力して、枠の幅を指定します。

ヒント: 選択可能な単位のリストから単位を選択すれば、枠の計測単位をカスタマイズできます。

5. 「上部枠範囲」領域ではウィンドウの上部枠の輪郭曲線を指定できます。「左上」スライダーを移動して、適用する輪郭曲線を設定します。
6. 右上の枠の輪郭曲線を別に指定する場合は、「右上枠範囲の設定」チェック・ボックスを選択して、「右上」スライダーを移動します。
7. 「下部枠範囲」領域ではウィンドウの下部枠の輪郭曲線を指定できます。「左下」スライダーを移動して、適用する輪郭曲線を設定します。
8. 右下の枠の輪郭曲線を別に指定する場合は、「右下枠範囲の設定」チェック・ボックスを選択して、「右下」スライダーを移動します。
9. 「終了」をクリックして、このダイアログ・テンプレートに対する変更を保管し、ダイアログ・テンプレート・ウィンドウを閉じます。

ダイアログ・テンプレートのコンテンツ埋め込みを指定:

ダイアログ・テンプレートにコンテンツ埋め込みを指定すれば、ダイアログ・コンテンツとダイアログ・ウィンドウ枠の間のオフセットをカスタマイズできます。

このタスクについて

コンテンツ埋め込みを指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「新規ダイアログ・テンプレート・ウィザード」の「プロパティ」リストから「コンテンツ」を選択します。
2. 「横の埋め込み」領域で「左」スライダーを移動して、コンテンツの左右の埋め込みを指定します。
3. 右の埋め込みを左の埋め込みとは別に指定する場合は、「右埋め込みの設定」チェック・ボックスを選択します。



ヒント: 選択可能な単位のリストから単位を選択すれば、埋め込みの計測単位をカスタマイズできます。

4. 「縦の埋め込み」領域で「上部」スライダーを移動して、コンテンツの上部埋め込みを指定します。
5. 下部の埋め込みを上部の埋め込みとは個別に指定する場合は、「下埋め込みの設定」チェック・ボックスを選択します。
6. 「終了」をクリックして、このダイアログ・テンプレートに対する変更を保管し、ダイアログ・テンプレート・ウィンドウを閉じます。

ダイアログ・テンプレートのナイン・パッチ・プロパティを指定:

正しいイメージ拡大縮小およびコンテンツ配置に関するサービス情報を含むナイン・パッチ・イメージを使用します。

このタスクについて

ナイン・パッチ・プロパティを指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「新規ダイアログ・テンプレート・ウィザード」の「プロパティ」リストから「ナイン・パッチ」を選択します。
2. 「ナイン・パッチ・イメージの使用」チェック・ボックスを選択します。
3. 「タイトル・ソース」フィールドでタイトル領域用のイメージへのパスを指定します。
  - a. 省略符号 (...) ボタンをクリックして、「ピクチャー・ソース」ダイアログを開きます。
  - b. 「ピクチャー・ソース」ウィンドウで以下のいずれかのオプションを選択します。
    - 「リンク」を選択して、イメージがローカル・ファイルまたはネットワーク・ファイルに含まれていることを指定します。「リンク」を選択し、イメージ・ファイルのパスを指定します。
    - 「組み込み」を選択して、イメージをビジュアル・プロジェクトに組み込むように指定します。このオプションが使用可能であるためには、イメージが選択対象のビジュアル・プロジェクトに使用可能になっていなければなりません。使用可能なイメージはすべて、「プロジェクト・エクスプローラー」の「グローバル」ノードの下にある「イメージ」フォルダーにリストされます。イメージを組み込むよう指定するには、「組み込み」を選択します。使用可能なイメージのリストからイメージを選択します。
4. 「コンテンツ・ソース」フィールドでコンテンツ領域用のイメージへのパスを指定します。
  - a. 省略符号 (...) ボタンをクリックして、「ピクチャー・ソース」ダイアログを開きます。
  - b. 「ピクチャー・ソース」ウィンドウで以下のいずれかのオプションを選択します。

- 「リンク」を選択して、イメージがローカル・ファイルまたはネットワーク・ファイルに含まれていることを指定します。「リンク」を選択し、イメージ・ファイルのパスを指定します。
  - 「組み込み」を選択して、イメージをビジュアル・プロジェクトに組み込むように指定します。このオプションが使用可能であるためには、イメージが選択対象のビジュアル・プロジェクトに使用可能になっていなければなりません。使用可能なイメージはすべて、「プロジェクト・エクスプローラー」の「グローバル」ノードの下にある「イメージ」フォルダーにリストされます。イメージを組み込むよう指定するには、「組み込み」を選択します。使用可能なイメージのリストからイメージを選択します。
5. 「終了」をクリックして、このダイアログ・テンプレートに対する変更を保管し、ダイアログ・テンプレート・ウィンドウを閉じます。

ダイアログ・テンプレートのシーン背景プロパティを指定:

ダイアログをホストするシーンに対して背景プロパティを指定できます。

このタスクについて

ダイアログ・シーンに対して背景プロパティを指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「新規ダイアログ・テンプレート・ウィザード」の「プロパティ」リストから「シーン背景」を選択します。
2. 『ダイアログ・テンプレートの背景プロパティを指定』トピックのステップ 2 から 10 に従います。

ダイアログ・テンプレートのシャドウ・プロパティを指定:

カスタマイズしたシャドウをダイアログ・テンプレートに使用できます。

このタスクについて

ダイアログ・テンプレートにシャドウ・プロパティを指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「新規ダイアログ・テンプレート・ウィザード」の「プロパティ」リストから「シャドウ」を選択します。
2. 「シャドウの追加」チェック・ボックスを選択して、シャドウをダイアログ・テンプレートに適用します。
3. 「オフセット」スライダーを移動して、シャドウのオフセットを指定します。
4. 「角度」スライダーを移動して、シャドウの角度を指定します。
5. 「範囲」スライダーを移動して、シャドウの範囲を指定します。
6. 「色」フィールドで、ウィンドウのシャドウの色を指定します。省略符号 (...) ボタンを使用して、パレットから色を選択します。
7. 「透明度」スライダーを移動して、シャドウの透明度を設定します。

8. 「終了」をクリックして、このダイアログ・テンプレートに対する変更を保管し、ダイアログ・テンプレート・ウィンドウを閉じます。

ダイアログ・テンプレートのタイトル背景プロパティを指定:

ダイアログ・テンプレートのタイトルに背景プロパティを指定できます。

このタスクについて

ダイアログ・シーンにタイトル背景プロパティを指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「新規ダイアログ・テンプレート・ウィザード」の「プロパティ」リストから「タイトル背景」を選択します。
2. 『ダイアログ・テンプレートの背景プロパティを指定』トピックのステップ 2 から 10 に従います。

ダイアログ・テンプレートのタイトル・フォント・プロパティを指定:

ダイアログ・テンプレートのタイトルのフォントをカスタマイズできます。

このタスクについて

タイトルにフォント・プロパティを指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「新規ダイアログ・テンプレート・ウィザード」の「プロパティ」リストから「タイトル・フォント」を選択します。
2. 「フォント」リストでタイトルのフォント・タイプを選択します。
3. 「サイズ」スライダーを移動して、フォント・サイズを設定します。
4. 「色」フィールドでダイアログ・タイトルのフォントの色を指定します。
5. 「透明度」スライダーを移動して、タイトル・フォントの透明度を設定します。
6. 使用するフォント・タイプに応じて、「太字」、「イタリック」、または「下線」チェック・ボックスを選択またはクリアします。
7. 「終了」をクリックして、このダイアログ・テンプレートに対する変更を保管し、ダイアログ・テンプレート・ウィンドウを閉じます。

ダイアログ・テンプレートのタイトル・フレーム・プロパティを指定:

ダイアログ・テンプレートのタイトル・フレームをカスタマイズできます。

このタスクについて

タイトルにタイトル・フレーム・プロパティを指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「新規ダイアログ・テンプレート・ウィザード」の「プロパティ」リストから「タイトル・フレーム」を選択します。

2. 「横のマージン」領域で「左」スライダーを移動して、タイトルの左右のマージンを指定します。
3. 右マージンを左マージンとは別に指定する場合は、「右マージンの設定」チェック・ボックスを選択します。

ヒント: 選択可能な単位のリストから単位を選択すれば、マージンの計測単位をカスタマイズできます。

4. 「縦のマージン」領域で「上部」スライダーを移動して、タイトルの上下のマージンを指定します。
5. 下部マージンを上部マージンとは別に指定する場合は、「下部マージンの設定」チェック・ボックスを選択します。
6. 「横の配置」リストでタイトルの配置を選択します。
7. 「横移動」スライダーを移動して、タイトル・フレームの移動を指定します。
8. 「終了」をクリックして、このダイアログ・テンプレートに対する変更を保管し、ダイアログ・テンプレート・ウィンドウを閉じます。

「ダイアログの表示」 イベント・アクションの追加:

「ダイアログの表示」 イベント・アクションを使用して、以前に作成されたシーンに基づくモーダル・ダイアログ・ウィンドウをビジュアル・ダッシュボードに追加します。

始める前に

以前に作成されたシーン (イベント・アクションに追加するシーン)、およびダイアログ・テンプレート (シーンのコンテナーとして使用) を用意しておく必要があります。

このタスクについて

「ダイアログの表示」 イベント・アクションを追加および定義するには、以下のステップを実行します。

手順

1. 編集機能ウィンドウで、アクションの追加先となるオブジェクトを選択します。
2. 「イベント」ビューで、アクションを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
3. 「追加」ボタンをクリックします。
4. アクション・ツリーで「ダイアログの表示」を選択し、「次へ」をクリックします。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

5. 「新規アクションの追加」ウィンドウで、アクション・パラメーターを指定します。

6. 別のビジュアル・プロジェクトからのシーンを開く場合は、「別のビジュアル・プロジェクト」チェック・ボックスを選択し、ビジュアル・プロジェクトを指定します。
  - a. 「ダイアログ・シーン」リストからダイアログ・ウィンドウに追加するシーンの名前を選択します。
  - b. 現在のビジュアル・ダッシュボードから追加するシーンにローカル・パラメーターが含まれている場合、「既存のローカル・パラメーターの値の設定」リストで、イベントが発生したときに宛先シーン用にそのローカル・パラメーターの初期値を変更できます。
7. 現行プロジェクトからのシーンを使用する場合は、以下のステップを実行します。
  - a. 「別のビジュアル・プロジェクト」チェック・ボックスがクリアされていることを確認します。
  - b. 「ダイアログ・シーン」リストからダイアログ・ウィンドウに追加するシーンの名前を選択します。
  - c. 現在のビジュアル・ダッシュボードから追加するシーンにローカル・パラメーターが含まれている場合、「既存のローカル・パラメーターの値の設定」リストで、イベントが発生したときに宛先シーン用にそのローカル・パラメーターの初期値を変更できます。
8. 「タイトル」フィールドに、ダイアログに追加するタイトルを指定します。

注: 「タイトル」フィールドの値は、ダイアログで使用するシーンの「タイトル」パラメーター値と同等です。

9. 「ダイアログ・ロケーション」領域に、ダイアログ・ウィンドウのロケーションを指定します。使用可能なオプションは以下のとおりです。
  - 「中央ロケーション」: シーンの中央をダイアログのロケーションとして設定します。
  - 「カスタム・ロケーション」: ダイアログ・ウィンドウの正確な座標を指定します。
10. 「次へ」をクリックします。「ダイアログの表示」アクション・パラメーターを指定するための次のページが開きます。
11. 「ダイアログを閉じる」アクションで取得したパラメーターを使用するには、「「ダイアログを閉じる」アクションの結果を使用する」チェック・ボックスを選択します。
12. イベント・アクションの結果値を保管するためのパラメーターを以前に指定していない場合は、「結果パラメーター」リストから「グローバル・パラメーター」または「ローカル・パラメーター」を選択し、「新規パラメーターの追加」ボタンをクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが開きます。このウィンドウで、パラメーターを指定して「終了」をクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが閉じて、「新規アクションの追加」ウィンドウに制御が戻ります。

注: 追加できるパラメーターのタイプは、「ブール」、「整数」、「倍精度」、「テキスト」、および「リテラル」です。追加したパラメーターを使用して、イベント・アクションの実行のための条件を指定します。例えば、

**DialogClose** イベントで「ブール」パラメーターを使用する場合、返される値が True か False かに応じて実行される 2 つの異なるアクションを作成できます。

13. ダイアログ・ウィンドウが閉じるときに実行するアクションを指定します。使用可能なアクションのリストについては、『イベント・アクション・ナビゲーションの設定』トピックを参照してください。
14. 「追加」ボタンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。選択したアクション用のパラメーターを指定して、そのアクションを追加します。

注: ダイアログ・シーンに対して指定されたローカル・パラメーターは、「式デザイナー」の「イベント・パラメーター」カテゴリで使用できます。メインシーンとダイアログ・シーンに、名前は同じであるが、異なる値を持つ 2 つのパラメーターが存在する場合、ダイアログ・シーンに指定された値が優先され、ダイアログ・シーン・パラメーターとして使用されます。

15. 「アクション」リストで、追加したアクション用のパラメーターを変更できます。
16. 使用するパラメーターを「結果パラメーター」リストから選択し、「OK」をクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
17. 「終了」をクリックします。「ダイアログの表示」イベント・アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
18. 「[オブジェクト名] 動作」ウィンドウで「適用」をクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

#### タスクの結果

モーダル・ダイアログ・ウィンドウを作成し、「ダイアログの表示」イベント・アクションをオブジェクトに追加しました。

「ダイアログを閉じる」イベント・アクションの追加:

「ダイアログの表示」イベント・アクションで作成されたダイアログ・ウィンドウを閉じるには、「ダイアログを閉じる」イベント・アクションを使用します。

#### 始める前に

モーダル・ダイアログ・ウィンドウを事前に作成しておく必要があります。

#### このタスクについて

「ダイアログを閉じる」イベント・アクションを追加および定義するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. 編集機能ウィンドウで、アクションの追加先となるオブジェクトを選択します。
2. 「イベント」ビューで、アクションを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。

3. 「追加」ボタンをクリックします。「新規アクションの追加ウィンドウ」が開きます。
4. アクション・ツリーで「ダイアログを閉じる」を選択し、「次へ」をクリックします。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

5. 「新規アクションの追加」ウィンドウの「戻り値」フィールドに戻りアクション・パラメーターを指定します。指定した値は、「ダイアログの表示」イベント・アクションで追加するイベント・アクションで使用できます。
6. 「終了」をクリックします。「ダイアログを閉じる」イベント・アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
7. 「[オブジェクト名] 動作」ウィンドウで「適用」をクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

#### タスクの結果

「ダイアログを閉じる」イベント・アクションがオブジェクトに追加されました。

「URL を開く」イベント・アクションの追加:

ユーザーがビジュアル・ダッシュボードからハイパーリンクを開くことができるようにするには、「URL を開く」イベント・アクションを使用します。

#### このタスクについて

例えば、「URL を開く」イベント・アクションを取り込んだラベルを使用するには、会社の Web サイトにアクセスできるユーザーをクリックします。また、計算式を使用すると、ユーザーのアクションおよびそれらのアクションが使用されるコンテキストに基づいて形成された動的リンクを作成することもできます。

「URL を開く」イベント・アクションをオブジェクトに取り込むには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブで、エディター・ウィンドウ内のオブジェクトを選択し、「URL を開く」アクションをトリガーするイベントをダブルクリックします。
2. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「新規アクションの追加」をクリックします。
3. アクション・ツリーで「URL を開く」を選択し、「次へ」をクリックします。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「URL パラメーター」領域で、リンクを新規ウィンドウで開くか、または新規タブで開くかを指定します。

注: 「ターゲット」パラメーターは、QMF for WebSphere の場合にのみ存在します。

5. 「**URL**」フィールドで、リンクまたは計算式を指定します。「式デザイナー」ウィンドウを開くには、「**URL**」フィールド内をダブルクリックします。

注: 絶対 URL または相対 URL を指定できます。相対 URL はスラッシュ (/) で始まり、基本 URL の後に続くリンクの部分を含みます。この場合、絶対 URL は、基本 URL (http://host:port/application\_path) と相対 URL を連結して形成されます。

6. 「終了」をクリックします。「**URL** の印刷」アクションがアクションのリストに追加され、「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
7. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」をクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
8. 「**OK**」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

「**Cookie** の保管」イベント・アクションの追加:

「**Cookie** の保管」イベント・アクションを使用して、現行ユーザーのアプリケーション・ストレージ内の特定のキーに必要なデータ値を保管します。

このタスクについて

このイベント・アクションにおけるユーザーは、アプリケーションを操作するオペレーティング・システムのユーザーか、Web ブラウザー内のアプリケーションを実行するユーザーです。各ユーザーは、作成されたキー値を保持するための特定のストレージを持っています。そのため、別のユーザーによって作成されたキー値は、キーの名前が同じ場合でも、相互に上書きされることはありません。

「**Cookie** の保管」イベント・アクションをオブジェクトに追加するには、以下のステップを実行します。

手順

1. 「イベント」ビューの編集機能ウィンドウでオブジェクトを選択し、トリガーするイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「**Cookie** の保管」を選択し、「次へ」をクリックして「**Cookie** アクション・パラメーターの保管」ウィンドウを開きます。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 「キー」フィールドに、キーの名前を指定します。
5. 「値」フィールドに、キーの値を指定します。
6. 「終了」をクリックして、「**Cookie** アクション・パラメーターの保管」ウィンドウを閉じて、「[オブジェクト名] 動作」ウィンドウに戻ります。
7. 「適用」をクリックして、当該イベントについて追加されたアクションをすべて適用します。
8. 「**OK**」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。



## タスクの結果

キーの値が現行ユーザーのアプリケーション・ストレージに保管されます。このキーの値は、キーの名前を使用していつでも取り出すことができます。

「**Cookie** のロード」 イベント・アクションの追加:

「**Cookie** のロード」 イベント・アクションは、「**Cookie** の保管」 イベント・アクションで以前に保管されたデータを現行ユーザーのアプリケーション記憶域から取得する場合に使用します。

## このタスクについて

オブジェクトに「**Cookie** のロード」 イベント・アクションを追加するには、以下のようになります。

## 手順

1. 「イベント」ビューの編集機能ウィンドウでオブジェクトを選択し、トリガーするイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. アクション・ツリーで「**Cookie** のロード」を選択し、「次へ」をクリックして、「**Cookie** をロードするアクションのパラメーター」ウィンドウを開きます。

注: 必要なイベント・アクションを素早く見つけるには、フィルター・テキスト・フィールドにアクションの名前を入力します。

4. 取得対象の値を持つキーの名前を入力します。
5. 「結果オプション」領域で「新規パラメーターの追加」をクリックし、キーの値を保管するためのパラメーターを作成します。

注: 「結果パラメーター」リストからパラメーター・タイプとパラメーター名を選択すれば、既存のパラメーターにキーの値を保管できます。

6. 「終了」をクリックして、「**Cookie** アクション・パラメーターのロード」ウィンドウを閉じて、「[オブジェクト名] 動作」ウィンドウに戻ります。
7. 「適用」をクリックして、当該イベントについて追加されたアクションをすべて適用します。
8. 「**OK**」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

## タスクの結果

現行ユーザーのアプリケーション記憶域からキーの名前でキーの値がパラメーターにロードされます。

「地理位置情報の最新表示」 イベント・アクションの追加:

「地理位置情報の最新表示」 イベント・アクションを使用して、地理位置情報グローバル・パラメーターの値を現在の地理位置情報データで更新します。

このタスクについて

重要: このアクションは、QMF for Workstation ではサポートされていません。

「地理位置情報の最新表示」 イベント・アクションを追加するには、以下のステップを実行します。

手順

1. 編集機能ウィンドウでオブジェクトを選択し、「イベント」ビューで、「地理位置情報の最新表示」 イベント・アクションを起動するイベントをダブルクリックします。「[objectname] 動作」ウィンドウが開きます。
2. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
3. 「デバイス」 ツリー・ノードから、「地理位置情報の最新表示」 を選択します。
4. 「終了」をクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
5. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。

タスクの結果

「地理位置情報の最新表示」 イベント・アクションが追加されました。

## バージョン管理システム内でのビジュアル・ダッシュボードの操作

ビジュアル・ダッシュボードをバージョン管理システム内でフォルダーとして保管することができます。これにより、異なるビジュアル・ダッシュボード・デザイナーによって行われた変更を追跡したり、修正をマージしたり、または以前のバージョンのビジュアル・ダッシュボードに戻したりできます。

このタスクについて

バージョン管理システム内のビジュアル・ダッシュボードを操作するには、以下のようになります。

手順

1. ビジュアル・ダッシュボードをフォルダーとして保存します。
2. ビジュアル・ダッシュボード・ファイルを含むフォルダーをバージョン管理システムに追加します。

注: 同一のビジュアル・ダッシュボードが同時に編集されることを防ぐために、.lock ファイルが自動的に生成されます。バージョン管理システムで作業する場合、このファイルを無視するように設定します。

3. ビジュアル・ダッシュボードのローカル・バージョンを編集した後、これを保存して同期を実行し、更新内容を確認してコミットします。
4. 別のユーザーがそのユーザー自身のビジュアル・ダッシュボードのローカル・バージョンを編集した後、自分自身のローカル・ビジュアル・ダッシュボード・フォルダーを更新して別のユーザーの修正内容を確認し、必要に応じてその修正内容を自分自身のビジュアル・ダッシュボードのローカル・コピーに保存します。

| 注: フォルダーとして保存されるダッシュボードは開発の過程で継続的に編集されるため、リンク用に使用することはできません。ビジュアル・ダッシュボードにリンクする必要がある場合、例えば組み込みシーン・オブジェクト、ダイアログの表示イベント・アクション、または新しい位置へジャンプ・イベント・アクションを追加するとき、リポジトリに保存されたビジュアル・ダッシュボードのみ使用します。

## | フォルダーとしてのビジュアル・ダッシュボードの保存

| ビジュアル・ダッシュボードの内容に関する情報が入っているファイルを含むフォルダーとしてビジュアル・ダッシュボードを保存することができます。

### | このタスクについて

| ビジュアル・ダッシュボードをフォルダーとして保存するには、以下のようになります。

#### | 手順

- | エディターまたは「ランタイム」モードで、ビジュアル・ダッシュボードを作成するか、既存のビジュアル・ダッシュボードを開きます。
- | メインメニューから「ファイル」 > 「保存先」 > 「ファイル」を選択し、「ファイルに保存」ダイアログを開きます。
- | ダイアログで、「フォルダーとしてのビジュアル・ダッシュボード」をクリックします。
- | 「パス」フィールドに、ビジュアル・ダッシュボードを含むフォルダーを保存する宛先ディレクトリーへのパスを指定します。「参照」をクリックして、宛先ディレクトリーにナビゲートします。

| 注: ビジュアル・ダッシュボードを保存するフォルダーが空であることを確認します。

- | 「OK」をクリックして「ファイルに保存」ダイアログを閉じ、指定した宛先ディレクトリーに、ビジュアル・ダッシュボード・ファイルを含むフォルダーを作成します。

## | 照会から取得されたアドレス情報に従ってマップ上にデータを表示

| 照会結果セットからのデータをビジュアル・ダッシュボードでマップ上に表示できます。

### | このタスクについて

| 計算列、および計算列用のカスタム関数を使用して、ビジュアル・ダッシュボードで使用できるようにアドレスを座標に変換します。

| *functions.js* ファイルを QMF for Workstation および QMF for WebSphere のユーザー・ホーム・ディレクトリーに作成しておく必要があります。

| データをマップ上に表示するには、以下のようになります。

#### | 手順

- | 以下の関数を *functions.js* ファイルに追加します。

```

/**
 * Returns address' geo coordinates
 * @param address address string
 * @category geo
 * @return lan/lng
 */
function getLocation(address)
{
  var request = new RSBIHttpRequest();
  request.open('GET','http://maps.googleapis.com/maps/api/geocode/json?address='
  + address + '&sensor=false', false);
  var response = '';
  request.onreadystatechange = function()
  {
    if(request.readyState === 4)
    {
      response = request.responseText;
    }
  }
  request.send(null);
  var x = JSON.parse(response);
  return x.results[0].geometry.location;
}

```

2. 必要なデータ・テーブルに基づいてビジュアル照会を作成します。
3. 次の式を使用して *Coords* 計算列をビジュアル照会に追加します。

```

var loc = getLocation(@[address_column]);
>(' + loc.lat + ', ' + loc.lng + ')

```

ビジュアル照会をリポジトリに保管します。

4. 次のテキストを使用してプロシージャーを作成します (大括弧内の値を、自分のケースに合う有効な値で置き換えます)。

```

RUN QUERY "[Path to the visual query]"
SAVE DATA AS [Table name] (ACTION=REPLACE, CONFIRM=NO

```

プロシージャーをリポジトリに保管します。

5. 保管されたプロシージャーを実行する新規スケジュール・タスクを作成します。定義されたスケジュール・タスク上のデータが更新されます。
6. テーブルからのデータをマップ上に表示するビジュアル・ダッシュボードを作成します。

## ビジュアル・プロジェクト・データの保護

他の開発者がビジュアル報告書およびビジュアル・ダッシュボードを使用できるように、ただし基礎となるデータ・オブジェクトにアクセスして、そのデータ・オブジェクトを変更することができないように、ビジュアル報告書およびビジュアル・ダッシュボードの読み取り専用バージョンをコンパイルできます。

### このタスクについて

ビジュアル報告書およびビジュアル・ダッシュボードのデータを保護するには、以下のようにします。

### 手順

1. コンパイルする保管済みのビジュアル報告書またはビジュアル・ダッシュボードを設計モードで開きます。

2. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューでプロジェクトを右クリックして、「コンパイルして別名保存」を選択します。
3. 「[Object] の保存」ウィザードでは、ビジュアル・プロジェクトをファイルに保存するか、またはリポジトリに保存するかを選択して、「次へ」をクリックします。
4. 「ファイルに保存」ウィザードまたは「リポジトリに保存」ウィザードで必要な情報を入力して、「終了」をクリックします。

## タスクの結果

ビジュアル・プロジェクトの読み取り専用バージョンがコンパイルされました。ビジュアル報告書またはビジュアル・ダッシュボードに関連付けられているデータは保護されていて、他のユーザーはそのデータを変更できません。

## データ・ソース接続およびビジュアル・プロジェクト

ビジュアル・プロジェクト (ビジュアル報告書およびビジュアル・ダッシュボード) は、企業全体で共有することを目的としています。これらのビジュアル・プロジェクトの共有と配布を促進するために、QMF for Workstation は、(オブジェクトを特定のデータ・ソースに関連付けるのではなく) 照会を接続情報別名に関連付けます。

これらのオブジェクトのデータを提供するデータ・ソースごとに接続情報別名を設定する必要があります。

### ビジュアル・プロジェクトのデータ・ソース接続の指定

ビジュアル・プロジェクト (ビジュアル報告書またはダッシュボード) に関するデータを提供するデータ・ソースごとに接続情報別名をセットアップします。

### このタスクについて

ビジュアル・プロジェクトで使用する複数の照会を追加する際には、それぞれの照会に関連付ける接続情報別名を指定する必要があります。

照会に使用するデータ・ソースを変更するには、照会情報を編集して、使用するデータ・ソースを指す接続情報別名項目を選択します。この機能により、ユーザーは簡単にビジュアル報告書を共有し、ユーザー固有のデータ・ソースを使用することができます。さらに、テスト・データ・ソースと実働データ・ソース間の移動が容易になります。

データ・ソースの接続情報別名を指定するには、以下のステップを実行します。

### 手順

1. 「接続の挿入」ウィンドウを開きます。

以下のいずれかの方法で「接続の挿入」ウィンドウを開くことができます。

- 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、特定のビジュアル・プロジェクトの「接続」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「接続の挿入」を選択します。

- 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「接続」ノードをダブルクリックします。「接続の挿入」ウィンドウが開きます。
  - 「ワークスペース」または「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで照会をクリックします。マウス・ボタンを押したまま、照会を「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「照会」ノードまでドラッグします。新規データ・ソース接続が「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「接続」フォルダーに自動的に追加されます。
2. 使用可能なデータ・ソースのリストから、この接続情報別名に関連付けるデータ・ソースを選択します。
  3. 「接続名」フィールドに、この接続情報別名の固有名を指定します。
  4. 「終了」をクリックします。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、ツリーの「接続」ノードの下に新規接続情報別名がリストされます。

注: データ・ソースの接続情報別名は、データ・ソースを「ワークスペース」ビューから、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューのビジュアル・プロジェクトの「接続」フォルダーにドラッグすることでも設定できます。接続情報別名は、「接続 N」という名前を追加されます。接続情報別名の名前は、項目を右クリックし、「名前変更」を選択して編集できます。

## タスクの結果

ビジュアル・データ・オブジェクトのデータ・ソース接続情報を設定しました。

---

## 照会およびビジュアル・プロジェクト

ビジュアル・プロジェクト (ビジュアル報告書およびビジュアル・ダッシュボード) には、結果データを取得してプロジェクトに表示するために実行する 1 つ以上の照会を含めることができます。

ビジュアル・プロジェクトで使用するすべての照会は、そのビジュアル・プロジェクトの「照会」フォルダーに定義されている必要があります。

プロジェクトのデザイン中は、いつでも照会を追加できます。ビジュアル・プロジェクトに含む照会ごとに、使用するデータ・ソースを指定する必要があります。これは、照会を接続情報別名に関連付けることによって行います。

### ビジュアル・プロジェクトの照会の指定

ビジュアル・プロジェクト (ビジュアル報告書またはビジュアル・ダッシュボード) には、結果データを取得してそれをビジュアル・プロジェクトで表示するために実行する 1 つ以上の照会を含めることができます。

#### このタスクについて

新規照会を作成してビジュアル・プロジェクトに含めることも、既存の照会を使用することもできます。

ビジュアル・プロジェクトに対して照会を指定するには、以下のようになります。

## 手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで「照会」ノードを右クリックし、メニューから「照会の挿入」を選択します。
2. 「照会名」フィールドに、照会の固有名を指定します。
3. 照会を識別し、その照会がある場所を以下のいずれかの方法で指定します。
  - a. 新規ビジュアル照会を作成する場合は、「新規ビジュアル照会の作成」を選択します。
  - b. 新規分析照会を作成する場合は、「新規分析照会の作成」をクリックします。
  - c. 新規予測を作成する場合は、「新規予測の作成」をクリックします。
  - d. 照会が存在する場合は、「既存の照会に付加」を選択します。「照会の選択」リストが表示されます。「照会の選択」フィールドに、照会の名前と場所を指定します。「参照」をクリックすれば、照会を検索できます。
  - e. 静的照会を挿入する場合は、「ファイルから」を選択します。
    - 照会を「照会」フォルダーに直接コピーするには、「データの挿入」を選択します。このオプションを選択すると、あるシステムから別のシステムへビジュアル・プロジェクトが移動しても、照会はビジュアル・プロジェクトと一緒にまなので、可搬性が向上します。
    - 照会のシステム・ディレクトリー上の位置へのリンクを作成するには、「ファイルへのリンクを使用」を選択します。このオプションを選択すると、あるシステムから別のシステムへビジュアル・プロジェクトが移動すると照会を使用できなくなるため、可搬性が制限されます。
    - 「データ・ファイルの選択」リストに、追加する照会を指定します。「参照」をクリックすると、照会を検索できます。

注: DBF、IXF、XML、および TAB ファイルを開いて照会として使用できます。インポートした結果セットは、フィルター処理を行ったり、計算された列を追加したり、グループ化や集約を適用したりすることで編集できます。ビジュアル・プロジェクトを保存すれば、これらのファイルを **dynamart** に変換してビジュアル・プロジェクトとともに保存することができます。変更はすべて保存されます。

4. ビジュアル照会を挿入する場合、照会に使用するデータ・ソース接続を「接続」リストから選択する必要があります。「接続」リストが空の場合、データ・ソース接続をビジュアル・プロジェクトに追加します。
5. 「接続の追加」をクリックして、「接続の挿入」ウィンドウを開きます。
6. データ・ソース・ツリーから、ビジュアル・プロジェクト用に追加するデータ・ソースを選択し、「終了」をクリックします。選択したデータ・ソース接続がビジュアル・プロジェクトに追加され、「接続」リストに表示されます。
7. 既存の予測または分析照会をビジュアル・プロジェクトに挿入する場合は、「接続の編集」ウィンドウで従属照会の接続設定を編集できます。
8. 新規の予測または分析照会を挿入する場合は、従属照会はまだ指定されていないため、従属照会の接続は設定できません。
9. 「終了」をクリックします。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューのツリーの「照会」ノードの下に、照会がリストされます。照会にパラメーターが必要

な場合は、「パラメーター」フォルダーが追加されます。ビジュアル・プロジェクトの保存時には照会は自動的に保存されます。

## タスクの結果

注: また、「ワークスペース」ビューからビュー内のビジュアル・プロジェクトの「照会」ノードに照会をドラッグすることにより、照会を追加できます。選択された照会が「照会」フォルダーに追加されます。新規データ・ソース接続が「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「接続」フォルダーに自動的に追加されます。

---

## カスタム JavaScript 関数をビジュアル・プロジェクトに追加

JavaScript モジュールを利用して、独自の JavaScript 関数をビジュアル報告書およびビジュアル・ダッシュボードで使用できます。

### このタスクについて

独自の関数を作成および編集するには、構文の強調表示を持つ JavaScript モジュール・エディターを使用します。このエディターを開くには、「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。「新規」ウィザードで「QMF」 > 「JavaScript モジュール」を選択します。

JavaScript モジュールを作成したら、それをリポジトリまたはファイル・システムに保管して、ビジュアル報告書またはビジュアル・ダッシュボードに追加できます。

カスタム JavaScript 関数をビジュアル・プロジェクトに追加するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「JavaScript モジュールの挿入」ウィンドウを開きます。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで「グローバル」ノードを右クリックしてから、「新規」 > 「JavaScript モジュールの挿入」オプションを選択します。
2. 「JavaScript モジュールの挿入」ウィンドウで、JavaScript モジュールを作成する必要があるのか、既存の JavaScript モジュールを付加する必要があるのかを決定します。
3. JavaScript モジュールを作成することにした場合は、必要な名前を「JavaScript モジュール名」フィールドに指定し、「新規作成」を選択してから、「終了」をクリックします。別のエディター・ウィンドウで空の JavaScript モジュールが開きます。必要な JavaScript 関数を作成し、編集機能を閉じます。
4. 既存の JavaScript モジュールを付加することにした場合は、「既存のモジュールに付加」を選択してから、リポジトリまたはファイル・システムから必要なモジュールを指定します。「終了」をクリックします。

注: JSDoc 形式でスクリプトに追加された注釈を表示することができます。これらの注釈は、「式デザイナー」でユーザーに表示されます。



5. 付加された JavaScript モジュールは、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「グローバル」 > 「JavaScript モジュール」ノードの下で確認できません。

## タスクの結果

付加された JavaScript モジュールで定義されている関数はすべて、「式デザイナー」において「ユーザー」ノードの下で見つけることができます。これらの関数は、ビジュアル・プロジェクトで他の式として使用できます。

## JavaScript モジュールの作成

JavaScript モジュールは、ビジュアル・プロジェクトで使用する JavaScript 関数をカスタマイズするために作成します。

### このタスクについて

JavaScript モジュールを作成するには、以下のアクションを実行します。

### 手順

1. メインメニューから「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択し、「新規」ウィザードを開きます。
2. 「新規」ウィザードで「QMF オブジェクト」フォルダーを展開し、「JavaScript モジュール」を選択します。
3. 「次へ」をクリックして、「新規 JavaScript モジュール」ウィザードを開きます。
4. 「名前」フィールドで JavaScript モジュールの名前を指定し、「終了」をクリックして「JavaScript モジュール」編集機能を開きます。
5. 編集機能で JavaScript 関数を入力します。
6. 各関数はキーワード 'function' で始めます。
7. 各関数の前に注釈を追加します。


アプリケーションは、この注釈を関数の説明と解釈します。

8. オプション: 新しい関数の追加先となるカテゴリーを定義します。

関数を追加するには、注釈内で '@category' タグを使用します。当該カテゴリーは存在しなければ作成されません。

注: 以下のカテゴリーは、アプリケーション内に既に存在しています。

- 列
- 集約
- 変換
- 日時
- 情報
- 論理
- 計算および三角法
- 各種

- テキスト
  - オブジェクト
9. エディターで入力した JavaScript 関数が正しいかどうかを確認するには、「JavaScript の構文および構造を検査 (Check JavaScript syntax and structure)」 ツールバー・ボタンをクリックします。
10. 必要な JavaScript 関数を入力したら、JavaScript モジュールをリポジトリまたはファイルに保管します。

---

## ビジュアル・デザイナーでの作業

QMF for Workstation では、「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブに、ビジュアル・プロジェクトを作成するために使用するエディター・ウィンドウ、複数のビュー、およびメニューが表示されます。

### このタスクについて

以下を使用して、いずれかのタイプのビジュアル・プロジェクトを作成します。

- プロジェクト・エクスプローラー

このビューは、ビジュアル・プロジェクトに含まれるすべてのエレメントおよびオブジェクトをツリー構造で表示します。

- エディター

編集機能ウィンドウには、ビジュアル・プロジェクトを作成するためのキャンバスが表示されます。編集機能ウィンドウで、ビジュアル・プロジェクトの最終ビューを設計および確認できる各種モードを切り替えることができます。

- 「プロパティ」ビュー

このビューには、ビジュアル・プロジェクトに含まれているエレメントおよびオブジェクトごとのプロパティがすべて表示されます。「プロジェクト・エクスプローラー」からエレメントを選択すると、「プロパティ」ビューに、そのエレメントのプロパティが表示されます。オブジェクトを挿入または選択すると、そのオブジェクトのプロパティが表示されます。エレメントまたはオブジェクトのプロパティを変更すると、そのエレメントまたはオブジェクトの表示方法や動作方法が変わります。「プロパティ」ビューでは、プロパティを直接変更できます。

- 「イベント」ビュー

このビューには、ビジュアル・プロジェクト内の各エレメント/オブジェクトに使用できるすべてのイベントが表示されます。

「プロジェクト・エクスプローラー」からエレメントを選択すると、このオブジェクトに使用できるイベントが「イベント」ビューに表示されます。「イベント」ビューを使用することで、さまざまなイベント・アクションをシーン・オブジェクトに割り当てることができるため、実行時にシーンと対話したりシーンにナビゲートしたりできます。

- 「パレット」ビュー

このビューには、ビジュアル・プロジェクトに挿入できるすべてのグラフィック・オブジェクトが表示されます。「パレット」ビューからオブジェクトを選択し、エディターに挿入します。挿入するオブジェクトごとに、「プロジェクト・エクスプローラー」に項目が作成され、そのオブジェクトのプロパティーが「プロパティー」ビューに表示されます。

## プロジェクト・エクスプローラーでの作業

「プロジェクト・エクスプローラー」ビューは、ビジュアル・プロジェクトで作業するときに使います。ここでは、現在開いているビジュアル報告書またはビジュアル・ダッシュボードがそれぞれツリー構造でリストされます。

### このタスクについて

エレメントをビジュアル・プロジェクトに追加すると、それぞれのエレメントは「プロジェクト・エクスプローラー」のツリーにフォルダーとして追加されます。オブジェクトをビジュアル・プロジェクトに挿入すると、そのオブジェクトも「プロジェクト・エクスプローラー」のツリーにフォルダーとして追加されます。エレメントまたはオブジェクトによっては、追加フォルダーが追加されます。

「プロジェクト・エクスプローラー」は、ビジュアル・デザイナー・エディターおよび「プロパティー」ビューと連動します。「プロジェクト・エクスプローラー」からビジュアル・プロジェクトエレメントを選択すると、そのビジュアル・プロジェクトエレメントに定義されたすべてのデザイン・オブジェクトがエディター・ウィンドウに表示され、そのエレメントまたは選択したオブジェクトのプロパティーが「プロパティー」ビューに表示されます。

「プロジェクト・エクスプローラー」では、ビジュアル・プロジェクト内またはビジュアル・プロジェクト間でオブジェクトをコピー、切り取り、および貼り付けることができます。複数のオブジェクトをコピーまたは切り取る場合、それらのすべてが「プロジェクト・エクスプローラー」の同じツリー・ノード内に保管されているようにします。異なるノードのオブジェクトは別々に処理する必要があります。

ビジュアル・プロジェクトには、そのタイプに応じてさまざまな構造化エレメントが含まれます。各ビジュアル報告書には常に、以下の上位フォルダーが含まれます。

- 接続
- グローバル
- 照会
- 固定ページ
- メインページ

各ビジュアル・ダッシュボードには常に、以下の上位フォルダーが含まれます。

- 接続
- グローバル
- 照会
- シーン

デザイン・オブジェクトをビジュアル・プロジェクトに追加すると、これらのデザイン・エレメントを表す追加フォルダーが「プロジェクト・エクスプローラー」のツリーに自動的に追加されます。

## ビジュアル・プロジェクトからのイメージのエクスポート

ビジュアル・プロジェクトに保管されているイメージをグラフィック・ファイルにエクスポートできます。

### このタスクについて

ビジュアル・プロジェクトには、必要な情報を明確に示すために役立つさまざまなイメージが含まれていることがあります。これらのイメージは、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで「グローバル」 > 「イメージ」ノードを展開すれば見つけることができます。必要であれば、これらのイメージをグラフィック・ファイルにエクスポートできます。

イメージをファイルにエクスポートするには、以下のようにします。

### 手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、必要なビジュアル・プロジェクトを選択します。
2. イメージのリストを表示するには、「グローバル」 > 「イメージ」ノードを展開します。
3. 必要なイメージを右クリックして、メニューから「ファイルに保存」を選択します。
4. ビジュアル・プロジェクトに保管されているすべてのイメージをエクスポートするには、「イメージ」ノードを右クリックして、メニューから「ファイルに保存」を選択します。イメージは zip アーカイブに圧縮されます。

### 関連タスク:

484 ページの『ピクチャー・オブジェクトの挿入』

ピクチャー・オブジェクトを使用して、ビジュアル・プロジェクトにイメージを挿入することができます。

## オブジェクト参照の表示

ビジュアル・プロジェクトで使用するオブジェクトへの参照はすべて、「参照の表示」ウィンドウで確認できます。

### 始める前に

「ビジュアル・デザイナー」エディターにビジュアル・プロジェクトを開いておく必要があります。

### このタスクについて

オブジェクト参照を表示するには、次のようにします。

### 手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、必要なオブジェクトを右クリックし、ポップアップ・メニューから「参照の表示」を選択します。 選択された

オブジェクトへの参照を持っているオブジェクトの数が「参照の表示」ウィンドウに表示されます。選択されたオブジェクトが他のオブジェクトから参照されていると、「拡張」ボタンが選択可能になります。

2. すべての参照を表示するには、「拡張」をクリックし、ツリーでオブジェクト参照までナビゲートします。
3. 矢印を使用して、選択されたオブジェクトを参照している前のオブジェクトまたは次のオブジェクトへナビゲートできます。
4. オブジェクトのツリーを展開または縮小するには、「展開」または「縮小」をクリックします。
5. 選択された参照先オブジェクトを「プロジェクト・エクスプローラー」ビューに表示するには、「プロジェクト・エクスプローラーに表示 (Show in Project Explorer)」をクリックします。

## エディターでの作業

「ビジュアル・デザイナー」編集機能ウィンドウには、ビジュアル・プロジェクトを作成するためのキャンバスが表示されます。

### このタスクについて

この編集機能ウィンドウでは、ビジュアル・プロジェクトを設計できるモード間で切り替えを行ったり、プロジェクトが各種レンダリング・モードでユーザーに対してどのように表示されるのかを確認したりできます。

「ビジュアル・デザイナー」のエディター・ウィンドウでは、一度に複数のビジュアル・プロジェクト・エレメントを開くことができます。開いているエレメントはそれぞれ別個のキャンバスとして表示され、エディター・ウィンドウの上部に識別タブが付きます。エディター・ウィンドウでキャンバス・タブをクリックすると、そのキャンバスがアクティブになります。特定のビジュアル・プロジェクト・エレメントを変更するには、そのエレメントがエディター・ウィンドウ内でアクティブになっている必要があります。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューでビジュアル・プロジェクト・エレメントを選択することによって、キャンバスをアクティブにすることもできます。

ウィンドウの下部にあるタブでは、以下のモード間で切り替えを行うことができます。

- キャンバス・モード

キャンバス・モードは、ビジュアル・プロジェクトにコンテンツを追加するために使用します。オブジェクトを追加すると、エディターではプレースホルダー・オブジェクトとして表現されます。

- 「デザイン」モード

設計モードは、キャンバス・モードで追加したオブジェクトを配置および変更し、各種画面解像度に合わせてビジュアル・プロジェクトのコンテンツを調整するために使用します。

- 「ランタイム」モード

「ランタイム」モードは、ビジュアル・ダッシュボード内の内容をテストするために使用します。「ランタイム」モードでは、グラフィック・オブジェクトがユーザーに表示されるとおりにドローされ、照会の実行、オブジェクト・イベントの生成、および関連したアクションの実行を行うことができます。さらに、ナビゲーション機能も実行できます。この編集機能の実行時モードでは、ビジュアル・ダッシュボードがユーザーに表示されるとおりに表示されます。

- **プレビュー・モード**

プレビュー・モードは、ビジュアル報告書に表示されるコンテンツをテストするために使用します。「プレビュー」モードでは、グラフィック・オブジェクトがユーザーに表示されるとおりにドローされ、照会の実行、オブジェクト・イベントの生成、および関連したアクションの実行を行うことができます。この編集機能のプレビュー・モードでは、ビジュアル報告書がユーザーに表示されるとおりに表示されます。

ワークステーション・メニュー・バーにあるレンダリング・モード・リストを使用すれば、ビジュアル・プロジェクトが実行時モードおよびプレビュー・モードでどのようにレンダリングされるのかを制御できます。

ビジュアル・プロジェクトのタイプに応じて、以下のレンダリング・モード・オプションを選択できます。

- **HTML** は、内容を Web ブラウザーで表示するように最適化します。
- 「**HTML5**」を選択した場合は、モダン Web ブラウザーやモバイル装置でパフォーマンスが向上するようにコンテンツが最適化されます。
- **PDF** は、内容を印刷するように最適化します。

## ビジュアル・デザイナーにおける編集機能コントロール

「ビジュアル・デザイナー」では、エディターのルーラー、ガイド、およびグリッドが、ビジュアル・オブジェクトを正確に配置するために役立ちます。

### ルーラー

ルーラーは、可視の場合、使用可能なウィンドウの左上に表示されます。ルーラーの原点によって、グリッドの原点も決定されます。

ルーラーを表示したり非表示にしたりするには、「ビュー」 > 「ルーラー」を選択します。

デフォルトの測定単位としてピクセルが使用されます。デフォルトの測定単位は、「設定」ウィンドウの「ビジュアル・デザイナー」ページで変更できます。

測定単位を変更するには、以下のようになります。

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。
2. ツリーから「ビジュアル・デザイナー」を選択します。
3. 「ビジュアル・デザイナー・ルーラー単位」の 1 つを選択して、ルーラーのデフォルトの単位を指定します。オプションには、「ピクセル」、「インチ」、または「センチメートル」があります。

## ガイド

ガイドは、シーンおよびシーンがホストしているオブジェクトの上に非印刷線として表示されます。

縦方向のガイドを作成するには、横方向のルーラーの上をクリックします。

横方向のガイドを作成するには、縦方向のルーラーの上をクリックします。新しいガイドが、シーン全体の上の選択した位置にドロワーされます。ドラッグ・アンド・ドロップの方法を使用して、作成したガイドを新しい位置に移動することもできます。

ガイドを削除するには、ガイドを選択して、左マウス・ボタンを押したままルーラー外にドラッグします。

## グリッド

エレメントを対称的にレイアウトするには、グリッドを使用します。

グリッドも非印刷対象としてドロワーされます。デフォルトでは、グリッドは「ビジュアル・デザイナー」を開くたびに表示されます。

グリッドを表示したり非表示にしたりするには、「ビュー」 > 「グリッド」を選択します。

グリッドの原点は座標 0,0 にあります。この座標は通常、シーンの中央にあります。

注: ルーラーの測定単位に適用した変更は、グリッドに影響しません。グリッドの単位は常に固定サイズです。

## グリッドに合わせる

グリッドが表示されているかどうかに関係なく、オブジェクトをアンバインドして、そのオブジェクトの移動を制御するには、「グリッドに合わせる」オプションを使用します。

グリッドが表示されているかどうかに関係なく、シーン・コンポーネントを移動するには、「表示」 > 「グリッドに合わせる」を選択します。対象のオブジェクトがアンバインドされて、グリッドに関係なくシーン上で移動できるようになります。

## 「プロパティ」ビューでの作業

ビジュアル・プロジェクトに含まれた各エレメントおよびオブジェクトには、完成したビジュアル・プロジェクトでのエレメントまたはオブジェクトの表示方法を指定する固有のプロパティがあります。ビジュアル・プロジェクトの各エレメントまたはオブジェクトのプロパティは、「プロパティ」ビューに表示されます。

### このタスクについて

プロパティは、ビジュアル・プロジェクトのエレメントまたはオブジェクトによって異なります。プロパティには、位置、値、サイズ、配置、線のスタイル、透明度、および色といった要素があります。さらに、ユーザーのアクションによって

オブジェクトの外観がどう変化するかを定義するプロパティが含まれることもあります。

## オブジェクト・プロパティの指定

ビジュアル・プロジェクトの各エレメントまたはオブジェクトのプロパティとその対応する値は、「プロパティ」ビューに表示されます。

### このタスクについて

「プロパティ」ビューに表示されるプロパティは、エディター・ウィンドウまたは「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで選択されているエレメントまたはオブジェクトによって異なります。プロパティは、それぞれの現行値またはデフォルト値とともにリストされます。

プロパティ値を変更するには、多くの方法があります。プロパティ値は、定数、数式、関数式、またはプロパティ式を使用して変更できます。プロパティ値の多くは、プロパティの許容値リスト・ボックスから選択できます。指定するプロパティ値は、そのプロパティに必要なデータ・タイプと一致していなければなりません。

「プロパティ」ビューで個別のオブジェクト・プロパティを指定または変更するには:

### 手順

1. 「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブを表示しているときには、「プロパティ」ビューが自動的に開きます。「プロパティ」ビューが開いていない場合は、「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「プロパティ」を選択すれば開くことができます。「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブを開くには、「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを開く」 > 「ビジュアル・デザイナー」を選択します。
2. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューまたはエディター・ウィンドウから、プロパティを表示または変更したいエレメントまたはオブジェクトを選択します。エレメントまたはオブジェクトを選択すると、そのプロパティが「プロパティ」ビューに表示されます。
3. 変更するプロパティのプロパティ・セルをクリックし、値を入力します。入力する値はプロパティによって異なります。定数、グローバルまたはローカル・パラメーター、照会結果に関連付けられた列名、使用可能な値のリストからの選択、あるいは式になります。入力する値は、プロパティに必要なデータ・タイプに一致する必要があります。
4. 式デザイナーを使用して、プロパティ値を指定することができます。「プロパティ」ビューの「式デザイナーで編集」ツールバー・ボタンをクリックして、「式デザイナー」を開きます。
5. 変数バーを使用して、グローバル・パラメーターまたはローカル・パラメーターを使用するプロパティ値か、または一連の照会結果から列名を使用するプロパティ値を指定することができます。



## オブジェクト・グループのプロパティの指定

エディター・ウィンドウで選択したオブジェクトのグループに対してプロパティを指定することができます。

### このタスクについて

オブジェクトのグループにプロパティ値を指定するには:

#### 手順

1. 「エディター」ウィンドウで、アクティブになっているビジュアル・プロジェクト・キャンバスをクリックします。
2. 左マウス・ボタンを押したままマウスを移動して、プロパティを変更するオブジェクトを囲みます。
3. 選択されているすべてのオブジェクトに共通のプロパティが「プロパティ」ビューにリストされます。表示されているプロパティの値が、選択されているすべてのオブジェクトで同じである場合、その値は「値」列に表示されます。選択されたいずれかのオブジェクトが異なる値を持つ場合、フィールドは空白になります。
4. 変更するプロパティのプロパティ・フィールドをクリックし、必要な値を入力します。選択されているオブジェクトすべてに変更が加えられます。

## 変数バーを使用したプロパティ値の指定

変数バーを使用して、プロパティ値を指定できます。「変数」バーは、メニュー・バーにあります。

### このタスクについて

「変数」バーで以下のいずれかのオプションを選択して、オブジェクトのプロパティ値を設定します。

- ビジュアル・プロジェクトに定義されているグローバル・パラメーターまたはローカル・パラメーター。
- 一連の照会結果からの列名。

変数バーを使用してプロパティ値を指定するには:

#### 手順

1. 「変数」バーの最初のドロップダウン・リストから以下のいずれかの項目を選択します。
  - 「グローバル・パラメーター」を選択すると、定義されているすべてのグローバル変数が 2 番目のドロップダウン・リストに取り込まれます。使用するグローバル変数を選択します。
  - 「ローカル・パラメーター」を選択すると、定義されているすべてのローカル変数が 2 番目のドロップダウン・リストに取り込まれます。使用するローカル変数を選択します。
  - プロジェクト用に定義された照会の 1 つ。照会結果に含まれる各列の名前が 2 番目のドロップダウン・リストにリストされます。使用する列名を選択します。

2. 「変数をオブジェクトにリンク」アイコンをクリックします。赤色の点が表示されます。
3. マウスを赤色の点に重ね、赤い点から表示される点線を「プロパティ」ビューにリストされたプロパティ・セルにドラッグします。
4. プロパティ・フィールドをクリックします。列名またはパラメーター名が、選択したプロパティの値として挿入されます。

## 式デザイナーを使用したプロパティ値の指定

式デザイナーを使用して、選択したオブジェクトに関連付けるプロパティ値を指定できます。

### このタスクについて

式デザイナーは、オブジェクトのプロパティを指定する代替方法です。オブジェクトのプロパティを「プロパティ」ビューのプロパティ・セルに直接入力する代わりに、式デザイナーのフィールドとボタンを、プロパティ値の作成およびフォーマットに使用します。式デザイナーを使用したオブジェクトのプロパティの指定には、利点があります。オブジェクトに指定可能なプロパティごとに、プロパティ値のフォーマットに利用できるテンプレートが提供されます。さらに、プロパティ値の処理や表示に使用できるスペースが増えます (式を使用した場合、このスペースは大幅に大きくなります)。

式デザイナーを使用してプロパティ値を指定するには:

### 手順

1. 「プロパティ」ビューからプロパティを選択します。「プロパティ」ビューの「式デザイナーで編集」ツールバー・ボタンをクリックします。「式デザイナー」ウィンドウが開きます。
2. ウィンドウの左ペインで、ビジュアル・プロジェクトの各エレメントが「式デザイナー」ツリーにリストされます。各エレメントを拡張すると、エレメントのプロパティのリストが示されます。
3. プロパティ値の式に組み込むことができる各組み込み関数は、ウィンドウの右ペインにリストされます。使用可能な関数を表示するには、関数カテゴリーを展開します。フィルター・フィールドを使用して、表示する関数のリストをフィルター処理することができます。フィルター・フィールドに 1 文字以上を入力することができます。入力された文字で始まる関数がすべてリストされます。特定の関数名を入力することもでき、そうするとその関数がリストされます。
4. 編集中的プロパティは、プロパティ値フィールドの上に表示されます。プロパティ値フィールドでプロパティ値を作成するために、プロパティと関数の両方を使用できます。関数をダブルクリックすると、関数がプロパティ値フィールドに挿入されます。プロパティをダブルクリックすると、その参照がプロパティ値フィールドに挿入されます。どちらの場合も、関数またはプロパティは、既にプロパティ値フィールド内にあるものに追加されます。内容を置き換えるには、置き換えたいものをプロパティ・フィールドで強調表示し、そのプロパティまたは関数をダブルクリックします。内容を挿入するには、カーソルをプロパティ・フィールドに置き、そのプロパティまたは関数上でダブル

ルをクリックします。関数は、プロパティ・フィールドにテンプレート・フォームで配置されます。使用するロジックに応じて、パラメーターが固有の値で置き換えられます。

5. プロパティ値ボックスの下にある以下のボタンは、プロパティ式の作成時に役に立ちます。
  - 取り消し: このボタンを選択すると、プロパティ値フィールドで作成中の式に最後に加えた編集を取り消すことができます。
  - 再実行: このボタンを選択すると、プロパティ値フィールドで作成中の式に最後に加えた編集を再実行することができます。
  - 編集: このボタンを使用すると、新しいプロパティ値を定義する式を作成できます。式を作成するプロパティは、プロパティ値フィールドの上に表示されます。編集するプロパティを変更するには、ウィンドウの左ペインの「式デザイナー」ツリーから新規プロパティを選択し、「編集」ボタンをクリックします。編集する新規プロパティは、プロパティ値フィールドの上に表示されます。「編集」ボタンを使用して、「式デザイナー」ウィンドウを閉じずに複数のプロパティ値を設定または編集することができます。変更したプロパティはそれぞれ「式デザイナー」ツリー内でアスタリスクが付けられます。
  - 「数値のフォーマット」ダイアログを開く: このボタンを選択すると、数値のフォーマットに使用できるテンプレートのリストを開くことができます。
  - 式の単純化: このボタンをクリックすると、プロパティ値フィールド内に作成した式を構文解析することができます。式は検討され、可能なら単純化されます。
  - 色の選択: このボタンを選択して、「色」ウィンドウを開くことができます。「色」ウィンドウから色を選択し、「OK」をクリックします。16 進の色番号が、プロパティ値フィールドに表示されている強調表示された色パラメーターのものに置き換えられます。
6. 「適用」をクリックします。プロパティ値が更新されます。
7. 「OK」をクリックします。プロパティ値が更新され、「プロパティ」ビューに表示されます。「式デザイナー」ウィンドウが閉じます。

## プロパティ式の作成

プロパティ式は、オブジェクトのプロパティの値として指定できる条件式または数式です。これらの式は、ダッシュボードまたは報告書が表示されるときに、実行時のプロパティ値を取得するために評価されます。

プロパティ式により、オブジェクトのプロパティの動的な値を作成できます。多くの業務上の決定は、市場の状態、販売状況、運用支出、新しい場所、損益マージン、およびお客様の満足度などの要因に依存します。これらの要因は変化しやすいものです。

プロパティ式の要素:

プロパティ式は、実行時に値を提供する 1 つ以上の要素で構成されます。

以下の要素がプロパティ式を構成します。

- 関数: 関数の例には、Min() や StdDev() などの算術演算または統計演算があります。関数を使用して、値を計算したり、値を変換したり、またはブール条件を指定したりできます。
- 演算子: 演算子の例には、=、>、< があります。演算子を使用して、算術計算の実行、値の比較、または値の連結を行うことができます。
- 列名: 列名の例は、照会で戻されたデータの列に割り当てられている名前になります。これらの列名は、式で使用できます。
- フォーマット記号: フォーマット記号の例には、\$、#、% があります。これらの記号を使用して、数値および日付/時刻値の形式を設定できます。
- 定数: 定数の例としては、あらゆる有効なデータ・タイプの値があります。例えば、ブール・データ・タイプの True および False などです。定数を関数の中で、演算子や列名と組み合わせて使用することができますし、単体で使用して該当するデータ・タイプのプロパティ値を指定することもできます。

プロパティ戻り値の必須データ・タイプ:

プロパティ値に式を指定する場合、式は、プロパティが必要とするデータ・タイプの値を返さなければなりません。

オブジェクト・プロパティおよびそれがサポートするデータ・タイプは、オブジェクト・プロパティ・リファレンスでオブジェクトごとにリストされています。必要な値が必要なデータ・タイプで返すには、組み込み変換関数のいずれかを使用して、それを適切なタイプに変換することができます。

プロパティ式の作成の構文規則:

プロパティ式を作成する場合は、正しい構文を使用しなければなりません。

次の表は、プロパティ式を入力する場合のいくつかの基本的な規則を示しています。

タスク	規則	例
パラメーターまたは列名などの計算値を表示する	計算式に等号 (=) を使用する	=cust_num
リテラル値を表示する	テキストで表示するとおりにリテラルを入力する	Sales Organization
式にテキスト・ストリングを表示する	ストリングが計算値、列、またはパラメーターも含む結合式の一部である場合、引用符 (" ") で囲む	"My name is: "+fname
複数のテキスト・ストリングを連結する	正符号 (+) を使用してテキスト・ストリングを連結する	=Click here to go to"+Dept+" department
複数の数値を追加する	正符号 (+) を使用して定数または数値データのパラメーターを追加する	=Param1+5

タスク	規則	例
式に復帰を挿入する	newline を入力する。式のエレメントが同じデータ・タイプである場合は、その前後に正符号 (+) を使用します。そうでない場合は、Concat() 関数に newline を組み込みます。	=city+newline+state
別のプロパティの値を表示する	等号 (=) にオブジェクト名、およびドットを付けてプロパティ名を使用する	=Label1.Text

#### 計算式とリテラル:

すべてのプロパティ式は、等号 (=) で始まります。これは、プロパティが一連の固定文字として解釈されるのではなく、計算される必要があることを示しています。

以下の例は、ボタン・オブジェクトの **ToolTipText** プロパティに対する 2 つのプロパティ式を示しています。

#### 例 1

例えば「2+3」で、リテラル値が定義されます。

ツールチップには、「2+3」という文字がそのまま表示されることとなります。

#### 例 2

例えば「=2+3」で、計算値が定義されます。

ツールチップには、「5」が表示されることとなります。

#### プロパティ式の例:

プロパティ式の構文規則のいくつかを、例を挙げてわかりやすく説明します。

#### if() ステートメントの作成

if() 関数を使用すると、ブール (真/偽) のプロパティ値を作成できます。例えば、指定される条件が満たされる場合は青、満たされない場合は黄色でオブジェクトを表示する場合、以下のような式を作成できます。

```
Color =if(S_terrain="water", Blue, Yellow)
```

この例では、オブジェクトの条件はパラメーター S\_terrain に基づいています。オブジェクトは、マップ・レイアウト内の多角形、またはグラフ上のデータ記号かもしれません。シーン・パラメーターの値が water である場合、オブジェクトの色は青です。それ以外の場合、色は黄色です。

if() 関数に、列値または数値のしきい値などの異なる条件を指定することができます。例えば、ビジュアル・プロジェクトが変化に反応するようにし、変化の重要度をプロジェクト内のオブジェクトの外観で示すことができます。例えば、収益は黒、損失は赤というように、色を使って損益をビジュ

アルに表示できます。次のプロパティ式を使用して、オブジェクトの色のプロパティで損益を見分けることができます。

```
Color =if (sales>=expenses, Black, Red)
```

テキスト・ストリングで列データを表示

戻されるレコードに関する情報を明示するラベル・オブジェクトを追加することにより、レイアウト・オブジェクトのデータ・ポイントが表す情報価値を高めることができます。例えば、ツリー・グラフの各データ・ポイントに店舗の部門の名前が示されるようにするとします。名前の中には **Department** という語を付けます。この場合は、ラベル・オブジェクトをレイアウト・オブジェクトのデータ・テンプレートに挿入し、次に列名とリテラル・ストリングを結合するプロパティ式を指定します。

```
Value ="Department: "+newline+dept_desc
```

この式では、dept\_desc は照会によってデータ・テンプレートに戻される列です。

## 「イベント」ビューでの作業

イベントは、デザイナーによってビジュアル・ダッシュボードに組み込まれるアクションです。このアクションは、必要なナビゲーションおよび対話の機能をすべてダッシュボードに提供します。「イベント」ビューにはこれらのイベントが表示されます。

「イベント」ビューは 2 つのペインで構成されています。

上部ペイン には、イベント・ツリーが表示されるほか、必要なイベントを素早く見つけるために使用できるフィルター・テキスト・フィールドも表示されます。イベント・ツリーには、ビジュアル・プロジェクトで選択されたオブジェクトに使用できるイベントがすべて含まれています。各オブジェクトにはデフォルト・イベントがあります。このデフォルト・イベントは、最初のルート・ツリー・ノードに表示されます。選択したオブジェクトに割り当てることができる他イベントはすべて、カテゴリ別にグループ化されて、適切なツリー・ノードの下に表示されます。

「イベント」ビューの下部ペイン には、選択されたイベントに対して定義されているイベント・アクションのリストと、その編集用のツールが表示されます。

「イベント」ビューを開くには、以下のステップを実行します。

1. メインメニューから、「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「その他」を選択して、「ビジュアル・デザイナー・カテゴリ」を展開します。
2. オプションのリストから「イベント」を選択し、「OK」をクリックします。

設計者はイベントをオブジェクトに割り当てるときに、イベントの発生時にトリガーされる追加アクションを指定できます。オブジェクトにイベントを割り当てる方法、およびイベントの発生時にトリガーされるアクションを指定する方法については、『イベント・アクション・ナビゲーションの設定』トピックを参照してください。

イベントおよびイベント・アクションをビジュアル・ダッシュボードに割り当てる方法については、『イベントの割り当てとイベント・アクションの設定』トピックを参照してください。

## 「パレット」ビューでの作業

「パレット」ビューには、ビジュアル・プロジェクトに挿入できるすべてのグラフィック・オブジェクトが表示されます。

### このタスクについて

オブジェクトは、以下のパレット (ドロワー とも呼ばれる) にグループ化されています。

#### よく使用する項目

「よく使用する項目」パレットには、オブジェクト間のナビゲーションをさらに容易にするために、最も使用される 10 個のオブジェクトが含まれています。ユーザーは、「パレットのカスタマイズ」ダイアログで、このパレットにオブジェクトを追加したり、そのオブジェクトを除去したりできます。

注: 「パレットのカスタマイズ」ダイアログを開くには、パレット上にある任意のオブジェクトを右クリックして「カスタマイズ」を選択します。

#### 図形要素

「図形要素」パレットには、テキスト、長方形、多角形、ピクチャー、および配置パネルを表示するために使用できる基本グラフィック・オブジェクトが含まれます。

#### コントロール

「コントロール」パレットには、スライダー、ボタン、およびコンボ・ボックス、リスト・ボックスといった、標準的な編集コントロールを表示するために使用できるグラフィック・オブジェクトが含まれます。加えて、このパレットには、レイアウト・オブジェクトに表示されるマルチディメンション・データをフィルターに掛けるための簡単な方法を提供するスライサー・オブジェクトと、ユーザーが日時情報を入力するための簡単な方法を提供する日時オブジェクトがあります。「コントロール」パレットは、ビジュアル・ダッシュボードの作成時にのみ使用できます。

#### データ記号

「データ記号」パレットには、レイアウト・オブジェクトの照会結果データ表示機能を強化するためにレイアウト・オブジェクトに組み込むよう設計されたグラフィック・オブジェクトが含まれます。データ記号は、レイアウト・オブジェクトから独立して使用することも可能で、その場合は、「図形要素」パレットに含まれるオブジェクトに似ています。

#### レイアウト

「レイアウト」パレットには、照会の結果取得されたデータを表示するために使用できるグラフィック・オブジェクトが含まれます。レイアウトには、幅広い種類の図表、グラフ、マップ、表、およびグリッドがあります。

#### コンテナ

「コンテナ」パレットには、2 つのシーンを 1 つにリンクさせるときに使用できる組み込みシーン・オブジェクトと、テキスト・ファイルや

HTML ページなどの外部コンテンツをビジュアル・ダッシュボードに追加するときには使用できる組み込みコンテンツ・オブジェクトがあります。

**各種** 「各種」パレットには、イベントの発生を時間間隔に基づいて自動化するのに使用されるタイマー・オブジェクトが含まれます。

**コネクター**

「コネクター」パレットには、レイアウト・オブジェクト内のデータ・ポイント間、またはビジュアル報告書やダッシュボードに挿入されている 2 つのグラフィック・オブジェクト間の、視覚的なリンクを表示するために使用できるグラフィック・オブジェクトが含まれます。コネクターには、さまざまな種類の直線および曲線があります。

**カスタム**

「カスタム」パレットには、他の任意のパレットからのオブジェクトが含まれます。ご自分の責任で、「カスタム」パレットにあるオブジェクトを配置してください。カスタム・プロパティを設定したオブジェクトや、頻繁に使用するオブジェクトなどをカスタム・パレットに入れておくことができます。これらのオブジェクトをカスタム・パレットに配置すれば、簡単にアクセスできるようになります。

「パレット」ビューには、ビジュアル・プロジェクトで作業するときには使用できるツールも含まれています。「パレット」ビューの上部に、以下のツールがあります。

**選択** 「選択」ツールは、オブジェクトを選択するために使用します。

「グラブ」および「パン」

「グラブ」および「パン」ツールは、「スクリーン」エディター・ウィンドウ内でダッシュボード・シーンを移動するために使用します。

これらのツールは、ビジュアル・ダッシュボードを作成するときのみ、使用できます。

**接続** 「接続」ツールを使用すると、ユーザーは、ダッシュボード・コントロール・オブジェクト (コンボ・ボックス・オブジェクト、リスト・ボックス・オブジェクトなど) とデータ主導型のレイアウト・オブジェクト (グリッド・オブジェクト、棒グラフ・オブジェクトなど) の間の従属関係を定義できます。さらに接続ツールを使用して、テキスト・ボックス・オブジェクトやラベル・オブジェクトなどの、非照会主導型のオブジェクト間の依存関係を定義することもできます。

接続ツールは、ビジュアル・ダッシュボードの作成時にのみ使用可能です。

## ビジュアル・プロジェクト

ビジュアル・プロジェクトには、「パレット」ビューにリストされているグラフィック・オブジェクトをどれでも挿入できます。

### このタスクについて

ビジュアル・ダッシュボードには、「パレット」ビューのすべてのオブジェクトを挿入できます。「パレット」ビューで選択可能なオブジェクトのすべてが、ビジュアル報告書に挿入できるわけではありません。ビジュアル報告書に挿入できないオ



プロジェクトは、対話式プロパティを持っていません。ビジュアル報告書は対話式でないため、このようなオブジェクトをビジュアル報告書に挿入することは意味がありません。

グラフィカル・オブジェクトをビジュアル・プロジェクトに挿入するには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. 「パレット」ビューを開きます。

一般に、「パレット」ビューは、ビジュアル・プロジェクトがアクティブである場合に、エディター・ウィンドウ内で開きます。

「パレット」ビューが開いていない場合は、以下の方法でそれを開きます。

- a. 「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを開く」 > 「ビジュアル・デザイナー」を選択します。
- b. 「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブを開き、「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「その他 (Other)」を選択します。
- c. 「ビューの表示」ウィンドウから、「一般」 > 「パレット」を選択し、「OK」をクリックします。

「パレット」ビューが開きます。

2. エディター・ウィンドウで、オブジェクトを追加するビジュアル報告書のページまたはビジュアル・ダッシュボードのシーンを選択します。ページまたはシーンがエディター内で開いていない場合は、プロジェクト・エクスプローラーでそのページまたはシーンをダブルクリックします。
3. オブジェクトをエディター・ウィンドウに挿入するには、以下の 2 つの方法があります。
  - 「パレット」ビューで、ビジュアル・プロジェクトに挿入するオブジェクトをクリックし、次にエディター・ウィンドウをクリックします。エディター・ウィンドウ内で現在アクティブなビジュアル・プロジェクトエレメントのキャンバス上に、オブジェクトがドロウされます。オブジェクトはデフォルトの位置に配置され、デフォルト・サイズにドロウされます。「プロパティ」ビューには、オブジェクトのプロパティが表示されます。「プロジェクト・エクスプローラー」ツリーには、オブジェクトの名前が追加されます。
  - 「パレット」ビューで、ビジュアル・プロジェクトに挿入するオブジェクトをクリックし、次にエディター・ウィンドウをクリックして、オブジェクトの位置とサイズを定義する長方形の領域を対角線上にドラッグします。オブジェクトが、ドラッグした位置とサイズでキャンバス上にドロウされます。「プロパティ」ビューには、オブジェクトのプロパティが表示されます。「プロジェクト・エクスプローラー」ツリーには、オブジェクトの名前が追加されます。
4. オブジェクトを挿入すると、「プロパティ」ビューを使用して、オブジェクトのプロパティを変更できるようになります。
5. 「パレット」ビューに表示されるオブジェクトの表示方法を変更するには、「パレット」ビューのどこかを右クリックしてポップアップ・メニューを開きます。

「パレット」ビューでどのようにオブジェクトを表示させるかに応じて、ポップアップ・メニューに提供されたコマンドのうちの 1 つを選択します。

## レイアウト・ウィザードを使用したビジュアル・プロジェクトへのオブジェクトの挿入

レイアウト・ウィザードでは、リポジトリ・エクスプローラー・ツリーからビジュアル・プロジェクトのエディター領域にソース照会をドラッグすることによって、オブジェクトをビジュアル・プロジェクトに挿入することができます。

### このタスクについて

レイアウト・ウィザードを使用してオブジェクトを作成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで、オブジェクトのソース照会を選択し、ビジュアル・プロジェクトのエディター領域にドラッグします。「レイアウト・ウィザード」が開きます。
2. ウィザードの「照会役割を選択します」ページで、いずれかのオプションを選択して、「次へ」をクリックします。
  - 照会を新規オブジェクトのデータのソースとして使用する場合、「データ・ソース」を選択します。
  - 照会に複数の表示モードがあり、ビジュアル・プロジェクトのオブジェクトとしてそれらのいずれかを使用する場合は、「レイアウト」を選択します。選択したオプションに応じて、「レイアウト・カテゴリーとスタイルを選択します」ページまたは「図表を選択または作成します」ページが開きます。
3. ビジュアル・プロジェクトに挿入するオブジェクトを選択して、「次へ」をクリックします。オブジェクトに応じて、対応するウィザードが開きます。
4. 指定されたオブジェクトのウィザードの手順を実行して、オブジェクトを作成します。特定オブジェクトの作成について詳しくは、ユーザー・ヘルプの『「パレット」ビューでの作業』セクションを参照してください。

### タスクの結果

オブジェクトがビジュアル・プロジェクトに挿入されました。

## 「パレット」ビュー表示設定の変更

「パレット」ビューでオブジェクトを表示する方法を変更することができます。

### このタスクについて

「パレット」ビューでのオブジェクトの表示方法を変更するには:

#### 手順

1. 「パレット」ビューを開きます。

一般に、「パレット」ビューは、ビジュアル・プロジェクトがアクティブである場合に、エディター・ウィンドウ内で開きます。

「パレット」ビューが開いていない場合は、以下の方法でそれを開きます。

- a. 「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを開く」 > 「ビジュアル・デザイナー」を選択します。
- b. 「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブを開き、「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「その他 (Other)」を選択します。
- c. 「ビューの表示」ウィンドウから、「一般」 > 「パレット」を選択し、「OK」をクリックします。

「パレット」ビューが開きます。

注: アクティブなビジュアル・プロジェクトが存在しない場合は、パレットが使用不可になります。パレットを使用可能にするには、まずビジュアル・プロジェクトを選択する必要があります。例えば、ビジュアル報告書またはビジュアル・ダッシュボードを選択します。

2. オブジェクトのそれぞれのグループが、別個のドロワーに表示されます。ドロワーをクリックすると、ドロワーの展開表示と縮小表示が切り替わり、オブジェクト・アイコンが表示されるか、または非表示になります。
3. 「パレット」ビューのどこかを右クリックします。ポップアップ・メニューから、以下のいずれかのオプションを選択します。
  - オブジェクト・アイコンとそれぞれの名前を 2 列に配置するには、「レイアウト」→「列」。
  - オブジェクト・アイコンとそれぞれの名前をリストに配置するには、「レイアウト」→「リスト」。
  - オブジェクト・アイコンのみを表示するには、「レイアウト」→「アイコンのみ」。
  - オブジェクト・アイコンとその名前および説明を表示するには、「レイアウト」→「詳細」。
4. ポップアップ・メニューから「設定」を選択して「パレット設定」ウィンドウを開きます。このダイアログで、以下のように、アイコンの名前と説明の表示に使用するフォントの設定、レイアウト・オプションの指定、ドロワー・オプションの指定を行えます。
  - フォント・オプションを指定するには、「変更」をクリックします。「フォント」ウィンドウが開き、デフォルト・フォントを変更できるようになります。
  - レイアウト・オプションを指定するには、「レイアウト」ラジオ・グループから選択します。大きいアイコンを表示する場合は、「大きいアイコンを使用」チェック・ボックスを選択します。
  - ドロワー・オプションを指定するには、「ドロワー・オプション」ラジオ・グループから選択します。次のような選択肢があります。
    - 別のドロワーを開いているときは常に閉じる
    - 十分なスペースがない場合は自動的に閉じる
    - 閉じない

注: ドロワーのオープンおよびクローズは、各パレット・タイプのドロワーに表示されるピン・アイコンをクリックすることによっても制御できます。

ピン・オープン・アイコンをクリックすると (アイコンが強調表示されます)、別のドロワーが開くときに、現在のドロワーが開いたままになります。強調表示されたピンをクリックすると、ピン・オープン・アイコンがオフになり、別のドロワーが開くときに、それぞれのドロワーが閉じます。

5. ポップアップ・メニューから、「カスタマイズ」を選択して「パレットのカスタマイズ」ダイアログを開きます。「パレットのカスタマイズ」ウィンドウで、パレット・オブジェクトの名前と説明の変更、パレットでのオブジェクト表示の再配置、「カスタム」パレットからのオブジェクトの削除、および開始時にパレットが表示されるかどうかの制御を行えます。

## オブジェクトのデフォルト・プロパティ値の変更

ビジュアル・プロジェクトに追加する各オブジェクトは、そのオブジェクトのプロパティに設定されているデフォルト値を使用して挿入およびドロウされます。これらのオブジェクトに新しいデフォルト・プロパティを設定し、最も頻繁に使用される形でオブジェクトがドロウおよび挿入されるようにすることができます。

### このタスクについて

オブジェクトのデフォルト・プロパティ値を変更するには:

#### 手順

1. 「パレット」ビューで、変更を加えるオブジェクトを見つけます。
2. オブジェクトをクリックして、使用可能なエディター・ウィンドウに配置します。
3. 「プロパティ」ビューでプロパティを希望どおりに変更します。
4. プロパティの変更を終えたら、エディター・ウィンドウに戻ります。オブジェクトを右クリックして、ポップアップ・メニューから「デフォルトに設定」を選択します。オブジェクトのデフォルト・プロパティ値が変更されます。このタイプのオブジェクトは、「パレット」ビューから選択するたびに、新規のデフォルト・プロパティに従ってエディター・ウィンドウに挿入され、そこでドロウされます。
5. オブジェクトのオリジナルのデフォルト・プロパティを復元するには、オブジェクトを右クリックして、ポップアップ・メニューから「デフォルト・プロパティの復元」を選択します。「パレット」ビューでメニュー項目が選択できない場合、オブジェクトのデフォルト・プロパティは変更されていません。

## 接続ツールの使用

「接続」ツールを使用することにより、ユーザーはダッシュボード制御オブジェクト (コンボ・ボックス・オブジェクトやリスト・ボックス・オブジェクトなど) とデータ主導型のレイアウト・オブジェクト (グリッド・オブジェクトや棒グラフ・オブジェクトなど) の間の依存関係を簡単に定義できます。

### このタスクについて

「接続」ツールを使用して、テキスト・ボックス・オブジェクトやラベル・オブジェクトなどの、非照会主導型のオブジェクト間の依存関係を定義することもできます。接続ツールは、ビジュアル・ダッシュボードの作成時にのみ使用可能です。

「接続」ツールを使用してソース・オブジェクトをターゲット・オブジェクトに接続するには:

### 手順

1. ソース・オブジェクトを作成します。ソース・オブジェクトになるオブジェクトを「パレット」ビューから選択します。オブジェクトをダッシュボード・シーンに挿入します。多くの場合、意味ある情報をターゲット・オブジェクトに渡すことができるオブジェクトを選択します。標準的なソース・オブジェクトは、リスト・ボックス・オブジェクトやコンボ・ボックス・オブジェクトなどの制御オブジェクトです。
2. ターゲット・オブジェクトを作成します。ターゲット・オブジェクトになるオブジェクトを「パレット」ビューから選択します。オブジェクトをダッシュボード・シーンに挿入します。たいていの場合、ソース・オブジェクトから意味ある情報を受け取った後に、何らかの方法で変更できるターゲット・オブジェクトを選択します。標準的なターゲット・オブジェクトはレイアウト・オブジェクトです。レイアウト・オブジェクトを作成するときは、レイアウト・オブジェクトにデータを提供する照会を指定します。照会は、ダッシュボードの「照会」フォルダー内に置く必要があります。
3. 「パレット」ビューの「接続」ツールをクリックします。ソース・オブジェクトをクリックします。赤色の点が表示されます。ターゲット・オブジェクトをクリックします。
4. ターゲット・オブジェクトがレイアウト・オブジェクトでない場合、ソース・オブジェクトとターゲット・オブジェクトの接続は、プロパティ値を使用して行われます。使用されるプロパティ値は事前設定されたもので、接続されるオブジェクトのタイプに基づきます。「接続」ツールの処理が完了します。「プロパティ」ビューに表示されるターゲット・オブジェクトのプロパティを確認します。選択したプロパティ・セル内にソース・オブジェクトへの参照が表示されます。2つのオブジェクトを接続するために使用するプロパティを変更するために、手動で変更を加えることができます。
5. ターゲット・オブジェクトがレイアウト・オブジェクトである場合、ソース・オブジェクトとターゲット・オブジェクトの接続は、パラメーターを使用して行われます。パラメーター情報のセットアップは、以下のいずれかの方法で行います。
  - ターゲット・レイアウト・オブジェクトの照会にパラメーターが含まれていない場合、「接続オプション」ウィザードの「ソース・オブジェクトに接続する列の選択」ページが開きます。「列」リストから列を選択します。これはソース・オブジェクトから渡されたパラメーターの情報に基づいて、ターゲット・オブジェクトに表示される照会結果データをフィルターに掛けるために使用します。「終了」をクリックします。パラメーターがレイアウト・オブジェクトの照会に追加されたことが通知されます。「OK」をクリックします。2つのオブジェクトが接続されます。「接続」ツールの処理が完了します。
  - レイアウト・オブジェクトの照会にすでにパラメーターが組み込まれている場合、ウィザードの「接続タイプの選択」ページが開きます。「既存の照会パラメーターを設定」をクリックし、既存の照会パラメーターの1つを使用して、ソース・オブジェクトからターゲット・オブジェクトに接続情報を渡します。「次へ」をクリックします。ウィザードの「照会パラメーターの選

択」ページが開きます。照会に定義されている使用可能なパラメーターのリストから、パラメーターを選択します。「終了」をクリックします。「接続」ツールの処理が完了します。

- 「使用可能な表列によってフィルター」をクリックして、使用可能な表列を選択し、新規パラメーターを作成します。「接続オプション」ウィザードの「ソース・オブジェクトに接続する列の選択」ページが開きます。「列」リストから列を選択します。これはソース・オブジェクトから渡されたパラメーターの情報に基づいて、ターゲット・オブジェクトに表示される照会結果データをフィルターに掛けるために使用します。「終了」をクリックします。パラメーターがレイアウト・オブジェクトの照会に追加されたことが通知されます。「OK」をクリックします。2つのオブジェクトが接続されます。「接続」ツールの処理が完了します。

## タイマー・オブジェクトの使用

タイマー・オブジェクトを使用して、イベント・アクションの発生を時間間隔に基づいて指定または自動化できます。

### このタスクについて

タイマー・オブジェクトは「その他」パレットにあります。

タイマー・オブジェクトを挿入するには:

### 手順

1. エディター・ウィンドウで、タイマー・オブジェクトを追加するビジュアル・ダッシュボードのシーンを選択します。シーンがエディター内で開いていない場合は、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューでそのシーンをダブルクリックします。
2. 「パレット」ビューからタイマー・オブジェクトを選択し、エディター・ウィンドウをクリックします。タイマー・オブジェクトはエディター・ウィンドウのキャンバス上にドロースされ、「プロジェクト・エクスプローラー」内にノードとして追加されます。
3. 「プロパティ」ビューから、**EventInterval** プロパティ値を設定します。このプロパティに時間値を指定します。デフォルトでは、1秒に設定されます。
4. それぞれが異なる **EventInterval** プロパティの値を持つ、複数のタイマー・オブジェクトを作成することができます。例えば、あるタイマー・オブジェクトでは **EventInterval** を 1秒に設定できます。別のタイマー・オブジェクトでは **EventInterval** を 5秒に設定できます。
5. タイマー・オブジェクトが効果を持つためには**EventInterval** 時間が経過するごとにイベント・アクションが発生するように設定する必要があります。例えば、**EventInterval** プロパティを 1秒に設定した場合、特定のタイマー・オブジェクトに割り当てたイベント・アクションは 1秒ごとに発生します。
6. タイマー・オブジェクトにイベント・アクションを設定する場合、プロジェクト・エクスプローラーからタイマー・オブジェクトを選択します。
7. 「イベント」ビューで「Tick」をダブルクリックします。「[timerobjectname] 動作」ウィンドウが開きます。

8. 「新規アクションの追加」アイコンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィザードが開きます。以下のアクションの 1 つを選択して、**EventInterval** のティックごとに発生させることができます。

- 新しいロケーションへジャンプ
- 組み込みシーンへナビゲート

注: 組み込みシーン・オブジェクトが現行シーンに含まれている場合、「組み込みシーンへナビゲート」アクションは組み込みシーン・オブジェクト以外のオブジェクトに対してのみ実行できます。

- SQL ステートメントの実行

注: 「接続」フォルダー内のビジュアル・プロジェクトに対して 1 つ以上のリポジトリ接続が定義されている場合、「SQL ステートメントの実行」アクションはオブジェクトに対してのみ実行できます。

- プロシージャーの実行
- 値の設定
- 前のページのロード
- シーンの印刷
- シェル・コマンドの実行
- メッセージの表示
- JavaScript の実行
- Excel にエクスポート
- フォーカスの設定
- シーンの再ロード
- セッションの終了
- PDF にエクスポート
- Eメールの送信
- 組み込みシーンへのイベントの送信
- Cookie の保管
- Cookie のロード

どのアクションでも選択できますが、タイマー・オブジェクトの最も一般的な使い方は、別のオブジェクトの動作を制御することです。**EventInterval** のティックごとに別のオブジェクトの動作を制御するには、「値の設定」アクションを選択します。別のオブジェクトの動作を制御したい場合は、アクションを「**Tick**」イベントに割り当てるプロセスを開始する前に、オブジェクトを作成しておく必要があります。

9. 「次へ」をクリックします。次に開くウィンドウは、選択したアクションに応じて異なります。「値の設定」アクションを選択した場合は、「値の設定アクションのパラメーター」ウィンドウが開きます。
10. 「パラメーター」セルをダブルクリックします。「式デザイナー」が開きます。

11. 「式デザイナー」ツリーは、選択したビジュアル・ダッシュボードに含まれている各オブジェクトをリストします。各ティック間隔で動作が変更されるオブジェクトのノードを展開します。オブジェクトのプロパティのリストが表示されます。
12. 各ティック間隔で変更するオブジェクトのプロパティを選択します。例えば、オブジェクトがラベル・オブジェクトである場合は、**Text** プロパティを選択します。1 つ以上の使用可能な関数を使用して、間隔の各ティックでの **text** プロパティの値を指定します。
13. 「**OK**」をクリックします。実行時に、1 秒のティック間隔を使用すると、ラベル・オブジェクトの内容は指定した新規値に 1 秒ごとに変更されます。

## 図形要素オブジェクトの追加

図形要素オブジェクトは、テキスト、線、形状、配置パネル、ピクチャーなどの、グラフィック・オブジェクトです。

### このタスクについて

以下の図形要素オブジェクトがあります。

#### ラベル

テキストを、長方形のフレーム付きまたはフレームなしで表示します。

**線** 2 点を接続する直線セグメントを表示します。

#### ピクチャー

以下のいずれかのイメージ・タイプを表示します。

- グラフィック交換形式 (.gif)
- Joint Photographic Experts Group (.jpeg)
- Portable Network Graphics (.png)

#### 長方形

長方形を表示します。

#### 角が丸い長方形

角が丸い長方形を表示します。角の曲線の半径は、「プロパティ」ビューの「半径」セルで設定します。

**楕円** 焦点を x 軸または y 軸に位置合わせした標準楕円を表示します。

**矢印** 一方のエンドポイントに矢印が付いた直線セグメントを表示します。

#### 双方向矢印

両方のエンドポイントに矢印が付いた直線セグメントを表示します。

#### 折れ線

頂点同士を結ぶ直線セグメント群を表示します。頂点は **PointSet** データ・タイプを使用して指定します。

#### 線分群

接続されている、あるいはばらばらの、1 つ以上の固有の折れ線オブジェクトを表示します。



## 多角形

頂点同士を結ぶ直線セグメント群を表示します。頂点は PointSet データ・タイプを使用して指定します。最後のセグメントは最初の頂点と最後の頂点を結びます。

## 多角形群

つながっていない、1 つ以上の多角形オブジェクト群を表示します。

## 配置パネル

単一のポイントに相對させて複数のオブジェクトをグループ化し、これらのオブジェクトが単一の位置の値に基づいて一緒に移動するようにします。

## テキスト・オブジェクトの挿入:

ラベル・オブジェクトを使用して、ビジュアル・プロジェクトにテキストを挿入することができます。

## このタスクについて

テキストをビジュアル・プロジェクトに挿入するには:

## 手順

1. エディター・ウィンドウで、オブジェクトを追加するビジュアル報告書のページまたはビジュアル・ダッシュボードのシーンを選択します。ページまたはシーンがエディター内で開いていない場合は、プロジェクト・エクスプローラーでそのページまたはシーンをダブルクリックします。
2. 「パレット」ビューからラベル・オブジェクトを選択し、エディター・ウィンドウに挿入します。
3. 「プロパティ」ビューの「テキスト」プロパティ・セルに、希望するテキストを入力します。テキストの表示を規定する、または「ラベル」オブジェクトがビジュアル報告書のページまたはビジュアル・ダッシュボードのシーンで動作する方法を指定する、指定可能な多くの追加プロパティがあります。ラベル・オブジェクトにプロパティ値を指定するには、いくとおりかの方法があります。「プロパティ」ビューにリストされている値を選択する、「プロパティ」ビューに値を直接入力する、「式デザイナー」を使用する、または「変数」ツールバーを使用するなどの方法が可能です。
4. ビジュアル・ダッシュボードの場合、ラベル・オブジェクトのイベント・アクションを定義できます。これはつまり、ユーザーがマウス・クリックなどの特定のアクションをオブジェクトに対して実行した場合、シーンへのジャンプなどのイベントが実行されるということです。

## タスクの結果

### 注:

- テキスト内で改行するには、改行箇所に +newline+ を挿入します。
- テキストの周りに枠を作成するには、「プロパティ」ビューでテキスト・オブジェクトのプロパティを表示し、「LineStyle」プロパティ・セルで線のスタイルを選択します。
- 「プロパティ」ビューで、複数行のテキストをコピーおよび貼り付けることができます。改行は自動的に表示されます。

線オブジェクトの挿入:

線オブジェクトを使用して、線、矢印、双方向矢印、折れ線、または線分群をビジュアル・プロジェクトに描画できます。

このタスクについて

線、矢印、双方向矢印、折れ線、または線分群オブジェクトをビジュアル・プロジェクトに挿入するには

手順

1. エディター・ウィンドウで、オブジェクトを追加するビジュアル報告書のページまたはビジュアル・ダッシュボードのシーンを選択します。ページまたはシーンがエディター内で開いていない場合は、プロジェクト・エクスプローラーでそのページまたはシーンをダブルクリックします。
2. 「パレット」ビューから、以下の線オブジェクトのいずれか 1 つを選択します。
  - 線: このオブジェクトは、単一の線をドローするために使用します。線オブジェクトを「パレット」ビューから選択し、エディター・ウィンドウ内でクリックし (カーソルはドロー・モードを表す正符号に変わっています)、カーソルを線の終端にしたい点までドラッグし、マウス・ボタンを放します。線がドローされます。
  - 矢印: このオブジェクトは、開始点に矢印がある単一の線をドローするために使用します。矢印オブジェクトは、実際には異なるデフォルトのプロパティ値を持つ線オブジェクトです。これは線オブジェクトと同じ方法でドローします。
  - 双方向矢印: このオブジェクトは、開始点と終了点に矢印がある単一の線をドローするために使用します。双方向矢印オブジェクトは、実際には異なるデフォルトのプロパティ値を持つ線オブジェクトです。これは線オブジェクトと同じ方法でドローします。
  - 折れ線: このオブジェクトは、各線の終端で接続された複数の線をドローするために使用します。折れ線オブジェクトを「パレット」ビューから選択し、エディター・ウィンドウ内でクリックし (カーソルはドロー・モードを表す正符号に変わっています)、カーソルを最初の線の終端にしたい点まで移動し、マウス・ボタンをクリックします。次いでカーソルを 2 番目の線の終端にしたい点まで移動させ、マウス・ボタンをクリックします。これをすべての線をドローするまで続けます。すべての線のドローを終了したら、Esc (エスケープ) キーを押します。カーソルが矢印 (選択モード) に戻ります。折れ線オブジェクトのすべての線がドローされます。
  - 線分群: このオブジェクトは、複数の折れ線をドローするために使用します。線分群オブジェクトを「パレット」ビューから選択し、エディター・ウィンドウ内でクリックします (カーソルはドロー・モードを表す正符号に変わっています)。最初の折れ線をドローし、Esc キーを押します。カーソルはドロー・モードのままです。2 番目の折れ線をドローします。Esc キーを押します。カーソルが矢印 (選択モード) に戻ります。どちらの折れ線もドローされ、単一の線分群オブジェクトと見なされます。

3. 「プロパティ」ビューで、線をドロースする色、幅、スタイルなどのプロパティを希望どおりに変更します。線オブジェクトの表示を規定する、または線オブジェクトがビジュアル報告書のページまたはビジュアル・ダッシュボードのシーンで動作する方法を指定する、指定可能な多くのプロパティがあります。線オブジェクトにプロパティ値を指定するには、いくとおりかの方法があります。「プロパティ」ビューにリストされている値を選択する、「プロパティ」ビューに値を直接入力する、「式デザイナー」を使用する、または「変数」ツールバーを使用するなどの方法が可能です。
4. ビジュアル・ダッシュボードの場合、線オブジェクトのイベント・アクションを定義できます。これはつまり、ユーザーがマウス・クリックなどの特定のアクションをオブジェクトに対して実行した場合、シーンへのジャンプなどのイベントが実行されるということです。

形状オブジェクトの挿入:

図形要素形状オブジェクトには、多角形、長方形、角が丸い長方形、および楕円が含まれます。

このタスクについて

形状オブジェクトをビジュアル・プロジェクトに挿入するには:

手順

1. エディター・ウィンドウで、オブジェクトを追加するビジュアル報告書のページまたはビジュアル・ダッシュボードのシーンを選択します。ページまたはシーンがエディター内で開いていない場合は、プロジェクト・エクスプローラーでそのページまたはシーンをダブルクリックします。
2. 「パレット」ビューから、以下の形状オブジェクトのいずれか 1 つを選択します。
  - 長方形: このオブジェクトは、長方形をドロースするために使用します。長方形オブジェクトを「パレット」ビューから選択し、エディター・ウィンドウ内でクリックし (カーソルはドロース・モードを表す正符号に変わっています)、カーソルをドラッグして長方形をドロースし、マウス・ボタンを放します。長方形がドロースされます。
  - 角が丸い長方形: このオブジェクトは、角が丸い長方形をドロースするために使用します。角が丸い長方形オブジェクトを「パレット」ビューから選択し、エディター・ウィンドウ内でクリックし (カーソルはドロース・モードを表す正符号に変わっています)、カーソルをドラッグして長方形をドロースし、マウス・ボタンを放します。角が丸い長方形がドロースされます。
  - 楕円: このオブジェクトは、楕円をドロースするために使用します。楕円オブジェクトを「パレット」ビューから選択し、エディター・ウィンドウ内でクリックし (カーソルはドロース・モードを表す正符号に変わっています)、カーソルをドラッグして楕円をドロースし、マウス・ボタンを放します。楕円がドロースされます。
  - 多角形: このオブジェクトは、閉じた、複数の辺がある図形をドロースするために使用します。多角形オブジェクトを「パレット」ビューから選択し、エディター・ウィンドウ内でクリックし (カーソルはドロース・モードを表す正符号に変わっています)、カーソルを多角形の最初の線の終端にしたい点に移

動かさせ、マウス・ボタンをクリックします。次いでカーソルを多角形の 2 番目の線の終端にしたい点まで移動させ、マウス・ボタンをクリックします。これを多角形の形状がドロワーされるまで続けます。ドロワーを終了したら、Esc (エスケープ) キーを選択してドロワー・プロセスを終了します。カーソルが矢印 (選択モード) に戻ります。多角形がドロワーされます。

- 多角形群: このオブジェクトは、複数の多角形をドロワーするために使用します。多角形群オブジェクトを「パレット」ビューから選択し、エディター・ウィンドウ内でクリックします (カーソルはドロワー・モードを表す正符号に変わっています)。最初の多角形を選択し、Esc キーを押します。カーソルはドロワー・モードのままです。2 番目の多角形をドロワーします。Esc キーを押します。カーソルが矢印 (選択モード) に戻ります。どちらの多角形もドロワーされ、単一の多角形群オブジェクトと見なされます。
3. 「プロパティ」ビューで、形状オブジェクトをドロワーする色、幅、スタイルなどのプロパティを希望どおりに変更します。形状の表示を規定する、または形状オブジェクトがビジュアル報告書のページまたはビジュアル・ダッシュボードのシーンで動作する方法を指定する、指定可能な多くのプロパティがあります。形状オブジェクトにプロパティ値を指定するには、いくとおりかの方法があります。「プロパティ」ビューにリストされている値を選択する、「プロパティ」ビューに値を直接入力する、「式デザイナー」を使用する、または「変数」ツールバーを使用するなどの方法が可能です。
  4. ビジュアル・ダッシュボードの場合、形状オブジェクトのイベント・アクションを定義できます。これはつまり、ユーザーが (マウス・クリックなどの) 特定のアクションをオブジェクトに対して実行した場合、(シーンへのジャンプなどの) イベントが実行されるということです。

ピクチャー・オブジェクトの挿入:

ピクチャー・オブジェクトを使用して、ビジュアル・プロジェクトにイメージを挿入することができます。

このタスクについて

ピクチャー・オブジェクトに挿入するイメージについて、次の形式のいずれかを選択することができます。

- グラフィック交換形式 (.gif)
- Joint Photographic Experts Group (.jpeg)
- Portable Network Graphics (.png)

ピクチャー・オブジェクトをビジュアル・プロジェクトに挿入するには:

手順

1. エディター・ウィンドウで、オブジェクトを追加するビジュアル報告書のページまたはビジュアル・ダッシュボードのシーンを選択します。ページまたはシーンがエディター内で開いていない場合は、プロジェクト・エクスプローラーでそのページまたはシーンをダブルクリックします。
2. 「パレット」ビューからピクチャー・オブジェクトを選択し、エディター・ウィンドウ内をクリックします。ピクチャー・オブジェクトは、デフォルトのプロパティに基づいてドロワーされます。ピクチャー・オブジェクトを「パレット」ビ

ユーから選択し、エディター・ウィンドウ内でクリックして、カーソルをドラッグして希望のサイズをドロップし、マウス・ボタンを放します。ピクチャー・オブジェクトがドロップされます。

3. ピクチャー・オブジェクトで表示されるイメージを検索する場所を指定する必要があります。イメージは、照会結果列から検索するか、ローカルまたはネットワーク・ファイルから検索するか、あるいはビジュアル・プロジェクトに組み込むように指定できます。「プロパティ」ビューで、**ImageSource** プロパティ・セルをクリックします。セルに表示される省略符号 (...) をクリックします。「ピクチャー・ソース」ウィンドウが開きます。以下のいずれかのオプションを選択します。

- 「列」を選択して、イメージが照会結果列内に置かれるように指定します。

このオプションは、ビジュアル・プロジェクトで照会が選択対象になるときに、使用可能になります。使用可能な照会のドロップダウン・リストから、結果データを返す照会を選択します。2 番目のドロップダウン・リストから、イメージを格納する列を選択します。

「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「照会」フォルダーに、ビジュアル・プロジェクトで使用可能なすべての照会がリストされます。

- 「リンク」を選択して、イメージがローカルまたはネットワーク・ファイル内に置かれるように指定します。「リンク」を選択し、イメージ・ファイルのパスを指定します。
  - 「組み込み」を選択して、イメージをビジュアル・プロジェクトに組み込むように指定します。このオプションが使用可能であるためには、イメージが選択対象のビジュアル・プロジェクトで使用可能になっていなければなりません。使用可能であるすべてのイメージは、プロジェクト・エクスプローラーの「グローバル」フォルダーの下の「イメージ」フォルダーにリストされています。イメージを組み込むよう指定するには、「組み込み」を選択します。使用可能なイメージのドロップダウン・リストからイメージを選択します。
4. 「プロパティ」ビューで、追加のプロパティを変更して、ビジュアル報告書のページまたはビジュアル・ダッシュボードのシーンにあるピクチャー・オブジェクトの表示または動作を変更できます。プロパティ値を指定するには、いくつかの方法があります。「プロパティ」ビューにリストされている値を選択する、「プロパティ」ビューに値を直接入力する、「式デザイナー」を使用する、または「変数」ツールバーを使用するなどの方法が可能です。
  5. ビジュアル・ダッシュボードの場合、ピクチャー・オブジェクトのイベント・アクションを定義できます。これはつまり、ユーザーがマウス・クリックなどの特定のアクションをオブジェクトに対して実行した場合、シーンへのジャンプなどのイベントが実行されるということです。

#### タスクの結果

#### 配置パネル・オブジェクトの挿入:

配置パネル・オブジェクトは非表示参照オブジェクトで、これを使用して、複数の子オブジェクトを単一ポイントに相対させてグループ化し、配置することができます。

## このタスクについて

配置パネルの単一の参照点を変更されると、配置パネルに割り当てられたすべての子オブジェクトの位置も同じく変更されます。配置パネルは、レイアウト内の単一のデータ・ポイントを複数のオブジェクトで表す場合に最も役立ちます。例えば、散布図グラフでは通常、表示する各データ・ポイントごとに単一のマーカー・オブジェクトを使用します。配置パネルを使用すると、散布図グラフ内の各データ・ポイントごとに、マーカー、テキスト・ラベルおよび 2 つのボタンを図表内に表示することを指定できます。データ・ポイントの値が変更され、新しい位置に表示されると常に、配置パネル内のすべてのオブジェクトも同じく新しい位置に表示されます。

配置パネルを作成してビジュアル・プロジェクトで使用するには:

### 手順

1. エディター・ウィンドウで、オブジェクトを追加するビジュアル報告書のページまたはビジュアル・ダッシュボードのシーンを選択します。ページまたはシーンがエディター内で開いていない場合は、プロジェクト・エクスプローラーでそのページまたはシーンをダブルクリックします。
2. 「プロジェクト・エクスプローラー」で、配置パネルを追加するエレメントをビジュアル・プロジェクトから選択します。
3. 「パレット」ビューから配置パネル・オブジェクトを選択し、エディター・ウィンドウに挿入します。配置パネル・オブジェクトは、エディター・ウィンドウ内のキャンバス上にはドロウされません。これはノードとして、「プロジェクト・エクスプローラー」ビュー内に追加されます。
4. エディター・ウィンドウ内の現行のキャンバス上で、配置パネルにまとめてグループ化するグラフィック・オブジェクトを追加します。各オブジェクトがキャンバス上にドロウされ、「プロジェクト・エクスプローラー」ビュー内にノードとして挿入されます。
5. 各オブジェクトを追加し終わったら、プロジェクト・エクスプローラーでオブジェクト名を選択し、オブジェクトをドラッグして配置パネル・ノードにドロップします。配置パネルに含めるオブジェクトごとに、これを繰り返します。完了後、配置パネル内のオブジェクトのいずれかをクリックすると、これらのオブジェクトが枠で囲まれます。
6. プロジェクト・エクスプローラーで配置パネルが選択されている状態で、「プロパティ」ビューの「位置」セルを選択します。値または列名を入力します。オブジェクトのグループの中心が、指定の座標に移動します。

### タスクの結果

#### 注:

- レイアウト・オブジェクトでは、配置パネル・オブジェクトの **Location** プロパティの値は、デザインしているレイアウト・オブジェクトのタイプによって異なります。例えば、散布図グラフの場合のデータ・ポイントは、照会からの列に基づいた X 座標および Y 座標です。散布図グラフ内で配置パネルの位置を設定するには、X 座標および Y 座標の列名を指定します。配置パネルの **Location** プロパティの設定値を判断するには、そのレイアウト・オブジェクトのデフォルト・データ記号の **Location** プロパティを調べてください。

- 配置パネルの **Location** プロパティの値が単一である場合、それを照会からの単一の列で置き換えることができます。 **Location** プロパティに複数の値がある場合は、それぞれの値を照会からの適切な列で置き換え、 **Location** プロパティの正しい形式を保つようにしてください。
- デフォルトで配置パネルが挿入されている軸付きグラフの場合、配置パネルの **Location** プロパティは Pt() 関数に設定されています。これは、1 つ以上の列名を参照します。

## コントロール・オブジェクトの追加

コントロール・オブジェクトは、情報を表示したり、ユーザー入力を受け入れるために使用するグラフィック・オブジェクトです。

### このタスクについて

コントロール・オブジェクトのそれぞれのタイプには、コントロールを特定の目的に適したものにする固有のプロパティがあります。コントロール・オブジェクトを使用して、ユーザーからの入力を要求し、コントロールに対する応答を基にして後続のイベントをトリガーすることができます。コントロール・オブジェクトは、ビジュアル・ダッシュボードにのみ配置可能です。

「コントロール」パレットには、以下のコントロール・オブジェクトがあります。

#### テキスト・ボックス

ユーザーがテキストを入力および編集できるボックスを提供するためのオブジェクト。

#### ボタン

ユーザーがクリックすると、実行対象のアクションがトリガーされるオブジェクト。

#### チェック・ボックス

ユーザーによる選択のために 2 つの選択肢を提示するオブジェクト。チェック・ボックス・コントロールは、選択されているかクリアされているかのいずれかです。

#### ラジオ・グループ

クリック可能な選択項目としてユーザーに表示するラジオ・ボタンのセットがある複合オブジェクト。

#### 水平スライダー

値の範囲内で整数値を選択するためのスクロール・コントロールとして使用されるウィンドウ。

#### 垂直スライダー

値の範囲内で整数値を選択するためのスクロール・コントロールとして使用されるウィンドウ。

#### コンボ・ボックス

編集可能テキスト・フィールドとリスト・ボックスとを組み合わせたオブジェクト。表示時には、コンボ・ボックス・オブジェクトは、特定のフィールドと関連付けられた選択項目のリストを含むボックスを表示します。コンボ・ボックス・オブジェクトの編集可能テキスト・フィールドを使用して、ユーザーが追加の選択項目を入力できます。コンボ・ボックス・オブジェク

トは、「グリッド」または「棒グラフ」などの照会主導型のオブジェクトに表示される情報をフィルター処理するために使用することができます。

#### リスト・ボックス

特定のフィールド用に選択可能な値のリストをユーザーに表示するオブジェクト。リスト・ボックス・オブジェクトは、「グリッド」または「棒グラフ」などの照会主導型のオブジェクトに表示される情報をフィルター処理するために使用することができます。

**日時** ユーザーが日付または時刻の情報を簡単に入力するためのオブジェクト。入力された情報は、他のオブジェクトが使用できます。

#### ツリー

ビジュアル・ダッシュボードにデータ・オブジェクトを表示してキャンバス・オブジェクトにドラッグできるようにするオブジェクト。

#### プロンプト階層

照会に関連付けられているプロンプト階層のレベルと要素を選択することにより照会結果の該当部分を表示できるようにするオブジェクト。

#### コントロール・オブジェクトの挿入:

コントロール・オブジェクトは、情報を表示したり、ユーザー入力を受け入れるために使用するグラフィック・オブジェクトです。

#### このタスクについて

コントロール・オブジェクトのそれぞれのタイプには、コントロールを特定の目的に適したものにする固有のプロパティがあります。コントロール・オブジェクトを使用して、ユーザーからの入力を要求し、コントロールに対する応答を基にして後続のイベントをトリガーすることができます。コントロール・オブジェクトは、ビジュアル・ダッシュボードにのみ挿入できます。

#### コントロール・オブジェクトをビジュアル・ダッシュボードに挿入するには

##### 手順

1. エディター・ウィンドウで、オブジェクトを追加するビジュアル・ダッシュボードのシーンを選択します。シーンがエディター内で開いていない場合は、「プロジェクト・エクスプローラー」でそのシーンをダブルクリックします。コントロールをビジュアル・ダッシュボードの「レベル」フォルダーに挿入する場合は、そのレベルを選択します。
2. 「パレット」ビューの「コントロール」パレットからコントロール・オブジェクトを選択し、エディター・ウィンドウに挿入します。
3. 「プロパティ」ビューから、オブジェクトのプロパティを変更して、コントロール・オブジェクトを希望どおりに表示したり動作させたりすることができます。制御オブジェクトにプロパティ値を指定するには、いくとおりかの方法があります。「プロパティ」ビューにリストされている値を選択する、「プロパティ」ビューに値を直接入力する、「式デザイナー」を使用する、または「変数」ツールバーを使用するなどの方法が可能です。



4. コントロール・オブジェクトは、(たいていの場合レイアウト・オブジェクトである) ターゲット・オブジェクトに接続できます。これにより、コントロール・オブジェクトに対するユーザーの入力に基づいて、ターゲット・レイアウト・オブジェクトの動作を変更できます。

例えば、会社の部門名を持つリスト・ボックス・コントロール・オブジェクトを、すべての部門情報が含まれているグリッド・レイアウト・オブジェクトに接続することができます。2つのオブジェクトを接続するには、接続ツールを使用します。ユーザーがリスト・ボックスから部門を選択すると、その部門の情報だけがグリッドに表示されます。

5. コントロール・オブジェクトのイベント・アクションを定義できます。これはつまり、ユーザーがマウス・クリックなどの特定のアクションをオブジェクトに対して実行した場合、シーンへのジャンプなどのイベントが実行されるということです。

コンボ・ボックス・オブジェクトおよびリスト・ボックス・オブジェクトの挿入:

「コンボ・ボックス」および「リスト・ボックス」は、ビジュアル・ダッシュボードに表示されるデータを制御したり、またはユーザー入力を受け入れるために使用できるオブジェクトです。両方のオブジェクトを、照会主導型のレイアウト・オブジェクトにリンクできます。

このタスクについて

「コンボ・ボックス」または「リスト・ボックス」オブジェクトをビジュアル・ダッシュボードに追加するには、以下のステップを実行します。

手順

1. 「パレット」ビューで、「コントロール」を展開し、「コンボ・ボックス」または「リスト・ボックス」オブジェクトをクリックし、オブジェクトをビジュアル・ダッシュボード上に配置します。「コンボ・ボックス」または「リスト・ボックス」ウィザードが開きます。
2. ウィザードで、「コンボ・ボックス」または「リスト・ボックス」オブジェクトの `OptionList` および `ItemDataList` にデータを取り込む方法を指定します。

注: `OptionList` 項目は、「コンボ・ボックス」または「リスト・ボックス」オブジェクトに表示されます。`ItemDataList` 項目は、オブジェクトに表示されません。`ItemDataList` の各項目は `OptionList` の項目に対応しており、非表示の値によってオブジェクトをリンクするために使用できます。`OptionList` および `ItemDataList` は両方とも、コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトを照会主導型のレイアウト・オブジェクト (グリッドや棒グラフなど) にリンクするために使用できます。詳しくは、『照会主導型オブジェクトへのコンボ・ボックス・オブジェクトおよびリスト・ボックス・オブジェクトのリンク』のトピックを参照してください。

両方のリストのデータは、照会結果セット、静的リスト、または式から提供できます。

- 照会からのデータをリストに取り込むには、以下の手順を実行します。

- a. ウィザードの最初のページで、「はい」を選択して「次へ」をクリックします。
  - b. ソース照会を追加し、「次へ」をクリックします。
  - c. 「表示するオプションのリストがあるフィールド」リストで、OptionList に含める値を持つ照会列を選択します。
  - d. 「項目データを含むフィールド (オプション)」リストで、ItemDataList に含める値を持つ照会列を選択します。
  - e. 「終了」をクリックします。ウィザードが閉じます。
- OptionList 項目を静的リストから指定するには、以下の手順を実行します。
    - a. ウィザードの最初のページで、「いいえ」を選択して「次へ」をクリックします。
    - b. 「新しい項目を追加」をクリックします。
    - c. 項目をリストに追加します。
    - d. 「値」列の 1 つ以上のチェック・ボックスをダブルクリックして対応する項目がデフォルトで選択されるようにします。コンボ・ボックス・オブジェクトの場合、リストから 1 つの項目を選択できます。リスト・ボックス・オブジェクトの場合、リストから 1 つ以上の項目を選択できます。「終了」をクリックします。ウィザードが閉じます。
  - ItemDataList 項目を静的リストから指定するには、以下の手順を実行します。
    - a. ウィザードの最初のページで、「いいえ」を選択して「次へ」をクリックします。
    - b. 「終了」をクリックします。ウィザードが閉じます。
    - c. ビジュアル・ダッシュボードで、作成したオブジェクトをクリックして選択します。
    - d. 「プロパティ」ビューで、「ItemDataList」プロパティ・セルをクリックして省略符号 (...) をクリックします。「リスト・エディター」ウィンドウが表示されます。
    - e. ウィンドウで、リストに項目を追加し、「OK」をクリックします。
  - 式からリスト項目を指定するには、以下の手順を実行します。
    - a. ウィザードの最初のページで、「いいえ」を選択して「次へ」をクリックします。
    - b. 「終了」をクリックします。ウィザードが閉じます。
    - c. ビジュアル・ダッシュボードで、作成したオブジェクトをクリックして選択します。
    - d. 「プロパティ」ビューで、「OptionList」または「ItemDataList」プロパティ・セルをクリックして式を入力するか、プロパティ・セルをダブルクリックして「式デザイナー」を使用します。例として、式 `=lineInsert(Parameter1, 1, TextBox1.Text)` を使用します。この例で、Parameter1 はビジュアル・ダッシュボードの「TextSet」型のグローバル・パラメーターで、TextBox1.Text はリストに配置するストリングで、1 はリスト内のそのストリングの位置です。式デザイナーの使用について詳しくは、『式デザイナーを使用したプロパティ値の指定』のトピックを参照してください。

## タスクの結果

コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトをビジュアル・ダッシュボードに追加しました。「**OptionList**」プロパティ、「**ItemDataList**」プロパティ、あるいはコンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトに基づいている照会の結果セットの列を使用して、コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトを照会主導型レイアウト・オブジェクト (グリッドや棒グラフなど) にリンクします。

照会主導型オブジェクトへのコンボ・ボックス・オブジェクトおよびリスト・ボックス・オブジェクトのリンク:

接続ツールを使用して、コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトをグリッドや棒グラフなどの照会主導型のレイアウト・オブジェクトにリンクできます。

## 始める前に

オブジェクトをリンクするには、コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトの **OptionList** および **ItemDataList** にデータを取り込む必要があります。

## このタスクについて

コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトを照会主導型のレイアウト・オブジェクトにリンクするには、以下の手順を実行します。

## 手順

1. 「パレット」ビューで、「接続」ツールをクリックします。
2. ビジュアル・ダッシュボードで、コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトをクリックします。
3. レイアウト・オブジェクトをクリックします。「接続オプション」ウィザードが開きます。
4. ウィザードで、宛先オブジェクトを制御するために使用するソース照会列を指定します。

オブジェクトをリンクするには、「**OptionList**」プロパティの列、「**ItemDataList**」プロパティの列、またはコンボ・ボックス・オブジェクトあるいはリスト・ボックス・オブジェクトに基づいている照会の結果セットに由来するその他すべての列を使用できます。「**OptionList**」プロパティの列を使用する場合、コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトに表示される値によってオブジェクトをリンクします。「**ItemDataList**」プロパティの列を使用する場合、コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトに表示されているものと異なる非表示の値によってオブジェクトをリンクします。コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトに基づいている照会の結果セットの列を使用する場合、その列に保管されている値によってオブジェクトをリンクします。

「**OptionList**」プロパティまたは「**ItemDataList**」プロパティからの値によってオブジェクトをリンクする場合、「接続オプション」ウィザードと、コント

ロール・オブジェクトの「OptionList」プロパティまたは「ItemDataList」プロパティで同一の列名を指定するようにしてください。

「次へ」をクリックします。

5. コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトに接続するターゲットの照会列を選択します。「終了」をクリックします。
6. 通知ウィンドウで「OK」をクリックします。

#### タスクの結果

オブジェクトがリンクされました。これで、ターゲット・レイアウト・オブジェクトに表示される情報は、コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトで選択された項目に依存するようになります。

スライサー・オブジェクトの挿入:

スライサー・オブジェクトは、レイアウト・オブジェクトに表示されるマルチディメンション・データをフィルターに掛けるために使用されます。

このタスクについて

スライサー・オブジェクトをビジュアル・ダッシュボードに挿入し、別のレイアウト・オブジェクトへの接続を設定するには:

#### 手順

1. エディター・ウィンドウで、オブジェクトを追加するビジュアル・ダッシュボードのシーンを選択します。シーンがエディター内で開いていない場合は、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューでそのシーンをダブルクリックします。
2. 「パレット」ビューの「コントロール」パレットからスライサー・オブジェクトを選択し、エディター・ウィンドウに挿入します。「スライサー・ウィザード」が開きます。
3. ウィザードの最初のページで、フィルター操作するレイアウト・オブジェクトのOLAP 照会を選択します。
4. 「次へ」をクリックします。「ディメンションまたは階層を選択します」ページが開きます。
5. フィルター操作する照会のディメンションを選択して、「終了」をクリックします。エディター・ウィンドウで、スライサー・オブジェクトが挿入されます。
6. 「パレット」ビューで「接続」ツールを選択してから、スライサー・オブジェクトをクリックします。赤色の点が表示されます。
7. スライサー・オブジェクトをフィルター操作するレイアウト・オブジェクトをクリックします。

#### タスクの結果

実行時 (ユーザーにダッシュボードが表示される時) に、ユーザーは「スライサー」オブジェクトをクリックすると、「[ディメンション名] のフィルター」ウィンドウが開きます。「[ディメンション名] のフィルター」ダイアログで、そのレイアウト・オブジェクトに表示する階層エレメントにチェック・マークを付けて、「OK」をクリックします。そのレイアウト・オブジェクトは最新表示されて、選択

したデータのみが表示されます。例えば、レイアウト・オブジェクトの OLAP 照会の製品ディメンションをフィルター操作するようにスライサー・オブジェクトが設定されていると、ユーザーは、特定の製品の合計だけを表示するように選択できます。

日時コントロール・オブジェクトの挿入:

日時コントロール・オブジェクトを使用して、ユーザーから日付または時刻の情報を取得します。その後、ユーザーが指定した日時情報は、別のオブジェクトの動作を制御するために使用できます。

このタスクについて

日付オブジェクトをビジュアル・ダッシュボードに挿入し、別のオブジェクトへの接続を設定するには:

手順

1. エディター・ウィンドウで、オブジェクトを追加するビジュアル・ダッシュボードのシーンを選択します。シーンがエディター内で開いていない場合は、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューでそのシーンをダブルクリックします。
2. 「パレット」ビューの「コントロール」パレットから日付オブジェクトを選択し、エディター・ウィンドウに挿入します。
3. 「プロパティ」ビューで日時オブジェクトの **Mode** プロパティの値を選択します。
  - このコントロール・オブジェクトが入力として日付値を受け取るように指定するには、「**Date**」モードを選択します。
  - このコントロール・オブジェクトが入力として時刻値を受け取るように指定するには、「**Time**」モードを選択します。
  - このコントロール・オブジェクトが入力として日時値を受け取るように指定するには、「**日時**」モードを選択します。
4. 日時オブジェクトで入力された値によって制御される振る舞いを持つオブジェクトを挿入します。日時オブジェクトの戻り値を表示するオブジェクトを挿入したり、日時の戻り値をパラメーターとして使用するオブジェクトを挿入したりできます。
5. 日時オブジェクトの戻り値を表示するには:
  - a. ラベル・オブジェクトを挿入します。
  - b. 「プロパティ」ビューで、「ラベル」オブジェクトの「テキスト」プロパティを選択します。
  - c. 「式デザイナー」を開きます。
  - d. 「式デザイナー」の左側のペインで、戻り値を表示する日時オブジェクトを展開します。**Value** プロパティをダブルクリックします。
  - e. `LabelObject.Text` プロパティは、`DateTimeObject.Value` と等しくなります。
6. 日時オブジェクトの戻り値をパラメーターとして使用するには:
  - a. 日付列を含む表を照会するための照会オブジェクト (`Query1`) を作成します。照会には、パラメーターが組み込まれている必要があります。例えば、

Select \* from q.interview where INTDATE=&dateparameter とします。ダッシュボードの「照会」フォルダーにこの照会を保存 (または照会を移動) すると、置換変数と同じ名前のパラメーターが作成されます。この例では、dateparameter という名前のパラメーターが作成されます。

- b. 「プロジェクト・エクスプローラー」で、「照会」フォルダーを展開してから Query1 フォルダーを展開し、パラメーターを右クリックします。ポップアップ・メニューから「パラメーターの編集」を選択します。パラメーターは、照会の中に存在するために作成される場合、リテラルのデータ・タイプで作成されます。パラメーターのデータ・タイプを日時に変更してください。パラメーターのデフォルト値を設定します。「OK」をクリックします。
- c. 照会パラメーター値が日時オブジェクトの戻り値と等しくなるように設定します。「プロジェクト・エクスプローラー」で、パラメーター値を設定するために戻り値を使用する日時オブジェクトを選択します。「プロパティ」ビューで、この日時オブジェクトの **Value** プロパティを選択します。「式デザイナー」を開きます。「式デザイナー」の左側のペインで、ダッシュボードの「照会」フォルダーを展開します。Query1 照会を展開します。「パラメーター」フォルダーを展開します。dateparameter パラメーターをダブルクリックします。DateTimeObject.Value プロパティが、dateparameter と等しくなるように設定されます。
- d. 関連付けられた照会が Query1 である、グリッド・オブジェクトを挿入します。Query1 は dateparameter を使用して、どの行をグリッドに組み込むかを制御します。この例では、dateparameter の値は日時オブジェクトの **Value** プロパティから提供されます。
- e. さらに、接続ツールを使用して、日時オブジェクトとグリッド・オブジェクトとの間の接続を設定することもできます。

ツリー・コントロール・オブジェクトの挿入:

ツリー・オブジェクトには追加メカニズムが備わっています。このメカニズムを使用すれば、ビジュアル・ダッシュボードにオブジェクトを表示したり、ツリーからキャンバス・オブジェクトにオブジェクトをドラッグしたりできます。

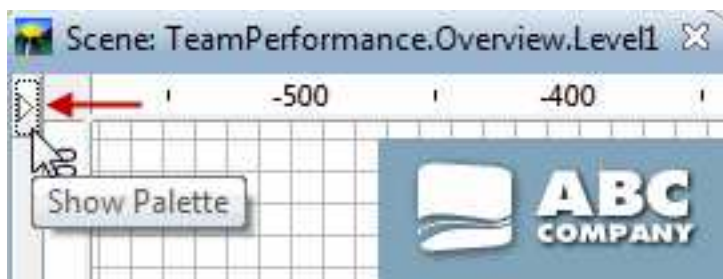
このタスクについて

ツリー・オブジェクトをビジュアル・ダッシュボードに挿入するには、次のようにします。

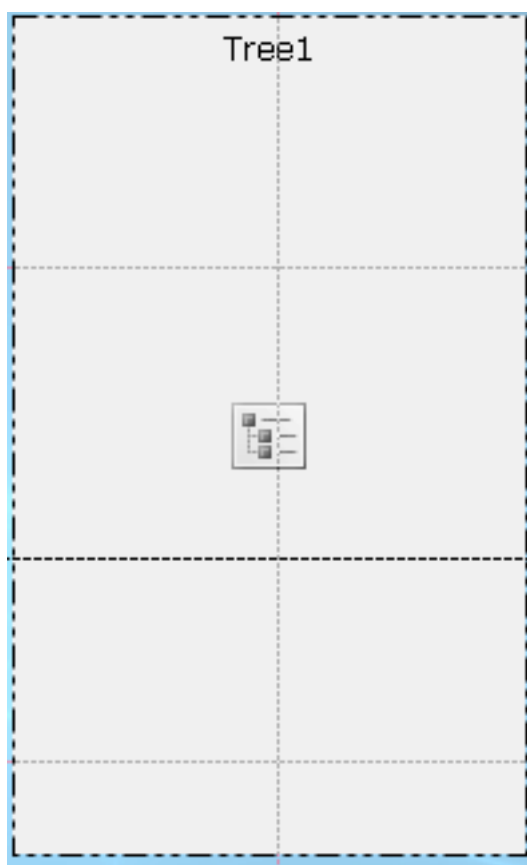
手順

1. ビジュアル・ダッシュボードがワークベンチ編集機能域の「キャンバス」タブで開かれていることを確認します。
2. 「パレットの表示」アイコンをクリックして、ビジュアル・ダッシュボードに追加できる要素が保持されているフォルダーのリストを表示します。

注: 「パレットの表示」アイコンは、エディター領域の右上隅にあります。



3. 「パレット」ビューの「コントロール」パレットから「ツリー」オブジェクトを選択して編集機能ウィンドウに挿入します。 ツリー・オブジェクトがビジュアル・ダッシュボードに追加されます。 デフォルトでは、ツリー・オブジェクトの名前は `Tree1` であり、このオブジェクトは、点線の境界線が付いたグレーの枠



としてエディター領域に表示されます。

#### タスクの結果

ツリー・オブジェクトには、データ・ビジュアル・オブジェクトおよびデータ変換オブジェクトの階層構造を示すビューがあります。

ツリーの階層構造を表示するには、編集機能を実行時モードに切り替えます。

## 次のタスク

実行時モードでは、ビジュアル・ダッシュボード・オブジェクトをツリー・オブジェクトからキャンバス・オブジェクトにドラッグできます。

プロンプト階層コントロール・オブジェクトの挿入:

プロンプト階層オブジェクトは、表示されたオプションのフラット・リストまたは階層リストからユーザーが 1 つ以上の値を選択できるようにするためのコントロールです。

## このタスクについて

ユーザーはプロンプト階層コントロール・オブジェクトを使用して、照会結果に表示される階層レベルを制御したり、照会結果に表示されるプロンプト階層の個別の要素を制御したりできます。例えば、関連プロンプト階層を持つ照会によってデータが追加されるテーブルを作成します。次にプロンプト階層コントロールを作成し、それを照会のプロンプト階層にリンクします。これで、ダッシュボードを実行するときに、ウィンドウを開いて、照会データのどの部分をテーブルに表示するのかを選択できるようになります。

プロンプト階層コントロール・オブジェクトを挿入するには、次のようにします。

## 手順

1. エディター・ウィンドウで、オブジェクトを追加するビジュアル・ダッシュボードのシーンを選択します。シーンがエディター内で開いていない場合は、「プロジェクト・エクスプローラー」でページまたはシーンをダブルクリックします。
2. 「パレット」ビューで、プロンプト階層オブジェクトを選択して編集機能ウィンドウ内をクリックするか、またはプロンプト階層オブジェクトをダブルクリックします。プロンプト階層オブジェクトが、デフォルト・プロパティに基づいてドロウされます。

注: また、プロンプト階層オブジェクトを「パレット」ビューから選択して、編集機能ウィンドウ内でクリックし、カーソルをドラッグして希望のサイズをドロウし、マウス・ボタンを放すこともできます。プロンプト階層オブジェクトがドロウされます。

3. 「照会」ドロップダウン・リストから、コントロール・オブジェクトに関係付ける照会を選択します。

注: 「照会」ドロップダウン・リストでは、「プロジェクト・エクスプローラー」の「照会」フォルダーに以前に追加されたすべての照会を選択できます。

4. 「プロンプト階層」ドロップダウン・リストから、オブジェクトで制御するプロンプト階層を選択します。

注: 「プロンプト階層」ドロップダウン・リストでは、「プロジェクト・エクスプローラー」の「照会」フォルダーにある照会に以前にリンクされたすべてのプロンプト階層を選択できます。ダッシュボードの照会に関連付けられたプロンプト階層が存在しない場合、このドロップダウン・リストは空です。

5. 「終了」をクリックします。「プロンプト階層」ウィザードが閉じて、新規のプロンプト階層コントロール・オブジェクトがキャンバスに表示されます。



## データ記号オブジェクトの追加

データ記号オブジェクトは、レイアウト・オブジェクト内でデータ・ポイントを表すために使用されるアイコンです。

### このタスクについて

グラフィック・レイアウト・オブジェクトにはそれぞれ、デフォルトのデータ記号オブジェクトが含まれており、レイアウト・オブジェクト内ではこれを使用してデータを表示します。データ記号オブジェクトを使用して、レイアウト・オブジェクト内のデフォルトのデータ記号を変更したり、レイアウト・オブジェクト内に 2 番目のデータ・レイヤーを作成したり、あるいは単独で使用して、ビジュアル・プロジェクトに直接挿入することができます (例えば、レイアウトの凡例を作成するため)。

「データ記号」パレットには、以下のデータ記号オブジェクトがあります。

#### Google マップ・マーカー

データ・ポイントを Google マップ・オブジェクト上のマップ・マーカーとして表示するデータ記号オブジェクト。

「Google マップ・マーカー」は、ビジュアル・ダッシュボードでのみ使用可能です。

#### マーカー

構成可能な形状で表示されるデータ記号。多くの場合、マーカーは、軸を使用するグラフでデータ・ポイントを表すのに使用されます。マーカーの形状は、塗りつぶされたひし形、十字形、またはその他の形状のいずれかに変更できます。

#### 垂直値バー

照会によって戻されるデータ値を高さとする縦長長方形で表されるデータ記号。多くの場合、垂直値バーは、XY グラフの Y 軸方向のバー値を作成するのに使用されます。

#### 垂直ラベル・バー

X 軸方向の位置を決めるラベルと、Y 軸方向の高さを決定する数値により記述される長方形として表されるデータ記号。

#### 水平値バー

照会によって戻されるデータ値が幅となる横長長方形として表示されるデータ記号。多くの場合、水平値バーは、XY グラフの X 軸方向のバー値を作成するのに使用されます。

#### 水平ラベル・バー

データ記号であり、Y 軸に沿ってそれを配置するラベルおよび X 軸に沿ってその長さを決定する数値によって記述される長方形で表示されます。

#### 価格区間バー

1 本の縦線の左右に水平線の目盛りを付けたものとして表示されるデータ記号。これは、特定の時間間隔で 4 つの数値を表示するのに使用されます。多くの場合、価格区間バーは、特定の日の株価の始値、終値、高値、安値、その他の指標の表示に使用されます。価格区間バーの形状を変更して、始値/終値および高値/安値の目盛りマークをオンまたはオフにすることができます。

## ローソク足

縦長の長方形として表されるデータ記号。特定の時間間隔で 4 つの数値を表示するために使用されます。ローソク足は通常、特定の日の株価の始値、終値、高値、安値を表示するために使用され、ローソク足の色は株価の上昇または下落を示すように設計されています。

## イベント帯域

変数幅がグラフの下部から上部まで拡張する長方形として表示されるデータ記号。これは、軸に沿って X 値の範囲 (例、イベントが続いた時間の長さ) を表示するのに使用されます。多くの場合、イベント帯域は、他のデータ・レイヤーと組み合わせることにより、他のデータに対応するイベントを示すために使用されます。

## しきい値帯域

水平の長方形で表示されるデータ記号。しきい値帯域は、イベント帯域のデータ記号によく似ています。これは Y 値の範囲を軸沿いに表示するのに使用されます。多くの場合、他の一連のデータに対応するしきい値を表示するために他のデータ・レイヤーと共に使用されます。

## データ記号オブジェクトの挿入:

データ記号は、レイアウト・オブジェクト内でデータ・ポイントを表すために使用されるアイコンです。

## このタスクについて

グラフィック・レイアウト・オブジェクトにはそれぞれ、デフォルトのデータ記号オブジェクトが含まれており、レイアウト内ではこれを使用してデータを表示します。データ記号オブジェクトを使用して、レイアウト・オブジェクト内のデフォルトのデータ記号を変更したり、レイアウト・オブジェクト内に 2 番目のデータ・レイヤーを作成したり、あるいは単独で使用して、シーンに直接挿入することができます (例えば、レイアウトの凡例を作成するため)。

## データ記号をビジュアル・プロジェクトに追加するには:

### 手順

1. エディター・ウィンドウで、データ記号オブジェクトを追加するビジュアル・プロジェクトの要素を選択します。ページ、シーンまたはオブジェクトがエディター内に開いていない場合は、プロジェクト・エクスプローラーでそのページ、シーン、またはオブジェクトをダブルクリックします。
2. 「パレット」ビューからデータ記号オブジェクトを選択し、エディター・ウィンドウに挿入します。
3. 「プロパティ」ビューで、オブジェクト・プロパティを変更し、データ記号が希望通りに表示されるようにします。

## タスクの結果

### 注:

- 各データ・ポイントを表すのに複数のオブジェクトを使用する場合は、まずデータ・テンプレートに配置パネルを挿入し、次にその配置パネルにデータ記号を置きます。

- データ・レイヤーにイベント帯域データ記号を追加すると、予定表グラフに深さと重要性が加わります。これは、市場の傾向を継続的に追跡する予定表グラフに特定イベントのインスタンスを表示する場合に行います。

## コネクター・オブジェクトの追加

コネクターは直線や曲線などのグラフィック・オブジェクトです。レイアウト・オブジェクトではデータ・ポイント同士のための視覚上のリンクを提供し、報告書ページまたはダッシュボード・シーンではグラフィック・オブジェクト同士の間の視覚上のリンクを提供します。

### このタスクについて

該当する場合、レイアウト・オブジェクトには、レイアウト内のデータ・ポイント間に視覚的な線を提供するために使用されるデフォルトのコネクターがあります。「コネクター」パレットから新しいコネクターを選択することにより、レイアウト内のすべてのデータ・ポイントを接続する線をカスタマイズできます。ある指定したポイントですべてのデータ・ポイントまたはオブジェクトを強制的に終了させる場合は、「コネクター」パレットで接続ポイントを追加することもできます。

「コネクター」パレットには、以下のコネクターがあります。

- 直線コネクター

直線で表示される 2 つのデータ・ポイント間または 2 つのオブジェクト間のコネクター。

- 折れ線コネクター

直角結合に接続された水平線および縦線の両方を使用して、2 つのデータ・ポイント間または 2 つのオブジェクト間のリンクを作成するコネクター。

- 曲線コネクター

滑らかな曲線で表示される 2 つのデータ・ポイント間または 2 つのオブジェクト間のコネクター。

- 接続ポイント

あるデータ・ポイントから別のデータ・ポイントへ拡張するリンクの参照として、座標が使用される不可視ポイント。

### コネクター・オブジェクトの挿入:

コネクターは直線や曲線などのグラフィック・オブジェクトです。レイアウト・オブジェクトではデータ・ポイント同士の間の視覚上のリンクを提供し、報告書ページまたはダッシュボード・シーンではグラフィック・オブジェクト同士の間の視覚上のリンクを提供します。

### このタスクについて

コネクターをビジュアル・プロジェクトに挿入するには:

## 手順

1. エディター・ウィンドウで、オブジェクトを追加するビジュアル報告書のページまたはビジュアル・ダッシュボードのシーンを選択します。ページまたはシーンがエディター内で開いていない場合は、プロジェクト・エクスプローラーでそのページまたはシーンをダブルクリックします。コネクターをレイアウトに挿入する場合は、「プロジェクト・エクスプローラー」から「レイアウト」および「レベル」を選択します。
2. 「パレット」ビューからコネクター・オブジェクトを選択し、エディター・ウィンドウに挿入します。
3. 「プロパティ」ビューで、線をドロウするプロパティを希望どおりに変更します。
4. 「ランタイム」または「プレビュー」をクリックして結果を表示します。

## ヒント:

- 強制的にすべての接続線を単一の指定ポイントで接続するには、接続ポイントを希望どおりに挿入して配置します。
- 線コネクターのある階層レイアウトおよび図表レイアウトには、暗黙の接続ポイントが含まれています。レイアウト作成時には、接続ポイント・オブジェクトは「プロジェクト・エクスプローラー」に表示されません。ただし、接続ポイントには、接続ポイント・プロパティが定義されています。
- 組織図オブジェクトは、接続ポイントを使用して、すべてのデータ・ポイントを単一の親データ・ポイントに接続し、ポイント同士の間のリンクをオーバーライドします。

## 例

決定事項を表すために円を使用し、多肢選択と決定事項をリンクするために複数の線を使用して、決定木を作成するとします。組織図を作成し、図表内のボックスを円で置き換えることができるかもしれませんが、円同士の間には直線を作成するには、折れ線コネクターを削除してから直線コネクターを挿入できます。

## カスタム・オブジェクトの追加

カスタム・オブジェクトは、「パレット」ビューの既存のオブジェクトのうちの 1 つを基にして作成するオブジェクトです。

## このタスクについて

カスタム・オブジェクトを作成するには、「パレット」ビューからオブジェクトのうちの 1 つを選択し、そのプロパティを必要に応じて変更します。作成したカスタム・オブジェクトを「カスタム」パレットに保管すると、繰り返し使用できます。

「カスタム」パレットは特に、ダッシュボードのすべてシーンや報告書のすべてのページで使用するオブジェクトを保管する場合に便利です。例えば、フォント、サイズ、フレーム、色、および塗りつぶしを設定したタイトル・オブジェクトを再使用できます。これにより時間を節約でき、さらにプロジェクト内での整合性もとれます。

「カスタム」パレットは、会社のロゴをピクチャー・オブジェクトとして保管するのに便利な場所です。これを行うには、ピクチャー・オブジェクトを作成し、ピクチャー・オブジェクトの「ImageSource」プロパティーとしてロゴ・イメージを指定して、カスタマイズしたピクチャー・オブジェクトを「カスタム」パレットに保管します。

注: カスタム・オブジェクトではオブジェクト・プロパティーのみを保管できません。オブジェクトに関連付けられているイベントとパラメーターは保管されません。また、これらのイベントとパラメーターをインスタンスを越えて再利用することはできません。イベント・アクションとパラメーター化プロパティーを複製する場合には、これらの属性を手動でオブジェクトに再度割り当てる必要があります。

カスタム・オブジェクトを作成して「カスタム」パレットに追加するには:

### 手順

1. 「パレット」ビューで、カスタマイズを加えるオブジェクトを特定します。例えば、カスタム・テキスト・オブジェクトを作成するには、パレットでデフォルトのラベル・オブジェクトを見つけ、エディター・ウィンドウに挿入します。
2. 「プロパティー」ビューで、オブジェクトのプロパティーを希望どおりに変更します。
3. 完了したら、エディター・ウィンドウに戻り、オブジェクトを右クリックし、ポップアップ・メニューから「カスタム・パレットに追加」を選択します。オブジェクトは設定されたプロパティーを維持したまま「カスタム」パレットに配置されます。

### タスクの結果

注:

- 「カスタム」パレットでは、オブジェクトを名前変更できます。そうするには、「カスタム」パレットのオブジェクトを右クリックし、「カスタマイズ」を選択します。「パレットのカスタマイズ」ウィンドウが開きます。「名前」フィールドに新しい名前を入力して、「OK」をクリックします。
- 常時、カスタマイズしたオブジェクトに割り当てられたデフォルト・プロパティーを変更することができます。
- 「カスタム」パレットは、ビジュアル・プロジェクト内で使用するすべてのオブジェクトのための単一のソースを提供できます。複数のカスタム・プロジェクトを作成して、「カスタム」パレットに配置することができます。さらに、「パレット」ビューのどのパレットのオブジェクトでも、「カスタム」パレットに配置することもできます。このようにして、プロジェクト内で使用するすべてのオブジェクトが 1 つのパレットに配置されます。

例えば、ダッシュボードでテキスト・オブジェクトを頻繁に使用する場合で、サイズを 12 ポイントではなく 9 ポイントにし、フォントを Arial ではなく Palatino にしたい場合は、このテキスト・オブジェクトをカスタマイズし、「カスタム」パレットに保存できます。塗りつぶし三角形、赤色、9 ポイント・サイズとして定義されているマーカー・オブジェクトを再利用する場合は、カスタマイズしたマーカー・オブジェクトを「カスタム」パレットに保存します。

## コンテナ・オブジェクトの追加

「コンテナ」パレットには、組み込みシーン・オブジェクト、組み込みコンテンツ・オブジェクト、およびキャンバス・オブジェクトが含まれています。

### このタスクについて

#### 組み込みコンテンツ

ビジュアル報告書またはダッシュボードに外部コンテンツを追加する手段を提供するオブジェクト。組み込みコンテンツ・オブジェクトでは、組み込みコンテンツが表示されます。

#### 組み込みシーン

シーン間をナビゲートする手段を提供するオブジェクト。組み込みシーンは、実際には組み込みシーン・オブジェクトに表示されます。

#### キャンバス

実行時モードで操作できるビジュアル・ダッシュボード・データ・オブジェクトが含まれているオブジェクト。

#### 組み込みシーン・オブジェクトの挿入:

組み込みシーン・オブジェクトとはコンテナの 1 つで、それを使用して別のシーンのすべてまたは一部を表示した後、そのシーンにナビゲートできます。

### このタスクについて

組み込みシーン・オブジェクトは、ビジュアル・ダッシュボードにのみ挿入できます。これらのオブジェクトは、ビジュアル報告書には適用できません。シーンが 2 つ定義してあれば、シーンを組み込むことができます。ソース・シーンは、組み込みシーン・オブジェクトを挿入する場所です。組み込みシーン・オブジェクト内に指定されたシーンは、宛先シーンと見なされます。

組み込みシーン・オブジェクトをビジュアル・ダッシュボード・シーンに挿入するには:

#### 手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、ソース・シーンをキャンバス・モードで開きます。
2. 「パレット」ビューで、組み込みシーン・オブジェクトをクリックします。
3. エディター・ウィンドウをクリックして、組み込みシーン・オブジェクトを挿入します。組み込みシーン・ウィザードが開きます。
4. 組み込みシーン・オブジェクトのイベント・アクションを自動的に生成するためには、「マウスでクリックした時に組み込みシーンにナビゲートする」チェック・ボックスを選択します。生成されたイベント・アクションの指定により、組み込みシーン・オブジェクトをマウス・クリックすると、組み込みシーンが表示されます。組み込みシーン・オブジェクトに別のイベント・アクションを指定する場合は、「マウスでクリックした時に組み込みシーンにナビゲートする」チェック・ボックスをクリアする必要があります。

5. 別のビジュアル・プロジェクトからあるロケーションまでナビゲートするには、「別のビジュアル・プロジェクト」チェック・ボックスを選択し、フィールドの右側にある省略符号 (...) をクリックします。「開く」ウィンドウが開きます。
6. 組み込みシーンをリンクする先のビジュアル・プロジェクトまでナビゲートして選択し、「終了」をクリックします。「開く」ウィンドウが閉じて、「組み込みシーン」ウィザードに制御が戻ります。
7. 「組み込みシーン」ドロップダウン・リストで、宛先シーンの名前を選択します。
8. 「視点」リスト・ボックスで、ウィンドウ上でフォーカスする組み込みシーンの視点を選択します。
9. 「位置」フィールドで、組み込みシーンのキャンバスの座標およびズーム・レベルを指定します。
10. 「OK」をクリックします。シーンのフォルダーに、組み込みシーン・オブジェクトが表示されます。

#### 組み込みコンテンツ・オブジェクトの挿入:

組み込みコンテンツ・オブジェクトは、外部コンテンツをビジュアル報告書またはダッシュボードに追加する手段を提供するコンテナです。表示可能な外部コンテンツは、テキスト・ファイルまたは HTML ページです。

#### このタスクについて

組み込みコンテンツ・オブジェクトをビジュアル・ダッシュボード・シーンに挿入するには:

#### 手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、ソース・シーンをキャンバス・モードで開きます。
2. 「パレット」ビューで、組み込みコンテンツ・オブジェクトをクリックします。
3. エディター・ウィンドウをクリックして、組み込みコンテンツ・オブジェクトを挿入します。組み込みコンテンツ・オブジェクトは、デフォルトのサイズ・プロパティに基づいてドロウされます。エディター・ウィンドウをクリックし、カーソルをドラッグして特定のサイズでドロウした組み込みコンテンツ・オブジェクトを挿入します。組み込みコンテンツ・ウィザードが開きます。
4. 「組み込みコンテンツ・モード」領域で「外部データ」(別のファイルを追加する場合) または「直接データ」(ストリングとしてコンテンツを追加する場合) をクリックします。
5. 「外部データ」を選択した場合は、追加するファイルの場所を「コンテンツの場所」フィールドで指定します。省略符号 (...) をクリックすれば、場所を検索できます。
6. 「コンテンツ・タイプ」フィールドで、組み込むコンテンツのタイプを指定します。テキスト・フォーマットでコンテンツを表示するには「テキスト」を、HTML フォーマットでコンテンツを表示するには「HTML」を選択します。

7. 「テキスト」コンテンツ・タイプを選択した場合は、必要な文字エンコード方式を「文字エンコード方式」リストから選択します。
8. 「直接データ」を選択した場合は、省略符号 (...) をクリックして必要なコンテンツを「コンテンツ」フィールドで追加し、「OK」をクリックします。
9. 「コンテンツ・タイプ」フィールドで、組み込むコンテンツのタイプを指定します。テキスト・フォーマットでコンテンツを表示するには「テキスト」を、HTML フォーマットでコンテンツを表示するには「HTML」を選択します。
10. 「テキスト」コンテンツ・タイプを選択した場合は、必要な文字エンコード方式を「文字エンコード方式」リストから選択します。
11. 「OK」をクリックします。組み込みコンテンツ・オブジェクトが作成されます。「プロジェクト・エクスプローラー」ビューにオブジェクトの項目が作成されます。

キャンバス・オブジェクトの挿入:

キャンバス・オブジェクトには、実行時モードで操作できるビジュアル・ダッシュボード・データ・オブジェクトが含まれます。

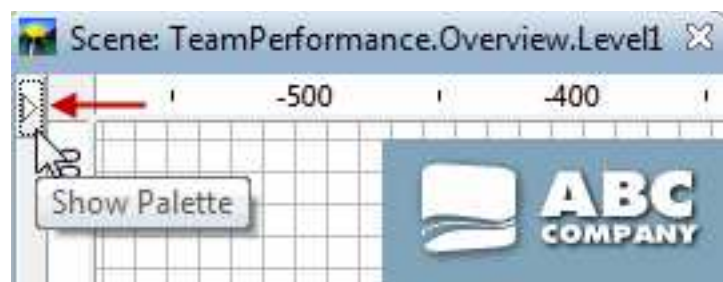
このタスクについて

キャンバス・オブジェクトをビジュアル・ダッシュボードに挿入するには、次のようにします。

手順

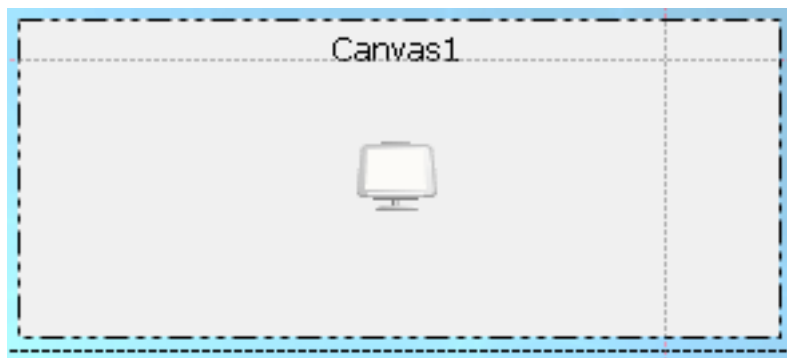
1. ビジュアル・ダッシュボードがワークベンチ編集機能域の「キャンバス」タブで開かれていることを確認します。
2. 「パレットの表示」アイコンをクリックして、ビジュアル・ダッシュボードに追加できる要素が保持されているフォルダーのリストを表示します。

注: 「パレットの表示」アイコンは、エディター領域の右上隅にあります。



3. 「パレット」ビューの「コンテナ」パレットからキャンバス・オブジェクトを選択して編集機能ウィンドウに挿入します。キャンバス・オブジェクトがビジュアル・ダッシュボードに追加されます。デフォルトでは、キャンバス・オブジェクトの名前は Canvas1 であり、このオブジェクトは、点線の境界線が付いたグレーの枠





としてエディター領域に表示されます。

### タスクの結果

キャンバス・オブジェクトには内部ツリーがあります。ビジュアル・ダッシュボードにあるデータ・ビジュアル化オブジェクトとデータ変換オブジェクトのリポジトリ・サブツリーまたは照会サブツリーは、内部ツリーの「ソース」プロパティによって異なります。

キャンバス・オブジェクトの内部ツリーは、(それ全体で) データ・ビジュアル化オブジェクトおよびデータ変換オブジェクトの階層構造を表します。キャンバスでは、データビジュアル化オブジェクトおよびデータ変換オブジェクトのサブセットのみがサポートされる点に留意してください。

キャンバスの内部ツリーを表示するには、編集機能を実行時モードに切り替えます。

キャンバスのタイプとレイアウト:

各キャンバス・タイプは、キャンバスに含まれるオブジェクトごとに異なる、特定のレイアウトを保持しています。キャンバスのレイアウトは、そこに配置されるデータ・オブジェクトと、ビジュアル・ダッシュボードでのキャンバスのサイズおよび位置によって決まります。

キャンバスには次の 3 つのタイプがあります。

#### 組み込み

組み込みキャンバスは、ビジュアル・ダッシュボード内部に格納され、キャンバスでのダッシュボードの設計時に作成されます。

組み込みキャンバスには、ビジュアル・ダッシュボードの一部であるオブジェクトおよびレイアウトが含まれています。一般的に、組み込みキャンバスは、設計者がユーザーに最も適していると考えられるデータ・オブジェクトのセットと、それらのオブジェクトのレイアウトを表します。

ビジュアル・ダッシュボードの設計者はまた、設計時にデフォルト・タイプを組み込みキャンバスに設定できます。このデフォルト・タイプはユーザー用にロードされます。ビジュアル・ダッシュボードの設計者がデフォルト・タイプを設定しない場合、ユーザーには、設計者が最後に使用したときのキャンバスの状態が表示されます。

ユーザーは、組み込みキャンバスを採用し、これをビジュアル・ダッシュボードのビルディング・ブロックとして使用し、そのビジュアル・ダッシュボードのニーズに合うように調整して、新しい名前でも保存できます。調整したキャンバスは、ビジュアル・ダッシュボードの一部として提供されるキャンバスとともに利用できます。

**共有** 共有キャンバスは、リポジトリ内の一体化された共有スペースに格納されます。

共有キャンバスは、キャンバスがあるビジュアル・ダッシュボードが「ランタイム」モードで開いている場合、共有リポジトリに格納されます。すべてのリポジトリ・ユーザーが、共有キャンバスにアクセスでき、これを使用できます。

**パーソナル**

パーソナル・キャンバスは、ユーザーのホーム・ワークスペースに格納されます。

パーソナル・キャンバスは、ビジュアル・ダッシュボードが「ランタイム」モードで開いている間はユーザーによってアクセスされ、既存のパーソナル・ワークスペースに格納されます。パーソナル・ワークスペースが存在しない場合、ユーザーはキャンバスをパーソナル・キャンバスとして保存できません。各ユーザーは、将来もそのユーザー向けにロードされる現行キャンバスに、デフォルト・タイプを設定することもできます。

キャンバス上の個々のオブジェクトには、以下の属性が含まれます。

- キー
- コンテナの場所およびサイズ
- オブジェクト・レイアウト (各オブジェクトはその現行レイアウトを保存可能でなければなりません)

キャンバスへのオブジェクトの追加:

キャンバスにオブジェクトを追加すれば、随時報告書またはビジュアル・ダッシュボードに機能を追加できます。

このタスクについて

随時報告書のキャンバスにオブジェクトを追加するには、キャンバス・ツールバーのボタンを使用します。

ビジュアル・ダッシュボードのキャンバス・オブジェクトにオブジェクトを追加する前に、以下の事項を確認してください。

- ビジュアル・ダッシュボードを作成し、キャンバス・オブジェクトをダッシュボードに追加した。
- キャンバスをビジュアル・ダッシュボード上に配置して、キャンバスを適切なサイズにした。
- キャンバス・プロパティを設定した。

ビジュアル・ダッシュボードのキャンバスにオブジェクトを追加するには、エディターを「ランタイム」モードに切り替え、キャンバス・ツールバーのボタンを使用します。

#### **HTML5** モードでオブジェクトをキャンバスに追加:

キャンバス・オブジェクトに機能性を追加するために、HTML5 モードでオブジェクトを随時報告書またはビジュアル・ダッシュボードのキャンバス・オブジェクトに追加することができます。


このタスクについて

オブジェクトをキャンバスに追加するには、以下の手順を実行します。


#### 手順

1. ビジュアル・ダッシュボードで作業を行っている場合は、エディターの「ランタイム」タブをクリックして、ビジュアル・ダッシュボードを「ランタイム」モードにします。随時報告書で作業を行っている場合、ご使用のキャンバスはすでに「ランタイム」モードです。



2.  をクリックして、キャンバス・ツールバーを展開します。



3.  をクリックして、オブジェクトのキャンバス内部ツリーを開きます。
4. ツリーのノードを展開して、キャンバスに追加したいオブジェクトを見つけます。「追加」をクリックします。


キャンバスに追加するオブジェクトはそれぞれ、グリッドまたは図表として表示できます。キャンバスが現在サポートしているのは以下のオブジェクトです。


- 分析照会
- 複合 Dynamart
- ドリルダウン・パス
- Dynamart
- 表
- ビジュアル照会


注: 照会をプロンプトとともに、随時報告書またはビジュアル・ダッシュボードのキャンバス・オブジェクトに追加できます。ビジュアル・ダッシュボードの場合、プロンプトを自動的に管理するには、ローカル・パラメーターまたはグローバル・パラメーターを使用します。ビジュアル・プロジェクトにパラメーターを挿入し、その名前が照会でプロンプトされる変数の 1 つと同じであることを確認して、デフォルト値を設定します。照会をキャンバスに追加すると、この値がプロンプト変数に設定されます。


また、随時報告書およびビジュアル・ダッシュボードでは、照会をキャンバスに追加する際にプロンプト値を指定できます。

5. コントロール・オブジェクト (テキスト・ボックス、コンボ・ボックス、およびリスト・ボックス) とラベルをキャンバスに追加できます。コントロール・オブジェクトは、キャンバス上のデータをフィルターに掛け、ユーザー入力を受け入れるために使用します。

• ラベル・オブジェクトを追加するには、 をクリックします。ラベル・オブジェクトは、キャンバス上のデータ駆動型オブジェクト (グリッドおよび図表) に対してキャプションまたは注記を作成するために使用します。

• テキスト・ボックス・オブジェクトを追加するには、 をクリックします。テキスト・ボックス・オブジェクトは、ユーザーに手動でフィルター値を入力させたい場合に使用します。

• コンボ・ボックス・オブジェクトを追加するには、 をクリックします。コンボ・ボックス・オブジェクトは、データ駆動型オブジェクト用の事前定義フィルターのリストをユーザーに提供したい場合に使用します。コンボ・ボックスにより、ユーザーはリストから 1 つのフィルターのみを選択できます。

• リスト・ボックス・オブジェクトを追加するには、 をクリックします。リスト・ボックス・オブジェクトは、データ駆動型オブジェクト用の事前定義フィルターのリストをユーザーに提供したい場合に使用します。リスト・ボックスにより、ユーザーはリストから複数のフィルターを選択できます。

#### タスクの結果

いくつかのオブジェクトをキャンバスに追加しました。これで、これらのオブジェクトをリンクして、キャンバス上に表示するデータをフィルターに掛けることが可能になりました。

#### HTML5 モードでのオブジェクト・プロパティの編集:


オブジェクトのプロパティを編集することにより、キャンバス上でオブジェクトをカスタマイズすることができます。


#### このタスクについて


キャンバス上のオブジェクトにはそれぞれ、個別のツールバーがあります。このツールバーを使用して、オブジェクトをカスタマイズします。


#### 手順

1. オブジェクトをクリックして、オブジェクト・ツールバーを表示します。
2. 以下のボタンには、すべてのオブジェクトに対する同一の、または類似の機能が 있습니다。


- キャンバス上のオブジェクトの位置を変更するには、 をクリックし、オブジェクトを新たな位置までドラッグします。

- オブジェクトのタイトルを編集するには、 をクリックし、新しいタイトルを入力して、「タイトルの編集」ウィンドウでフォント・オプションを指定します。


- ソース・オブジェクト・パスを確認するには、 をクリックします。


- オブジェクトをキャンバスから削除するには、 をクリックします。

3. 照会および図表を編集するには、ステップ 2 で示されたボタンに加えて、以下のボタンを使用します。

- オブジェクトの表示モードを変更するには、 をクリックし、新しい表示モードを選択します。


- 図表をキャンバスに追加するには、 をクリックし、「新規グラフの追加」ウィンドウで新しい図表の設定を指定します。

- 現行図表を 2 次元グラフに変換するには、 をクリックし、図表タイプを選択します。

- 現行図表を深さのある 2 次元グラフに変換するには、 をクリックし、図表タイプを選択します。

- 図表のソース列を変更するには、 をクリックして、「図表設定」ウィンドウで図表を編集します。


4. コンボ・ボックス・オブジェクトおよびリスト・ボックス・オブジェクトを編集するには、ステップ 2 で示されたボタンに加えて、以下のボタンを使用します。

- オブジェクトに別のオブジェクトからのデータを設定するには、 をクリックします。ソース・オブジェクト (分析照会、ビジュアル照会、図表、

dynamart、複合 dynamart、または表) を「リソース」フィールドから選択し、コンボ・ボックスまたはリスト・ボックスに表示するソース・オブジェクト列を「列」リストから選択します。


- キャンバス上の現行オブジェクトと別のオブジェクトとの従属関係を定義す



るには、 をクリックします。詳しくは、『HTML5 でのキャンバス上のオブジェクトのワイヤリング』トピックを参照してください。

- コンボ・ボックスまたはリスト・ボックスのソース・オブジェクトおよびソ




ース・オブジェクト列を変更し、フォント設定を変更するには、 をクリックします。

5. テキスト・ボックス・オブジェクトを編集するには、ステップ 2 で示されたボタンに加えて、以下のボタンを使用します。


- キャンバス上の現行オブジェクトと別のオブジェクトとの従属関係を定義す



るには、 をクリックします。詳しくは、『HTML5 でのキャンバス上のオブジェクトのワイヤリング』トピックを参照してください。

- テキスト・ボックス・オブジェクトのデフォルト・テキストを指定し、フォ



ント設定を変更するには、 をクリックします。随時報告書を開くか、ビジュアル・ダッシュボードをランタイム・モードに切り替えると、テキスト・ボックス・オブジェクトの横にデフォルト・テキストが表示されます。

## タスクの結果

キャンバス上のオブジェクトがカスタマイズされました。

キャンバス・ツールバーを使用したキャンバスの管理操作:

キャンバス・ツールバーには、随時報告書およびビジュアル・ダッシュボード内のキャンバスを管理するためのアクションが用意されています。

キャンバス・ツールバーのオプション

キャンバス・ツールバーを使用して、オブジェクトをキャンバスに追加します。



キャンバス・ツールバーの各オプションについて、下の表で説明します。

表 42. ツールバーのオプション

ツールバー・ウィジェット	説明
	<p>「レイアウトの作成」 ボタンをクリックして、空のレイアウトを作成します。</p>
	<p>「新規レイアウト」 ボタンをクリックして、レイアウトをリストから選択します。デフォルトのキャンバス・レイアウトに切り替えるには、「デフォルト・レイアウトを開く」を選択してください。</p>
	<p>「レイアウトの保存」 ボタンをクリックして、現在のレイアウトを保存します。</p>
	<p>「レイアウトの別名保存」 ボタンをクリックして、現在のレイアウトを「組み込み」、「共有」、または「パーソナル」のいずれかのキャンバス・タイプとして保存します。</p>
	<p>「レイアウトをデフォルトとして設定」 ボタンをクリックして、現在のレイアウトをデフォルトにします。</p>
	<p>「レイアウトのクリア」 ボタンをクリックして、現在のレイアウトからオブジェクトをすべて削除します。</p>
	<p>「レイアウトのエクスポート」 ボタンをクリックして、「エクスポート」 ダイアログを開きます。このダイアログで、ファイル名とエクスポート域を指定し、エクスポート形式を選択します。</p> <div data-bbox="786 1150 1175 1243" style="background-color: #444; color: white; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p style="text-align: center; font-size: 1.2em;">Export to PDF</p> </div> <p style="margin-left: 20px;">- キャンバスの現在の内容を PDF にエクスポートします。</p> <div data-bbox="786 1318 1185 1411" style="background-color: #444; color: white; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p style="text-align: center; font-size: 1.2em;">Export to PNG</p> </div> <p style="margin-left: 20px;">- キャンバスの現在の内容を PNG にエクスポートします。</p>
	<p>このボタンをクリックして、線のワイヤリングを表示するか、または非表示にします。</p>
	<p>「通常モードに切り替え (Switch to Normal Mode)」 ボタンをクリックして、キャンバスを最小化します。</p>
	<p>「フルスクリーン・モードに切り替え (Switch to Fullscreen Mode)」 ボタンをクリックして、キャンバスを最大化します。</p>

表 42. ツールバーのオプション (続き)

ツールバー・ウィジェット	説明
	「リポジトリから追加」 ボタンをクリックして、キャンバス内部のオブジェクトのツリーを表示します。
	「ラベルの追加」 ボタンをクリックして、ラベル・オブジェクトをキャンバスに追加します。
	「テキスト・ボックスの追加」 ボタンをクリックして、テキスト・ボックス・オブジェクトをキャンバスに追加します。
	「コンボ・ボックスの追加」 ボタンをクリックして、コンボ・ボックス・オブジェクトをキャンバスに追加します。
	「リスト・ボックスの追加」 ボタンをクリックして、リスト・ボックス・オブジェクトをキャンバスに追加します。

#### キャンバス上のオブジェクトのワイヤリング:

オブジェクトをワイヤリングすることで、オブジェクト間の関係および従属関係を定義します。オブジェクト・ワイヤリング・モードを使用してキャンバス上のオブジェクトを接続します。

このタスクについて

以下のトピックでは、キャンバス上のオブジェクトをワイヤリングするプロセスについて説明します。

#### HTML5 でのキャンバス上のオブジェクトのワイヤリング:

オブジェクト・ワイヤリング・モードを使用して、HTML5 でキャンバス上のオブジェクトを接続します。

このタスクについて

オブジェクトをワイヤリングすることで、オブジェクト間の関係および従属関係を定義します。例えば、`DEMO.EMPLOYEE` 表を、その表のすべての役職名のリストを含むコンボ・ボックスにリンクすることができます。2 つのオブジェクトを接続すると、表にはコンボ・ボックスで選択した役職にある従業員のみが表示されます。


HTML5 でオブジェクトをワイヤリングするには、以下を行います。

手順

-  をクリックしてキャンバス・ツールバーを展開します。





- 最初のオブジェクトの  をクリックして、ワイヤリング線を 2 番目のオブジェクトヘドラッグします。

注: ワイヤリング可能なオブジェクトの「ワイヤリングの作成」ボタンは緑色で強調表示されます。ワイヤリングをサポートするデータ駆動型オブジェクトは、同時にソース・オブジェクトおよびターゲット・オブジェクトにすることができます。

「リンクの作成」ウィンドウが開きます。

- ウィンドウで、ソース・オブジェクト列およびターゲット・オブジェクト列を指定します。

指定した出力および入力の各列が照会に既に含まれている場合、これらの列が表示され、自動的に選択されます。それ以外の場合は、結果セットのすべての列が表示されます。入力列と出力列について詳しくは、「ビジュアル照会の入力列と出力列の管理」トピックを参照してください。

- 「追加」をクリックします。
- オプション: キャンバス・ツールバーで「線のワイヤリングを切り替える」 (



) をクリックして、キャンバス上のオブジェクト間のワイヤリング線の表示/非表示を切り替えます。

#### タスクの結果

オブジェクトが接続されました。

キャンバス上のオブジェクトのフィルター処理:

コントロール・オブジェクト (コンボ・ボックス、リスト・ボックス、またはテキスト・ボックス) をデータ駆動型オブジェクトとリンクして、表示される情報をデータ駆動型オブジェクトによってフィルターに掛けることができます。この例は Samples リポジトリの Q.STAFF 表を基にしています。この例では、フィルター処理にコンボ・ボックス・コントロール・オブジェクトを使用します。

始める前に

2 つのソース照会を以下のように準備します。

- ビジュアル照会を作成し、そのための SQL ステートメント (`select * from q.staff`) を入力します。この照会に Query 1 と名前をつけてワークスペースに保存します。
- 別のビジュアル照会を作成し、そのための SQL ステートメント (`select distinct job from q.staff`) を入力します。この照会に Query Combo と名前をつけてワークスペースに保存します。

このタスクについて



コンボ・ボックス、リスト・ボックス、またはテキスト・ボックスの各オブジェクトを使用して、データ駆動型オブジェクトをフィルターに掛けることができます。事前定義フィルターのリストをユーザーに提供したい場合は、コンボ・ボックス・オブジェクトまたはリスト・ボックス・オブジェクトを使用します。ユーザーにフィルター・テキストを手動で入力させたい場合は、テキスト・ボックス・オブジェクトを使用します。この例では、フィルター処理にコンボ・ボックス・オブジェクトを使用します。

キャンバス上のオブジェクトをリンクするには、以下の手順を実行します。


手順

1. 随時報告書を作成します。
2. オブジェクトを随時報告書に追加します。

a. キャンバス・ツールバーで、 をクリックし、ツリーから Query 1 を選択して「追加」をクリックします。

b. キャンバス・ツールバーで、 をクリックして、コンボ・ボックスを追加します。コンボ・ボックス・ツールバーで  をクリックして、ツリーから Query Combo を選択します。

3. コンボ・ボックスを表にリンクします。

a. コンボ・ボックス・ツールバーで  をクリックし、ワイヤリング線を表にドラッグして、表をクリックします。

b. 「リンクの作成」ウィンドウで、両方のリストから「JOB」を選択して「追加」をクリックします。

タスクの結果

コンボ・ボックスで、表に表示される情報がフィルターに掛けられるようになりました。

リンクされたオブジェクトの編集:

ソース・オブジェクトやターゲット・オブジェクトを変更したり、オブジェクト間のリンク関係を削除したりするには、「リンクの編集 (Edit Link)」機能を使用します。

このタスクについて

リンクされたオブジェクトを編集するには、以下の手順に従います。

## 手順

1. キャンバスで、ソース・オブジェクトをクリックします。ソース・オブジェクトとターゲット・オブジェクト間の線のワイヤリング線が示されます。
2. ワイヤリング線をダブルクリックします。

「リンクの編集」ウィンドウが開きます。

3. ウィンドウで、ソース・オブジェクトのソース列と、対応するフィールドにあるターゲット・オブジェクトの宛先列を編集します。
4. 2つのオブジェクト間のリンクを削除するには、「削除」をクリックします。

オブジェクト間のリンクが削除され、「リンクの編集」ウィンドウが閉じます。

5. 変更を保存して「リンクの編集」ウィンドウを閉じるには、「保存」をクリックします。
6. 変更を破棄して「リンクの編集」ウィンドウを閉じるには、「キャンセル」をクリックします。

## ビジュアル照会の入力列と出力列の管理:

現在のビジュアル照会で使用可能な入力列と出力列を指定できます。これらの列は、ビジュアル・ダッシュボードまたは随時報告書の作成時に、キャンバス上のオブジェクトをワイヤリングするためのソース列およびターゲット列として使用されます。

## このタスクについて

以下の手順の各ステップでは、照会の入力列と出力列を指定する方法について説明します。

## 手順

1. 「照会」 > 「ワイヤリング設定」を選択して、「ワイヤリング設定」ウィンドウを開きます。
2. 「ワイヤリング設定 (Wiring Settings)」ウィンドウには、選択可能な列のリストが表示されます。入力列と出力列を指定するには、該当するチェック・ボックスを選択します。
3. 入力列と出力列を指定したら、「OK」をクリックして変更を適用し、「ワイヤリング設定 (Wiring Settings)」ウィンドウを閉じます。

## レイアウト・オブジェクトの作業

「レイアウト」パレットには、照会の結果取得されたデータを表示するために使用できるグラフィック・オブジェクトが含まれます。レイアウト・オブジェクトには、幅広い種類の図表、グラフ、マップ、表、およびグリッドがあります。

## このタスクについて

以下の図表レイアウトを使用することができます。

- 棒グラフ
- 円グラフ
- 柱グラフ

- 散布図
- XY グラフ
- 株価グラフ
- ローソク足グラフ
- 予定表グラフ
- イベント帯域グラフ
- 多変量グラフ
- 線形マップ

従属関係を表示するには、以下の階層レイアウトを使用することができます。

- クラスタ・グラフ
- 組織図
- ツリー・グラフ

データを順序付けられたパターンで表示するには、以下のパターン・レイアウトを使用することができます。ただし、数量または従属関係は示されません。

- 表
- グリッド
- 簡易書式
- 行列
- ら旋
- 水平線

ソリッド・グラフ・オブジェクトはモノリシック・オブジェクトです。これは、照会の図表など、視覚的に分かりやすい形式で照会結果データを表示する場合に使用できます。

表の挿入:

表オブジェクトを使用すれば、単純な表に照会結果を表示できます。

このタスクについて

表オブジェクトを挿入するには、以下のようになります。

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「表」オブジェクトをダブルクリックします。「表ウィザード」が開きます。
2. 既存の照会からのデータを表に追加するかどうかを指定して、「次へ」をクリックします。
3. 「いいえ」を指定した場合は、表オプションを指定して、「終了」をクリックします。ウィザードが閉じて、エディター・ウィンドウに表が表示されます。
4. 「はい」を指定した場合は、表にデータを追加するために使用する照会を選択し、「次へ」をクリックします。
5. 表に組み込む列を選択して、「次へ」をクリックします。
6. 表オプションを指定して、「次へ」をクリックします。

7. ページング・オプションを指定して、「終了」をクリックします。ウィザードが閉じて、エディター・ウィンドウに表が表示されます。

単純な表の挿入:

既存の照会からデータが追加されていない単純な表オブジェクトを挿入できます。

このタスクについて

単純な表オブジェクトを挿入するには、以下のようになります。

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「表」オブジェクトをダブルクリックします。「表ウィザード」が開きます。
2. 「いいえ」を選択して「次へ」をクリックします。「表オプションを指定します」ページが開きます。
3. 表に含まれる行の数を「行」リストで指定します。
4. 表に含まれる列の数を「列」リストで指定します。
5. 「配置」ドロップダウン・リストで、セル内のテキストの配置を指定します。有効なオプションは以下のとおりです。
  - 左
  - 右
  - 中央
6. 各セルの最小幅を「最小幅」フィールドに指定します。
7. 「終了」をクリックします。ウィザードが閉じて、エディター・ウィンドウに表が表示されます。

データが追加された表の挿入:

既存の照会からデータが追加された表オブジェクトを挿入できます。

このタスクについて

データが追加された表オブジェクトを挿入するには、以下のようになります。

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「表」オブジェクトをダブルクリックします。「表ウィザード」が開きます。
2. 「はい」を選択して、「次へ」をクリックします。「照会选择します」ページが開きます。
3. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。
4. 「選択可能なフィールド」リスト・ボックスで 1 つ以上の列を選択し、「右へ移動」をクリックして、選択した列を「作成する列」リスト・ボックスに移動します。このフィールドには、選択した照会結果セットに含まれるデータの列名がリストされます。「表オプションを指定します」ページが開きます。

5. タイトル行を作成するには、「タイトル行を組み込む」チェック・ボックスを選択します。
6. 見出し行を作成するには、「見出し行を組み込む」チェック・ボックスを選択します。
7. 脚注行を作成するには、「脚注行を組み込む」チェック・ボックスを選択します。
8. 各セル内のテキストをセル・スペースに収めるには、「セル・テキストのワード・ラップ」チェック・ボックスを選択します。
9. 「配置」リストで、セル内のテキストの配置を指定します。有効なオプションは以下のとおりです。
  - 左
  - 右
  - 中央
10. 各セルの最小幅を「最小幅」フィールドに指定します。
11. 「高さ制限」フィールドで表の高さ制限を指定します。値がゼロ (0) の場合は、表の高さは無制限です。値がゼロ (0) 以外の場合は、表の最大の高さが設定されます。
12. 必要なスクロール有効範囲値をリストから選択します。
  - 表全体: 表全体をスクロールします。
  - データのみ: 表データのみをスクロールします。
  - データおよび見出し: 表データと列見出しのみをスクロールします。
13. 必要な値を「垂直スクロール」リストから選択して、垂直スクロールを設定します。
14. 「幅制限」フィールドで表の幅制限を指定します。値がゼロ (0) の場合は、表の幅は無制限です。値がゼロ (0) 以外の場合は、表の最大の幅が設定されます。
15. 「次へ」をクリックします。「ページング・オプションの指定」ページが開きます。
16. ページングを使用可能にするには、「ページングを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。ページングを使用すると、一度に表示できる行数が限られます。
17. 一度に表示する行数を「ページ当たりの行数」リストで指定します。
18. 結果セットにおいて最初に表示する行を「最初に表示される行」リストで選択します。
19. ページを前後に移動するボタンを自動的に作成するには、「ナビゲーション・バーの追加」チェック・ボックスを選択します。これらのボタンによって、ページング・アクションが制御されます。
20. 「終了」をクリックします。ウィザードが閉じて、エディター・ウィンドウに表が表示されます。

#### 合計行の組み込み:

「総合計の表示」メニュー項目を使用すれば、表に合計行を組み込むことができます。

このタスクについて

関連する照会の「結果」メニューで「総合計の表示」コマンドを選択すれば、集計された合計行を表オブジェクトに組み込むことができます。表に合計行を組み込むには、以下のようにします。

手順

1. 既存の照会からデータが追加された表オブジェクトをダッシュボード・キャンバスに挿入します。
2. 「プロジェクト・エクスプローラー」で「照会」フォルダーを開き、表オブジェクトの関連照会をダブルクリックします。その照会が照会エディターで開かれます。
3. 照会を実行します。照会結果が照会結果エディターに表示されます。
4. 「結果」 > 「総合計の表示」を選択します。合計行が照会結果グリッドに追加されます。
5. 列見出しラベルを右クリックして、「グループ化および集約」を選択し、合計行に追加する合計を選択します。この手順を、合計の追加先となるすべての列に対して繰り返します。
6. 照会を保存して閉じます。
7. ビジュアル・ダッシュボードを実行します。表オブジェクトのグリッドに合計行が表示され、選択した合計が示されます。

合計行の書式:

**isSummaryRow()** 関数を使用すれば、表オブジェクトの合計行に書式を追加できます。

このタスクについて

**isSummaryRow()** 式デザイナー関数は、表オブジェクトのグリッドにある行が、結果セットの通常の行であるか、結果セットの合計行であるかを検査します。その行が合計行である場合は、**true** が返されます。この機能を使用すれば、表オブジェクトの合計行に特定の書式を追加できます。表オブジェクトの合計行に書式を追加するには、以下のようにします。

手順

1. プロジェクト・エクスプローラーで、表オブジェクトのデータ・テンプレートにナビゲートします。
2. 合計行を除外するには、データ・テンプレートで表の行を選択し、「プロパティ」ビューで「可視」プロパティの「値」フィールドをクリックします。
3. 「プロパティ」ビュー・ツールバーにある「式デザイナーで編集」ボタンをクリックします。「式デザイナー」が開きます。
4. フィールド内のテキストを削除し、「論理」関数リストで「if」関数をダブルクリックします。フィールドに `=if(bConditional, vIfTrue, vIfFalse)` が挿入され、`bConditional` が強調表示されます。
5. 「情報」関数リストで「isSummaryRow」関数をダブルクリックします。関数に `isSummaryRow()` が挿入されます。

6. `vIfTrue` を `false` で置き換え、`vIfFalse` を `true` で置き換えます。
7. 「OK」をクリックします。「式デザイナー」が閉じます。
8. 合計行のセルまたはコンテンツに書式を追加するには、データ・テンプレートで表セルまたは表セル・ラベルを選択し、「プロパティ」ビューで、書式設定するプロパティの「値」フィールドをクリックします。
9. 「プロパティ」ビュー・ツールバーにある「式デザイナーで編集」ボタンをクリックします。「式デザイナー」が開きます。
10. フィールド内のテキストを削除し、「論理」関数リストで「if」関数をダブルクリックします。フィールドに `=if(bConditional, vIfTrue, vIfFalse)` が挿入され、`bConditional` が強調表示されます。
11. 「情報」関数リストで「isSummaryRow」関数をダブルクリックします。関数に `isSummaryRow()` が挿入されます。
12. `vIfTrue` を、照会結果セットの合計行に適用する書式で置き換えます。  
`vIfFalse` を、照会結果セットの本文行に適用する書式で置き換えます。
13. 「OK」をクリックします。「式デザイナー」が閉じます。

グリッドの挿入:

グリッド・オブジェクトでは、照会結果が単純グリッドで表示されます。

このタスクについて

グリッドを挿入するには、以下のようになります。

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットでグリッド・オブジェクトをダブルクリックします。
2. 「グリッド・ウィザード」で、グリッド・オブジェクトのデータを指定するテーブルまたは照会にナビゲートします。
3. 「終了」をクリックします。「グリッド・ウィザード」が閉じて、グリッド・オブジェクトがシーン上に表示されます。

棒グラフまたは柱グラフの挿入:

棒グラフおよび柱グラフは、データを、X 軸または Y 軸上に一連の棒として表示します。

このタスクについて

棒グラフまたは柱グラフを挿入するには:

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「棒グラフ」または「柱グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「棒グラフ」ウィザードまたは「柱グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「レイアウト・タイプを選択します」ページが開きます。



3. 「標準」をクリックし、「次へ」をクリックします。「棒として表示するフィールドを選択します」ページが開きます。
4. 「選択可能なフィールド」リスト・ボックスで 1 つ以上の列を選択し、「右へ移動」をクリックすると、それらの列が「表示するフィールド」リスト・ボックスに移動します。このフィールドには、選択した照会結果セットに含まれるデータの列名がリストされます。「表示するフィールド」リスト・ボックスに移動した列は、ラベル付きの軸に沿ったバーとして柱グラフまたは棒グラフに表示されます。
5. 「次へ」をクリックします。「図表のラベルおよび凡例情報を設定します」ページが開きます。
6. 「ラベルを組み込む」チェック・ボックスを選択すると、グラフの各値バーに表示するラベルが組み込まれます。
7. 「ラベル・フィールド」ドロップダウン・リストのデータ列を指定します。これは、グラフの各値バーにラベルを追加する際に使用されます。このフィールドが使用可能なのは、「ラベルを組み込む」チェック・ボックスを選択した場合のみです。例えば、「表示するフィールド」リスト・ボックスで給与を示す列を選択する場合、「ラベル・フィールド」ドロップダウン・リストで従業員名を表示する列を選択すると、グラフには、各個人の名前がそれぞれの給与を示す値バーの横に表示されます。
8. 「各バーの値を表示」チェック・ボックスを選択すると、各値バーの末尾にデータ値が表示されます。
9. 「複数のバーがある場合はバーを積み重ねる」チェック・ボックスを選択すると、同じライン上に異なるデータ系列の値バーを積み重ねて表示します。「表示するフィールド」リスト・ボックスの最初のデータ列を示す値バーがまず最初にドロウされ、続く値バーは、前のものが終了する箇所から開始されます。例えば、バー 1 の値が 50 で、バー 2 の値が 20 の場合、バー 1 が 0 から 50 に表示され、バー 2 は 50 から 70 に表示されます。
10. 「次へ」をクリックします。「ページング・オプションの指定」ページが開きます。
11. ページングを使用可能にするには、「ページングを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。ページングを使用すると、特定の行数のみを一度に表示することができます。例えば、一度に表示する行数を 10 行のみにすると、各ページに表示される列または棒は 10 個のみになります。
12. 一度に表示する行数を「ページ当たりの行数」リストで選択します。
13. 結果セットにおいて最初に表示する行を「最初に表示される行」リストで選択します。
14. ページを前後に移動するボタンを自動的に作成するには、「ナビゲーション・バーの追加」チェック・ボックスを選択します。これらのボタンによって、ページング・アクションが制御されます。
15. 「終了」をクリックします。ウィザードが閉じて、エディター・ウィンドウに棒グラフまたは柱グラフが表示されます。

拡張された棒グラフまたは柱グラフの挿入:

拡張された棒グラフまたは柱グラフを使用すると、結果セット内の 1 つ以上の列にあるデータをロールアップできます。

このタスクについて

拡張された棒グラフまたは柱グラフを挿入するには:

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「棒グラフ」または「柱グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「棒グラフ」ウィザードまたは「柱グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「レイアウト・タイプを選択します」ページが開きます。
3. 「拡張」をクリックして、「次へ」をクリックします。「棒として表示するフィールドを選択します」ページが開きます。
4. 「選択可能なフィールド」リスト・ボックスで 1 つ以上の列を選択し、「右へ移動」をクリックすると、それらの列が「表示するフィールド」表の「フィールド」列に移動します。このフィールドには、選択した照会結果セットに含まれるデータの列名がリストされます。「表示するフィールド」表に移動した列は、柱グラフや棒グラフでラベル付きの軸に沿った棒として表示されます。
5. 「表示するフィールド」表の「集約」列内のセルをクリックします。ドロップダウン・リストが開きます。列の集約方法を指定するオプションを選択します。
6. 「次へ」をクリックします。「サイド・グループで、移動する 1 つ以上のフィールドを選択します」ページが開きます。
7. 「選択可能なフィールド」リスト・ボックスで 1 つ以上の列を選択し、「右へ移動」をクリックすると、それらの列が「移動するフィールド」リスト・ボックスに移動します。「移動するフィールド」リスト・ボックスに移動した列は照会結果セットでロールアップされ、列の順序によってロールアップ階層が決まります。
8. 「次へ」をクリックします。「図表のラベルおよび凡例情報を設定します」ページが開きます。
9. 「各バーの値を表示」チェック・ボックスを選択すると、各値バーの末尾にデータ値が表示されます。
10. 「複数のバーがある場合はバーを積み重ねる」チェック・ボックスを選択すると、同じライン上に異なるデータ系列の値バーを積み重ねて表示します。「表示するフィールド」リスト・ボックスの最初のデータ列を示す値バーがまず最初にドロウされ、続く値バーは、前のものが終了する箇所から開始されます。例えば、バー 1 の値が 50 で、バー 2 の値が 20 の場合、バー 1 が 0 から 50 に表示され、バー 2 は 50 から 70 に表示されます。
11. 「終了」をクリックします。ウィザードが閉じて、エディター・ウィンドウに棒グラフまたは柱グラフが表示されます。

**OLAP** データを棒グラフまたは柱グラフで表示する:

マルチディメンション照会を使用して照会結果を取得することにより、OLAP データを棒グラフまたは柱グラフで表示できます。

このタスクについて

マルチディメンション照会を使用して実行される棒グラフまたは柱グラフでは、関連付けられた照会結果セット内の 1 つ以上の列のデータをロールアップできます。これによってユーザーは、結果セット全体を一度も表示することなく、特定のデータ記号をドリルダウンして必要なデータのみを取得できます。

OLAP データを表示する棒グラフまたは柱グラフを挿入するには:

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「棒グラフ」または「柱グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「棒グラフ」ウィザードまたは「柱グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得するために実行する「マルチディメンション・データ・ソース」フォルダー内の OLAP 照会にナビゲートし、「次へ」をクリックします。「棒として表示するフィールドを選択します」ページが開きます。
3. 「選択可能なフィールド」リスト・ボックスで 1 つ以上の列を選択し、「右へ移動」ボタンをクリックすると、それらの列が「表示するフィールド」リスト・ボックスに移動します。このフィールドには、選択した照会結果セットに含まれるデータの列名がリストされます。「表示するフィールド」リスト・ボックスに移動した列は、ラベル付きの軸に沿ったバーとして柱グラフまたは棒グラフに表示されます。
4. 「次へ」をクリックします。「ディメンションまたは階層を選択します」ページが開きます。
5. 照会結果を表現するのに使用するキューブ・モデルのディメンションを 1 つ以上選択し、「次へ」をクリックします。ディメンションを複数選択するには、**Ctrl** キーを押しながら、使用するディメンションをクリックします。「図表のラベルおよび凡例情報を設定します」ページが開きます。
6. 「各バーの値を表示」チェック・ボックスを選択すると、各値バーの末尾にデータ値が表示されます。
7. 「複数のバーがある場合はバーを積み重ねる」チェック・ボックスを選択すると、同じライン上に異なるデータ系列の値バーを積み重ねて表示します。「表示するフィールド」リスト・ボックスの最初のデータ列を示す値バーがまず最初にドローされ、続く値バーは、前のものが終了する箇所から開始されます。例えば、バー 1 の値が 50 で、バー 2 の値が 20 の場合、バー 1 が 0 から 50 に表示され、バー 2 は 50 から 70 に表示されます。
8. 「終了」をクリックします。ウィザードが閉じて、エディター・ウィンドウに棒グラフまたは柱グラフが表示されます。

リレーショナル照会を使用した円グラフの挿入:

「円グラフ」では、扇形に分割された円形のグラフにデータが表示されます。

このタスクについて

リレーショナル照会を使用して円グラフを挿入するには:

## 手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「円グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「円グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行するリレーショナル照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「レイアウト・タイプを選択します」ページが開きます。
3. 「標準」をクリックし、「次へ」をクリックします。「円グラフのオプションを選択します」ページが開きます。
4. 「扇形の値」ドロップダウン・リストで、円グラフの各扇形の値が入る照会結果セットのデータ列の名前を指定します。照会結果セットにある使用可能なデータ列のドロップダウン・リストから、データ列を選択する必要があります。
5. 「扇形のラベルを含む」チェック・ボックスを選択すると、各扇形にラベルが組み込まれます。
6. 「ラベル・フィールド」ドロップダウン・リストで、各扇形のラベル情報が入る照会結果セットのデータ列を指定します。「扇形のラベルを含む」チェック・ボックスを選択した場合は、照会結果セットの使用可能なデータ列のドロップダウン・リストから、フィールドを選択する必要があります。
7. 「扇形の値を組み込む」チェック・ボックスを選択すると、各扇形の値が、円グラフに表示されます。
8. 「値が示す扇形全体の割合を組み込む」チェック・ボックスを選択すると、各扇形の割合の値が表示されます。
9. 「終了」をクリックします。「円グラフ」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウにグラフが表示されます。

## 拡張された円グラフの挿入:

拡張された円グラフを使用すると、結果セット内の 1 つ以上の列にあるデータをロールアップできます。

## このタスクについて

拡張された円グラフを挿入するには:

## 手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「円グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「円グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「レイアウト・タイプを選択します」ページが開きます。
3. 「拡張」をクリックして、「次へ」をクリックします。「サイド・グループで、移動する 1 つ以上のフィールドを選択します」ページが開きます。
4. 「選択可能なフィールド」リスト・ボックスで 1 つ以上の列を選択し、「右へ移動」をクリックすると、それらの列が「移動するフィールド」リスト・ボックスに移動します。「移動するフィールド」リスト・ボックスに移動した列は照会結果セットでロールアップされ、列の順序によってロールアップ階層が決まります。

5. 「次へ」をクリックします。「円グラフのオプションを選択します」ページが開きます。
6. 「扇形の値」ドロップダウン・リストで、円グラフの各扇形の値が入る照会結果セットのデータ列の名前を指定します。照会結果セットにある使用可能なデータ列のドロップダウン・リストから、データ列を選択する必要があります。
7. 「集約」ドロップダウン・リストに、「扇形の値」フィールドで指定したデータ列の集約方法を指定します。
8. 「扇形のラベルを含む」チェック・ボックスを選択すると、各扇形にラベルが組み込まれます。
9. 「ラベル・フィールド」ドロップダウン・リストで、各扇形のラベル情報が入る照会結果セットのデータ列を指定します。「扇形のラベルを含む」チェック・ボックスを選択した場合は、照会結果セットの使用可能なデータ列のドロップダウン・リストから、フィールドを選択する必要があります。
10. 「扇形の値を組み込む」チェック・ボックスを選択すると、各扇形の値が、円グラフに表示されます。
11. 「値が示す扇形全体の割合を組み込む」チェック・ボックスを選択すると、各扇形の割合の値が表示されます。
12. 「終了」をクリックします。「円グラフ」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウにグラフが表示されます。

**OLAP** データを円グラフで表示する:

マルチディメンション照会を使用して照会結果を取得することにより、OLAP データを円グラフで表示できます。

このタスクについて

マルチディメンション照会を使用して実行される円グラフでは、関連付けられた照会結果セット内の 1 つ以上の列のデータをロールアップできます。これによってユーザーは、結果セット全体を一度も表示することなく、特定のデータ記号をドリルダウンして必要なデータのみを取得できます。

OLAP データを表示する円グラフを挿入するには:

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「円グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「円グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得するために実行する「マルチディメンション・データ・ソース」フォルダー内の OLAP 照会にナビゲートし、「次へ」をクリックします。「ディメンションまたは階層を選択します」ページが開きます。
3. 照会結果を表現するのに使用するキューブ・モデルのディメンションを 1 つ以上選択し、「次へ」をクリックします。ディメンションを複数選択するには、**Ctrl** キーを押しながら、使用するディメンションをクリックします。「円グラフのオプションを選択します」ページが開きます。

4. 「扇形の値」ドロップダウン・リストで、円グラフの各扇形の値が入る照会結果セットのデータ列の名前を指定します。照会結果セットにある使用可能なデータ列のドロップダウン・リストから、データ列を選択する必要があります。
5. 「扇形のラベルを含む」チェック・ボックスを選択すると、各扇形にラベルが組み込まれます。
6. 「ラベル・フィールド」ドロップダウン・リストで、各扇形のラベル情報が入る照会結果セットのデータ列を指定します。「扇形のラベルを含む」チェック・ボックスを選択した場合は、照会結果セットの使用可能なデータ列のドロップダウン・リストから、フィールドを選択する必要があります。
7. 「扇形の値を組み込む」チェック・ボックスを選択すると、各扇形の値が、円グラフに表示されます。
8. 「値が示す扇形全体の割合を組み込む」チェック・ボックスを選択すると、各扇形の割合の値が表示されます。
9. 「終了」をクリックします。「円グラフ」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウにグラフが表示されます。

多変量グラフの挿入:

多変量グラフは、散布図グラフのグリッドでデータを表示します。

このタスクについて

多変量グラフを挿入するには:

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「多変量グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「多変量グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「軸にマップするフィールドを選択します」ページが開きます。
3. 「選択可能なフィールド」リスト・ボックスで 1 つ以上の列を選択し、「右へ移動」ボタンをクリックすると「作成する軸」リスト・ボックスに移動します。このフィールドには、照会結果セットから選択された列がリストされ、これらの列のデータが多変量グラフの軸にマップされます。多変量グラフの軸は、対角線に沿ってラベル付けされます。最初の軸は、「作成する軸」リスト・ボックスに指定された最初のデータの列を使用して、左下のグリッド・セルにドロウされます。各データの列は、「作成する軸」リストに表示された順で対角線に沿ってグラフ化され、最後の軸は右上のグリッド・セルにドロウされます。
4. 「次へ」をクリックします。「多変量グラフ・オプションを指定します」ページが開きます。
5. 「幅」フィールドに各セルの幅を指定します。
6. 「高さ」フィールドに各セルの高さを指定します。
7. 「横方向のガター」フィールドにガターの幅 (セル間の横方向のスペース) を指定します。
8. 「縦方向のガター」フィールドにガターの高さ (セル間の縦方向のスペース) を指定します。

9. 「終了」をクリックします。「多変量グラフ」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウにグラフが表示されます。

散布図グラフまたは **XY** グラフの挿入:

散布図グラフは、直交座標の 2 次元グラフでデータを表示します。XY グラフは、2 つの変数を座標とする点をつないだ 2 次元グラフでデータを表示します。

このタスクについて

散布図グラフまたは XY グラフを挿入するには:

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「散布図グラフ」または「**XY** グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「散布図グラフ」ウィザードまたは「XY グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「Y 値として表示するフィールドを選択します」ページが開きます。
3. 「選択可能なフィールド」リスト・ボックスで 1 つ以上の列を選択し、「右へ移動」ボタンをクリックすると、それらの列が「表示するフィールド」リスト・ボックスに移動します。このフィールドには、選択した照会結果セットに含まれるデータの列名がリストされます。「表示するフィールド」リスト・ボックスに移動した列は、生成されるグラフの Y 値として表示されます。
4. 「次へ」をクリックします。「点の位置を示すフィールドを選択します」ページが開きます。
5. 「X 値」ドロップダウン・リストで、散布図グラフまたは XY グラフの X 軸にグラフ化される照会結果セットのデータ列の名前を指定します。照会結果セットの使用可能にあるデータ列のドロップダウン・リストから、データ列フィールドを選択してください。
6. 「終了」をクリックします。ウィザードが閉じて、エディター・ウィンドウにグラフが表示されます。

株価グラフの挿入:

株価グラフは、株価の変動などの価値ベースの指標、および時間の経過に伴う出来高を示す場合に使用されます。

このタスクについて

株価グラフを挿入するには:

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「株価グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「株価グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「株価グラフのオプションを選択します」ページが開きます。

3. 「取引間隔」ドロップダウン・リストで、株価をグラフにする取引間隔を選択します。使用可能な選択項目 (秒、分、時、日、週、月または年を含む) のドロップダウン・リストから間隔を選択します。
4. 「日付」ドロップダウン・リストで、取引日付を含む照会結果セットのデータ列の名前を指定します。
5. 「高値」ドロップダウン・リストで、毎日の株の高値を含む照会結果セットのデータ列の名前を指定します。
6. 「安値」ドロップダウン・リストで、毎日の株の安値を含む照会結果セットのデータ列の名前を指定します。
7. 株の始値を表示する場合は、「始値を表示」チェック・ボックスを選択します。
8. 「始値」ドロップダウン・リストで、毎日の株の始値を含む照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
9. 株の終値を表示する場合は、「終値を表示」チェック・ボックスを選択します。
10. 「終値」ドロップダウン・リストで、毎日の株の終値を含む照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
11. 「取引出来高を表示」チェック・ボックスを選択すると、各株の取引出来高が表示されます。
12. 「出来高」ドロップダウン・リストで、毎日の株の出来高を含む照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
13. 「終了」をクリックします。「株価グラフ」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウにグラフが表示されます。

#### ローソク足グラフの挿入:

ローソク足グラフは、株価の損益 (またはその他の価値ベースの指標) および時間の経過に伴う出来高を示すのに使用されます。

このタスクについて

ローソク足グラフを挿入するには:

#### 手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「ローソク足グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「ローソク足グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「ローソク足グラフのオプションを選択します」ページが開きます。
3. 「取引間隔」ドロップダウン・リストで、株価をグラフにする取引間隔を選択します。使用可能な選択項目 (秒、分、時、日、週、月または年を含む) のドロップダウン・リストから間隔を選択します。
4. 「日付」ドロップダウン・リストで、取引日付を含む照会結果セットのデータ列の名前を選択します。



5. 「始値」ドロップダウン・リストで、毎日の株の始値を含む照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
6. 「終値」ドロップダウン・リストで、毎日の株の終値を含む照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
7. 「高値を表示」チェック・ボックスを選択すると、株価の高値が表示されます。
8. 「高値」ドロップダウン・リストで、毎日の株の高値を含む照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
9. 「安値を表示」チェック・ボックスを選択すると、株価の安値が表示されます。
10. 「安値」ドロップダウン・リストで、毎日の株の安値を含む照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
11. 「取引出来高を表示」チェック・ボックスを選択すると、各株の取引出来高が表示されます。
12. 「出来高」ドロップダウン・リストで、毎日の株の出来高を含む照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
13. 「終了」をクリックします。「ローソク足グラフ」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウにグラフが表示されます。

予定表グラフの挿入:

予定表グラフでは、時系列を曲線で表示します。

このタスクについて

予定表グラフを挿入するには:

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「予定表グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「予定表グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「点の位置を示すフィールドを選択します」ページが開きます。
3. 「日付」ドロップダウン・リストで、予定表グラフの日付/時刻軸にグラフ化する照会結果セットのデータ列の名前を指定します。日付または時刻の値を含むデータ列を選択する必要があります。
4. 「値」ドロップダウン・リストで、予定表グラフの数値軸にグラフ化する照会結果セットのデータ列の名前を指定します。数値を含むデータ列を選択する必要があります。
5. 「終了」をクリックします。「予定表グラフ」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウにグラフが表示されます。

イベント帯域グラフの挿入:

イベント帯域グラフには、照会によって戻された各行の時間間隔を表す縦の帯域が表示されます。

このタスクについて

イベント帯域グラフを挿入するには:

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「イベント帯域グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「イベント帯域グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「イベントの時間枠を表示するフィールドを選択します」ページが開きます。
3. 「開始日」ドロップダウン・リストで、イベント帯域グラフでグラフ化するイベントの開始日を含む照会結果セットのデータ列の名前を選択します。日付を含むデータ列を選択する必要があります。
4. 「終了日」ドロップダウン・リストで、イベント帯域グラフでグラフ化するイベントの終了日を含む照会結果セットのデータ列の名前を指定します。日付を含むデータ列を選択する必要があります。
5. 「終了」をクリックします。「イベント帯域グラフ」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウにグラフが表示されます。

クラスター・グラフの挿入:

「クラスター図表」では、スポークを持つ一連の再帰的かつ円形のハブにデータが表示されます。

このタスクについて

クラスター・グラフを挿入するには:

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「クラスター・グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「クラスター・グラフ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「親子関係を示すフィールドを選択します」ページが開きます。
3. 「親フィールド」ドロップダウン・リストから、クラスター・グラフの親セルとして使用する照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
4. 「子フィールド」ドロップダウン・リストから、クラスター・グラフの子セルとして使用する照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
5. 「表示する子の最大深度を選択」リスト・ボックスで、クラスター・グラフで特定のズーム・レベルにおいて親オブジェクトの下に表示する子レベルの最大数を指定します。子レベルの単一レベルを表示するには、フィールドに 1 を入力します。
6. 「終了」をクリックします。「クラスター・グラフ」ウィザードが閉じて、エディター・ウィンドウにグラフが表示されます。

線形マップの挿入:

線形マップは、地理コンテキストで空間データを表示します。

このタスクについて

線形マップを挿入するには:

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「線形マップ」オブジェクトをダブルクリックします。「線形マップ」ウィザードが開きます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「線形マップ・オプション」ページが開きます。
3. 線形マップを折れ線で作図するように指定するには、「データに開いた境界が含まれている。折れ線で作図。」を選択します。頂点のデータが折れ線として照会結果データ列に保管されている場合は、このオプションを選択します。折れ線で保管されている場合、頂点には開いている境界があります。最後のポイントと最初のポイントは異なります。
4. 線形マップを多角形で作図するように指定するには、「データに閉じた境界が含まれている。多角形で作図。」を選択します。頂点のデータが多角形として照会結果データ列に保管されている場合は、このオプションを選択します。多角形として保管すると、頂点の境界は閉じています。
5. 「次へ」をクリックします。「境界を含むフィールドを選択します」ページが開きます。
6. 「境界フィールド」ドロップダウン・リストで、マップの頂点を含む照会結果セットのデータ列を指定します。
7. 「終了」をクリックします。「線形マップ」ウィザードが閉じて、エディター・ウィンドウにマップが表示されます。

簡易書式オブジェクトの挿入:

簡易書式オブジェクトを使用すれば、照会内の 1 つの行からの値のみを表示する必要があるときにデータ取得プロセスを最適化できます。

このタスクについて

複数のラベル・オブジェクトを簡易書式上に配置すれば、指定した照会行の別のセルにある値を表示できます。

簡易書式を挿入するには、以下のようになります。

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「簡易書式」オブジェクトをダブルクリックします。
2. 「簡易書式ウィザード」で、簡易書式レイアウトにデータを指定するテーブルまたは照会にナビゲートし、「終了」をクリックします。「簡易書式ウィザード」が閉じて、簡易書式オブジェクトがシーンに配置されます。
3. 必要なラベル・オブジェクトを簡易書式レイアウトに追加します。

- a. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、挿入した簡易書式レイアウトにナビゲートします。
  - b. 「パレット」ビューで「図形要素」を展開し、「ラベル」を選択します。
  - c. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの簡易書式レイアウトの下にある「**Level1**」ノードにラベル・オブジェクトをドラッグします。
4. 「式デザイナー」を使用して、各ラベル・オブジェクトで表示する値を指定します。
    - a. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、追加したラベル・オブジェクトを選択します。
    - b. 「プロパティ」ビューで「**Text**」プロパティ値をダブルクリックします。
    - c. 「式デザイナー」ウィンドウで、表示する値を含む列の名前でデフォルト・テキストを置き換えます。この場合、「照会」 > 【照会名】 > 「出力列」を展開して、必要な列を選択します。

注: 【照会名】は、簡易書式レイアウトに対して指定された照会またはテーブルの名前を表します。

5. 「**OK**」をクリックして、「式デザイナー」ウィンドウを閉じます。

#### タスクの結果

必要なラベルをすべて含む簡易書式レイアウトがシーンに追加されています。実行時モードで結果を確認できます。

#### 行列の挿入:

行列は、セルの 2 次元配列でデータを表示します。

#### このタスクについて

行列を挿入するには:

#### 手順

1. 作成したオブジェクトをダブルクリックし、必要な値とともにコントロール (例えば、ラベル) を追加します。これは [object\_name] に表示されます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「行列オプションを指定します」ページが開きます。
3. 「セル幅」フィールドに各セルの幅を指定します。
4. 「セル高」フィールドに各セルの高さを指定します。
5. 「ガター幅」フィールドにガターの幅 (セル間の横方向のスペース) を指定します。
6. 「ガター高さ」フィールドにガターの高さ (セル間の縦方向のスペース) を指定します。
7. 「列数」フィールドに、行列で表示する列の数を指定します。
8. 行列内の各セルの周囲に枠を表示する場合は、「セル枠の表示」チェック・ボックスを選択します。

9. 「終了」をクリックします。 行列ウィザードが閉じて、エディター・ウィンドウに行列が表示されます。

ら旋の挿入:

ら旋オブジェクトでは、各データ・ポイントがだんだん小さくなる内向きの無限ら旋でデータが表示されます。

このタスクについて

ら旋レイアウトは、数学的な関連性のないデータを表示する際に便利です。ら旋オブジェクトでズームインすると、ら旋の中心に近い方のデータが見えるようになり、ズームアウトすると、ら旋の外側部分のデータがより多く表示されます。

ら旋を挿入するには、以下のようにします。

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットでら旋オブジェクトをダブルクリックします。
2. 「ら旋ウィザード」で、ら旋オブジェクトのデータを指定するテーブルまたは照会にナビゲートします。
3. 「終了」をクリックします。「ら旋ウィザード」が閉じて、ら旋オブジェクトがシーン上に表示されます。

タスクの結果

ら旋オブジェクトの外観と振る舞いは、そのら旋オブジェクトのプロパティと、そのら旋オブジェクトがサポートするオブジェクト (データ・テンプレートおよび楕円) のプロパティを変更することによってカスタマイズできます。

ツリー・グラフおよび組織図のノードの操作:

ツリー・グラフまたは組織図をビジュアル・ダッシュボードに挿入して、そのノードを展開したり省略したりすることができます。

組織図の挿入:

組織図は、データをツリー構造で表示します。このツリー構造は上から下に読み、通常は人事階層に関連付けられます。

このタスクについて

組織図を挿入するには:

手順

1. 作成したオブジェクトをダブルクリックし、必要な値とともにコントロール (例えば、ラベル) を追加します。これは [object\_name] に表示されます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「組織図オプション」ページが開きます。

3. 「親フィールド」ドロップダウン・リストで、組織図の親セルに使用する照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
4. 「子フィールド」ドロップダウン・リストで、組織図の子セルとして使用する照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
5. 「ラベルを含む」チェック・ボックスを選択すると、組織図の親および子セルのそれぞれにラベルが含まれます。
6. 「ラベル・フィールド」ドロップダウン・リストで、組織図の親および子セルのそれぞれのラベル情報を入れる照会結果セットのデータ列の名前を指定します。「ラベルを含む」チェック・ボックスを選択した場合は、照会結果セットにある使用可能なデータ列のドロップダウン・リストから、データ列を選択する必要があります。
7. 「親オブジェクトに対する子オブジェクトのサイズ」フィールドで、組織図に表示されるときの子オブジェクトのサイズを、親オブジェクトのサイズに対する相対値で指定します。フィールドに .01 ~ 1 の数値を入力します。
8. 「レイアウト・モデル」ドロップダウン・リストで、レイアウト・ビュー・オプションの「標準」または「水平」を選択します。
9. 「終了」をクリックします。「組織図」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウにグラフが表示されます。

ツリー・グラフの挿入:

「ツリー図表」では、親子関係のカスケード・セットを示すツリー構造にデータが表示されます。

このタスクについて

ツリー・グラフを挿入するには:

手順

1. 作成したオブジェクトをダブルクリックし、必要な値とともにコントロール (例えば、ラベル) を追加します。これは [object\_name] に表示されます。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーで、表または実行する照会にナビゲートして、レイアウト・オブジェクトの照会結果セットを取得し、「次へ」をクリックします。「ツリー・グラフ・オプション」ページが開きます。
3. 「親フィールド」ドロップダウン・リストで、ツリー・グラフの親セルで使用する照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
4. 「子フィールド」ドロップダウン・リストで、ツリー・グラフの子セルとして使用する照会結果セットのデータ列の名前を選択します。
5. 「ラベルを組み込む」チェック・ボックスを選択して、ツリー・グラフの各親および子セルにラベルが含まれるようにします。
6. 「ラベル・フィールド」ドロップダウン・リストで、照会結果セットにおけるデータ列の名前を選択します。このデータ列には、ツリー・グラフ内の各親セルと各子セルに関するラベル情報が含まれます。「ラベルを含む」チェック・ボックスを選択した場合は、照会結果セットにある使用可能なデータ列のドロップダウン・リストから、データ列を選択する必要があります。

7. 「初期表示するレベルの数」フィールドに、ツリー・グラフで最初に親オブジェクトの下に表示するレベルの最大数を指定します。フィールドにレベルの数を入力します。値 1 を入力すると、レベルが 1 つ表示されます。
8. 「終了」をクリックします。「ツリー・グラフ」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウにグラフが表示されます。

ノード状態の変更:

ビジュアル・ダッシュボード上のツリー・グラフ・ノードや組織図ノードの状態を変更できます。

例示図表の挿入:

ビジュアル・ダッシュボードに組織図を追加する例を以下で確認します。このビジュアル・プロジェクトは、デフォルト Samples リポジトリーにある DEMO.EMPLOYEE 表に基づいて作成されます。

このタスクについて

DEMO.EMPLOYEE 表に基づいてビジュアル・プロジェクトを作成するには、次のようにします。

手順

1. ビジュアル・ダッシュボードを作成します。
2. 次の SQL ステートメントを持つ照会を挿入します。

```
SELECT A.EMPLOYEE_ID, A.FULL_NAME, A.SUPERVISOR_ID  
  
FROM DEMO.EMPLOYEE A
```

3. ビジュアル・プロジェクトに組織図を追加します。
4. 「組織図」ウィザードの 2 ページ目で以下の図表オプションを指定します。
  - a. 「親」フィールドに SUPERVISOR\_ID を設定します。
  - b. 「子」フィールドに EMPLOYEE\_ID を設定します。
  - c. 「ラベル」フィールドに FULL\_NAME を設定します。
5. 「終了」をクリックします。例示図表が現行ビジュアル・プロジェクトに追加されます。

図表ノードの状態の保管:

ビジュアル・ダッシュボードのツリー・グラフまたは組織図に図表ノードの状態をプログラマチックに保存できます。DEMO.EMPLOYEE 実例プロジェクトに基づいた図表ノードの状態の保管例を以下に示します。

始める前に

組織図またはツリー・グラフが追加されているビジュアル・ダッシュボードが必要です。

このタスクについて

図表ノードの状態を保管するには、以下のようになります。

## 手順

1. DEMO.EMPLOYEE 実例プロジェクトで、テキスト・タイプの 2 つのグローバル・パラメーター **ExpandedNodesSaved** および **CollapsedNodesSaved** を追加します。
2. **Button** および **Button2** の 2 つのボタンをプロジェクトに追加します。
3. **Button1** で、「**Caption**」プロパティを「保管」と指定します。
4. 「クリック」イベントで「値の設定」アクションを追加します。「新規アクションの追加」ウィザードで、以下の 2 つのアクションを指定します。
  - a. `ExpandedNodesSaved=OrganizationChart1.DataLocator.ExpandedNodes`
  - b. `CollapsedNodesSaved=OrganizationChart1.DataLocator.CollapsedNodes`
5. **Button2** で、「**Caption**」プロパティを「ロード」と指定します。
6. 「クリック」イベントで「値の設定」アクションを追加します。「新規アクションの追加」ウィザードで、以下の 2 つのアクションを指定します。
  - a. `OrganizationChart1.DataLocator.ExpandedNodes=ExpandedNodesSaved`
  - b. `OrganizationChart1.DataLocator.CollapsedNodes=CollapsedNodesSaved`

注: 最初に **ExpandedNodes** の値をバインドし、次に **CollapsedNodes** プロパティの値をバインドする必要があります。

7. 「ランタイム」タブをクリックします。ノードを展開および省略します。「保管」ボタンをクリックして、ノードの状態をグローバル・パラメーターに書き込みます。
8. ノードを展開および省略して、「ロード」ボタンをクリックし、「保管」ボタンのクリックによって保管された状態にツリーを復元します。

## 図表ノードをすべて展開/省略:

ビジュアル・ダッシュボード上でツリー・グラフや組織図に含まれる図表ノードをすべてプログラマチックに展開/省略できます。DEMO.EMPLOYEE 例示プロジェクトに基づいて図表ノードを展開/省略する例を考えます。

## 始める前に

組織図またはツリー・グラフが追加されているビジュアル・ダッシュボードが必要です。

## このタスクについて

図表ノードをすべて展開/省略するには、次のようにします。

## 手順

1. DEMO.EMPLOYEE 例示プロジェクトでボタンを追加し、その「キャプション」値を「すべて展開」に設定します。
2. 次の式を使用して **Click** イベント上にアクション「値の設定」を追加します。
  - a. `OrganizationChart1.DataLocator.ExpandedNodes=field("Query1", "EMPLOYEE_ID")`

注: 式で使用する区切り記号はロケール設定によって異なります。



3. ボタンを追加し、その「キャプション」値を「すべて縮小」に設定します。
4. 次の式を使用して **Click** イベント上にアクション「値の設定」を追加します。
  - a. `OrganizationChart1.DataLocator.CollapsedNodes=field("Query1", "EMPLOYEE_ID")`

注: 式で使用する区切り記号はロケール設定によって異なります。

5. 「ランタイム」タブをクリックします。「すべて展開」をクリックして図表ノードをすべて展開したり、「すべて縮小」をクリックして図表ノードをすべて省略したりします。

注: 例示ボタンをデータ・テンプレートに追加した場合、そのボタンは、そのデータ・テンプレートに接続されているノードでのみ機能します。

ラベルを選択して図表ノードをすべて展開/縮小:

ビジュアル・ダッシュボード上でツリー・グラフや組織図に含まれる現行図表ノードを、ラベルを選択することによって展開/省略できます。 DEMO.EMPLOYEE 例示プロジェクトに基づいて図表ノードを展開/省略する例を考えます。

始める前に

組織図またはツリー・グラフが追加されているビジュアル・ダッシュボードが必要です。

このタスクについて

図表ノードを展開/省略するには、以下のようになります。

手順

1. DEMO.EMPLOYEE 例示プロジェクトにおいて、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで「**OrganizationChart1**」構成要素、「**DataTemplate1 (Query1)**」、「**Level1**」を展開し、「**Label1**」を選択します。
2. 「**Label1**」の **Click** イベントに対して「値の設定」アクションを追加します。

```
OrganizationChart1.DataTemplate1.Level1.ChildLink1.Expanded=!OrganizationChart1.DataTemplate1.Level1.ChildLink1.Expanded
```
3. 「ランタイム」タブをクリックします。図表ノードのラベルをクリックして図表ノードを展開/省略します。

特定図表ノードの展開:

ビジュアル・ダッシュボード上でツリー・グラフや組織図に含まれる特定図表ノードをプログラマチックに開くことができます。 DEMO.EMPLOYEE 例示プロジェクトに基づいて図表ノードを展開/省略する例を考えます。

始める前に

組織図またはツリー・グラフが追加されているビジュアル・ダッシュボードが必要です。

このタスクについて

ツリー・グラフや組織図に含まれる特定図表ノードを開くには、次のようにします。

手順

1. DEMO.EMPLOYEE 例示プロジェクトでコンボ・ボックス・オブジェクトを追加します。
2. 「コンボ」ウィザードで、「**OrganizationChart1**」に使用される「**Query1**」を指定します。
3. 「**EMPLOYEE\_ID**」列の値を「コンボ・ボックス」に追加します。
4. 「**OrganizationChart1**」構成要素、「**DataTemplate1(Query1)**」、「**Level1**」を展開し、「**Label1**」を選択します。
5. 選択されたノードが強調表示されるように、式 `=if (EMPLOYEE_ID=Combo1.Selection,#F00000,#78b1ea)` を追加して、「**Frame.FillStyle.FillColor**」プロパティを変更します。

注: 式で使用する区切り記号はロケール設定によって異なります。

6. コンボ・ボックス・オブジェクトの **Change** イベントに対して「値の設定」アクションを追加します。

```
OrganizationChart1.DataLocator.CollapsedNodes=field("Query1","EMPLOYEE_ID")
```

```
OrganizationChart1.DataLocator.ExpandedNodes=Combo1.Selection
```

```
OrganizationChart1.DataLocator.CollapsedNodes=Combo1.Selection
```

7. 「ランタイム」タブをクリックします。必要な ID をコンボ・ボックス・オブジェクトから選択します。適切なノードが展開されて赤で強調表示されます。

ダイヤルの挿入:

「ダイヤル」は、データのポイントを、測定スケール上に 2 つの数値間の範囲として表示します。

このタスクについて

ダイヤルを挿入するには、以下のようになります。

手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「ダイヤル」オブジェクトをダブルクリックします。「ダイヤル・ウィザード」が開きます。
2. ダイヤルに表示する最小値を「最小」リストで選択します。
3. ダイヤルに表示する最大値を「最大」リストで選択します。
4. ダイヤルの開始角度を「開始」リストで選択します。例えば、「**-90**」を指定すると、ダイヤルの中央からキャンバスの左側に伸びる水平線が表示されます。
5. ダイヤルの終了角度を「終了」リストで選択します。例えば、「**90**」を指定すると、ダイヤルの中央からキャンバスの右側に伸びる水平線が表示されます。

6. ダイアルを自動的に対称にするには、「対称」チェック・ボックスを選択します。このオプションは、「終了」角度を「開始」角度とは反対に設定します。例えば、「開始」角度を「-110」に設定すると、「終了」角度は自動的に「110」に設定されます。
7. ダイアルの弧の内側に主目盛りマークのラベルを表示するには、「内側にラベル」を選択します。
8. ダイアルの弧の外側に主目盛りマークのラベルを表示するには、「外側にラベル」を選択します。
9. ダイアルにセクターを追加するには、「セクター」フィールドに値を指定して、「新しい項目を追加」ボタンをクリックします。「最大」値が、指定したセクターの合計を反映するように自動的に変更されます。例えば、デフォルトではそれぞれ「33.33」に設定された 3 つのセクターがあります。これは、それぞれが合計ダイアルの 3 分の 1 である 3 つのセクターを持つ、1 つのダイアルを作成します。値が「20」の別のセクターを追加すると、「最大」値は「120」に設定されます。
10. セクターを削除するには、リストで既存のセクターを強調表示して、「項目を削除」ボタンをクリックします。
11. 「終了」をクリックします。「ダイアル・ウィザード」が閉じ、新規ダイアル・オブジェクトがダッシュボード・キャンバスに表示されます。

#### ソリッド・グラフの挿入:

ソリッド・グラフでは、QMF におけるすべての照会タイプを対象とした図表のように、照会結果データが視覚的に分かりやすい形式で表示されます。ビジュアル・プロジェクトで使用できる他の複合図表とは対照的に、ソリッド・グラフはオブジェクト全体としてシーンに追加されます。ソリッド・グラフは完全にカスタマイズ可能です。

#### このタスクについて

ソリッド・グラフ・オブジェクトを挿入するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「パレット」ビューの「レイアウト」パレットにある「ソリッド・グラフ」オブジェクトをダブルクリックします。「ソリッド・グラフ」ウィザードが開きます。
2. 図表を作成する対象となる照会を選択して、「次へ」をクリックします。
3. 選択した照会に保管済みの図表が含まれる場合は、その図表を「図表」ページでビジュアル・プロジェクトに追加できます。その場合は、「終了」をクリックしてウィザードを閉じます。
4. 図表を作成するには、「図表タイプ」ページで図表のタイプを指定します。図表タイプについて詳しくは、『図表タイプ・オプションの指定』トピックを参照してください。「次へ」をクリックします。
5. 「データ系列」ページで、図表のデータ・ポイントの生成に使用する結果セットの列を指定します。詳しくは、『データ系列オプションの指定』トピックを参照してください。「次へ」をクリックします。

6. 「形式」 ページで、図表のビジュアル出力を定義するオプションを指定します。詳しくは、『形式オプションの指定』トピックを参照してください。
7. 「終了」をクリックして、「ソリッド・グラフ」ウィザードを閉じます。作成した図表がシーン上に表示されます。

#### ソリッド・グラフの編集:

追加されたソリッド・グラフを編集して特定の目的のためにカスタマイズできます。

このタスクについて

ソリッド・グラフを編集するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「キャンバス」モードで、編集するソリッド・グラフを右クリックし、「図表の編集」を選択します。
2. 「図表プロパティの編集」ウィンドウで、以下のオプションを編集できます。
  - 図表タイプ
  - データ系列
  - 図表形式

ソリッド・グラフ・オプションの編集について詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- 図表タイプ・オプションの指定
  - データ系列オプションの指定
  - フォーマット・オプションの指定
3. ソリッド・グラフ・オプションの編集を終了したら、「OK」をクリックして変更を適用します。

#### レイアウト・オブジェクトの照会の変更:

「プロジェクト・エクスプローラー」メニューの「照会の変更」を選択することにより、レイアウト・オブジェクトの照会を変更できます。

このタスクについて

レイアウトのオブジェクトの照会を変更するには:

#### 手順

1. プロジェクト・エクスプローラーで、照会を変更するレイアウト・オブジェクトのデータ・テンプレート・フォルダーを右クリックします。
2. ポップアップ・メニューから「照会の変更」を選択します。「照会の選択」ウィンドウが開き、ここで「照会」フォルダーに追加した照会を選択することができます。
3. 「OK」をクリックします。レイアウト・オブジェクトが、選択された新規照会を使用するようになります。

照会パラメーター値の指定:

レイアウト・オブジェクトのデータ・テンプレートの「パラメーター」フォルダーで、レイアウト・オブジェクトの照会パラメーター値を指定できます。

このタスクについて

照会パラメーター値を指定するには:

手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、照会パラメーターを設定するレイアウト・オブジェクトのデータ・テンプレート・フォルダーを展開します。  
「パラメーター」フォルダーを展開します。
2. 「パラメーター」フォルダーからパラメーターを選択します。パラメーターの名前とそのパラメーターの現在のデフォルト値が、「プロパティ」ビューに表示されます。
3. 「プロパティ」ビューで、パラメーターの新しい値を指定します。リテラル、または実行時に評価される式を指定できます。

レイアウト・オブジェクトの機能拡張:

レイアウト・オブジェクトは、ビジュアル・プロジェクトに挿入できる最も用途の広いオブジェクトです。最初にレイアウト・ウィザードで作成されるレイアウト・オブジェクトは、照会結果データの単一のセットを単純に、一次元で表現します。ただし機能を追加するにつれ、単一のレイアウト・オブジェクトは、単一の照会より多くの照会から取得したデータを動的に、かつ多次元で表現するようになります。

拡張レイアウト・オブジェクトについて:

拡張レイアウト・オブジェクトを使用すると、結果セット内の 1 つ以上の列にわたってデータをロールアップすることができます。

拡張レイアウト・オブジェクトは、関連付けられている照会結果セット内の 1 つ以上の列にわたってデータのビジュアルなクライアント・サイド OLAP ロールアップが行える点で標準レイアウト・オブジェクトと異なります。これによりビジュアル・デザイナーは、データのビジュアル表示を、さらに整理された、使いやすいものとして作成することができます。ユーザーは、結果セット全体を表示することなく、特定のデータ記号までドリルダウンして必要なデータだけを即時に取得することができます。例えば、サンプル・リポジトリに含まれている Q.STAFF 表には、社内の各従業員につき 1 行、合計で 35 行あります。全 35 人の従業員の給与を円グラフで表示しようとする、表示が複雑になり、分かりにくくなります。これを行う代わりに「拡張」オプションを使用することで、結果セット内の 1 つ以上の列にわたって給与データをロールアップし、基礎データにオンデマンドでドリルダウンすることができます。Q.STAFF 表の場合、部門、ジョブ・タイプの順に給与をロールすることを選択できます。このモードの下、円グラフに各部門のスライスが表示されます。これには正符号があり、これをクリックすると各くさびが展開されて、その特定の部門のジョブ・タイプがそれぞれ表示されます。各ジョブ・タイプのスライスを展開すると、特定の部門および特定のジョブ・タイプの個人の給与情報が表示されます。照会結果またはレイアウト・ウィザードのサイド・グループに

移動される 1 つ以上の列を指定することにより、ドリルダウン操作を必要な数だけレイアウト・オブジェクトに追加することができます。

レイアウト・オブジェクトでの **OLAP** データの表示:

OLAP データをレイアウト・オブジェクトに表示することにより、管理しやすい階層にビジュアル・データを編成することができます。

レイアウト・オブジェクトの中には OLAP データを表示できるものがあります。OLAP データを表示できるレイアウト・オブジェクトは、次のとおりです。

- 棒グラフ
- 柱グラフ
- 円グラフ

マルチディメンション・データ・ソースから OLAP 照会を選択することにより、OLAP データをこれらのレイアウトに表示することができます。これには利点があります。ビジュアル・デザイナーはデータを表示するディメンションを選択することができ、ユーザーは特定の詳細レベルにドリルダウンすることができます。ディメンション内のレベルの部分を徐々に展開することで、徐々に掘り下げて詳細度を上げることができます。各レベルの詳細で、そのレベルのデータ・ポイントをビジュアルに示すために、レイアウト・オブジェクトのデータ記号が最新表示されます。

例えば、製品データ、地域データ、および時間データのディメンションが含まれるキューブ・モデルがあるとします。製品ディメンションには、4 つの製品ファミリーに編成される個々の製品が入れられます。地域ディメンションには、4 つの地理的地域に編成される都道府県が入れられます。時間ディメンションには、現行年の 4 つの会計四半期が入れられます。全製品の利益合計を表示する柱グラフを作成し、時間および地域別のビジュアル・データを編成します。PROFIT 列からのデータ・ポイントをバーで表示するよう柱グラフを設定し、Time および Region ディメンションを選択してデータを編成します。柱グラフは最初、地域ごとの年間の利益合計を示す 4 つのバーとして表示されます。現行ディメンション・レベルを表示する拡張可能セルが各柱の下に表示されます。ユーザーは任意の地域にドリルダウンすることができます。その際、柱グラフは最新表示されて、その地域のすべての都道府県の柱を表示します。その間、他の 3 つの地域の合計も表示されています。ユーザーはさらにドリルダウンして、特定の都道府県の四半期の合計を表示することができます。また、ユーザーは特定の地域の年にドリルダウンして、その地域の四半期の合計を表示することもできます。この動的な編成により、ユーザーはデータのビジュアル比較を短時間で簡単に作成することができます。これは大きめのデータ・セットに適しているからです。

OLAP データをレイアウト・オブジェクトに編成する別の方法は、スライサー・オブジェクトを使用することです。スライサー・オブジェクトは、レイアウト・オブジェクトに表示されるマルチディメンション・データをフィルターに掛けるために使用されます。ビジュアル・デザイナーはスライサーを作成し、フィルターに掛けるレイアウト・オブジェクトの OLAP 照会のディメンションを選択します。ユーザーが実行時にスライサー・オブジェクトをクリックすると、選択されたすべてのディメンションの階層および階層エレメントをリストするウィンドウが開きます。ユーザーは、レイアウト・オブジェクトに表示されるエレメントを確認することがで

きます。ユーザーがフィルター・ウィンドウの設定を変更するたびにレイアウト・オブジェクトが最新表示され、フィルターに掛けられるデータの変更が反映されま

す。

例えば上記のレイアウト・オブジェクトでは、データは時間および地域別に編成され、常にデータ記号ごとの製品の合計を表示します。任意の時点で表示される特定の製品合計または製品グループ合計をユーザーが選択できるようにします。スライサー・オブジェクトを挿入し、Product ディメンションを選択してデータをフィルターに掛け、接続ツールを使ってスライサー・オブジェクトをレイアウト・オブジェクトに接続します。ユーザーが実行時にスライサー・オブジェクトをクリックすると、すべての製品ディメンションの階層エレメントを含むツリーを表示するウィンドウが開きます。ユーザーが製品のチェック・マークを外して「OK」をクリックすると、レイアウト・オブジェクトが自動的に最新表示され、選択された製品の合計だけが表示されます。

デフォルト・データ記号の変更:

グラフィック・レイアウト・オブジェクトにはそれぞれ、デフォルトのデータ記号オブジェクトが含まれており、レイアウト・オブジェクト内ではこれを使用して、照会結果データの各行をデータ・ポイントとして表示します。多くのレイアウト・オブジェクトでは、デフォルトのデータ記号を変更して、そのプロパティを変更できます。

このタスクについて

レイアウト・オブジェクトのデフォルト・データ記号を変更するには:

手順

1. レイアウトをダブルクリックして、そのデータ・テンプレートの内容を表示します。
2. 既存のデータ記号を選択し、DELETE を押します。
3. 使用する新規データ記号を「パレット」ビューから選択し、エディターに挿入します。新規データ記号の名前が、「プロジェクト・エクスプローラー」ビュー内の「データ・テンプレート」フォルダーに追加されます。
4. 「プロパティ」ビューを使用して、データ記号の形状または色などのプロパティを変更することができます。

デフォルト・コネクタの変更:

多くのグラフィック・レイアウト・オブジェクトには、デフォルトのコネクタ・オブジェクトが組み込まれており、レイアウト内ではこれを使用して各データ・ポイントを接続します。コネクタが含まれたレイアウト・オブジェクトでは、デフォルトのコネクタを変更して、そのプロパティを変更できます。

このタスクについて

レイアウト・オブジェクトのデフォルト・コネクタを変更するには:

## 手順

1. プロジェクト・エクスプローラーで、「データ・テンプレート」フォルダーからデフォルト・コネクター名を選択し、**Delete** を押します。
2. 使用する新規コネクターを「パレット」ビューから選択し、エディターに挿入します。エディター・ウィンドウに、新規コネクターが含まれたレイアウト・オブジェクトが表示されます。新規コネクターの名前が、「プロジェクト・エクスプローラー」内の「データ・テンプレート」フォルダーに追加されます。
3. 「プロパティ」ビューを使用して、コネクターのプロパティを変更することができます。

データ・ポイントごとに複数のグラフィック・オブジェクトを表示:

多くのレイアウト・オブジェクトでは、照会結果セットに含まれるデータの各行に、データ記号の各インスタンスで表示される追加グラフィックスを追加できます。

このタスクについて

例えば、円グラフのデフォルトのデータ記号は扇形です。円グラフの各扇形にテキスト・ラベルと 2 つのラジオ・ボタンを追加表示するように指定することができます。「パレット」ビューにあるグラフィック・オブジェクトをどれでも選択して、追加することができます。ただし、いくつかの例外があります。

照会データの各行に表示するグラフィック・オブジェクトを追加するには:

## 手順

1. レイアウト・オブジェクトをダブルクリックして、そのデータ・テンプレートの内容を表示します。
2. 追加するレイアウト・オブジェクトを「パレット」ビューから選択し、エディター・ウィンドウに挿入します。エディター・ウィンドウに、新しいグラフィック・オブジェクトがドロウされます。グラフィック・オブジェクトの名前が、プロジェクト・エクスプローラー内の「データ・テンプレート」フォルダーに追加されます。
3. 「プロパティ」ビューを使用して、データ記号の形状または色などのプロパティを変更することができます。

単一のレイアウト内での複数の照会結果の表示:

多くのレイアウト・オブジェクトでは、複数の照会結果を単一のレイアウト・オブジェクトで表示できます。

このタスクについて

例えば、単一の XY グラフを作成し、ある照会から取得した売上高と、別の照会から取得した経費を表示させることができます。単一のレイアウト・オブジェクトにドロウされる照会結果データの各セットは、独自のデータ・テンプレートを持ちます。レイアウトに複数のデータ・テンプレート (照会結果の集合) を含めると、各データ・テンプレートは「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「レイアウト



ト」フォルダーに表示される順でドロースられます。フォルダーで最後に表示されているデータ・テンプレートは、最後にドロースられるため、その前にドロースされたすべてのレイヤーの上に表示されます。

データ・テンプレートを追加できるのは、以下のレイアウト・オブジェクトです。

- ローソク足グラフ
- イベント帯域グラフ
- 線形マップ
- 散布図
- 株価グラフ
- 予定表グラフ
- 柱グラフ
- 棒グラフ

既存データ・テンプレートのコピー:

既存データ・テンプレートをコピーしてから、元のデータ・テンプレートに関連付けられた照会を変更することによって、データ・テンプレートをレイアウトに追加できます。

このタスクについて

データ・テンプレートをコピーすると、データ・テンプレート・フォルダー内のすべての子オブジェクトもコピーされます。その結果、既存データ・テンプレートが完全に複製されます。その後、新しいデータ・テンプレートに関連付けられた照会を変更し、オプションで子オブジェクトのプロパティを変更することもできます。

既存データ・テンプレートをコピーしてレイアウト・オブジェクトに追加するには:

手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、コピーするデータ・テンプレート・フォルダーを右クリックします。ポップアップ・メニューから「コピー」を選択します。「データ・テンプレート」フォルダーがクリップボードにコピーされます。
2. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、データ・テンプレートを追加するレイアウト・オブジェクト・フォルダーを右クリックします。ポップアップ・メニューから「貼り付け」を選択します。データ・テンプレート・フォルダーがレイアウト・オブジェクトのフォルダーにコピーされます。
3. 以下のいずれかの方法で、データ・テンプレートに関連付けられた照会を変更できます。
  - 追加した新規のデータ・テンプレート・フォルダーを右クリックし、「照会の変更」を選択します。「照会の選択」ウィンドウが開き、ここで「照会」フォルダーに追加した照会を選択することができます。
  - コピーしたデータ・テンプレートがパラメーターを持つ照会を使用する場合、照会パラメーターの値を変更することによって、データ・テンプレート

の照会を変更することができます。追加したデータ・テンプレート・フォルダーを展開し、「照会パラメーター」フォルダーを選択します。照会パラメーターを新しい値に設定します。

4. データ・テンプレートをレイアウト・オブジェクトに追加した後、オブジェクトとそのプロパティを必要に応じて変更することができます。
5. エディターで「ランタイム」をクリックして結果を表示します。

新規データ・テンプレートの作成:

「データ・テンプレートの挿入」コマンドを使用して、新しいデータ・テンプレートをレイアウト・オブジェクトに追加することができます。

このタスクについて

新しいデータ・テンプレートをレイアウト・オブジェクトに追加する場合は、そのレイヤーでデータを表示するために使用するグラフィック・オブジェクトを追加する必要があります。

新規データ・テンプレートをレイアウト・オブジェクトに追加するには:

手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、データ・テンプレートを追加するレイアウト・オブジェクト・フォルダーを右クリックします。ポップアップメニューから「新規」>「データ・テンプレート」を選択します。「データ・テンプレート」ウィザードが開きます。
2. 「データ・テンプレート」ウィザードから、このデータ・テンプレートのデータを取得するために使用する照会を選択します。「データ・テンプレート」ウィザードにリストされる照会は、「照会」フォルダーに追加したものです。
3. データ・テンプレートをレイアウトに追加した後、オブジェクトとそのプロパティを必要に応じて変更することができます。追加したデータ・テンプレート・フォルダーを選択します。データ・テンプレートの新しいキャンバスがエディター・ウィンドウに開きます。
4. エディターで「ランタイム」をクリックして結果を表示します。

データ・テンプレートについて:

データ・テンプレートは、レイアウト・オブジェクトの照会結果セット・データをビジュアル表示します。

データ・テンプレートは、レイアウト・オブジェクト内の照会結果セット・データのビジュアル表示を作成し、制御するために使用されます。データ・テンプレート内に配置するものはすべて、テンプレートと関連付けられている照会から返されるデータの各行に複製されます。例えば、折れ線グラフのテンプレートがデータ記号と接続線で構成されているとします。照会データの各行は、その独自のデータ記号および接続線によって表されます。データ・テンプレートへの直接アクセスにより、コンテンツ開発者は、カスタマイズされたさまざまなグラフやレイアウトを構成することができます。例えば、データ・テンプレート内の各バーの開始点と終点

を設定し、データ列の平均、および第 1 四分位数と第 3 四分位数に設定されている水平線図形要素を追加することにより、浮動四分位数グラフを生成することもできます。

データ・テンプレートにより、レイアウトの性質をかなりの程度制御できます。しかし、データ・テンプレートを使用してグラフやレイアウトに対して小さな変更を加えることもできます。以下の段落では、データ・テンプレートに対して行うことができる典型的な変更をいくつか示します。

#### データ記号およびグラフィックス・オブジェクトのカスタマイズ

レイアウト・オブジェクト内での照会結果の表示方法をカスタマイズすることができます。これは、そのデータ・テンプレートに含まれているオブジェクトのプロパティを編集することによって行えます。例えば、販売チームの各メンバーの名前を太字で表示する組織図を作成するとします。デフォルトで、それぞれの名前を表示するラベル・オブジェクトのテキストは太字になっていません。それぞれの名前を太字テキストで表示するには、組織図のデータ・テンプレート・フォルダーでラベル・オブジェクトの **Bold** プロパティを **true** に変更します。これにより、販売チームの各メンバーの名前が太字テキストで表示されます。データ記号とグラフィックス・オブジェクトの表示プロパティをパラメーター化することもできます。ノルマを達成した販売チームのメンバーの名前は黒色テキストで表示し、ノルマを達成しなかった販売チームのメンバーの名前は赤色テキストで表示するとします。データ・テンプレートのラベル・オブジェクトの **Color** プロパティの値を条件式に変更します。これにより、組織図の実行時に、ノルマを満たしたかどうかに応じて販売チームのメンバーの名前がそれぞれ赤または黒で表示されます。

#### データ・ポイントごとに複数のグラフィック・オブジェクトを表示

データ・ポイントごとに複数のオブジェクトを表示することができます。これは、レイアウト・オブジェクトのデータ・テンプレート・フォルダーに複数のオブジェクトを追加することによって行えます。ここでも組織図を例にとると、販売チームのメンバーの四半期ごとの総売上を名前別に表す柱グラフを追加することもできます。データ・テンプレート・フォルダーをエディター・ウィンドウで開き、パラメーター化された柱グラフ・オブジェクトを、組織図のラベル・オブジェクトの直下に配置されるように追加します。これにより、組織図の実行時に、四半期ごとの販売合計を示す各チーム・メンバーの柱グラフが表示されます。これにより、組織図の実行時に、四半期ごとの販売合計を示す各チーム・メンバーの柱グラフが表示されます。

#### 単一のレイアウト・オブジェクト内での複数の照会結果セットの表示

データ・テンプレートは常に単一の照会と関連付けられます。しかし、データ・テンプレートのデータを表示する際には、任意の数の列を使用できます。例えば、3 つの照会列をグラフで表し、各データ・ポイントの色またはサイズを他の 3 つの照会列に基づいて設定することもできます。

レイアウトに複数のデータ・テンプレートを含めることができます。データ・テンプレートはそれぞれ異なる照会からデータを取り出し、同じまたは異なるデータ・ソースに対して実行します。レイアウトに複数のデータ・テンプレートを追加すると (折れ線グラフなど)、すべてのデータ・ポイントが同じ軸の対の中に表示され、

すべての照会/データ・テンプレートで最大および最小データ値に自動的にスケールリングされます (設定した場合)。最終的には、ある特定のレイアウトで複数のビジュアル表示を使用することができます。例えば、それぞれ同じまたは異なるデータ・テンプレートから実行される、柱グラフ内の 1 つ以上の折れ線グラフのトレースを表示することができます。

データ・テンプレートの可視性の変更:

データ・テンプレート・レイヤーをレイアウト・オブジェクトで表示するかどうかを指定できます。

このタスクについて

データ・テンプレートの可視性プロパティはブール値になっていて、**true** または **false** に設定することができます。 **True** または **False** の値を戻すプロパティの式を入力することも可能です。

レイアウト・オブジェクト内のデータ・テンプレートの可視性を指定するには:

手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューから、可視性プロパティを変更する「データ・テンプレート」フォルダーを選択します。そのデータ・テンプレートのすべてのプロパティが「プロパティ」ビューに表示されます。
2. 「可視性」プロパティのリスト・ボックスから **True** または **False** を選択するか、**True** または **False** を戻すプロパティの式を指定します。

タスクの結果

注: データ・テンプレート・フォルダーがないレイアウト・オブジェクトの場合、可視性はレイアウト・オブジェクトのプロパティです。そのレイアウト・オブジェクトを選択して、「可視性」プロパティを変更します。

レイアウト・オブジェクトのネスト:

レイアウト・オブジェクトをネストすると、照会結果の情報を高いレベルのオブジェクトから低いレベルのオブジェクトに受け渡すことができます。この情報の受け渡しが可能であるため、ネストされたレイアウトを使用して、特定のデータ値に関連する詳細情報を表示することができます。

このタスクについて

例えば、従業員の組織図内のボックスごとに、その特定の従業員の給与履歴を使用した棒グラフも表示することができます。

あるレイアウト・オブジェクトを別のレイアウト・オブジェクト内にネストするには:

手順

1. レイアウトをダブルクリックして、そのデータ・テンプレートの内容を表示します。

2. データ・テンプレート・フォルダーのキャンバスがエディター・ウィンドウに開きます。
3. 「パレット」ビューから新規レイアウト・オブジェクトを選択します。その新規レイアウト・オブジェクトをエディター・ウィンドウに挿入します。[レイアウト名] ウィザードが開きます。この子レイアウトのデータを取得するために使用する照会の名前を指定します。[レイアウト名] ウィザードにリストされる照会は、ビジュアル・プロジェクトの「照会」フォルダーに追加された照会です。
4. 子レイアウト・オブジェクトで使用する照会を作成している場合は、以下のいずれかを行うことができます。
  - 照会パラメーターを使用して親レイアウト・オブジェクトの照会結果を参照する照会を作成する。親の照会結果を参照することによって、子レイアウトの表示方法を指定できます。
  - 親レイアウト・オブジェクトの照会結果を参照しない、完全に新しい照会を作成する。親の照会結果を参照しない場合、子オブジェクトの完全な照会結果セットが、親オブジェクトの照会結果セットのすべての行に表示されます。
5. 新規レイアウト・オブジェクトを挿入した後、そのプロパティを必要に応じて変更することができます。
6. エディターで「ランタイム」をクリックして結果を表示します。

## マップ・オブジェクトの操作

ビジュアル・ダッシュボードで Google マップを表示して、そのマップに各種オブジェクトを追加できます。

### このタスクについて

以下の Google マップ・オブジェクトを使用できます。

- Google マップ
- Google マップ・マーカー
- Google マップの折れ線
- Google マップの多角形
- Google マップ・オブジェクト

### Google マップ・オブジェクトの挿入:

Google マップ・オブジェクトを使用すれば、Google マップをビジュアル・ダッシュボードで表示し、Google マップ上に各種オブジェクトを配置できます。

### このタスクについて

Google マップ・オブジェクトを挿入するには:

#### 手順

1. 「パレット」ビューで「マップ」パレットを展開し、**Google** マップ・オブジェクトをダブルクリックして、「Google マップ」ウィザードを開きます。
2. 「視点」領域で **Google** マップ・オブジェクトの開始位置とそのズーム・レベルを指定します。

- マップに追加したオブジェクトの位置に応じてマップの視点を自動的に設定するには、「自動」チェック・ボックスを選択します。
- マップの中心を指定するには、「自動」チェック・ボックスをクリアして、「緯度」フィールドおよび「経度」フィールドに座標を入力します。
- 「ズーム・レベル」リストからは、**Google** マップ・オブジェクトのズーム値を選択します。
- マップの視点を固定する場合は、「固定」チェック・ボックスを選択します。この場合、ユーザーはマップをスクロールしたりズームしたりできなくなります。

注: 「固定」チェック・ボックスを選択すると、「**Google** マップ・コントロール」領域でズーム・コントロールが使用不可になります。

3. 「**Google** マップ・コントロール」領域で、**Google** マップ・オブジェクトに追加するコントロールを選択し、「次へ」をクリックします。

注: **Google** マップ・ウィザードでは、最もよく使用される 3 つのコントロール(ズーム、マップ・タイプ、およびスケール)を **Google** マップ・オブジェクトに追加できます。 **Google** マップ・オブジェクトの「プロパティ」ビューに他のコントロールを追加できます。

4. 「選択可能なマップ・タイプ」領域で、ユーザーが使用できるマップ・タイプを選択します。
5. 「デフォルトのマップ・タイプ」リストから、デフォルトでロードされるマップ・タイプを選択し、「次へ」をクリックします。
6. **Google** マップ・オブジェクトに追加するコンテンツを定義して、「次へ」をクリックします。
  - 特定のデータを表示するためにオブジェクトをマップに追加する場合は、「構成要素を使用してマップを作成」を選択します。その後で、「構成要素の選択」領域から適切なオブジェクトを選択します。
  - オブジェクトを含めずにマップを追加する場合は、「空のマップを作成」を選択します。
7. 選択したオプションに応じて、「**Google** マップ」ウィザードの後続の数ページに、必要な情報を指定し、「終了」をクリックして、作成した **Google** マップ・オブジェクトを編集機能に表示します。

注: 作成した **Google** マップ・オブジェクトを QMF for WebSphere で開くには、正しい **Google** マップ API キーを取得して指定する必要があります。

#### **Google** マップ・マーカ・オブジェクトの挿入:

**Google** マップ・マーカ・オブジェクトを使用すれば、マーカの座標を指定することで **Google** マップ・オブジェクトにマーカを追加できます。

始める前に

**Google** マップ・マーカ・オブジェクトのプロパティは、QMF ヘルプの『ユーザー・リファレンス』セクションで定義されています。

このタスクについて

**Google** マップ・マーカ―・オブジェクトはマップ上の対話式ポイントです。

**Google** マップ・オブジェクトにマーカ―を追加するには、次のようにします。

手順

1. **Google** マップ・オブジェクトを挿入するときは、「構成要素を使用してマップを作成」を選択してから、「**Google** マップ」ウィザードの「マップ・コンテンツの定義」ページにある「マーカ―」オプションを選びます。その後で「次へ」をクリックします。
2. 「いいえ」を選択してマーカ―の座標を手動で入力するようにし、「次へ」をクリックします。
3. 「マーカ―のプロパティを定義」ページでマーカ―を定義します。
  - 「キャプション」列には、マーカ―に使用する名前を入力します。
  - 「ツールチップ」列にはマーカ―のツールチップのテキストを指定できます。
  - 「緯度」列には緯度座標を指定します。
  - 「経度」列には経度座標を指定します。
4. マーカ―の情報を指定し終わったら、「終了」をクリックして「**Google** マップ」ウィザードを閉じ、**Google** マップ・オブジェクトを、編集機能で追加したマーカ―とともに表示します。

ヒント: 作成した **Google** マップ・オブジェクトに他のオブジェクトを追加するには、そのオブジェクトを「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで「マップ」パレットから **Google** マップ・オブジェクトにドラッグし、オブジェクト・プロパティを指定します。

**Google** マップ・マーカ―・オブジェクトを挿入して照会結果を表示:

**Google** マップ・マーカ―・オブジェクトを使用すれば、照会結果を **Google** マップ・オブジェクト上に地理マーカ―として表示できます。

始める前に

**Google** マップ・マーカ―・オブジェクトのプロパティは、QMF ヘルプの『ユーザー・リファレンス』セクションで定義されています。

このタスクについて

**Google** マップ・マーカ―・オブジェクトはマップ上の対話式ポイントです。

照会結果をマーカ―として表示するには、次のようにします。

手順

1. **Google** マップ・オブジェクトを挿入するときは、「構成要素を使用してマップを作成」を選択してから、「**Google** マップ」ウィザードの「マップ・コンテンツの定義」ページにある「マーカ―」オプションを選びます。その後で「次へ」をクリックします。

2. 「はい」を選択して、照会結果を **Google** マップ・オブジェクト上に地理マーカーとして表示するようにし、「次へ」をクリックします。
3. 「すべてのデータ・ソース」ツリーでテーブルまたは照会（このテーブルまたは照会の結果を使用してマップ上のマーカーを定義します）を選択し、「次へ」をクリックします。
4. 「緯度フィールド」リストから、マップ・マーカーの緯度座標を指定する列を選択します。
5. 「経度フィールド」リストから、マップ・マーカーの経度座標を指定する列を選択します。
6. 「キャプション・フィールド」リストから、マップ・マーカーのラベルにデータを設定する列を選択します。
7. 「情報ウィンドウを使用可能にする」チェック・ボックスを選択して、ユーザーがマップ上のマーカーをクリックしたときに情報ウィンドウを開くことができるようにします。
8. 「情報フィールド」リストから、マップ・マーカーの情報ウィンドウにデータを設定する列を選択します。
9. 「終了」をクリックして「**Google** マップ」ウィザードを閉じ、**Google** マップ・オブジェクトを、編集機能で追加したマーカーとともに表示します。

ヒント: 作成した **Google** マップ・オブジェクトに他のオブジェクトを追加するには、新しいデータ・テンプレートを **Google** マップ・オブジェクトに追加し、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、必要なオブジェクトを「マップ」パレットからデータ・テンプレートにドラッグします。

**Google** マップの折れ線オブジェクトを挿入して照会結果を表示:

**Google** マップの折れ線オブジェクトを使用すれば、照会結果を地理マップの折れ線として表示できます。

始める前に

**Google** マップの折れ線オブジェクトのプロパティは、QMF ヘルプの『ユーザー・リファレンス』セクションで定義されています。

このタスクについて

**Google** マップの折れ線オブジェクトにより、**Google** マップ上に線形のオーバーレイが作成されます。このオブジェクトは一連のポイントで構成されます。このオブジェクトにより、それらのポイントを整然とした順序でつなぐ一連の線分が作成されます。

**Google** マップの折れ線オブジェクトを挿入するには、次のようにします。

手順

1. **Google** マップ・オブジェクトを挿入するときは、「構成要素を使用してマップを作成」を選択してから、「**Google** マップ」ウィザードの「マップ・コンテンツの定義」ページにある「折れ線」オプションを選びます。その後で「次へ」をクリックします。



2. 「すべてのデータ・ソース」 ツリーでテーブルまたは照会 (このテーブルまたは照会の結果を使用してマップ上のポリラインを定義します) を選択し、「次へ」をクリックします。
3. ポリラインの各頂点の緯度座標と経度座標を定義するために「直接」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。
  - a. 「ツールチップ・フィールド」 リストから、マップ上のポリラインのツールチップ・テキストを指定する列を選択します。
  - b. 「**Vertices** フィールド」 リストから、ポリラインの頂点の座標を指定する列を選択します。
  - c. 「点フォーマット」 リストから座標の形式 (「緯度-経度」または「経度-緯度」) を選択します。
4. 「エンコード」 チェック・ボックスを選択して Google マップのエンコード形式でポリラインを定義し、「次へ」をクリックします。
  - a. 「ツールチップ・フィールド」 リストから、マップ上のポリラインのツールチップ・テキストを指定する列を選択します。
  - b. 「**Points** フィールド」 リストから、ポリライン内の一連の頂点を指定する列を選択します。

ヒント: ビジュアル・ダッシュボードのパフォーマンスを向上させるには、折れ線オブジェクトおよび多角形オブジェクトにエンコードされた折れ線アルゴリズム形式を使用します。詳細な情報は Google Developers Web サイトから入手してください。

5. 「終了」をクリックして「Google マップ」ウィザードを閉じ、**Google** マップ・オブジェクトを、編集機能で追加した折れ線とともに表示します。

ヒント: 作成した **Google** マップ・オブジェクトに他のオブジェクトを追加するには、新しいデータ・テンプレートを Google マップ・オブジェクトに追加し、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、必要なオブジェクトを「マップ」パレットからデータ・テンプレートにドラッグします。

**Google** マップの多角形オブジェクトを挿入して照会結果を表示:

**Google** マップの多角形オブジェクトをビジュアル・ダッシュボードで使用すれば、照会結果を地理マップの多角形として表示できます。

始める前に

**Google** マップの多角形オブジェクトのプロパティは、QMF ヘルプの『ユーザー・リファレンス』セクションで定義されています。

このタスクについて

**Google** マップの多角形オブジェクトと同様に、**Google** マップの多角形オブジェクトも一連の順次データ・ポイントを表します。ただし、多角形は開放型ではなく、閉ループで囲まれた領域を定義することを目的としています。

ポリゴンの端と、囲まれた領域内の塗りつぶし領域の特性を定義できます。

**Google** マップの多角形オブジェクトを挿入するには、次のようにします。

## 手順

1. **Google** マップ・オブジェクトを挿入するときは、「構成要素を使用してマップを作成」を選択してから、「Google マップ」ウィザードの「マップ・コンテンツの定義」ページにある「多角形」オプションを選びます。その後で「次へ」をクリックします。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーでテーブルまたは照会 (このテーブルまたは照会の結果を使用してマップ上のポリゴンを定義します) を選択し、「次へ」をクリックします。
3. ポリゴンの各頂点の緯度座標と経度座標を定義するために「直接」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。
  - a. 「ツールチップ・フィールド」リストから、マップ上のポリゴンのツールチップ・テキストを指定する列を選択します。
  - b. 「**Vertices** フィールド」リストから、ポリゴンの頂点の座標を指定する列を選択します。
  - c. 「点フォーマット」リストから座標の形式 (「緯度-経度」または「経度-緯度」) を選択します。
4. 「エンコード」チェック・ボックスを選択して Google マップのエンコード形式でポリゴンを定義し、「次へ」をクリックします。
  - a. 「ツールチップ・フィールド」リストから、マップ上のポリゴンのツールチップ・テキストを指定する列を選択します。
  - b. 「**Points** フィールド」リストから、ポリゴンの一連の頂点を指定する列を選択します。

ヒント: ビジュアル・ダッシュボードのパフォーマンスを向上させるには、折れ線オブジェクトおよび多角形オブジェクトにエンコードされた折れ線アルゴリズム形式を使用します。詳細な情報は Google Developers Web サイトから入手してください。

5. 「終了」をクリックして「Google マップ」ウィザードを閉じ、**Google** マップ・オブジェクトを、編集機能で追加した多角形とともに表示します。

ヒント: 作成した **Google** マップ・オブジェクトに他のオブジェクトを追加するには、新しいデータ・テンプレートを Google マップ・オブジェクトに追加し、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、必要なオブジェクトを「マップ」パレットからデータ・テンプレートにドラッグします。

**Google** マップ・オブジェクトを挿入して照会結果を表示:

**Google** マップ・オブジェクトを使用すれば、照会結果を地理マップ・オブジェクトとして表示できます。

始める前に

**Google** マップ・オブジェクトのプロパティは、QMF ヘルプの『ユーザー・リファレンス』セクションで定義されています。

このタスクについて

照会結果を地理マップ・オブジェクトとして表示するには、次のようにします。

## 手順

1. **Google** マップ・オブジェクトを挿入するときは、「構成要素を使用してマップを作成」を選択してから、「Google マップ」ウィザードの「マップ・コンテンツの定義」ページにある「オブジェクト」オプションを選びます。その後で「次へ」をクリックします。
2. 「すべてのデータ・ソース」ツリーでテーブルまたは照会（このテーブルまたは照会の結果を使用してマップ上のオブジェクトを定義します）を選択します。
3. 「ツールチップ・フィールド」リストから、オブジェクトのツールチップのテキストを指定する列を選択します。
4. 「**Bounds** フィールド」リストから、マップ上のオブジェクトの境界を指定する列を選択します。
5. 「**Content** フィールド」リストから、マップ上に表示するコンテンツ（イメージなど）が含まれている列を選択します。
6. 「終了」をクリックして「Google マップ」ウィザードを閉じ、**Google** マップ・オブジェクトを、編集機能で追加したオブジェクトとともに表示します。

ヒント: 作成した **Google** マップ・オブジェクトに他のオブジェクトを追加するには、新しいデータ・テンプレートを **Google** マップ・オブジェクトに追加し、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、必要なオブジェクトを「マップ」パレットからデータ・テンプレートにドラッグします。

## 「レイヤー」ビューでの作業

「レイヤー」ビューを使用して、パレット・オブジェクトを別々のレイヤーにグループ化し、デザイン時に表示したり非表示にしたりできます。

### このタスクについて

シーンのキャンバス上で互いに重なり合う選択されたオブジェクトの表示と非表示を可能にするレイヤーの機能は、デザイン・プロセスを援助します。レイヤーはシーンの各詳細レベル内にグループ化され、各パレット・オブジェクトは最初は「デフォルト」レイヤーに配置されます。各詳細レベルにレイヤーをいくつでも追加できます。「レイヤー」ビューを開くには、以下のようにします。

## 手順

1. ビジュアル・ダッシュボードを開き、シーンの詳細レベルを選択します。
2. 「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「レイヤー」を選択します。「レイヤー」ビューが開き、現行詳細レベルのレイヤーが表示されます。
3. 現行詳細レベルにレイヤーを追加するには、「レイヤー」ビューでレベルを右クリックし、「レイヤーの挿入」を選択します。新しいレイヤーがツリーに追加されます。
4. レイヤーの名前を変更するには、レイヤーを右クリックして「レイヤー [レイヤー名] の名前変更」を選択し、レイヤーの新しい名前を指定します。
5. レイヤーを削除するには、レイヤーを右クリックし、「削除」を選択します。レイヤーが削除されます。
6. 既存のレイヤーにパレット・オブジェクトを追加するには、シーン・キャンバス上のパレット・オブジェクトを右クリックして「レイヤー」を選択し、必要なレ

レイヤーをポップアップ・メニューから選びます。「レイヤー」ビュー内の指定したレイヤーにパレット・オブジェクトが追加されます。

7. パレット・オブジェクトを別のレイヤーに移動するには、「レイヤー」ビューでオブジェクトをクリックしてレイヤーへドラッグします。
8. レイヤーのコンテンツを非表示にするには、「レイヤー」ビューで個々のオブジェクトまたはレイヤー自体をクリアします。レイヤーをクリアした場合は、そのレイヤーに割り当てられているオブジェクトがすべてシーン・キャンバス上で非表示になります。個別のオブジェクトをクリアした場合は、そのオブジェクトのみが非表示になります。

## グローバル・リソースでの作業

グローバルは、ビジュアル報告書のすべてのページ、またはビジュアル・ダッシュボードのすべてのシーンで使用できるリソースです。

### このタスクについて

グローバルを使用して、オブジェクト・プロパティを計算することができます。グローバル・リソースはすべて、「プロジェクト・エクスプローラー」の「グローバル」フォルダーに表示されます。ビジュアル・プロジェクト全体で使用可能な以下のグローバルを 1 つ以上持つことを選択できます。

#### パラメーター

ビジュアル・プロジェクト全体でパラメーターを使用できます。これにより、オブジェクト・プロパティを指定するときに変数値を使用できるようになります。

#### カラー・マップ

カラー・マップは、オブジェクトに関連付けられた値に応じて、ビジュアル・プロジェクト・オブジェクトの色を変えるために使用できます。

#### カラー・シーケンス

カラー・シーケンスを使用して、ビジュアル・プロジェクト・オブジェクトの色のプロパティを索引値に基づいて変更することができます。

#### セキュリティー・リスト

セキュリティー・リストを使用して、ビジュアル報告書またはダッシュボードを表示するユーザーのセキュリティー・レベルに合わせて、この報告書またはダッシュボードの内容を調整することができます。

#### イメージ

ストック・イメージを使用して、ビジュアル・プロジェクトとともにイメージ・リソースを保管できます。イメージ・リソースをビジュアル・プロジェクトとともに保管することで、プロジェクトの可搬性と効率が向上します。

#### 有効期限スケジュール

有効期限スケジュールは、あるデータの有効期限がいつ切れるかを規定するために設定できます。

#### JavaScript モジュール

JavaScript モジュールにより、ビジュアル・プロジェクトで JavaScript のカスタム関数を使用できるようになります。

## 翻訳テーブル

翻訳テーブルにより、ダッシュボード設計者は複数言語で表示できる単一のビジュアル・ダッシュボードを公開できます。

## カラー・シーケンスでの作業

カラー・シーケンスはグローバル・リソースの 1 つのタイプで、ビジュアル・プロジェクト・オブジェクトの色のプロパティを索引値に基づいて変更するために使用できます。それぞれの索引値が、カラー・シーケンス・ホイールのどの扇形にオブジェクトの色を入れるかを指定します。

### このタスクについて

カラー・シーケンス・ホイールの設定済みの色を含むデフォルト・カラー・シーケンスが提供されます。固有のカラー・シーケンスを設定して、カラー・シーケンス・ホイールに入れる色を変えることもできます。ビジュアル・プロジェクト・オブジェクトのプロパティを指定するときに、そのオブジェクトがカラー・シーケンスを使用するように指定します。この時点で、カラー・シーケンスの索引値を明示的な値、式、または関数で指定するかどうかについても決定します。

### 新規カラー・シーケンスの作成:

ビジュアル・プロジェクト用にカラー・シーケンスを作成するには、「新規カラー・シーケンス」ウィザードを使用します。

### このタスクについて

新規カラー・シーケンスを作成するには:

#### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「新規カラー・シーケンス」ウィザードを開きます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」ノードをクリックします。「カラー・シーケンス」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「カラー・シーケンスの挿入」を選択します。「新規カラー・シーケンス」ウィザードが開きます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」ノードをクリックします。「カラー・シーケンス」ノードをダブルクリックします。「新規カラー・シーケンス」ウィザードが開きます。
2. 「名前」フィールドにカラー・シーケンスの固有名を入力します。
3. カラー・シーケンスに現れる色が「色」ホイールに表示されます。それぞれの扇形をクリックすると、扇形位置番号とそれに関連付けられた索引値が表示されます。例えば、最初の扇形はゼロ (0) を表示し、ゼロ (0) の索引値に対して表示される色を表します。
4. 扇形の色を変更するには、その扇形をクリックし、色のボタンをクリックして新しい色を選択します。「色」ウィンドウが開き、そこで新しい色を選択できます。「OK」をクリックします。選択した扇形が、新しい色で表示されます。変更するそれぞれの扇形の色について、このプロセスを繰り返します。
5. 変更を取り消すには、「変更の取り消し」ボタンをクリックします。選択した扇形の色が、前の色に戻ります。

6. 選択した扇形をホイール内で順方向に移動させるには、扇形をクリックし、「順方向に移動」ボタンをクリックします。扇形が、ホイール内で 1 つ先のスロットに移動します。
7. 選択した扇形をホイール内で逆方向に移動させるには、扇形をクリックし、「逆方向に移動」ボタンをクリックします。扇形が、ホイール内で 1 つ後のスロットに移動します。
8. 円に扇形を追加するには、「追加」ボタンをクリックします。新しい扇形が、円の最後の位置に追加されます。この扇形は、現在選択されている扇形の色で追加されます。
9. 扇形を除去するには、円から除去する扇形を選択して、「除去」ボタンをクリックします。
10. 「終了」をクリックします。「新規カラー・シーケンス」ウィザードが閉じ、「カラー・シーケンス」フォルダーにカラー・シーケンスが表示されます。

カラー・シーケンスの使用:

カラー・シーケンスを使用するには、ビジュアル・プロジェクトに挿入するオブジェクトのカラー・プロパティ・セルにカラー・シーケンスの名前を指定します。

このタスクについて

カラー・シーケンスを使用するには:

手順

1. オブジェクトをビジュアル・プロジェクトに挿入します。
2. 最も使いやすいビュー（「プロパティ」、「枠取り」、または「プロジェクト・エクスプローラー」）から、カラー・シーケンスを使用する色のプロパティをクリックします。
3. 使用するカラー・シーケンスの名前と索引値を指定します。索引値の指定には、以下のような複数の方法があります。

- リテラル: 特定の数値を使用して索引値を示すことができます。以下に例を示します。

```
colorSeq(Colorseq1, 4)
```

このオブジェクトの色は、カラー・シーケンス Colorseq1 のカラー・ホイールにある索引 4 のラベルが付いた扇形と同じ色になります。

- 式を使用: 索引値の計算に使用できる式を作成することができます。以下に例を示します。

```
colorSeq(Colorseq1,value1 + 5)
```

このオブジェクトの色は、カラー・シーケンス Colorseq1 からの色になります。索引値は、value1 の値に 5 を加算して計算されます。

- 関数を使用: 関数を使用して索引値を生成することができます。以下に例を示します。

```
colorSeq(Colorseq1,PointNumber())
```

PointNumber() 関数を Colorseq1 というカラー・シーケンスで使用します。PointNumber() 関数は、照会が戻す各行のオブジェクトに固有の色を割り当てます。

## カラー・マップでの作業

カラー・マップは、グローバル・リソースのタイプの 1 つであり、オブジェクトに関連した値に応じてビジュアル・プロジェクト・オブジェクトの色を変えるために使用できます。

### このタスクについて

例えば棒グラフでは、照会が戻す値に基づいて、棒の色を表示できます。商品の収益が上がった場合に色を赤から黒に変更したい場合は、データが一定のブレイクポイント値に達したときに使用する色を指定するカラー・マップを作成します。カラー・マップは不連続または混合のいずれかとなります。不連続のカラー・マップは、それぞれのデータ値ごとに異なる色を表示します。混合カラー・マップは、色を混合するためのものです。ブレイクポイントは、色が変わる位置を指定します。

カラー・マップの作成:

「新規カラー・マップ」ウィザードを使用して、ビジュアル・プロジェクト用のカラー・マップを作成します。

このタスクについて

カラー・マップを作成するには:

手順

1. 以下のいずれかの方法で「新規カラー・マップ」ウィザードを開きます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」ノードをクリックします。「カラー・マップ」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「カラー・マップの挿入」を選択します。「新規カラー・マップ」ウィザードが開きます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」ノードをクリックします。「カラー・マップ」ノードをダブルクリックします。「新規カラー・マップ」ウィザードが開きます。
2. 「名前」フィールドに、カラー・マップの固有名を入力します。
3. 「配分」をクリックします。「カラー・マップ・ブレイクポイント」ウィンドウが開きます。
4. 「ブレイクポイント」リストにブレイクポイントの合計数を指定します。
5. 「最小値」フィールドに最小ブレイクポイント・データ値を指定します。
6. 「最大値」フィールドに最大ブレイクポイント・データ値を入力します。
7. 「色」リスト・ボックスから希望する色を選択します。黒までの色、レインボー・カラー、グレーの陰影を設定できます。
8. 「OK」をクリックします。「カラー・マップ・ブレイクポイント」ウィンドウが閉じ、指定したブレイクポイントの数が表示されます。
9. 各ブレイクポイントのプロパティを指定します。

- a. リストからブレイクポイントを選択します。ブレイクポイントの値および色が表示されます。
  - b. 「ブレイクポイント」フィールドに、ブレイクポイント値を指定します。
  - c. 「アクティブ・カラー」ボックスをクリックします。「色」ウィンドウが開きます。
  - d. ブレイクポイントに到達したときに表示する色を選択して、「OK」をクリックします。「色」ウィンドウが閉じ、「アクティブ・カラー」ボックスに新しい色が表示されます。
  - e. 「設定」をクリックします。新しい値および色が設定されます。
  - f. リスト内の各ブレイクポイントに対して、このプロセスを繰り返します。
10. すべてのカラー・マップについて、「最初の色」をクリックして、カラー・マップの最初の色を選択します。この最初の色は、最初のブレイクポイント値より小さいすべてのデータ値に使用される色です。
  11. 「色の遷移」ラジオ・ボタンを使用して、希望の色の遷移タイプを指定します。次のような選択肢があります。
    - あるブレイクポイント・データ値から次のブレイクポイント・データ値まで純粋色を表示するには、「不連続」を選択します。
    - あるブレイクポイント・データ値から次のブレイクポイント・データ値までの色を混合させるには、「混合」を選択します。
  12. あるブレイクポイント・データ値から次のブレイクポイント・データ値までの色を混合させることを選択した場合は、カラー・マップの最後の色を選択できます。この最後の色は、最後のブレイクポイントより大きいすべてのデータ値に使用される色です。最後の色と最初の色は、カラー・マップでは混合されずに表示されます。混合カラー・マップの最後の色を選択するには、「最後の色」をクリックします。
  13. 「終了」をクリックします。「新規カラー・マップ」ウィザードが閉じ、「カラー・マップ」フォルダーにカラー・マップが表示されます。

#### カラー・マップの使用:

カラー・マップを使用するには、ビジュアル・プロジェクトに挿入するオブジェクトのカラー・プロパティ・セルにカラー・マップの名前を指定します。

このタスクについて

カラー・マップを使用するには:

手順

1. オブジェクトをビジュアル・プロジェクトに挿入します。
2. 最も使いやすいビュー（「プロパティ」、「枠取り」、または「プロジェクト・エクスプローラー」）で、カラー・マップを使用する色のプロパティをクリックします。
3. 使用するカラー・マップの名前とデータ値を指定します。データ値の指定には、以下のような複数の方法があります。
  - リテラル: 特定の数値を使用してデータ値を示すことができます。以下に例を示します。



```
colorMap(Colormap1, 10)
```

データ値 10 が、カラー・マップ Colormap1 に指定されたブレイクポイントに対して比較されます。このオブジェクトの色は、データ値 10 に割り当てられた色によって決定されます。

- 式を使用: データ値の計算に使用できる式を作成することができます。以下に例を示します。

```
colorMap(Colormap1,(close_price - open_price))
```

この式は、現行データ値を基にして評価されます。評価されたデータ値が、カラー・マップ Colormap1 に指定されたブレイクポイントに対して比較されます。このオブジェクトの色は、計算されたデータ値に割り当てられた色によって決定されます。

- 関数を使用: 関数を使用してデータ値を生成することができます。以下に例を示します。

```
colorMap(Colormap1,PointNumber())
```

PointNumber() 関数を Colormap1 というカラー・マップで使用することを示します。PointNumber() 関数は、照会が戻す各行のオブジェクトに固有の色を割り当てます。

## セキュリティ・リストの作成

セキュリティ・リストを使用して、ビジュアル報告書またはダッシュボードを表示するユーザーのセキュリティ・レベルに合わせて、この報告書またはダッシュボードの内容を調整することができます。

### このタスクについて

例えばダッシュボードの特定の図表で、販売チームのメンバーには販売データを表示したり、経営チームのメンバーには販売および収益性データを表示したりすることができます。セキュリティ・リスト機能は、保護されたリポジトリに保存されているビジュアル報告書およびダッシュボードに対してのみ実装できます。

セキュリティ・リストを作成し、セキュリティ・リスト機能を実装するには:

### 手順

1. 以下のいずれかの方法で「新規セキュリティ・リスト・ウィザード」を開くことができます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」ノードを展開します。「セキュリティ・リスト」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「セキュリティ・リストの挿入」を選択します。「新規セキュリティ・リスト・ウィザード」が開きます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」ノードを展開します。「セキュリティ・リスト」ノードをダブルクリックします。「新規セキュリティ・リスト・ウィザード」が開きます。
2. 「名前」フィールドに、セキュリティ・リストの固有名を入力します。
3. このセキュリティ・リストを構成するユーザーとグループを選択します。

4. 「終了」をクリックします。セキュリティ・リストが「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「セキュリティ・リスト」フォルダーに追加されます。複数のセキュリティ・リストを作成できます。それぞれのリストには、類似または固有のユーザーとグループのセットを含めることができます。各リストには固有の名前が必要です。
5. オブジェクトをビジュアル報告書またはダッシュボードに挿入します。
6. ユーザーのセキュリティ・レベルに基づいて制御するプロパティのセル内でクリックします。どのプロパティでも選択できます。ユーザーに対してどのデータを表示するかを制御するには、オブジェクトの可視性プロパティを選択します。
7. 「プロパティ」ビューにある「式デザイナーで編集」ツールバー・ボタンをクリックします。「式デザイナー」が開きます。デザイナーの作業域をクリアします。機能ツリーの「セキュリティ」ノードを展開します。  
**isSecurityLevel** 関数をダブルクリックします。関数のテンプレートが、デザイナーの作業域に次のように表示されます。 `isSecurityLevel(strText)`
8. `text` パラメーターをセキュリティ・リストで置き換えます。 `strText` を強調表示します。デザイナー・ツリーから「セキュリティ・リスト」フォルダーを展開します。オブジェクトを表示するセキュリティ・リストをダブルクリックします。プロパティ値が、デザイナーの作業域に次のように表示されます。 `isSecurityLevel("SecurityList1")`
9. 「適用」をクリックします。
10. 「OK」をクリックします。選択したセキュリティ・リストに含まれているユーザーだけが、オブジェクトを表示できます。

## ビジュアル・プロジェクトとともにイメージを保管する

ストック・イメージはグローバル・リソースの 1 つのタイプで、ビジュアル・プロジェクトとともにイメージ・リソースを保管することを可能にします。

### このタスクについて

イメージをビジュアル・プロジェクトとともに保管することで、プロジェクトの可搬性と効率が向上します。プロジェクトの可搬性が向上する理由は、プロジェクトを任意のマシンで実行できる一方、プロジェクトに伴うイメージへのアクセスも維持できるためです。効率が向上する理由は、イメージを使用するたびにイメージをロードしたり、再ロードする必要がないためです。

例えば、ビジュアル報告書のすべてのページ、またはビジュアル・ダッシュボードのすべてのシーンで使用する法人ロゴのロードおよび再ロードの処理オーバーヘッドが、非常に大きい場合があります。法人ロゴにストック・イメージを使用することで、イメージのロードおよび再ロードの処理時間が節約されます。ビジュアル報告書のページおよびビジュアル・ダッシュボードからのシーンは、より迅速にユーザーに表示されます。さらに、法人ロゴのストック・イメージにより、ビジュアル・プロジェクト内でのイメージ位置をハードコーディングする必要がなくなります。

以下のイメージ・ファイル形式を、ストック・イメージとして保管できます。

- ビットマップ (.bmp)

- デバイス独立ビットマップ (.dib)
- グラフィック交換形式 (.gif)
- Joint Photographic Experts Group (.jpeg)
- Portable Network Graphics (.png)

ストック・イメージの作成:

ビジュアル・プロジェクトで使用するイメージごとに、ストック・イメージを作成できます。

このタスクについて

新規ストック・イメージを作成するには:

手順

1. 以下のいずれかの方法で「開く」ウィンドウを開くことができます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」ノードをクリックします。「イメージ」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「イメージの挿入」を選択します。オペレーティング・システム固有の「開く」ウィンドウが開きます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」ノードをクリックします。「イメージ」ノードをダブルクリックします。オペレーティング・システム固有の「開く」ウィンドウが開きます。
2. 「開く」ウィンドウから、ビジュアル・プロジェクトで使用するイメージを探して選択します。
3. 「開く」をクリックします。ストック・イメージ・グローバル・リソースが作成されます。ストック・イメージ名は、イメージ名と同じです。新しいストック・イメージが、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「イメージ」ノードにリストされます。

ストック・イメージの使用:

「イメージ」フォルダー内のストック・イメージをビジュアル・プロジェクトのピクチャー・オブジェクトに関連付ける必要があります。

このタスクについて

以下のいずれかの方法で、ストック・イメージをピクチャー・オブジェクトに関連付けることができます。

- 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「イメージ」フォルダーに追加したストック・イメージをクリックしてビジュアル・プロジェクト・キャンバスにドラッグします。ピクチャー・オブジェクトが作成され、「プロパティー」ビューに表示された「**ImageSource**」プロパティーがストック・イメージの名前で自動的に更新されます。
- 「パレット」ビューからピクチャー・オブジェクトを選択し、それをビジュアル・プロジェクトに挿入します。「プロパティー」ビューで、「**ImageSource**」プロパティーのセルをクリックします。**stockImage()** 関数を

=stockImage("My\_Image") のように使用してストック・イメージの名前を入力します。My\_Image は、プロジェクトの「イメージ」フォルダーに追加されたストック・イメージの名前です。

ビジュアル・プロジェクトのピクチャーに、指定のストック・イメージが表示されます。これで、イメージ拡大縮小などの追加オブジェクト・プロパティーを変更することができます。

## パラメーターを使用した変数値の指定

パラメーターは、ビジュアル・プロジェクトで使用する変数値を指定する方法の 1 つです。

### このタスクについて

パラメーターを使用すると、以下のタスクを実行できます。

- ユーザー入力を取り込む。
- 照会結果、オブジェクト・プロパティー値、または位置などの現在のコンテキストを取り込む。
- ユーザー入力またはコンテキスト情報を、ダッシュボードの一部から他の部分に受け渡す。
- 動的基準に基づいて照会結果を変更する。
- 動的基準に基づいてナビゲーション結果を変更する。
- 動的基準に基づいてビジュアル・プロジェクトのデザイン・エレメントを変更する。

使用可能なパラメーターのタイプは以下のとおりです。

#### グローバル・パラメーター

ビジュアル・プロジェクト全体で使用できるパラメーター。ビジュアル・ダッシュボードのエンド・ユーザーが、このパラメーターを使用できます。オブジェクト・プロパティーの指定時、またはイベント・アクションの作成時にグローバル・パラメーターを渡すことができます。また、実行時にグローバル・パラメーターを公開して、ユーザーがアクセスできるようにするアクションもあります。

#### シーン・パラメーター

ビジュアル・ダッシュボードの特定のシーンにのみ使用可能なパラメーター。シーン・パラメーターは、組み込みシーンおよびイベント・アクションの作成時に受け渡せます。

#### 照会パラメーター

照会パラメーターには、照会に送信され、実行時に使用される値が含まれます。

パラメーターの使用方法は多様です。一般に、イベント・アクションはパラメーターを使用してユーザー入力を取り込みます。シーンで対話式コントロールを設計する場合、グローバル・パラメーターおよびシーン・パラメーターを使用できます。コントロール内でユーザーが選択操作を行うと、背後で動作するイベント・アクションによりパラメーター値が設定されます。パラメーター値により、表示するデータまたはデータの表示方法が決定します。

グローバル・パラメーター、シーン・パラメーター、および照会パラメーターには、以下の属性が含まれます。

- 名前 (パラメーター名は固有でなければなりません)
- データ・タイプ
- 説明 (オプション)
- デフォルト値 (オプション)

注: パラメーターにデフォルト値を提供し、テストできるようにしてください。

グローバル・パラメーターでの作業:

グローバル・パラメーターはグローバル・リソースのタイプの 1 つで、ビジュアル・プロジェクト全体で使用できます。グローバル・パラメーターにより、ビジュアル・ダッシュボード内で変数値を使用することが可能になります。

グローバル・パラメーターには、共通パラメーターと専用パラメーターがあります。専用グローバル・パラメーターは、ビジュアル・ダッシュボード内で排他的に設定されます。共通パラメーターは、実行時にユーザーが変更できます。

QMF for Workstation には、以下のグローバル・パラメーターがあります。

- **DeviceIdentifier**。QMF for WebSphere の UUID または QMF for Workstation の MAC アドレスを格納するグローバル・パラメーターです。LoadComplete イベントが発生すると、このパラメーターの値が自動的に定義されます。

注: QMF for WebSphere では UUID は Cookie に保管されますが、Cookie が使用不可の場合、アプリケーションは LoadComplete イベントが発生するたびに新規の UUID を取得します。

- **ExternalEventID**。グローバル・パラメーターです。これはシーンで特定のコントロールに設定されます。これにより、「組み込みシーンに送信」イベント・アクションからの **EventID** が保存されます。
- **Geolocation**。デバイスの地理位置情報データを保管するグローバル・パラメーターです。データを取得するには、「地理位置情報の最新表示」イベント・アクションを実行します。
- **翻訳テーブル**。ビジュアル・ダッシュボードでテキスト値を表示するために使用する翻訳テーブルを定義します。
- **ViewerHeight**。シーンの現行可視部分の高さが含まれます。このパラメーターは読み取り専用であり、その値はデフォルト計測単位によって異なります。このグローバル・パラメーターは、ビジュアル・ダッシュボードの開発用に定義されています。シーンの可視部分の現行の高さをパラメーターとして使用することが便利な場合に、これを式で使用できます。このパラメーター値、およびこのパラメーター値を使用した式は、現行可視シーンのサイズが変更されると自動的に更新されます。
- **ViewerWidth**。シーンの現行可視部分の幅が含まれます。このパラメーターは読み取り専用であり、その値はデフォルト計測単位によって異なります。このグローバル・パラメーターは、ビジュアル・ダッシュボードの開発用に定義されています。シーンの可視部分の現行の幅をパラメーターとして使用することが便利な

場合に、これを式で使用できます。このパラメーター値、およびこのパラメーター値を使用した式は、現行可視シーンのサイズが変更されると自動的に更新されます。

- **ViewerX**。ビューアーの現在の X 座標位置をインチ単位で定義します。デフォルト値はゼロ (0) で、画面中央に変換されます。このパラメーター値は、ユーザーがビジュアル・プロジェクト内で位置変更すると自動的に更新されます。このグローバルは、ビジュアル・ダッシュボード用に定義されています。
- **ViewerY**。ビューアーの現在の Y 座標位置をインチ単位で定義します。デフォルト値はゼロ (0) で、画面中央に変換されます。このパラメーター値は、ユーザーがビジュアル・プロジェクト内で位置変更すると自動的に更新されます。このグローバルは、ビジュアル・ダッシュボード用に定義されています。
- **ViewerZoom**。ビューアーの現在のズーム・レベルを定義します。デフォルト値は 100% です。このパラメーター値は、ユーザーがズーム・レベルを変更すると自動的に更新されます。

お客様独自のグローバル・パラメーターを定義することができます。

グローバル・パラメーターの追加:

お客様独自のグローバル・パラメーターを定義することができます。

このタスクについて

ユーザー定義グローバル・パラメーターを追加するには:

手順

1. 以下のいずれかの方法で「パラメーターの挿入」ウィンドウを開くことができます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」ノードを展開します。「パラメーター」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「パラメーターの挿入」を選択します。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」ノードを展開します。「パラメーター」ノードをダブルクリックします。「パラメーターの挿入」ウィンドウが開きます。
2. 「名前」フィールドに、グローバル・パラメーターの固有名を入力します。
3. 「データ・タイプ」リスト・ボックスで、データ・タイプを選択します。データ・タイプは、パラメーターに含まれるデータのタイプを記述します。次のような選択肢があります。
  - ブール: true または false
  - 色: 色
  - 日時: 日時値
  - 日時セット: 複数の日時値
  - ファイル・パス: ファイルへのパス。
  - フォント名: 有効なフォント・タイプ
  - 整数: 整数

- リテラル: そのままのデータ。このデータ・タイプは、照会パラメーターにのみ適用されます。
  - 数値: 浮動小数点数
  - 数値セット: 複数の浮動小数点数
  - パーセンテージ: パーセンテージとして使用される値
  - ポイント: 単一の x-y ポイント値
  - ポイント・セット: 複数の x-y ポイント値
  - ポリ・セット: 多角形の構成に使用できる複数のポイント変数
  - テキスト: テキスト・ストリング
  - テキスト・セット: 複数のテキスト・ストリング
4. 説明を追加するには、「説明」フィールドにテキストを入力します。
  5. パラメーターがユーザーに使用可能となるように指定するには、「実行時に公開」チェック・ボックスを選択します。チェック・マークを付けると、「ランタイム設定値」ウィンドウが実行時に表示され、そこでユーザーが情報を入力できます。
  6. デフォルト値を指定するには、「デフォルト値」チェック・ボックスを選択します。フィールドが表示され、ここにグローバル・パラメーターのデフォルト値を入力できます。

グローバル・パラメーターの使用:

グローバル・パラメーターは、ビジュアル・プロジェクトでオブジェクトのプロパティを指定するために使用できます。

始める前に

このタスクについて

オブジェクト・プロパティの指定時にグローバル・パラメーターを使用するには:

手順

1. オブジェクトをビジュアル・プロジェクトに挿入します。
2. 「プロパティ」ビューから、グローバル・パラメーターを使用して値を取得するプロパティを選択し、対応するプロパティ・セルに `=your_global_parameter_name` と入力します。
3. プロパティ値を得るために評価される式でグローバル・パラメーターを使用することもできます。「式デザイナー」を開きます。定義されているグローバル・パラメーターは左ペインにリストされます。

## 有効期限スケジュールの作業

有効期限スケジュールは、ビジュアル・プロジェクトに関連するデータの有効期限が切れるタイミングを指定します。

このタスクについて

有効期限スケジュールを設定すると、ビジュアル・プロジェクトで呼び出されるデータを自動的にリフレッシュできます。ビジュアル・プロジェクト内の照会に有効

期限スケジュールが割り当てられている場合、照会から得られた照会結果は、そのスケジュールによって指定された特定期間、保管されます。ユーザーがビジュアル報告書またはダッシュボードを実行したときは、キャッシュに保管されている照会結果が使用されるため、照会が再実行されることはありません。スケジュールによってセットアップされた日時になると照会結果の有効期限が切れるため、次にユーザーがビジュアル報告書またはダッシュボードを実行したときには、照会が再実行されます。有効期限スケジュールでは、更新されたデータが必要となるときにだけ照会を実行することにより、時間とデータベースのリソースを節約できます。

注: 有効期限スケジュールは、リポジトリに保管されているビジュアル・プロジェクトに対してのみ使用できます。

新しい有効期限スケジュールを作成するには:

### 手順

1. 「有効期限スケジュール構成」ウィザードを、以下のいずれかの方法で開きます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」ノードを展開します。「有効期限スケジュール」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「スケジュールの挿入」を選択します。「有効期限スケジュール構成」ウィザードが開きます。
  - 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、「グローバル」ノードを展開します。「有効期限スケジュール」ノードをダブルクリックします。「有効期限スケジュール構成」ウィザードが開きます。
2. 「スケジュール名」フィールドに有効期限スケジュールの名前を入力します。
3. 「データの有効期限」ラジオ・グループでスケジュールの有効期限を選択します。有効な選択項目は以下のとおりです。
  - 「毎時」では、1 時間ごとにスケジュールの有効期限が切れます。
  - 「日次」では、その日ごとにスケジュールの有効期限が切れます。
  - 「週次」では、週ごとにスケジュールの有効期限が切れます。
  - 「月次」では、月ごとにスケジュールの有効期限が切れます。
  - 「特定の日付」では、スケジュールの有効期限が特定日に切れます。
  - 「常に有効」では、スケジュールの有効期限が決して切れません。プロジェクトが実行されるたびに、同じ照会結果が使用されます。
  - 「常に有効期限切れ」は、スケジュールの有効期限が常時切れている状態になります。照会結果は保存されずに、プロジェクトが実行されるたびに照会が再実行されます。
  - 「ビジュアル・プロジェクトが閉じられた後」では、ビジュアル・プロジェクトを閉じた後にスケジュールの有効期限が切れます。
4. 「常に有効」または「常に有効期限切れ」を選択した場合には、「終了」をクリックします。「有効期限スケジュール構成」ウィザードが閉じて、新しい有効期限スケジュールが「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「有効期限スケジュール」ノードに保存されます。
5. その他のオプションを選択した場合、「次へ」をクリックします。「有効期限スケジュール構成」ウィザードの「スケジュールのプロパティを設定します」ページは、選択内容によって異なります。



6. 「スケジュールのプロパティを設定します」オプションを指定して、「終了」をクリックします。「有効期限スケジュール構成」ウィザードが閉じて、新しい有効期限スケジュールが「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「有効期限スケジュール」ノードに保存されます。

有効期限スケジュールが毎時の場合のオプション指定:

有効期限スケジュールが毎時の場合、1 時間ごとに有効期限が切れます。

このタスクについて

有効期限スケジュールが毎時の場合のオプションを設定するには、以下のようになります。

手順

1. 「有効期限スケジュール構成」ウィザードの「スケジュールのプロパティを設定します」ページを開きます。
2. 「開始日」フィールドに、スケジュールの有効期限開始日を指定します。
3. 「開始時間」フィールドに、スケジュールの有効期限を開始する指定日の時刻を指定します。
4. 「期限切れ間隔」フィールド・グループに時間数および分数を指定して、有効期限切れの間隔を設定します。
5. 「終了」をクリックします。「有効期限スケジュール構成」ウィザードが閉じて、新しい有効期限スケジュールが「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「有効期限スケジュール」ノードに保存されます。

有効期限スケジュールが日次の場合のオプション指定:

有効期限スケジュールが日次の場合、日単位で有効期限が切れます。

このタスクについて

有効期限スケジュールが日次の場合のオプションを設定するには:

手順

1. 「有効期限スケジュール構成」ウィザードの「スケジュールのプロパティを設定します」ページを開きます。
2. 「開始日」リスト・ボックスに、スケジュールの有効期限開始日を指定します。
3. 「開始時間」リスト・ボックスに、スケジュールの有効期限を開始する指定日の時刻を指定します。
4. 「データの有効期限」ラジオ・グループでオプションを指定します。有効なオプションは以下のとおりです。
  - 「日次」: スケジュールは指定の開始日に開始し、指定の開始時間ごとに毎日有効期限が切れます。
  - 「日間隔」: スケジュールは指定の開始日に開始し、「日」リスト・ボックスで指定した日数が経過すると、指定の開始時間に有効期限が切れます。
  - 「曜日」: スケジュールは指定の開始日に開始し、指定の曜日ごとに、指定の開始時間になると有効期限が切れます。

5. 「終了」をクリックします。「有効期限スケジュール構成」ウィザードが閉じて、新しい有効期限スケジュールが「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「有効期限スケジュール」ノードに保存されます。

有効期限スケジュールが週次の場合のオプション指定:

有効期限スケジュールが週次の場合、週単位で有効期限が切れます。

このタスクについて

有効期限スケジュールが週次の場合のオプションを設定するには:

手順

1. 「有効期限スケジュール構成」ウィザードの「スケジュールのプロパティを設定します」ページを開きます。
2. 「開始日」リスト・ボックスに、スケジュールの有効期限開始日を指定します。
3. 「開始時間」リスト・ボックスに、スケジュールの有効期限を開始する指定日の時刻を指定します。
4. 「週ごと」リスト・ボックスに、指定の開始日から、スケジュールの有効期限が切れまでの週数を指定します。
5. 「曜日」チェック・ボックス・グループに、スケジュールの有効期限が切れる指定の曜日を指定します。
6. 「終了」をクリックします。「有効期限スケジュール構成」ウィザードが閉じて、新しい有効期限スケジュールが「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「有効期限スケジュール」ノードに保存されます。

有効期限スケジュールが月次の場合のオプション指定:

有効期限スケジュールが月次の場合、月単位で有効期限が切れます。

このタスクについて

有効期限スケジュールが月次の場合のオプションを設定するには:

手順

1. 「有効期限スケジュール構成」ウィザードの「スケジュールのプロパティを設定します」ページを開きます。
2. 「開始日」リスト・ボックスに、スケジュールの有効期限開始日を選択します。
3. 「開始時間」リスト・ボックスに、スケジュールの有効期限を開始する指定日の時刻を選択します。
4. 「データの有効期限」ラジオ・グループでオプションを指定します。有効なオプションは以下のとおりです。
  - 「日」は、該当する月のうちで「日」リスト・ボックスで指定した日にスケジュールの有効期限が切れます。
  - 「または」は、該当する月のうちの同じ相対曜日にスケジュールの有効期限が切れます。最初のドロップダウン・リストで、第 1、第 2、第 3、第 4、

または最終日を、さらに 2 番目のドロップダウン・リストで曜日を選ぶことによって、特定の相対曜日にスケジュールの有効期限が切れるように指定します。

5. 「月の選択」チェック・ボックス・グループで、スケジュールの有効期限が切れる月を指定します。
6. 「終了」をクリックします。「有効期限スケジュール構成」ウィザードが閉じて、新しい有効期限スケジュールが「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「有効期限スケジュール」ノードに保存されます。

特定の日付に有効期限が切れるスケジュールのオプション指定:

有効期限スケジュールを特定の日付だけに有効期限が切れるように設定できます。

このタスクについて

手順

1. 「有効期限スケジュール構成」ウィザードの「スケジュールのプロパティを設定します」ページを開きます。
2. 「日時」リストの最初の行をクリックします。右側に 3 つの点が付いたボタンをクリックします。「日時の選択」ウィンドウが開きます。
3. 左右の矢印ボタンを使用して、スケジュールの有効期限が切れる年月を選択します。
4. カレンダーで、スケジュールの有効期限が切れる月と日を選択します。
5. 「時刻」フィールドで、スケジュールの有効期限が切れる時刻を選択します。
6. 「OK」をクリックします。「日時の選択」ウィンドウが閉じて、「日時」リストに新しい日時が格納されます。
7. これらの手順を繰り返すと、スケジュールの有効期限が切れる日時を複数指定できます。
8. 「終了」をクリックします。「有効期限スケジュール構成」ウィザードが閉じて、新しい有効期限スケジュールが「プロジェクト・エクスプローラー」ビューの「有効期限スケジュール」ノードに保存されます。

## 翻訳テーブルの作業

翻訳テーブルにより、ビジュアル・デザイナーは、複数の言語で表示できる単一のビジュアル・ダッシュボードを公開することができます。

このタスクについて

コンテンツ開発者がダッシュボードを作成するときには、ボタンのキャプション、ラベル、ツールチップ、および他の埋め込みテキストを、ダッシュボード・オブジェクトのプロパティ値に直接入力します。翻訳テーブルを使用すると、コンテンツ開発者はその入力したテキストの代替バージョンを用意して、ロケールが異なるユーザーに対して表示させるようにできます。例えば、日本語の開発者は、日本語で新規ダッシュボードを作成することを決めてから、ドイツ語とフランス語の翻訳テーブルも組み込むことができます。各翻訳テーブルは、ドイツ語およびフランス語のロケールでダッシュボードが表示されるときに使用されます。

すべての新規ダッシュボードは、デフォルト翻訳テーブル付きで作成されます。デフォルト翻訳テーブルには、ダッシュボードを構成する構成要素のプロパティ値内に直接追加された、提供テキストの集合があります。現在のロケールにさらに適切な翻訳テーブルから使用できる代替テキスト値がない限り、デフォルト翻訳テーブルの内容が使用されます。以下の例を考慮してください。

1. 日本語で作成されたダッシュボードがあり、その中には 7 つのテキスト・ストリングがあります。
2. ダッシュボード開発者は、ドイツ語の翻訳テーブルを組み込み、オリジナルの 7 つのテキスト・ストリングのうちの 3 つにドイツ語の翻訳を提供することになります。さらに、開発者はフランス語の翻訳テーブルも追加し、7 つのストリングすべてに翻訳を提供します。
3. ダッシュボードを日本語で表示すると、7 つすべてのオリジナル・テキスト値が表示されます。ドイツ語で表示すると、オリジナルの 4 つの日本語ストリングと共に 3 つの翻訳されたストリングが、使用されます。フランス語で表示すると、7 つの翻訳されたフランス語ストリングが使用されます。イタリア語で表示すると、日本語ストリングが使用されます。

ダッシュボード・プロジェクトには、それぞれが特定の言語と関連付けられた、任意の数の翻訳テーブルを追加できます。翻訳テーブル・エディター内でストリングを直接編集することも可能ですが、アプリケーションは翻訳テーブルのエクスポートと再インポートの手段も提供しており、コンテンツ開発者は外部ツールとアプリケーションを使用して翻訳することができます。

## 手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、ダッシュボードの「グローバル」ノードを展開します。「翻訳テーブル」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「新規表の挿入」を選択します。「新規翻訳テーブル」ウィザードが開きます。
2. 言語を「言語」ドロップダウン・リストから選択します。選択した言語は、新規翻訳テーブル名として使用されます。特定の言語に対して、1 つの翻訳テーブルだけを定義できます。選択した言語に対して翻訳テーブルが既に存在している場合は、エラー・メッセージがプルダウン・メニュー上に表示されます。
3. 「終了」をクリックします。「新規翻訳テーブル」ウィザードが閉じ、「翻訳テーブルの編集」ウィンドウが開きます。
4. 新規翻訳テーブルには、デフォルト翻訳テーブルの内容が追加されます。オブジェクトのテキスト・プロパティ値 ID が、翻訳テーブルの「ID」セルにリストされます。オブジェクトのテキスト・プロパティ値 ID に対して定義されているテキストが、翻訳テーブルの「テキスト」セルにリストされます。
5. 左側のチェック・ボックスを使用して、翻訳から除外する各 ID と関連付けられているチェック・ボックスをクリアします。チェックされたままの ID の値だけが翻訳されます。ダッシュボード設計者は、どの値を翻訳すべきかが分かるようになります。企業名などの一部のテキスト値は、翻訳する必要がないため除外する必要があります。一部のテキスト・プロパティ値は、単なるストリングではなく、計算値です (テキストのセルに = 符号付きで表示されます)。これらのオブジェクトにストリング値が含まれている場合、それらは翻訳対象に含める必要があります。翻訳テーブルであるオブジェクト ID が無効にされると、デフォルト翻訳テーブル内の対応する値が使用されます (テキスト

値はダッシュボードの作成に使用された元の言語のものになります)。1 つ以上のオブジェクトが無効にされている場合、「使用可能にする」アイコンを使用して使用可能にすることができます。

6. 「翻訳テーブルの編集」ウィンドウ内でストリングの翻訳を選択できます。翻訳対象のストリングをファイルにエクスポートすることもできます。ストリングをファイルにエクスポートするには、「エクスポート」を選択します。オペレーティング・システム固有の「保存」ウィンドウが開きます。
7. ファイルの保存先のディレクトリを参照して、「保存」をクリックします。ファイル名は、翻訳テーブルの保存で使用された言語とは異なる場合があります。ファイルが翻訳者からアクセス可能となるようにします。
8. エクスポート・ファイル内では、ストリングは例えば `TestDashboard.Level1.Label10.Text=Current Assets` というようになります。翻訳者は、ストリング内の実テキストだけを翻訳し、オブジェクト ID の構文は翻訳しません。このテキストは、等号 (=) の右側のものです。この例では、`Current Assets` だけが翻訳される必要があります。
9. 翻訳が完了したら、ファイルをアップロードします。「プロジェクト・エクスプローラー」から、アップロードする翻訳テーブルを右クリックし、ポップアップ・メニューから「テーブルの編集」を選択します。「インポート」をクリックします。オペレーティング・システム固有の「開く」ウィンドウが開きます。
10. 翻訳済みファイルにナビゲートし、「開く」をクリックします。新しい変更点「翻訳テーブルの編集」ウィンドウの「テキスト」列に表示されます。
11. 「OK」をクリックします。新規翻訳テーブルが保存され、その対応する言語がビジュアル・ダッシュボードの「翻訳テーブル」ノードの下にリストされません。
12. アクティブなビジュアル・ダッシュボードの「プロパティ」ビューで、ダッシュボードの「デフォルト言語」を指定します。有効なオプションには以下があります。
  - 自動: QMF for Workstation がインストールされたマシンのネイティブ言語。
  - デフォルト: ビジュアル・ダッシュボードのコンテンツを作成するのに使用される元の言語。
  - 選択したビジュアル・ダッシュボードに対して翻訳テーブルが作成されている場合、その対応言語もデフォルト言語のオプションとしてリストされません。

ダッシュボードのシーンでの翻訳テーブルの切り替え:

「翻訳テーブル」グローバル・パラメーターを使用すると、ユーザーはダッシュボードのシーンのテキスト値に使用する翻訳を変更できます。

このタスクについて

あるロケールを使用するダッシュボードのユーザーが、テキストの表示にデフォルトの言語とは異なる言語を選択しようとする場合があるかもしれません。「翻訳テーブル」グローバル変数を使用して、ユーザーがある翻訳テーブルから別の翻訳テーブルに切り替えるためのコントロールを作成できます。ユーザーがこの機能を使

えるようにするためのユーザー・インターフェース作成を行う一般的な方法を記述した手順を、以下に示します。

#### 手順

1. ダッシュボードにオプションとして組み込む各言語用の翻訳テーブルを作成します。
2. 「パレット」ビューの「コントロール」パレットからリスト・ボックス・オブジェクトを選択し、そのシェイプをクリックして、エディター・ウィンドウにドラッグします。「リスト・ボックス」ウィザードが開きます。
3. 「いいえ」を選択して「次へ」をクリックします。「オプションと値リストの入力」ページが開きます。
4. 「終了」をクリックします。「リスト・ボックス」ウィザードが閉じ、エディター・ウィンドウにリスト・ボックスが表示されます。
5. 「プロパティ」ビューで「オプション・リスト」プロパティを選択し、ツールバーの「式デザイナーで編集」ボタンをクリックします。「式デザイナー」が開きます。
6. 関数ツリーの「翻訳」フォルダーを展開し、「`getAvailableTranslationTables()`」関数をダブルクリックします。
7. 「OK」をクリックします。「式デザイナー」が閉じ、作成したすべての翻訳テーブルの言語がリスト・ボックスにリストされます。
8. 「パレット」ビューの「コントロール」パレットからボタン・オブジェクトを選択し、そのシェイプをクリックして、エディター・ウィンドウにドラッグします。
9. エディターでそのボタンを選択し、「イベント」ビューを開いて「Click」イベントをダブルクリックします。「[ボタン名] 動作」ウィンドウが開きます。
10. 「新規アクションの追加」ボタンをクリックします。「新規アクションの追加」ウィンドウが開きます。
11. 「値の設定」アクションをダブルクリックします。「値の設定アクションのパラメーター」ページが開きます。
12. 「新しい項目を追加」ボタンをクリックしてから、「パラメーター」セルで省略符号 (...) をクリックします。「式デザイナー」が開きます。
13. 「グローバル」ノードの「パラメーター」フォルダーにある「翻訳テーブル」をダブルクリックします。
14. 「ListBox1」ノードの「List Box1 プロパティ」フォルダーにある「選択」プロパティをダブルクリックし、「OK」をクリックします。式デザイナーが閉じ、「新規アクションの追加」ウィンドウに制御が戻ります。
15. 「終了」をクリックします。「値の設定」アクションが追加されます。「新規アクションの追加」ウィンドウが閉じます。
16. 「[objectname] 動作」ウィンドウで、「適用」ボタンをクリックして、イベント用に追加されたすべてのアクションを適用します。
17. 「OK」をクリックして、「[objectname] 動作」ウィンドウを閉じます。
18. 「ランタイム」タブをクリックし、リスト・ボックスから言語を選択し、ボタンをクリックします。ダッシュボードで次に処理（照会の実行など）が実行される時、シーンのテキスト値が選択した言語で表示されることとなります。

---

## ビジュアル・ダッシュボードのプロファイルを作成

プロファイル作成を使用して、ビジュアル・ダッシュボードに含まれているシーンおよびオブジェクトの複雑さを動的に分析し、照会実行およびオブジェクト作成に関するデータや、ビジュアル・プロジェクト全体のコンパイルに費やされた時間を測定できます。

### このタスクについて

プロファイル作成を使用すれば、シーンおよびオブジェクトの処理をモニターして、問題のあるものを見つけることができます。この情報を使用すれば、ご使用のビジュアル・ダッシュボードを最適化できます。

## シーンの複雑さを分析

「アナライザー」ビューを使用すれば、特定ダッシュボード・シーンの複雑さを分析できます。

### 始める前に

分析するビジュアル・プロジェクトが存在していなければなりません。また、「アナライザー」ビューを開く必要があります。

### このタスクについて

アナライザーは、シーン上にある各オブジェクトの重みをカウントします。各オブジェクトには、さまざまな複雑さの値と式が含まれるプロパティーがいくつかあります。デフォルト・プロパティーはすべて基本単位であり、これ以上単純な単位に分割できません。各デフォルト・プロパティーの重みは 1 に相当します。デフォルト以外のプロパティーの重みは、その複雑さに応じて式としてカウントされます。分析プロセスでは、各オブジェクトの重みをカウントして、シーンの全体的な重みを把握できます。


照会を実行できるオブジェクトや、データ・テンプレートには、計算できない重みがあります。これらは、「アナライザー」ビューにおいて赤で強調表示されます。


分析データは、以下の列を持つ表で表されます。

- 「要素」列には、分析されたシーンのツリー構造が表示されます。
- 「重み」列には、特定の要素の重みが表示されます。
- 「累積重み」列には、特定の親要素と子要素の重みが表示されます。

シーンを分析するには、以下のようになります。

### 手順

1. キャンバス・モード、設計モード、または実行時モードで、分析するシーンを開きます。
2. 「アナライザー」ビューで「分析」() をクリックします。
3. シーンの分析は、シーンの構成要素とオブジェクトがすべてリストされるツリーとして「アナライザー」ビューに表示されます。

4. このビューでオブジェクトを選択できます。選択したオブジェクトは、シーンおよび「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで、選択済みとして表示されます。
5. 「累積重み」列で省略符号 (...) をクリックするか、ビュー・ツールバーの「行数の設定」 () ボタンをクリックすることにより、計算不可の重みを持つオブジェクトに値を指定できます。この値は、計算できない重みを持つオブジェクトで平均行数として使用されます。

## ビジュアル・ダッシュボードのプロファイル作成

「プロファイラー」ビューを使用すれば、ビジュアル・ダッシュボードのプロファイルを作成できます。

### 始める前に

分析するビジュアル・プロジェクトを用意し、「プロファイラー」ビューを開く必要があります。





### このタスクについて

「プロファイラー」ビューには、実行中の照会に関するデータ、作成されたオブジェクト数、およびビジュアル・プロジェクトでそのオブジェクトを作成したり式を計算したりするために費やされた時間が表示されます。プロファイラー・データは、以下の列を持つ表に示されます。






- 「要素」列には、ビジュアル・プロジェクトのオブジェクト、式、および照会を持つシーンがすべてリストされます。
- 「カウント」列には、オブジェクトが作成された回数が表示されます。
- 「時刻」列には、要素の作成に費やされた時間が表示されます。
- 「累積時間」列には、親要素とその子要素の作成に費やされた時間が表示されます。
- 「パーセンテージ」列には、プロジェクト全体の作成に費やされた時間に対する、特定の要素の作成に費やされた時間の比率が表示されます。

プロファイル作成プロセスを開始するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「プロファイラー」ビューのツールバーにある「プロファイル」 () ボタンをクリックします。
2. 必要なビジュアル・ダッシュボードまたは個別のシーンを実行時モードで開きます。
3. すべてのシーンが作成されて、すべての照会が実行されたら、「プロファイル」 () を再度クリックします。プロファイラーの結果がツリー・テーブルに表示されます。
4. 結果の表示方法を変更するには、「プロファイラー」ビューのツールバーにある「ツリー・ビュー」 () または「フラット・ビュー」 () ボタンをクリックします。



5. 「プロファイラー」ビューのツールバーで「すべて展開」 () または「すべて縮小」 () ボタンをクリックして、エレメントのツリーを展開または縮小します。
6. プロジェクトにおける照会の SQL テキストを表示するには、「プロファイラー」ビューで照会ノードを選択し、「SQL テキスト」 () ツールバー・ボタンをクリックします。
7. プロファイラー・データをエクスポートまたはインポートするには、「データのインポート」 () または「データのエクスポート」 () ツールバー・ボタンをクリックします。
8. このビューでオブジェクトを選択すると、「プロジェクト・エクスプローラー」ビューで選択したときと同じようにオブジェクトが表示されます。
9. 「プロファイラー」ビューの列にある値をソートするには、列見出しをクリックします。

---

## ビジュアル・ダッシュボードのデバッグ

「式」ビューを使用すれば、プロセスの実行を制御し、エラーがビジュアル・ダッシュボードに潜んでいないかを調べることができます。実行時モードでは、該当するビジュアル・プロジェクト・シーンについてパラメーター値、オブジェクト・プロパティー、および式評価を確認できます。

### このタスクについて

シーンを確認するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. 「式」ビューを開きます。これを行うには、メインメニューから「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「その他」を選択し、「ビジュアル・プロジェクト・デバッガー」ノードを展開し、「式」を選択して、「OK」をクリックします。
2. 「式」ビューで「グローバル・パラメーターの監視」をクリックして、実行時におけるシーンのビジュアル・プロジェクトのグローバル・パラメーター値を確認します。
3. 「ローカル・パラメーターの監視」をクリックして、実行時のシーンのローカル・パラメーターを確認します。

注: 実行したシーンのみには特有のグローバル・パラメーターとローカル・パラメーターが表示されます。

4. 関数を含めることができる式を追加し、オブジェクト・プロパティーやシーン・パラメーターを参照し、この式の評価を監視できます。「式の追加」をクリックして、「式の追加」ダイアログを開いてください。
5. 式のテキストを入力して「OK」をクリックし、この式を「式」リストに追加します。

注: 追加された式は、実行されたすべてのシーンについて評価されます。

6. 既存の式を変更するには、「式」リストから式を選択し、「式の編集」をクリックします。選択した式のテキストが示された「式の編集」ダイアログが開きます。
7. 式のテキストを編集して、「OK」をクリックします。

ヒント: キャンバス・モード、設計モード、または実行時モードのいずれかでシーンが開かれている場合は、「式の追加」または「式の編集」をクリックすれば、「式デザイナー」ウィンドウが開きます。式デザイナー関数を使用すれば、式を入力できます。

8. シーン・オブジェクト・プロパティの値を監視するには、キャンバス・モード、設計モード、または「プロジェクト・エクスプローラー」ビューのいずれかでオブジェクトを右クリックし、メニューから「プロパティの監視」を選択します。「監視するプロパティを選択」ダイアログが開きます。
9. 監視するオブジェクト・プロパティに対応するチェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。プロパティが「式」リストに追加されません。
10. 実行時モードで、確認するシーンを開きます。「式」ビューの「値」リストで現行シーンについてグローバル・パラメーター/ローカル・パラメーターおよび式評価を確認します。
11. 「式の最新表示」をクリックし、活動状態のシーンについて式の値を更新します。
12. 「式」リストから式を削除して式の監視を停止するには、リストから式を選択し、「式の除去」をクリックします。
13. 「式の消去」をクリックして、「式」リストから監視対象の式をすべて削除します。

---

## ビジュアル・プロジェクト内の特定オブジェクトの照会を編集

ビジュアル・プロジェクト内の特定オブジェクトによって使用される照会を素早く表示および編集できます。

### 始める前に

ビジュアル・プロジェクトのオブジェクトによって使用される照会にはパラメーターが必要です。

### このタスクについて

ビジュアル・プロジェクト内の特定オブジェクトの照会を開いて編集するには、以下の手順を実行します。

### 手順

1. 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューでオブジェクト (このオブジェクトに対する指定の照会を表示します) のノードを展開します。
2. オブジェクトのツリーで「照会パラメーター」ノードを展開し、照会パラメーターが含まれている項目を選択します。パラメーターの名前と現行値が「プロパティ」ビューに表示されます。照会パラメーターの値は変更可能です。

3. 照会パラメーターが含まれている選択済みの項目を右クリックし、メニューから「照会を開く」を選択します。オブジェクトによって使用される照会がビジュアル照会エディターで開かれます。この編集機能で照会を変更できます。



---

## 第 16 章 JavaScript テーブルの操作

JavaScript テーブルを使用すれば、ネットワーク・リソースからデータを収集して、そのデータをリレーショナル・テーブルの形式で処理できます。

例えば、特定期間で株式取引情報を金融ポータルから収集し、この情報を標準的なリレーショナル・テーブルとして QMF で使用できるように保管する必要があるとします。

これを行うには、JavaScript テーブルを作成し、その構造を指定して、そのテーブルを仮想データ・ソースに保管します。JavaScript テーブル編集機能で、HTTP または HTTPS を使用して取得される必要なデータをテーブルに追加するスクリプトを作成します。作成した JavaScript テーブルに基づいて照会を実行すると、スクリプトによってデータが取得され、照会で使用されたテーブルに保管されます。

必要に応じて、リポジトリに保管されていたり Web サーバー上に配置されていたりする別のモジュールからの外部関数および外部オブジェクトを使用できます。

JavaScript テーブルに基づいて照会を実行したり、その照会を使用して即時報告書または予測を作成したり、その照会をビジュアル・ダッシュボードに追加したりできます。

---

### JavaScript テーブルの作成

新しい JavaScript テーブルを追加して、その構造を指定するには、「JavaScript テーブルの作成」ウィザードを使用します。

#### このタスクについて

JavaScript テーブルを作成するには、以下のようになります。

#### 手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。ウィンドウが開いたら、「**JavaScript テーブル**」を選択して「次へ」をクリックします。「新規 JavaScript テーブルの作成」ウィザードが開きます。
2. 「新規 **JavaScript** テーブルの追加」ページで、作成するテーブルの名前を指定し、そのテーブルの保存先となる仮想データ・ソースを選択します。「次へ」をクリックします。

注: 「データ・ソース」リストには、現行リポジトリ接続からの仮想データ・ソースのみが含まれます。

3. 「**JavaScript** テーブル構造」ページで、列のリスト、列の順序、値タイプ、必須パラメーターなど、テーブル構造を定義します。また、任意の列に注釈を追加することもできます。
4. 「終了」をクリックしてウィザードを閉じます。指定した名前と構造を持つ JavaScript テーブルが、選択した仮想データ・ソースに追加されます。ウィザードを閉じると、「**JavaScript** テーブル」編集機能が開きます。

5. 「JavaScript テーブル」編集機能で、必要なデータを JavaScript テーブルに追加するスクリプトを作成します。
6. スクリプトの操作が終了したら、変更を保管して編集機能を閉じます。

## タスクの結果

これで、作成した JavaScript テーブルを標準的なリレーショナル・テーブルとして使用できるようになりました。例えば、作成した JavaScript テーブルに基づいて照会を実行したり、その照会を使用して即時報告書または予測を作成したり、その照会をビジュアル・ダッシュボードに追加したりできます。

## JavaScript テーブルにデータを設定するスクリプトを作成

JavaScript テーブルを作成して、その構造を指定したら、必要なデータをテーブルに設定するスクリプトを作成する必要があります。

### このタスクについて

「JavaScript テーブル」編集機能で、一般的な JavaScript 構文規則に従ってスクリプトを作成します。「新規 JavaScript テーブルの作成」ウィザードを閉じると、編集機能が自動的に開きます。

JavaScript テーブルの内容を管理するために、以下のテーブル・グローバル・オブジェクト特殊関数を使用することもできます。

- `replaceData()`
- `appendData()`
- `eraseData()`
- `setTag()`
- `getTag()`
- `include()`

HTTP 要求および HTTP 応答を追跡してログを記録するには、`log()` 関数を使用します。

スクリプトではプロンプト変数も使用できます。作成した JavaScript テーブルに基づいてユーザーが照会を実行すると、そのユーザーに変数値の入力が求められます。スクリプトでプロンプト変数を使用する場合は、以下の特性に注意してください。

- JavaScript テーブル・キャッシュは無視されます。
- JavaScript テーブルを QMF for WebSphere で操作する場合、取得されたデータはすべて、そのユーザーのみが使用できます。

事前設定モジュールを使用するかカスタム・モジュールを作成することができます。

スクリプトの操作が終了したら、変更を保管して編集機能を閉じます。

### 手順

1. 事前設定モジュールを使用する場合はモジュールに JavaScript を追加します。
2. ユーザー・モジュールを追加するには、以下のようにします。

- a. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで、データ・ソースの「モジュール」ノードを右クリックし、「新規」 > 「JavaScript モジュール」をクリックします。
  - b. 「新規 JavaScript モジュール」ウィザードで、「名前」フィールドに JavaScript モジュールの名前を指定し、「終了」をクリックして JavaScript モジュール・エディターを開きます。
3. モジュールにスクリプトを入力してモジュールを保存します。

重要: 事前設定モジュールを使用する場合、実行中の名前の競合を回避するために、異なるモジュール内の変数の名前を複製しないでください。

## JavaScript テーブル例

次の例は、JavaScript テーブルの使用方法を示しています。

### 目的

特定期間で株式取引情報を金融ポータルから収集し、この情報を標準的なリレーショナル・テーブルとして QMF で使用できるように保管する必要があります。このテーブルを過度に更新したり、このテーブルに 30 日を超えて情報を保管したりしてはなりません。

### テーブル構造の作成

スクリプトの作成を開始する前に、指定するテーブル構造が、取得しなければならないデータに対応するようにする必要があります。

### スクリプト構造の計画

目的に応じて、スクリプトは、サーバーから情報を取得し、テーブルに入力されるデータを解析し、最終変更時刻を保管して検査し、古い情報を削除する必要があります。

```
var lastModificationDate = getTableModificationTime();
if (needUpdate(lastModificationDate))
{
    var raw_data = retrieveRawData(url);
    var data = parseData(raw_data);
    table.appendData(data);
    eraseOutdated();
    setTableModificationTime();
}
else
{
    log("Data is already up to date ");
}
```

以下の関数が使用されています。

- **setTableModificationTime()**: これは、最終変更時刻をテーブルに付加します。
- **getTableModificationTime()**: これは、最終テーブル変更時刻を取得します。
- **needUpdate()**: これは、最終変更時刻によっては更新が必要になるかどうかを検査します。
- **retrieveRawData()**: これは、必要なデータをポータルから取得します。

- **parseData()**: これは、テーブル構造に従って、取得したストリングを分割します。
- **eraseOutdated()**: これは、古いレコードを除去します。
- **log()**: これは、応答状況を追跡して出力ビューに情報を表示します。

## インターネットからデータを取得

最初に、必要なデータをインターネットから取得する必要があります。これを行うために、**RSBIHttpRequest** クラスが使用されます。

```
function getStockData(url)
{
  var request = new RSBIHttpRequest();
  request.open('GET',url, false);
  var response = '';
  request.onreadystatechange = function()
  {
    if(request.readyState === request.Complete)
    {
      response = request.responseText;
    }
  }
  request.send(null);
  return response;
}
```

ヒント: HTTPS プロトコルを使用して JavaScript テーブルへの HTTP 要求を送信したい場合は、まず SSL 証明書を適切に処理するように Java 仮想マシンを構成する必要があります。構成を行わない場合は、**RSBIHttpRequest.ignoreCertificates()** メソッドを使用してください。この場合、ご使用の JVM は SSL 証明書を無視するように設定され、確立された接続はセキュアではありません。

**getStockData()** 関数は、ポータルからの必要なすべてのデータを含む応答ストリングを返します。

この関数は、HTTP 要求を形成する **retrieveRawData()** 関数から呼び出され、**log()** 関数を使用して応答情報を追跡します。また、プロンプト変数 (*symbols* 変数) をスクリプトで使用することもできます。この場合、ユーザーは照会の実行時に値を指定するように求められます。 `&DSQQW_DQ` グローバル変数が二重引用符の置換に使用されます。

```
function retrieveRawData()
{
  var symbols = &DSQQW_DQ&symbols&DSQQW_DQ;
  var url = "http://finance.yahoo.com/d/quotes.csv?s="+symbols+"&f=sn1ld1t1ohgdr";
  var raw_data = getStockData(url);
  log(raw_data);
  return raw_data;
}
```

## 受信データの解析

次に、**appendData()** 関数または **replaceData()** 関数を使用してテーブルにデータを入力できるように、目的に従って、取得したデータを解析する必要があります。最も簡単な方法は、応答ストリングを分割する方法です。

```
function parseData(raw_data)
{
  var data = [];
```



```

var rows = raw_data.split('\n');
for (var i=0; i < rows.length; i++)
{
  var row = rows[i].trim();
  if (row !== '')
  {
    var cells = row.split(',');
    data.push(cells);
  }
}
return data;
}

```

## データ更新間隔の指定

**setTag()** 関数を使用して、変更時刻を（ストリング形式で任意の追加情報として）テーブルに付加できます。**getTag()** 関数は、この情報を取得するために使用されま

1. 現在時刻（最終変更）をテーブル・タグとして設定:

```

function setTableModificationTime()
{
  var currentDate = new Date();
  table.setTag(currentDate.getTime());
}

```

2. 最終変更時刻を取得:

```

function getTableModificationTime()
{
  var tag = table.getTag();
  if (tag === null)
  {
    var d = new Date();
    d.setDate(-2); // to force update for the first time use
    tag = d.getTime();
  }
  else
  {
    tag = parseInt(tag);
  }
  return tag;
}

```

3. 更新が必要かどうかを検査:

```

function needUpdate(lastModificationDate)
{
  var yesterday = new Date();
  yesterday.setDate(-1);
  return lastModificationDate <= yesterday.getTime();
}

```

## 古い情報を除去

**eraseData()** 関数を使用して、古い情報をテーブルから除去できます。

```

function eraseOutdated()
{
  var expirationDate = new Date();
  expirationDate.setDate(-30);
  var day = expirationDate.getDay();
  var month = expirationDate.getMonth() + 1;
}

```

```

var year = expirationDate.getYear() + 1900;
var strDate = year + '-' + month + '-' + day;
table.eraseData("Last Trade Date"<' + "'" + strDate + "'");
}

```

## 結果の表示

スクリプトの操作が終了したら、変更を保管して編集機能を閉じます。

照会を実行するには、「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで保管した JavaScript テーブルにナビゲートし、このテーブルをダブルクリックします。開かれた照会を実行します。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
Symbol	Name	Last Trade (Price Only)	Last Trade Date	Last Trade Time	Open	Day's High	Day's Low	Dividend/Share	P/E Ratio	
1	XOM	Exxon Mobil Corpo	90.58	2013-04-02	<NULL>	90.68	90.92	90.28	2.28	9.36
2	GE	General Electric	23.34	2013-04-02	<NULL>	23.20	23.37	23.09	0.72	17.86
3	MSFT	Microsoft Corpora	28.80	2013-04-02	<NULL>	28.61	28.85	28.52	0.86	15.72

## JavaScript テーブルの編集

既に作成してある JavaScript テーブルの構造およびスクリプトを編集できます。

### このタスクについて

JavaScript テーブルを編集するには、以下のようになります。

### 手順

- 「リポジトリ」ビューまたは「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで、必要な JavaScript テーブルにナビゲートします。
- JavaScript テーブルの構造を編集するには、そのテーブルを右クリックして、ポップアップ・メニューから「プロパティ」を選択します。
  - 「プロパティ」ウィンドウで「構造」ページを開きます。
  - 列のリスト、列の順序、値タイプ、必須パラメーターなどのテーブル構造を変更します。また、任意の列に注釈を追加することもできます。
  - 未保管の変更を取り消すには、「デフォルトの復元」をクリックします。
  - 更新した JavaScript テーブル構造を保管するには、「適用」をクリックしてから「OK」をクリックします。

注: すべてのデータがテーブルから除去されます。

- JavaScript テーブルのスクリプトを編集するには、その表を右クリックして、ポップアップ・メニューから「ソース・スクリプトの編集」を選択します。  
「JavaScript テーブル」編集機能が開いたら、目的に従ってスクリプトを書き直します。ソース・スクリプトの編集を終えたら、JavaScript テーブルを保管します。

---

## 第 17 章 仮想表を作成中

仮想表を使用して、収集されたデータを仮想データ・ソース内でリレーショナル表形式で処理します。

### このタスクについて

仮想表は仮想データ・ソースに保管されます。仮想表の使用により、簡単な方法でメタデータを編集し、キャッシュ有効期限スケジュールを指定し、計算列を処理することができます。

仮想表を作成するには、以下のようにします。

### 手順

1. メインメニューから、「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」 > 「仮想表」を選択します。
2. 「新規仮想表」ウィザードで、仮想表ソースとして使用する、表、仮想表、照会、または予測を選択します。
3. 「名前」フィールドに、仮想表の名前を入力します。
4. 「データ・ソース」リストから、表の追加先となる仮想データ・ソースを選択します。
5. 「次へ」をクリックして仮想表の構造を指定するか、「終了」をクリックして省略時の構造およびキャッシュ設定を持つ表を作成します。

---

## 仮想表の構造の指定

データベース表のデータ構造とメタデータが異なる場合、仮想データ・ソースで仮想表を使用して、簡単な方法でメタデータを編集または変換します。

### このタスクについて

仮想表の構造を指定するには、以下のようにします。

### 手順

1. 「新規仮想表の作成」ウィザードの 2 ページ目、または「プロパティ」ウィンドウの「構造」タブで、「フィールド」表を使用して、仮想表の構造を指定します。
2. 列名を編集するには、「名前」列のセルをクリックして、新しい名前を入力します。
3. 別のデータ・タイプを指定するには、「タイプ」列でセルをクリックし、リストからデータ・タイプを選択します。使用可能なオプションは次のとおりです。
  - **INTEGER**: -2 147 483 648 から 2 147 483 647 までの符号付き整数を格納する場合に使用します。

- **BIGINT**: -9 223 372 036 854 775 808 から 9 223 372 036 854 775 807 までの大きな符号付き整数を格納する場合に使用します。
- **DOUBLE**: 浮動小数点付きの大きな数値を格納する場合に使用します。
- **CHAR**: 固定長文字列を格納する場合に使用します。例えば、一般的に長さの固定された、従業員の電話番号などを格納することができます。
- **VARCHAR**: 従業員名などの可変長文字列を格納する場合に使用します。
- **DECIMAL**: 固定された精度やスケールの数値を格納する場合に使用します。このデータ・タイプは、高精度の値 (通貨など) に使用してください。
- **DATE**: 日付のみを格納する場合に使用します。
- **TIME**: 時刻のみを格納する場合に使用します。
- **TIMESTAMP**: 日付と時刻の両方を格納する場合に使用します。

注: DATE、TIME、TIMESTAMP の各データ・タイプは、結果セットでの値の表示方法を定義する各種形式オプションをサポートしています。

注: サポートされる範囲と値の精度は、使用するデータベースによって異なる場合があります。

4. 「長さ」フィールドで、VARCHAR タイプの最大文字数を指定します。
5. 「精度」フィールドで、DECIMAL タイプの最大総桁数を指定します。
6. 「スケール」フィールドで、以下の最大数を指定します。
  - DECIMAL タイプの小数桁数
  - TIMESTAMP タイプまたは TIMESTAMP WITH TIMEZONE タイプの秒の小数部分の桁数
7. オプション: 「注釈」フィールドに、仮想表内の列に対する注釈を入力します。
8. 仮想表から列を削除するには、「列の削除」をクリックします。
9. 削除された列を復元するには、「列の追加」をクリックして、「列の追加」ウィンドウで復元する列を選択します。
10. 仮想表に計算列を追加するには、「列の追加」ボタンをクリックします。
  - a. 「列の追加」ウィンドウの「または、ここに式を入力」フィールドで、新規の計算列の条件式を作成します。
11. 仮想表内の列の位置を変更するには、「上へ移動」ボタンまたは「下へ移動」ボタンを使用します。
12. 「次へ」をクリックして仮想表のキャッシュ有効期限を指定するか、「終了」をクリックしてウィザードを閉じます。

---

## 仮想表のキャッシュ有効期限の指定

キャッシュをスケジューリングして、実際のデータ・ソースからではなくキャッシュから表レコードを取り出すこともできます。これにより、仮想表での作業をより速く行うことができます。表内の関連するデータのみが使用されるようにキャッシュ設定を適切に指定します。

## このタスクについて

仮想表のキャッシュ・スケジュールを指定するには、以下のようになります。

### 手順

1. 「新規仮想表」ウィザードの 3 ページ目で、「有効期限スケジュールの使用」チェック・ボックスを選択します。スケジュール有効期限設定が使用可能になります。
2. 「デフォルトの有効期限スケジュール」リストから、仮想データ・ソース全体の省略時スケジュールとして使用するスケジュールを選択します。

注: さらにスケジュールを追加する場合は、QMF 管理者にお問い合わせください。

3. 特定のキャッシュ有効期限スケジュールを表に割り当てるには、設定を変更する表の「スケジュール名」列をクリックし、使用可能なスケジュールのリストから必要なスケジュールを選択します。

注: 表に置換変数が含まれている場合、このような表には「常に有効期限切れ」有効期限スケジュールのみ適用されます。

4. ソース表でアクセスのための許可が必要な場合、仮想表用の許可設定を指定する必要があります。「許可の管理」ボタンをクリックします。「許可の管理」ウィンドウが開きます。ここには、許可を必要とするすべてのデータ・ソースがリストされます。この許可データは、キャッシュの更新に使用されます。
5. 必要なデータ・ソースの「ログイン」列をクリックします。「データ・ソース・ログインの編集」ダイアログが開きます。
6. 適切な値を「ログイン」フィールドおよび「パスワード」フィールドに入力して、「OK」をクリックします。
7. 必要なすべてのデータ・ソースの許可データの指定が終了したら、「許可の管理」ダイアログで「OK」をクリックします。
8. 「終了」をクリックしてウィザードを閉じます。



---

## 第 18 章 分析オブジェクトの操作

QMF for TSO および QMF for CICS で作成し、QMF カタログに保管した QMF Analytics for TSO オブジェクトを開いたり、エクスポートしたり、印刷したりすることができます。これらのオブジェクトは、QMF for Workstation の QMF カタログの「分析」ノードにあります。これらの分析オブジェクトは、QMF for Workstation で図表として開かれます。

### 始める前に

この機能は、DB2 for z/OS データベースでのみ使用可能です。

### このタスクについて

以下の QMF Analytics for TSO オブジェクトを QMF for Workstation で開いたり、エクスポートしたり、印刷したりすることができます。

- ヒストグラム
- 混合
- 円グラフ
- プロット
- タワー

---

## 分析オブジェクトを **QMF** カタログから開く

QMF for TSO および QMF for CICS で作成して QMF カタログに保管した分析オブジェクトは QMF for Workstation で開くことができます。

### 始める前に

QMF Analytics for TSO オブジェクトが QMF カタログに保管されていなければなりません。

### このタスクについて

分析オブジェクトのソース照会/表は、事前に関しておいても、後でオブジェクトを開いたときに追加してもかまいません。詳しくは、以下のトピックを参照してください。

## ソースを使用して分析オブジェクトを開く

分析オブジェクトのソース照会/表を開くことができます。

### このタスクについて

ソース照会/表を事前に関いて分析オブジェクトを開くには、以下のようになります。

### 手順

1. ソース照会/表を開きます。

2. 「ファイル」 > 「ファイルの場所」 > 「**QMF** カタログ」を選択して、必要なオブジェクトを **QMF** カタログから開きます (『**QMF** カタログ・オブジェクトを開く』を参照してください)。オブジェクトの結果が編集機能域に表示されます。

## タスクの結果

開かれた分析オブジェクトはエクスポートしたり印刷したりできます。

## ソースを使用せずに分析オブジェクトを開く

ソース照会/表を使用せずに分析オブジェクトを開いて、それを後で追加することができます。

### このタスクについて

ソース照会/表を事前に開くことなく分析オブジェクトを開くには、以下のようにします。

### 手順

1. 「ファイル」 > 「ファイルの場所」 > 「**QMF** カタログ」を選択して、必要なオブジェクトを **QMF** カタログから開きます (『**QMF** カタログ・オブジェクトを開く』を参照してください)。
2. 「列の選択」ダイアログで省略符号 (...) をクリックし、図表のソースとして使用する照会または表を指定します。「データ・ソース・オブジェクト」ダイアログが開きます。
3. 「データ・ソース・オブジェクト」ダイアログで、開きたい照会または表があるディレクトリーを選択します。
  - a. 「ファイルから」オプションを選択した場合は、「参照」ボタンを使用して、必要な照会または表を「名前」フィールドに入力します。
  - b. 「データ・ソースから」オプションを選択した場合は、「オブジェクトのリスト」ボタンをクリックします。「オブジェクト・リスト」ダイアログが開きます。「オブジェクト・リスト」ダイアログの操作について詳しくは、『データ・ソース・オブジェクトのリスト』トピックにあるステップ 3 から 8 までを参照してください。
  - c. 「リポジトリから」オプションを選択した場合は、「リポジトリ・ロケーション」リストに、現在のリポジトリがツリー構造で表示されます。開きたいオブジェクトが見つかるまでフォルダーを展開します。オブジェクトを選択します。

注: 「名前フィルターの設定」ボタンおよび「ユーザー情報の設定」ボタンをクリックすれば、選択したデータ・ソースのフィルター名およびユーザー情報を設定できます。

4. 「ファイルから」オプションまたは「リポジトリから」オプションを選択した場合は、照会結果セットの番号を「結果セット」フィールドに指定します。
5. 選択した照会を他のすべての分析オブジェクトに対して使用する場合は、「この文書を開くときは常にこのオブジェクトを使用する」チェック・ボックスを選択します。



6. 「OK」をクリックして「データ・ソース・オブジェクト」ダイアログを閉じます。「列の選択」ダイアログでソースが開きます。
7. 「パラメーター選択」リストで、特定の図表軸に関する使用可能な列を変更できます。列を変更するには、変更する列をクリックして、必要なものをリストから選択します。
8. 「OK」をクリックします。「列の選択」ダイアログが閉じて、編集機能域の「結果」タブにオブジェクトが表示されます。

## タスクの結果

開かれた分析オブジェクトはエクスポートしたり印刷したりできます。

---

## 分析オブジェクトでのプロシージャ・コマンドの使用

プロシージャ・コマンドを使用して、分析オブジェクトを開いたり、エクスポートしたり、印刷したりすることができます。

### このタスクについて

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- DISPLAY コマンド
- EXPORT コマンド
- PRINT コマンド

---

## 分析オブジェクトのエクスポート

「図表のエクスポート」ウィザードでは、開いた分析オブジェクトを図表としてファイル・システムにエクスポートできます。

### このタスクについて

詳しくは、『図表のエクスポート』トピックを参照してください。



---

## 第 19 章 アプリケーション環境のカスタマイズ

照会環境および報告書作成環境をカスタマイズできる多くの方法があります。

---

### コマンド行の使用

コマンド行インターフェースでは、QMF for Workstation ユーザーがアプリケーション・インターフェースではなくオペレーティング・コマンド行を使用してコマンドを実行することによって、リポジトリに接続してオブジェクトを実行できます。

#### このタスクについて

以下の手順は、オペレーティング・システムのコマンド行を使用して、保護されたリポジトリへの接続とオブジェクトの実行を行う方法を示しています。

#### 手順

1. プロシージャを作成します。以下に例を示します。

```
run query ObjectTracking (form=ObjectTrackingForm
  export form to c:%dqtrack.frm
```

この例では、書式生成の目的で、ObjectTrackingForm という書式を使用して、ObjectTracking という照会を実行します。この手順は、c:% ディレクトリーにある dqtrack.frm というファイルに、書式をエクスポートします。

2. プロシージャを保護されたリポジトリに proc12 という名前で保存し、プロシージャを QMF カタログに DB2INST1.Procedure1 という名前で保存して、ローカル・ファイルとして Procedure1.prc の名前で保存します。
3. 実行コマンドを作成する際に指定できるパラメーターはいくつかあります。以下は、いくつかのパラメーターの使用例であり、リポジトリ、QMF カタログ、およびローカル・ファイルに保存されたプロシージャ・オブジェクトの実行方法を示しています。

- オペレーティング・システムのコマンド行に下記のコマンドを入力します。このコマンドは、リポジトリ・ストレージのログインおよびパスワードが Connection1 という名前のリポジトリ接続に保管されているときに、リポジトリ・ユーザー ID repuserid およびパスワード reppassword を使用して保護されたリポジトリに接続し、リポジトリにある proc12 という名前の手順をデータ・ソース DB2AIX に対して実行します。データ・ソースへのアクセスには、ユーザー ID db2inst1 とパスワード db2inst1 を使用します。

```
"C:%Program Files%IBM%DB2 Query Management
Facility%
QMF for Workstation%qmfdev.exe"
/RConnection:Connection1 /RUser:repuserid /RPassword:reppassword
/RObject:rsbi:/.workspaces/Default/proc12 /IServer:DB2AIX /Run
/IUserID:db2inst1 /IPassword:db2inst1
```

- オペレーティング・システムのコマンド行に下記のコマンドを入力します。このコマンドは、リポジトリ・ストレージのログインおよびパスワードが

Connection1 という名前のリポジトリ接続に保管されていないときに、リポジトリ・ストレージ・ユーザー ID repuserid、パスワード reppassword、リポジトリ・ストレージ・ユーザー ID rdbuserID、およびパスワード rdbpassword を使用して、保護されたリポジトリに接続し、QMF カタログに保管されている DB2INST1.Procedure1 という名前の手順をデータ・ソース DB2AIX に対して実行します。データ・ソースへのアクセスには、ユーザー ID db2inst1 とパスワード db2inst1 を使用します。

```
"C:\Program Files\IBM\DB2 Query Management Facility\QMF for Workstation\
```

```
qmfdev
.exe" /RConnection:Connection1 /RUser:repuserid /RPassword:reppassword
/RDBUser:rdbuserID /RDBPassword:rdbpassword/IObject:DB2INST1.Procedure1
/IServer:DB2AIX /Run /IUserID:db2inst1/IPassword:db2inst1
```

- オペレーティング・システムのコマンド行に下記のコマンドを入力します。このコマンドは、リポジトリ・ストレージのログインおよびパスワードが Connection1 という名前のリポジトリ接続に保管されていないときに、リポジトリ・ストレージ・ユーザー ID rdbuserID およびパスワード rdbpassword を使用してデータベース・ベースのセキュリティを備えたりリポジトリに接続し、QMF カタログに保管されている DB2INST1.Procedure1 という名前の手順 (グローバル変数を持つもの) をデータ・ソース DB2AIX に対して実行します。データ・ソースへのアクセスには、ユーザー ID db2inst1 とパスワード db2inst1 を使用します。

```
"C:\Program Files\IBM\DB2 Query Management Facility\
```

```
QMF for Workstation\qmfdev
.exe" /RConnection:Connection1 /RDBUser:rdbuserID
/RDBPassword:rdbpassword
/IObject:DB2INST1.Procedure1 /IServer:DB2AIX /Run /IUserID:db2inst1
/IPassword:db2inst1
```

- オペレーティング・システムのコマンド行に下記のコマンドを入力します。このコマンドは、Connection1 という名前のリポジトリ接続の使用時にリポジトリ・ストレージのログインとパスワードが必要ない場合にパーソナル・リポジトリに接続し、ローカルに保管されている Procedure1.prc という名前の手順をデータ・ソース DB2AIX に対して実行します。データ・ソースへのアクセスには、ユーザー ID db2inst1 とパスワード db2inst1 を使用します。

```
"C:\Program Files\IBM\DB2 Query Management Facility\
```

```
QMF for Workstation\
```

```
qmfdev.exe"
/RConnection:Connection1 c:\Procedure1.prc /IServer:DB2AIX
/Run /IUserID:db2inst1 /IPassword:db2inst1
```

## コマンド行パラメーターのリスト

このリストは、各オペレーティング・システムのコマンド行パラメーターとパラメーターの機能の説明を一覧にしたものです。

各パラメーターの説明の中で、「オブジェクト」とは、照会、書式、プロシージャ、ビジュアル・ダッシュボード、またはビジュアル報告書を表します。

表 43. コマンド行パラメーター

パラメーター	説明
<i>ObjectName</i>	このパラメーターは、実行するオブジェクトがローカルまたはネットワーク・ファイルにある場合に使用します。絶対パス名を指定する必要があります。
<i>/IObject:"ObjectOwner"."ObjectName"</i>	このパラメーターは、実行するオブジェクトが QMF カタログにある場合に使用します。
<i>/RObject:pathtoobject</i>	このパラメーターは、実行するオブジェクトがリポジトリにある場合に使用します。オブジェクトへのパスを指定する必要があります。例えば、 rsbi:/workspaces/default/query12 は、default というリポジトリ・ワークスペースにある query12 という名前のオブジェクトを指し示します。リポジトリ内のオブジェクトへのパスはすべて、そのオブジェクトの「プロパティ」ウィンドウまたはビューにある「キー」プロパティで指定されます。「プロパティ」ウィンドウは、「ワークスペース」ビューでオブジェクトを右クリックして開きます。
<i>/RConnection:connectionname</i>	リポジトリへの接続に使用するリポジトリ接続の名前を指定します。
<i>/IServer:servername</i>	オブジェクトの実行の対象となるデータ・ソースを指定します。このパラメーターが指定されない場合は、最後に使用されたデータ・ソースにアクセスします。
<i>/Run</i>	開いている、または取り出されたオブジェクトを開始します。 注: 書式オブジェクトにデータ・ソースが関連付けられていない場合、 <i>/Run</i> パラメーターは無視されます。
<i>/IDisplay</i>	オブジェクトを表示します。 <i>/Run</i> または <i>/IDisplay</i> パラメーターが指定されていない場合は、 <i>/IDisplay</i> パラメーターが使用されます。
<i>/RUser:ruserid</i>	保護されたりリポジトリ (データベース・ベースのセキュリティが適用されたりリポジトリを除く) への接続に使用するユーザー ID を指定します。
<i>/RPassword:rpassword</i>	<i>/RUser</i> パラメーターで指定したユーザー ID に使用するパスワードを指定します。
<i>/RDBUser:rdbuserid</i>	共有リポジトリへの接続、およびリポジトリ・ストレージでのユーザーの認証に使用するユーザー ID を指定します。
<i>/RDBPassword:rdbpassword</i>	<i>/RDBUser</i> パラメーターで指定したユーザー ID に使用するパスワードを指定します。
<i>/IUserID:userID</i>	オブジェクトの実行対象となるデータ・ソースにアクセスするために使用するユーザー ID を指定します。
<i>/IPassword:password</i>	<i>/IUserID</i> パラメーターで指定したユーザー ID に使用するパスワードを指定します。

表 43. コマンド行パラメーター (続き)

パラメーター	説明
<i>/Batch</i>	コマンド行で指定されたオブジェクトの実行後に、 現行セッションを終了し、アプリケーションを閉じ ます。 注: このパラメーターを指定すると、すべての警告 メッセージとエラー・メッセージは出なくなりま す。
<i>"&amp;variablename=variablevalue"</i>	プロシージャまたは照会のグローバル変数値を定 義または更新します。複数の変数を定義できま す。 注: プロシージャに送られる変数名と値は二重引 用符 (" ") で囲み、先頭にアンパーサンド (&) がな ければなりません。
<i>ICatalogUserID:cataloguserid</i>	拡張 QMF カタログへのアクセスに使用するユーザ ー ID を指定します。
<i>ICatalogPassword:catalogpassword</i>	<i>/ICatalogUserID</i> パラメーターに関連付けられてい るユーザー・パスワード。

## コマンド・バーの使用

コマンド・バーを使用することにより、QMF for Workstation インターフェースから直接プロシージャ・コマンドを実行できます。

### このタスクについて

コマンド・バーからプロシージャ・コマンドを実行するには:

#### 手順

- 「コマンド・バーを表示」ツールバー・ボタンをクリックして、コマンド・バーを開きます。コマンド・バーが閉じている場合に、コマンド・バーが開きます。コマンド・バーが既に開いて表示されている場合は、このアイコンをクリックするとコマンド・バーが閉じます。「表示」 > 「コマンド・バー」を選択することで、コマンド・バーのオープンとクローズを切り替えることもできます。
- コマンド・バーの「コマンドの実行」フィールドに、実行するコマンドを入力します。フィールドにコマンドを入力するか、またはすでに使用されたコマンドのドロップダウン・リストからコマンドを選択することができます。以下のプロシージャ・コマンドが使用可能です。
  - BOTTOM
  - CONNECT
  - CONVERT
  - DISPLAY
  - ERASE
  - EXPORT
  - FORWARD
  - IMPORT
  - PRINT

- RESET GLOBAL
- RUN
- SAVE
- SET GLOBAL
- SHOW

3. 「データ・ソース」フィールドに、データ・ソースの名前を指定します。

---

## デフォルト印刷オプションの指定

QMF for Workstation では、使用可能なウィンドウの内容を印刷するときに使用されるページ設定オプションを指定する必要があります。

### このタスクについて

ウィンドウに照会結果が表示されている場合は、「照会結果ページ設定」ダイアログを使用します。使用可能なウィンドウに書式が表示される場合は、「書式ページ設定」ダイアログ・ボックスを使用します。

照会結果および標準の報告書の印刷ページの外観を制御するには:

### 手順

1. 「ファイル」 > 「ページ設定」を選択して「ページ設定」ダイアログ・ボックスを開きます。
2. オブジェクトに適用されるデフォルトの印刷オプションを指定します。
3. 「デフォルトとして設定」をクリックして、入力した設定値を保存します。新しい値がデフォルト値になります。
4. 「OK」をクリックして、「ページ設定」ダイアログ・ボックスを閉じます。印刷されるオブジェクトの外観を制御するために、指定したオプションが使用されます。

---

## リソース限界の表示

QMF リソース限界はデータ・ソース・アクセスとリソース使用量を制御します。

### このタスクについて

自分のユーザー ID にとって有効なリソース限界を表示できます。データ・ソースにアクセスするときにユーザー ID に有効なリソース限界を表示するには、データ・ソースに接続している必要があります。

ご使用のユーザー ID のリソース限界を表示するには:

### 手順

1. 「ビュー」 > 「リソース限界」を選択します。「[データ・ソース]: 限界」ウィンドウが開きます。「アクティブ・リソース限界」セクションの情報に、表示されている限界がデータ・ソース限界と照会限界のどちらであるのかが表示され、また、適用されるユーザーとリソース限界グループが表示されます。

2. 使用しているユーザー ID に設定されているアイドル照会、アイドル接続、およびサーバー応答時間の警告限界および取り消し限界を見るには、「タイムアウト」ページを選択します。
3. 現在の自分のユーザー ID を使用して取り出せる最大行数と最大データ・バイト数の警告限界と取り消し限界、および自分のユーザー ID のために QMF がデータベース・サーバーに対して確立できる最大同時接続数を見るには、「限界」ページを選択します。
4. 特定のスケジュールの有効時にユーザー ID に対して使用を許可されている SQL 動詞を見るには、「SQL 動詞」ページを選択します。
5. ユーザー ID にどのサーバーのアクセス・オプションが設定されているかを見るには、「オプション」ページを選択します。サーバー・アクセス・オプションには以下が含まれます: QMF ユーザー・インターフェースおよびプログラミング・インターフェースを使用するデータベース・アクセス。データベース更新確認。ユーザー照会の分離レベル。必須アカウント情報。全行の自動取り出し、データのエキスポート、表の編集、および保存済み照会のみの実行を行う機能。
6. データベースでのデータ保存が許可されているかを見るには、「データの保存」ページを選択します。
7. 照会の静的パッケージのバインドまたはドロップが許可されているかどうかを見るには、「バインディング」ページを選択します。
8. QMF オブジェクト・トラッキングがご使用のユーザー ID でアクティブになっているかどうかを見るには、「オブジェクト・トラッキング」ページを選択します。
9. ラージ・オブジェクト・データ (LOB) を含む表のデータへのアクセスおよび検索ができるかを見るには、「LOB オプション」ページを選択します。
10. 「キャッシュ」ページを選択して、ユーザーごとのキャッシング・オプションを制御します。
11. 「オブジェクト・リスト」ページを選択して、データ・ソース・オブジェクトのフィルター処理に使用されるデフォルト所有者名を定義します。
12. 「加速」ページを選択して、加速オプションを表示します。

注: 加速を有効にできるのは、IDAA をサポートする DB2 z/OS データベースに対してのみです。

13. 「OK」をクリックして「[ユーザー ID] のリソース限界」ウィンドウを閉じます。

## リソース限界について

リソース限界は、データ・ソースへのユーザーのアクセスを、ユーザーがデータ・ソースへのアクセスに使用するユーザー ID に基づいて管理するためのものです。

ユーザー ID は複数のリソース限界グループに属することができます。また、ユーザー ID は、複数のデータ・ソースに定義されている複数のリソース・グループに属することができます。所属するリソース限界グループはそれぞれ 1 つ以上のスケジュールを持つことができ、それぞれが異なるリソース限界を持っています。有効なスケジュールは、データ・ソースにアクセスするときにユーザー ID に対して有効なリソース限界の関連セットを指定します。



ほとんどのリソース限界は、照会がワークステーションを出る前に検査されます。これらのリソース限界のいずれかに違反した場合、その照会がターゲット・データベースで評価されることはありません。他のリソース限界は、ターゲット・データベースで照会の実行が開始された後に評価されます。この場合は、データベースの制限規則が QMF のリソース限界よりも優先されます。

ユーザーのリソース限界は、QMF 管理者によって設定されます。QMF を管理するユーザーのみが、リソース限界の値を変更できます。表示される情報はすべて読み取り専用です。

## タイムアウト・リソース限界の指定

「タイムアウト」リソース限界は、アイドル照会、アイドル接続、およびデータ・ソース応答時間の警告タイムアウト限界と取り消しタイムアウト限界を設定します。

「アイドル照会タイムアウト」および「サーバー応答タイムアウト」リソース限界は、データ・ソースと個々の照会の両方について設定できます。「アイドル接続タイムアウト」リソース限界はデータ・ソースについてのみ設定できます。個々の照会には設定できません。「タイムアウト」リソース限界は、以下のとおりです。

### アイドル照会タイムアウト

これらのフィールドは、照会がアイドル状態を維持できる時間を指定します。「警告限界」フィールドは、ユーザーに通知が出され、照会を取り消すかどうかの確認が行われるまでの、照会がアイドルの状態で見られる秒数を表示します。「取り消し限界」フィールドは、照会が自動的に取り消されるまでの、照会がアイドルの状態で見られる秒数を表示します。

### サーバー応答タイムアウト

これらのフィールドは、データベースからの応答の待機に費やすことができる時間を指定します。「警告限界」フィールドは、ユーザーに通知が出され、データベース要求を取り消すかどうかの確認が行われるまでの、経過時間 (秒単位) を指定します。「取り消し限界」フィールドは、データベース要求が自動的に取り消されるまでの経過時間 (秒単位) を指定します。

注: タイムアウト限界を短くすると、実行時間が長いランナウェイ照会を防止できます。タイムアウト限界を大きくすると、リソースの競合などが原因でデータベース・サーバーの処理が遅い場合でも、データベース要求を完了することができます。

### アイドル接続タイムアウト

このフィールドは、データベース・データ・ソースへのアイドル接続が保持される時間を指定します。「取り消し限界」フィールドは、アイドル接続が自動的に閉じられるまで保持される秒数を指定します。

注: タイムアウト限界を低くすると、アイドル接続によりデータベースで使用されるリソースが最小化されます。タイムアウト限界を高くすると、接続の確立に要するオーバーヘッドが最小化されます。

## 限界リソース限界の指定

「限界」リソース限界は、データベース・データ・ソースから取り出せる最大行数と最大データ・バイト数の警告限界と取り消し限界、およびデータ・ソースに対して確立できる最大同時接続数を設定します。

「限界」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。「限界」リソース限界は、以下のとおりです。

### 取り出す最大行数

これらのフィールドには、照会の実行時にデータベース・データ・ソースから検索できるデータの行数の限界を指定します。「警告限界」フィールドは、限界行数に達したことがユーザーに通知されるまでに、データ・ソースから検索できる行数を指定します。ユーザーには、データをさらに取り出すか照会を取り消すかを選択するようプロンプトが出されます。「取り消し限界」フィールドには、限界行数に達するまでに、データ・ソースから検索できる行数が表示されます。照会は自動的に取り消されます。

### 取り出す最大バイト数

これらのフィールドには、照会の実行時にデータベース・データ・ソースから検索できるデータのバイト数の限界を指定します。「警告限界」は、限界バイト数に達したことがユーザーに通知されるまでに、データ・ソースから検索できるバイト数を指定します。その後ユーザーには、データをさらに取り出すか照会を取り消すかを選択するようプロンプトが出されます。「取り消し限界」には、限界バイト数に達するまでに、データ・ソースから検索できるバイト数が表示されます。照会は自動的に取り消されます。

### 最大接続数

このフィールドは、データベース・データ・ソースに対して確立できる同時接続数の限界を指定します。「取り消し限界」は、次の接続を要求する照会が自動的に取り消されるまでに、データ・ソースに対して確立できる同時接続数を指定します。限界を 0 に設定すると、接続の限界数が設定されません。

一般に、データベース・データ・ソースへの接続は再利用されます。あるデータ・ソースで 1 つの照会を実行し、その後に同じデータ・ソースで別の照会を実行する場合、必要な接続は 1 つだけです。ただし、この 2 つの照会を同時に実行する場合は、2 つの接続が必要となります。データ・ソースとの別の接続を必要とする場合にこの限界に達すると、エラーが戻されて操作は実行されません。

注: 表の編集を可能にするには、2 つ以上の同時接続が許可されていることを指定する必要があります。

## SQL 動詞リソース限界の指定

「SQL 動詞」リソース限界は、現在のスケジュールが有効になっているときに使用できる SQL 動詞を指定します。

ユーザーが不許可動詞 が含まれた照会を実行しようとした場合は、データ・ソースに SQL が送信されずに、照会が取り消されます。「SQL 動詞」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。

以下の SQL 動詞の使用を制御できます。

- ACQUIRE
- ALTER
- CALL
- COMMENT
- CREATE
- DELETE
- DROP
- EXPLAIN
- GRANT
- INSERT
- LABEL
- LOCK
- REFRESH
- RENAME
- REVOKE
- SET
- SELECT
- UPDATE

## オプション・リソース限界の指定

「オプション」リソース限界は、データ・ソースとデータ・ソース・オブジェクトに対して持つアクセス・レベルを指定します。

「オプション」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。オプション・リソース限界は以下のとおりです。

ユーザー・インターフェースからデータ・ソースへアクセスを許可

このフィールドは、現在のリソース限界グループ・スケジュールが有効な場合に、QMF for Workstation ユーザー・インターフェースからデータ・ソースにアクセスする許可がユーザーにあるかどうかを指定します。

プログラミング・インターフェースからデータ・ソースへアクセスを許可

このフィールドは、現在のリソース限界グループ・スケジュールが有効な場合に、QMF for Workstation アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) からデータ・ソースにアクセスする許可がユーザーにあるかどうかを指定します。

すべての行を自動的に取り出す

このフィールドは、データ・ソースが照会結果データをアプリケーションに送信する方法を指定します。デフォルトでは、照会結果の表示の必要に応じて、データ・ソースからデータを要求します。例えば、照会結果ウィンドウが 20 行でいっぱいになる場合、データ・ソースには 20 行しか要求されません。ユーザーがスクロールダウンして 21 行目が表示されるようにすると、さらにデータが要求されます。ユーザーが照会を実行してからスクロールダウンするまで時間がある場合、その待ち時間の間も照会はアクティブの

ままであり、その間データ・ソースのリソースを消費していることとなります。このパラメーターを使用可能にすると、ユーザーのスクロール要求に関係なく、すべてのデータが受信されるまで繰り返しデータが要求されます。

#### データベース更新を確認

このフィールドは、実行した照会や表の編集時のアクションの結果として生じたデータ・ソースの変更をすべて確認する必要があるかどうかを指定します。このチェック・ボックスを選択した場合は、データ・ソースが変更される前に、確認のプロンプトが出されます。このチェック・ボックスをクリアすると、確認なしでデータ・ソースの変更が行われます。

プロシージャー・コマンドに確認パラメーターを使用することで、このリソース限界設定をオーバーライドできます。以下の表は、指定された値に応じたパラメーターの相関を示しています。

「データベース更新を確認」の値	プロシージャーのパラメーター値	確認ダイアログの動作
選択	CONFIRM=YES	表示
選択	CONFIRM=NO	表示されない
選択	未指定	表示
クリア	CONFIRM=YES	表示
クリア	CONFIRM=NO	表示されない
クリア	未指定	表示されない

#### データのエクспортを可能にする

このフィールドは、「ファイル」メニューの「エクспорт」コマンド、または「**EXPORT DATA**」プロシージャー・コマンドを使用して、ユーザーが照会結果データをファイルにエクспортできるかどうかを指定します。

#### 表の編集を可能にする

このフィールドは、表エディター・フィーチャーを使用して表を編集できるかどうかを指定します。

#### 保存済みの照会のみ実行を許可

このフィールドは、新しい照会を作成してデータベース・データ・ソースに保存できるかどうかを指定します。チェック・マークを付けた場合は、データベース・データ・ソースに保存済みの照会のみ実行できます。クリアされている場合は、データベース・データ・ソースにある照会を実行できるだけでなく、新しい照会を作成してデータベース・データ・ソースに保存することもできます。

#### 照会の分離レベル

「照会の分離レベル」パラメーターは、トランザクションをサポートするデータベースにのみ適用されます。

このフィールドは、ユーザーの照会に適用される、トランザクションの分離レベルを指定します。さまざまな分離レベルがあり、レベルごとにデータベースでのトランザクション処理に与える影響の度合いが異なります。

データベース管理者に問い合わせるか、データベース・サーバーの資料を参照し、使用中のデータベース・サーバーがトランザクション処理をサポートするように構成されているかどうかを判別してください。

有効な値は以下のとおりです。

- 「デフォルト」は、照会の分離レベルがすべてのアプリケーションに指定されるデフォルトになることを指定します。
- 「反復可能読み取り」は、照会の分離レベルが「反復可能読み取り (RR)」になることを指定します。RR 分離レベルは、他のアプリケーションから最も強固に保護します。
- 「すべて (RS)」は、照会の分離レベルが「読み取り固定 (RS)」になることを指定します。
- 「カーソル固定 (CS)」は、照会の分離レベルが「カーソル固定 (CS)」になることを指定します。CS 分離レベルは、データ保全性と共に最大の並行性を提供します。
- 「変更 (UR)」は、照会の分離レベルが「非コミット読み取り (UR)」になることを指定します。これは、アプリケーションが非コミット・データを読み取ることを可能にします。
- 「コミットしない (NC)」は、照会の分離レベルが「コミットしない (NC)」になることを指定します。分離レベル NC で実行されるアプリケーションは、データベースの永続的な変更を行うことはできません。

#### アカウント

このフィールドは、データ・ソースに接続するときそのデータ・ソースに送信されるデフォルトのアカウント情報を指定します。

#### アカウントをオーバーライド可能にする

このフィールドは、「アカウント」フィールドで指定されたデフォルトのアカウント情報、データ・ソースに接続するときオーバーライドできるかどうかを指定します。これを選択した場合は、「ユーザー情報の設定」ウィンドウを使用して、新しいアカウント・ストリングを入力できます。これがクリアされていると、新しいアカウント情報を入力できません。そのため、自分のリソース限界グループが所有していないデータ・ソース・オブジェクトにアクセスできない場合があります。

#### アカウント情報の要求

このフィールドは、このスケジュールが有効な場合、データベースに接続する前に、「ユーザー情報の設定」ウィンドウに有効なアカウント・ストリングを指定しなければならないかどうかを指定します。

#### 印刷を許可

データ・ソースに保管されているオブジェクトを印刷するためには、このチェック・ボックスを選択する必要があります。

## データの保存リソース限界の指定

「データの保存」リソース限界では、現在のリソース限界グループのメンバーであり、かつ現在のスケジュールを使用しているユーザーが、データベース・データ・ソースでデータを保管できるかどうかを指定します。

「データの保存」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。「データの保存」リソース限界は、以下のとおりです。

#### データの保存コマンドを許可

このフィールドは、データベース・データ・ソースにデータを保存できるか

どうかを指定します。データの保存は、リソースをかなり消費する可能性があります。そのため、データの保存によって、データベースやネットワークに重大な影響を与えるおそれがあります。

#### デフォルト表スペース

このフィールドは、データの保存コマンドで作成される表に使用されるデフォルトの表スペース名を指定します。このフィールドは、「データの保存コマンドを許可」が選択されている場合のみ使用可能です。指定する表スペース名の構文は、表スペース名に関するデータベース規則に従わなければなりません。指定した値は、データを新しい表に保存するときの実行される CREATE TABLE SQL ステートメントの一部として使用されます。アスタリスク (\*) を入力すると、省略時表スペースの取得が、ユーザーのプロファイルが作成されたときに管理者によって指定された RDBI.PROFILE\_TABLE または Q.PROFILES にある同プロファイルから行われることを指定します。

#### デフォルト表スペースをオーバーライド可能にする

このフィールドは、デフォルトの表スペースをオーバーライドできるかどうかを指定します。これを選択した場合は、データベース・セキュリティ権限に従って表スペース名を指定できます。このチェック・ボックスを選択しない場合は、「デフォルト表スペース」フィールドで指定した表スペース名を使用する必要があります。

#### 既存のデータを置換できるようにする

このフィールドは、オブジェクトがデータベースとの間でエクスポートまたはインポートされたときに、ユーザーが既存データをオーバーライドできるかどうかを指定します。このオプションが選択されている場合、ユーザーはデータベース内の既存データを新規データで置換できます。このチェック・ボックスにマークが付いていない場合、ユーザーは新規データを既存データに追加することのみが可能です。

## バインド・リソース限界の指定

「バインド」リソース限界は、このリソース限界グループのメンバーであってこのスケジュールを使用するユーザーが、照会の静的パッケージをデータ・ソースにバインドしたり、データ・ソースから除去したりできるかどうかを指定します。

「バインド」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。「バインド」リソース限界は、以下のとおりです。

#### パッケージのバインドを許可

このフィールドは、データベース・データ・ソースに照会の静的パッケージをバインドできるかどうかを指定します。

#### パッケージの除去を許可

このフィールドは、データベース・データ・ソースから静的パッケージを除去できるかどうかを指定します。

#### デフォルト集合 ID

このフィールドは、バインドする静的パッケージのデフォルト集合 ID を指定します。

#### デフォルト集合 ID をオーバーライド可能にする

このフィールドは、デフォルト集合 ID を使用しなければならないかどうか

を指定します。このチェック・ボックスが選択された場合は、データベース・セキュリティ権限に従って集合 ID を指定できます。このチェック・ボックスがクリアされている場合は、「デフォルト集合 ID」フィールドで指定されたデフォルトの集合 ID を使用する必要があります。

#### デフォルト分離レベル

このフィールドは、バインドする静的パッケージのデフォルトの分離レベルを指定します。以下の分離レベルのいずれか 1 つを選択できます。

- 「反復可能読み取り」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「反復可能読み取り (RR)」になることを指定します。RR 分離レベルは、リクエスターが読み取りおよび変更する行 (幻像読み取り行を含む) に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントを分離します。RR 分離は、最も高い保護レベルを提供します。
- 「すべて (RS)」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「読み取り固定 (RS)」になることを指定します。RS 分離レベルは、リクエスターが読み取りおよび変更する行に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントを分離します。
- 「カーソル固定 (CS)」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「カーソル固定 (CS)」になることを指定します。CS 分離レベルは、リクエスターが行う変更に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントおよびデータベース・カーソルが位置付けられている現在行を分離します。
- 「変更 (UR)」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「非コミット読み取り (UR)」になることを指定します。UR 分離レベルは、リクエスターが行う変更に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントを分離します。
- 「コミットしない (NC)」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「コミットしない (NC)」になることを指定します。NC 分離レベルは、リクエスターが行う変更に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントを分離しません。

#### デフォルト分離レベルをオーバーライド可能にする

このフィールドは、「デフォルト分離レベル」フィールドに指定した分離レベルをオーバーライドできるかどうかを指定します。このチェック・ボックスが選択された場合は、パッケージのバインド時に任意の分離レベルを指定できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合は、「デフォルト分離レベル」フィールドで指定されたデフォルトの分離レベルを使用して静的パッケージをバインドする必要があります。

## オブジェクト・トラッキング・リソース限界の指定

「オブジェクト・トラッキング」リソース限界は、自分のユーザー ID についてオブジェクト・トラッキングをアクティブにするかどうかを指定します。

オブジェクト・トラッキング報告書の作成に使用されるトラッキング・データを収集するためには、オブジェクト・トラッキングを使用可能にする必要があります。オブジェクト・トラッキング報告書は、未使用オブジェクトを検索したり、表や列などの頻繁にアクセスされるデータ・ソースを検索したり、潜在的な問題点を発見

したりするのに役立ちます。「オブジェクト・トラッキング」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。

オブジェクト・トラッキング・リソース限界は以下のとおりです。

要約オブジェクト・トラッキングを使用可能にする

このフィールドは、自分のリソース限界グループについて要約オブジェクト・トラッキングをアクティブにするかどうかを指定します。要約トラッキングは、オブジェクトの実行回数と、オブジェクトが最後に実行された時刻および変更された時刻を記録します。

明細オブジェクト・トラッキングを使用可能にする

このフィールドは、自分のリソース限界グループについて明細オブジェクト・トラッキングをアクティブにするかどうかを指定します。明細トラッキングは、オブジェクトが実行された時刻、オブジェクトの実行者、およびその結果を記録します。このオプションを選択した場合は、大量のデータが収集される可能性があります。

注: 随時 オブジェクト・トラッキングや SQL テキストのトレースを使用するには、このオプションを使用可能にする必要があります。

随時オブジェクト・トラッキングを使用可能にする

このフィールドは、各随時照会のレコードを、要約または明細オブジェクト・トラッキング表に保持するかどうかを指定します。随時照会とは、データベース・データ・ソースで名前が付いていないまたは保存されていない照会です。

注: このオプションを有効にするためには、「明細オブジェクト・トラッキングを使用可能にする」オプションを有効にする必要があります。

SQL テキスト・トラッキングを使用可能にする

このフィールドは、各照会の SQL テキストのレコードを明細トラッキング表に保持するかどうかを指定します。

注: このオプションを有効にするためには、「明細オブジェクト・トラッキングを使用可能にする」オプションを有効にする必要があります。

最終使用タイム・スタンプ・オプション

このフィールドは、データ・オブジェクトがいつ更新されるのか、およびどのコマンドにより更新されるのかを指定します。

注: オブジェクトが QMF カタログに保存される場合、データは表 **Q.OBJECT\_DIRECTORY** の列 **LAST\_USED** に保持されます。オブジェクトがリポジトリに保存される場合は、データは表 **RSBI.OBJECTS** の列 **LAST\_USED** に保持されます。

使用可能なオプションは次のとおりです。

- オブジェクトがアクセスされたときに更新 (レガシー・モード)

オブジェクトに対して以下のいずれかのコマンドを実行したときにデータは更新されます。

- **CONVERT**
- **DISPLAY**



- EXPORT
- IMPORT
- PRINT
- RUN
- SAVE

- オブジェクトが実行、保管、またはインポートされたときに更新

**RUN**、**SAVE**、または **IMPORT** コマンドの実行後にデータは更新されます。

- オブジェクトが実行されたときにのみ更新

**RUN** コマンドの実行後にのみデータは更新されます。

最終使用タイム・スタンプ・オプションを上書きできる

DSQEC\_LAST\_RUN 変数値が無視されるかどうかを示します。

デフォルトでは、このチェック・ボックスはクリアされています。

変数値を変更してリソース限界をオーバーライドする場合は、このチェック・ボックスを選択します。

## LOB オプション・リソース限界の指定

「**LOB** オプション」リソース限界では、ラージ・オブジェクト (LOB) が含まれる表へのアクセス、これらの表からのデータ検索、およびこれらの表へのデータ保存について、ユーザーが行える操作を制御します。

ラージ・オブジェクト (LOB) とは、DB2 for z/OS および DB2 for Linux, UNIX, and Windows のデータ・タイプであり、テキスト、マルチメディア、画像、ビデオ、写真、音声といった特殊なデータ、または任意の大規模データ・ファイルをデータベース表内に格納するためのデータ・タイプです。LOB データを検索または保存する際には、大量のリソースが消費されることがあります。場合によっては、LOB データが含まれた表にアクセスするだけでも、多くのリソースが消費されます。「**LOB** オプション」リソース限界を使用して、データベース・データ・ソース上の LOB データが含まれる表へのアクセスを制御できます。「**LOB** オプション」リソース限界は、データ・ソースと個々の照会の両方に適用できます。

「**LOB** オプション」リソース限界は、以下のとおりです。

### LOB 検索オプション

このフィールドは、このスケジュールが有効な場合に、ラージ・オブジェクト (LOB) データをユーザーが検索できるかどうかを指定します。以下のいずれかを選択できます。

- 「**LOB** 列を使用不可にする」は、ユーザーは LOB データを検索できないこと、および LOB データが含まれる表に対して照会もアクセスもできないことを指定します。
- 「**LOB** データの検索を不可にする」は、ユーザーは LOB データを検索できないが、LOB データが含まれる表を照会できることを指定します。照会結果データは、LOB データが含まれる列以外の、表のすべての列について戻されます。

- 「要求時に **LOB** データを検索する」は、LOB データが含まれている表をユーザーが照会でき、LOB オブジェクトが含まれている列を含むすべての列に対する結果データが戻されることを指定します。ただし、LOB 列の結果データは、実際に列には表示されません。ポインターが表示されます。ユーザーがポインターを選択すると、照会結果に LOB データが表示されます。

ポインターをダブルクリックすることにより、データベースからデータをプルすることもできます。

- 「**LOB** データを自動的に検索する」は、LOB データが含まれている表をユーザーが照会でき、LOB オブジェクトが含まれている列を含むすべての列に対する結果データが戻されることを指定します。

このオプションは、すべての LOB 列のすべての LOB データをデータベースからローカル・コンピュータにプルします。

このオプションを使用すると、大量のリソースと時間を消費する可能性があります。実際の LOB データは、グリッドや報告書には表示されません。代わりに、LOB データへのポインターが表示されます。

#### **LOB** データの保存を可能にする

このフィールドは、LOB データをデータベース・データ・ソースに保存できるかどうかを指定します。

#### **LOB** 列の最大サイズ

このフィールドには、LOB 列の最大サイズ (KB 単位) を指定します。2G (最大 LOB サイズ) まで指定できます。デフォルトは 0 (最大サイズ無し) です。最大サイズを超える LOB データがある表をユーザーが照会すると、LOB データは戻されません (表示されません)。

#### **LOB** オプションをオーバーライド可能にする

このフィールドは、ユーザーがグループに対して指定されているデフォルトの LOB オプション・リソース限界をオーバーライドできるかどうかを指定します。

## レポート・センター・リソース限界の指定

「[データ・ソース]: 限界」ウィンドウの「レポート・センター」ページで、リソース限界グループのメンバーに許可されている QMF レポート・センター機能のレベルを表示することができます。

QMF レポート・センターで、データベース・サーバーに保管されている共有の照会、書式、プロシーチャー、および表を使用して、カスタム報告書を生成することができます。その後、そのカスタム報告書を各種アプリケーションで表示および操作することができます。

「レポート・センター」リソース限界は以下のとおりです。

#### すべてのオブジェクト・タイプの表示を許可

このオプションは、このリソース限界グループのメンバーが QMF レポート・センター報告書に使用されるオブジェクトにアクセスすることを許可されているかどうかを示します。

QMF レポート・センターのアプリケーションの使用または報告書の実行に、特別な許可は必要ありません。ただし、新しい報告を作成するには、保管オブジェクトにアクセスする必要があります。一部のユーザーは、これらのオブジェクトにアクセスするための権限を持っていない場合があります。このオプションを YES に設定すると、このリソース限界グループのメンバーは、データベース・サーバーに保管されているオブジェクトにアクセスして、新しい報告書を作成することを許可されます。

注: デフォルトでは、「すべてのオブジェクト・タイプの表示を許可」オプションが YES に設定されています。

#### ルート・ノードの管理を許可

このオプションは、このリソース限界グループのメンバーが QMF レポート・センターのアプリケーションで使用されるルート・フォルダーの「共通のお気に入り」にフォルダーを追加することを許可されているかどうかを示します。「共通のお気に入り」フォルダーは、データベース・サーバーに保管されています。

QMF レポート・センターは、「個人用お気に入り」と「共通のお気に入り」の 2 つの最上位フォルダーを使用してユーザーの報告書を保管します。各フォルダーには、データベース・サーバーにあるオブジェクトを指す報告書が含まれています。オブジェクトは、フォルダー内には含まれていません。

個人のお気に入り フォルダーは、ユーザーのマシン上にローカルに存在します。このフォルダーとそれに含まれている報告書には、作成者であるユーザーしかアクセスできません。

「共通のお気に入り」フォルダーは、データベース・サーバー上にあります。このフォルダーには、QMF レポート・センターのすべてのユーザーが(潜在的に) アクセスできます。ただし、第 1 レベルのサブフォルダーを「共通のお気に入り」フォルダーに追加するには、許可が必要です。このオプションは、それを行う許可を、このリソース限界グループのメンバーに与えます。

第 1 レベルのサブフォルダーを作成する許可を与えられた場合には、リソース限界グループのメンバーは、QMF レポート・センターの機密保護オプションを使用して、フォルダー内にある報告書を実行または修正できるユーザーを制御することができます。「共通のお気に入り」フォルダーは、最大 50 の第 1 レベルのサブフォルダーを保持できます。

注: デフォルトでは、「ルート・ノードの管理を許可」オプションは NO に設定されています。

#### ノードの所有権の取得を許可

このオプションは、このリソース限界グループのすべてのメンバーが「共通のお気に入り」フォルダー内のフォルダーまたは報告書の所有権を取得する権限を持っているかどうかを示します。

このオプションが YES に設定されている場合、ユーザーは、QMF レポート・センターの機密保護に基づくアクセス権が付与されているかどうかに関係なく、「共通のお気に入り」フォルダー内の任意の報告書またはフォルダーにアクセスできます。

注: デフォルトでは、「ノードの所有権の取得を許可」オプションは NO に設定されています。

## キャッシュ・リソース限界の指定

「キャッシュ」リソース限界が、照会結果のキャッシングを制御します。

このリソース限界を有効にすると、照会の実行時に結果がキャッシュされます。照会を再実行する場合、変更された点がなければ、結果はキャッシュされている結果から取り出され、データ・ソースでその照会の再実行は行われません。「キャッシュ」リソース限界は、データ・ソースと個々の照会の両方に適用できます。

「キャッシュ」リソース限界は、以下のとおりです。

### キャッシュが使用可能

このフィールドは、結果セット・データのキャッシングを使用可能にするかどうかを指定します。デフォルトでは、キャッシングは使用不可に設定されています。キャッシングを使用可能にすると、照会の結果データがキャッシュに入れられ (保管され)、データ・ソースのこのデータにアクセスする同じ特権を持った他のユーザーがキャッシュ内の照会結果を使用できるようになります。結果セット・データのキャッシングは、リソース消費の軽減やパフォーマンスの向上にかなり効果がある場合があります。キャッシュ内の結果セット・データは、自動的にリフレッシュされません。

### データの自動取り出しが使用可能

このフィールドは、キャッシュされたデータ行を取り出す方法を指定します。このリソース限界は、「キャッシュが使用可能」が選択されている場合に使用可能になります。このオプションを選択すると、キャッシュから照会結果セットが取り出される場合に、結果セット全体が渡されるようになります。このオプションを選択しない場合は、照会結果セットの 100 行 (デフォルト) が渡されます。

### データ期限切れ間隔

このフィールドは、照会結果セット・データをキャッシュに残しておく期間を指定します。期間は、日数、時間数、および分数を指定することにより設定できます。この期間を過ぎると、キャッシュされた照会結果セット・データは更新されます。

### キャッシュ・オプションを上書きできる

このフィールドは、キャッシュ・オプションをオーバーライド可能にするかどうかを指定します。

## オブジェクト・リスト・リソース限界の指定

「オブジェクト・リスト」リソース限界は、データ・ソースのデフォルトの所有者名および許可された所有者名を指定します。

「オブジェクト・リスト」リソース限界を使用して、データ・ソース・オブジェクトのフィルター処理に使用するデフォルトの所有者名を定義できます。デフォルト名他に、データ・ソース・オブジェクトのフィルター処理に使用できる所有者名の特定のリストを指定することもできます。

「オブジェクト・リスト」リソース限界は以下のとおりです。

#### デフォルト所有者名

このフィールドは、データ・ソース・オブジェクト・リストのフィルター処理に使用するデフォルトの所有者名を指定します。

#### デフォルト所有者名を上書きできます

このチェック・ボックスにより、ユーザーは現在のデフォルトの所有者名をオーバーライドできるようになります。

#### 許可された所有者の名前

このフィールドは、データ・ソース・オブジェクト・リストのフィルター処理に使用できる追加の所有者名のリストを指定します。所有者名は、コンマで区切る必要があります。

#### <USERNAME> を許可

このチェック・ボックスにより、現行ユーザーの所有者名を、データ・ソース・オブジェクト・リストのフィルター処理に使用できるようになります。

#### <SQLID> を許可

このチェック・ボックスにより、現行ユーザーの SQLID を、データ・ソース・オブジェクト・リストのフィルター処理に使用できるようになります。

## 加速リソース限界の指定

「加速」リソース限界により照会加速が制御されます。

このリソース限界が有効になっているときは、現在使用しているデータベースに関連付けられているアクセラレーター・サーバーにデータを保存したり、加速された照会を実行したりできます。このリソース限界が無効になっているときは、加速された照会を実行できません。

「加速」ページには以下の設定が含まれています。

#### 加速を有効にする

このチェック・ボックスは、加速を有効にするかどうかを指定します。加速を有効にできるのは、IDAA をサポートする DB2 z/OS データベースに対してのみです。

#### 加速タイプ

このフィールドは、照会がデータベースで実行されるのかアクセラレーターで実行されるのかを決定する条件を指定します。使用可能なオプションは次のとおりです。

オプション	説明
NONE	これは、アクセラレーター・サーバーに照会が送信されないように指定します。
ENABLE	これは、照会を加速することが好都合であるとデータベースで判断された場合に限り照会が加速されるように指定します。照会の実行中にアクセラレーターが失敗する場合、またはアクセラレーターからエラーが返される場合は、データベースからアプリケーションに負の SQLCODE が返されます。

オプション	説明
ENABLE WITH FAILBACK	これは、照会を加速することが好都合であるとデータベースで判断された場合に限り照会が加速されるように指定します。照会の PREPARE コマンドまたは初回 OPEN コマンドでアクセラレーターからエラーが返される場合、データベースではアクセラレーターなしで照会が実行されます。 FETCH コマンドまたは後続の OPEN コマンドでアクセラレーターからエラーが返される場合は、データベースからユーザーにエラーが返され、照会は実行されません。
ELIGIBLE	これは、照会が加速に適格である場合に照会が加速されるように指定します。加速に不適格な照会はデータベースで実行されます。照会を実行中にアクセラレーターで障害が発生した場合、またはアクセラレーターがエラーを返した場合、データベースはアプリケーションに負の SQLCODE を返します。
ALL	これは、照会が加速に適格である場合に照会が加速されるように指定します。加速に不適格な照会はデータベースで実行されず、SQL エラーが返されます。照会を実行中にアクセラレーターで障害が発生した場合、またはアクセラレーターがエラーを返した場合、データベースはアプリケーションに負の SQLCODE を返します。

加速オプションをオーバーライドできる

このチェック・ボックスは、加速オプションをオーバーライドできるかどうかを指定します。

---

## 付録 A. アクセシビリティ

ソフトウェアのアクセシビリティ機能は、運動障害や視覚障害など身体に障害を持つユーザーがコンピューターを快適に使用できるようにサポートします。

注: QMF for Workstation アプリケーションは、最良のアクセシビリティ機能を提供します。身体に障害をお持ちで、QMF のアクセシビリティ機能を使用する必要があるユーザーは、QMF for WebSphere の代わりに QMF for Workstation をインストールして実行する必要があります。

---

### QMF for Workstation での標準キーボード・ナビゲーション

キー割り当てとは、マウスの代わりにキーボードを使用して、マウスと同じ操作を実行するための機能のことです。

キーボードは、マウスの代わりとして最もよく使用される操作手段です。QMF は、以下の標準キー割り当てをサポートしています。

- プルダウン・メニューのうち頻繁に使用される機能を、メニューにアクセスせずに実行するためのショートカット (アクセラレーター・キー)。例えば、次のようになります。
  - **Ctrl+S** (保存)
  - **Ctrl+P** (印刷)
  - **Ctrl+R** (照会の実行)

各ショートカットは、プルダウン・メニュー内の対応する操作の横に表示されています。

- メニューまたはウィンドウの各機能の実行にニーモニック (アクセス・キー) を使用できます。機能のニーモニックは、その機能の名前に含まれる下線付き文字です。例えば、次のようになります。
  - **F** を押して「ファイル」メニューを開く。
  - **O** を押して「開く」ウィンドウを開く。

**Alt** キーを使用してニーモニックを有効にし、**Tab** キーでキーボード・フォーカスを移動します。

詳しくは、ご使用のオペレーティング・システムの資料で、標準キー割り当ての完全なリストを参照してください。

---

### 標準キーボード・ナビゲーション

「キーボード・ナビゲーション」とは、マウスの代わりにキーを使用して画面上のアイテム間を移動することです。

この移動は、一般にオペレーティング・システムまたはアプリケーションで指定された順序に従って行われます。QMF アプリケーションでは、コントロール間を移

動するための **TAB** キーと **SHIFT+TAB** キーや、アイテム間を上下左右に移動するための矢印キーなど、キーボード・ナビゲーションで一般的に使用されるキーがサポートされています。

---

## オペレーティング・システムのアクセシビリティ

ほとんどのオペレーティング・システムには、身体に障害を持つユーザーがシステム全体に適用される設定をカスタマイズできる、一連のアクセシビリティ・オプションが用意されています。

QMF アプリケーションは、次の特徴を備えています。

- オペレーティング・システムの設定内容がそのまま使用される
- オペレーティング・システムに組み込まれているキーボード・アクセシビリティ機能に影響を与えない

---

## 支援技術製品

QMF アプリケーションは、スクリーン・リーダーや音声合成装置などのアクセシビリティ・テクノロジー製品をサポートしています。

各 QMF アプリケーション・インターフェースでは、照会結果にスクリーン・リーダーを使用するには、特別なナビゲーションを行う必要があります。詳しくは、『QMF for Workstation でのナビゲーション』または 619 ページの『QMF for WebSphere でのナビゲーション』を参照してください。

---

## QMF for Workstation でのナビゲーション

以下の表は、キー・ストロークを使用してさまざまなタスクを実現する方法を示しています。

目的:	手順:
メニューのニーモニックを活動化する	<b>Alt</b> キーを押します。各メニューのニーモニックがアクティブになります。
オンライン・ヘルプを表示する	<b>F1</b> キーを押して特定のヘルプ・タスクを開くか、 <b>Alt+H</b> キーを押して「ヘルプ」メニューを開きます。メニュー選択項目間を移動するには、矢印キーを使用します。 <b>Enter</b> キーを押すとメニュー・コマンドが開きます。
キーボード・ショートカットを表示する	<b>Ctrl+Shift+L</b> キーを押します。
「照会のドロー」ウィザードを表示する	<b>Ctrl+D</b> キーを押します。
開いている QMF オブジェクトのエディターのスイッチ・リストを表示し、エディターを切り替える	スイッチ・リスト内を順方向に移動するには <b>Ctrl+F6</b> キーを押し、逆方向に移動するには <b>Ctrl+Shift+F6</b> キーを押します。



目的:	手順:
開いている QMF オブジェクトのタブを左から右へ切り替える	<b>Ctrl+Page Up</b> キーを押します。
開いている QMF オブジェクトのタブを右から左へ切り替える	<b>Ctrl+Page Down</b> キーを押します。
エレメント間でフォーカスを移動する	次のアイテムに移動するには <b>Tab</b> キーを押して、前のアイテムに移動するには <b>Shift+Tab</b> キーを押します。
リンクのクリックをエミュレートする	<b>TAB</b> キーを使用してリンク間を移動した後、 <b>Enter</b> キーを押すとリンクが開きます。
ボタンのクリックをエミュレートする	<b>TAB</b> キーを使用してボタン間を移動した後、 <b>Space</b> キーを押すとボタンがアクティブになります。
ウィンドウ内で、デフォルト・アクションをアクティブにする	<b>Enter</b> キーを押します。
ウィンドウ内でアクションを取り消す	<b>Esc</b> キーを押します。
ビュー間で左から右へ切り替える	<b>Ctrl+F7</b> キーを押します。
ビュー間で右から左へ切り替える	<b>Ctrl+Shift+F7</b> キーを押します。
パースペクティブ間で左から右へ切り替える	<b>Ctrl+F8</b> キーを押します。
パースペクティブ間で右から左へ切り替える	<b>Ctrl+Shift+F8</b> キーを押します。
アクティブ・エディター内のタブを左から右へ切り替える	<b>Alt+Page Up</b> キーを押します。
アクティブ・エディター内のタブを右から左へ切り替える	<b>Alt+Page Down</b> キーを押します。
コマンド・バーを活動化する	<b>Ctrl+Shift+C</b> キーを押します。

目的:	手順:
<p>照会結果にスクリーン・リーダーを使用する</p> <p>または</p> <p>ブラウザを使用して、視覚障害者向けに照会結果をハイコントラスト・モードで表示する</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 照会を実行します。</li> <li>2. <b>Alt+R</b> キーを押して「結果」メニューを開きます。</li> <li>3. 「エクスポート」を選択して「照会結果のエクスポート」ウィザードを開きます。</li> <li>4. <b>Tab</b> キーを使用してコントロール間を移動します。コントロール内の選択項目間を移動するには、矢印キーを使用します。「エクスポート・タイプ」リストから「<b>HTML</b>」を選択します。「ファイル名」フィールドに、ファイルを保存する場所を指定します。</li> <li>5. 「完了」を押します。</li> <li>6. この *.htm ファイルをブラウザで開きます。</li> </ol> <p>または</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 照会を実行します。</li> <li>2. <b>Alt+R</b> キーを押して「結果」メニューを開きます。</li> <li>3. 「エクスポート」を選択して「照会結果のエクスポート」ウィザードを開きます。</li> <li>4. <b>Tab</b> キーを使用してコントロール間を移動します。コントロール内の選択項目間を移動するには、矢印キーを使用します。「エクスポート・タイプ」リストから「<b>CSV</b>」を選択します。「ファイル名」フィールドに、ファイルを保存する場所を指定します。</li> <li>5. 「完了」を押します。</li> <li>6. この *.csv ファイルを Microsoft Excel などのサポート・ソフトウェアで開きます。</li> </ol>
<p>オブジェクトまたは条件を追加する</p>	<p><b>TAB</b> キーを使用して照会ビルダー・エディターのセクションを切り替え、スペース・バーを使用してセクションを展開します。</p>
<p>複数のオブジェクトを選択する</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>Tab</b> キーを使ってリスト・ボックスに移動します。</li> <li>2. <b>Shift+</b> 矢印キーを押して、連続した行を追加選択します。</li> <li>3. <b>Shift+Enter</b> キーを押してオブジェクトを追加します。</li> </ol>
<p>リスト・ボックス内の行を編集する (編集可能な行のみ)</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>Tab</b> キーを使用して「グローバル変数」ウィンドウなどのリスト・ボックスにフォーカスを移動します。</li> <li>2. スペース・バーを押すか上矢印キーと下矢印キーを使用して行を選択します。</li> <li>3. <b>F2</b> キーを押して編集モードを開始します。</li> <li>4. <b>Tab</b> キーを使用して列と行の間を移動します。</li> <li>5. <b>Enter</b> キーを押して編集内容を確定します。</li> <li>6. <b>Tab</b> キーを押して、リスト・ボックスからダイアログ内の次のコントロールにフォーカスを移動します。</li> </ol>

目的:	手順:
照会結果を編集する	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「ワークスペース」ビューまたは「リポジトリ・エクスプローラー」ビューが強調表示されるまで <b>Ctrl+F7</b> キーまたは <b>Ctrl+Shift+F7</b> キーを押します。</li> <li>2. 下矢印キーまたは上矢印キーを使用して、表が入っているフォルダーを選択します。</li> <li>3. フォルダーを展開するには右矢印キー、フォルダーを省略するには左矢印キーを使用します。</li> <li>4. 矢印キーを使用して、編集する表を表示して選択します。</li> <li>5. メニュー・キー (右側の <b>Ctrl</b> キーの左にあるキー) を押します。</li> <li>6. 「開く」のニーモニック・キー (<b>h</b> キー) を押します。</li> <li>7. 下矢印キーを使用して「表エディター」を強調表示します。</li> <li>8. <b>ENTER</b> キーを押します。表が表エディターで表示されます。</li> </ol>
照会結果のフォントを変更する	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 照会を実行します。</li> <li>2. <b>Alt+A</b> キーを押してすべてを選択します。</li> <li>3. <b>Alt+R</b> キーを押して「結果」メニューを開きます。</li> <li>4. <b>F</b> キーを押して「フォント」ウィンドウを開きます。</li> </ol>

## QMF for WebSphere でのナビゲーション

以下の表は、キー・ストロークを使用してさまざまなタスクを実現する方法を示しています。

目的:	手順:
エレメント間でフォーカスを移動する	次のアイテムに移動するには <b>Tab</b> キーを押して、前のアイテムに移動するには <b>Shift+Tab</b> キーを押します。
リンクのクリックをエミュレートする	<b>TAB</b> キーを使用してリンク間を移動した後、 <b>Enter</b> キーを押すとリンクが開きます。
ボタンのクリックをエミュレートする	<b>TAB</b> キーを使用してボタン間を移動した後、 <b>Space</b> キーを押すとボタンがアクティブになります。
ダイアログ内で、デフォルト・アクションをアクティブにする	<b>Enter</b> キーを押します。
ダイアログ内で、アクションを取り消す	<b>Esc</b> キーを押します。
コマンド行にフォーカスを移動する	<b>ALT+C</b> キーを押します。
メインメニューにフォーカスを移動する	左側の <b>Alt</b> キーを押します。メニュー・コマンドをナビゲートするには、矢印キーを使用します。
コンテキスト・メニューを開く	拡張キーボードを使用している場合は、ポップアップ・メニュー・キーを押します。右の <b>Ctrl</b> キーを押します。メニュー・コマンドをナビゲートするには、矢印キーを使用します。

目的:	手順:
最上位メニューをアクティブにする	<b>Shift+Ctrl+1</b> キーを押します (あるいは、 <b>Shift+Ctrl+2</b> 、 <b>Shift+Ctrl+3</b> 、などとします)。
開いているエディターを切り替える	<b>Shift+Ctrl+F6</b> キーを押します。
開いているビューを切り替える	<b>Shift+Ctrl+F7</b> キーを押します。

---

## 付録 B. トラブルシューティング

QMF で発生した問題を診断および修正するには、以降のトピックを使用してください。

---

### Internet Explorer 8 を使用していると QMF for WebSphere の画像の表示で問題が発生する

#### 症状

Internet Explorer 8 を使用していると、QMF for WebSphere では、ビジュアル報告書およびビジュアル・ダッシュボードの画像が正しく表示されません。

#### 環境

QMF for WebSphere

#### 問題の解決

Internet Explorer ブラウザーの「インターネット一時ファイル」フォルダー内のファイルを削除します。

1. メニュー・バーから、「ツール」 > 「閲覧の履歴の削除」を選択します。「閲覧の履歴の削除」ダイアログが開きます。
2. 「インターネット一時ファイル」チェック・ボックスにチェックを付けます。
3. 「削除」をクリックします。「閲覧の履歴の削除」ダイアログが閉じて、ファイルが削除されます。
4. ビジュアル報告書または、ビジュアル・ダッシュボードを開き直します。

---

### ロング・ネームをサポートする DB2 UDB for z/OS V8 へのアップグレード後のオブジェクトのリスト表示における問題

#### 症状

DB2 for z/OS V8 より前には、オブジェクト名は 8 文字長の CHAR(8) でなければなりません。オブジェクト名が 8 文字未満の場合、DB2 for z/OS は名前の末尾にスペースを付加することで差分を埋めていました。例えば、オブジェクト名の長さが 5 文字の場合、DB2 for z/OS は 3 つのスペースを名前の末尾に追加していました。DB2 for z/OS V8 には、ロング・ネームのサポートが加わりました。DB2 for z/OS V8 では、オブジェクト名は VARCHAR(128) として定義されます。スペースが付加されたオブジェクト名は、引き続きご使用のデータベースに存在する可能性があります。スペースが付加されたオブジェクト名を検索できるようにするには、オブジェクトに対して UPDATE ステートメントを実行する必要があります。UPDATE ステートメントを実行しないと、スペースが付加されたオブジェクト名は照会結果に表示されません。

#### 環境

QMF for WebSphere および QMF for Workstation

#### 問題の解決

1. 修正を実装する前に、以下の表をバックアップしてください。
  - Q.OBJECT\_DIRECTORY
  - Q.OBJECT\_REMARKS
  - Q.OBJECT\_DATA
2. 以下の UPDATE ステートメントを実行します。
  - UPDATE Q.OBJECT\_DIRECTORY SET OWNER = RTRIM(OWNER)
  - UPDATE Q.OBJECT\_REMARKS SET OWNER = RTRIM(OWNER)
  - UPDATE Q.OBJECT\_DATA SET OWNER = RTRIM(OWNER)

---

## 応答ファイルの作成

QMF for Workstation のサイレント・インストールを実行するには、すべてのインストール・オプションを指定する応答ファイルを作成する必要があります。このファイルは、インストールするすべてのフィーチャーとインストール・パスを指定する必要があります。

### このタスクについて

応答ファイルを作成するには、以下のようにします。

### 手順

1. コマンド行からインストール・コマンドを実行します。
  - Windows 上での現行ディレクトリーへのインストールについては、次の例を参照してください。

```
setupwin32.exe -r installer.properties
```

または

```
setupwin64.exe -r installer.properties
```

`-r` は記録モードでインストール・ソフトウェアを実行することを指定します。

- Windows 上でのカスタム・ディレクトリーへのインストールについては、次の例を参照してください。

```
setupwin32.exe -r C:%drive_path%response_file.properties
```

または

```
setupwin64.exe -r C:%drive_path%response_file.properties
```

それぞれの意味は次のとおりです。

- `-r` は、記録モードでインストール・ソフトウェアを実行することを指定します。
- `C:%drive_path%response_file.properties` は、作成する応答ファイルへのパスを指定します。

2. インストールを進めながら、この実行可能ファイルを実行する各ユーザーがそれぞれのマシンにインストールするフィーチャーを選択します。
3. インストールが完了すると、インストール中に指定したディレクトリーにアプリケーションがインストールされます。

## タスクの結果

応答ファイルが作成され、現行ディレクトリーまたはパスで指定したディレクトリーに保存されます。

## 次のタスク

ソフトウェアをインストールするユーザー・マシンにファイルを配布し、サイレント・インストールを実行します。

---

## QMF for Workstation Win32 API が以前のバージョンの QMF for Windows に戻る

### 症状

QMF for Workstation バージョン 11 とともにインストールされる以前のバージョンの QMF for Windows を開くと、バージョン 11 を再度開いたとしても、API インスタンスは自動的に QMF for Windows に戻ってしまいます。

### 原因

QMF for Workstation バージョン 11 をインストールしたとき、システム・レジストリー内のアプリケーションのバージョン番号は更新されます。QMF for Windows の既存バージョンを開くと、このアプリケーションはシステム・レジストリー内のアプリケーションのバージョン番号を自動的に元の番号に戻ってしまいます。バージョン 11 を開いた場合は、このような自動的な名前変更は行われません。

### 問題の解決

QMF for Windows アプリケーションを開いたときに、API インスタンスが必ず QMF for Workstation バージョン 11 を指すようにするには、システム・レジストリー内のアプリケーションのバージョン番号を手動でリセットする必要があります。

ユーザーの処置: システム・レジストリー内のアプリケーションのバージョン番号をリセットするには、以下の操作を行います。

1. ご使用のワークステーションのディレクトリー内の次の場所に移動します。

"C:\Program Files\IBM\DB2 Query Management Facility\API

2. qmfwin.exe という名前のファイルを、ダブルクリックします

注: Win32 API はアクティブ・リポジトリ接続を使用します。アクティブ・リポジトリ接続がない場合、システムは、使用可能なすべての接続をリストしたダイアログ・ボックスを開きます。ここで、使用する接続を選択する必要があります。





---

## 付録 C. メッセージ

このトピックでは、QMF for Workstation および QMF for WebSphere のプログラム・コンポーネントが発行するメッセージと戻りコードをリストし、説明します。

QMF for Workstation および QMF for WebSphere のメッセージには、次のような番号が付けられます。

CPT接頭部MESS番号

CPT接頭部

エラーをスローしたアプリケーション・コンポーネントの省略形です。これは、エラーを解決するための最初の手掛かりになります。

MESS番号

エラー・メッセージの固有の番号です。

例えば、次のようになります: ABC0001。

各コンポーネントのすべてのエラー・メッセージがアルファベット順にリストされています。特定のエラー・メッセージについて詳細情報と解決方法を参照するには、この資料で、メッセージのコンポーネント接頭部と番号を検索してください。

注: QMF は DB2 データベースに対応しているため、DB2 エラー・メッセージがこのアプリケーションに組み込まれています。DB2 エラー・メッセージにはコンポーネント接頭部 DB2 が付いています。(例えば DB20001)。このコンポーネント接頭部を持つメッセージが表示された場合は、[www.ibm.com](http://www.ibm.com) にある DB2 オンライン資料を参照してください。DB2 Type 4 UDB ドライバーまたは DB2 Universal JDBC Driver を使用している場合、拡張 SQL 例外エラー・メッセージを受け取るには、「リポジトリ接続の編集」ウィザードの「拡張 JDBC 設定」ウィンドウの「retrieveMessagesFromServerOnGetMessage」オプションにチェックを付けます。

---

**API1001** {0}

説明: これは、他のメッセージのコンテナです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

---

**API1002** API が初期設定されません。

説明: API インスタンスが初期設定されません。これは、QMFwin API が初期化されなかったか、リポジトリ接続が確立されなかったことを示している可能性があります。

ユーザーの処置: QMFwin API ログを調べて、API インスタンスが失敗した原因となったエラーを特定するか、リポジトリ接続を再確立してください。

---

**API1003** データが見つかりません。

説明: 結果セットに存在しない行を取得しようとする試みがありました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

---

**API1006** 指定されたソース {0} は有効ではありません。

説明: initializeProc() 関数または initializeQuery() 関数の SourceType パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての initializeProc() 関数または initializeQuery() 関数の SourceType パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1007** 指定されたソース名は有効ではありません。

説明: initializeProc()、initializeQuery()、または initializeStaticQuery() 関数の Source、CollectionName、PackageName、または ConsistencyToken パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての initializeProc()、initializeQuery()、または initializeStaticQuery() 関数の Source、CollectionName、PackageName、または ConsistencyToken パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1008** 指定されたデータベース・サーバー {0} は有効ではありません。

説明: getServerAttributes()、getServerType()、または initializeServer() 関数で不明なデータ・ソース別名が指定されました。

ユーザーの処置: すべての getServerAttributes()、getServerType()、または initializeServer() 関数に、有効なデータ・ソース別名を指定してください。

---

**API1009** データベース・サーバーが指定されていません。

説明: initializeServer() 関数を、初期化されたデータ・ソースを必要とする他の関数を呼び出す前に呼び出していません。

ユーザーの処置: 他のデータ・ソース依存関数を呼び出す前に、initializeServer() 関数を呼び出しておくようにしてください。

---

**API1010** 指定された限界行数 {0} は有効ではありません。

説明: open() 関数の RowLimit パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: open() 関数の場合、RowLimit パラメーターには正の値を指定してください。

---

**API1011** 指定された照会 ID {0} は有効ではありません。

説明: API 関数の QueryID パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての関連関数で QueryID パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1012** SQL 動詞 {0} は open() で使用できません。

説明: open() 関数が SELECT、VALUES、WITH、CALL の SQL 動詞のいずれも含まない照会を呼び出しました。

ユーザーの処置: open() 関数では、上記の SQL 動詞のいずれかを含む照会を呼び出すようにしてください。

---

**API1013** SQL 動詞 {0} は execute() で使用できません。

説明: execute() 関数が SELECT、VALUES、WITH、または CALL SQL 動詞を含む照会を呼び出しました。

ユーザーの処置: execute() 関数ではこれらの SQL 動詞のいずれかを含む照会は呼び出さないようにしてください。

---

**API1015** 新しいプロシージャを作成できませんでした。すでに開いている文書が多すぎるか、メモリーが足りません。

説明: initializeProc() 関数を使用してプロシージャを作成しているときに、予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: QMFwin API ログを調べて、根本原因であるエラーを見つけてください。

---

**API1016** 新しい照会を作成できませんでした。すでに開いている文書が多すぎるか、メモリーが足りません。

説明: initializeQuery() 関数を使用して照会を作成しているときに、予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: QMFwin API ログを調べて、根本原因であるエラーを見つけてください。

---

**API1024** 指定された列区切り文字 ({0}) は有効ではありません。

説明: export() 関数の ColumnDelimiter パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての export() 関数の ColumnDelimiter パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1026** 指定されたファイル名は無効です。

説明: export() 関数の FileName パラメーターに無効な値または空の値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての export() 関数の FileName

パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1027** 指定されたフォーマット (**{0}**) は有効ではありません。

説明: export() 関数の Format パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての export() 関数の Format パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1028** 指定された書式名は有効ではありません。

説明: 報告書関連の関数の Form パラメーターに無効な値または空の値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての報告書関連の関数で Form パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1029** 指定された書式ソース (**{0}**) は有効ではありません。

説明: 報告書関連の関数の SourceType パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての報告書関連の関数で SourceType パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1030** グローバル変数名が無効です。

説明: グローバル変数関連の関数の GlobalVariableName パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべてのグローバル変数関連の関数で GlobalVariableName パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1031** 指定されたホスト変数は有効ではありません。

説明: setHostVariable() 関数の Value パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての setHostVariable() 関数の Value パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1033** 指定された所有者と名前 (**{0}**) は有効ではありません。

説明: API 関数の OwnerAndName パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての API 関連の関数の OwnerAndName パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1034** 指定されたページの長さ (**{0}**) は有効ではありません。

説明: exportReport() 関数または exportVisualReport() 関数の PageLength パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての exportReport() 関数または exportVisualReport() 関数の PageLength パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1035** 指定されたページ幅 (**{0}**) が無効です。

説明: exportReport() 関数または exportVisualReport() 関数の PageWidth パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての exportReport() 関数または exportVisualReport() 関数の PageWidth パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1037** 指定されたプロシージャ ID (**{0}**) は有効ではありません。

説明: プロシージャ関連の関数の ProcID パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべてのプロシージャ関連の関数で ProcID パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1038** 指定されたりソース (**{0}**) は有効ではありません。

説明: getResourceLimit() 関数の Resource パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての getResourceLimit() 関数の Resource パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1039** 指定された行範囲と列範囲は有効ではありません。

説明: エクスポート結果セット関数の FirstRow、FirstCol、LastRow、および LastCol パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべてのエクスポート結果セット関数の FirstRow、FirstCol、LastRow、および LastCol パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1040** 指定されたストリング区切り文字 (**{0}**) は有効ではありません。

説明: export() 関数の StringDelimiter パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての export() 関数の StringDelimiter パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1041** 指定された表名は有効ではありません。

説明: export() 関数の TableName パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての export() 関数の TableName パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1042** 指定されたターゲット・サーバーは無効です。

説明: saveData() 関数または copyQMFObject() 関数の Server パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての saveData() 関数または copyQMFObject() 関数の Server パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1044** 指定された時刻 (**{0}**) は有効ではありません。

説明: getQMFOBJECTInfo() 関数の Time パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての getQMFOBJECTInfo() 関数の Time パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1045** 指定されたタイプ (**{0}**) は有効ではありません。

説明: getQMFOBJECTInfo() 関数の Type パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての getQMFOBJECTInfo() 関数の Type パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

**API1046** 指定された変数 (**{0}**) は有効ではありません。

説明: setVariable() 関数の VariableName パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての setVariable() 関数の VariableName パラメーターに、有効な値を指定してください。

---

---

**API1053** SQL 動詞 (**{0}**) は ExecuteStoredProcedure() では使用できません。

説明: executeStoredProcedureEx() 関数で CALL SQL 動詞を含まない照会が指定されました。

ユーザーの処置: すべての executeStoredProcedureEx() 関数で CALL 照会を指定してください。

---

**API1054** 静的セクションを準備できません。

説明: prepare() 関数で静的照会が指定されました。指定できるのは動的照会のみです。

ユーザーの処置: すべての prepare() 関数には動的照会を指定してください。

---

**API10004** ForceDialog および SuppressDialog に指定された値は、互いに排他的です。

説明: initializeServer() 関数が呼び出されましたが、ForceDialog パラメーターと SuppressDialog パラメーターに指定されている値が相互に排他的です。

ユーザーの処置: initializeServer() 関数を呼び出しているコードを確認してください。

---

**API10005** 指定された値は有効ではありません。

説明: 関数のパラメーターに指定された値が誤っています。

ユーザーの処置: API インスタンスで呼び出されているすべての関数について、指定されたパラメーター値がすべて有効であることを確認してください。

---

**BIC00000** 内部エラー

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**BIC00001** 不正な引数

説明: 指定された引数は有効ではありません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**BIC00002** NULL ポインター

説明: NULL ポインターの例外が発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**BIC00004** {0}

説明: 示された例外が発生しました。

ユーザーの処置: 示された例外を解決し、再試行してください。

**BIC00005** 不明な例外

説明: リソース・ストリングの取得中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**BIC00006** この機能は QMF ではサポートされません。

説明: 指定されたフィーチャーは QMF ではサポートされていません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

**BIC00007** オブジェクトはQMFでサポートされていません。

説明: 示されたオブジェクトはQMFではサポートされていません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

**BIC00009** 子の取り出しはユーザーによって取り消されました。

説明: 操作はユーザーによって取り消されました。

ユーザーの処置: 指定されたオブジェクトを再度取り出してください。

**CLC00001** {0} を数値に変換できません。

説明: 指定されたエレメントは数値に変換できません。

ユーザーの処置: 数字に変換できる有効なエレメントを指定してください。

**CLC00002** linReg を評価できません。一連のデータに異なる数のエレメントがあります。

説明: x および y 変数に指定された一連のデータには、異なる数のデータ・ポイントが含まれています。

ユーザーの処置: 同じ数のデータ・ポイントを含む一連のデータを指定してください。

**CLC00003** linReg を評価できません。データが不十分です。

説明: 指定された一連のデータには、線形回帰が計算できるだけの十分な行がありません。

ユーザーの処置: 複数行のデータ・ポイントを含む照会結果セットを指定してください。

**CLC00004** linReg を評価できません。係数が範囲外です。

説明: linreg() 関数の nParam パラメーターに指定した値は無効です。

ユーザーの処置: nParam パラメーターには、0 または 1 のいずれかを指定してください。0 は線形回帰の傾きを返します。1 は線形回帰の切片を返します。

**CLC00005** 正しくないデータ行範囲が指定されました : {0} から {1}

説明: nFirstRow および nLastRow パラメーターで指定されたデータ行の範囲は無効です。

ユーザーの処置: データ行には有効な範囲を指定してください。照会結果セット内では、nFirstRow 値は、nLastRow 値よりも前の行を指定する必要があります。

**CLC00006** gammaIP を計算できません。ドメイン・エラー。

説明: gammaIP 関数に無効な引数が指定されました。

ユーザーの処置: gammaIP 関数には有効な引数を指定してください。

**CLC00009** "{0}" 関数は式でサポートされていますが、Lib クラスに見つかりません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00010** "{0}" 関数に正しくない引数記述があります。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00011** タイプ変換エラー: {0} タイプのオブジェクトは {1} タイプに変換できません。

説明: 示されたオブジェクトは、示されたタイプに変換できません。

ユーザーの処置: 示されたタイプに変換するための有効なオブジェクトを指定してください。

---

**CLC00012** 式の評価に失敗しました: {0}

説明: 示された式の評価に失敗しました。

ユーザーの処置: 評価ができる有効な式を指定してください。

---

**CLC00014** 式の評価に失敗しました。

説明: 指定された式の評価に失敗しました。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないかを確認し、再試行してください。

---

**CLC00016** 式を解析できません: {0}

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00018** 不明な関数名: {0}。

説明: 示された関数名は有効ではありません。

ユーザーの処置: 有効な関数名を指定してください。

---

**CLC00030** URL を処理できません: '{0}'

説明: 示された URL は無効です。

ユーザーの処置: 有効な URL を指定します。

---

**CLC00034** "{0}" 関数に記述がありません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00038** LibraryFactory クラスの "{0}" ライブラリーの宣言が複数あります。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00039** LibraryFactory クラスの "{0}" ライブラリーの宣言が複数あります。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00040** LibraryFactory クラスの "{0}" ライブラリーをロードできません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00041** タイプ "{0}" と "{1}" は "{2}" 関数では受け入れられません。

説明: 関数に渡された引数のタイプが無効です。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないかを確認し、再試行してください。

---

**CLC00042** タイプ "{0}" は "{1}" 関数では受け入れられません。

説明: 指定された関数は指定されたタイプのパラメーターを受け入れません。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないかを確認し、再試行してください。

---

**CLC00043** 情報サービスが未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00044** 集約サービスが未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00045** 階層サービスが未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00046** カラー・サービスが未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00047** PPI サービスが未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00048** 値プロバイダーが未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**CLC00049** {1} 個の引数に対して関数 "{0}" が定義されています。

説明: 示された関数に対して無効な数のパラメーターが指定されました。

ユーザーの処置: 示された関数に対して正しい数のパラメーターを指定してください。

---

**CLC00050** 関数 "{0}" が引数 {1} に対しては未定義です。

説明: 示された関数に対して無効な数のパラメーターが指定されました。

ユーザーの処置: 示された関数に対して有効な数のパラメーターを指定してください。

---

**CLC00051** オペランドの 1 つに計測単位がありません。

説明: 関数のオペランドの 1 つに計測単位がありません。

ユーザーの処置: 関数のすべてのオペランドには計測単位を指定してください。

---

**CLC00052** 2 つの測定値を乗算することはできません。

説明: 測定値を乗算することはできません。

ユーザーの処置: 乗算には測定値以外を指定してください。

---

**CLC00053** "{0}" タイプの要素からリストを作成することはできません。

説明: 示されたタイプの要素からリストを作成することはできません。

ユーザーの処置: リストするには異なるタイプの要素を指定してください。

---

**CLC00054** 異なるタイプの要素をリストに入れることはできません。

説明: 指定されたリストに異なるタイプの要素を入れることはできません。

ユーザーの処置: リストするには同じタイプの要素を指定してください。

---

**CLC00055** タイプ "{0}"、"{1}"、および "{2}" は "{3}" 関数では受け入れられません。

説明: 示された関数には指定されたタイプとの互換性がありません。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないかを確認し、再試行してください。

**CLC00056** 計測単位を持つ引数は "{0}" 関数には受け入れられません。

説明: 示された関数では計測単位を持つ引数は指定できません。

ユーザーの処置: 関数の引数からすべての計測単位を削除してください。

**CLC00057** 誤った索引が指定されました。

説明: LineText 関数でエラーが発生しました。

ユーザーの処置: LineText 関数で指定した引数にエラーがないか確認してください。

**CLC00058** タイプ "{0}"、"{1}"、"{2}"、および "{3}" は "{4}" 関数では受け入れられません。

説明: 示された関数には指定されたタイプとの互換性がありません。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないかを確認し、再試行してください。

**CLC00059** 計算機例外が発生しました: {0}

説明: 汎用エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないかを確認し、再試行してください。

**CLC00060** 変数 "{0}" の値が定義されていません。

説明: 示された変数の値が定義されていません。

ユーザーの処置: 示された変数に値を定義してください。

**CLC00061** 関数 "{0}" により発生したエラー: {1}

説明: 示された関数が示されたエラーを発生しました。

ユーザーの処置: 示されたエラーを訂正し、関数を再実行してください。

**CLC00062** プロパティ: "{0}" に以下のエラーがあります:

説明: 示されたプロパティが示されたエラーの原因です。

ユーザーの処置: 示されたエラーを訂正し、関数を再実行してください。

**CLC00063** リスト・サイズを比較できません。

説明: 加算、乗算、除算、および減算関数で、タイプ List を持つ無効なパラメーターが指定されました。

ユーザーの処置: すべての加算、乗算、除算、および減算関数で、リスト・パラメーターに、有効な値を指定してください。

**CLC00066** リストが空であるため評価できません。

説明: 関数のリスト・パラメーターに値が指定されていません。

ユーザーの処置: すべての関連関数で、リスト・パラメーターに、有効な値を指定してください。

**CLC00067** 関数 @if に奇数個のパラメーターがあります: @if(cond1, exp1, cond2, exp2, ..., expn)。expn は真になる条件がない場合に使用されます

説明: @if 関数の構文が無効です。

ユーザーの処置: すべての @if 関数の構文のエラーを検査して、再試行してください。

**DAL01001** その機能はサポートされていません。

説明: データベースでは指定されたフィーチャーはサポートされません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01002** 列名 "{0}" が見つかりません。

説明: 示された列が見つかりません。

ユーザーの処置: 列名にエラーがないかを確認するか、異なる列名を指定します。



**DAL01004** 現在行は取得および設定操作には適していません。

説明: 指定された行では、取得あるいは設定はできません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01005** データベース・カーソルはクローズされています。

説明: カーソルがクローズされていたため、要求された操作を完了できませんでした。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01006** ファイルへのアクセス中にエラーが発生しました。 {0}

説明: ファイルへのアクセス中に入出力エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01007** 文字エンコード {0} はサポートされていません。

説明: 示された文字エンコードはサポートされていません。

ユーザーの処置: ご使用の現行 JVM でサポートされる文字セットを使用してください。

**DAL01008** データベースへのアクセス中にエラーが発生しました。 ¥n{0}

説明: 示されたデータベースへのアクセス中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01009** 内部エラーが発生しました。 {0}

説明: 示されている内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01011** クラス {0} はサーバー記述には適切ではありません

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01012** 要求された操作はオフライン・モードでは使用できません

説明: 指定された操作はオフライン・モードでは使用できません

ユーザーの処置: アクティブ・オブジェクトに適用できる異なる操作を指定するか、オンライン・モードに切り替えて、再試行してください。

**DAL01013** 以下の原因により、サーバー '{0}' への接続を作成できません: {1}

説明: 示されたエラーにより、示されたサーバーへの接続を確立できませんでした。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、サーバーへの接続を再試行してください。

**DAL01014** 無効な接続パラメーターのセットが使用されています。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01016** データを構文解析できません (base64 エンコード規則違反)

説明: XML ファイルが破損しています。

ユーザーの処置: XML ファイル内のすべてのエラーを修正して、再試行してください。

**DAL01017** パッケージ '{1}' に、重複した名前 '{0}' を持つ照会が検出されました。

説明: 内部エラーが発生しました。示されたパッケージには同じ名前が指定された照会が複数あります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01018** ソース・データにターゲット表との互換性がありません。

説明: データベース表にデータを保存しようとしたが、以下の理由で失敗しました。

- 列数が一致していません。
- 列に非互換のタイプがあります。

ユーザーの処置: 互換性のあるターゲット表を選択して、再試行してください。

**DAL01019** 操作がサポートされていません。

説明: 内部エラーが発生しました。内部の制約のため、要求された操作を実行できません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01020** 無効な SQL 型定義: '{0}'

説明: 内部エラーが発生しました。示された SQL 型定義が無効です (複数の既知のデータ・タイプにマップできます)。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01021** この製品は SQLj サポート・モジュールに含まれていません

説明: QMF は SQLj サポート・モジュールをサポートしていないか、または初期化できません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01022** ドライバー名の同じ 2 つの異なるドライバー・ライブラリーを持つことはできません。

説明: 指定されたドライバー名を持つドライバーは、別のライブラリー定義で既に定義済みです。

ユーザーの処置: 新規のドライバー・ライブラリーを作成するのではなく、既存の定義済みドライバー・ライブラリーを使用 (編集) してください。

**DAL01023** ドライバー・ライブラリー・リストの保存中にエラーが発生しました: {0}

説明: ドライバー・ライブラリー・リストの保存中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**DAL01025** ドライバー・ライブラリー・リストのロード中にエラーが発生しました: {0}

説明: ドライバー・ライブラリー・リストをロードしようとしているときに、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**DAL01026** リソース限界の制限のため、操作を実行できません: {0}

説明: 示されたリソース限界の制限のため、操作を実行できませんでした。

ユーザーの処置: 「表示」メニューの「リソース限界」を選択して、現行のリソース限界を確認してください。リソース限界内の操作を指定してください。または管理者に特定の権限を要求してください。

**DAL01027** ユーザー名が指定されていません。

説明: 「ユーザー情報」ダイアログの名前フィールドから、ユーザー名が欠落しています。

ユーザーの処置: ユーザー名を指定してください。

**DAL01028** パスワードが指定されていません。

説明: 「ユーザー情報」ダイアログから、パスワードが欠落しています。

ユーザーの処置: パスワードを指定します。

**DAL01029** JDBC URL が正しくありません: {0}。

説明: 示された JDBC URL は、QMF では処理できません。URL が正しくない可能性があります。

ユーザーの処置: JDBC URL にエラーがないか確認するか、異なる URL を指定します。

**DAL01030** 照会パラメーター {0} の Java タイプが正しくありません。データ・タイプ '{1}' が必要です。

説明: 照会を実行中に内部エラーが発生しました。照会パラメーターに無効なタイプが含まれています。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01031** 以下の原因により、キャッシュされたサーバー記述子を復元できません: {0}

説明: 以下のエラーにより、キャッシュされたサーバー記述子を復元できません。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**DAL01032** リモート・メソッド呼び出しを行っているときにエラーが発生しました。 {0}

説明: サーバー側で操作を行っているときに、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 考えられる対応については、示されたエラーの説明を参照してください。

**DAL01033** クライアント要求をリモート・サーバーで処理できません。

説明: 内部エラーが発生しました。リモート・サーバーはクライアント要求を処理できません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01034** 不完全なメタデータ記述子を使用する試行が検出されました。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・デ

ータを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01035** 編集はこのデータ・セットではサポートされていません。

説明: 内部エラーが発生しました。このデータ・セットは編集できません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01036** 現在行は編集には不適当なです。

説明: 内部エラーが発生しました。現在行は編集できません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**DAL01037** データベース・サーバーは表の名前変更をサポートしていません

説明: このデータベース・サーバー内の表は、QMF ではリネームできません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

**DAL01038** 編集操作が取り消されました。

説明: 表の編集操作はユーザーによって取り消されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

**DAL01039** レコードを更新できませんでした (編集/削除の同時操作の可能性があります)。

説明: レコードを更新できませんでした。考えられる最大の理由は、並行する編集/削除操作でレコードがロックされることです。

ユーザーの処置: 結果セットをリフレッシュして、再試行してください。

**DAL01040** レコードを削除できませんでした (編集/削除の同時操作の可能性があります)。

説明: レコードを削除できませんでした。考えられる最大の理由は、並行する編集/削除操作でレコードがロックされることです。

## DAL01041 • DAL01200

ユーザーの処置: 結果セットをリフレッシュして、再試行してください。

---

**DAL01041** 計算列の値が、メタデータで指定された長さを超えています

説明: 結果セット内の 1 つ以上の計算列に列定義で許されている長さを超えるデータがあったため、データをエクスポートできませんでした。

ユーザーの処置: 列の最大長を増やすか、計算列内のデータを変更してください。

---

**DAL01042** 無効なタイプ変換が検出されました。

説明: 内部エラーが発生しました。指定された操作における型変換は無効です。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01043** 削除されたレコードの変更が試みられました。

説明: 内部エラーが発生しました。既に削除されたレコードに対して、変更や復元を行うことはできません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01044** 次の理由で接続がブロックされています: {0}

説明: 接続を試行しましたが、示されたエラーまたは制限により、ブロックされました。

ユーザーの処置: 示された問題に応じて、示されたエラーを解決するか、管理者に制限の撤廃を要求してください。

---

**DAL01046** この製品には、選択したデータベースの静的モード・サポート・モジュールが含まれません。

説明: この製品には、選択したデータベースの静的モード・サポート・モジュールが含まれません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01048** ドライバー・クラス名 '{0}' がロードされません。不正なドライバー・クラス名または JDBC ドライバー・ライブラリーの欠落が原因の可能性があります。

説明: 示されたドライバー・クラス名をロードできません。不正なドライバー・クラス名または JDBC ドライバー・ライブラリーの欠落が原因の可能性があります。

ユーザーの処置: 示されたドライバー・クラスを参照している JDBC ドライバー・ライブラリーの適切な定義があるか確認してください。

---

**DAL01049** 選択した保護モードはデータベースでサポートされていません。

説明: 選択された保護モードは指定されたデータベースではサポートされていません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01050** ドライバー固有の機能は以下が原因で使用できません: {0}

説明: ドライバー固有の機能は示されたエラーが原因で使用できません。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。ドライバー用の JDBC ドライバー・ライブラリーが正しく構成されているか、また必要な JAR ファイルをすべて含んでいるか確認してください。問題が持続するようであれば、「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集」を選択してサポート・データを収集し、それをカスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01200** 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01201** 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01202** 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}、 {2}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01203** 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}、 {2}、 {3}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01204** 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}、 {2}、 {3}、 {4}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01205** 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}、 {2}、 {3}、 {4}、 {5}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01206** 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}、 {2}、 {3}、 {4}、 {5}、 {6}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01207** 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。  
{0}、 {1}、 {2}、 {3}、 {4}、 {5}、 {6}、 {7}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DAL01208** 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}、 {2}、 {3}、 {4}、 {5}、 {6}、 {7}、 {8}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**DDM0001** 予期しないエラーが発生しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0002** オブジェクト {0} に、コード・ポイント {1} を持つフィールドがありません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0003** ソケットのオープン例外。 {0}

説明: TCP/IP 接続を確立できません。

ユーザーの処置: JDBC URL 内のホストとポートの詳細を確認してください。サーバーに ping を発行して、ネットワーク接続が機能しているか検査してください。

---

**DDM0004** ソケットの書き込み例外。 {0}

説明: ドライバー・コードでネットワーク接続障害または内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: ネットワーク接続を確認してください。接続が正常に機能している場合は、エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0005** データ・フォーマット例外が検出されました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0006** 無効な JDBC URL {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0007** DSS ヘッダー・フォーマットのエラーが検出されました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

---

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0008** サポートされない CCSID {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0009** 暗号エラー {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0010** オブジェクト {0} に、必須フィールド {1} が含まれていません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0011** オブジェクト {0} は値 {1} をサポートしていません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0012** 構文エラーを検出しました: {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0013** 構文エラーを検出しました: {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

---

**DDM0014** オブジェクト {0} はこれ以上の反復フィールド {1} を保持できません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0015** 正しくないポート番号値: {0}

説明: JDBC URL の **Port** フィールドには無効な値が含まれています。

ユーザーの処置: JDBC URL には正しいポート番号を指定してください。

---

**DDM0016** {0} は、オブジェクト {2} のフィールド {1} に対して無効な長さです

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0017** 不明な **FD:OCA** 記述子のタイプ ID {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0018** **NULL** 可能でないデータで **NULL** 値が検出されました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0019** **FD:OCA** {0} トリプレット・リピーティング・グループの整数を {1} バイトに設定できません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0020** 正しくない **CPT** トリプレットが検出されました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0021** オブジェクト {0} の重複フィールド {1} は正しくありません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0022** 参照先の **FD:OCA** トリプレット {0} が見つかりません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0023** **FD:OCA** {0} トリプレットを **RLO** トリプレットから参照できません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0024** **DRDA** で許可されるのは **1** および **0** のみですが、**RLO** トリプレットでレプリケーション係数 {0} が検出されました

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0025** **FD:OCA** {0} トリプレットを **GDA** トリプレットから参照できません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0026** 不明な DRDA タイプ {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0027** {0} の RLO ハンドラーでは、無限エレメント・カウントは許可されません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0028** DRDA タイプ {0} のトリプレット・ハンドラーの構文解析中にエラーが発生しました

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0029** JDBC ステートメント変数 に値が指定されていません {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0030** タイプ変換が正しくありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0031** 正しくない日付形式または時刻形式が検出されました: {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0032** 準備済みステートメントのパラメーター・タイプ {0} (java.sql.Type セットからのもの) はサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0033** 不明な DB2 タイプ {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0035** ステートメントは閉じています。

説明: 閉じている Statement オブジェクトを操作しようとしていることが検出されました。

ユーザーの処置: プログラム・コードを修正してください。

---

**DDM0036** 結果セットは閉じています。

説明: 閉じている ResultSet オブジェクトを操作しようとしていることが検出されました。

ユーザーの処置: プログラム・コードを修正してください。

---

**DDM0037** オブジェクトは閉じています。

説明: 閉じているオブジェクトを操作しようとしていることが検出されました。

ユーザーの処置: プログラム・コードを修正してください。

---

**DDM0038** 現在の結果セットの状態では操作を実行できません。

説明: いかなる有効な列にも配置されていない、結果セットの ResultSet 列を操作しようとしていることが検出されました。

ユーザーの処置: プログラム・コードを修正してください。

---

**DDM0039** エラー応答を受信しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。



ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0040** {0} コマンドに対してエラー応答を受信しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DDM0041** {0} オブジェクトの処理中にエラーを検出しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DRL00001** サーバーへの最大接続数に達しました。

説明: サーバーへの最大接続数に達しました。

ユーザーの処置: 「リポジトリ・ストレージ」ダイアログ内の「最大接続数」パラメーターの値を増加させるか、値にゼロを設定してこの制約を取り除いてください。

---

**DSCERRCD0001 FD:OCA** トリプレットが **DRDA** 記述子で使用されていないか、タイプ・コードが無効です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0002 FD:OCA** トリプレットのシーケンス・エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0003** 配列の説明が必要ですが、それが 1 つではありません (行レイアウト (**RLO**) トリプレットが多すぎるか少なすぎます)。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0004** 行の説明が必要ですが、それが 1 つではありません (**RLO** トリプレットが多すぎるか少なすぎます)。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0005** 受信したばかりの後期環境記述子はサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0006** トリプレットの形式が正しくありません。必要なパラメーターが欠落しています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0007** パラメーター値が許容値ではありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0017** 存在しているメタデータ記述子 (**MDD**) が、構造化照会言語 (**SQL**) 記述子として認識されません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0018** **MDD** クラスが、有効な **SQL** クラスとして認識されません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

## DSCERRCD0019 • ERM0002

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0019 MDD** タイプが、有効な **SQL** タイプとして認識されません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0033** 表記に **SQL** タイプ (以前の **MDD**) との互換性がありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0034 CCSID** はサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0050** グループ・データ配列 (**GDA**) は、スカラー・データ配列 (**SDA**) または **GDA** ではないローカル **ID (LID)** を参照しています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0051 GDAlength** オーバーライドが限界を超えています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0052 GDAprecision** が限界を超えています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0053 GDA** スケールが精度より大きいか、スケールが負の値になっています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0054 GDA** 長のオーバーライドが欠落しているか、データ・タイプとの互換性がありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0065 RLO** が、**RLO** または **GDA** ではない **LID** を参照しています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**DSCERRCD0066 RLO** は、必須の **GDA** または **RLO** の参照に失敗しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0001** 永続エージェント・エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0002** コマンド使用権限がありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0003** コマンド検査。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0004** コマンドがサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0005** マネージャー従属関係エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0006** マネージャー・レベルが矛盾しています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0007** 会話型プロトコル・エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0008** パラメーターがサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0009** リソース限界に達しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0010** データ・ストリーム構文エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0011** ターゲットがサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0012** パラメーター値がサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0013** 会話型プロトコル・エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0014** RDB は現在アクセスされています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0015** 「RDB アクセス失敗」応答メッセージ。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0016** RDB 使用権限がありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

---

**ERM0017** RDB が見つかりません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0018** リソース限界に達しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0019** データ・ストリーム構文エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0020** 無効な要求。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0021** 作業単位の異常終了条件。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0022** RDB パッケージ・バインディング・プロセスがアクティブです。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0023** 照会が開きません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

---

**ERM0024** RDB はアクセスされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0025** データ記述子が一致しません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0026** オブジェクトがサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0027** RDB パッケージ・バインディングがアクティブではありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0028** 「RDB 更新」応答メッセージ。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0029** SQL エラー条件。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0030** データの終わり。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

---

**ERM0031** 照会の終わり。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0032** コミットメント要求。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0033** 作業単位の終了条件。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0034** 記述子が無効です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0035** 照会が開かれました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0036** 照会を開くことができませんでした。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0037** 照会は以前に開かれています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM0038** コマンド違反が発生しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**ERM1200** 汎用 DRDA エラーが発生しました。 {0}

説明: 示された一般 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示された一般 DRDA エラーを解決し、再試行してください。

---

**ERM1201** 汎用 DRDA エラーが発生しました。  
{0}、{1}

説明: 示されている 2 つの一般 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 2 つのエラーを解決し、再試行してください。

---

**ERM1202** 汎用 DRDA エラーが発生しました。  
{0}、{1}、{2}

説明: 示されている 3 つの一般 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 3 つのエラーを解決し、再試行してください。

---

**ERM1203** 汎用 DRDA エラーが発生しました。  
{0}、{1}、{2}、{3}

説明: 示されている 4 つの一般 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 4 つのエラーを解決し、再試行してください。

---

**ERM1204** 汎用 DRDA エラーが発生しました。  
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}

説明: 示されている 5 つの一般 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 5 つのエラーを解決し、再試行してください。

---

**ERM1205** 汎用 DRDA エラーが発生しました。  
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}

説明: 示されている 6 つの一般 DRDA エラーが発生しました。

---

## ERM1206 • EXPT1006

ユーザーの処置: 示されている 6 つのエラーを解決し、再試行してください。

---

**ERM1206** 汎用 DRDA エラーが発生しました。  
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}、{6}

説明: 示されている 7 つの一般 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 7 つのエラーを解決し、再試行してください。

---

**ERM1207** 汎用 DRDA エラーが発生しました。  
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}、{6}、{7}

説明: 示されている 8 つの一般 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 8 つのエラーを解決し、再試行してください。

---

**ERM1208** 汎用 DRDA エラーが発生しました。  
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}、{6}、{7}、{8}

説明: 示されている 9 つの一般 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 9 つのエラーを解決し、再試行してください。

---

**EXPT1000** エクスポート・コマンドを実行できません  
: {0}

説明: 示されたエクスポート・コマンドを実行できません。

ユーザーの処置: 最初に示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**EXPT1001** サポートされないデータ・タイプ {0} が  
検出されました。

説明: 結果セットに、IXF370 フォーマットでサポートされていないタイプの列が含まれています。

ユーザーの処置: 結果セットに、以下のいずれかのタイプの列が含まれていないか確認してください:

BINARY、VARBINARY、ROWID、  
LONGVARBINARY、CLOB、DBCLOB、BLOB、  
GRAPHIC、VARGRAPHIC、または  
LONGVARGRAPHIC。

---

**EXPT1002** 列 {0} の長さは {1} より小さくしなければ  
なりません。

説明: 示される列の長さは、IXF フォーマットの制約のため、示される長さよりも短くしなければなりません。

ユーザーの処置: 示されたデータ列の長さが示された長さよりも短くなるようにしてください。別のフォーマット (例えば、XML) を使用したエクスポートも試行してください。

---

**EXPT1003** 列 {0} の精度は、{1} から {2} まで (両端  
を含む) の間の奇数でなければなりません。

説明: 示される列の精度は、IXF フォーマットの制約のため、示される 2 つの値の間の奇数でなければなりません。

ユーザーの処置: 示されるデータ列の精度を、示される 2 つの値の間の奇数にしてください。別のフォーマット (例えば、XML) を使用したエクスポートも試行してください。

---

**EXPT1004** CCSID {0} はサポートされていないた  
め、データはエクスポートされません。

説明: 示された CCSID は、エクスポートではサポートされません。

ユーザーの処置: エクスポートで有効な CCSID を指定してください。サポートされている CCSID のリストは、「エクスポート」ダイアログ内の「CCSID」ドロップダウン・メニューから取得できます。

---

**EXPT1005** 単一バイト・コード・ページが指定されて  
いないため、データはエクスポートできませ  
ん。

説明: CLOB、CHAR、VARCHAR、または LONGVARCHAR の列を含む結果セットが IXF フォーマットでエクスポートされましたが、単一バイト・コード・ページを含む CCSID が指定されませんでした。

ユーザーの処置: 単一バイト・コード・ページを含む CCSID を選択してください。

---

**EXPT1006** 2 バイト・コード・ページが指定されてい  
ないため、データはエクスポートできませ  
んでした。

説明: DBCLOB、GRAPHIC、VARGRAPHIC、または LONGVARGRAPHIC の列を含む結果セットが IXF フォーマットでエクスポートされましたが、2 バイト・コード・ページを含む CCSID が指定されませんでした。

ユーザーの処置: 2 バイト・コード・ページを含む CCSID を選択してください。

**EXPT1007** 列 {0} の値が、dBASE ファイル形式でサポートされている最大長を超えています。

説明: 示された列の値は、dBASE ファイル・フォーマットでサポートされている文字数の制限を超えています。

ユーザーの処置: 示された列の値を短くするか、異なるファイル・フォーマットを指定して、エクスポートしてください。

**EXPT1008** 列 {0} のデータ・タイプは dBASE ファイルでサポートされていません。

説明: 示された列のデータ・タイプは dBASE ファイル・フォーマットでサポートされていません。

ユーザーの処置: 示された列では異なるデータ・タイプを指定するか、エクスポート用に異なるファイル・フォーマットを選択してください。サポート対象のタイプ: CHAR、VARCHAR、SMALLINT、INTEGER、DECIMAL、BIGINT、DOUBLE、FLOAT、DATE、および TIME。

**EXPT1009** dBASE ファイルの行の長さは 4000 文字を超えることはできません。

説明: すべての結果セットの列の要約の長さが 4,000 文字を超えていますが、これは dBASE ファイル・フォーマットではサポートされません。

ユーザーの処置: 長さを 4,000 文字未満にするか、または異なるファイル・フォーマットを選択して、エクスポートしてください。

**EXPT1010** 指定されたデータ・ソースは存在しません。

説明: 存在しないデータ・ソースに対して結果セットのエクスポートが試みられました。

ユーザーの処置: 有効なデータ・ソースを指定してください。

**EXPT1011** 操作が取り消されました。

説明: ユーザーは、ユーザー名とパスワードのプロンプトが表示されたとき、export コマンドを取り消しました。

ユーザーの処置: export コマンドに対して、有効なユーザー名とパスワードを指定してください。

**EXPT1012** 名前の指定が必要です。

説明: 存在しない表に対して結果セットのエクスポートが試みられました。

ユーザーの処置: 有効なエクスポート表を指定してください。

**EXPT1013** ストレージ項目が無効です。

説明: ストレージ・ファイルは破損したデータを含んでいます。

ユーザーの処置: PDF をエクスポートするために、フォントとフォント・マッピングをセットアップしてください。

**EXPT1014** PDF 用フォント {0} を作成できません。

説明: PDF ファイル・フォーマットでは、示されたフォントは作成できません。

ユーザーの処置: 変換用の異なるフォントを指定するか、エクスポート用の異なるファイル・フォーマットを指定するか、PDF ファイルのエクスポート用のフォントとフォント・マッピングをセットアップします。

**EXPT1015** {0} フォントがマップされていません

説明: 示されたフォント名は、物理フォント・ファイルにマップされません。

ユーザーの処置: PDF ファイルをエクスポートするために、フォントとフォント・マッピングをセットアップしてください。

**FRM1001** 入力行タイプが無効です。

説明: 書式が破損しています。書式ファイルの各行は、書式ファイル・フォーマットに従って、先頭が行のタイプを定義する特定の文字 (T、V、R、H、E、\*) で始まるため、書式ローダーが特定の最初の文字を持つ行でハングしています。現在行の最初の文字は、不明なタイプを持っています。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

**FRM1002** 入力行が短すぎます。

説明: 各行のタイプでは特定の数 (T > 15、V > 11、R > 3、または H > 44) より多い文字数が必要なため、書式ローダーが行の特定の文字数のところでハングしています。現在行は短すぎます。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く

同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

---

**FRM1003** ブール値が無効です。有効値は **YES** または **NO** です。

説明: 破損した書式: 書式ファイル内のブール値に、YES または NO 以外のストリングが設定されています。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

---

**FRM1004** 数値が無効です。有効値は **NONE**、**COLUMNS**、**DEFAULT**、または整数値です。

説明: 破損した書式: 書式ローダーは、有効な Integer 値または定義済みのワード (NONE、COLUMNS、または DEFAULT) を想定しています。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

---

**FRM1005** 無効なコードが検出されました。

説明: 破損している書式: 書式ファイル内の各表構造が、独自の列タイプを持っています。書式ローダーは、表タイプに応じて特定の列タイプを想定しています。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

---

**FRM1006** オブジェクト・ヘッダーが短すぎます。

説明: 各行のタイプでは特定の数 (T > 15、V > 11、R > 3、または H > 44) より多い文字数が必要なため、書式ローダーが行の特定の文字数のところでハングしています。現在行は短すぎます。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

---

**FRM1007** オブジェクト・ヘッダーが無効です。

説明: 破損した書式: オブジェクト・ヘッダーは予期しないフィールドまたはデータを含んでいます。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

---

**FRM1008** 無効な取扱コードです。

説明: 書式ダイアログの「新規列」は、無効な取扱コードを含んでいます。

ユーザーの処置: 取扱コード・フィールドは空のままにしておくか、コンボ・ボックスから取扱コードを選択します。

---

**FRM1009** {0} に指定された値が無効です。¥r¥n 有効な値は {1} です。

説明: 書式ダイアログ・ページには、リスト値を入力したり、選択する場所が複数あります。無効なリスト値が入力されました。

ユーザーの処置: 有効な値をリストから入力してください。

---

**FRM1010** 列見出し "{0}" が長すぎます。

説明: 列見出しの長さは 40 文字未満でなければなりません。

ユーザーの処置: 列見出しの長さを 40 文字未満にしてください。

---

**FRM1011** ID {0} の条件式はありません。

説明: 書式の「詳細」分岐には少数 (デフォルトは、1 つ) の明細ブロックがあり、各詳細では、詳細を使用可能または使用不可として定義する条件を使用できます。「条件」分岐には、「C1, C2, .. C999」フォーマット内でタイプが決まる条件と、索引に従う条件が存在する必要があります。

ユーザーの処置: YES、NO、または Ci を指定します。ここで、Ci は既存の条件です。

---

**FRM1012** 「固定列数」が **NONE** でない場合は、「行折り返し幅」を **NONE** にする必要があります。

説明: 書式デザイナーの「オプション」ページの「固定列数」フィールドに何らかの数字を定義している場合は、「行折り返し幅」には「なし」を設定する必要があります。

ユーザーの処置: 「行折り返し幅」フィールドと「固定列数」フィールドのいずれかに「なし」を設定してください。



---

**FRM1013** 計算 {0} の ID は、他の計算ですでに使用されています。

説明: 書式デザイナーの「計算」ページで、複数の計算が同じ ID で指定されました。

ユーザーの処置: 各計算 ID は固有なものにしてください。

---

**FRM1014** 条件 {0} の ID は、他の条件ですでに使用されています。

説明: 書式デザイナーの「条件」ページで、複数の条件が同じ ID で指定されました。

ユーザーの処置: 各条件 ID は固有なものにしてください。

---

**FRM1015** 列折り返し編集コードを使用している列がある場合は、行折り返し幅を 0 にする必要があります。

説明: 列で折り返し編集コードを使用している場合は、書式デザイナーの「オプション」ページの「行折り返し幅」には「なし」を設定する必要があります。

ユーザーの処置: 「行折り返し幅」には「なし」を設定するか、行折り返し編集コードを使用しないかのいずれかにしてください。

---

**FRM1016** ACROSS 取扱コードを使用している場合は、報告書列の自動並べ替えは TRUE にする必要があります。

説明: 列に ACROSS 取扱コードがある場合は、書式デザイナーの「オプション」ページの「報告書列の自動並べ替え」には「TRUE」を設定する必要があります。

ユーザーの処置: 「報告書列の自動並べ替え」には「TRUE」を設定するか、ACROSS 取扱コードを使用しないかのいずれかにしてください。

---

**FRM1017** ACROSS 取扱コードでは、GROUP および集合取扱コードを使用するために他の列を必要とします。

説明: ACROSS 取扱コードを使用している列が存在する場合、残りのすべての列では、OMIT、GROUP、または AGGREGATION 取扱コードを使用してください。

ユーザーの処置: 残りのすべての列には、OMIT、GROUP、または AGGREGATION 取扱コードを設定してください。

---

**FRM1018** ACROSS 取扱コードは 1 つの列でしか使用できません。

説明: ACROSS 取扱コードは 1 つの列でしか使用できません。

ユーザーの処置: ACROSS 取扱コードを使用しているのは 1 つの列のみにしてください。

---

**FRM1019** GROUP 取扱コードでは、他の列で集合取扱コードを使用する必要があります。

説明: 1 つの列で GROUP 取扱コードを使用している場合、残りのすべての列では、OMIT、GROUP、BREAK、または AGGREGATION 取扱コードを使用する必要があります。

ユーザーの処置: 他のすべての列では、OMIT、GROUP、BREAK、AGGREGATION のいずれかの取扱コードを使用してください。

---

**FRM1020** GROUP 取扱コードでは、他の全列で非ブランク取扱コードを使用する必要があります。

説明: 1 つの列で GROUP 取扱コードを使用している場合、残りのすべての列では、OMIT、GROUP、BREAK、または AGGREGATION 取扱コードを使用する必要があります。

ユーザーの処置: 他のすべての列では、OMIT、GROUP、BREAK、AGGREGATION のいずれかの取扱コードを使用してください。

---

**FRM1021** 集合取扱コードは、列が数値データ・タイプの場合にのみ使用できます。

説明: SUM、CSUM、AVERAGE、STDEV、PCT、TPCT、CPCT、および TCPCT 取扱コードを使用できるのは、数値列のみです。

ユーザーの処置: 非数値列では、SUM、CSUM、AVERAGE、STDEV、PCT、TPCT、CPCT、または TCPCT 以外の取扱コードを使用してください。

---

**FRM1022** ID {0} の計算式はありません。

説明: 書式デザイナーの「計算」ページでは、計算取扱コード ID を指定する必要があります。

ユーザーの処置: 計算取扱コードには計算 ID を指定してください。

---

**FRM1023** "{0}" は計算に有効な編集コードではありません。

説明: 指定された編集コードは、有効な計算編集コードではありません。

ユーザーの処置: 別の計算編集コードを指定してください。

**FRM1024** 無効な編集コード。

説明: 指定された編集コードは無効です。

ユーザーの処置: 有効な編集コードについては、ユーザー・ヘルプの参照セクションを確認してください。

**FRM1025** 無効なストリング '{0}' が検出されました。構文解析は失敗しました。

説明: 書式は破損しています。あるいは、数値を表わすストリングが現行ロケールでは構文解析ができないので、別のロケールで開く必要があります。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と同じバージョンを使用して、開いて保存してみてください。あるいは、ロケールを変更して再オープンしてください。

**FRM1026** 変数 '{0}' はこのコンテキストでは無効です。

説明: 指定された変数名は、式の中で使用する場合は無効です。

ユーザーの処置: 式で有効な変数名を指定してください。

**FRM1027** 列 {0} がありません。

説明: 式は、存在しない列を参照する変数を含んでいません。

ユーザーの処置: 式の変数では、有効な列番号を指定してください。

**FRM1028** 接尾部 '\_B' はこのコンテキストには無効です。

説明: 接尾部「\_B」は定義済み変数では使用できません。したがって、現行変数では無効です。

ユーザーの処置: すべての定義済み変数から接尾部「\_B」を削除してください。

**FRM1029** リンクされたデータ・ソースを開くことができません。

説明: 書式で、リンクされたデータ・ソースを開こうとしましたが、このプロセスでエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 書式には、有効なデータ・ソース・オブジェクトを指定してください。

**FRM1030** ユーザー編集コードを登録中にエラーが発生しました。

説明: FormCustomEditCode がエラーを返しました。

ユーザーの処置: FormCustomEditCode の実装資料を調べて、エラーがないか確認してください。

**FRM1031** ユーザー定義の編集ルーチン・クラスが見つかりません。 {0}

説明: Classloader で、ユーザー実装クラス FormCustomEditCode をロードできません。

ユーザーの処置: className.jar の CLASSPATH を検査してください。

**FRM1032** ユーザー定義の編集ルーチン・クラスを初期化中にエラーが発生しました。 {0}

説明: エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 折り返しの例外内の追加情報を参照してください。

**GERR00001** 汎用ドライバー・エラーが発生しました。 {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

**GERR00002** 汎用ドライバー・エラーが発生しました。 {0}、{1}、{2}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

**GERR00003** 汎用ドライバー・エラーが発生しました。 {0}、{1}、{2}、{3}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**GERR00004** 汎用ドライバー・エラーが発生しました。  
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**GERR00005** 汎用ドライバー・エラーが発生しました。  
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**GERR00006** 汎用ドライバー・エラーが発生しました。  
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}、{6}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**GERR00007** 汎用ドライバー・エラーが発生しました。  
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}、{6}、{7}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**GERR00008** 汎用ドライバー・エラーが発生しました。  
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}、{6}、{7}、{8}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**IXF01002** LOB 列索引が無効です。

説明: ファイルには、LOB 列の無効なインデックスが含まれています。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

---

**IXF01003** LOB 列の長さが無効です。

説明: IXF ファイルには、無効な長さを持つ LOB 列が含まれています。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

---

**IXF01004** 完了前にファイルの終了を検出しました。

説明: IXF ファイルのデータをインポートしているとき、完了前にファイルの終了を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルは破損しているか、不明なフォーマットを使用しています。

---

**IXF01005** レコード {0} の長さが無効です。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、破損したレコードを検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

---

**IXF01006** レコード {0} に無効な長さのレコードがありました。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、無効なレコード長を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

---

**IXF01007** レコード {0} に無効な長さの名前がありました。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、無効な長さの列名を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

---

**IXF01008** レコード {0} に認識できないレコード・タイプを検出しました。

説明: IXF ファイルのデータをインポートしているとき、認識できないレコード・タイプを検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

---

**IXF01009** レコード {0} に無効な値がありました。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、予期しないデータ値を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

**IXF01010** レコード {0} でサポートされないデータ・タイプを検出しました。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、サポートされないデータ・タイプを検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

**IXF01011** レコード {0} にサポートされない CCSID がありました。

説明: IXF ファイルは QMF ではサポートされない CCSID でエンコードされた文字データを含んでいません。

ユーザーの処置: 別の CCSID を使用して IXF ファイルを作成し、QMF にインポートしてください。

**IXF01012** 列の長さが無効です。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、無効な列名を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

**IXF01013** レコード {0} のデータ・レコード ID が負数です。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、無効なデータ ID を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

**IXF01014** レコード {0} で列の位置が負になっています。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、位置が無効な列を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

**IXF01015** "IXF" 識別子がレコード {0} に見つかりませんでした。

説明: インポートされた IXF ファイルに、コンテンツの先頭に必要な「IXF」シグニチャーがありません。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

**IXF01016** IXF ファイルのバージョンは "{0}" です。これはサポートされていません。

説明: インポートされた IXF ファイル・バージョンは QMF ではサポートされていません。

ユーザーの処置: IXF ファイルがバージョン 0、1、または 2 か確認してください。これ以外のバージョンはサポートされません。

**IXF01017** レコード {0} で無効なレコード・カウントを検出しました。

説明: IXF ファイルのデータをインポートしているときに、無効な列カウントを検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

**IXF01018** IXF ファイルの内容が壊れています。

説明: インポートした IXF ファイルは破損しています。

ユーザーの処置: IXF ファイルを指定してインポートしているのか確認してください。

**IXF01019** データ形式はホスト IXF ファイルではサポートされません。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、サポートされない列タイプを検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

**JOB1000** {0}

説明:

ユーザーの処置:

**JOB1001** JDF ファイル・フォーマットが不明です。

説明: 旧フォーマットのジョブ・ファイル (.jdf) を新フォーマット (.jdfx) にインポートするときに、正しくないジョブ・ファイルが選択されました。

ユーザーの処置: 正しい旧フォーマットのジョブ・ファイルを選択して、インポートしてください。

**JOB1002** 予期しないファイルの終わりが検出されました。

説明: 旧フォーマットのジョブ・ファイル (.jdf) を新フォーマット (.jdfx) にインポートするときに、破損し

たジョブ・ファイルが選択されました。

ユーザーの処置: QMF バージョン 8 でジョブ・ファイルを再保存し、ファイルのインポートを再試行してください。

---

**LIC1000** ライセンス・フィールド "{0}" に無効な日付形式があります: {1}。

説明: 指定されたフィールドの日付形式が正しくありません。

ユーザーの処置: ライセンス・ファイルに dd/mm/yyyy 形式の日付があるか確認してください。

---

**LIC1001** 必須フィールド "" が指定されていません。

説明: 示されたフィールドに値が指定されていません。

ユーザーの処置: 示されたフィールドに値を指定してください。

---

**LIC1002** フィールド "{0}" に無効な値 "{1}" があります。有効な値は {2}0 です。

説明: 示されたフィールドに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: 有効なライセンス・ファイルを使用しているか確認してください。

---

**LIC1003** ライセンス・ファイルが見つかりません: {0}

説明: ライセンス・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: 「ライセンスの管理」ダイアログを使用して、製品にライセンスを追加します。

---

**LIC1004** 予期しないファイル・エラーです: {0}。

説明: ライセンス・ファイルをロードしているときに、ファイル・システムでエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**LIC1006** ライセンス署名検査が失敗しました。

説明: ライセンス・ファイルのデジタル署名の検査で失敗しました。

ユーザーの処置: 有効なライセンス・ファイルを提示してください。

---

**LIC1007** ライセンスの期限が切れました。

説明: ライセンスの試用期間の期限が切れました。

ユーザーの処置: フル・ライセンスを購入してください。

---

**LIC1008** 予期しないエラーです。

説明: ライセンスの検証中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 正しいライセンス・ファイルを使用しているか確認してください。

---

**LIC1009** ライセンスが正しくありません。

説明: 無効なライセンス・ファイルのため、ライセンスの検査に失敗しました。

ユーザーの処置: 元のライセンス・ファイルを使用してください。

---

**LIC1010** ライセンス・ファイルが見つかりません。

説明: ユーザーのホーム・ディレクトリーまたはアプリケーションのディレクトリーに、ライセンス (\*.lic ファイル) が見つかりません。

ユーザーの処置: 「ライセンスの管理」ダイアログを使用して、有効なライセンスをインポートしてください。

---

**MAIL1000** {0}

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラーを解決し、再試行してください。

---

**MAIL1001** SMTP サーバーの指定が必要です。

説明: プロシージャー・コマンドで、オブジェクトを含むメッセージを送信する電子メール・サーバーが指定されていません。

ユーザーの処置: MAIL TO プロシージャー・コマンドで、メッセージを送信する電子メール・サーバーを指定してください。詳細については、ユーザー・ヘルプの『MAIL TO プロシージャー・コマンド』のトピックを確認してください。

---

**MAIL1002** 不明なタイプの添付ファイルが指定されました。

説明: MAIL TO コマンドで指定されたファイルは、不明なファイル・フォーマットを持っているか、誤って入力されています。

ユーザーの処置: MAIL TO コマンドの ATTACHMENT パラメーターにエラーがないか確認するか、異なる添付ファイルを指定してください。詳細については、ユーザー・ヘルプの『MAIL TO プロシージャ・コマンド』のトピックを確認してください。

---

**NLS00001** 総称エラー #**{0}** がモジュール **{1}** で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**NLS00002** 一般エラー #**{0}** がモジュール **{1}** (**{2}**) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**NLS00003** 一般エラー #**{0}** がモジュール **{1}** (**{2}**; **{3}**) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**NLS00004** 一般エラー #**{0}** がモジュール **{1}** (**{2}**; **{3}**; **{4}**) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**NLS00005** 一般エラー #**{0}** がモジュール **{1}** (**{2}**; **{3}**; **{4}**; **{5}**) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**NLS00006** 一般エラー #**{0}** がモジュール **{1}** (**{2}**; **{3}**; **{4}**; **{5}**; **{6}**) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**NLS00007** 一般エラー #**{0}** がモジュール **{1}** (**{2}**; **{3}**; **{4}**; **{5}**; **{6}**; **{7}**) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**NLS00008** 一般エラー #**{0}** がモジュール **{1}** (**{2}**; **{3}**; **{4}**; **{5}**; **{6}**; **{7}**; **{8}**) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**NLS00009** 一般エラー #**{0}** がモジュール **{1}** (**{2}**; **{3}**; **{4}**; **{5}**; **{6}**; **{7}**; **{8}**; **{9}**) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**OLCQ1000** {0}

説明: これは折り返されたメッセージです。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**OLCQ1001** 照会は取り消されました。

説明: 操作は取り消されました。

ユーザーの処置: 照会を再実行します。

---

**OLCQ1002** それぞれのレベルごとに少なくとも 1 つの値を選択する必要があります。

説明: スライサー・コントロールのそれぞれのレベルごとに少なくとも 1 つの値を選択する必要があります。

ユーザーの処置: 値を選択して再試行してください。

---

**OLCQ1005** 必要なデータ・ソースが見つかりません。

説明: OLAP 照会で、存在しないデータ・ソースが指定されました。

ユーザーの処置: OLAP 照会には、有効なデータ・ソースを指定してください。

---

**OLP1000** {0}

説明: これは折り返されたメッセージです。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**OLP1002** データベースが **OLAP** 機能をサポートしていません。

説明: 指定されたデータベースは **OLAP** 機能をサポートしていません。

ユーザーの処置: **OLAP** 機能をサポートしているデータベースを指定してください。

---

**OLP1003** キューブの測定値 {0} が見つかりません。

説明: 示されたキューブ測定値がデータベースで見つかりません。

ユーザーの処置: 異なるデータベースを指定して、キューブ測定値を検索してください。

---

**OLP1004** キューブ次元 {0} が見つかりません。

説明: 示されたキューブ・ディメンションがデータベースで見つかりません。

ユーザーの処置: 異なるデータベースを指定して、キューブ・ディメンションを検索してください。

---

**OLP1005** {0} が見つかりません。

説明: 示された **OLAP** キューブがデータベースで見つかりません。

ユーザーの処置: 異なるデータベースを指定して、**OLAP** キューブを検索してください。

---

**OLP1006** {0} の値を検索できません。

説明: ディメンション情報の読み取り中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されたディメンションが存在しているか確認してください。

---

**OLP1007** 現在レイアウトで使用しているどの表にも測定値や次元が関連していないため、これらを追加できません。

説明: **CubeViews** から **OLAP** データを取得する **SQL** 照会の作成中にエラーが発生しました。選択された測定値またはディメンションに関する情報を格納するための表が見つかりません。

ユーザーの処置: **CubeView** メタデータの整合性を確認してください。

---

**OLP1008** 指定した測定値やディメンションをリンクする十分な情報がありません: {0}。

説明: **CubeViews** から **OLAP** データを取得する **SQL** 照会の作成中にエラーが発生しました。選択された測定値またはディメンションに関する情報を格納するための表を結合できません。

ユーザーの処置: **CubeView** メタデータの整合性を確認してください。

---

**OLP1009** データベース {0} に接続できません。

説明: データベースに接続できません。

ユーザーの処置: データベースへの接続を使用できることを確認するか、管理者に詳細を尋ねてください。

---

**OLP1010** キューブ定義は、現在の照会のレイアウトに適切ではありません。

説明: **OLAP** 照会で定義されているキューブ構造は、現行キューブ構造に一致していません。

ユーザーの処置: **OLAP** 照会で定義されているキューブ構造が、現行キューブ構造に一致しているか確認してください。

---

**OLQ1000** {0}

説明: これは折り返されたメッセージです。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**OLQ1001** 内部エラー。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (**Collect Support Data**)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**OLQ1002** 照会は取り消されました。

説明: 操作は取り消されました。

ユーザーの処置: 照会を再実行します。

---

**OLQ1003** それぞれのレベルごとに少なくとも 1 つの値を選択する必要があります。

説明: スライサー・コントロールでは少なくとも 1 つの値を選択する必要があります。

ユーザーの処置: 値を選択して再試行してください。

**OLQ1004** 照会の保存には無効なタイプです。

説明: 照会の保存には無効なオブジェクト・タイプが選択されました。OLAP 照会は、\*.oq ファイル・フォーマットでのみ保存できます。

ユーザーの処置: OLAP 照会は、\*.oq ファイル拡張子を持つファイルに保存してください。

**OLQ1005** 照会にデータ・ソースの指定がありません。

説明: OLAP 照会で、存在しないデータ・ソースが指定されました。

ユーザーの処置: OLAP 照会には、有効なデータ・ソースを指定してください。

**OLQ1006** スライサーに現れることのできるディメンション階層 {0} への参照は 1 つのみです。

説明: MDX DB2 DWE では、スライサーごとに 1 つのディメンションのみがサポートされています。

ユーザーの処置: 1 つのディメンションのみ選択してください。

**PE00001** 列 {1} で ''{0}'' が検出されました。¥r¥n {2} の 1 つであることが期待されていました。

説明: 示された列で無効な文字が検出されました。

ユーザーの処置: 無効な文字を示された文字の 1 つで置き換えてください。

**PE00002** 列 {1} で ''{0}'' が検出されました。¥r¥n 期待されていたのは {2} でした。

説明: 示された列で無効な文字が検出されました。

ユーザーの処置: 示された文字で無効な文字を置き換えてください。

**PE00003** 式は値を得るために計算機を必要とします。

説明: この式は値を返しません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

**PE00004** 構文解析例外が発生しました。

説明: 式の構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないか確認し、再試行してください。

**PRC1000** コマンドの構文解析中に予期しないエラーが発生しました。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**PRC1001** コマンドの構文解析中にエラーが発生しました: 予期しないトークン "{0}"。

説明: プロシーチャーの構文解析中に予期しないトークンが見つかりました。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (Ctrl+Space キーを押して表示) を使用し、プロシーチャーのテキストに構文エラーがないことを確認してください。

**PRC1002** コマンドの構文解析中にエラーが発生しました: 予期しない文字 '{0}'。

説明: プロシーチャーの構文解析中に予期しない文字が見つかりました。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (Ctrl+Space キーを押して表示) を使用して、プロシーチャーのテキストに構文エラーがないか確認してください。

**PRC1003** このコンテキストでは、パラメーター ''{0}'' は無効です。

説明: プロシーチャーの構文解析中に、サポートされていないパラメーター・トークンが見つかりました。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (Ctrl+Space キーを押して表示) を使用し、プロシーチャーのテキストに構文エラーがないことを確認してください。



**PRC1004** パラメーター '{0}' を 2 回指定することはできません。

説明: 示されたパラメーターは、同一プロシージャ・コマンド内で 2 回指定されています。

ユーザーの処置: 示されたパラメーターは、1 つのインスタンスのみ指定してください。

**PRC1005** '{1}' は、パラメーター '{0}' では有効な値ではありません。

説明: 示された値は、示されたパラメーターでは有効ではありません。

ユーザーの処置: 示されたパラメーターには有効な値を指定してください。プロシージャ・コマンドとそのパラメーターについての詳細は、ユーザー・ヘルプの『プロシージャ・コマンド』セクションを参照してください。

**PRC1006** 変数 '{0}' の値を設定することはできません。

説明: 示された変数は手動で設定することはできません。

ユーザーの処置: 有効な変数を指定して再試行してください。

**PRC1008** コマンドの構文解析中にエラーが発生しました: 予期しない行の終わり。

説明: プロシージャの構文解析中に予期しない行の終わりが見つかりました。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (Ctrl+Space キーを押して表示) を使用し、プロシージャのテキストに構文エラーがないことを確認してください。

**PRC1009** コマンドの構文解析中にエラーが発生しました。認識できないコマンドは '{0}' です。

説明: 示されたコマンドは有効ではありません。

ユーザーの処置: プロシージャ・テキストにエラーがないか確認するか、異なるコマンドを指定します。

**PRC1010** 行 {0}-{1} に構文解析エラーがあります (コマンド #{2})。 {3}

説明: プロシージャの構文解析中に構文エラーが検出されました。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト

(Ctrl+Space キーを押して表示) を使用し、プロシージャのテキストに構文エラーがないことを確認してください。

**PRC1011** コマンドの構文解析中にエラーが発生しました: 無効なオブジェクト名 '{0}'。

説明: 示されたオブジェクト名は無効です。

ユーザーの処置: プロシージャ・テキストにエラーがないか確認し、有効なオブジェクト名を指定してください。詳細については、ユーザー・ヘルプの『プロシージャ・コマンド』セクションを参照してください。

**PRC1012** オブジェクト・タイプまたはオブジェクト名を指定してください。

説明: 必須のオブジェクト・タイプまたはオブジェクト名が指定されていません。

ユーザーの処置: プロシージャ・コマンドのテキストでは、必要に応じて、有効なオブジェクト・タイプまたはオブジェクト名を指定してください。詳細については、ユーザー・ヘルプの『プロシージャ・コマンド』セクションを参照してください。

**PRC1013** '{0}' は無効な変数名です。

説明: 示された変数名は無効です。

ユーザーの処置: 変数名に構文エラーがないか確認するか、別の有効な変数を指定してください。詳細については、ユーザー・ヘルプの『プロシージャ・コマンド』セクションを確認してください。

**PRC1014** 終わりに達する前に大括弧を閉じてください。

説明: プロシージャの構文解析中に予期しない閉じ大括弧が見つかりました。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (Ctrl+Space キーを押して表示) を使用し、プロシージャのテキストに構文エラーがないことを確認してください。

**PRC2001** {0} の取得中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたオブジェクトの取得中に示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラーを解決して、プロシージャを再実行してください。

---

**PRC2002** {0} は存在しません。

説明: 示されたオブジェクトは存在しません。

ユーザーの処置: プロシージャー・コマンドでは有効なオブジェクトを指定してください。

---

**PRC2003** {0} は存在しますが、タイプが誤っています。

説明: エディターで開いているウィンドウに、示されたオブジェクトは存在しますが、プロシージャー・コマンドで指定されたオブジェクト・タイプは、このオブジェクトのタイプとは一致しません。

ユーザーの処置: プロシージャー・コマンドで指定したオブジェクト・タイプが、エディターで開いているウィンドウ内のオブジェクトのタイプと一致するか確認してください。

---

**PRC2004** {0} は存在しないか、タイプが誤っています。

説明: エディターのオープン・ウィンドウに、指定されたオブジェクト・タイプのオブジェクトが開かれていないか、オブジェクト・タイプが正しくありません。

ユーザーの処置: プロシージャー・コマンドで指定されたオブジェクト・タイプが、オープン・ウィンドウ内のオブジェクトのタイプに一致するか確認してください。

---

**PRC2005** プロシージャーで現行オブジェクトに対してコマンドが出されましたが、正しいタイプの現行オブジェクトが存在しません。

説明: プロシージャーではオブジェクト・タイプのみを指定し、具体的なオブジェクト名を指定していません。この場合、このタイプのオブジェクトをエディターの別のウィンドウで開けば、プロシージャーは正しく動作します。指定されたタイプのオブジェクトを別のウィンドウで開かなかったために、プロシージャーは実行に失敗しました。

ユーザーの処置: 指定されたタイプのオブジェクトは別のウィンドウで開くか、具体的にオブジェクト名を指定するようにしてください。

---

**PRC2006** {0}

説明: これは折り返されたメッセージです。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**PRC2007** **CONVERT** コマンドは照会に対してのみ発行できます。{0} には適用できません。

説明: 示されたオブジェクトは、**CONVERT** コマンドでは変換できません。

ユーザーの処置: **CONVERT** コマンドで変換する照会を指定してください。詳細については、ユーザー・ヘルプの『プロシージャー・コマンド』セクションの『**CONVERT**』トピックを参照してください。

---

**PRC2008** 操作は取り消されました。

説明: 操作はユーザーによって取り消されました。

ユーザーの処置: 操作を再実行してください。

---

**PRC2011** {0} フォーマットでの保存はサポートされていません。

説明: オブジェクトのエクスポートでは、選択されたフォーマットはサポートされていません。報告書は、**TEXT**、**HTML**、および **PDF** フォーマットでのみエクスポートできます。

ユーザーの処置: プロシージャー・コマンドのエクスポート・データ・フォーマットを変更してください。

---

**PRC2017** プロシージャーのネストの深さの上限を超えました。

説明: 50 レベルを超えてネスト化されたプロシージャーはサポートされていません。

ユーザーの処置: プロシージャーを再設計して、深さを減らしてください。

---

**PRC2018** 指定された照会が結果セットを戻しませんでした。

説明: 結果セットを含まない照会に対して **SAVE DATA** コマンドが発行されました。

ユーザーの処置: 保存しようとしている照会に結果セットが含まれているか確認してください。

---

**PRC2020** サーバーへのオブジェクトを保存中にエラーが発生しました。{0}

説明: サーバーでオブジェクトの保存中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されたエラーを解決して、プロシージャーを再実行してください。

**PRC2022** データが使用不可のため、操作は実行できません。

説明: データを含まないオブジェクトに対して EXPORT DATA コマンドが発行されました。

ユーザーの処置: エクスポートしようとしているオブジェクトにデータが含まれているか確認してください。

**PRC2025** プロシージャは、再帰的に自身を呼び出したため、終了しました。

説明: プロシージャは、再帰的にそれ自身を呼び出しています。再帰はプロシージャではサポートされていません。

ユーザーの処置: プロシージャを書き換えて、再帰を削除してください。

**PRC2026** プロシージャを実行中にエラーが発生しました。 {0}

説明: プロシージャの実行中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されたエラーを解決して、プロシージャを再実行してください。

**PRC2028** {0} ファイルのインポート中にエラーが発生しました。

説明: ファイルのインポート中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: インポート中のオブジェクトがサポート対象のフォーマットか確認してください。

**PRC2029** サーバー {1}; {0} に接続できませんでした。

説明: CONNECT TO コマンドで指定されたデータ・ソース別名は未定義です。

ユーザーの処置: コマンドがリポジトリ内の有効なデータ・ソースを参照しているか確認してください。

**PRC2030** インポート用に指定されたオブジェクト {0} のタイプに互換性がありません。

説明: サポート対象外のタイプを持つオブジェクトに対して、IMPORT または DISPLAY コマンドが発行されました。

ユーザーの処置: インポートするオブジェクトまたは表示するオブジェクトが、有効なタイプのオブジェクトか確認してください。

**PRC2031** 指定されたコマンドまたはそのパラメーターの一部がサポートされていません。

説明: プロシージャにはサポートされないコマンドまたはパラメーターが含まれています。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (Ctrl+Space キーを押して表示) を使用し、プロシージャのテキストに構文エラーがないことを確認してください。

**PRC2032** QMF 以外のオブジェクトを QMF カタログに保存することはできません。

説明: 指定されたオブジェクトは非 QMF オブジェクトであり、QMF カタログには保存できません。

ユーザーの処置: そのオブジェクトを保存するために異なる場所を指定するか、別のオブジェクトを指定して、保存してください。

**PRC2033** {0} の値を設定することはできません。

説明: 示されたパラメーターの値は、SET GLOBAL コマンドで手動で設定することはできません。

ユーザーの処置: DSQ 変数には値を手動で設定できないものがあります

(DSQAO\_CONNECT\_ID、DSQAO\_NUM\_FETCHED など)。プロシージャを書き換えて、これらの変数値を除外してください。

**PRC2035** プリンター名 '{0}' は無効です。

説明: 示されたプリンター名は無効です。

ユーザーの処置: プリンター名のスペルを確認してください。または、PRINT コマンドで異なるプリンターを指定してください。

**PRC2036** このデータ・ソースで表エディターを使用する権限がありません。

説明: データ・ソースの「表の編集を可能にする」リソース限界がオフになっています。そのため、データ・ソースの表エディターを開くことができません。

ユーザーの処置: 管理者にこのリソース限界を使用可能にするように依頼してください。

**PRC2037** このデータ・ソースの表を編集する権限がありません。

説明: データ・ソースの「表の編集を可能にする」リソース限界がオフになっています。そのため、照会のグリッド・セル内の値を編集することができません。

ユーザーの処置: 管理者にこのリソース限界を使用可能にするように依頼してください。

---

**PROC1000 REXX** プロシージャー参照を判別できません。

説明: REXX プロシージャーでは、プロシージャーに対する参照を作成できません。

ユーザーの処置: 「リポジトリ」ビューまたは「ワークスペース」ビューで参照を表示できるのは、一般プロシージャーのみです。

---

**PROC1001** 置換変数の一部が定義されていません。

説明: プロシージャーの置換変数の一部が定義されていません。

ユーザーの処置: プロシージャーのすべての置換変数を定義しているか確認するか、コマンド行で /batch パラメーターを指定しないで、このプロシージャーを実行します。この場合、QMF から必要なすべての変数の値を入力するよう求められます。

---

**QEL00001 LOB** データを戻す照会の実行は許可されていません。

説明: 大きなオブジェクト・データを含む照会の実行は許可されていません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「LOB オプション」リソース限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

---

**QEL00002** 取り出し行数の最大限度を超えました。現在までに {0} 行が検索されました。

説明: 「取り出す最大行数」の限界に到達しました。示された行数はこれまでに取り出された行数です。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「取り出す最大行数」リソース限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

---

**QEL00003** 取り出しバイト数の最大限度を超えました。現在までに {0} バイトが検索されました。

説明: 「取り出す最大バイト数」の限界に到達しました。示されたバイト数はこれまでに取り出されたバイト数です。示された行数はこれまでに取り出された行数です。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限

界」を選択して特定の許可を参照し、「取り出す最大バイト数」リソース限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

---

**QEL00004 LOB** 列の長さが最大許容長を超えています。

説明: 照会結果内の LOB 列の長さが最大許容長を超えています。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「LOB 列の最大サイズ」を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

---

**QEL00005 SQL** 動詞 '{0}' の使用は許可されていません。

説明: 示された SQL 動詞の使用は許可されていません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「SQL 動詞」限界を確認します。あるいは詳細を管理者に尋ねてください。

---

**QEL00006** データベースへのデータの保存は許可されていません。

説明: データベースへのデータの保存は許可されていません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「データの保存」リソース限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

---

**QEN00001** 照会は取り消されました。

説明: アクティブな照会は取り消されました。

ユーザーの処置: 照会を再実行します。

---

**QEN00003** 予期しないトークンです: {0}

説明: ストアード・プロシージャーを呼び出している照会の構文解析中に、予期しないトークンが見つかりました。

ユーザーの処置: 照会の構文にエラーがないか確認してください。

**QEN00004** 予期しないトークン: {0} が期待されていましたが、{1} が見つかりました。

説明: ストアード・プロシージャーを呼び出している照会の構文解析中に、予期しない閉じ大括弧が見つかりました。

ユーザーの処置: 照会の構文にエラーがないか確認してください。

**QEN00005** 予期しないステートメントの終わりが検出されました。

説明: ストアード・プロシージャーを呼び出している照会の構文解析中に、予期しないステートメントの終わりが見つかりました。

ユーザーの処置: 照会の構文にエラーがないか確認してください。

**QEN00006** 式 {0} はストアード・プロシージャーではありません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**QEN00007** ステートメントの終わりが期待されていましたが、{0} が見つかりました。

説明: ストアード・プロシージャーを呼び出している照会の構文解析中に、ステートメントの終わりの後にトークンが見つかりました。

ユーザーの処置: 照会の構文にエラーがないか確認してください。

**QEN00008** サポートされないパラメーター・データ・タイプ: {0}

説明: ストアード・プロシージャーを呼び出している照会の構文解析中に、サポートされないパラメーターが見つかりました。

ユーザーの処置: 照会の構文にエラーがないか確認してください。

**QEN00009** {0} はこのタイプには無効な値です: {1}

説明: ストアード・プロシージャーのパラメーターの値についてプロンプトが出されたとき、ユーザーはそのパラメーターのタイプに有効ではない値を入力しました。

ユーザーの処置: そのパラメーターで有効な値を指定してください。

**QMF1004** ''{0}'' データ・ソースから、オブジェクトを印刷する権限がありません。

説明: 示されたデータ・ソース名は、現行ユーザーによる印刷に制限を持っています。

ユーザーの処置: システム管理者に、印刷用の権限を確認してください。

**QMF1005** QMF カタログ表構造が古くなりました。  
¥n カタログ表を更新する必要があります。

説明: QMF カタログの構造が古いいため、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: システム管理者に QMF カタログのアップグレードを依頼してください。

**QMF1006** ''{0}'' データ・ソースからファイルにデータを保存する権限がありません。

説明: 示されたデータ・ソース名は、現行ユーザーによるデータの保存に制限を持っています。

ユーザーの処置: システム管理者に、データの保存用の権限を確認してください。

**QRL00001** このデータ・ソースにユーザー・インターフェース・モードでアクセスする権限がありません。

説明: このデータ・ソースにユーザー・インターフェース・モードでアクセスする権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「オプション」限界を確認します。あるいは詳細を管理者に尋ねてください。

**QRL00002** このデータ・ソースに自動化モードでアクセスする権限がありません。

説明: このデータ・ソースに自動化モードでアクセスする権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「オプション」限界を確認します。あるいは詳細を管理者に尋ねてください。

---

**QRL00003** 未保存の照会を実行する権限がありません。

説明: 未保存の照会を実行する権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「オプション」限界を確認します。あるいは詳細を管理者に尋ねてください。

---

**QRL00004** このデータ・ソースからファイルにデータを保存する権限がありません。

説明: このデータ・ソースからファイルにデータを保存する権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「データの保存」限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

---

**QRL00005** このデータ・ソースからデータベースにデータを保存する権限がありません。

説明: このデータ・ソースからデータベースにデータを保存する権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「データの保存」限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

---

**QRL00006** **LOB** データを検索する権限がありません。

説明: **LOB** データを検索する権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「**LOB** オプション」限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

---

**QRL00008** ユーザー {0} のリソース・グループが見つかりませんでした。

説明: 示されたユーザーのリソース・グループが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: そのユーザーに有効なリソース・グループを指定してください。

---

**QRL00009** **LOB** データの処理が使用不可のため、操作は実行できません。

説明: **LOB** データの処理が使用不可のため、操作は実行できません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「**LOB** オプション」限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

---

**QRY0999** {0}

説明: これは折り返されたメッセージです。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**QRY1001** 照会は取り消されました。

説明: 操作は取り消されました。

ユーザーの処置: 照会を再実行します。

---

**QRY1002** 無効な見出しレコードがありました。

説明: 照会のロードでエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 照会を再ロードしてください。それ以外の場合、照会は破損しています。

---

**QRY1003** 照会にデータ・ソースの指定がありません。

説明: 照会にデータ・ソースの指定がありません。

ユーザーの処置: 照会にデータ・ソースを指定してください。

---

**QRY1004** 予期しない '**R**' レコードがありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから **R** タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (**Collect Support Data**)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1005** 予期しない '**T**' レコードがありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから **T** record タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (**Collect Support Data**)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1006** 無効な 'T' レコードがありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから T タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1007** 無効な列情報を持つ 'T' レコードがありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから T タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1008** 認識できない表タイプがありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルからレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1009** 表 1110 の 'R' レコードに無効な値がありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1010** 表 1150 の 'R' レコードに無効な値がありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・デ

ータを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1011** 表 1210 の 'R' レコードに無効な値がありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1012** 表 1310 の 'R' レコードに無効な値がありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1013** 表 1410 の 'R' レコードに無効な値がありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1014** 順序外の表 1310 の 'R' レコードがありました。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1015** 無効な 'V' レコードがありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから V タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1016** 指示照会の表は 16 より少なくなければなりません。

説明: 指示照会エディターから呼び出す表は 16 個未満でなければなりません。

ユーザーの処置: 指示照会エディターから呼び出す表を 16 個未満にして、照会を再実行してください。

---

**QRY1017** 複数の表に同じ相関 ID がありました。

説明: 指定された相関 ID に対する PqTable オブジェクトは既に存在します。

ユーザーの処置: 指示照会エディターには別の表を選択してください。

---

**QRY1018** 無効な表相関 ID がありました。

説明: 相関 ID を取得中にエラーが検出されました。

ユーザーの処置: 指示照会エディターに照会を追加するか、「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**QRY1019** 表を結合する列が、照会の複数の表にあります。

説明: 1 つの照会で複数の表を結合するとき、結合列が存在できるのは 1 つの表のみです。

ユーザーの処置: 照会内のすべての結合列が 1 つの表のみに存在しているか確認してください。

---

**QRY1020** 表を結合する列が、照会のどの表にもありません。

説明: 示された結合列が、照会のどの表にもありません。

ユーザーの処置: 結合列にエラーがないか確認するか、異なる結合列を指定します。

---

**QRY1021** 結合表の結合列のタイプが一致しません。

説明: 2 つ以上の表を結合する列は、すべて同じ列タイプでなければなりません。

ユーザーの処置: 単一結合を構成するすべての列が、同じ列タイプか確認してください。

---

**QRY1022** 式に構文エラーがあります: {0}

説明: 示された式に構文エラーが含まれています。

ユーザーの処置: 構文エラーを訂正し、照会を再実行してください。

---

**QRY1023** 行条件に無効な結合子がありました。

説明: 行条件に無効な結合子がありました。

ユーザーの処置: すべての行条件にエラーがないか確認して、照会を再実行してください。

---

**QRY1024** 行条件に無効な式のタイプがありました。

説明: 行条件に無効な式のタイプがありました。

ユーザーの処置: 行条件内のすべての式のタイプにエラーがないか確認して、照会を再実行してください。

---

**QRY1025** 行条件に無効な演算子がありました。

説明: 行条件に無効な演算子がありました。

ユーザーの処置: 行条件内のすべての演算子にエラーがないか確認して、照会を再実行してください。

---

**QRY1026** 選択した関係演算子は数値データには無効です。

説明: 数値データに対する行条件に無効な演算子がありました。

ユーザーの処置: 行条件内のすべての演算子にエラーがないか確認して、照会を再実行してください。

---

**QRY1027** 無効なソート方向がありました。

説明: 無効なソート方向がありました。有効な方向は、「昇順」または「降順」です。

ユーザーの処置: ソートの方向が適用されるすべてのインスタンスを検査して、昇順または降順のいずれかに変更してください。



**QRY1028** 指示照会のフォーマットが以前のバージョンのものであり、現在のバージョンでは移行できない結合条件が含まれています。これらの結合条件は削除されました。

説明: 結合条件は、結合に関与する 2 つの表のうち上位の表にのみ指定できます。また、2 つの表の間に結合条件を持たない 3 番目の表が存在する場合、表は先行する表に結合できません。

ユーザーの処置: 結合配列の要素を再配列して、表の現行順序に一致させてください。

**QRY1029** 表 {0} は存在しません。

説明: 示された表が SQL コードで呼び出されていますが、データ・ソースには存在しません。

ユーザーの処置: 表名にエラーがないか確認するか、異なる表が呼び出されるように指定してください。

**QRY1030** 表名が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

説明: 表名が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

ユーザーの処置: 表名の長さを短縮してください。

**QRY1031** 結合条件で使用されている列名が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

説明: 結合条件で使用されている列名が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

ユーザーの処置: 結合列名の長さを短縮してください。

**QRY1032** 列式が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

説明: 列式が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

ユーザーの処置: 列式名の長さを短縮してください。

**QRY1033** 行条件の式が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

説明: 行条件の式が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

ユーザーの処置: 行条件の長さを短縮してください。

**QRY1034** 無効なレコードが検出されました。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**QRY1035** 指示照会ビューで表示できるのは **SELECT** 照会のみです。

説明: 「指示照会」エディターで表示できるのは、**SELECT** 照会のみです。

ユーザーの処置: 指定された照会に **SELECT** ステートメントが含まれているか確認してください。

**QRY1036** 単純 **SELECT** ステートメントだけがサポートされています。

説明: 単純 **SELECT** ステートメントだけがサポートされています。

ユーザーの処置: 指定された照会は単純 **SELECT** ステートメントのみを含むか確認してください。

**QRY1037** 認識されない表参照。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

**QRY1038** 指示照会ビューでは、副選択のある照会を表示することはできません。

説明: 「指示照会」エディターに表示される照会では、副選択はサポートされません。

ユーザーの処置: 指定された照会が「指示照会」エディターで表示される照会である場合は、照会には副選択を含めないでください。

**QRY1039** 表ロケータ参照はサポートされていません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

**QRY1040** 表関数はサポートされていません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

**QRY1041** 指示照会ビューでの結合でサポートされているのは「および」条件のみです。

説明: 「指示照会」エディターに表示される照会内の結合でサポートされるのは、AND 条件のみです。

ユーザーの処置: 指定された照会の結合が「指示照会」エディターで表示される結合である場合は、結合には AND 条件のみ含まれるようにしてください。

**QRY1042** 比較述部はサポートされていません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

**QRY1043** 「Exists」述部はサポートされていません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

**QRY1044** 単純 LIKE ステートメントだけがサポートされています。

説明: 単純 LIKE ステートメントだけがサポートされています。

ユーザーの処置: 指定された照会は単純 LIKE ステートメントのみを含むか確認してください。

**QRY1045** 単純行条件だけがサポートされています。

説明: 単純行条件だけがサポートされています。

ユーザーの処置: 指定された照会は単純行条件のみを含むか確認してください。

**QRY1046** 式を空にすることはできません。

説明: 照会の構成中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 照会の構文にエラーがないか確認して、再試行してください。

**QRY1047** 照会の保存には無効なタイプです。

説明: 照会に設定されたタイプは無効です。

ユーザーの処置: 照会に有効なタイプを指定するか、「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**QRY1048** 空の照会は実行できません。

説明: 指定された照会には SQL コードが含まれていませんでした。

ユーザーの処置: 照会には少なくとも 1 つの SELECT ステートメントを設定して、再実行してください。

**QRY1049** 置換変数の一部が定義されていません。

説明: 照会を実行したとき、照会内の一部の置換変数に値が指定されていませんでした。

ユーザーの処置: 照会内のすべての置換変数を定義するようにしてください。

**QRY1050** 述部内の行の値を使用する照会を表示することはできません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

**QRY1051** 「XMLExists」述部はサポートされていません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

---

**QRY1052** 無効な値です: {0}。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

---

**QRY1053** 複合照会では **SELECT** ステートメントのみがサポートされています。

説明: 複合照会では **SELECT** ステートメントのみがサポートされています。

ユーザーの処置: 指定された複合照会では、**SELECT** ステートメントのみが呼び出されているか確認してください。

---

**QRY1054** 照会内容は、指示照会のフォーマットと互換性がありません。

説明: 照会は指示フォーマットでは保存できません。

ユーザーの処置: 照会は別のフォーマットで保存してください。

---

**QRY1055** ホスト変数の述部はサポートされていません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

---

**RCO0000** 内部エラー

説明: 内部プロセッサ・エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RCO0001** タイプが一致しません

説明: \*.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RCO0002** 関数 {0} はまだインプリメントされていません

説明: \*.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RCO0003** 未定義変数 {0}

説明: \*.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RCO0004** 変数名がありません

説明: \*.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RCO0005** ¥"{0}¥" 内に構文エラー

説明: \*.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RCO0006** 不明な関数 {0}

説明: \*.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RCO0007** 不明なオブジェクト・タイプ {0}

説明: \*.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの

## RCO0008 • REP01007

収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

### RCO0008 ¥"{0}¥" 内に正しくないパラメーター

説明: \*.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

### RCO0009 データベース・オブジェクト {0} が見つかりません

説明: \*.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

### RCO0010 データベース・エラー {0}

説明: \*.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

### RCO0011 不明なデータベース・サーバー・タイプ {0}

説明: \*.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

### REP01000 {0}

説明: リポジトリへのアクセス中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

### REP01001 入出力エラーが発生しました: {0}

説明: リポジトリで、示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

### REP01002 文字エンコードはサポートされていません: {0}

説明: データの処理中に、示されたエンコード・エラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリ・ストレージ・データベースでは、UTF-8 エンコード方式を使用してください。

---

### REP01003 内部エラーが発生しました: {0}

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

### REP01004 データベースのアクセス中に次のエラーが発生しました: {0}

説明: データベースへのアクセス中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決して、データベースへの接続を再試行してください。

---

### REP01005 操作がサポートされていません。

説明: リポジトリでは指定された演算はサポートされません。

ユーザーの処置: 異なる演算を指定して、再試行してください。

---

### REP01006 そのような ID を持つオブジェクトは見つかりません。

説明: オブジェクトの検索中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 指定されたオブジェクト ID が正しいか確認してください。

---

### REP01007 URL が ¥"{0}¥" のオブジェクトまたはファイルが見つかりません。

説明: 示された URL を持つオブジェクトまたはファイルはありません。

ユーザーの処置: URL にエラーがないか確認するか、異なる URL を指定してください。

---

**REP01008** 操作を実行するための許可が十分ではありません。

説明: ご使用のユーザー ID には、指定された操作を行う権限がありません。

ユーザーの処置: 管理者に権限を確認するか、行う操作を変更してください。

---

**REP01009** 無効なオブジェクト ID のため、操作は取り消されました: {0}

説明: 示されたオブジェクト ID が無効だったので、操作は取り消されました。

ユーザーの処置: 異なるオブジェクト ID を指定して、指定された操作を再試行してください。

---

**REP01010** 接続を開くことができません: {0}

説明: リポジトリ・データベースへの接続を確認しているときに、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリ・データベースがアクセス可能か確認してください。

---

**REP01011** 文書の少なくとも 1 行が 79 文字 (データベースにオブジェクトを保存するときにサポートされる最大値) よりも長くなっています。

説明: データベースに保存するドキュメントに許されている最大文字数は、79 文字です。このドキュメントには、79 文字を超える長さを持つ行が少なくとも 1 つ含まれています。

ユーザーの処置: ドキュメントのすべての行が 79 文字以下か確認して、ドキュメントの保存を再試行してください。

---

**REP01012** {0} は既に存在し、別のタイプを持っています。

説明: 示されたオブジェクト名は、異なるタイプのオブジェクトとして既に存在します。データベース内の各オブジェクトは、異なる名前を持つ必要があります。

ユーザーの処置: オブジェクトに別の名前を指定し、オブジェクトの保存を再試行してください。

---

**REP01013** {0} は存在しません。

説明: 示されたオブジェクトは、データベースに存在しないため見つかりません。

ユーザーの処置: データベース内の検索対象として、異なるオブジェクト名を指定してください。

---

**REP01014** {0} はすでに存在します。

説明: 示されたオブジェクトは、既にデータベースに存在していたため保存できませんでした。

ユーザーの処置: オブジェクトに別の名前を指定し、オブジェクトの保存を再試行してください。

---

**REP01015** {0} のタイプがサポートされていないため、アクセスできません。

説明: 示されたオブジェクトはサポートされないタイプです。

ユーザーの処置: すべての必須プラグインがインストールされ、使用可能になっているか確認してください。

---

**REP01016** オブジェクトが大きすぎるため、操作を行うことができません。

説明: 指定された操作は、指定されたオブジェクトが大きすぎたため実行できませんでした。

ユーザーの処置: 異なるオブジェクトまたは異なる操作を指定して、再試行してください。

---

**REP01017** 正しくない状態または正しくない操作のエラーです。

説明: リポジトリで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**REP01018** ユーザーがリポジトリにログオンしていません。

説明: リポジトリに接続していないため、指定された操作は実行できません。

ユーザーの処置: リポジトリに接続して、再試行してください。

---

**REP01019** 実装されていません。

説明: 実装されていない機能にアクセスしようとして、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 最新バージョンの製品を使用しているか確認してください。

---

**REP01020** 予期しないエラーが発生しました。

説明: リポジトリで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**REP01021** ¥"{0}¥" の初期化中にエラーが発生しました。

説明: リポジトリを初期化しているときにエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリの初期化パラメーターを確認し、再試行してください。

**REP01022** 無効な初期化パラメーター ¥"{0}¥" が指定されました。

説明: リポジトリを初期化しているときにエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリの初期化パラメーターを確認し、再試行してください。

**REP01027** リポジトリ・インスタンスが初期化されていません。

説明: 初期化されていないリポジトリにアクセスしようとして、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリを初期化して、再試行してください。

**REP01028** リポジトリ ¥"{0}¥" が見つかりませんでした。

説明: 示されたリポジトリが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: リポジトリ名にエラーがないか確認するか、異なるリポジトリを指定して、再試行してください。

**REP01029** オブジェクト・タイプ {0} はこのフォルダーに追加できません。

説明: 示されたタイプのオブジェクトは、指定されたフォルダーに追加できません。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクトを追加するための異なるフォルダーを指定してください。

**REP01030** {0} に関して追加認証情報が必要です。

説明: 示されたオブジェクトに関して認証情報が不十分です。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクトに関して追加認証情報を指定し、再試行してください。

**REP01031** リポジトリ・ストレージ表が廃止された構造です。¥n リポジトリ・ストレージ管理者に連絡してください。

説明: 廃止された構造のリポジトリへアクセスを試行したために、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: システム管理者に、リポジトリ・データベース構造をアップグレードするように依頼してください。

**REP01032** 現行 QMF カタログの CCSID 情報が見つかりませんでした。

説明: QMF カタログから CCSID 情報を読み取ろうとしていた時に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 有効な CCSID 情報を指定して、再試行してください。

**REP01034** リポジトリ名 {0} は既に存在します。

説明: 同じ名前前のリポジトリが既に存在するため、リポジトリを作成できません。

ユーザーの処置: 新規リポジトリに異なる名前を指定し、再試行してください。

**REP01035** 不明なオブジェクト・タイプです。

説明: サポートされないオブジェクトにアクセスしようとしているときに、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: すべての必須プラグインがインストールされ、使用可能になっているか確認してください。

**REP01036** オブジェクト {0} はこのフォルダーに追加できません。

説明: 示されたオブジェクトは、指定されたフォルダーに追加できません。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクトを追加するための異なるフォルダーを指定してください。

**REP01037** リポジトリーが見つかりませんでした。

説明: 指定されたリポジトリーが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: リポジトリー名にエラーがないか確認するか、異なるリポジトリー名を指定して、再試行してください。

**REP01038** リポジトリー ID が未定義か、または誤っています。

説明: 非推奨の初期化パラメーターを使用してリポジトリーを初期化しようとしているときに、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「リポジトリー接続の編集」ダイアログでリポジトリー接続プロパティを変更して、再試行してください。

**REP01039** カタログがサーバーにありません

説明: 指定されたサーバーには QMF カタログが存在しません。

ユーザーの処置: 異なるサーバーを指定して、再試行してください。

**REP01042** 所有者 = {0} でのオブジェクトの使用は許可されません。

説明: ご使用のユーザー ID では、示された所有者のオブジェクトを使用する権限がありません。

ユーザーの処置: 異なる所有者のオブジェクトを指定するか、管理者に詳細を尋ねてください。

**REP01043** QMFはこのデータ・ソースにアクセスできません

説明: このアプリケーションはこのデータ・ソースにアクセスできません。

ユーザーの処置: ユーザー・ライセンスを確認し、再試行してください。

**REP01044** QMF カタログの制限違反により、データ・ソース '{0}' へのアクセスがブロックされました。¥

説明: QMF カタログの保護限界によって課せられた制限のため、示されたデータ・ソースへのアクセスがブロックされました。

ユーザーの処置: 異なるデータ・ソースを指定してアクセスするか、管理者に詳細を尋ねてください。

**REP01045** 関連する QMF カタログ・データ・ソースが見つかりませんでした: {0}

説明: 示された QMF カタログ・データ・ソースが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: データ・ソース名にエラーがないか確認するか、異なるデータ・ソースを指定して、再試行してください。

**REP01046** 接続が見つかりません: {0}

説明: 示されたりポジトリー接続が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 異なるリポジトリー接続を指定して、再試行してください。

**REP01047** データ・ソースが見つかりません: {0}

説明: 示されたデータ・ソースが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 異なるデータ・ソース接続を指定して、再試行してください。

**REP01049** オブジェクト名は {0} 文字を超えることはできません。

説明: 示されたオブジェクト名は、最大文字数の制限を超えています。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクト名を短くして、再試行してください。

**REP01050** オブジェクト・パスは {0} 文字を超えることはできません。

説明: 示されたオブジェクト・パスは、文字数の制限を超えています。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクト・パスを短くして、再試行してください。

**REP01051** リポジトリー ¥"{0}¥" は、QMF の別のインスタンスで使用されているため、接続できません。別のリポジトリーを選択してください。

説明: 示されたりポジトリーは、アプリケーションの別のインスタンスで使用されているため、接続できません。

ユーザーの処置: 異なるリポジトリー接続を選択して、再試行してください。

**REP01052** データ・ソースのプラグイン ¥"{0}¥" は適切に初期化されませんでした。

説明: 示されたプラグインは適切に初期化されませんでした。

ユーザーの処置: プラグイン・パラメーターを変更してください。

**RGEN1000** 報告書の生成中にエラーが発生しました: {0}

説明: 報告書の生成中に、示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決して、報告書を生成し直してください。

**RGEN1001** アクションは取り消されました。

説明: 指定されたアクションは取り消されました

ユーザーの処置: 指定されたアクションを再実行してください。

**RGEN1002** 書式の列数が照会の列数と一致しません。

説明: 書式の列数が、関連付けられた照会の列数と一致しません。

ユーザーの処置: 書式の列数を編集して、関連付けられた照会の列数と一致させてください。

**RGEN1003** 内部エラー。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RGEN1004** 書式の列数が照会の列数と一致しません。

説明: 書式の列数が、関連付けられた照会の列数と一致しません。

ユーザーの処置: 書式の列数を編集して、関連付けられた照会の列数と一致させてください。

**RGEN1005** データ・ソース・オブジェクトが指定されていません。

説明: 報告書にデータ・ソース・オブジェクトが指定されていません。

ユーザーの処置: 報告書にデータ・ソース・オブジェクトが指定して、再試行してください。

**RLE00002** タイプ {0} のリソース限界を検索できません。

説明: 示されたタイプのリソースを取得できません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RLE00003** リソース限界をリモート・サイトから検索中にエラーが発生しました: {0}

説明: リモート・サイトからリソース限界の取得中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**RLE00004** 不明なリソース限界キーが限界の検索に使用されました。

説明: リソース限界を検索中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RLE00005** リソース限界の取得中にエラーが発生しました: {0}

説明: リソース限界の取得中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**RLE00006** リソース限界キーの内容が壊れているため、リソース限界を検索できません。 {0}

説明: リソース限界の取得中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**RLE00007** リソース限界の取得中に、次のエラーが発生しました: {0}

説明: リソース限界の取得中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラーを解決し、再試行してください。



**RLE00008** データ・ソースにアクセスできません。

説明: ご使用のユーザー ID には、データ・ソースにアクセスする権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して、リソース限界を確認してください。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

**RLE00009** LOB データの保存は拒否されます。

説明: ご使用のユーザー ID には、LOB データを含むオブジェクトを保存する権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して、「LOB オプション」リソース限界を確認してください。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

**RLE00010** このサーバーで権限があるのは、保存済みの照会を実行することだけです。

説明: 現行サーバーとの接続中は、保存された照会の実行のみが許可されます。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して、「データの保存」リソース限界を確認してください。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

**RLE00011** このサーバーでオブジェクトを保存する権限がありません。

説明: 現行サーバーとの接続中は、オブジェクトを保存する権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して、「データの保存」リソース限界を確認してください。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

**RLE00012** データ・ソース にアクセスする権限がありません。{0}

説明: ご使用のユーザー ID では、示されたデータ・ソースにアクセスする権限がありません。

ユーザーの処置: 別のデータ・ソースに接続するか、管理者に特定の許可に関する情報を尋ねてください。

**RLE00013** データ・ソース にアクセスする権限がありません。{0}

説明: ご使用のユーザー ID では、示されたデータ・ソースにアクセスする権限がありません。

ユーザーの処置: 別のデータ・ソースに接続するか、管

理者に特定の許可に関する情報を尋ねてください。

**RLW00001** {0} 行が検索されました。取り出す最大行数の警告限界を超えています。

説明: 示された数の行が検索され、「取り出す最大行数」限界が警告限界に達しました。

ユーザーの処置: 「OK」をクリックして、照会を続行します。「アボート」をクリックして、照会を打ち切ります。「無視」をクリックして、警告を無視します。

**RLW00002** {0} バイトが取り出されました。取り出す最大バイト数の警告限界を超えています。

説明: 示された数のバイトが取り出され、「取り出す最大バイト数」限界が警告限界に達しました。

ユーザーの処置: 「OK」をクリックして、照会を続行します。「アボート」をクリックして、照会を打ち切ります。「無視」をクリックして、警告を無視します。

**RLW00003** {0},{1} から {2} 秒間応答がありません。

説明: 「サーバー応答タイムアウト」限界に到達したので、照会は取り消されました。示された長さの待機時間が経過しても、示されたサーバーから応答がありませんでした。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して「サーバー応答タイムアウト」リソース限界を確認するか、サーバーのトラフィックが軽いときにサーバーへの接続を試行してください。

**RLW00004** 照会は {0} 秒間アイドル状態です。

説明: 照会は示された秒数アイドル状態だったため、「アイドル照会タイムアウト」警告限界に到達しました。

ユーザーの処置: 「OK」をクリックして、照会を続行します。「アボート」をクリックして、照会を打ち切ります。「無視」をクリックして、警告を無視します。

**RLW00005** アイドル照会タイムアウト限界を超えたので、照会は取り消されました。

説明: アイドル照会タイムアウト限界を超えたので、照会は取り消されました。

ユーザーの処置: サーバー・トラフィックが低下したら、照会を再実行してください。

---

**RLW00006** **LOB** データの処理が使用不可のため、操作は実行できません。

説明: この操作は「LOB 検索オプション」リソース限界が使用不可になっているため実行できません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して、「LOB 検索オプション」リソース限界を確認してください。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

---

**RPT00001** レベル・コンポーネントを処理できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT00002** 報告書にメインページがありません。

説明: ビジュアル報告書にメインページがありません。

ユーザーの処置: 報告書にはメインページを含めてください。

---

**RPT00003** グループ式 '{0}' が正しくありません。

説明: 示された式は、存在しない列を参照しています。

ユーザーの処置: 式が有効な列を参照するようにしてください。

---

**RPT00014** **BLOB** ロケーターが初期化されていませんでした。

説明: BLOB ロケーターの取得中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリに再接続して、再試行してください。

---

**RPT00015** 照会結果が初期化されていません。

説明: 照会結果が初期化されていませんでした。

ユーザーの処置: リポジトリに再接続して、再試行してください。

---

**RPT00033** 内部 **swing** レンダラー・エラー: 完了が早すぎます。

説明: 線オブジェクトが正しくありません。

ユーザーの処置: 線オブジェクトを削除し、それをデザイナーで再作成してください。

---

**RPT00034** 内部 **swing** レンダラー・エラー: セグメント・タイプが正しくありません。

説明: 線オブジェクトが正しくありません。

ユーザーの処置: 線オブジェクトを削除し、それをデザイナーで再作成してください。

---

**RPT00035** レポーター・エンジンで内部エラーが発生しました。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT00037** 無効な引数が使用されました: 行および列は正またはゼロでなければなりません。

説明: HTML または SWF レンダリング・モードで表示すると、格子内の行または列の長さがゼロ未満になっています。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

---

**RPT00038** パラメーター {0} はすでに存在します。

説明: 指定されたパラメーターは既に存在します。

ユーザーの処置: 新規のパラメーターには新規の名前を指定してください。

---

**RPT00039** ランタイム・コンテンツを提供するためにビジュアル・ダッシュボードで 1 つ以上の式を処理できません。

説明: レンダラーが、未定義のシーンのレンダリングを試みました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

---

**RPT00040** 選択した報告書形式のレンダラーがエラーを生成しました。出力内容は作成されていません。

説明: 選択した報告書形式のレンダラーがエラーを生成しました。出力内容が作成されませんでした。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを別のレンダリング・モードで表示するか、ビジュアル・プロジェクトを再ロードします。

---

**RPT00041** 内部エラー: レポーター・エンジンを作成できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT00042** 以前に保存されたビジュアル・プロジェクト・データを構文解析できません。

説明: ビジュアル・プロジェクトのデータが破損しています。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT00043** ビジュアル・ダッシュボード定様式ファイルが見つかりません。

説明: {CONFIG\_DIR}/converter/repository/world.xml が見つからないか、読み取れません。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

---

**RPT00044** ビジュアル・ダッシュボード定様式ファイルを読み取ることができません。

説明: {CONFIG\_DIR}/converter/repository/world.xml が見つからないか、読み取れません。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

---

**RPT00045** ビジュアル・ダッシュボード・シーンを読み取ることができません。

説明: ビジュアル・プロジェクトのデータが破損しています。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT00048** オブジェクト {0} をシリアル化できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・デ

ータを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT00049** 内部シリアライゼーション・エラー: {0} オブジェクト・クラスのタグがありません。

説明: シリアライゼーション・プロセスでは、示されたクラスのタグ記述が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

---

**RPT00050** 不明なパラメーター・タイプです。

説明: シリアライゼーション・プロセスで、不明なパラメーター・タイプが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

---

**RPT00051** 無効なアクション・タイプです。

説明: ビジュアル・プロジェクトのロード中に、不明なアクション・タイプが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

---

**RPT00052** 組み込みビジュアル・ダッシュボード・ピクチャーが壊れています。

説明: ビジュアル・ダッシュボード内の組み込み画像が破損しており、開くことができません。

ユーザーの処置: ビジュアル・ダッシュボード内のすべての組み込み画像を確認して、破損しているものがあれば削除してください。

---

**RPT00053** カラー値が無効です。

説明: ColorMap または ColorSequence のロード中に破損したタグが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

---

**RPT00054** カラー・マップのしきい値が無効です。

説明: ColorMap または ColorSequence のロード中に破損したタグが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

---

**RPT00055** 無効なイベント・タイプです。

説明: 不明なイベント・タイプが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

---

**RPT00056** イメージ別名が欠落しています。

説明: 不明なイメージが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

---

**RPT00057** 無効な番号値です。

説明: ビジュアル・プロジェクトのロード中に、数値を含むはずのストリングに数字が含まれていないことがわかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードするか、異なるロケールで再試行してください。

---

**RPT00058** 無効な日付値です。

説明: ビジュアル・プロジェクトのロード中に、日付値を含むはずのストリングに日付値としては解析できない文字が含まれていることがわかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードするか、異なるロケールで再試行してください。

---

**RPT00059** 無効なポイント値です。

説明: ビジュアル・プロジェクトのロード中に、点の値を含むはずのストリングに点の値としては解析できない文字が含まれていることがわかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

---

**RPT00060** ビジュアル・ダッシュボードを読み取ることができません。

説明: ビジュアル・ダッシュボードのロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ビジュアル・ダッシュボードを再ロードしてください。

---

**RPT00061** (表示される可能性のあるメッセージは複数あります。『説明』を参照)

説明:

1. 照会別名が欠落しています。 - ビジュアル・プロジェクトのロード中に照会の NAME タグを持たない照会が見つかりました。

2. オフラインのビジュアル報告書をファイルに保存できません。 - オフライン・ビジュアル報告書をファイルに保存できません。

ユーザーの処置:

1. ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。
  2. ビジュアル報告書は、ファイルに保存する前に、オンライン報告書に変換してください。
- 

**RPT10001** ソース **Visionary** ワールド・ファイルが指定されていません。

説明: Visionary ワールド・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルが存在し、読み取ることができるか確認してください。

---

**RPT10002** 構成ディレクトリーが指定されていません。

説明: コンバーターの構成ディレクトリーが見つかりません。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

---

**RPT10003** ソース **Visionary** ワールド・ファイルが見つかりません。

説明: Visionary ワールド・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルが存在しているか確認してください。

---

**RPT10004** 構成ディレクトリーが見つかりません。

説明: コンバーターの構成ディレクトリーが見つかりません。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

---

**RPT10005** 構成ファイル {0} が見つかりません。

説明: コンバーターの構成ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

---

---

**RPT10006** Visionary 接続ファイルがフォルダー {0} に見つかりません。

説明: Visionary 接続ファイルが正しいロケーションにありません。

ユーザーの処置: すべての Visionary ワールド・ファイルが正しいロケーションに保存されているか確認してください。

---

**RPT10007** Visionary 照会ファイル {0} を読み取ることができません。

説明: 照会で指定された Visionary ワールド・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: すべての Visionary ワールド・ファイルが正しいロケーションに保存されているか確認してください。

---

**RPT10008** Visionary シーン・ファイル {0} が見つかりません。

説明: 示されたシーン・ファイルが正しいロケーションに保存されていません。

ユーザーの処置: すべての Visionary ワールド・ファイルが正しいロケーションに保存されているか確認してください。

---

**RPT10009** イメージ・ファイル {0} を読み取ることができません。

説明: 示された名前指定されたイメージ・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: すべての Visionary ワールド・ファイルが正しいロケーションに保存されているか確認してください。

---

**RPT10010** ピクチャー・ファイル {0} は大きすぎます。

説明: 示されたピクチャー・ファイルは大きすぎます。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトで使用できるように、もう少し小さなピクチャー・ファイルを指定してください。

---

**RPT10011** XML 構文解析エラー。

説明: Visionary ワールドを変換しているときに、XML 構文解析エラーが見つかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを Visionary に保存して、再試行してください。

---

**RPT10012** XML 読み取りエラー。

説明: XML データの読み取り中に入出力エラーが発生しました。

ユーザーの処置: XML データの変換を再試行してください。

---

**RPT10013** ビジュアル・ダッシュボード・オブジェクトを作成できません。

説明: Visionary ワールド・ファイルの変換中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルの変換を再試行してください。

---

**RPT10014** 構成ファイル {0} を構文解析できません。

説明: コンバーター構成ファイルの構文解析中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

---

**RPT10015** 接続用のビジュアル・ダッシュボードが指定されていません。

説明: Visionary ワールド・ファイルが正しくロードされませんでした。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10016** 無効な色の記述が見つかりました。

説明: ColorMap または ColorSequence のロード中に破損したタグが見つかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10017** 無効なカラー・マップ記述が見つかりました。

説明: ColorMap のロード中に破損したタグが見つかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10018** 不明なタグです: {0}

説明: Visionary ワールド・ファイルを変換しているときに、不明なタグが見つかりました。

## RPT10019 • RPT10032

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルの変換を再試行してください。

---

**RPT10019** 無効なシーン・テンプレート記述です。

説明: Visionary ワールド・シーン・ファイルのロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・シーン・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10020** 破壊されたプロパティ値が見つかりました。

説明: プロパティ・タグに正しくないフォーマットまたは破損した値が指定されました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10021** 無効な URL またはパス形式: ''{0}''

説明: 示された URL またはパス形式は無効です。

ユーザーの処置: URL にエラーがないか確認するか、異なる URL を指定してください。

---

**RPT10022** 不明またはサポートされないイベント・タイプ

説明: 破損したイベント・タイプまたは不明なイベント・タイプが見つかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10023** 式に関数名がありません

説明: 式に関数名がありません。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10024** 関数の引数を構文解析できません

説明: Visionary ワールド・ファイルのロード中に、関数引数を構文解析できませんでした。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10025** 無効なシーン・テンプレート記述です。

説明: Visionary ワールド・シーン・ファイルのロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10026** 数値を構文解析できません: {0}

説明: Visionary ワールド・ファイルのロード中に、数値を含むはずのストリングに数字が含まれていないことがわかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10027** PointSet コンポーネント XML が壊れています。

説明: Visionary ワールド・ファイルのロード中に、点の値を含むはずのストリングに PointSet の値としては解析できない文字が含まれていることがわかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10028** 不明な式タイプ {0} です。

説明: Visionary ワールド・ファイルのロード中に不明な式タイプが見つかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10029** 1 つ以上の照会に別名がありません。

説明: Visionary ワールド・ファイルの変換中に、名前プロパティを含まない照会別名タグが見つかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10031** ポイント値を構文解析できません。

説明: Visionary ワールド・ファイルのロード中に、点の値を含むはずのストリングに PointSet の値としては解析できない文字が含まれていることがわかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

---

**RPT10032** Visionary ワールド XML が壊れています。

説明: Visionary ワールド・ファイルのロード中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

**RPT10033** 内部エラー: **Visionary** ワールドにアクセスできません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RPT10034** パラメーター {0} をビジュアル・ダッシュボードに追加できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RPT20001** ビジュアル報告書変換中はリポジトリにアクセスできません。

説明: ビジュアル報告書変換中はリポジトリにアクセスできません。

ユーザーの処置: リポジトリに接続していないことが原因の可能性もあります。接続していることを確認して、再試行してください。

**RPT20002** ソース・ビジュアル報告書ファイルが指定されていません。

説明: ソース・ビジュアル報告書ファイルが指定されていません。

ユーザーの処置: ソース・ビジュアル報告書ファイルを指定してください。

**RPT20003** ソース・ビジュアル報告書ファイルが見つかりません。

説明: ソース・ビジュアル報告書ファイルが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 有効なソース・ビジュアル報告書ファイルを指定してください。

**RPT20004** ビジュアル報告書名が指定されていません。

説明: ビジュアル報告書名が指定されていません。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書の名前を指定してください。

**RPT20005** ビジュアル報告書を作成できません。

説明: ビジュアル報告書の生成中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

**RPT20006** 組み込みイメージを開くことができません。

説明: 組み込みイメージ・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

**RPT20007** 不明なセクション・タイプです: {0}

説明: ビジュアル報告書のロード中に、セクションのセットとタイプの構造が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

**RPT20008** ビジュアル報告書ページ・コンポーネントを作成できません。

説明: 構文解析を行って、ページ・コンポーネントを作成しているときにエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

**RPT20009** 内部エラー: ビジュアル報告書にアクセスできません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RPT20011** 行コントロールの行のスタイルを設定できません。

説明: ビジュアル報告書のロード中に、未定義の線種が見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

**RPT20012** 無効なリンクされたピクチャー別名がビジュアル報告書に見つかりました。

説明: ビジュアル報告書のデータの構文解析中に、名前のないピクチャーへのリンクが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

---

**RPT20013** ビジュアル報告書コントロールを作成できません。

説明: プリミティブ・オブジェクトまたはコントロール・オブジェクトのロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

---

**RPT20015** 無効なパラメーター名 '{0}' が見つかりました。

説明: パラメーター値が無効です。

ユーザーの処置: 示されたパラメーターに別の名前を指定してください。

---

**RPT20016** 無効なパラメーター値 '{0}' が見つかりました。

説明: パラメーター値が無効です。

ユーザーの処置: 示されたパラメーターに別の値を指定してください。

---

**RPT30001** 組み込みシーンヘナビゲート: 名前 '{0}' の組み込みシーンが見つかりません。

説明: 示された組み込みシーンが見つからなかったため、「組み込みシーンヘナビゲート」アクションが失敗しました。

ユーザーの処置: 「組み込みシーンヘナビゲート」アクションに関連付けられた組み込みシーンの名前を訂正するか、別の組み込みシーンを指定してください。

---

**RPT30002** 前のページのロード: 出口アクションを実行できません (おそらく履歴が空です)。

説明: 「前のページのロード」アクションに失敗しました。ナビゲーションの履歴が空の可能性がります。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードして、再試行してください。

---

**RPT30021** **DesignReporter: LevelTemplate** が **NULL** です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT30022** **DesignReporter: 不明なコンポーネント {0}** です。

説明: 実行時のレンダリングで、不明なコンポーネントを検出しました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

---

**RPT30024** テンプレートが無効です。 **FillStyle** または **LineStyle** プロパティーが **NULL** です。

説明: Wedge テンプレートの変更のための置換規則の実行中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: FillStyle プロパティーおよび LineStyle プロパティーにエラーがないか確認してください。

---

**RPT30025** テンプレートが無効です。 高さ == {0}!

説明: テンプレートの変更のための置換規則の実行中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: Height プロパティーにエラーがないか確認してください。

---

**RPT30026** テンプレートが無効です。 幅 == {0}!

説明: テンプレートの変更のための置換規則の実行中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: Width プロパティーにエラーがないか確認してください。

---

**RPT30028** パッケージ {0} およびロケール {1} のリソースをロードできません。

説明: リソースのバンドルが見つかりません。

ユーザーの処置: アプリケーションを再始動します。それでも問題が解決しない場合は、アプリケーションを再インストールしてください。

---

**RPT30029** パッケージ {1} からのリソース・ストリング '{0}' の要求が失敗しました。

説明: リソース・ストリングの要求中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: アプリケーションを再始動します。それでも問題が解決しない場合は、アプリケーションを再インストールしてください。



**RPT30035** `OutputComponentCreator` が {0} のマップにありません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RPT30038** {0} が見つかりませんでした。

説明: 「接続」フォルダー内のオブジェクトの 1 つが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: プロジェクトを再ロードするか、接続を削除して、再試行してください。

**RPT30040** 図表が照会結果セットを読み取れません。

説明: `ClusterGraph`、`OrganizationChart`、または `TreeChart` の作成中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリに再接続して、ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

**RPT30042** エラー - `axisLength` が無限になっています。 `totalPercentages:{0}`  
`m_sceneRuntimePanel.getZoomFactor()`  
{1}

説明: 軸の `PercentageLength` プロパティーの値が無効です。

ユーザーの処置: 軸の `PercentageLength` プロパティーの値にエラーがないか確認してください。

**RPT30044** チェック・ボックスの値が不明です: {0}。

説明: `UNCHECKED`、`CHECKED`、または `INDETERMINATE` 以外の値が指定されました。

ユーザーの処置: チェック・ボックスに値を設定するアクションでは、そこに必ず `UNCHECKED`、`CHECKED`、または `INDETERMINATE` を設定するようにしてください。

**RPT30045** 不明な `m_style` です: {0}。

説明: `ComboBox` オブジェクトで、無効なスタイル・プロパティーが指定されました。

ユーザーの処置: `ComboBox` オブジェクトのスタイル・プロパティーのエラーについて確認してください。

**RPT30047** 線が水平でも垂直でもありません。

説明: `ElbowConnector` オブジェクトのセグメントに、垂直または水平のいずれも設定されていません。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

**RPT30048** サポートされないセグメント・タイプです: {0}。

説明: `ElbowConnector` オブジェクトにサポートされないセグメント・タイプが検出されました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

**RPT30049** コーナー・タイプを取得できませんでした。最終: {0} 開始: {1} 終了: {2}。

説明: 線分の開始座標および終了座標が、`ElbowConnector` オブジェクトのコーナーを定義していません。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードするか、`ElbowConnector` オブジェクトを削除して、再作成してください。

**RPT30050** ここに来てはいけません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RPT30052** 不明な水平位置合わせです: {0}。

説明: オブジェクトの `HorizontalAlign` プロパティーに、`LEFT`、`RIGHT`、または `CENTER` 以外の値が見つかりました。

ユーザーの処置: オブジェクトの `HorizontalAlign` プロパティーの値を設定するアクションでは、そこに `LEFT`、`RIGHT`、または `CENTER` の値を設定するようにしてください。

**RPT30053** 不明な垂直位置合わせです: {0}。

説明: オブジェクトの `VerticalAlign` プロパティーに、`TOP`、`BOTTOM`、または `CENTER` 以外の値が見つかりました。

ユーザーの処置: オブジェクトの `VerticalAlign` プロパティーの値を設定するアクションでは、そこに `TOP`、

BOTTOM、または CENTER の値を設定するようにしてください。

---

**RPT30054** 不明なロケーション・アンカーです: {0}。

説明: オブジェクトの LocationAnchor プロパティに、BOTTOMLEFT、LEFTCENTER、TOPLEFT、BASELINELEFT、BOTTOMCENTER、CENTER、TOPCENTER、BASELINECENTER、BOTTOMRIGHT、RIGHTCENTER、または BASELINERIGHT 以外の値が見つかりました。

ユーザーの処置: オブジェクトの LocationAnchor プロパティの値を設定するアクションでは、そこに BOTTOMLEFT、LEFTCENTER、TOPLEFT、BASELINELEFT、BOTTOMCENTER、CENTER、TOPCENTER、BASELINECENTER、BOTTOMRIGHT、RIGHTCENTER、または BASELINERIGHT の値を設定するようにしてください。

---

**RPT30055** 不明な arrowheadStyle です: {0}。

説明: 矢印オブジェクトの MarkerShape プロパティに、NONE、TRIANGLE、CIRCLE、DIAMOND、または SWEPTPOINTER 以外の値が見つかりました。

ユーザーの処置: 矢印オブジェクトの MarkerShape プロパティの値を設定するアクションでは、そこに NONE、TRIANGLE、CIRCLE、DIAMOND、または SWEPTPOINTER の値を設定するようにしてください。

---

**RPT30056** 不明なマーカー形状です: {0}。

説明: データ・ポイント・オブジェクトの MarkerShape プロパティに、HOLLOWCIRCLE、HOLLOWDIAMOND、HOLLOWSTAR、HOLLOWTRIANGLE、HOLLOWTRIANGLE2、HOLLOWPLUS、SOLIDCIRCLE、SOLIDDIAMOND、SOLIDSQUARE、SOLIDTRIANGLE、SOLIDTRIANGLE2、SOLIDSTAR、SOLIDPLUS、CROSS、PLUS、BOXCROSS、または BOXPLUS 以外の値が見つかりました。

ユーザーの処置: データ・ポイント・オブジェクトの MarkerShape プロパティの値を設定するアクションでは、そこに HOLLOWCIRCLE、HOLLOWDIAMOND、HOLLOWSTAR、HOLLOWTRIANGLE、HOLLOWTRIANGLE2、HOLLOWPLUS、SOLIDCIRCLE、SOLIDDIAMOND、SOLIDSQUARE、SOLIDTRIANGLE、SOLIDTRIANGLE2、SOLIDSTAR、SOLIDPLUS、CROSS、PLUS、BOXCROSS、または BOXPLUS の値を設定するようにしてください。

---

**RPT30060** 不明な attachmentStyle です: {0}。

説明: コネクター・オブジェクトの AttachmentStyle プロパティに、TOPLEFT、TOPCENTER、TOP、TOPRIGHT、CENTERLEFT、CENTER、CENTERRIGHT、BOTTOMLEFT、BOTTOMCENTER、BOTTOM、または BOTTOMRIGHT 以外の値が見つかりました。

ユーザーの処置: コネクター・オブジェクトの AttachmentStyle プロパティの値を設定するアクションでは、そこに TOPLEFT、TOPCENTER、TOP、TOPRIGHT、CENTERLEFT、CENTER、CENTERRIGHT、BOTTOMLEFT、BOTTOMCENTER、BOTTOM、または BOTTOMRIGHT の値を設定するようにしてください。

---

**RPT30061** 不明な表の枠タイプ: {0}。

説明: オブジェクトの BorderType プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの BorderType プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30062** 不明な m\_horizontalAlign です: {0}。

説明: 表セルの HorizontalAlign プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: 表セルの HorizontalAlign プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30063** 不明な m\_verticalAlign です: {0}。

説明: 表セルの VerticalAlign プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: 表セルの VerticalAlign プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30064** 不明な表の枠タイプ: {0}。

説明: 表の Border プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: 表の Border プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30065** 不明な scrollBarStyle です: {0}。

説明: オブジェクトの ScrollBarStyle プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの ScrollBarStyle プロ

パーティーに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30066** 不明な **AlignmentStyle** です: {0}。

説明: テキスト・ボックス・オブジェクトの **AlignmentStyle** プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: テキスト・ボックス・オブジェクトの **AlignmentStyle** プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30068** 不明な **LineStylePattern** です: {0}。

説明: オブジェクトの **LineStylePattern** プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの **LineStylePattern** プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30069** 不明なグラジエント・タイプです: {0}。

説明: オブジェクトの **GradientType** プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの **GradientType** プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30070** 不明な **borderType** です: {0}。

説明: テキスト・ボックス・オブジェクトまたは組み込みシーン・オブジェクトの **BorderType** プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: テキスト・ボックス・オブジェクトまたは組み込みシーン・オブジェクトの **BorderType** プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30071** 不明な **imageAnchor** です: {0}。

説明: オブジェクトの **ImageAnchor** プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの **ImageAnchor** プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30072** 組み込みシーン: 不明な **scrollBarStyle**。

説明: 組み込みシーン・オブジェクトの **ScrollBarStyle** プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: 組み込みシーン・オブジェクトの

**ScrollBarStyle** プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30073** 組み込みシーン: 不明な **typeOfFind**: {0}。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (**Collect Support Data**)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT30076** クライアントによって選択されたセルが見つかりません。

説明: HTML レンダリング・モードのとき、アクションは実行できません。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

---

**RPT30077** グリッド・セルのクリック・イベントがディスパッチできませんでした。

説明: HTML レンダリング・モードのとき、アクションは実行できません。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

---

**RPT30079** 不明なページ型です - {0}。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サービスに転送してください。

---

**RPT30082** パラメーター・グループ複製問題 {0}。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (**Collect Support Data**)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT30083** クラスが {0} のマップにありません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (**Collect Support Data**)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT30088** オブジェクトをシリアルライズできません: {0}。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT30089** 値は正でなければなりません: {0}。

説明: 示された値は正の整数でなければなりません。

ユーザーの処置: 示された値が正の整数になるようにしてください。

---

**RPT30090** ズームが {0} のとき、レベルが NULL でした。

説明: 示されたズームのパーセンテージにレベルが指定されていません。

ユーザーの処置: 示されたズームのパーセンテージにレベルを指定してください。

---

**RPT30091** 図表が親列を見つけられません: {0}。

説明: 結果セットに、示された親列が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: グループの DataLocator プロパティに有効な列名を指定してください。

---

**RPT30092** 図表が子列を見つけられません: {0}。

説明: 結果セットに、示された子列が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: グループの DataLocator プロパティに有効な列名を指定してください。

---

**RPT30095** 階層図には DataTemplate の子が 1 つ必要です。

説明: 階層図には DataTemplate の子が 1 つ必要です。

ユーザーの処置: 「プロジェクト・エクスプローラー」を確認し、階層図のみが DataTemplate の子を 1 つ持っているか確認してください。

---

**RPT30096** CurrentRowIndex が 0 を下回っています。

説明: 指定された行のインデックスがゼロ未満です。行

のインデックスはゼロ以上の整数でなければなりません。

ユーザーの処置: 指定された行のインデックスがゼロ以上の整数であることを確認してください。

---

**RPT30097** 不明な間隔です: {0}。

説明: オブジェクトの DateAxis プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの DateAxis プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30098** 未処理の間隔です: {0}。

説明: オブジェクトの DateAxis プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの DateAxis プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30099** 不明な dateInterval です: {0}。

説明: オブジェクトの DateAxis プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの DateAxis プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

---

**RPT30104** ここに来てはいけません - roundIncrement: {0} power: {1}。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT30105** グループ・ヘッダーのグループ名が未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RPT30106** グループ脚注のグループ名が未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RPT30107** `m_templateRows` に {0} が含まれていません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RPT30109** 組み込みシーン: 名前 {0} のリンクが見つかりません。

説明: 組み込みシーンの `LinkedScene` プロパティの値が無効です。

ユーザーの処置: 組み込みシーンがリンクされたシーンが存在し、リンク・テキストが正しいか確認してください。

**RPT30111** コンポーネント {0} のクローンを作成できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RPT30112** コンポーネント {1} のプロパティ {0} のタイプは {2} ではないと思われます。

説明: 示されたオブジェクトのプロパティは、無効なタイプです。

ユーザーの処置: プロパティに値を設定するアクションまたは式では、有効な値を設定するようにしてください。

**RPT30114** コンポーネント {0} の `swing` 出力を作成できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・デ

ータを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RPT30117** コンポーネント {0} はアクション {1} をサポートしていません。

説明: 示されたコンポーネントは示されたアクションをサポートしていません。

ユーザーの処置: コンポーネントに異なるアクションを指定して、再試行してください。

**RPT30118** コンポーネント {0} はプロパティ {1} をサポートしていません。

説明: 示されたコンポーネントは示されたプロパティをサポートしていません。

ユーザーの処置: 異なるプロパティを指定して、再試行してください。

**RPT30120** (表示される可能性のあるメッセージは複数あります。『説明』を参照)

説明:

1. グローバル・パラメーター '{0}' は存在しない - 示されたグローバル・パラメーターは存在しません。
2. 照会 '{0}' に '{1}' という名前の列がない - 示された照会には示された列が存在しません。

ユーザーの処置:

1. グローバル・パラメーター名にエラーがないか確認するか、異なるグローバル・パラメーターを指定します。
2. 列名にエラーがないか確認するか、異なる列名を指定します。

**RPT30121** 照会 '{1}' の結果セット索引 '{0}' は、境界外です。

説明: レイアウト・オブジェクトの `ResultSetIndex` に無効な値が設定されました。

ユーザーの処置: レイアウト・オブジェクトの `ResultSetIndex` プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

**RPT30122** キー '{0}' を持つ照会は存在しません。

説明: 示されたキーを持つ照会はリポジトリ内に存在しません。

ユーザーの処置: 「リポジトリ・エクスプローラー」または「ワークスペース」ビューで照会选择し、「プロパティ」ビューからキーの値をコピー・アンド・ペ

ーストするか、異なる照会のキーを指定します。

---

**RPT30123** 次の問題のため、コンポーネント '{0}' が作成できません: {1}

説明: 示されたエラーにより、示されたコンポーネントが作成できません。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**RPT30124** 結果セット索引を定義できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**RPT30126** セキュリティー・リスト '{0}' が見つかりません。

説明: 示されたセキュリティー・リストが見つかりません。

ユーザーの処置: セキュリティー・リスト名にエラーがないか確認するか、異なるセキュリティー・リストを指定します。

---

**RPT30127** プロジェクト記述子が欠落しているため、ビジュアル・プロジェクト '{0}' をロードできません。

説明: プロジェクト記述子が欠落しているため、示されたビジュアル・プロジェクトをロードできません。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトにプロジェクト記述子があるか確認して、プロジェクトのロードを再試行してください。

---

**RSE01000** {0}

説明: リポジトリ・セキュリティー・プロバイダーへのアクセス中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**RSE04000** システム内部エラーが発生しました。エラー・ログを調べてください。

説明: システム内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ウィンドウ」メニューのコンテキスト・メニューから「出力」を選択して、エラー・ログを確認してください。

---

**RSE04001** ユーザー {0} が見つかりません

説明: 示されたユーザーが見つかりません。

ユーザーの処置: ユーザー名にエラーがないか確認して、再試行してください。

---

**RSE04002** ユーザー {0} はすでに存在します

説明: 示されたユーザーは既に存在します。

ユーザーの処置: 別のユーザーを指定してください。

---

**RSE04003** グループ {0} はすでに存在します

説明: 示されたグループは既に存在します。

ユーザーの処置: 別のグループを指定してください。

---

**RSE04004** グループ {0} が見つかりません

説明: 示されたグループが見つかりません。

ユーザーの処置: 別のグループを指定してください。

---

**RSE04005** セキュリティー・プロバイダーとしてログインしていません。

説明: ログインしないでリポジトリへのアクセスを試みました。

ユーザーの処置: リポジトリへログインして、再試行してください。

---

**RSE04006** ユーザー ID とパスワードが無効です

説明: 入力したユーザー ID とパスワードが無効です。

ユーザーの処置: ユーザー ID とパスワードにエラーがないか確認して、再試行してください。

---

**RSE04007** 名前 "{0}" は既存の名前と競合しています。

説明: 入力された新規の名前は既に存在します。

ユーザーの処置: 異なる名前を選択してください。

---

**RSE04008** オブジェクト・アクセスが拒否されました

説明: 指定されたオブジェクトへのアクセスが拒否されました。

ユーザーの処置: 異なるオブジェクトを選択してアクセスするか、管理者に詳細を尋ねてください。

---

**RSE04011** グループ {1} からユーザー {0} を削除できません

説明: 示されたグループから示されたユーザーを削除できません。

ユーザーの処置: このグループから削除する別のユーザーを選択してください。

---

**RSE04012** ユーザー {0} を削除できません

説明: 示されたユーザーを削除できません。

ユーザーの処置: 削除する別のユーザーを選択してください。

---

**RSE04013** グループ {0} を削除できません

説明: 示されたグループを削除できません。

ユーザーの処置: 削除する別のグループを選択してください。

---

**RSE04014** セキュリティー・プロバイダーを初期化できません。{0}

説明: リポジトリの初期化中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**RSE04015** このセキュリティー・プロバイダーは読み取り専用です。

説明: 読み取り専用のセキュリティー・プロバイダーのプリンシパルは変更できません。

ユーザーの処置: 変更するには別のセキュリティー・プロバイダーを選択してください。

---

**RSE04016** リポジトリ内の UID {0} に関連する名前が見つかりません

説明: 示されたりポジトリ ID は無効です。

ユーザーの処置: 有効なリポジトリ ID を指定して、再試行してください。

---

**RSE04017** AuthType が anonymous("none") ではありません。プリンシパルと信用証明情報を指定してください

説明: LDAP セキュリティー・プロバイダーの初期化中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリの初期化パラメーターを変更して、再試行してください。

---

**RSE04018** LDAP 構成に正しくない値があるか、または必須の値がいくつか欠落しています。設定を確認してください ({0})

説明: LDAP セキュリティー・プロバイダーの初期化中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリの初期化パラメーターを変更して、再試行してください。

---

**RSE04019** LDAP サーバーに接続できません。通信が途切れたか、Directory Service が使用不可になっています。

説明: LDAP ディレクトリーへの接続中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ネットワーク接続を確認して、再試行してください。

---

**RSE04020** ユーザーのパスワード属性を読み取ることができません (十分な権限を持っていること、または構成内の PasswordAttribute が正しいことを確認してください。)

説明: LDAP ディレクトリーからデータの読み取り中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: LDAP サービスがアクセス可能か確認してください。

---

**RSE04021** 無効な検索フィルターが LDAP 構成にあります

説明: LDAP 構成内の指定された検索フィルターは無効です。

ユーザーの処置: LDAP 構成では有効な検索フィルターを指定してください。

---

**RSE04022** LDAP サーバーがエラーを戻しました

説明: LDAP ディレクトリーからデータの読み取り中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: LDAP サービスがアクセス可能か確認してください。

---

**RSE04023** 指定された名前 {0} が見つかりません

説明: 示されたユーザー名が見つかりません。

ユーザーの処置: 異なるユーザー名を指定してください。

---

**RSE04024** LDAP 操作を実行するために十分な権限がありません。

説明: ご使用のユーザー ID には、LDAP 操作を実行する権限がありません。

ユーザーの処置: 特定の権限と許可について詳細は、管理者にお尋ねください。

**RSE04025** LDAP 構成で指定された項目 {0} の属性が見つかりません。

説明: LDAP 構成から属性データの読み取り中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 構成パラメーターを訂正して、再試行してください。

**RSE04026** UUID {0} が無効な識別名 {1}、{2} にマップされています。

説明: 示された識別名は無効です。

ユーザーの処置: 有効な識別名を指定して、再試行してください。

**RSE04028** 操作が正しくありません。

説明: セキュリティー・プロバイダーのプリンシパルの編集時に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**RSE04029** セキュリティー・プロバイダーを登録できません。

説明: セキュリティー・プロバイダーをプロバイダー・レジストリーへ登録しているときにエラーが発生しました。

ユーザーの処置: プロバイダーの登録名がユニークか確認してください。

**RSE04030** セキュリティー・プロバイダーが初期化されていません。

説明: セキュリティー・プロバイダー・サービスを初期化していなかったため、サービスへのアクセス中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: セキュリティー・プロバイダーを初期化して、再試行してください。

**RSE04031** セキュリティー・プロバイダーが登録されていません。

説明: セキュリティー・プロバイダーを登録していなかったため、セキュリティ・プロバイダーへのアクセス中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: セキュリティー・プロバイダーを登録して、再試行してください。

**RSE04032** デフォルトの管理者は除去できません。

説明: デフォルトの管理者は削除できません。

ユーザーの処置: 削除するには異なる管理者を指定してください。

**RSE04033** デフォルトの管理者のメンバーシップは変更できません。

説明: デフォルトの管理者のメンバーシップは変更できません。

ユーザーの処置: 変更するには別の管理者のメンバーシップを指定してください。

**RSE04035** 管理者グループは名前変更できません。

説明: デフォルトの管理者グループはリネームできません。

ユーザーの処置: リネームするには異なる管理者グループを指定してください。

**RSE04036** パスワードは有効期限が切れており、無効になっています。

説明: 指定されたパスワードは有効期限が切れており、無効になっています。

ユーザーの処置: 更新されたパスワードを指定して、再試行してください。

**RSE04037** グループはそれ自身の親になることができませんでした。

説明: グループがそれ自身の親になることはできません。親として、異なるグループを選択する必要があります。

ユーザーの処置: 指定されたグループの親となる異なるグループを選択してください。



---

**SPL01001** {0} の **objectClass** 属性が見つかりません

説明: 示されたオブジェクトは **objectClass** 属性を持っていません。LDAP ディレクトリー内のすべてのオブジェクトにはこの属性が必要です。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクトに **objectClass** 属性を指定してください。

---

**SPL01002** 返された項目 {0} は **LDAP Security Provider** では受け入れられません。その **objectClass** は {1} または {2} ではありません。

説明: 示されたオブジェクトは、LDAP セキュリティー・プロバイダーでは、ユーザーとしてもグループとしても定義されていません。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクトの **objectClass** 属性を編集して、それがユーザーかグループか指定してください。

---

**SPL01003** グループの名前を読み取ることができません (属性: {0})

説明: LDAP ディレクトリーに、必須属性を持つオブジェクトが含まれていません。

ユーザーの処置: **groupName** 属性を編集して、それが LDAP ディレクトリー内の既存のオブジェクトを指すようにしてください。

---

**SPL01004** ユーザーの名前を読み取ることができません (属性: {0})

説明: LDAP ディレクトリーに、必須属性を持つオブジェクトが含まれていません。

ユーザーの処置: **userName** 属性を編集して、それが LDAP ディレクトリー内の既存のオブジェクトを指すようにしてください。

---

**SPL01005** LDAP サーバー・ホストまたはポートが指定されませんでした。

説明: LDAP サーバー・ホストまたはポートが指定されませんでした。

ユーザーの処置: LDAP サーバーおよびホストを指定してください。

---

**SPL01006** LDAP サーバーの基本識別名が必要です。

説明: LDAP サーバーの基本識別名が指定されていませんでした。

ユーザーの処置: LDAP サーバーの基本識別名を指定してください。

---

**SPL01007** ユーザー・プリンシパルの識別名が必要です。

説明: プリンシパル・ユーザーの識別名が指定されていませんでした。

ユーザーの処置: プリンシパル・ユーザーの識別名を指定するか、匿名認証を使用してください。

---

**SPL01008** ユーザー項目の信用証明情報の指定が必要です。

説明: エントリー・ユーザーの資格情報が指定されていません。

ユーザーの処置: エントリー・ユーザーの資格情報を指定するか、匿名認証を使用してください。

---

**SPL01009** 管理者ユーザーの LDAP 項目を作成できません: {0}

説明: LDAP ディレクトリーには管理者アカウントに関連付けられたユーザーが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: LDAP ディレクトリーの管理者ユーザーを指定してください。

---

**SPL01010** 管理者グループ用の LDAP 項目を作成できません: {0}

説明: LDAP ディレクトリーには管理者アカウントに関連付けられたグループが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: LDAP ディレクトリーの管理者グループを指定してください。

---

**SPL01011** すべてのユーザー・グループ用の LDAP 項目を作成できません: {0}

説明: LDAP ディレクトリーにはすべてのユーザーのアカウントに関連付けられたグループが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: LDAP ディレクトリーのすべてのユーザーのグループを指定してください。

---

**SPL01012** ルート・グループ用の LDAP 項目を作成できません: {0}

説明: LDAP ディレクトリーには基本 DN に関連付けられたオブジェクトが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: LDAP ディレクトリーに基本 DN オブジェクトを指定してください。

**SPL01013** JNDI 拡張パッケージまたは Sun の LDAP Service Provider が見つかりません。

説明: CLASSPATH に、JNDI 拡張パッケージまたは Sun の LDAP Service Provider が見つかりません。

ユーザーの処置: CLASSPATH には、JNDI 拡張パッケージと Sun の LDAP Service Provider の両方を含めてください。

**SPL01014** カタログ・オブジェクトが欠落しています。

説明: カタログ・オブジェクトが設定されていません。

ユーザーの処置: カタログ・オブジェクトを指定して、再試行してください。

**SPL01015** 空の名前は許可されません。

説明: RDN としての名前が指定されていませんでした。

ユーザーの処置: RDN としての名前を指定してください。

**SPL01016** セキュリティー・オブジェクトの RDN が正しくありません (問題のストリング: '{0}')

説明: RDN が無効です。RDN は、コンマで区切られた 1 つ以上の LDAP コンポーネントでなければなりません。

ユーザーの処置: RDN に対して有効なコンポーネントを指定してください。

**SPL01017** RDN に不明な属性名 '{0}' があります。

説明: RDN の構文解析中に不明な属性が見つかりました。

ユーザーの処置: RDN の属性にエラーがないか確認してください。

**SPL01101** 現在 Client Authentication はサポートされていません。

説明: Client Authentication はサポートされていません。

ユーザーの処置: 匿名認証を使用してください。

**SPL01103** SSL が正しく初期化されていません。

説明: セキュア・ソケット・プロトコル・ファクトリーが初期化されていません。

ユーザーの処置: アプリケーションを再始動して、再試行してください。

**SPL01104** 属性 {0} がありません。

説明: LDAP オブジェクトの読み取り中に、示された属性が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 示された属性には有効な値を指定してください。

**SPL01105** オブジェクト・クラス名 '{0}' は不明です。

説明: オブジェクト名は無効なクラス名を持っています。これは qmfUser または qmfGroup のいずれかである必要があります。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクト名には、qmfUser または qmfGroup のいずれかを指定してください。

**SQM02001** パッケージ '{0}' の処理中に入出力エラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージの処理中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**SQM02002** SQLJ カスタマイズにエラーがあります: {0}

説明: SQLJ カスタマイズの処理中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**SQM02003** SQLJ がインストールされていません

説明: SQLJ ライブラリーをロードできませんでした。

ユーザーの処置: ドライバー定義に sqlj.zip を追加してください。

**SQM02004** パッケージ '{0}' のプロファイル・データの取得中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージのプロファイル・データのロード中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02005** パッケージ '{0}' のプロファイルのロード中にエラーが発生しました。

説明: 示されたパッケージのプロファイルのロード中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02006** パッケージ '{0}' の実装を備えたクラスのロード中に、次のエラーが発生しました: '{1}'。

説明: 示されたパッケージの実装を備えたクラスのロード中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: アプリケーションを再インストールして、再試行してください。

---

**SQM02007** パッケージ '{0}' の処理中にデータベース・アクセス・エラーが発生しました。  
{1}

説明: パッケージの処理中に、示されたデータベース・アクセス・エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているデータベース・アクセス・エラーを解決して、再試行してください。

---

**SQM02008** データベース・アクセス・エラーが発生しました: {1}

説明: 示されたデータベース・アクセス・エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02009** ユーザーにはパッケージ '{0}' の照会を実行する権限がありません。元のエラーは次の通りです: {1}

説明: ユーザーには、示された理由で、パッケージにアクセスする権限がありません。

ユーザーの処置: データベース管理者に連絡してください。

---

**SQM02010** パッケージ '{0}' のプロファイルの削除中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージのプロファイルの削除中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02011** カスタマイザー呼び出しパターンが空です  
説明: 予期しないエラーのため、パッケージのカスタマイズに失敗しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**SQM02013** パッケージ '{0}' のデータのロード中にエラーが発生しました。

説明: 示されたパッケージのデータのロード中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02014** カスタマイザー呼び出しパターンが正しくありません: {0}

説明: 予期しないエラーのため、パッケージのカスタマイズに失敗しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**SQM02016** 以下の原因により、集合 '{0}' を作成できません: {1}

説明: 示されたエラーにより、示された集合を作成できませんでした。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02017** パッケージ '{0}' のプロファイルは、データベースで格納するには長すぎます

説明: 示されたパッケージのプロファイルは、データベースで格納するには長すぎます。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**SQM02018** 集合 ID (プロファイル所有者) が指定されていません。静的モードでは続行できません。

説明: 集合 ID を指定しなければ、SQLJ パッケージはロードできません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**SQM02019** 次のエラーのため、パッケージ '{1}' のステートメント '{0}' を準備できません: '{2}'

説明: 示されたエラーのため、パッケージの示されたステートメントを準備できません。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**SQM02020** パッケージ '{0}' のユーザー権限の検査中に、次のエラーが発生しました: '{1}'

説明: 示されたパッケージのユーザー権限の検査中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**SQM02021** 照会パッケージ '{0}' に矛盾するプロファイル・データが検出されました。パッケージを再バインドしてください。

説明: 示された照会パッケージに矛盾するプロファイル・データが検出されました。

ユーザーの処置: パッケージを再バインドしてください。

**SQM02100** 必須パラメーター '{0}' が指定されていません。

説明: 示された必須パラメーターが指定されていません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

**SQM02101** 接続の初期化中にエラーが発生しました。{0}

説明: 接続の初期化中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**SQM02102** {0}

説明: 示されたデータベース・アクセス・エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**SQM02103** パッケージ記述クラス '{0}' のロード中にエラーが発生しました。{1}

説明: パッケージ記述クラスのロード中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**SQM02104** パッケージ '{0}' のプロファイルのロード中にエラーが発生しました。{1}

説明: 示されたパッケージのプロファイルのロード中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**SQM02105** パッケージ '{0}' の静的モード・プロファイルが見つかりません。

説明: 示されたパッケージの静的モードが見つかりません。

ユーザーの処置: アプリケーションを再インストールして、再試行してください。

**SQM02106** ディレクトリー '{0}' の作成中にエラーが発生しました。

説明: カスタマイズ・プロセス用の一時ディレクトリーを作成できませんでした。

ユーザーの処置: アプリケーションにディレクトリー作成用の権限があるか確認して、再試行してください。

---

**SQM02107** プロファイル・ディレクトリー '{0}' の作成中にエラーが発生しました。

説明: 示されたプロファイル・ディレクトリーの作成中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: アプリケーションにディレクトリー作成用の権限があるか確認して、再試行してください。

---

**SQM02108** パッケージ '{0}' のプロファイルの保存中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージのプロファイルの保存中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02109** パッケージ記述ファイルの保存中にエラーが発生しました。 {0}

説明: パッケージ記述ファイルの保存中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02110** カスタマイズの開始中にエラーが発生しました。 {0}

説明: カスタマイズを開始したときに、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02111** パッケージ '{0}' のカスタマイズ中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージのカスタマイズ中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02112** プロファイル・データ表の作成中にエラーが発生しました。 {0}

説明: プロファイルのデータ表の作成中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02113** 許可の付与または取り消し操作を行うためのユーザー ID リストが指定されていません。

説明: 許可の付与または取り消し操作を行うためのユーザー ID リストが指定されていません。

ユーザーの処置: GRANT/REVOKE 操作に対して、有効なユーザー ID リストを指定してください。

---

**SQM02115** パッケージのアンインストール中にエラーが発生しました。 {0}

説明: パッケージのアンインストール中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02116** パッケージ記述のあるファイルが見つかりません。 {0}

説明: 以前作成したパッケージ記述ファイルに基づいてパッケージ記述を準備しているときに、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**SQM02117** パッケージ記述ファイルの読み取り中にエラーが発生しました。 {0}

説明: パッケージ記述ファイルの読み取り中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**SQM02119** パッケージ {0} のインストール中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージのインストール中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**SQM02120** パッケージ {0} のアンインストール中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージのアンインストール中に、示されたエラーが発生しました。

---

## SYNERRCD0001 • SYNERRCD0013

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**SYNERRCD0001 DSS** ヘッダー長が 6 未満です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0002 DSS** ヘッダー長が、見つかったデータのバイト数と一致していません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0003 DSS** ヘッダー C バイトが D0 ではありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0004 DSS** ヘッダー F バイトが認識されていないか、サポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0005 DSS** の継続が指定されたが、見つかりません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0006 DSS** チェーニングが指定されたが、DSS が見つかりません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0007** オブジェクト長が 4 未満です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0008** オブジェクト長が、見つかったデータのバイト数と一致していません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0009** オブジェクト長が、指定できる最大長を超えています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0010** オブジェクト長が、必要最小限の長さ未満です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0011** 許可されないオブジェクト長です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0012** ラージ・オブジェクトの拡張長さフィールドが正しくありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0013** オブジェクト・コード・ポイントの索引がサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0014** 必須オブジェクトが見つかりません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0015** 送信したコマンド・データ・オブジェクトが多すぎます。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0016** 相互に排他的なオブジェクトが存在します。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0017** 送信したコマンド・データ・オブジェクトが少なすぎます。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0018** オブジェクトが重複しています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0019** 指定した要求相関関係子は無効です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0020** 必要な値が見つかりません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0021** 予約済みの値は使用できません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0022** DSS 継続が 2 以下です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0023** オブジェクトが、規定の順序になっていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0024** DSS チェーニング・ビットが 1 ではないが、DSSFMT ビット 3 が 1 に設定されています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

---

**SYNERRCD0025** 前の DSS は現在の DSS の要求相関関係子が同じであることを示したが、要求相関関係子 ID が同じではありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

**SYNERRCD0026** 前の DSS は現在の DSS の要求相関関係子が同じであることを示したが、要求相関関係子 ID が同じではありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

**SYNERRCD0027** DSS チェーニング・ビットが 1 ではないが、エラー継続が要求されています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

**SYNERRCD0028** 相互に排他的なパラメーター値を指定しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

**SYNERRCD0029** コード・ポイントが有効なコマンドではありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

**SYNERRCD0030 atmind** インスタンス変数が、アトミック EXCSQLSTT チェーン内の EXCSQLSTT コマンドで、そのデフォルト値である 0x00 に設定されていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

**THM1001** CSS ファイルをコピーできません。

説明: CSS ファイルをサーバーにコピーできませんでした。

ユーザーの処置: CSS ファイル名が正しいか確認して、再試行してください。

**THM1002** メイン・テーマの CSS ファイルをアーカイブから抽出できません。

説明: 指定されたアーカイブには、メイン CSS ファイルが含まれていません。

ユーザーの処置: メイン CSS ファイルをアーカイブに保存したか確認して、再試行してください。

**THM1003** 既に登録されています。別のテーマ名で試行してください。

説明: 同じ名前のテーマが既に存在します。

ユーザーの処置: テーマに異なる名前を指定してください。

**THM1004** テーマのルート・フォルダーが既に存在します。別のテーマ名で試行してください。

説明: 同じ名前のテーマが既に存在します。

ユーザーの処置: テーマに異なる名前を指定してください。

**UIM12001** 内部エラーが発生しました: {0}

説明: 示されている内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**UIM12004** 入出力エラーが発生しました: {0}

説明: 示された入出力エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

**UIM12005** ファイルが存在しません: {0}

説明: 示されたファイルが存在しません。

ユーザーの処置: 有効なファイルを指定して、再試行してください。

**VAL00001** 変数 {0} が見つかりません。

説明: 示された変数が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 有効な変数を指定してください。

**VAL00003** タイプ変換エラー: {0} タイプのオブジェクトは {1} タイプに変換できません。

説明: 示されたオブジェクトは、示されたタイプに変換できません。



ユーザーの処置: 変換には異なるタイプのオブジェクトを指定するか、オブジェクトを異なるタイプに変換してください。

---

**VAL00004** 単位変換エラー: 単位 {0} は {1} に変換できません。

説明: 示された単位は示されたタイプに変換できません。

ユーザーの処置: 変換には異なる単位を指定するか、単位を異なるタイプに変換してください。

---

**VAL00005** 式に構文エラーがあります。

説明: 入力した式に構文エラーが含まれています。

ユーザーの処置: 入力した式の構文エラーを確認してください。

---

**VAL00006** 誤った式が使用されました。

説明: 誤った式が使用されました。

ユーザーの処置: 有効な式を指定してください。

---

**VAL00007** 名前 '{0}' の位置 {1} に無効な文字があります。名前の先頭は文字にする必要があります。特殊文字を含めることはできません。無効な文字のリストについては、ヘルプを参照してください。

説明: 示された名前では、示されたカラムで無効な文字が検出されました。

ユーザーの処置: ヘルプで構文規則を確認して、無効な文字を置き換えてください。

---

**VAL00008** 名前を空にすることはできません。名前の先頭は文字でなければならない、特殊文字は使用できません。無効な文字のリストについては、ヘルプを参照してください。

説明: コントロールの名前を空にすることはできません。

ユーザーの処置: コントロールに正しい名前を指定してください。

---

**VAL00009** URL を処理できません: '{0}'

説明: 示された URL が処理できませんでした。

ユーザーの処置: URL にエラーがないか確認して、再試行してください。

---

**VAL00010** URI を処理できません: '{0}'

説明: 示された URI が処理できませんでした。

ユーザーの処置: URI にエラーがないか確認して、再試行してください。

---

**VAL00019** 次のプロパティの定義で循環が見つかりました: {0}。

説明: 式に循環参照が含まれています。

ユーザーの処置: 式を編集して循環参照を取り除き、再試行してください。

---

**VAL00021** プロパティを評価できません: {0}。

説明: 式を評価できませんでした。

ユーザーの処置: 式に構文エラーがないか確認して、再試行してください。

---

**VAL00022** 妥当性検査に失敗しました。{0} を {1} に設定できません。値は {2} {3} でなければなりません。

説明: このプロパティは示された値を持つことはできません。持つことができる値はエラー・メッセージにリストされています。

ユーザーの処置: プロパティの式を編集し、再試行してください。

---

**VDS1000** {0}

説明: 仮想データ・ソースの処理中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

---

**VDS1001** 内部エラー。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

---

**VDS1002** 照会にデータ・ソースの指定がありません。

説明: 照会にデータ・ソースの指定がありません。

ユーザーの処置: 照会にデータ・ソースを指定してください。

**VDS1003** 構成ディレクトリーが定義されていません。

説明: 構成ディレクトリーが定義されていません。

ユーザーの処置: 構成ディレクトリーを定義してください。

**VDS1004** 仮想表 '{0}' のソース・データ・ソースが見つかりません。

説明: 示された仮想表のソース・データ・ソースが見つかりません。ソース・データ・ソースは移動させられたか、削除された可能性があります。

ユーザーの処置: ソース・データ・ソースのロケーションを確認し、必要に応じて、ソース表を仮想データ・ソースに再度コピーしてください。

**VDS1005** 表が照会で定義されていません。

説明: 表が照会で定義されていません。

ユーザーの処置: 表を照会で定義してください。

**VDS1006** 表 '{1}' の仮想列 '{0}' のソース表列が見つかりません。

説明: 示された仮想列は、ソース表列のいずれとも一致しません。

ユーザーの処置: 仮想表内の各列がソース表内に対応する列を持っているか確認してください。

**VDS1007** 仮想データ・ソースには表と照会だけを追加できます。

説明: 表または照会ではないオブジェクトを仮想データ・ソースへ移動させようとした。仮想データ・ソースへ追加できるのは、表または照会のみです。

ユーザーの処置: 仮想データ・ソースへ移動させる表または照会を指定してください。

**VDS1008** 指定された表がデータ・ソースで見つかりません。

説明: 仮想データ・ソースで参照されている表がソース・データ・ソースで見つかりません。ソース表は移動させられたか、削除された可能性があります。

ユーザーの処置: データ・ソース内のソース表のロケーションを確認し、必要に応じて、ソース表を仮想データ・ソースに再度コピーしてください。

**VDS1009** 仮想表から最後の列を除去できません。

説明: 仮想表から最後の列を削除しようとした。仮想表には少なくとも 1 つの列が必要です。

ユーザーの処置: 仮想表には少なくとも 1 つの列があるか確認してください。

**VDS1010** リレーショナル・データ・ソースの照会だけを追加できます。

説明: 多次元データ・ソースへの照会を追加しようとした。仮想データ・ソースに追加できるのは、リレーショナル・データ・ソースへの照会のみです。

ユーザーの処置: 仮想データ・ソースに追加する、リレーショナル・データ・ソースへの照会を指定してください。

**VDS1011** ソース表 '{0}' が見つかりません。

説明: 示されたソース表が見つかりません。ソース表は移動させられたか、削除された可能性があります。

ユーザーの処置: ソース表のロケーションを確認し、必要に応じて、ソース表を仮想データ・ソースに再度コピーしてください。

**VDS1012** ソース照会 '{0}' が見つかりません。

説明: 示されたソース照会が見つかりません。ソース照会は移動させられたか、削除された可能性があります。

ユーザーの処置: ソース照会のロケーションを確認し、必要に応じて、ソース照会を仮想データ・ソースに再度コピーしてください。

**VDS1013** 仮想表の作成は、**SELECT** ステートメントによる **SQL** 照会の使用によってのみ行えます。

説明: **SELECT** ステートメントを含まないソース照会を使用して仮想表を作成しようとした。ソース照会として使用できるのは、**SELECT** ステートメントを含む照会のみです。

ユーザーの処置: ソース照会として **SELECT** ステートメントを含む照会を指定してください。

**VDS1014** ソース照会であいまいな名前の列が返されるため、仮想表を作成できません。

説明: 仮想表が、複数の同じ名前の列を持つ結果セットを返す照会の原因になっています。

ユーザーの処置: ソース照会内の結果セットの列名を変更して、再試行してください。

---

**VDS1015** ソース照会で名前のない **1** つ以上の列が返されるため、仮想表を作成できません。

説明: 仮想表のソース表が、無名列を返してはいけません。

ユーザーの処置: 無名列を返さないソース照会を指定してください。

---

**VDS1016** ソース照会で複数の結果セットが返されるため、仮想表を作成できません。

説明: 仮想表を作成できるのは、単一の結果セットを返すソース表を使用した場合のみです。

ユーザーの処置: 単一の結果セットを返すソース表を指定してください。



---

## 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。この資料の他の言語版を IBM から入手できる場合があります。ただし、これを入手するには、本製品または当該言語版製品を所有している必要がある場合があります。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510

東京都中央区日本橋箱崎町19番21号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

*IBM Director of Licensing*  
*IBM Corporation*  
*North Castle Drive, MD-NC119*  
*Armonk, NY 10504-1785*  
*US*

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年).

このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。

© Copyright IBM Corp. \_年を入れる\_.

---

## 商標

IBM、IBM ロゴ、および [ibm.com](http://www.ibm.com)<sup>®</sup> は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

---

## 製品資料に関するご使用条件

これらの資料は、以下の条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

適用条件: IBM Web サイトの「ご利用条件」に加えて、以下のご使用条件が適用されます。

個人使用: これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布 (頒布、送信を含む) または表示 (上映を含む) することはできません。

商業的使用: これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

権利: ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入 関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

IBM は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。

---

## プライバシー・ポリシーに関する考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。多くの場合、ソフトウェア・オファリングにより個人情報が収集されることはありません。IBM の「ソフトウェア・オファリング」の一部には、個人情報を収集できる機能を持つものがあります。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項をご確認ください。

この「ソフトウェア・オファリング」は、Cookie もしくはその他のテクノロジーを使用して個人情報を収集することはありません。

この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人を特定できる情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、このような情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意の要求も含まれますがそれらには限られません。

このような目的での Cookie を含む様々なテクノロジーの使用の詳細については、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』（<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>）の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』および『IBM Software Products and Software-as-a-Service Privacy Statement』（<http://www.ibm.com/software/info/product-privacy>）を参照してください。



## 用語集

用語集には、製品で使用される用語の要旨が記されています。

**アクセシビリティ (accessibility).** 運動障害や視覚障害など身体に障害を持つユーザーがコンピューターを快適に使用できるようにサポートする機能です。

**ブレイクポイント (breakpoints).** 色が変わる位置を指定するカラー・マップです。

**計算列 (calculated columns).** 照会結果に追加されるデータの列です。

**標準の報告書 (classic reports).** データ・ソースと書式テンプレートとして、照会結果を使用して生成される、テキスト・ベースの表形式の報告書です。

**カラー・マップ (color map).** カラー・マップは、オブジェクトに関連付けられた値に応じて、ビジュアル・プロジェクト・オブジェクトの色を変えるために使用できます。

**カラー・シーケンス (color sequence).** カラー・シーケンスを使用して、ビジュアル・プロジェクト・オブジェクトの色のプロパティを索引値に基づいて変更することができます。

**コマンド・バー (command bar).** QMF for Workstation インターフェースからプロシーチャー・コマンドを直接実行することができるインターフェースです。

**「接続」ツール (connectivity tool).** テキスト・ボックス・オブジェクトやラベル・オブジェクトなどの、非照会主導型のオブジェクト間の依存関係を定義することができるインターフェースです。接続ツールは、ビジュアル・ダッシュボードの作成時にのみ使用可能です。

**キューブ構造ツリー (cube structure tree).** 「キューブ構造」ツリーには、レイアウト形式で、キューブに含まれるディメンションおよび測定値がリストされます。

**データ・ソース (data sources).** データ・ソースを使用すると、元の表の内容を変更せずにユーザーが編集および操作できる仮想表を作成できます。仮想データ・ソースは、管理者が定義した仮想データ・ソースと物理表およびビューが含まれる基礎データ・ソースの間にメタデータ層を介在させることによって機能します。

**データ・テンプレート (data templates).** データ・テンプレートは、レイアウト・オブジェクト内の照会結果セット・データのビジュアル表示を作成し、制御するために使用されます。

**ダイアグラム照会エディター (Diagram Query Editor).** ダイアグラム照会エディターを使用して照会を作成するときは、表、結合、列、ソート、および行の情報を指定すると、ダイアグラム照会エディターによって構造化照会言語 (SQL) ステートメントが構成されます。ダイアグラム照会エディターは、QMF for WebSphere では使用できません。

**照会のドロー・エディター (Draw Query Editor).** 照会のドロー・エディターを使用して、指定した照会タイプと表に基づいて照会オブジェクトを自動的に作成します。

**ドリルダウン (drilldown).** ユーザーがオブジェクトをクリックすると、そのオブジェクトの値に特に関連する詳細情報が含まれる別のシーンにジャンプできるナビゲーション機能です。ドリルダウン・ウィザードは、照会結果データを表示するすべてのレイアウト・オブジェクトで使用可能です。

**編集コード (edit codes).** 編集コードは、報告書の特定の列に表示される、文字、日付、グラフィック、数値、時刻、タイム・スタンプのデータをフォーマットする方法を指定します。また、ユーザー定義の編集コードも作成できます。

**組み込みシーン (embedded scene).** 組み込みシーン・オブジェクトとはコンテナの 1 つで、それを使用して別のシーンのすべてまたは一部を表示した後、そのシーンにナビゲートできます。組み込みシーン・オブジェクトが置かれたシーンは、ソース・シーンと見なされません。宛先シーンは、組み込みシーンです。

**イベント・アクション (event actions).** オブジェクトにイベント・アクションを定義することにより、シーンが対話的になり、ナビゲートできるようになります。ダッシュボードをユーザーがナビゲートするとき、マウス・アクションにより、シーンからシーンへのジャンプ、SQL ステートメントの実行、または他のアプリケーションの起動といった事前定義のイベントが起こりません。

式デザイナー (**Expression Designer**). 式デザイナーを使用して、選択したオブジェクトに関連付けるプロパティ値を指定できます。式デザイナーは、オブジェクトのプロパティを指定する代替方法です。オブジェクトに指定可能なプロパティごとに、プロパティ値のフォーマットに利用できるテンプレートが提供されます。さらに、プロパティ値の処理や表示に利用できるスペースが増えます (式を使用した場合、このスペースは大幅に大きくなります)。

高速保存 (**fast save**). 照会結果のデータを「高速保存」方式で保存する場合は、すべての処理がデータベースで行われます。この方式では、QMF for Workstation/WebSphere インターフェースとデータベースの間でさらにデータのやり取りが行われることはありません。QMF for Workstation/WebSphere インターフェースはオリジナルの照会に SQL を追加し、照会が再実行されて、データは指定された表に直接保存されます。大量のデータを保存するときには、「高速保存」の処理を使用して照会結果データを保存すると、パフォーマンスが大幅に向上します。

ファイル・ベース・リポジトリ (**file-based repositories**). QMF for Workstation を使用している場合、ファイル・リポジトリ接続を作成することにより、ローカルまたはネットワーク・ドライブ上に格納されたファイル・ベース・リポジトリに接続できるようにするための情報を設定できます。ファイル接続は、旧ファイル・ベース・リポジトリに対してのみ作成できます。

フォーマット・オプション (**formatting options**). 照会結果をどのようにエディター・ウィンドウに表示するかをカスタマイズすることができます。列の列見出しおよびセルのそれぞれにさまざまなフォント、色、およびテキスト配置を指定することができます。列およびセルのフォーマット設定が条件式の結果に基づいて適用されるように指定することもできます。フォーマット・オプションは、列全体、個々のセル、列見出し、および要約セルに適用できます。

書式 (**forms**). 書式はオブジェクトと見なされ、リポジトリ、QMF カタログ、またはファイルに保存できます。保存された書式オブジェクトを開いたときは、報告書を生成するために書式オブジェクトを実際に実行していることとなります。書式を開くと、現在アクティブな照会結果がデータ・ソースとして自動的に使用されます。

書式変数 (**form variables**). 書式変数は、報告書に情報を表示するためにテキスト・フィールドに挿入できるコードです。例えば、毎回報告書を印刷する度に現在の日付を表示する日付変数を挿入できます。

グローバル・パラメーター (**global parameter**). グローバル・パラメーターはビジュアル・プロジェクト全体で使用でき、ビジュアル・ダッシュボードのユーザーが使用可能です。オブジェクト・プロパティの指定時、またはイベント・アクションの作成時にグローバル・パラメーターを渡すことができます。また、実行時にグローバル・パラメーターを公開して、ユーザーがアクセスできるようにするオプションもあります。

グローバル・リソース (**global resources**). グローバル・リソースは、ビジュアル報告書のすべてのページ、またはビジュアル・ダッシュボードのすべてのシーンで使用できます。グローバル・リソースを使用して、オブジェクト・プロパティを計算することができます。

グローバル変数 (**global variables**). グローバル変数は、QMF for Workstation/WebSphere の現行セッションがアクティブである期間中、アクティブであり続ける変数です。これは、オブジェクト (照会、プロシージャ、書式) の実行中のみアクティブである置換変数とは対照的です。グローバル変数を使用するオブジェクトの場合、グローバル変数に現在定義されている値が使用されます。

グループ化および集約 (**grouping and aggregation**). 照会結果列にグループ化および集約のオプションを適用して、結果データを論理グループまたは要約グループに編成できます。グループ化および集約を追加することにより、データの要約情報の取得と、データのより論理的な表示を自動的に行えます。例えば、報告書のデータを部門別にロールアップしたり、部門別の歩合を平均したりできます。

情報ズーム (**information zooming**). 情報ズームは、ユーザーがシーンまたはレイアウトのデータ・ポイントをズームインするのに合わせて、データの明細ビューを表示するナビゲーション機能です。レイアウト・オブジェクトおよびシーンはどれも、デフォルトのズーム・レベル (100% ズーム) を持っています。情報ズーム・ナビゲーションの設定は、シーン全体に対して行うことも、個別のレイアウト・オブジェクトに対して行うこともできます。レイアウト・オブジェクトに対する情報ズームを使用すると、ユーザーがレイアウト・オブジェクトにズームインするのに合わせて、各データ・ポイントに関するより詳細な照会情報を表示させることができます。各ズーム・レベルには、同じ照会結果データを使用します。シーン・レベルで情報ズームを使用すると、ズーム・レベルごとに、まったく異なるレイアウトや照会結果データを表示させることができます。

JDBC ドライバー (**JDBC drivers**). QMF for Workstation/WebSphere は JDBC を使用してすべての

データベース・リポジトリおよびデータ・ソースに接続します。QMF for Workstation/WebSphere は JDBC ドライバーを含みません。QMF for Workstation/WebSphere がリポジトリおよびデータ・ソースに接続するために使用する JDBC ドライバーの場所が定義されていなければなりません。QMF for Workstation/WebSphere 管理者は、アプリケーション・インターフェースの各インスタンスが JDBC ドライバーを見つけることができる場所を特定する必要があります。

**ジョブ定義ファイル (job definition files).** ジョブ定義ファイル (.jdfx) は、スケジュール済みジョブを設定するためにインポート可能なレガシー QMF ファイルです。

**ジョブ・スケジューラー (job scheduler).** QMF for Workstation/WebSphere には、プロシージャー・オブジェクトを定期的に、繰り返し、または特定の日時に実行するようにスケジュールに入れる機能があります。QMF for Workstation/WebSphere プロシージャーは、照会の実行、報告書テンプレートの適用、報告書の PDF ファイルへのエクスポート、または E メールによる報告書の送信などの 1 つ以上の順次ステップを実行できます。プロシージャーは、ローカル・スケジューラーまたは QMF for WebSphere スケジューラーを使用して、任意の時点で実行するようにスケジュールできます。

**レイアウト・オブジェクト (layout objects).** ビジュアル・ダッシュボード・シーンでは、レイアウト・オブジェクトを使用して、図表、グラフ、マップ、表、およびグリッドなどのビジュアル形式で照会結果を表示します。多くのレイアウト・オブジェクトでは、複数の照会結果を単一のレイアウトで表示します。例えば、単一の XY グラフを作成し、ある照会から取得した売上高と、別の照会から取得した経費を表示させることができます。複数のレイアウト・オブジェクトをネストさせることができます。レイアウト・オブジェクトをネストすると、照会結果の情報を高いレベルのレイアウト・オブジェクトから低いレベルのレイアウト・オブジェクトに受け渡すことができます。この情報の受け渡しが可能であるため、ネストされたレイアウト・オブジェクトを使用して、特定のデータ値に関連する詳細情報を表示することができます。

「レイアウト・プロパティ」ダイアログ (**Layout Properties dialog**). 照会結果のフォーマットに使用できるすべてのオプションを設定できるインターフェースです。「レイアウト・プロパティ」ダイアログでは、ツリー構造を使用して照会結果の列を表します。照会結果で選択したのものによって、レイアウト・プロパティ・ツリーは照会結果にあるすべての列の分岐、または

単一の列の分岐を表示します。フォーマット・オプションは、列全体、個々のセル、列見出し、および要約セルに適用できます。

**旧 Visionary ワールド (Legacy Visionary world).** 以前のバージョンの QMF Visionary を使用して作成された既存の Visionary ワールドから、新しいダッシュボードを作成できます。インポートする Visionary ワールドが、QMF for Visionary バージョン 8.1 フィックスパック 13 以降を使用して、XML ファイルとしてエクスポート済みである必要があります。

**LOB データ (LOB data).** ラージ・オブジェクト (LOB) とは、DB2 for z/OS および DB2 for Linux, UNIX®, and Windows のデータ・タイプであり、テキスト、マルチメディア、画像、ビデオ、写真、音声などの非従来型データや、あらゆる大規模データ・ファイルをデータベース表内に格納するためのデータ・タイプです。LOB データを検索または保存する際には、大量のリソースが消費されることがあります。

**ネットワーク・リポジトリ (network repositories).** 直接ネットワーク・アクセスを使用する、共有リポジトリに対する接続です。ネットワーク接続の場合、ユーザーは、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリにアクセスできます。ネットワーク接続を使用してリポジトリに接続すると、中央サーバーでのデータ・アクセスの統合が可能になり、QMF for Workstation を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。このタイプの接続は、QMF for WebSphere ユーザーには適用されません。

**OLAP 照会 (OLAP queries).** OLAP 照会を使用すると、ユーザーは異なる次元の多次元データに動的にアクセスできます。QMF for Workstation および QMF for WebSphere を使用すると、MDX を使用して照会されて XMLA を使用してアクセスされるマルチディメンション・データ・ソースに対する OLAP 照会を作成できます。

**パレット・オブジェクト (palette objects).** ビジュアル・プロジェクトには、「パレット」ビューにリストされているグラフィック・オブジェクトをどれでも挿入できます。ビジュアル・ダッシュボードには、「パレット」ビューのすべてのオブジェクトを挿入できます。「パレット」ビューで選択可能なオブジェクトのすべてが、ビジュアル報告書に挿入できるわけではありません。ビジュアル報告書に挿入できないオブジェクトには対話式プロパティがありますが、ビジュアル報告書は対話式ではありません。

**パーソナル・リポジトリ (personal repositories).** パーソナル・リポジトリは単一ユーザーのためであり、

QMF for Workstation/WebSphere アプリケーション・インターフェースを実行しているワークステーション (サーバー) の個人設定ディレクトリーに格納されます。

**パースペクティブ (perspectives).** データを照会し、結果をフォーマット設定するために使用するインターフェース。

**プロシージャー (procedures).** 照会の実行、報告書の印刷、データのインポートとエクスポート、および他の関数の実行が可能なコマンドのセットです。

「プロジェクト・エクスプローラー」ビュー (**Project Explorer view**)。 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューは、それぞれのビジュアル報告書とダッシュボードのエLEMENTとオブジェクトすべてを 1 つのツリー構造で詳しく表示します。

**指示照会エディター (Prompted Query editor).** 簡単な照会から複雑な照会までを作成可能なインターフェースです。指示照会エディターは、SQL ステートメントを作成するために必要な情報を入力するようにプロンプトを出します。また、指示照会エディターを使用すると、ソート条件や行条件を設定できます (QMF for Workstation のみ)

**QMF カタログ (QMF catalogs).** 保存されたオブジェクト (照会、プロシージャー、書式)、ユーザー・リソース限界とプロファイル、報告書、およびその他の各種設定と情報が含まれているデータベース表のセットです。QMF カタログは、DB2 データベースをホストするデータベース・サーバー上にあります。

**照会エディター (Query Editor).** ワークスペース内でアクセス可能なすべてのデータベース表を開くことができるインターフェースです。

**照会パラメーター (query parameters).** 照会パラメーターには、照会に送信され、実行時に使用される値が含まれます。

**通常保存 (regular save).** 照会結果のデータを「通常保存」方式で保存する場合は、使用中のインターフェース (QMF for Workstation または QMF for WebSphere) が、取り出した照会結果をデータの行ごとに別個の SQL INSERT ステートメントを使用してデータベースに保存します。このタイプの保存では、大量のデータをデータベースに戻すオーバーヘッドのためにパフォーマンス・コストが高くなります。

**リレーショナル照会 (relational query).** 照会とはデータ・ソースに情報を要求することです。リレーショナル・データ・ソースに情報を要求する場合、照会は SQL ステートメントを使用して作成されます。

**リソース限界 (resource limits).** QMF for Workstation/WebSphere リソース限界はデータ・ソース・アクセスとリソース使用量を制御します。データ・ソースにアクセスするときにユーザー ID に有効なリソース限界を表示するには、データ・ソースに接続している必要があります。

**シーン・パラメーター (scene parameters).** ビジュアル・ダッシュボードの特定のシーンにのみ使用可能なパラメーター。シーン・パラメーターは、組み込みシーンおよびイベント・アクションの作成時に受け渡されます。

**スケジュール済みジョブ (scheduled jobs).** プロシージャーは、ローカル・スケジューラーまたは QMF for WebSphere スケジューラーを使用して、任意の時点で実行するようにスケジュールできます。別の時に実行するようにスケジュールされているプロシージャーは、スケジュール済みジョブと呼ばれます。

**共有リポジトリ (shared repositories).** 共有リポジトリはデータベース上に存在し、多数のユーザーがそれを共有できます。QMF for Workstation/WebSphere 管理者だけが、共有リポジトリを作成できます。

**SQL 照会エディター (SQL Query editor).** SQL に経験があるユーザーの場合、「SQL 照会」エディターに自分で SQL ステートメントを入力することにより、照会を作成する方法があります。単一の結果セットを戻す単一の SQL ステートメントでも、複数の結果セットを戻す複数の SQL ステートメントでも書くことができます。エディターは、ユーザーの SQL ステートメントに対するカラーリング・サポートを提供します。

**静的 SQL パッケージ (static SQL packages).** リポジトリ・ストレージ内のいくつかの表は、QMF によって処理情報を格納するために使用されます。これらの表には、許可表のように、機密性の高い情報が保管されているものもあります。デフォルトでは、すべてのユーザーがこれらのリポジトリ・ストレージ表にアクセスし、表に変更を加えられるようになっています。リポジトリ・ストレージ表には、表を保護するオプションがあります。保護モードでは、ストアード・プロシージャーや静的 SQL パッケージ (そのリポジトリ・ストレージのホスト・データベースが何をサポートしているかによって異なる) の集合を使用してリポジトリ・ストレージ表にアクセスします。このため、リポジトリ・ストレージのユーザーにストアード・プロシージャーまたは静的 SQL パッケージを実行するための許可を付与する必要があります。

**置換変数 (substitution variables).** 置換変数は、実行時に変更値を SQL 照会に入力するのに使用します。この機能により、SQL ステートメントの一部を置換して、これをより汎用的なものにすることができます。置

換変数がアクティブなのは、オブジェクト (照会、プロシージャー、または書式) が実行している間だけです。その結果、1 つのオブジェクトのみが置換変数にアクセスすることができます。この変数は、オブジェクトの実行後は存在しなくなります。

**表エディター (Table Editor).** ワークスペース内でアクセス可能なすべてのデータベース表を開くことができるインターフェースです。

**表ビューアー (Table Viewer).** ワークスペース内でアクセス可能なすべてのデータベース表を開くことができるインターフェースです。

**翻訳テーブル (translation tables).** 翻訳テーブルにより、ダッシュボード設計者は複数言語で表示できる単一のビジュアル・ダッシュボードを公開できます。コンテンツ開発者がダッシュボードを作成するときには、ボタンのキャプション、ラベル、ツールチップ、および他の埋め込みテキストを、ダッシュボード・オブジェクトのプロパティ値に直接入力します。翻訳テーブルを使用すると、コンテンツ開発者はその入力したテキストの代替バージョンを用意して、ロケールが異なるユーザーに対して表示させるようにできます。例えば、日本語の開発者は、日本語で新規ダッシュボードを作成することを決めてから、ドイツ語とフランス語の翻訳テーブルも組み込むことができます。各翻訳テーブルは、ドイツ語およびフランス語のロケールでダッシュボードが表示されるときに使用されます。

**取扱コード (usage codes).** 取扱コードは、列のデータに関する合計情報を提供します。例えば、取扱コードは列の終わりで総合計情報を提供したり、表の制御の切れ目で部分的な合計情報を提供することができます。使用可能な取扱コードは列のデータと合計のタイプによって異なります。

**ユーザー設定 (user preferences).** 「設定」ダイアログは、QMF for Workstation/WebSphere アプリケーション・インターフェース現行セッションの特定の機能に適用されるユーザー設定を行うために使用します。「設定」ダイアログは 2 つのペインで構成されています。左のペインには設定を編成する階層ツリーが表示され、右のペインには実際の設定値のページが表示されます。

**「変数」バー (variables bar).** 変数バーを使用して、プロパティ値を指定できます。「変数」バーは、メニュー・バーにあります。「変数」バーから、ビジュアル・プロジェクトに定義されているグローバル・パラメーターまたはローカル・パラメーター、および一連の照会結果からの 1 つの列名を選択できます。

**ビュー (views).** QMF for Workstation/WebSphere ビューはエディターをサポートしており、代替表示を提供

し、またウィンドウにある情報のナビゲート方法を提供します。それぞれのビューは、メイン・ワークステーション・ウィンドウ内のペインとして表示されます。QMF for Workstation/WebSphere の各パースペクティブには、特定機能の実行に通常使用するビューが最初に表示されます。

**ビジュアル・ダッシュボード (visual dashboards).** ビジュアル・ダッシュボードは、企業全体にわたる複数の異種データ・ソースの照会から入手した対話式または永続データを表示します。ビジュアル・ダッシュボードは、図表、グラフ、マップ、およびユーザー・インターフェース・ウィジェットを含む、多様なグラフィックスを使用するシーン・フォーマットでデータを表示します。データ主導型のグラフィカル・オブジェクトは、ユーザー選択に応じて固有のデータ表示が起動されるように、簡単にリンクできます。コンテンツ開発者は、複数のユーザーが QMF for Workstation または QMF for WebSphere のいずれかで表示可能なビジュアル・ダッシュボードを作成できます。

**ビジュアル・デザイナー (visual designer).** ビジュアル報告者およびダッシュボードを手早くデザインすることができます。そのために、プロジェクトのデザイン・ビューとランタイム・ビューの両方を表示するエディターが含まれる直観的で使いやすい「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブ、各ビジュアル報告書とダッシュボードのコンテンツを構造的に詳しく示した「プロジェクト・エクスプローラー」ビュー、さらにビジュアル・デザイナー・エディターに対応し、ビジュアル報告書とダッシュボードの作成を支援する「パレット」、「プロパティ」、「イベント」、「出力」の各ビューを使用できます。

**ビジュアル報告書 (visual reports).** ビジュアル報告書は、ページ・ベースの印刷可能レポートであり、多様なユーザーに永続データを表示するために、定様式テキストとグラフィックスの両方が含まれています。ビジュアル報告書には、報告書の異なるセクション (見出しや脚注など) に挿入されたデータ主導型のグラフィックス (マップおよび図表など) も入れることができます。データ主導型のグラフィックスはそれぞれ、企業全体にわたって実行される複数の照会からのデータを表示できません。

**Web サービス・リポジトリ (web service repositories).** Web サービス・リポジトリ接続を作成して、HTTP または HTTPS 接続を使用した QMF for WebSphere の Web サービス API を介して、共有リポジトリへの接続を可能にする情報を設定します。Web ベース接続の場合、ユーザーは、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリにアクセスできます。Web サービス接続を使

用してリポジトリに接続すると、中央サーバーでのデータ・アクセスの統合が可能になり、QMF for Workstation を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。このタイプの接続は、QMF for WebSphere には適用されません。

**ワークスペース (workspaces).** アクセスできるすべてのデータ・ソースおよびオブジェクトは、QMF for Workstation/WebSphere 管理者によって定義済みの 1 つ以上のワークスペースに入れられます。アクセスできる各ワークスペースが、「ワークスペース」ビューにリストされます。「ワークスペース」ビューからは、多くの照会機能と報告書作成機能を実行できます。

**ズーム (zoom).** QMF for Workstation を使用している場合、「ズーム」オプションを使用して、照会結果のセルの内容を 16 進数または 2 進数で表示できます。

# 索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

## [ア行]

### アイコン

- 季節性の作成 299
- 傾向の作成 299
- 循環性の作成 299
- 照会の実行 299
- パフォーマンスの作成 299
- 予測アウトライン・ツリーの表示 299

### 「アウトライン」ビュー 7

### アクション

- アクション・グループ 287, 288
- オブジェクトの実行 272
  - 照会の印刷 277
  - 照会のエクスポート 273
  - 照会をメールにエクスポート 274
  - 即時報告書のエクスポート 279
  - 即時報告書をメールにエクスポート 278
  - ビジュアル報告書のエクスポート 282
  - ビジュアル報告書をメールにエクスポート 280
- リソースの操作 283
  - コピー 284
  - メールの送信 285

### アクセシビリティ 615

- オペレーティング・システム 616
- キーボード・ナビゲーション 615
- キー割り当て 615
- 支援技術 616
- WebSphere でのナビゲーション 619
- Workstation でのナビゲーション 616

### アクセラレーター 19, 164, 177, 183, 218, 231, 613

### 値 261

### 「値 (Y) 系列」図表フォーマット・オプション 251

### 値の設定 408, 411, 478

### 新しいロケーションヘジャンプ 408, 410, 478

### 一般設定 19

### イテレーター 288

### 移動 238

### 移動平均 299, 311

### イベント

- 解説 412
- ExternalEvent イベント 412

### 「イベント」ビュー 7, 470

### イベント・アクション 407

### 値の設定 408, 411

### 新しいロケーションヘジャンプ 408, 410

### イベント・アクション (続き)

- 組み込みシーンヘナビゲート 408, 413
- 組み込みシーンへのイベントの送信 420
- コンポーネントの最新表示 435
- シーンの印刷 408, 418
- シーンの再ロード 429
- シェル・コマンドの実行 408, 421
- 照会キャッシュの無効化 435
- セッションの終了 430
- ダイアログの表示 444
- ダイアログを閉じる 446
- 地理位置情報の最新表示 450
- データの変更 422
- ファイルの作成 432
- フォーカスの設定 428
- プロシージャーの実行 408, 416
- 前のページのロード 408, 414
- メッセージの表示 408, 424
- 割り当て 408
- Cookie の保管 448
- Cookie のロード 449
- E メール送信 419
- Excel にエクスポート 408, 426
- JavaScript の実行 417
- LOB の起動 436
- PDF にエクスポート 430
- SQL ステートメントの実行 408, 414
- URL を開く 447

### イメージ 556

### イメージのエクスポート 460

### 色 397

### 印刷オプション 241, 242, 263, 269, 314, 599

### インポート 66

### エクスプローラー 36

### エクスポート

- 照会結果 216
  - データベース 218
  - ファイル 220
  - ファイル・エクスポート・オプション 222

### 図表 262

### 分析オブジェクト 593

### 報告書 320, 384

### 予測 314

### エディター

- 指示照会 78
- 照会ビルダー 78
- SQL 78

### エディター・ウィンドウ 461

### お気に入りから除去 44

### お気に入りに追加 36

### お気に入りの名前を変更 44

- お気に入りフォルダー 43
- オブジェクト
  - オープン 74
  - 作成 68
  - 挿入 474
  - データ・ソース 320
  - パレット 472
  - ファイル 75
  - 保存 71
    - ファイルに 72
    - リポジトリへの 72
    - QMF カタログへの 73
    - リポジトリ 75
    - QMF カタログ 74
  - オブジェクト所有者 38
  - オブジェクトの追加 506
    - キャンバス
      - HTML5 モード 507, 508
  - オブジェクトのフィルター処理
    - キャンバス 513
  - オブジェクト名 38
  - オブジェクト・トラッキング・リソース限界 607
  - オブジェクト・リスト・リソース限界 612
  - 「オプション」フォーマット・オプション
    - 行折り返し幅 332
    - 切れ目合計の区切り記号 332
    - 切れ目列の枠取り 332
    - グループ化したときに列見出しの関数名使用 332
    - 最高位の切れ目レベルごとに新しいページ番号 332
    - 最終合計の区切り記号 332
    - デフォルト切れ目テキスト (\*) 332
    - 報告書の固定列数 332
    - 報告書のテキスト行幅 332
    - 報告書列の自動並べ替え 332
    - 明細の行間隔 332
    - 横方向合計列 332
    - 横方向見出しの区切り記号 332
    - 列折り返し行を同一ページに表示 332
    - 列見出しの区切り記号 332
    - LOB の内容をインラインに置く 332
  - オプション・リソース限界 603

## [カ行]

- カーブ・フィッティング 308
- カーブ・フィッティング方式 299
- 外観設定 21
- 概説 1
- 階層フィルター 113
- カウント 238
- 各種 471
- 拡張レイアウト・オブジェクトについて 541
- 加重移動平均 299, 305
- カスタム 471
- カスタム関数 211
- 仮想表 587

- 仮想表 (続き)
  - 構造 587, 589
- 加速
  - 設定 19
- 加速リソース限界 613
  - 「カテゴリー」図表フォーマット・オプション 250
- カテゴリー軸 261
- カラー・シーケンス 556, 557
  - 作成 557
  - 使用 558
- カラー・マップ 556, 559
  - 作成 559
  - 使用 560
- 完全外部結合 84, 91
- 管理 dynamart での
  - CSV 233
  - DBF 233
  - IXF 233
  - TXT 233
  - XML 233
  - 「管理者」パースペクティブ 3, 7
- 季節性の作成 299
- キャッシュ・リソース限界 612
- キャッシング 62
  - リポジトリ・データ 62
- キャンバス 506
  - タイプ 505
  - リンクされたオブジェクト 514
  - リンクされたオブジェクトの編集 514
- キャンバス・モード 461
- キューブ構造ツリー 109, 111
- キューブ・データ 109
- 旧 Visionary ワールド
  - インポート 393
- 旧ビジュアル報告書 374
  - インポート 375
  - オープン 374
- 共有プロンプト 290, 291
- 共有リポジトリ 52, 53, 62
  - 「切れ目」フォーマット・オプション
    - 脚注後のブランク行数 325
    - 脚注で改ページ 325
    - 脚注前のブランク行数 325
    - 切れ目脚注テキスト 325
    - 切れ目合計行の位置 325
    - 切れ目ごとに改ページ 325
    - 切れ目見出しテキスト 325
    - 見出し後のブランク行数 325
    - 見出し前のブランク行数 325
    - 明細見出しの反復 325
- 切れ目脚注 336
- 切れ目見出し 336
- 組み込みシーン 404, 405
  - パラメーター化 406
- 組み込みシーンヘナビゲート 408, 413
- 組み込みシーンへのイベントの送信 420



- 「クライアント域」図表フォーマット・オプション 257
- グラフ 471
- グループ化および集約 214, 261
  - カウント 238
  - グループのパーセンテージ 238
  - グループの累積パーセンテージ 238
  - 合計 238
  - 合計のパーセンテージ 238
  - 合計の累積パーセンテージ 238
  - 最後 238
  - 最初 238
  - 最小 238
  - 最大 238
  - サイド・グループ 238
  - 集約なし 238
  - トップ・グループ 238
  - 標準偏差 238
  - フィールド 214
  - 平均 238
  - 累計 238
- グループ化階層オプション
  - 使用可能な列 303
  - 選択した列 303
- グループのパーセンテージ 238
- グループの累積パーセンテージ 238
- グローバル傾向 311
- グローバル平均 311
- グローバル変数 22
  - システム 24
  - ユーザー 23
- グローバル・パラメーター 465, 564
  - 使用 567
  - 追加 566
  - ビューアー X 565
  - ビューアー Y 565
  - ビューアー・ズーム 565
  - 翻訳テーブル 565
  - ExternalEventID 565
  - SendExternalEvent 565
  - ViewerHeight 565
  - ViewerWidth 565
- グローバル・リソース
  - イメージ 556
  - カラー・シーケンス 556, 557
    - 作成 557
    - 使用 558
  - カラー・マップ 556, 559
    - 作成 559
    - 使用 560
  - グローバル・パラメーター 564, 565
    - 使用 567
    - 追加 566
  - ストック・イメージ 562
    - 作成 563
    - 使用 563
  - セキュリティ・リスト 556, 561

- グローバル・リソース (続き)
  - パラメーター 556
  - 翻訳テーブル 556, 571
    - 切り替え 573
  - 有効期限スケジュール 556, 567
    - 週次 570
    - 月次 570
    - 特定日 571
    - 日次 569
    - 毎時 569
- クロス集計照会 120
- 傾向の作成 299
- 傾向の予測
  - グローバル傾向 311
  - 線形傾向 311
  - ローカル傾向 311
- 「計算」フォーマット・オプション
  - 式 328
  - 幅 328
  - 編集 328
  - ID 328
  - NULL を渡す 328
- 計算式 336, 469
- 計算列 208, 210, 211, 451
- 計算列を追加 238
- 「罫線」図表フォーマット・オプション 254
- 「系列」図表フォーマット・オプション 250
- 「結果」タブ 111, 112, 113
- 「結果」メニュー・コマンド
  - 移動 238
  - グループ化および集約 238
  - 計算列を追加 238
  - 検索 238
  - 自動フィット 238
  - すべて検索 238
  - すべての LOB 値の検索 238
  - すべてリセット 238
  - 総合計の表示 238
  - ドリルアップ 238
  - ドリルダウン 238
  - フォーマット 238
  - フォーマットのリセット 238
  - フォント 238
  - 報告書の表示 238
  - 要約の表示 238
  - Excel シートの表示 238
  - EXPORT 238
  - Sort 238
- 「結果セット」ペイン 258, 260
- 結果ページ 109
- 結合照会 119
- 限界リソース限界 602
- 検索 238
  - 「検索」ビュー 7
- 合計 238
- 合計のパーセンテージ 238

- 合計の累積パーセンテージ 238
- 高速保存 242
- 構文図 149
- コネクタ 471
- コネクタ・オブジェクト
  - 折れ線コネクタ 499
  - 曲線コネクタ 499
  - 接続ポイント 499
  - 直線コネクタ 499
- コピー 36
  - アクセラレーター 136
  - 表 136
- コマンド行 595
  - パラメーター 596
- コマンド・バー 598
- コンテナ 471
- コンテナ・オブジェクト
  - キャンバス 502
  - 組み込みコンテンツ 502
  - 組み込みシーン 502
- コンテンツ・アシスト 80
- コントロール 471
- コントロール・オブジェクト
  - コンボ・ボックス 487
  - 垂直スライダー 487
  - 水平スライダー 487
  - スライサー 487
  - チェック・ボックス 487
  - ツリー 487
  - テキスト・ボックス 487
  - 日時 487
  - プロンプト階層 487
  - ボタン 487
  - ラジオ・グループ 487
  - リスト・ボックス 487
- コンパイル
  - ビジュアル報告書 452
  - ビジュアル・ダッシュボード 452
- コンポーネントの最新表示 435
- コンボ・ボックス 489, 491

## [サ行]

- サード・パーティー・ライブラリー設定 33
- サーバー・サイド・ファイル・システム 18
  - 設定 31, 32
- サービス情報 xiii
- 最近使用したフォルダー 43
- 最後 238
  - 「最終」フォーマット・オプション
    - 最終合計行の位置 334
    - 最終テキストで改ページ 334
    - テキスト 334
    - テキスト前のブランク行数 334
- 最終テキスト 336
- 最初 238

- 最小 238
- 最新表示 36
- 最大 238
- 最適化モデル 299
- サイド・グループ 238, 260, 261
- サイレント・インストール 622
- 削除 36
  - 「作図領域」図表フォーマット・オプション 257
- 作成 265
  - JavaScript 表 581
- サポート情報 xiii
- 参照の表示 460
- シーン 395
  - シーンの印刷 408, 418, 478
  - シーンの再ロード 429
  - シーン・パラメーター 564
  - シーン・ビュー 398
  - シェル・コマンドの実行 408, 478
- 式 467
  - エレメント 467
  - 演算子 467
  - 機能 467
  - 構文規則 468
  - 定数 467
  - フォーマット記号 467
  - 例 469
  - 列名 467
- 式デザイナー 206, 466
  - 「軸」図表フォーマット・オプション 252
- 時系列データ 299
- 指示照会エディター
  - 行条件 81, 88
  - 結合条件 81
  - 照会結果 85, 92
  - ソート条件 81, 87
  - 表 81
  - 表の結合 84
  - 表の追加 83
  - 列 81
  - 列の結合 85
- 実行 36
- 失敗したタスクに関する E メール通知 295
- 視点
  - ナビゲーション 402
  - 変更 403
- 自動フィット 238
- 集約 261
- 集約なし 238
- 集約を含む列 260
- 出力ビュー 7
- 循環性の作成 299
- 照会
  - エディター 78
  - タイプ 77
  - ビジュアル 77, 78, 79
  - ビジュアル報告書での指定 454

- 照会 (続き)
  - ビジュアル・ダッシュボードでの指定 454
  - 標準 77
  - プロファイル作成 128
  - 分析 77, 78
  - リレーショナル 77
  - OLAP
    - オープン 110
    - オフラインでの作成 111
    - オンラインでの作成 112
    - キューブ・データの検索 109
    - キューブ・データのフィルター処理 113
    - 変更 111
- 照会エディター 130
- 照会環境 595
- 照会キャッシュの無効化 435
- 照会結果 197
  - エクスポート 216
  - カテゴリ化 212
    - 規格適合規則の追加 213
    - 式の追加 213
  - グループ化および集約 214
  - 計算列 208
  - セルの内容 236
  - ソート 240
  - データベースへのエクスポート 218
  - ファイルへのエクスポート 220
  - ファイル・エクスポート・オプション 222
  - フィルター処理 206
    - 複合条件 206
    - フリー・スタイル条件 208
  - フォーマット 197
  - E メール 217
  - Excel にエクスポート 220
  - LOB データ 234
- 照会結果のフィルター処理 206
- 照会構造ツリー 109, 111
  - 「照会の印刷」操作 277
  - 「照会のエクスポート」操作 273
- 照会の実行 299
  - 「照会のドロー」ウィザード 78
- 照会のドロー・エディター 96
  - データ・ソース表のリスト 97
- 照会パラメーター 564
- 照会ビルダー
  - 列の追加 85, 92
- 照会ビルダー編集機能
  - グローバル行条件 94
  - 結合条件 91
  - SQL 編集機能 96
- 照会ビルダー・エディター
  - グローバル行条件 89
  - 表 89
  - 表の追加 90
  - フィールド 89, 91
  - SQL エディター 89
- 「照会をメールにエクスポート」操作 274
- 条件 336
  - 「条件」フォーマット・オプション
    - 式 330
    - ID 330
    - NULL を渡す 330
- 条件付きグループ化 124
- 乗法分解 307
- 乗法分解方式 299
- 書式 321
  - データ・ソース付きでの保存 341
  - データ・ソースを付けない保存 341
  - デザイン 322
- 書式構造ツリー
  - オプション 322
  - 切れ目 322
  - 計算 322
  - 最終 322
  - 条件 322
  - ページ 322
  - 明細 322
  - メイン 322
  - 列 322
- 書式変数
  - &an 336
  - &CALCid 336
  - &COUNT 336
  - &DATE 336
  - &Global Variables 336
  - &HTML Variables 336
  - &n 336
  - &PAGE 336
  - &ROW 336
  - &TIME 336
- 書式メニュー・コマンド
  - データ・ソースの設定 364
  - データ・ソース・オブジェクト 364
  - ビジュアル報告書に変換 364
  - フォントの設定 364
  - ユーザー情報の設定 364
  - HTML に変換 364
- ジョブ定義ファイル 297
- ジョブ・ファイル 297
- 新規 36
  - 「新規ビジュアル報告書の作成」ウィザード
    - 「事前定義」タブ 372
    - 「リポジトリ」タブ 372
    - 「ローカル」タブ 372
- 新規ビジュアル・ダッシュボードの作成ウィザード
  - タブ
    - 事前定義 390
    - リポジトリ 390
    - ローカル 390
  - 「進行状況」ビュー 7
- ズーム 236
- 随時報告書 506

随時報告書 (続き)

作成 385

数値 397

数値セット 397

図形要素 471

図形要素オブジェクト

折れ線 480

角が丸い長方形 480

線 480

線分群 480

双方向矢印 480

楕円 480

多角形 480

多角形群 480

長方形 480

配置パネル 480

ピクチャー 480

矢印 480

ラベル 480

スケジュール・タイプ

週次 381

常時 381

月次 381

常に有効 381

特定の日付 381

日次 381

スケジュール・タスク 271

アクション 272, 283, 287, 288, 290, 291

アクション・グループ 287, 288, 290, 291

オブジェクトの実行 272

スケジューリング 294

スケジュール・タスクのコピー 293

ユーザー情報の編集 292

リソースの操作 283

スタートアップから除去 44

スタートアップに追加 36

スタートアップの名前を変更 44

スタートアップ・フォルダー 43

スタートアップ・プロシージャ 53

ストック・イメージ 562

作成 563

使用 563

図表 247, 258

作成 247

照会結果グリッドからの作成 257

図表タイプの指定 248

図表フォーマットの指定 250

データ系列の指定 249

表示編集機能での作成 259

編集 262

「図表域」図表フォーマット・オプション 251

すべて検索 238

すべての LOB 値の検索 238

すべて保存 71

すべてリセット 238

正規化照会 121

整数 397

静的 SQL 1

静的 SQL パッケージ 53

製品の概要

コンポーネント 3

製品体系 3, 14

データ・アーキテクチャー 3

パースペクティブ、ビューとエディター 14

セキュリティー・リスト 556, 561

セッションの終了 430

接続 471

「接続」ツール 476

設定 19

一般 18, 19

外観 18, 21

グローバル変数 18

サード・パーティー・ライブラリー 18, 33

サーバー・サイド・ファイル・システム 31

ダッシュボード・ランタイム 18

ビジュアル・デザイナー 18, 34

ヘルプ 18, 24

ユーザー 18

ログ 18, 29

JDBC 26, 49

JDBC ライブラリー 18

LOB 18, 28

SMTP 30

設定のインポート 66

線形傾向 311

選択 471

戦略のオプション

構成戦略 303

集約戦略 303

配布戦略 303

予測列 303

ソートのタイプ

降順 240

昇順 240

総合計 197

総合計の表示 238

挿入 489

即時報告書 350, 360

グループ化列 343

脚注 354

見出し 354

グループ化列の表示 343

グループ化列のフォーマット 353

個別の列のフォーマット 357

作業 342

作成 342, 349

データ・ソースの変更 362

データ・ソースの編集 363

データ・フォーマット・オプション 359

変更 363

編集 362

報告書設定のフォーマット 344

即時報告書 (続き)  
明細列 343  
明細列の表示 343  
明細列のフォーマット 356  
列グループの作成 347  
列見出し 346  
「即時報告書のエクスポート」操作 279  
「即時報告書をメールにエクスポート」操作 278  
測定値 111, 112

## [タ行]

第 1 ソート条件 240  
第 2 ソート条件 240  
第 3 ソート条件 240  
ダイアログの表示 438  
ダイアログを閉じる 438  
ダイアログ・テンプレート 438  
    コンテンツ埋め込み 440  
    シーン背景 442  
    シャドウ 442  
    タイトル背景 443  
    タイトル・フォント 443  
    タイトル・フレーム 443  
    ナイン・パッチ 441  
    背景 439  
    枠 440  
「タイトル」図表フォーマット・オプション 256  
タイマー・オブジェクト 478  
タイムアウトリソース限界 601  
多項式回帰 308  
正しい形式 67  
タブ・グループ 13  
単一指数平滑法 299, 306  
単純移動平均 305  
単純プロンプト  
    作業 99  
    追加 99  
置換変数 141  
追加照会 118  
通常のフィルター 113  
通常保存 242  
突き合わせパターン 67  
データ  
    アクセス 45  
    接続 45  
データ記号 471  
データ記号オブジェクト  
    イベント帯域 497  
    価格区間バー 497  
    しきい値帯域 497  
    垂直値バー 497  
    垂直ラベル・バー 497  
    水平値バー 497  
    水平ラベル・バー 497  
    マーカー 497

データ記号オブジェクト (続き)  
    ローソク足 497  
データの保存リソース限界 605  
データベース表に IXF ファイルを直接インポート 228  
データベース表の編集 135  
データベース・フォルダー 35  
データへの接続 45  
データ・ソース 45, 340  
    オブジェクトのリスト 320  
    新規の選択 137  
データ・ソースから 318  
データ・ソース接続 394  
    「データ・ソース接続」ビュー 7  
データ・ソースの設定 364  
データ・ソース・オブジェクト 364  
データ・ソース・オプション  
    組み込み 301  
    リンク済み 301  
データ・タイプ 468  
データ・テンプレート 546  
    可視性 548  
テキスト 397  
テキスト・セット 397  
テキスト・フィールド 327  
適用  
    条件付き書式 350, 360  
    「デザイン」モード 461  
デフォルトのエディター 130  
テンプレート 368  
    ビジュアル・データ・オブジェクト 368  
テンプレート・カテゴリー  
    作成 369  
動的 SQL 1  
特殊レジスター 135  
特記事項  
    リーガル 701  
トップ・グループ 238, 260, 261  
ドライバー・クラス名 26, 49  
トラッキング信号 310  
「虎の巻」ビュー 7  
取扱コード  
    ACROSS 337  
    AVERAGE 337  
    Breakn 337  
    BREAKnX 337  
    CALCid 337  
    COUNT 337  
    CPCT 337  
    CSUM 337  
    FIRST 337  
    GROUP 337  
    LAST 337  
    MAXIMUM 337  
    MINIMUM 337  
    OMIT 337  
    PCT 337

取扱コード (続き)

STDEV 337

SUM 337

TCPCT 337

TPCT 337

ドリルアップ 238

ドリルダウン 238, 400

ドリルダウン・ウィザード 400

ドリルダウン・パス 265

表示モード 267

分析パス 267

ドリルダウン・パス表示モード 267

## [ナ行]

内部結合 84, 91

名前フィルター 38

名前フィルターの設定 36

名前変更 36

二重指数平滑法 299, 306

日時 397

日時セット 397

ニューラル・ネットワーク 299, 309

ネットワーク接続 56

ネットワーク・リポジトリ 52

## [ハ行]

パースペクティブ 11, 14

管理者 3, 7

構成 13

閉じる 12

ビジュアル・デザイナー 7, 372, 458

ユーザー 7, 11

リセット 14

QMF 7

QMF 標準パースペクティブ 14

パースペクティブのカスタマイズ 13

パースペクティブのリセット 14

パースペクティブを開く 13

パーセンテージ 397

「パーソナル」ビュー 7, 43

「パーソナル」ビュー・メニュー・コマンド

お気に入りから除去 44

お気に入りの名前を変更 44

スタートアップから除去 44

スタートアップの名前を変更 44

バインド・リソース限界 606

始めに 3

パス 25

パフォーマンスの作成 299

パラメーター 556

グローバル 564

シーン 564

query 564

パラメーター・タイプ

色 397

数値 397

数値セット 397

整数 397

テキスト 397

テキスト・セット 397

日時 397

日時セット 397

パーセンテージ 397

ブール値 397

ファイル・パス 397

フォント名 397

ポイント 397

ポイント・セット 397

ポリ・セット 397

リテラル 397

パラメーター・ヒント 80

貼り付け 36

「パレット」ビュー 7, 471

カスタム・オブジェクト 500

コネクタ・オブジェクト 499

挿入 499

コンテナ・オブジェクト 502

キャンバス 504

組み込みコンテンツ 503

組み込みシーン 502

コントロール・オブジェクト 487

スライサー 492

挿入 488

ツリー 494

日時 493

プロンプト階層 496

図形要素オブジェクト 480

形状 483

線 482

テキスト 481

配置パネル 486

ピクチャー 484

「接続」ツール 476

タイマー 478

データ記号オブジェクト 497

挿入 498

表示設定 474

「プロパティ」ビュー 458

レイアウト・オブジェクト 515

パレット・オブジェクト

挿入 472

デフォルト・プロパティ値 476

「範囲」図表フォーマット・オプション 255

「凡例」図表フォーマット・オプション 256

ビジュアル報告書 317, 367, 370

オフラインへの変換 383

旧 374

インポート 375

オープン 374

- ビジュアル報告書 (続き)
  - 固定ページ 379
  - 作成 372
  - 照会 377, 454
    - データ検索スケジュール 383
  - 照会を開く 578
  - データ検索 381
  - データ・ソース接続 453
  - データ・ソース接続の指定 376, 453
  - テンプレート 368, 373
  - テンプレート・カテゴリ 369
  - メインページ 378
  - 読み取り専用 452
- ビジュアル報告書に変換 364
- 「ビジュアル報告書のエクスポート」操作 282
- ビジュアル報告書の固定ページ
  - 固定 1 379
  - 固定 2 379
  - ページ脚注 379
  - ページ見出し 379
- ビジュアル報告書のメインページ
  - ページ脚注 378
  - ページ見出し 378
  - 報告書脚注 378
  - 報告書見出し 378
  - 明細 378
  - 明細脚注 378
  - 明細見出し 378
- 「ビジュアル報告書をメールにエクスポート」操作 280
- ビジュアル・アプリケーション 367
- ビジュアル・ダッシュボード 367, 386, 451, 506
  - アクション
    - 値の設定 411
    - 新しいロケーションヘジャンプ 410
    - 組み込みシーンヘナビゲート 413
    - 組み込みシーンへのイベントの送信 420
    - コンポーネントの最新表示 435
    - シーンの印刷 418
    - シーンの再ロード 429
    - シェル・コマンドの実行 421
    - 照会キャッシュの無効化 435
    - セッションの終了 430
    - ダイアログの表示 444
    - ダイアログを閉じる 446
    - ファイルの作成 432
    - フォーカスの設定 428
    - プロシージャーの実行 416
    - 前のページのロード 414
    - メッセージの表示 424
    - Cookie の保管 448
    - Cookie のロード 449
    - E メール送信 419
    - Excel にエクスポート 426
    - JavaScript の実行 417
    - LOB の起動 436
    - PDF にエクスポート 430
- ビジュアル・ダッシュボード (続き)
  - アクション (続き)
    - SQL ステートメントの実行 414
    - URL を開く 447
  - イベント・アクション 407
  - 組み込みシーン 404, 405
    - パラメーター化 406
  - 計画 389
  - 削除 395
  - 作成 390
  - シーン 395
    - パラメーター 397
  - シーン・ビューの作成 398
  - 視点ナビゲーション 402, 403
  - 照会 377, 454
  - 照会を開く 578
  - ストーリーボード 389
  - 追加 395
    - データ・ソース接続 394, 453
    - データ・ソース接続の指定 376, 453
    - テンプレート 368, 392
    - テンプレート・カテゴリ 369
    - ドリルダウン 400
    - ナビゲーション機能 400
  - 名前変更 395
  - バージョン管理システムでの 作業 450
    - フォルダーとして保存 451
  - モーダル・ダイアログ 438, 439, 440, 441, 442, 443
  - 読み取り専用 452
- ビジュアル・ダッシュボードのデバッグ 577
- ビジュアル・ダッシュボードのプロファイルを作成
  - アナライザー・ビュー 575
  - プロファイラー・ビュー 575
- ビジュアル・ダッシュボード・テンプレート 392
- ビジュアル・デザイナー 458
  - エディター・ウィンドウ 461
  - エディター・コントロール 462
  - ガイド 462
  - グリッド 462
  - グリッドに合わせる 462
  - 設定 34
  - ルーラー 462
- ビジュアル・デザイナー・パースペクティブ 7, 372
- ビジュアル・プロジェクト 460
- 左外部結合 84, 91
- 日付パラメーター
  - 開始日 302
  - 期間 302
  - 今後の期間の数 302
  - 日付列 302
- ビュー 11
  - アナライザー 575
  - 位置決め 13
  - イベント 7, 470
  - オープン 12
  - 結果 245, 315

- ビュー (続き)
  - 検索 7
  - 式 577
  - 出力 7
  - 進行中 7
  - チート・シート 7
  - データ・ソース接続 7
  - パーソナル 7, 43
  - パレット 7, 458, 471
  - プロジェクト・エクスプローラー 7, 370, 458, 459, 460
  - プロパティ 7, 197, 458, 463
  - プロファイラー 576
  - ヘルプ 7
  - リポジトリ接続 7
  - レイアウト 112
  - レイヤー 7, 555
  - ワークスペース 7, 35
  - 枠取り 7
  - QMF 計算機 7
  - REXX コンソール 143
- ビューおよびパースペクティブ 11
- ビューの表示 13
- 表エディター 130
  - 行条件 134
  - 指示照会タブ 133, 134
  - ソート条件 133
- 表示エディター 258
- 表示エディターのペイン
  - 結果セット 258
  - 表示モード 258
  - レイアウト構造 258
- 表示設定
  - アイコンのみ 474
  - 明細 474
  - リスト 474
  - 列 474
- 表示モード 258, 259
  - 図表フォーマットの編集
    - 値 (Y) 系列 251
    - カテゴリ 250
    - クライアント域 257
    - 罫線 254
    - 系列 250
    - 作図領域 257
    - 軸 252
    - 図表域 251
    - タイトル 256
    - 範囲 255
    - 凡例 256
    - ラベル 254
    - X 軸 252
    - Y 軸 253
  - 「表示モード」ペイン 258, 259
- 標準の報告書 317
- 標準偏差 238
- 表のコピー 136
- 表のマッピング 234
- 表ビューアー 130
- 開いているオブジェクトから 318
- 開く 36
- ブール値 397
- ファイルから 318
- ファイルの作成 432
- ファイルの場所 36
- ファイル・オブジェクト 75
- ファイル・パス 397
- ファイル・フォーマット
  - テキスト 320, 384
  - HTML 320, 384
  - PDF 320, 384
- ファイル・ベース・リポジトリ 52, 56
- 「フィルター」タブ 113
- フィルター・ページ 109
- フォーカスの設定 428
- フォーマット 238
- フォーマットのリセット 238
- フォーマット・オプション
  - オプション
    - 行折り返し幅 332
    - 切れ目合計の区切り記号 332
    - 切れ目列の枠取り 332
    - グループ化したときに列見出しの関数名使用 332
    - 最高位の切れ目レベルごとに新しいページ番号 332
    - 最終合計の区切り記号 332
    - デフォルト切れ目テキスト (\*) 332
    - 報告書の固定列数 332
    - 報告書のテキスト行幅 332
    - 報告書列の自動並べ替え 332
    - 明細の行間隔 332
    - 横方向合計列 332
    - 横方向見出しの区切り記号 332
    - 列折り返し行を同一ページに表示 332
    - 列見出しの区切り記号 332
    - LOB の内容をインラインに置く 332
- 切れ目
  - 脚注後のブランク行数 325
  - 脚注で改ページ 325
  - 脚注前のブランク行数 325
  - 切れ目脚注テキスト 325
  - 切れ目合計行の位置 325
  - 切れ目ごとに改ページ 325
  - 切れ目見出しテキスト 325
  - 見出し後のブランク行数 325
  - 見出し前のブランク行数 325
  - 明細見出しの反復 325
- 計算
  - 式 328
  - 幅 328
  - 編集 328
  - ID 328
  - NULL を渡す 328



フォーマット・オプション (続き)

最終

- 最終合計行の位置 334
- 最終テキストで改ページ 334
- テキスト 334
- テキスト前のブランク行数 334

条件

- 式 330
- ID 330
- NULL を渡す 330

詳細

- 使用可能 331
- 表データの表示行 331
- ブロック後のブランク行数 331
- ブロックをページに保持 331
- 明細ブロックで改ページ 331
- 明細ブロック・テキスト 331
- 明細見出しテキスト 331
- 明細見出しに列見出しを組み込む 331
- 明細見出しの反復 331

ページ

- 脚注後のブランク行数 335
- 脚注前のブランク行数 335
- ページ脚注テキスト 335
- ページ見出しテキスト 335
- 見出し後のブランク行数 335
- 見出し前のブランク行数 335

メイン

- 順序 323
- 使用法 323
- 幅 323
- 編集 323
- 報告書列の合計幅 323
- 見出し 323
- 列間隔 323

列

- 順序 329
- 使用法 329
- 幅 329
- 番号 329
- 編集 329
- 見出し 329
- 列間隔 329

フォント 238

フォントの設定 364

フォント名 397

複合条件フィルター 206

複数の結果セット 237

フリー・スタイル条件フィルター 208

ブレイクポイント 559

プレビュー・モード 461

プロシージャー 143

作成 143

フローチャート 145

フローチャートの編集 146

JavaScript 144

プロシージャー (続き)

JavaScript 条件の追加 147

プロシージャーの実行 408, 416

プロシージャー・コマンド 147

インターフェースの違い 147

構文 148

構文図 149

リポジトリと QMF カタログ 150

BOTTOM 152

CHECK 152

CONNECT 152

CONVERT 153

DISPLAY 154

DRAW 156

EDIT 156

END 157

ERASE 158

EXECUTE 158

EXIT 159

EXPORT 159

FORWARD 164

HELP 164

IMPORT 164

LIMIT LOCAL 166

LIST 167

MAIL TO 169

PRINT 172

RESET GLOBAL 175, 176

RUN 177

RUNTSO 180

SAVE 183

SET GLOBAL 185

SET INVISIBLE 186

SET LOCAL 186

SET LOCAL WITH VALUES 187

SET OPTIONS 187

SHOW 189

USE REPOSITORY 189

プロジェクト・エクスプローラー 459, 460

「プロジェクト・エクスプローラー」ビュー 7, 370

プロジェクト・エクスプローラー・フォルダー

グローバル 370, 386

シーン 386

照会 370, 386

接続 370, 386

メインページ 370

プロパティ 36, 464

グループ 465

式 467

エレメント 467

構文規則 468

例 469

式デザイナー 466

データ・タイプ 468

リテラル値 469

「プロパティ」ビュー 7, 197, 463

- プロンプト
  - 共有プロンプト 107
  - 単純プロンプト 98
  - SQL プロンプト 98
- プロンプト値
  - 保存 101, 106, 108
- プロンプト階層 98
  - 作業 102
  - 作成 102
  - 照会に組み込む 105
  - 照会に追加 103
- 分析 159
- 分析オブジェクト 591
  - オープン 591
  - ソースを使用して開く 591
  - ソースを使用せずに開く 592
  - プロシージャ・コマンド
    - DISPLAY 593
    - EXPORT 593
    - PRINT 593
- 分析照会 114, 115, 116, 117
  - クロス集計 120
  - 結合 119
  - 条件付きグループ化 124
  - 正規化 121
  - 追加照会 118
- 分析パス 265
  - 「ページ」フォーマット・オプション
    - 脚注後のブランク行数 335
    - 脚注前のブランク行数 335
    - ページ脚注テキスト 335
    - ページ見出しテキスト 335
    - 見出し後のブランク行数 335
    - 見出し前のブランク行数 335
- ページ脚注 336
- ページ設定 241, 242
  - 図表の印刷 263
  - ドリルダウン・パスの印刷 269
  - 予測の印刷 314
- ページ見出し 336
- 平均 238
- 平均絶対誤差率 310
- 平均絶対偏差 310
- 平均二乗誤差 310
- 「ヘルプ」ビュー 7
- ヘルプ設定 24
- ヘルプ・コンテンツ 25
- 変換
  - CSV 232
  - DBF 232
  - IXF 232
  - TXT 232
  - XML 232
- 編集
  - JavaScript 表 586
  - 「変数」バー 465
- ボーダー 404
- ポート 25
- ポイント 397
- ポイント・セット 397
- 報告書 317
  - ビジュアル 367
  - 標準
    - 書式 321
    - データ・ソース 318
    - デザイン書式 322
    - 保存 340
- 報告書の表示 238
  - 「報告書の表示」ウィザード 317
- ホスト 25
- 保存 71
- 保存方式
  - 高速 242
  - 通常 242
- ポリ・セット 397
- 翻訳テーブル 556, 571
  - 切り替え 573

## [マ行]

- 前のページのロード 408, 414, 478
- マップ 451
- 右外部結合 84, 91
- 見出し 197
- 明細 197
- 明細フォーマット・オプション
  - 使用可能 331
  - 表データの表示行 331
  - ブロック後のブランク行数 331
  - ブロックをページに保持 331
  - 明細ブロックで改ページ 331
  - 明細ブロック・テキスト 331
  - 明細見出しテキスト 331
  - 明細見出しに列見出しを組み込む 331
  - 明細見出しの反復 331
- 明細ブロック 336
- 明細見出し 336
  - 「メイン」フォーマット・オプション
    - 順序 323
    - 使用法 323
    - 幅 323
    - 編集 323
    - 報告書列の合計幅 323
    - 見出し 323
    - 列間隔 323
- メッセージの表示 408, 424, 478
- メニュー・コマンド
  - 「パーソナル」ビュー 44
  - ワークスペース 36

## [ヤ行]

- 「ユーザー」 パースベクティブ 3, 7, 11
- ユーザー情報 47
- ユーザー情報の設定 36, 364
- ユーザー定義関数 210, 451
- ユーザー・インターフェース 48
- ユーザー・メニュー
  - 結果 238
  - 書式 364
- 有効期限スケジュール 556, 567
  - 週次 570
  - 月次 570
  - 特定日 571
  - 日次 569
  - 毎時 569
- 要約の表示 238
- よく使用する項目 471
- 予測 299
  - 概説 300
  - 季節性 311
  - グリッド・プロパティ 313
  - グループ化階層オプション 303
  - 傾向 311
  - 循環性 312
  - 図表プロパティ 313
  - 戦略のオプション 303
  - データ・ソース・オプション 301
  - パフォーマンス 310
  - 日付パラメーター 302
  - 予測モデルのオプション 304, 305, 306, 307, 308, 309
- 予測アウトライン・ツリーの表示 299
- 予測の季節性
  - 移動平均 311
  - グローバル平均 311
- 予測のグリッドのプロパティ 313
- 予測の循環性 312
- 予測の図表のプロパティ 313
- 予測のパフォーマンス
  - トラッキング信号 310
  - 平均絶対誤差率 310
  - 平均絶対偏差 310
  - 平均二乗誤差 310
  - 累積予測誤差 310
- 予測モデルのオプション
  - カーブ・フィッティング 304, 308
  - 加重移動平均 304, 305
  - 乗法分解 304, 307
  - 多項式回帰 304, 308
  - 単一指数平滑法 304, 306
  - 単純移動平均 304, 305
  - 二重指数平滑法 304, 306
  - ニューラル・ネットワーク 304, 309
  - Holt-Winters 法 304, 307

## [ラ行]

- 「ラベル」 図表フォーマット・オプション 254
- 「ランタイム」 モード 461
- リスト・ボックス 489, 491
- リソース限界 600
  - オブジェクト・トラッキング 607
  - オブジェクト・リスト (object list) 612
  - オプション 603
  - 加速 613
  - キャッシュ 612
  - 限界 602
  - タイムアウト 601
  - データの保存 605
  - バインド 606
  - 表示 599
  - レポート・センター 610
  - LOB 236
  - LOB オプション 609
  - SQL 動詞 602
- リソース限界について 600
- リソースの操作
  - コピー 284
  - メールの送信 285
- リテラル 397, 469
- リポジトリ 45
  - 新規オブジェクトの作成 68
  - 接続 47, 51
    - IMPORT 51
  - 接続の管理 59
  - 接続の削除 59
  - 接続の作成 52
    - 共有 53
    - ネットワーク 56
    - ファイル・ベース 56
    - Web サービス 58
  - 接続の編集 59
  - パーソナル 46
  - パーソナル・リポジトリ 46
  - Web リンクの作成
    - データ・オブジェクト 70
- リポジトリから 318
- リポジトリ接続 47, 51
- 「リポジトリ接続」ビュー 7
- リポジトリ接続の設定値 3
- リポジトリに表示 36
- リポジトリ・オブジェクト 75
  - 照会 68
  - 照会のドロー・ウィザードを使用して照会 68
  - 書式 68
  - パーソナル・リポジトリ 68
  - ビジュアル報告書 68
  - ビジュアル報告書テンプレート・カテゴリ 68
  - ビジュアル・ダッシュボード 68
  - ビジュアル・ダッシュボード・テンプレート・カテゴリ 68

## リポジトリリー・オブジェクト (続き)

- フォルダー 68
- プロシージャー 68
- リポジトリリー接続 68
- リンク 68
- ワークスペース 68
- OLAP 照会 68

## リポジトリリー・オブジェクトのキャッシング 62

- リモート・サーバー 25
- リモート・スケジュール・タスク 295
- リレーショナル照会 77
- リンク 491

IBM 以外の Web サイト 703

リンクの貼り付け 36

累計 238

累積予測誤差 310

レイアウト 471

「レイアウト構造」ペイン 258, 261

レイアウト構造ツリー 214

レイアウト・ウィザード 474

レイアウト・オブジェクト

イベント帯域グラフ 515, 530

円グラフ 515, 523

拡張 524

OLAP 525

拡張 541

株価グラフ 515, 527

簡易書式 515, 531

機能拡張 541

行列 515, 532

クラスター・グラフ 515, 530

グリッド 515, 520

散布図グラフ 515, 527

照会 540

照会パラメーター 541

水平線 515

線形マップ 515, 531

組織図 515, 533

ソリッド・グラフ 515, 539

ソリッド・グラフの編集 540

ダイヤル 538

多変量グラフ 515, 526

ツリー・グラフ 515, 534

データ記号 543

グラフィック・オブジェクト 544

データ・テンプレート 545

新規 546

デフォルト・コネクター 543

ネスト 548

柱グラフ 515, 520

拡張 522

OLAP 523

表 515, 516

合計行 519

合計行の書式 519

単純 517

## レイアウト・オブジェクト (続き)

表 (続き)

データが追加された 517

複数の照会結果 544

棒グラフ 515, 520

拡張 522

OLAP 523

予定表グラフ 515, 529

ら旋 515, 533

ローソク足グラフ 515, 528

OLAP データ 542

XY グラフ 515, 527

レイアウト・タブ 111

レイアウト・ビュー 112

レイアウト・プロパティ

一般 197

条件付き 197

フォーマット 197

フォント 197

「レイアウト・プロパティ」ダイアログ 197

条件付き書式オプション 205

フォーマット・オプション 202

フォーマット・フィールド 203

「フォント」フォーマット・オプション 200

フォント・フィールド 201

列の一般形式設定 200

レイアウト・ページ 109

「レイヤー」ビュー 7, 555

「列」フォーマット・オプション

順序 329

使用法 329

幅 329

番号 329

編集 329

見出し 329

列間隔 329

列式 336

レポート・センター・リソース限界 610

ローカル傾向 311

ローカル・パラメーター 465

ログ設定 29

## [ワ行]

ワークスペース

オブジェクトの移動 41

オブジェクトへのリンク

リポジトリリー 39

ワークスペース 39

コンテンツの追加 42

作成 43

新規ワークスペースの追加 43

データ・ソース・オブジェクトのフィルター処理 38

内容の最新表示 41

内容のディスカバー 35

フォルダー 38

ワークスペース (続き)  
プロパティ 40  
QMF Vision への公開 129  
「ワークスペース」ビュー 7, 35  
「ワークスペース」ビュー・メニュー・コマンド  
エクスプローラー 36  
お気に入りに追加 36  
コピー 36  
最新表示 36  
削除 36  
実行 36  
新規 36  
スタートアップに追加 36  
名前フィルターの設定 36  
名前変更 36  
貼り付け 36  
開く 36  
ファイルの場所 36  
プロパティ 36  
ユーザー情報の設定 36  
リポジトリに表示 36  
リンクの貼り付け 36  
ワークスペース・プロパティ  
セキュリティ 40  
接続パラメーター 40  
プラグイン 40  
リソース限界 40  
ログイン・マッピング 40  
LDAP 40

## [数字]

16 進数 236  
2 進数 236

## A

ACROSS 337  
ACTION 164, 183  
ANCHORn 327  
ATTACHMENT 169  
AVERAGE 337

## B

BODY 169  
BOLD 172  
BOTTOM 152  
BOTTOMMARGIN 172  
Breakn 337  
BREAKnX 337

## C

CALCid 337  
CCLIST 169  
CCSID 159, 236  
CHARSET 172  
CHECK 152  
CommandLine 158  
COMMENT 164, 183  
CONFIRM 158, 159, 164, 177, 183  
CONNECT  
PASSWORD 152  
ServerName 152  
UserName 152  
CONVERT  
QueryName 153  
Cookie の保管 448  
Cookie のロード 449  
COPIES 172  
COUNT 337  
CPCT 337  
CSUM 337  
CSV のインポート 224  
区切り記号オプション 225  
結果セット構造 226

## D

DATAFORMAT 159  
DATETIME 172  
DB2 for z/OS 1  
DB2 パスワード 61  
DISPLAY  
ObjectName 154  
&&Variable 154  
DRAW  
TableName 156  
TYPE 156  
dynamart でのデータ・ファイルの管理 233  
dynamart としてのデータ・オブジェクトの保存 232  
dynamart フィルター・ウィザード 206

## E

E メール  
照会結果 217  
Eメールの送信 419  
Eclipse 1  
EDIT  
ObjectName 156  
&&Variable 156  
END 157  
ERASE  
CONFIRM 158  
FOLDER 158  
ObjectName 158

EventInterval 478  
Excel シートの表示 238  
Excel にエクスポート 408, 426  
EXECUTE  
    CommandLine 158  
EXIT 159  
EXPORT 238  
    CCSID 159  
    CONFIRM 159  
    DATAFORMAT 159  
    FileName 159  
    LANGUAGE 159  
    LENGTH 159  
    LOBFILE 159  
    LOBSINFILE 159  
    LOBSTO 159  
    MODE 159  
    ObjectName 159  
    ORDER 159  
    OUTPUTMODE 159  
    SEPARATOR 159  
    SPLIT 159  
    UNICODE 159  
    UNITS 159  
    WIDTH 159  
ExternalEvent イベント 412  
ExternalEventID 420

## F

FileName 159, 164  
FIRST 337  
FORM 172, 177  
FORWARD 164  
From 169  
functions.js 210

## G

Google マップ 549  
    Google マップの折れ線オブジェクト 552  
    Google マップの多角形オブジェクト 553  
    Google マップ・オブジェクト 549, 554  
    Google マップ・マーカー・オブジェクト 550, 551  
GROUP 337

## H

Holt-Winters 法 299, 307  
HP-UX 1  
HTML 461  
HTML テーブル 276  
HTML に変換 364  
HTML 変数 327

ICatalogPassword:catalogpassword 596  
ICatalogUserID:cataloguserID 596  
IDENTIFIER 156  
IMAGEn 327  
IMPORT  
    旧 Visionary ワールド 393  
    旧ビジュアル報告書 375  
    表 231  
    表データ 231  
    ACTION 164  
    COMMENT 164  
    CONFIRM 164  
    CSV 224  
        区切り記号オプション 225  
        結果セット構造 226  
    FileName 164  
    LANGUAGE 164  
    LOBSFROM 164  
    ObjectName 164  
    SHARE 164  
    TXT 224  
        区切り記号オプション 225  
        結果セット構造 226  
    XLS 229  
    XLSX 229

Informix 1

ITALIC 172

IXF ファイルに含まれているデータをインポート 227

IXF ファイルの内容を開く 227

## J

JARS 26, 49

JavaScript 582

    機能 456

    モジュール 456

JavaScript 関数 210, 211

    proc.exec() 191

    proc.exists() 191

    proc.getCellValue() 192

    proc.getColumnName() 192

    proc.getColumnType() 193

    proc.getNumColumns() 193

    proc.getNumRows() 193

    proc.getVariable() 192

    proc.include() 194

    proc.messageBox() 194

    proc.prompt() 196

    proc.setCellValue() 196

JavaScript の実行 408, 417

「JavaScript の実行」イベントの追加  
    方法 417

JavaScript 表 581, 582, 583

JavaScript プロシージャ  
機能 190  
JavaScript モジュール 211, 457, 556  
JDBC 1  
JDBC 設定 26, 49  
JDBC ドライバー 3, 48  
JDBC ライブラリー 26, 49  
JDBC ライブラリー設定ファイル 49  
JDF 297

## L

LANGUAGE 159, 164, 183  
LAST 337  
LEFTMARGIN 172  
LENGTH 159, 172  
LIMIT LOCAL  
Value 166  
VariableName 166  
LINKn 327  
Linux 1  
LOB オプション・リソース限界 609  
オーバーライド 236  
LOB 設定 28  
LOB データ 234  
LOB の起動 436  
LOBFILE 159  
LOBSFROM 164  
LOBSINFILE 159  
LOBSTO 159

## M

MAIL TO  
ATTACHMENT 169  
BODY 169  
CCLIST 169  
From 169  
METHOD 169  
ObjectName 169  
SMTP SERVER 169  
SUBJECT 169  
TYPE 169  
MAILTO<sub>n</sub> 327  
MAXIMUM 337  
MDX ページ 109  
METHOD 169, 183  
Microsoft Windows 1  
MINIMUM 337  
MODE 159, 183

## O

ObjectName 154, 156, 158, 159, 164, 169, 172, 177, 183, 596

OLAP 照会  
オープン 110  
オフラインでの作成 111  
オンラインでの作成 112  
キューブ・データの検索 109  
キューブ・データのフィルター処理 113  
変更 111  
OLAP フォルダー 35  
OMIT 337  
Oracle 1  
ORDER 159  
ORIENTATION 172  
OUTPUTMODE 159

## P

PAGENO 172  
PASSWORD 152  
PCT 337  
PDF 461  
PDF にエクスポート 430  
PRINT  
BOLD 172  
BOTTOMMARGIN 172  
CHARSET 172  
COPIES 172  
DATETIME 172  
FORM 172  
ITALIC 172  
LEFTMARGIN 172  
LENGTH 172  
ObjectName 172  
ORIENTATION 172  
PAGENO 172  
PRINTER 172  
RIGHTMARGIN 172  
SIZE 172  
TOPMARGIN 172  
TYPEFACE 172  
USEFORMPS 172  
WIDTH 172  
PRINTER 172

## Q

QMF for Windows からの設定のインポート 66  
QMF for Windows 構成の設定 66  
QMF カタログ・オブジェクト 74  
QMF カタログ・フォルダー 35  
「QMF 計算器」ビュー 7  
QMF パースペクティブ 7  
QMF 標準パースペクティブ 14  
query 491  
QueryName 153

## R

REFn 327  
RESET GLOBAL  
    VariableName 175, 176  
RESULTSET 189  
    「REXX コンソール」ビュー 143  
RIGHTMARGIN 172  
ROWIDADD 183  
ROWIDDISP 183  
ROWIDNAME 183  
ROWLIMIT 177  
RUN  
    CONFIRM 177  
    FORM 177  
    ObjectName 177  
    ROWLIMIT 177  
    &&Variable 177

## S

SAVE  
    ACTION 183  
    COMMENT 183  
    CONFIRM 183  
    FOLDER 183  
    LANGUAGE 183  
    METHOD 183  
    MODE 183  
    ObjectName 183  
    ROWIDADD 183  
    ROWIDDISP 183  
    ROWIDDISPnnn 183  
    ROWIDNAME 183  
    SCOPE 183  
    SHARE 183  
    SPACE 183  
SceneCenter 404  
SCOPE 183  
SEPARATOR 159  
ServerName 152  
SET GLOBAL  
    Value 185  
    VariableName 185  
SET INVISIBLE  
    Value 186  
    VariableName 186  
SET LOCAL  
    Value 186  
    VariableName 186  
SET LOCAL WITH VALUES  
    Value 187  
    VariableName 187  
SET OPTIONS  
    STOPONERROR 187  
    SUPPRESSMESSAGES 187

SHARE 164, 183  
SHOW  
    RESULTSET 189  
    VIEW 189  
SIZE 172  
SMTP 設定 30  
SMTPPASSWORD 169  
SMTPSERVER 169  
SMTPUSER 169  
Solaris 1  
Sort 238  
SPACE 164, 177, 183  
SPACE DATABASE 164, 177, 183  
SPLIT 159  
SQL  
    フォント 139  
SQL Server 1  
SQL 照会エディター  
    コンテンツ・アシスト 80  
    パラメーター・ヒント 80  
SQL ステートメントの実行 408, 414, 478  
SQL 動詞リソース限界 602  
SQL プロンプト 98  
SQL ページ 109  
STDEV 337  
SUBJECT 169  
SUM 337

## T

TCPCT 337  
TOPMARGIN 172  
TPCT 337  
TXT のインポート 224  
    区切り記号オプション 225  
    結果セット構造 226  
TYPE 169  
TYPEFACE 172

## U

UNICODE 159  
UNITS 159  
URL テンプレート 26, 49  
URL を開く 447  
USE REPOSITORY  
    RepositoryName 189  
USEFORMPS 172  
UserName 152

## V

Value 166, 185, 186, 187  
VariableName 166, 175, 176, 185, 186, 187  
VIEW 189



## W

Web サービス・リポジトリ 52, 58  
WIDTH 159, 172

## X

X 位置 402  
「X 軸」図表フォーマット・オプション 252  
XLS のインポート 229  
XLSX のインポート 229  
XMLA 接続 1

## Y

Y 位置 402  
「Y 軸」図表フォーマット・オプション 253

## Z

ZoomPct 404

## [特殊文字]

&an 336  
&CALCid 336  
&COUNT 336  
&DATE 336  
&Global Variables 336  
&HTML Variables 336  
&n 336  
&PAGE 336  
&ROW 336  
&TIME 336  
&&Variable 154, 156, 177  
/Batch 596  
/IDisplay 596  
/IObject:"ObjectOwner"."ObjectName" 596  
/IPassword:password 596  
/IServer:servername 596  
/IUserID:userID 596  
/RConnection:connectionname 596  
/RDBUser:rduserID 596  
/RObject:pathtoobject 596  
/RPassword:rpassword 596  
/Run 596  
/RUser:ruserID 596  
"&variablename=variablevalue" 596







プログラム番号: 5615-DB2  
5697-QM2

Printed in Japan

SC43-3483-00



日本アイ・ビー・エム株式会社  
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21